国立国語研究所学術情報リポジトリ

The linguistic survey at the island of Hatizyô

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001346

八丈島の言語調査

国立国語研究所

1950

八丈島の言語調査

国立国語研究所
1950

はしがき

わが国においては、地域による言語の差異がすくなくない。かつて、この言語の差異によって生ずる意志の不通を、筆談によったり、謡曲を利用したりして補ったとも傳えられている。現代においては、教育の普及と教養の向上とによって、違った土地の出身者が会してる、よほどのへんぴなところや、特殊な老人ででもなければ、言語の不通のために意志の疎通に支障をきたすということはなさそうである。しかし、それではつねに明快に理解し合えるかというと、実情はそこまでは行っていない。全国に行われている共通的な言語にしても、こまかく見れば、地域によって多少の違いがある。これは、主として、その地に従来行われていた方言を地盤としているからである。時にその地の方言語い（語彙）がまじったり、あるいはその発音になまりがあったり、文法上その地独特の言い方がまじったりすることがある。そのために、話し手が方言を避けて共通語で話をしようという意識はあったにしても、現実に現われる言語は、相手に十分理解されないという現象も起って来る。

一国内では、意志の疎通に差しつかえない統一的な共通語が、ひろく普及することが望ましいことであり、その共通語も、一層改善された、いわば標準語にまで高められたものでなければならないであろう。この標準語の確立と普及のためには、標準語の基盤である東京語の研究がなされなければならないし、またひろく、各地の言語についても調査がなされなければならない。また現在、各地でどのような共通語が、どの程度に行われているかの実態をとらえる必要がある。

この見地から、わたくしたちは、ある特定の地点において、そこに行われている言語（ことに話し言葉）を、ありのままの姿でとらえてみようと試みた。そこでは方言と共通語がどのようにからみあって行われているか、共通語がどのようにひろく行われているかを確かめようと考えた。そうして特定地点として、八丈島を選んだ。

モデル的調査の地点として、八丈島は特殊すぎるであろう。もっと別の適当な地点はほかにいくらもある。しかもあえて八丈島を選んだことについては、その理由を本文の中で詳しく述べてあるが、現地に臨んで組織的に行う調査は、本研究所としてはこれが最初のものであるということから、調査方法の検討、調査者の訓練に役立つものでなければならないし、そのためには條件の單純な土地が望ましい、こういう考えで八丈島を選んだのである。

八丈島は東京から約 290キロの海上に漂う離れ島である。東京の月島から船に乗って約15時間、しかも途中に黒潮川と呼ばれる潮流が流れていて、乗り手は船のはげしい動搖に苦しまなければならない。八丈に通う船は、今でも5日おきにしか出ない。その船も海上の荒れた時には遅れる、欠航するという狀態である。

八丈島には昔からいろいろの傳說があり、ことに流人の島として名高い。今でさえ、八丈に渡ることはそう氣輕には考えられないのであるから、舟航の技術の発達していなかった昔は、八丈に渡ることは容易なことでなかつたに違いない。このように内地と自由に行き來が行われなかった結果として、八丈島には、独特の習俗があり、独特の言語が行われていた。そうして、その事実に留意して記錄を残した人もすくなくない。内地とはかなり違ったものであるだ

けに、よそから行った者の注意をひき、記録が残されたのである。今でもわたくしたちは、そういう記録によって八丈の昔をしのぶことができる。しかし、また行き来の不便さのために、十分な調査の行きとどかなかったことも事実である。東條操氏の「國語の方言区劃」(1937年刊)においても、八丈の言語がどこの方言に属するかを確言するには至らなかった。

この島の言語を明らかにしようとして八丈に渡った学者がないわけではない。古くは F. V. Dickens, E. Satow, 保科孝一氏, 近くは昭和の初期に東條操氏に教えを受けた学徒が, 大学卒業論文の題目に八丈の言語を取りあげて渡航している。その結果多くの事が知られるようになったのであるが、それでも、十分解明しつくされたとは言えない。数多くの問題が残されていたのである。しかも、その後。時間の経過につれて、八丈の言語も次第に変って来ているに違いない。そこで、学界においても注目されている八丈の言語を調べようとして、1949年の6月に、国立国語研究所の所員たちは、黒瀬川を越えて八丈に渡り、十余日を島で送ったのであった。その時調べたことの報告が本書である。

この報告書は三つの部分にわかれている。本論はこの調査におけるおもな結果であり、附録1はこの調査における副次的な結果をモノグラフ式にまとめたものであり、さらに附録2はこの調査において得た資料である。この報告書にまとめたもののほかにもいくつかの副次的な成果があり、特に、わたくしたちが現地において集めた語いが辞引の形になってまとまっているのであるが、いろいろな事情のために今回は発表をさしひかえることになった。

この八丈島の言語の調査は、研究所の第1研究室が企画し、実施したものである。従って、室員の中村通夫(主任)、柴田武、飯豊毅一、北村甫、石川暎子、島崎稔、山之内るりの7名が終始この仕事に当った。そのほか、統計数理研究所員丸山文行氏、長野縣派遣内地研究生青木千代吉氏が参加協力された。なお、当研究所評議員柳田國男、東條操の両氏の指導を仰いだことも附け加えておかなければならない。

実際に八丈島に出かけたのは1949年の6月28日であるが、中村通夫は都合によって同行できなかった。その代り、民俗学研究所の所員であり、八丈島に赴いた経験を持つ大間知篤三氏が参加され、現地調査の班長として、調査の運営に苦心され、その上に、民俗学上の見地からの調査をもおこなって下さった。

八丈島の現地調査が予定通り無事に終了したのは、調査班の人人の献身的な努力によるものであるが、また、八丈島島民の理解ある協力のたまものである。ことに支廳、各村役場、各学校の方方をはじめとして関係者の心からの支援によるものであって、まことに感謝に堪えない。中之郷小学校長菊池正文氏には、その後、研究所から昭和24年度地方調査員を委嘱し、調査班が現地で調査した結果の整理中に起って來た種種の疑問に関して調査を煩わした。

八丈島から帰ってから直ちに整理にとりかかり、途中他の研究計画を遂行するために中断せざるを得なかったこともあるが、ようやく本年の2月に至ってまとめることができた。整理に際しては、柴田武が中心となり、他の室員がそれぞれの事項を分担してまとめた。統計的分析に関しては丸山文行氏の力に負うところが多い。なお、

統計の実務にはもっぱら高田正治があたった。整理したものを印刷原稿として編集するに当っては、柴田武が主としてあたったが、中村通夫もこれに協力した。

調査の企画、実施、整理、執筆を通じて、第1研究室員の努力は通りではなかった。真剣にこの問題ととりくみ、誠実に事に当ったことはもちろんであるが、整理中、不備な点が発見され、しばしば再調査の必要が室員の口から唱えられた。これは、わたくしたちの経験のすくなかったことにもよるであろうし、期間の短かかったことにもよるようである。わたくしたちは、再調査の機会の與えられることを心から望んで、一應まとめ得た結果を公表して世の批判を仰ぎたいと思う。

1950年3月

国立国語研究所
研究第一部長　岩淵悦太郎

目　　次

はしがき……（i）

本論　八丈島の言語の社会的調査……（1）

I. 目　的……（2）

（1）調査の必要性……（2）

（2）目　的……（2）

II. 計　画……（3）

（1）八丈島を選んだ理由……（3）

（2）課　題……（3）

（3）方　法……（3）

III. 実　施……（5）

（1）準備と準備的調査……（5）

（2）現地における調査……（9）

1. 調査の実施……（9）

調査班の組織（9），実施の方法（10），時期（10），実施の経過（10）

2. 戸別訪問による調査……（14）

調査票と質問の方法……（14）

被調査者の選び方　サンプリング……（22）

あらまし（22），サンプル数の決定（23），各村への割当（24），抽出の実施（25），調査不能の分析（26）

3.「方言調査」とその調査事項……（27）

（3）整理，集計，分析……（30）

戸別調査の結果について……（30）

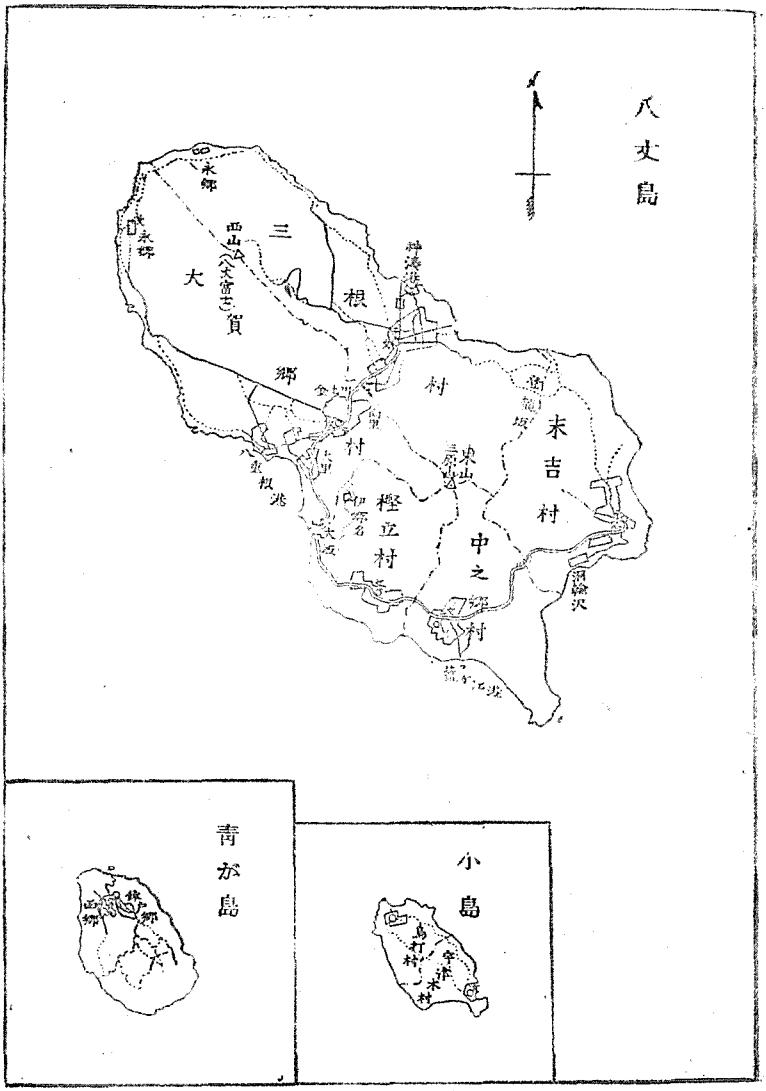
調査項目の整理（30），コードの決定とコードつけ（35），集計カードの作成（38），分析（39）

「方言調査」の結果について……(39)
Ⅳ. 結果 1.「共通語を話す度合」を決定する要因……(40)
(1) はしがき……(40)
(2) 「共通語を話す度合」をいかに表現するか……(41)
1. 指標を選ぶまで……(42)
2. 指標として選ばれた「共通語を話す度合の判定」…(44)
3. 個人と集団……(45)
4. 図 表 化……(46)
(3) 種種の集団における「共通語を話す度合」の状態……(48)
土地人と外来者(48), 村の比較(49), ほかの村の人と話す言語(51), 男女別比較(51), 年令別比較(53), 職業別比較(54), 学歴別比較(55), ラジオの影響(56), 内地との行き来による影響(57), 島島との行き来による影響(58), 家で使う言語(59)
(4) 特に「正しい共通語」について……(62)
(5) 非共通語で反応した語の割合……(63)
1. 指標とするまで……(63)
2. 要因別の分析……(65)
土地人と外来者(65), 学歴別比較(67)
3. 「判定」と「点数」との関係……(67)
被調査者全員について(67), 「判定」の各級の平均点(69), 「点数」から見た「判定」(70), 要因別の分析(70), 「判定」も「点数」もともに指標として役立つ(75)
(6) 共通語ないし非共通語で反応した集団の「共通語を話す度合」……(75)
(7) 要因としての居住経歴……(83)
1. 言語形成期は重要な要因か……(83)

2. K-図表による表現……(87)
3. 「点数」による表現……(87)
4. 相関図表による表現……(87)
5. 言語形成期は重要な要因ときめることはできない…(89)
(8) 特に島外居住年数について……(89)
1. 島外居住年数……(91)
2. はじめて島から出たときの年令が「共通語を話す度合」に影響するか……(96)
3. 島外へ出たことのない者と疎開を経験した者との比較……(97)
4. その他の試み……(97)
(9) 「共通語を話す度合」を決定する要因はなにか……(98)
1. 「共通語を話す度合」の定義……(98)
2. 「共通語を話す度合」に影響する要因—その1—…(99)
3. 「共通語を話す度合」に影響する要因—その2—…(102)
4. 「共通語を話す度合」に影響する要因—その3—…(105)
5. 上の 4. に関する数学的説明…… (107)
6. ひとつの試み…… (109)
(10) 結 論…… (113)
1. 結 論…… (113)
2. 分析のたりなかった諸点…… (114)
3. 將來に期待する課題…… (114)
4. むすび…… (115)
V. 結果2. 5か村の言語はいかに違うか…… (116)
(1) はしがき…… (116)
(2) 自然と文化…… (118)
1. 自然地理的狀況…… (118)

2. 交通の状況……(120)
3. 行政的関係……(121)
4. 産業の状況……(122)
(参考) 姓の分布……(122)
(3) ほかの村に対する主観的意識……(124)
(4) 共通語を話す度合……(127)
(5) 言語の構造的特徴……(129)
1. 音　韻……(129)
2. 文　法……(135)
3. 語　い……(143)
4. 結　論……(157)
(6) 結　論……(164)
VI. 今後の調査のために……(166)
(1) 反　省……(167)
(2) 今後の調査のために……(173)
附録1　八丈島の言語と文化について……(175)
I. 八丈島方言の二、三の音韻現象について……(176)
II. 属島の言語の二、三の音韻的特徴について……(191)
III. 八丈島の言語の二、三の文法的事実について……(201)
IV. 八丈島の言語の敬語資料……(210)
V. 「一話一言」と八丈島語い……(218)
VI. 八丈島の文化と文献……(260)
附録2　資料……(287)
I. 統計的資料……(288)
II. 文献目録……(303)
III. 語　い　集……(319)
索引……(414)

八丈島、小島、青が島要図



八丈島の言語の社会的調査

I. 目　　的

(1) 調査の必要性

話し・聞く言語生活を改善するひとつの方法は、「標準語を普及する」こと、つまり、「共通語を話す度合」を高めることであると考えられる。すなわち、現代の正常な社会生活を営むのには、すくなくとも、必要な場面において共通語を話しうるということが要求されており、もしそれが不十分にしか行われていないならば、そのような言語生活は改善されなければならないと考えられる。

そこで、共通語がどのように行われ、共通語を話す度合がどのようであり、さらに、その度合を決定する要因はなにであるかを明らかにする必要がある。

もし、調査の結果、「共通語を話す度合」を決定する要因が明らかになるならば、どのような要因に対策を施せば「共通語を話す度合」が高まるかを予測することができるであろう。

このようにして得られる結果は、國語政策および國語教育に対して重要な資料と方法とを與えるであろう。特に、國語教育に対しては、國語教育が共通語の、共通語による教育であると言いうる点から、いっそう重要な意味をもつであろう。

(2) 目　　的

そこで、われわれは、この調査を行うにあたって、次のふたつの目的をたてた。

1. 共通語を話す度合を調べる

2. 言語の地域による違いを調べる

上の1.は、前節の「調査の必要性」から出て來たおもな目的であり、2.は、八丈島を調査地点に選んだこと（II (1)）から出て來た附随的な目的である。

II. 計　　画

(1) 八丈島を選んだ理由

八丈島を調査地点に選んだ理由は次のとおりである。

（i） 八丈島は、この調査のおもな目的 ―共通語を話す度合を決定する要因を調べること――を達するのに適した地点であると考えられる。つまり、八丈島は社会的條件が比較的單純であり、その上、島だけで独立の生活体をなしているので、この種の調査をはじめておこなうのにはきわめて扱いやすい地点であると考えられる。ちょうど、心理学が人間の心理を機能的に明らかにするために、條件の單純な対象を使うのと同じであると考えていい。

（ii） 八丈島固有の言語は、共通語とはかなり違った言語であるから、共通語を話す度合を見ることは比較的たやすいと考えられる。

(iii) 八丈島固有の言語は、從來の報告によると、かなり特殊な構造をもち、その系統もまだ不明として残されている。

（iv） 八丈島の言語については、幸に、江戸時代からの報告が比較的多いので、八丈島の言語を歴史的に研究することも不可能ではない。

(2) 課　　題

この調査の目的をよく達し、八丈島を選んだ理由を意義あらしめるよう

に、課題を次のように設けた。

（i） 共通語を話す度合を決定する要因はなにか

（ii） 5 か村の言語はいかに違うか

（iii） 八丈島の言語の歴史

（iv） 八丈島の言語の系統

（v） 属島の言語の状況

上の(i)と(ii)とがおもな課題であり、(iii)以下は附随的な課題である。

（3） 方　　法

次の2種類の方法によって、それぞれ別に実施した。

（i） 調査票を作り、戸別訪問によって、多数の被調査者について調べた。この方法は、課題の (i) と (ii) とを調査するために用いられた。

したがって、調査票には次の事項が盛られた。すなわち、

a） 共通語を話す度合に影響を及ぼすと考えられる、個人の社会環境

b） 同じく、個人の行き来の状況

c） 他村の言語と共通語とに対する態度および意見

d） ある場面において共通語を使うか非共通語を使うか

e） 言語構造的特徴について、共通語で反應するか非共通語で反應するか、ならびに、5 か村の言語はいかに違うか

f） 外来者との初対面の際に話す共通語の度合の調査者による判定

被調査者は、八丈島ぜんたいをよく代表するようなサンプルを得るように、村ごとに、くじ引きで抽出した。さらに、なるべく細かいところまで分析しうるように、日時と費用との許す範囲内でできるだけ多数のサンプルを抽出した。

（ii） 観察および質問によって、特定の被調査者についてできるだけ詳しく調べた。この方法は従來の方言研究でとられた方法であり、課題の

(ii)—(v) を調べるために用いられた。

したがって、調査項目は言語構造の全般にわたった。すなわち、音韻、文法、語い（語彙）についてであり、特に文法と音韻とに重点をおいた。

被調査者は、八丈島に生れ、八丈島に育った、いわゆる「生えぬき」の人で、長時間（最小限半日）の調査にたえられ、しかも、この調査の目的をよく了解している特定の人を少数選んだ。

III. 実　　施

(1) 準備と準備的調査

5 月（1949年）上旬から次のような準備と準備的調査とを、第1研究室全員でおこなった。

(i) 八丈島の言語および一般的現状について情報を集めた。特に、統計数理研究所の林知己夫氏ほか数名の方に最近の事情を聞き、また國立教育研究所の野元菊雄氏から最近の言語状況について情報を得た。これらは、実施の計画をたてるのに大いに役立った。

(ii) 八丈島に関する江戸時代からの文献約50種を集め、言語に関する部分をすべて書きぬいたが、これは問題の発見と調査項目の決定とに大いに役立った。

(iii) 準備的調査を東京在住の八丈島出身者についておこなった。これはおもに、戸別訪問による調査〔II. 計画 (3) 方法で述べた (i) の調査〕のための準備的調査で、調査項目の検討、調査時間の決定、調査票の形式の整備および調査者の調査技術の訓練などを目標に行われた。その準備的調査の調査票は次に示すとおりである。なお、被調査者は師範学校の生徒および成人、のべ15人であった。

調査票（準備調査）

A

調査日	調査者
1949.	

	性別・年齢	1男 2女　　数え年　　才
	現住地	1大賀郷 2三根 3深立 4中之郷 5末吉 村
	居住経歴（疎開，入隊を含む）	年齢 / 島 所 / 八丈島人トノ関係 出生
	職業	1農（自由 小量 普通 多額）2漁（経営 作業） 3商業［　］4工業（経営）［　］ 5官吏［　］6学生 7その他［　］ 8失業［うちの職業：　］ 学問から　ずっと：その前の職業［　］
	学歴	なし 小（中，卒） 高小（中，卒） 師範（中，卒） 中学（中，卒） 商業（中，卒） 大学（中，卒）
	公職，所属団体	名称［　］地位［　］
	起臥者	なし（未 死 離） ある（再） 島人［　村］ 外来者［　　数］
	同居人（過去，戦時中含む）	人数 / 出身地 / 職業 / 年限 / 関係（理由）
	内地へいらっしゃることがありますか。	1よく行く（年に数回以上）2時時行く（年に2回ないし数回，年に1回） 3あまり行かない（2年に1回以下）4ほとんど行かない 5全然行かない 主にどこへ行くか［　］（経）用件［　］
	家族，知人などで内地に住んでいる方がありますか。	居住地 / いつから / 学歴 / Communication 家族：1時々ある 2数年ごとにある 3ほぼ毎回 4ほとんどない 親類：1 2 3 4 親しい友人：1 2 3 4 親しい知人同業者：1 2 3 4 その他：1 3 2 4
	Mass Media による接触	ラジオ 1よくきく 2あまりきかない 3ほとんどきかない（きこえない） 映画・演劇 1よく見る 2あまり見ない 3ほとんど見ない 新聞 1読む 2あまり読まない 3ほとんど読まない 本・雑誌 1よく読む 2あまり読まない 3ほとんど読まない（読めない）
	標準語（共通語，東京のことば）をどう思いますか。	1標準語をしゃべりたいと思う 2特にしゃべりたいとは思わない 3無関心 4しゃべりたくない
	村のことばをどう思いますか。	1なおしたいと思う 2自然によくなっていくと思う 4無関心 4よいことばだと思う 八丈島のことばをどう思いますか？ じぶんの村のことばは？ ほかの村のことばは？

B

	標準語の理解程度	1聞いて理解することが全然できない 2聞いて理解することが時々できない 3聞いて分るが使えない 4聞いて分るし、ときに標準語が使える 5完全な標準語が使える	
1	ハシ と ハシ	1 区別がない 2 区別がある 3 不明	足 耳 ねこ 毒 牛 ﾊﾅ(ｲﾇ)
2	カメ ヒ カメ	1 2 3	
3	先 生	1 ʃe 2 se	
4	大 根	1 dɑ:　2 de:　3 dai	
5	か え る	1 kɑ:　2 ke:　3 kae	
6	ろ う そ く	1 do:　2 ro:	
7	俵	1 to:ra　2 toara　3 ta:ra　4 tawara	
8	下 駄	1 geto:　2 getoa　3 geta	区別がない 区別がある g ɡ 不明 ɣ ɡ
9	高 下 駄	1 g\　2 ŋ	
10	う さ ぎ	1 u　2 ui	
11	雉 章	1 kiʃa　2 kʃa	
12	一本五円のあめ	いっぽん ごえん (1ドー 2タコー 3ノ) あめ	
13	(子供が) 遊んでいる	1アソッデ アロワ 2アソッテ イル 3アソンデ アロワ 4アソンデイル	
14	(それは) 本当だろう	ほんとう 1ダラ 2タコー	
15	山 へ 行く	(1ヤマシャン 2ヤメー) いく	
16	(さあ) 行こう	1イコゴン 2イコガン 3イコー	
17	(そんなに) 遠ければ	1トーケダラバ 2トーケレバ	
18	(そんなことは) しない	1シンナカ 2セネー 3シネー 4シナイ	
19	(危いよ) 落ちるなよ	1オテナ 2オチルナ 3オチルナ	
20	(おとうさんが) 泣いた	1ヒッフ゜サラ 2ヒッフ゜シタ	
21	泣いて (ください)	1イソンデ 2イソイデ	
22	着るか (着ないか)	1キトカ 2キルカ	
23	イ ー ス ト	1よく知っている 2よくは知らない 3知らない	
24	リ ン ク ル	1 2 3	
25	ジ ー プ	1 2 3	
26	(にんじんを) 煮る人	(1クロ 2クル) ひと	
27	行かせない	1イカサセンナカ 2イカサセネー 3イカセンナカ 4イカセネー 5イカセナイ	
28	赤 い	1アカケ 2アケー 3アカイ	
29	赤いけれども	1アカケドモ 2アカケドー 3アケケレド 4アカケ(レ)ドモ	
30	砂 が 多 波	1シズカドー 2シズカドァ 3シズカナ	
31	かわらレロレば	1 æ: カ o: ラシケダラバ 2 æ: カ o: ラシケレバ oa: oa:	

準備的調査は回を重ねれば重ねるほど、そして、被調査者を多く、しかも、いろいろにとればとるほど有効である。この種の調査の成否は準備的調査できまると言ってもいい。本調査は仕事のしあげにすぎないとも言える。準備的調査で結果まで見通せるくらいでなければならないと考える。

今度の調査は、日時の点（予定より急に早く出発しなければならなかった）および、なによりも準備的調査を現地でおこなうことのできなかったこと(5日に1度しか船が出ない）のために、準備的調査がきわめて不十分であった。そのためにいろいろ失敗したことはその時時に述べることとする。今後の調査には準備的調査を何回も重ね、多数のいろいろな被調査者について、現地でおこなうべきであろう。

さて、出発に際してわれわれは次のような処置をした。

（i） 現地あて公式の依頼状を出して、調査の協力を求めた。この種の調査は、現地の行政機関および教育関係者の協力がなければ実施がきわめて困難である。被調査者をひとりひとり戸別訪問するためにはおもに前者の協力を、調査の目的の宣傳および調査そのものへの援助にはおもに後者の協力を必要とする。

公式の依頼状には次のことを記した。

調査の趣旨

具体的な依頼事項（戸別訪問ないし1か所に集合を求めるための便宜、島民への趣旨の徹底方、「方言研究家」の紹介、宿舎の世話など）

日　程

具体的な調査事項

さて、依頼状の発送先は次のとおりである。

[1]支廳長　[2]支廳総務課長　[3]同教育厚生課長　[4]警察署長　[5-9]各村村長　[10-17]各小学校、中学校校長　[18-20]各小学校PTA会長　[21]現地新聞社（南海タイムス社）社長。なお現地以外では、[22]

東京都教育廳八丈島出張所長。

(ii) 東京都教育委員会、船会社(東海汽船)に連絡し、協力を求めた。

(iii) 「島の新聞社」(東京で発行、伊豆七島向けの新聞、月6回発行)に、(i)と同じ公式の依頼状の写しを届け、宣傳を依頼した。現地の人人にも調査のことをできるだけ宣傳しておく必要があった。現地の人人の協力いかんは調査の成功不成功のカギである。「島の新聞」1949年6月25日(土)号に、「『八丈島方言』の調査準備成る　國語研究所員近く渡島す」という見出しで、公式の依頼状と同じ内容のおもな部分が解説的に掲載された。

(iv) 現地の人への個人的な紹介を各方面からいただいた。これは、II. 計画 (3) 方法 における (ii) の調査に役立った。

(v) 調査者の個人的準備をした。特に、八丈島は日本第二の雨の多いところであり、主食物の移入地でもあるので、この点特に注意した。

(2) 現地における調査

1. 調査の實施

〔調査班の組織〕

現地における調査を実施するのに、まず、次の調査班(はん)が編成された。

國立國語研究所職員	大 間 知 篤 三(班長)
〃	柴 田 武
〃	飯 豊 毅 一(会計、庶務を兼ねる)
〃	北 村 甫
〃	石 川 唉 子
〃	島 崎 稔
〃	山之内 る り
長野縣派遣研究生	青 木 千 代 吉
統計數理研究所職員	丸 山 文 行

おもに5か村の言語の違いを調べるための、少数の特定個人について行った「方言調査」(II. (3) (ii) 参照) の際には、特に次のような調査グループを作り、各村へ分散した。

大賀郷・三根グループ	大間知、飯豊、北村
樫立・中之郷グループ	柴田、山之内
末吉グループ	島崎、青木

〔實施の方法〕

「共通語を話す度合」を面接によって調べるのには、いかなる方法をとるべきか。被調査者に1か所に集まってもらい、ひとりひとりについて調べるか、それとも、被調査者をひとりひとり戸別訪問するか、どちらの方法をとるか、準備の初期の段階では決めかねたが、出発直前、後者を採用することにだいたい決心し、さらに、現地で事情を聞いたところ、むしろ戸別訪問のほうが実施しやすいという見通しがついた。

〔時　期〕

さて、われわれは次の理由から、6月下旬から7月上旬という時期を選んだ。

(i) 國立國語研究所全体および第1研究室の研究計画から言って、もっとも適当な時期である

(ii) 海の静かな時期である

(iii) 農家のややひまな時期である

実際には、つゆのあけるのが遅れて、着いた日から帰る日までほとんど毎日雨が降り、1日は暴風にさえなった。このため、訪問するのには大変であったが、被調査者の大部分は家にいて都合がよかった。

〔實施の經過〕

調査の実施中、班長によって「行動記録」が、班員によって「作業記録」がつけられた。

その「行動記錄」と「作業記錄」とは右と下とに示すようなものである。

いま、班長の「行動記錄」によって、この調査が実際にどのように行われたかを示そう。

6月28日（火）クモリ

午後研究所デ送行会。午後3時研究所出発。部長ハジメ5氏ノ見送リ。5時勝丸ニ乗船、月島出帆。船ヤヤ揺レル。

6月29日（水）雨シトシト

予定ヨリ約5時間遅レ、13時八丈島大賀郷村八重根港ニ全員上陸。八丈支廳經

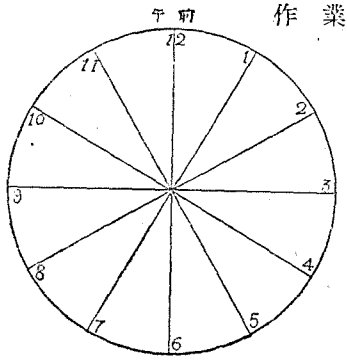
行動記錄

月日	月　日（　曜）		天候	
宿泊箇所			記錄者	
調査班（グループ）	交渉			
	調査			
調査員の行動	大間知			
	飯豊			
	北村			
	来田			
	山之内			
	島崎			
	吉木			
	丸山			
援助者（礼状対象）	氏名	住所		職業
備考				

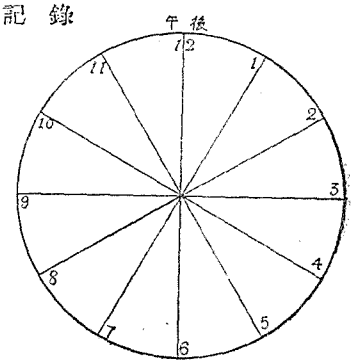
日
天候

作業記錄

午前



午後



概況

氏名

務課長池田要太氏ソノ他出迎エ。支廳ノとらっくデ大賀郷大脇旅館ニ入リ、中食ヲスマシテ、全員支廳、警察署、大賀郷村役場ニアイサツ廻リ。支廳デハ調査計画全体ニ関シテ了解ヲ得、大賀郷村役場デ7月1日以降、調査ノ準備ヲスル。大賀郷小学校長山田好氏種種アッセンノ労ヲトラレタ。夜ハアスノ行動ニ関スル詳細ナ打合セ。大脇旅館宿泊。

6月30日（木）降ッタリ降ラナカッタリ

5ヵ村ノ村役場ヲ手分ケシテ訪問シ、調査ノ打合セ、さんぷりんぐ、諸種ノ手配ヲ依頼スル。次ニ示スヨウナ個人アテ依頼状ヲ、役場ヲ通ジテ配ル。

個人あて依頼状

こんど國立國語研究所〔文部省〕では八丈島の言葉を調べることになり、東京から係官が八名まいっております。この調査は八丈島の言葉の性質をよく調べるとともに、標準語がどのように廣まっていくものであるかをくわしく調べるものであります。この調査の結果は八丈島の歴史を明らかにし、國語教育、標準語教育を改良するための大切な材料になります。

そこで、八丈島ぜんたいで數百名の方方について、その言葉を調べさせていただきたいと思います。お忙しいところ御迷惑とは存じますが、どうか調査の目的を御了解下さって、なにぶんの御協力をお願いします。

なお、あなたさまにお願いするようになったのは、配給台帳によってクジビキ式に選んだのでありまして、特別の事情によってしたものではありません。また、なんらかの能力を調べるためでもありません。お名前を書いていただくようなこともいたしません。

一、日時　七月　日午前　時から午前　時まで午後　時までにおあつまり下さい。
一、場所
一、用意していただくもの　なにもありません。
一、都合の悪い場合は　へお知らせ下さい。
一、かならず本人がおいで下さい。

昭和二十四年六月二十九日

國立國語研究所長　西尾實

東京都新宿区四谷霞丘明治神宮総画區内

様

ナオ、当日ノ分担次ノトオリ。

大賀郷	大間知
三根	北村　島崎　青木
樫立	飯豊　山之内
中之郷	柴田　丸山
末吉	柴田　丸山

夜ハ各村報告、打合セ。大脇旅館宿泊。

7月1日（金）雨ノチ晴

大賀郷ノ調査実施。村役場ノ援助ヲ受ケル。大里、西見、甚太等ノ諸部落ハ5日ニ調査スルコトニナル。夜ハ成果ノ検討、翌日ノ準備。大脇旅館宿泊。

7月2日 (土) クモリ時時雨

三根ノ調査実施。夕暮大賀郷ニ帰ル。夜ハ成果ノ検討、翌日ノ準備。大脇泊リ。

7月3日 (日) 雨時時クモリ

朝8時ばすデ全員坂上(樫立、中之郷および末吉村をさす)ニ出発。樫立ノ調査ヲ終ル(大間知、柴田、島崎、山之内、青木)。中之郷ノ調査ノ半分ヲ終ル(飯豊、北村、丸山)。当日両村役場ノ援助ヲ受ケル。樫立村郵便局長鹿崎八助氏、中之郷小学校長菊池正文氏等ノアッセンニ感謝スル。菊池正文氏(小島宇津木村出身)ニヨリ小島ノ調査ノ可能性生ジ、夜同氏ニヨリ調査スル。樫立村青年館ニ同村自慢ノ盆踊ヲ披露シテ旅情ヲ慰メテ下サル。全員樫立村ノ小宿ニ宿泊。蚊トノミニ苦シム。

7月4日 (月) クモリ時時雨

大間知、青木、丸山ハ中之郷。柴田、飯豊、北村、島崎、山之内ハ末吉。両村ノ調査終ル。夜、末吉村東屋旅館デ「メナラベ」3人シキリニ「ショメ節」ヲ傳授シテモ、言語学ノ訓練ヲ経タ耳ハ音楽トハ全ク無関係ナ事ヲ証明スルノミ。

7月5日 (火) クモリ時時晴

大賀郷(大間知、飯豊、島崎、山之内、青木)、三根(柴田、北村、丸山)ノ残リノ調査ヲ終ル。本日デ前半調査ヲ全部終ル。大賀郷大脇旅館泊リ。支庁長ノ世話デ奥山貞助氏来訪サレ、質疑ニ答エラレル。

7月6日 (水) 豪雨、強風、小学校モ休校

支庁総務課長池田要太氏ノ特別ノ厚志ニヨリ、「円翁交語」、「音韻取調書」、「口語取調書」ヲ借用シ、筆写ノ許可ヲ得タ。昨夜カラ本日午前ニワタリ、後半ノ方言調査ノ準備打合セ。本日カラ3ぐるーぷニ分カレル。

(1) 大賀郷三根村ぐるーぷ 大間知、飯豊、北村

(2) 中之郷樫立村ぐるーぷ 柴田、山之内

(3) 末吉村ぐるーぷ 島崎、青木

(1)ぐるーぷハ午後カラ大賀郷方言調査、大脇泊リ。(2)、(3)ぐるーぷハソレゾレ中之郷、末吉村ノ方言調査。2村ニ分宿スル。

7月7日 (木) 雨時時クモリ、強風

(1)ぐるーぷハ大賀郷オヨビ三根村ノ調査、三根村東京館宿泊。(2)、(3)ぐるーぷハソレゾレ中之郷、末吉村ノ調査、両村ニ滞泊。

7月8日 (金) 雨

(1)ぐるーぷハ午前三根村、午後大賀郷村ノ調査。(2)、(3)ぐるーぷハ昼間担当村ノ調査。夕刻全員大賀郷ニ集合、各村調査ノ中間照合、打合セ。全員大賀郷大脇泊リ。

7月9日 (土) 雨

(1)大賀郷八重根方面ニ住ム小島オヨビ青ガ島出身者ノ言語調査ヲ菊池正文氏ノ世話ニヨリ実施スル（柴田、山之内、青木）。

(2)大賀郷オヨビ三根村ノ補正調査（飯豊、北村）

(3)夜、後半調査ノ成果ノ整理検討（全員）。大賀郷大脇旅館滞泊。

7月10日（日）クモリ時時晴

5カ村ノ調査仕上ゲノタメニ次ノヨウニ村村ヲ調査スル。

(1) 大賀郷三根村　　飯豊、北村

(2) 中之郷堅立村　　大間知、柴田、山之内

(3) 末吉村　　島崎、青木

7月11日（月）クモリ時時小雨

支廳、警察、大賀郷村役場、南海タイムス、富士中学校、大賀郷小学校ヘアイサツ廻リ。大賀郷金土川部落ニツイテ補正調査ヲ実施スル。支廳ノとらっくデ八重根港ニ行キ、黒潮丸ニ乗船、18時出帆、波全ク収ツテ海上平穏。永郷小島間ヲ過ギテ黒瀬川ニ近ヅクコロカラ、八丈富士ハワレラ到着以來一度トシテ脫ガナカッタ雲霧ノ覆イヲオモムロニ拂イ、初メテソノ綠ノ全容ヲ我我ノ前ニアラワシタ。

7月12日（火）東京快晴

朝6時半、月島上陸。一夜ニウチニ雨ノ國カラ青天ノ國ニ移ツタ感深ク、全員研究所ニ入ル、7時30分。

2. 戸別訪問による調査

調査票と質問の方法

「共通語を話す度合」を調べるためにわれわれが採用した方法は、戸別訪問による調査（これを「戸別調査」とよぶ）である。

さて、あらかじめ用意した次のような調査票によって、ひとり20分ないし40分の面接調査をおこなうことにした。訪問のための道案内は、役場の吏員、小学校の先生および女子青年團員などに依頼したことがある。

被調査者は時間の許すかぎり「追跡」した。つまり、不在の場合は回を重ねて訪問し、場合によっては外出先で面接した。しかし、数回の「追跡」によっても面接できないことがあった。

調査票（本調査）

八丈島の言語調査

A

調査者	調査日

1		*現住地 性別 年令	1 O 2 M 3 K 4 N 5 S 村〔　　〕	1 男 2 女	〔　　〕才(数え年)
2		*職業	1 農(自由小作 小作 畜産) 2 漁(経営 作業) 3 商〔　　〕 4 工(経営 作業)〔　　〕 5 自由〔　　〕 6 学生 7 その他〔　　〕 8 無職〔うちの職業：　　〕		
3		*学歴	1 なし 2 小(中 卒 在) 3 高小(中 卒 在) 4 中(中 卒 在) 5 高専(中 卒 在) 6 大学(中 卒 在) 7 その他(中 卒 在)〔　　〕		
4		*公職 団体	1 公職あるいは団体の高い地位についている 2 高い地位ではない 3 ついていない 〔名称：　　〕〔地位：　　〕		
5		話題 (ex.)	島の生活で何に不自由していらっしゃいますか？ 島にはツバキがありますか？　花はいつごろ咲きますか？		

6		島のことばはずいぶんかわっているようですが、あなたの村はほかの村のことばに比べていかがですか。大賀郷(O)のことばは？Mのことばは？	回答	親類関係	古い	いい	親近感	(具体的事実)
	O		O					
	M		M					
	K		K					
	N		N					
	S		S					

7		ほかの村に知人がありますか。その人とはよくつきあっていますか。大賀郷(O)には？Mには？	1 たくさんいてしかもよくつきあう 2 たくさんいるがあまりつきあわない 3 たくさんはいないが、よくつきあう 4 いない					
				居住地	対象	人数	いつから	Communication
	O		父母、親族、兄弟					1 よくあう 2 あまりあわない 3 手紙だけ 4 あわない
	M		親類					1 2 3 4
	K		親友					1 2 3 4
	N		知人・同業者					1 2 3 4
	S		その他					1 2 3 4

8		その人たちとお話しになるときは、標準語でしょうか島のことばでしょうか？	1 いつも共通語 2 人、所、時によって共通語と島のことばと使いわける 3 いつも島のことば（しぶんの村のことば、相手の村のことば）

9		* 0 集落 1 内地生れ・育ちの共通語 2 内地生れ・育ちの非共通語 3 内地と区別がつかない共通語 4 島語はあらわれないが、どことなくちがう共通語（えせ共通語） 5 全体として共通語であるが、時々島語が出る 6 全体として島語であるが、時々共通語が出る 7 島語で答えるが、こちらの共通語は分る 8 こちらの共通語さえ分らない

B

10 ほかの村の人びとと現在折合いの悪いことがありますか。

1 大いにある　2 すこしある　3 ない

（事業　政治　個人関係　風情　その他［　　］）

11 ここ（現住地）には生れてからずっといらっしゃるのですか。
・村間の移動
内地への・
疎開
入隊，入団
《言語形成期：5-13才》

1 生れてからずっとここにいる者 2 言語形成期以前はここにいなかったが，言語形成期以後はここにいる者 3 言語形成期以前はここにいたが，言語形成期は他のところ（OMKNS；内地）にいてそれ以後再びここにいる者 4 言語形成期以後ここにいた者で，言語形成期以前は他村（OMKNS）にいた者 5 同じく内地にいた者

号	齢	期　間	場　所	理　由	その他
1	-				

12 あなたのお父さんはどこの出身ですか。お母さんは。

父　1 O 2 M 3 K 4 N 5 S［　　］b 内地［　　］

母　1 O 2 M 3 K 4 N 5 S［　　］b 内地［　　］

13 あなたの奥さん（御主人）はどこの出身ですか。いつ結婚なさいましたか。

1 O 2 M 3 K 4 N 5 S［　　］b 内地［　　］

7 なし（未死離）1（明治　大正　昭和［　　］;［　　］年前）

14 今同居のうはいらっしゃいますか。
就時中には

1 同居人の言語的影響が大いにあったと思われる 2 すこしあったと思われる 3 ないと思われる

人数	出身地	職業	いつからいつまで	関係（理由）

15 ほかの島へ行くことがありますか。

1 よく行く　2 ときどき行く　3 いかない

（主にどこへいくか［小笠，母島，父島，硫黄島，硫島，利島，大島，御蔵島］；用件［　　］）

16 ここ（内地）へ行くことありますか。

1 よく行く（年に数回以上）2 時時行く（年に2回ないし数回，1回）3 あまり行かない（年に1回以下）4 ほとんど行かない 5 全然行かない

（主にどこへ行くか［　　］；用件［　　］）

17 内地に知人がありますか。

1 たくさんいて，しかもよくあう 2 たくさんいるが，あまりつきあわない 3 たくさんいないが，よくつきあう 4 ない

	討食	居住地	いつから	Communication
父母，祖父母，兄弟		東京　その他［　　］	［　］年前	1 よくあう　2 あまりあわない　3 手紙だけ　4 あわない
親類		東京・［　　］	［　］・	1 2 3 4
親友		東京・［　　］	［　］・	1 2 3 4
知人・同業者		東京・［　　］	［　］・	1 2 3 4
その他		東京・［　　］	［　］・	1 2 3 4

18 ☆ 0 1 2 3 4 5 6 7 8

C

19	内地から知人が来ますか。	1たくさん, しかもよく来る 2たくさん来るが, あまりなくなりはしない 3たくさんではないがよく来る 4ほとんど来ない 5その他					
			対象	居住地	いつから	Communication	
		父母,祖父母,兄弟		東京 その他[ ]	[ ]年前	1よくわかる 2あまりわからない 3半分だけ 4わからない	
		親戚		東京 〃 [ ]	[ ]〃	1 2 3 4	
		親友		東京 〃 [ ]	[ ]〃	1 2 3 4	
		知人・同業者		東京 〃 [ ]	[ ]〃	1 2 3 4	
		その他		東京 〃 [ ]	[ ]〃	1 2 3 4	
20	ラジオをきき[よ]すか。	1よくきく 2あまりきかない 3きかない					
21	● 内地生れ者5の共通語を話す人(1,2)に対して	島のことばはお使いになりませんか?			1使わない 2場所[ ]によって使う 3使えない		
		なぜ島のことばをお使いになりませんか?			1使えないし使いたいと思わない 2使えないが使いたいと思う 3無関心		
	● 共通語を話す人(3,4,5)に対して	いつから標準語をお使いになる[よ]うになりましたか。			1ずっと前 2最近 3学生時代[ ]		
		どうして標準語をお使いになるようになりましたか。			1内地に住んだから 2内地の学校へ入ったから 3内地の人とよくつきあったから 4島にいても仕事の都合上 5その他[ ]		
		今でも標準語をお話しになりますか?			1島語 2まじり 3共通語		
		標準語のどこがむずかしいでしょうか?			1音調 2文法 3語い 4なんとなく		
	● 共通語を話さない人(6,7)に対して	なぜ標準語をお話しにならないのですか?			1話せないし話したいと思わない 2話せないが話したいと思う 3興味心		
22	あなたはお子さんに標準語をしゃべらせたいと思いますか。	1しゃべらせたいと思う 2しゃべらせたくない 3どちらでもいい 4無関心					

23	ハシ と 八シ	橋ハシ 箸ハシ	1区別がない 2区別がある		足目;ね,命;せかい
24	大根	1de:ko 2deiko 3dʒa:ko 4dæ:ko 5de:ko 6daiko			医,大工
25	来年	1dainen 2deinen 3dʒa:nen 4rjæ:nen 5de:nen 6rainen			
26	猿	1to:ra 2toura 3two:ra 4two:ra 5ta:ra 6tawara (toɔra)			
27	かわら	1ko:ra 2koura 3kwɔ:ra 4kwɔ:ra 5ka:ra 6kawara (koɔra)			
28	あわもち	1o:motʃi 2oumotʃi 3wɔ:motʃi 4wɔ:motʃi 5a:motʃi 6awamotʃi (ɔɔmotʃi)			
29	てぬぐい	1tenegui 2tenegei 3tenegi: 4tenegi: 5tenegi: 6tenugui			すいか
30	草履	1dzo:ri 2dʒourjo 3 4 5dʒo:ri 6dzo:ri			ざる
31	うぐいす	1 2 3 4 5 6wɯwisɯ			
32	先生	1sense: 2sensei 3sensei 4senʃi: 5senʃi: 6sense: (sense:)			
33	あうそく	1do:soku 2 ro:soku			留守,六郎
34	かえる	1kaerume 2kaerume 3kæ:rume 4ke:rume 5kaerume 6kaeru			
35	0 1 2 3 4 5 6 7 8				

D

36		畝 植 え	1ne:ue 2ne:ue 3næ:ue 4næ:ue 5naeue 6naeue	
37		ていねい	1te:ne: 2te:nei 3te:ne 4ty:ny: 5te:ne: 6ce:ne:	念令, 鄭生
38		(ごえろ)産	1koge:rowa 2kogeirowa 3kogi:rowa 4 5kogi:rowa 6kogoeru	
39		し か る	1so:gu 2waikjuru 3 4 5sawagu 6sawaju	
40		歩 く	1e mowa 2e:mowa 3 4jamowa 5e:mowa 6ajumu (aruku)	歩かない
41		(中間にいてくれ	1kaʃire 2 jere 3 4 5katerejo nakama ni ʃite kure	(入れる)
42		く も (虫)	1kumo 2tengome 3tengome 4tengome 5tengome 6kumo kuboname	(望月氏)
43		頭	1ʃiteja 2ʃite: 3ʃitæ: 4ʃitæ: 5nunaʈaki 6hitai	(望月氏)
44		末 多	1sue'ko 2omi'ʧago 3hi'paʃi 4hi'paʃi 5hi'paʃi (ʃimai'ko) 6sue'ko	(望月氏)
45		西 南 風	1 nagaʃi 2 haebuki 3 haibuki	(望月氏)
46	---	そ て つ	1sotetsu 2ʃotetsu 3 (sotetsu) 4ʃotetsu 5sotetsu 6sotetsu	
47		死んだ(人)	1marubo 2marubo 3marubw 4 5marubaɾa 6ʃinda	逝んだ(時)
48		急いで(来た)	1isonde 2isonde 3iso'de 4iso'de 5iso'de 6iso:de	
49		塩 い か	1to:keka 2toukeka 3to:keka 4to:ika 5to:keka 6to:ika (touika)	
50		(どこ)行くなら	1ikoda:ba 2 3 4 5ikodaraba	
51		(さあ)行こう (勧誘)	1ikogoɯ 2ikogoɯ 3ikogaɾɯ 4ikogáɾɯ 5ikogaɾɯ 6iko:	行こう(意志)ikowa ikodara
52		(山の)上に(ある) (場所)	1uege 2ueigei 3 4 5ueøde: 6ue: (ueiii)	
53		(山の)上へ(行く) (方向)	1ue:ʃaɾa 2ueiʃaɾa 3 4 5ueʃaɾa 6ue: ueʃima (ueno tho:e)	
54		赤いけれど	1akakaido 2akakaido 3 4 5akekeredo akaikere	
55		下駄を(はく)	1geto: 2getou 3getwɔ: 4 (getoɔ) 5geta: 6getao	
56		ここへ(来い)	1koke: 2kokei 3koky: 4koky: 5koki: 6kokoe	

「共通語を話す度合」を調べるためにあらかじめ考えた調査事項（II(3)（i）を参照）は、調査票の項目において次のように実現された。

調査事項	調査票の(調査)項目
a）共通語を話す度合に影響を及ぼすと考えられる、個人の社会環境	1, 2, 3, 4, 11, 12, 13, 14, 20
b）同じく、個人の行き来の状況	7, 10, 15, 16, 17, 19
c）他村の言語と共通語とに対する態度および意見	6, 21 の一部、22
d）ある場面において共通語を使うか非共通語を使うか	8, 21 の一部
e）言語構造的特徴について、共通語で反応するか非共通語で反応するか、ならびに5か村の言語はいかに違うか	23—56（ただし35をのぞく）
f）外来者との初対面の際に話す共通語の、調査者による判定	9, 18, 35(同じことについて会話の途中で3度判定する)

さて、調査はだいたい調査票の項目の順におこなわれた。項目 23—56 のうち可能なものは、次のような略画を見せて、「これはなんですか？」と質問してその反応を記録した。

絵にかけないものは、たとえば、「『歩く』ということはふつうなんとおっしゃいますか？」のように質問した。反応の個所はいずれも該当項にマルをつけた。項目 24—56 における反応形の 1—5 および 6 は各村で期待される非共通語形および共通語形である。すなわち、

1. 大賀郷（以後 O で示すことがある）
2. 三　根（M）
3. 樫　立（K）
4. 中之郷（N）
5. 末　吉（S）

であり、そして、

6. 共通語形




7 +5 =12

である。

反應形に附いている番号に下線の施してあるのは、東京でわれわれが直接確めることのできなかったもので、これらはおもに望月誼三氏の「八丈島方言の研究」(1930年度東京帝國大学文学部卒業論文)によった。

23—56の語は次の條件によって選んだ。

(i) 共通語と異なる形のあらわれうるもの

(ii) 村ごとに異なる形のあらわれうるもの

(iii) 音韻、文法については、いくつかの事実を代表するようなもの。つまり、たとえば、個別的な音韻的事実ではなく、法則的な音韻的事実。1例をあげれば、「大根」を選んだのは、

共通語〔ai〕/ たとえば O〔e:〕

という音韻法則的事実の代表者として適当と考えられたからである。

(iv) 語い、音韻については、なるべく絵にかけるようなもの。絵によって質問したのは、

被調査者の日常使っている言語を聞き出す

誘導的質問を避ける

刺戟(げき)として使う共通語形さえ理解できない被調査者に備える

被調査者に調査のねらいを意識させないようにする

ために、いちおう有効と考えられたからである。

被調査者の選び方

— サンプリング —

【あらまし】

サンプリングの計画をたてるときには、調査の目的をたえず念頭におくことがいちばん大切である。そして技術的には次のようなことが考慮されるのである。

(i) 調査する側の能力(サンプル数の決定に影響を與える)

費　　用
行動可能な期間
動員できる人数とその能力
現地の交通機関の状態

(ii) 調査される側の都合（層化や割当の方法に影響する）

資料の多少
役場や学校にあまりめいわくをかけないこと
調査不能になる人数の予測
くじ引きの公平感を與えること

(iii) 実行しやすいこと

抽出しやすいこと
各方面との連絡がとれやすいこと
調査しやすいこと
集計しやすいこと

(iv) 抽出理論的要求

精度
どのような結果表を期待するか

以下実際にとった行動をふりかえって見よう。

【サンプル數の決定】

サンプル数は250人ぐらいときまった。これくらいの人数を調べれば、全体の模様をかなり正確に知ることができて、普通の統計的分析には十分である。*

---

* 調査した250人の中に、ある特徴をもった集團がp%含まれているとしよう。そうすれば八丈島全体の中でこの特徴をもった集團の%は、p−eと、p+eとの間にあると結論してまず間違いはない。具体的に数字をあげれば次のとおりである。

p	p−e	p+e
10%	6.2%	13.8
20	14.9	25.1
30	24.2	35.8
40	33.8	46.2

一方、調査能力は最大、1人1日10人受持つとして、7人で4日、280人が限度とみられた。こまかい点をあげれば、書類の印刷能力もこれくらいで手一杯であった。この兩面から折り合って、サンプル数は250人ぐらいときめたのである。

【各村への割當】

調査の対象（被調査者）は、13才以上という條件だけで他に制限はつけないことにした。八丈島の全人口は1949年(昭和24年)6月1日現在12,480人であることが分っていた。

1947年（昭和22年）10月1日の臨時國勢調査の結果では、日本全体で、13才以上は72%であった。12,480人の72%はだいたい 9,000人である。この中から250人ぐらいを調べて 9,000人全体の模様を推定しようとしたのである。

さて、250人をばらまく算段になるが、5か村の比較をするのが目的のひとつだから、各村からサンプルを選ばなければならない。もしこれだけの目的ならば、各村から同人数、つまり、50人づつ選ぶのもひとつの方法であるが、われわれのおもな目的はむしろ八丈島全体として共通語を話す度合を分析することである。このためには、村の人口に比例させて割当てるのが後で便利である。

そこで、実際にはます後者に重点を置き、各村の人口の50分の1を基本サンプル数とした。

50	43.7	56.3
60	53.8	66.2
70	64.2	75.8
80	74.9	85.1
90	86.2	93.8

e は $2\sqrt{\frac{p(1-p)}{250}}$ で計算できる。

調査結果を整理するには、構成割合を見ることがもっとも多いから、上記のような考え方がおこなわれるのである。

1949年（昭和24年）6月1日現在

	大賀郷	三根	樫立	中之郷	末吉	全島
	3,873人	4,177人	1,295人	1,969人	1,166人	12,480人
基本サンプル数	78	84	26	39	23	250
割当数	77	82	29	42	26	256

割当数が違ってきたのは次の理由による。

（i） 大賀郷の永郷，三根の永郷（同じ名前）および三根のある部落は，交通が不便で，全体の日程上調査不可能となったので，これらを調査の対象から除いた。人口は全部で500人ぐらいである。

（ii） 調査不能を見越して，2人ないし3人余分にサンプルを選んでおいた。

次に，5か村の比較という目的のため，上述の比例割当数では数がすくない所に35人を追加した。すなわち，

（i） 大賀郷の大里（オオザト）という部落は，歴史的に古いところであり，言語の点でも特徴があるというので，これに10人追加した。

（ii） 樫立の伊郷名（イゴウナ）という部落が，発生的にみて特徴があったので，ここに10人追加した。

（iii） 末吉はいちばん基本サンプルがすくなく，また日程と調査能力とからみて，もう少しできそうだったので，追加として15人選んだ。

結局，基本サンプルと追加サンプルと合せて291人に，個人あて依頼状を発送した。

【抽出の實施】

今までの記述でわかるように，全体としてサンプルがすくない上に，相当細かく分けて比較検討する必要がありそうだったので，できるだけサンプルの1人1人を大切に取扱って分配した。つまり，男女別と年令別とで，あらかじめワクをつくっておき，さらに部落の特徴を加味することができた村では，これも考慮に入れて抽出したのである。

抽出は、世帯内の赤んぼまで書いてある物資配給台帳から、くじ引きで出発番号をきめ、あとは一定の等間隔でぬいて行き、13才未満ははぶくという方法をとった。抽出間隔は27人とした。すなわち、

$$\frac{\text{調査対象}}{\text{割当人数}}=\frac{9,000}{256}=35.2$$

という計算からみれば、そんなに小さくしなくてもよいのであるが、あとで男女別、年令別を整えるため、余分にぬいて置く必要があったからである。この整理上の入れかえにもくじ引きをおこなった。抽出をおこなった日どりは次のとおりである。

6月	29日	大賀郷	サンプリング	全員
	30日	三根	〃	北村　島崎
	同	樫立	〃	飯豊　山之内
	同	中之郷、末吉	〃	柴田　丸山

翌7月1日には大賀郷の調査を始めた。

なお、抽出には次のような名簿を使った。

村名　　抽出間隔

名　簿

調査日	通番号	住所	氏名	性	年令	不在又席理由	都合のよい日時再訪日時	備考

【調査不能の分析】

基本サンプルとして割当てた256人の中、40人は次のような理由で調査することができなかった。

	不在	病氣	都合悪い	產婦	耳が遠い	住所不明	計
人　數	25	7	3	2	2	1	40
百分率	62.5%	17.5	7.5	5	5	2.5	100.0

つまり大部分は不在ということになる。

差引き、調査できた人数は、256 人のうち216 人で、84.4% の割合になる。

これを村別にみると次のとおりである。

	大賀郷	三根	樫立	中之郷	末吉	全島
割當數	77	82	29	42	26	256
回收數	63	69	21	41	22	216
回收率	81.8%	84 2	72.4	97.6	84.6	84.4

中之郷の高率と樫立の低率が目立つ。

また、男女別、年令別にみると次のとおりである。

性	男	女
割當數	127	129
回收數	109	107
回收率	85.9%	82.9

年令	13—20	21—30	31—40	41—50	51—60	61—70	71以上
割當數	61	60	43	33	27	20	12
回收數	52	53	32	30	22	17	10
回收率	85.3%	88.3	74.5	90.9	81.5	85.5	83.4

年令で 31—40 才が回收率が悪かった。

なお、追加サンプルの模様は次のようであった。

村	大賀郷	樫立	末吉
地域	大里	伊郷名	全村
割當數	10	10	15
回收數	8	10	12

3.「方言調査」とその調査事項

この調査の後半において、調査者は調査グループをつくって各村に分散

し、特定の個人について、それぞれの村固有の言語をやや詳しく調べた。これを、「方言調査」とよぶこととする。

「方言調査」のおもな目的は、5 か村の言語の違いを調べることであったので、各村の調査項目をあらかじめ一定にした。

ただし、音韻については、戸別調査においてかなり明らかになっていたので、個別的な事実の確認と、ひとつひとつの音声の調査に関する観察以外には特に調査事項の打合せをしなかった。

文法については、特に曲用（名詞、代名詞の語尾変化）と活用とについて調査すべきことを打合せた。

曲用については、11の2音節名詞と約35の代名詞とについて、活用は、東條操氏報告（本州東部の方言、國語科学講座 VII）の動詞をふくむ用言（動詞、形容詞および「形容動詞」）37 種類および九つの助動詞について調べた。これらの調査項目を決めるのには、上の東條操氏の報告、東京における準備的調査、特に現地における戸別調査が大いに役立った。

語いについては、おもに戸別調査の際に得られた資料にもとづいて、あらかじめ次の50語を選んだ。

[1]夕立　[2]夕方　[3]おけ(水を入れる)　[4]井戸　[5]水たまり　[6]かまきり　[7]うそ　[8]地面　[9]ふるい（粉をふるいでふるう）　[10]肩　[11]かかし(たんぼのかかし)　[12]稲　[13]ぼろ　[14]太い薪　[15]おきゅう(おきゅうをすえる)　[16]持って來る　[17]起きる　[18]こく(稲や麦をこく)　[19]坐る　[20]あぐらをかく　[21]びっくりする　[22]手傳い人　[23]疲れた　[24]嫁着　[25]年長者　[26]かわいらしい　[27]腐る　[28]粗末な　[29]ひもじい　[30]ながらく　[31]茶わん　[32]おか(海に対して)　[33]たくさん　[34]まれに　[35]うらやましい　[36]にじ　[37]腹をたててぶすぶす言う　[38]惜しい　[39]うるさい　[40]くすぐる　[41]めん類(うどん、そばなど)　[42]きたない　[43]まぶ

しい　[44]甘える　[45](つめで)ひっかく　[46]母　[47]兄　[48]お客が來たときの食事　[49]ふだんの食事　[50]焼ける

以上の50語のうち、次の13語をのぞいてすべて、5か村の言語の違いを見るために役立った。13語とはすなわち、3、15、16、17、24、30、36、40、41、43、48、49、50である。

調査の方法については、一定の日時に一定の項目について調査する必要があるので、観察的方法ばかりをとることができない。したがって、原則として質問的方法（実験的方法）をとることにした。

文法については、たとえば、「『行カナイ』ということは島のことばでなんと言いますか」のように、共通語で質問して、固有の言語（非共通語）を聞き出すという方法をとった。このような方法は、八丈島に生れ、八丈島に育ったような「生えぬき」の人についてはきわめて困難な場合がある。こちらの言う共通語が十分理解できないし、もし理解できても、それにあたる非共通語形をすぐ答えることは、「生えぬき」の人には、しかも、その人が教養の高くない場合にはかなり困難である。文法についてこのような調査を行うのには、刺戟として使う共通語の語形もよく知っており、じぶんの固有の言語（非共通語）もよく反省できるような被調査者を見つけなければならない。一般に、現地で紹介される個人は上にのべたような「生えぬき」の人か、または方言をすっかり忘れたようなインテリないし物知りであることが多く、このような調査にはよほど警戒する必要がある。

文法の、特に活用については、ひとつの活用語について約20種類の変化をひとつひとつ質問していったので、約20の動詞を全部聞き終るのには6時間以上を要し、調査者にも被調査者にもかなりの忍耐仕事となった。

語いを調べる方法は、絵にかけるものは絵を示して聞く方がいいと思われるが、こんどの「方言調査」ではそのひまがなく、やむをえず、文法に

ついて聞いたのと同じように、「『カマキリ』のことを島のことばでなんと言いますか」のように質問した。非共通語形のあらわれないときは、あらかじめ用意した形を示して誘導したこともある。語いの場合は、適当な被調査者を選ぶのは文法の場合ほど困難ではなかった。

(3) 整理、集計、分析

戸別調査の結果について

戸別調査の結果の整理、集計および分析は次のような順序で進められた。

(i) 調査項目の整理

(ii) コード (code) の決定とコードつけ (coding)

(iii) 集計カードの作成

(iv) 分析

【調査項目の整理】

調査項目は次のように整理された。調査票の項目の順に述べよう（調査票を参照)。

調査項目1はそのまま。

調査項目2は、4工 と 7その他 とをひとつにまとめて 4工、その他 とした。4に該当する者がきわめてすくないためである。

調査項目3は、7その他 をけずった。7に該当する者は、数もすくなく、1-6に組みいれることのできるものである。

調査項目4は、調査できなかった被調査者が多いことなどのために、けずった。

調査項目5は、もともと話のきっかけをつくるために設けたもので（調査項目1—5 は役場などであらかじめわかると思っていたが、実際には不可能であった)、ここでは問題外。

調査項目6は、調査の結果が多様であり、複雑であるため、けずった。

調査項目7は、段階を整理して、「²たくさんいるが、あまりつきあわない」と「³たくさんはいないが、よくつきあう」とをひとつにした。

調査項目8は、段階に、⁰非該当　を設けた。

調査項目　9(=20=43)はそのまま。ただし、集計の際に8段階(⁰無答　をのぞく)を5段階にまとめた(IV 結果 1. 共通語を話す度合を決定する要因　を参照)。

調査項目10は、うまく聞き出せなかったため、けずった。

調査項目11は、言語形成期を基準として次の四つの段階にまとめた。¹言語形成期はもちろん、生れてからずっとここにいた者、²言語形成期に島にいた者(その前および後の一部分は島外にいた)、³言語形成期の前後に島にいた者(言語形成期には島外にいた)、⁴言語形成期以後に島へ来た者(生れてから、すくなくとも言語形成期のあいだは島外にいた)

調査項目12、13は、ほかに、小島、青が島、小笠原および南洋　の段階を追加した。

調査項目14は、該当者もすくなく、同居による言語的影響は認められなかったので、けずった。

調査項目15、16はそのまま。

調査項目17、19は調査項目16と重複し、しかも複雑なので、16で代表させることとし、けずった。

調査項目20はそのまま。

調査項目21、22はだいたいそのまま。

調査項目の23—56 のうち、23、27、41、49、52、53 をけずった。23は内地から来た人以外はすべて「アクセントなし」(つまり、いわゆる「一型アクセント」)であって、6か村の言語の違いを見るために利用することができないし、その上、アクセントのあるなしは共通語の重要な要素と考えられないので、けずる。27は、「かわら」(屋根にふく)は八丈島では役場

や学校以外にはないので、調査語として不適当であり、音韻法則の例外となるような結果を示すことがある。これは調査の目的に反するので、けずることとした。41は予期した非共通語形があまり出なかった（質問のしかたもまずかった）ので、けずった。49は、同じ個人でふたつの形（-ke 形と -i 形）を出すことが多いので、けずった。52と53とは、両者の区別がよくのみこめなかった被調査者がすくなくなく、失敗したので、けずった。

残った27のうち、次の7項目は、調査の結果、5か村の言語の違いを見るために利用することのできないことが明らかになった。つまりこれらの項目は年令などの要因によってことなると考えられる。七つの項目とは次のものである。

30草履　31うぐいす　32ろうそく　42くも(虫)　44末子　49西南風　46そてつ

七つの語いは八丈島全体として、次のような語形としてあらわれる。

草履	①dz- ②dʒ-*
うぐいす	①uguisu(me) ②ugujusu(me) ③ugurusu(me)
ろうそく	①r- ②d-
くも	①kumo(me) ②teŋgome ③kuboname ④jamakubo ⑤to:dʒiɴdʒarume ⑥toɴdʒaume
末子	①sue'ko ②hi'paʃi ③ʃi'paʃi ④ʃime:go ⑤ne'kokego ⑥hi'putagi ⑦o'pare:go ⑧omi'tʃago ⑨ba'ʃi その他
西南風	◎知らない ①nagaʃi ②natsuniʃi ③haebuki ④その他
そてつ	①sotetsu ②ʃotetsu

残った20の調査項目は、「共通語を話す度合を決定する要因」および「5か村の言語の違い」を調べるために用いられる。

そこで、われわれは次のように整理を進めた。

まず、ある調査項目について、村ごとに、あらわれるすべての反應を單純に集計してみた。そこには被調査者個人の音声的変異もあり、調査者の表記上の個人的な揺れもある。これをある程度統一した。たとえば、「俵」

について、三根村にあらわれるすべての反應は次のとおりであった。

tawara	17
to:ra	32
toura	12
toera	1
ta:ra	1
レ	6
	69

このようにして、「俵」について5か村の集計を行うと次のようになった。

	tawara	to:ra	toura	toera	ta:ra	レ	
O	42	17	0	1	1	2	63
M	17	32	12	1	1	6	69
K	12	1	0	6	1	1	21
N	18	1	0	22	0	0	41
S	10	0	0	0	12	0	22

この表から、各村を特徴づける代表的な形（これを「特徴的代表形」と言う）をひき出すことができる。

一般に共通語形は各村にかなり多くあらわれるから、tawaraを「特徴的代表形」とすることはできない。つまり、「特徴的代表形」は非共通語形からとられるわけである。非共通語形中、数の多いものがまず候補にのぼるのは当然である。その点で、

O	to:ra
K	toera
N	toera
S	ta:ra

はそれぞれの村でかなり数が多く、これらがそれぞれの村の「特徴的代表形」となる。ところが、Mは数の上では to:ra のほうが多いが、やや多いものに toura があり、これは、Mにだけあって、ほかの村にはすくなくともサンプルでは全くあらわれない。したがって、Mの「特徴的代表形」は toura とするのが妥当であろう。

特徴的代表形一覧

大根	0 daikɔ(ɲ) 1 de:ko 2 deiko 3 dʒa:ko (4 dʒa:ko) (5 de:ko)
來年	0 rainɐɲ 1 de:nɐɲ 2 deinɐɲ 3 dʒa:nɐɲ (4 dʒa:nɐɲ) (5 de:nɐɲ) 6 rja:nɐɲ 7 dainɐɲ 8 re:nɐɲ
俵	0 tawara 1 to:ra 2 toura 3 tɔura (4 tɔura) 8 ta:ra
あわもち	0 awɐmotʃi(:) 1 o:(ɡɔmɐ)mɔtʃi(:) 2 ou(ɡɔmɐ)motʃi(:) 3 ɔu(ɡɔmɐ)mɔtʃi(:) (4 ɔu(ɡɔmɐ)mɔtʃi(:)) 5 a:(ɡɔmɐ)notʃi(:)
てぬぐい	0 tɐnugui 1 tɐnɐgɛ: 2 tɐnɐgɐi 3 tɐnɐgɛ̃: (4 tɐnɐgɛ̃:) 5 tɐnɐgi: 6 tɐnɐgoi
先生	0 sɐnsɐ: (1 sɐnsɐ:) 2 sɐnsɐi 3 sɐnʃɐ: (4 sɐnʃɐ:) (5%sɐnsɐ:) 6 sɐnʃi: 7 sɐnʃɐ:
かえる	0 kaeru(mɐ) 1 ke:ru(mɐ) (2 ke:ru(mɐ) 3 kja:ru(mɐ) (4 kja:ru(mɐ)) (5 kaeru(mɐ)) 6 kajeru(mɐ) 7 その他
苗植え	0 naɐue 1 nɐ:je 2 nɐije 3 nja:je (4 nja:je) (5 nɐ:je) 6 na:we
ていねい	0 tɐ:nɐ: (1 tɐ:nɐ:) 2 tɐinɐi 3 tɐ̃:nɐ̃: (4 tɐ̃:nɐ̃) (5 tɐ:nɐ:) 6 tʃi:ni:
寒い	0 koɡɔeru, samui 1 koɡɐ:ru 2 koɡɐiru 3 koɡɐ̃:ru (4 koɡɐ̃:ru) 5 koɡi:ru
しかる	0 ʃikaru 1 sɔ:ɡu 2 waikjuru 3 idʒimeru (4 idʒimeru) (5 idʒimeru) 6 sawaɡu 7 okoru 8 soɐɡu 9 その他
歩く	0 aruku, ajumu 1 ɐ:mu 2 ɐimu 3 jamu (4 jamu) (5 ɐ:mu) 6 miku
額	0 hitai 1 ʃitai 2 ʃitɐi 3 ʃitʃa: (4 ʃitʃa:) 5 ʃitɐ̃: 6 hitɐ:, hitɐi 7 munaita, munataki
死んだ(人)	0 ʃiɲda 1 mɐrubɔ: 2 marubou 3 marubɔu (4 marubɔu) 5 mɐruba: 6 mɐrubara 7 marunda 8 marouda 9 ʃinara 9/ ʃino
急いで	0 isoide 1 isoɲde 2 iso'de (3 iso'de) (4 iso'de) (5 isoɲde) 6 iso'te 7 その他
行くなら	0 ikunara 1 ikoda:ba (2 ikoda:ba) 3 ikodaraba (4 ikodaraba) (5 ikodaraba) 6 ikaba 7 ikeba 8 ikoba 9 ikularaba
行こう	0 iko: 1 ikoɡɔɯ (~ ikoɡoɯ) 3 ikoɡɔɯ (4 ikoɡoɯɯ) 5 ikoɡɯ 6 ikoɡa:ni, ikoɡɔ̃ni 7 iko:dʒa
赤いけれど	0 akaikeredo:(mo) 1 akakaido:(mo) (2 akakaido:(mo) 3 akakedoɯ(doɯni) 4 akakedo:(mo) (5 akakedo:(mo) 6 akakaredo(mɔ) 7 akakeredo 8 akakeɡa 8/ akakedaido 9 akaiɡa 9/ akakedaredo
下駄をここへ	0 ɡetao 1 ɡeto: 2 ɡetou 3 ɡetoɯ (4 ɡetoɯ) 5 ɡeta:
	0 kokoe 1 koke: 2 kokɛ̃i 3 kokɛ̃: (4 kokɛ̃:) 5 koki: 6 kokoɡe

なお、上の表のうち、$^{6-9}$は、各村の「特徴的代表形」以外のいちじるしい語形を示す。

こうして、共通語形および非共通語形の各村における「特徴的代表形」は次のようになる。

^{0} tawara　^{1} to:ra　^{2} toura　^{3} tosra　^{4} tosra　^{5} ta:ra

語形の左肩の数字は次のことを示す。

0 共通語　1 大賀郷語　2 三根語　3 櫂立語　4 中之郷語

5 末吉語

このような操作を各項目についておこない、34ページのような「特徴的代表形」の一覧表を得た。

この一覧表は「共通語を話す度合を決定する要因」の分析の際に大いに役立った。ことに「5 か村の言語の違い」の分析は、この「特徴的代表形」を指標にして進められた。

〔コードの決定とコードつけ〕

さて、調査項目における反応を整理して分類し、分類項のそれぞれに数字か記号をふりあてなければならない。なぜならば、多数の調査票を扱い、調査項目相互の複雑な相関関係を計算しなければならないからである。この作業に間違いが多いと、せっかくの調査資料が無駄になるので、分類の数字（ここでは記号は使わなかった）のふりあてを慎重におこなった。

このような分類標式をコード（code）と言い、このような数字をふりあてることをコードつけ（coding）と言うことにする。

そこで、次のようにコードをきめ、コードつけをおこなった。調査票における調査項目のそれぞれの右端にあるワク（空欄）は、コードの記入されるところである。なお、「不明」は、レじるしをつけて整理した。

1. 現住地

コード	1	2	3	4	5
村の名	O	M	K	N	S

1. 性別

コード	1	2
性別	男	女

1. 年令

コード	1	2	3	4	5	6	7
年齢	13—20	21—30	31—40	41—50	51—60	61—70	71—

2. 職業

コード	1	2	3	4	5	6	7
職業	農	漁	商	工その他	自由	学生	無職

3. 学歴

コード	1	2	3	4	5	6
学歴	学歴なし	小学	高小	中学	高専	大学

(2—6 は、それぞれの卒業、中退を含む)

7. 他村との行き来

コード	0	1	2
交通	全く行き来しない	すこし行き来する	よく行き来する

8. 他村の人と話す言語

コード	0	1	2	3
他村との言語	非該当	共通語	まじり	非共通語

10. 共通語化の判定

1—8 はそのまま。0 はレ。なお、のちに集計・分析する際には、1—8 を 1—5 に組み分けた(43ページを参照)。

11. 居住経歴

コード	1	2	3	4
経歴	生れてからずっと島にいた	言語形成期に島にいた	言語形成期前後に島にいた	言語形成期後に島にいた

12. 両親の出身地

コード	1	2	3	4	5	6	7	8	9
出身地	O	M	K	N	S	内地	小島	青が島	小笠原、南洋など

13. 配偶者の出身地　　12. と同じ

15. ほかの島島との行き來

コード	1	2	3
往き來	よく行く	ときどき行く	行かない

16. 内地との行き來

コード	1	2	3	4	5
行き來	よく行く（年に数回以上）	ときどき行く（年に1回ないし数回）	あまり行かない（年に1回以下）	ほとんど行かない	全然行かない

19. ラジオ

コード	1	2	3
ラジオ	よくきく	あまりきかない	きかない

21. 共通語か非共通語（島のことば）か

内地生れ・育ちの共通語を話す人に対して、

コード	1	2	3	レ
島のことば	使えないし、使いたいと思わない	使えないが、使いたいと思う	場所によって使う	無関心

共通語を話す人に対して、

コード	1	2	3
家では	非共通語	まじり	共通語

共通語を話さない人に対して、

コード	1	2	3
共通語を	使えないし、使いたいと思わない	使えないが、使いたいと思う	場所によって使う

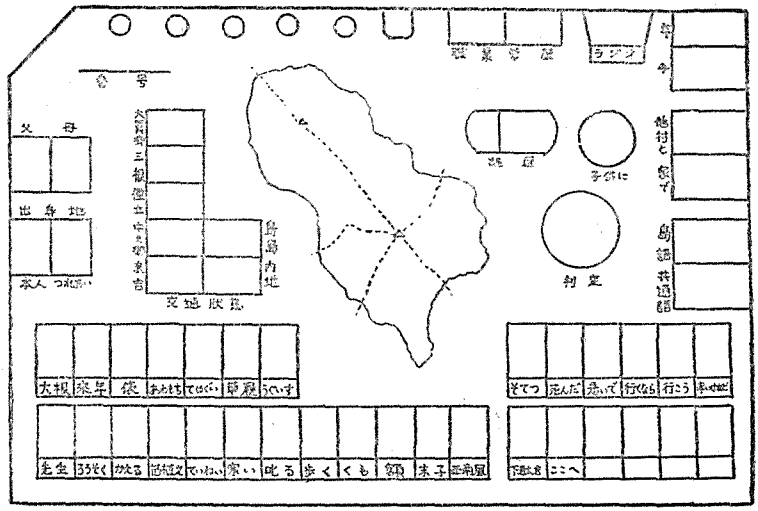
22. 共通語に対する態度

コード	1	2	3	レ
子供に共通語を	しゃべらせたいと思う	しゃべらせたくない	どっちでもいい	無関心

23—56 については、34ぺの一覧表による。つまり、

コード	0	1	2	3	4	5	6—9
語	共通語	O	M	K	N	S	その他

〔集計カードの作成〕



集計カード

集計をはじめるにあたって、われわれは、調査票のほかに「集計カード」を作った。なぜならば、調査票を使って集計をおこなうことは次の理由で非能率的であるからである。

（i） ひとりの被調査者の調査票の枚数がすくなくないので、全体をひと目で見渡すことも、同じ項目を多数の被調査者について集計することも容易ではない

（ii） 集計されない調査項目がある

（iii） 集計の途中に紙がいたむ

そこで、集計される調査項目だけが、しかも、それらがすべてひと目で見渡せるように工夫した「集計カード」を用意した。なお、集計の能率をあげるために、項目別に記入箇所の位置と形とを特徴づけるように考えた。紙は厚手の良質紙を使った。

集計カードにあるたくさんの ワク は、それぞれの調査項目のコードを記入するところである。カードの左上の端をななめに切るか切らないかで、男女別を示す。左上の五つのマルは村をあらわす。Oの被調査者は、いちばん左端のマルに穴をあける。次のマルはMの被調査者を示すための穴となる。以下同様。こうすることによって、Oの被調査者だけをぬき出すことがきわめて容易になる。つまり、Oのマルのところに火ばしのようなものを通して、Oの者だけをつりあげることができる。(このとき、穴のすぐ左側のところまでカードの左端から切りとっておかなければならない。でないと、棒は通らない。)五つのマルの右の印鑑形は、調査者のコードが記入される。カードの中央の八丈島の地図は、村の比較のために色分けなどをすることがあるかと考えて作ってみたが、実際には使わなかった。

〔分 析〕

単純な集計、相関表とグラフの作成、検定などを順次おこなった。

「方言調査」の結果について

「方言調査」の結果は、おもに、5か村の言語の違いを見るために利用した。音韻、文法、語いに分けて、整理、集計、分析を進めた。

なお、途中に出て来た興味あるいくつかの課題については、別にモノグラフとして(附録1)まとめた。

IV 結 果 1

「共通語を話す度合」を決定する要因

(1) はしがき

八丈島の言語調査の目的のひとつは、「共通語を話す度合」を調べることであった。

この目的を達するために、われわれは次の事項について調べた。

a) 共通語を話す度合に影響を及ぼすと考えられる、個人の社会環境

b) 同じく、個人の行き来の状況

c) 他村の言語と共通語とに対する態度および意見

d) ある場面において共通語を使うか非共通語を使うか

e) 言語構造的特徴について、共通語で反応するか非共通語で反応するか、ならびに、5 か村の言語はいかに違うか

f) 外来者（調査者）との初対面の際に話す共通語の度合の、調査者による判定

以上の事項を盛った調査票を作り、面接によって全島 216 人の成人男女(13才以上)について調べることができた。

さて、われわれは調査の結果について、以下、次のように整理と分析を進めた。

まず、(2)「『共通語を話す度合』を決定する要因」において「共通語を話す度合」を表現するひとつの方法をきめ、(3) ではこの方法を使って、いろいろな集団における「共通語を話す度合」の状態を記述した。すなわち、調査してきた項目を全部とり上げ、「共通語を話す度合」との関連の状況を見たのである。こうすることにより、われわれの調査して来たことか

整理され、統計的分析がはじまるのである。このとき同時に「共通語を話す度合」に影響を及ぼしそうな要因が浮び上ってくる。

次に、(5) で「共通語を話す度合」を表現する別の方法をきめて、(2) の方法と併用することによりさらに分析を進めていく。

(7) では重要な要因であるとあらかじめ考えられた居住経歴について、特に記述したのである。

(7) の結果、居住経歴の影響の模様が興味をひいたので、(8) においてさらにくわしい分析を試みた。

以上の結果を総合して、(9) で「『共通語を話す度合』を決定する要因はなにか」という問に答えたのである。この報告書の結果1の中で、もっとも大事な箇所である。

(10)では、「共通語を話す度合」の表現・分析方法を反省し、さらにそれをよりよくすることを考えたのである。

なお、(4) の、「特に『正しい共通語』について」と、(6) の「共通語ないし非共通語で反応した集団の『正しい共通語を話す度合』」の箇所は附随的なものであるが、「共通語を話す度合」を表現する方法を将来改良していくのに役立つであろう。

以下、各節のはじめに「あらまし」をつけて、読者の便をはかった。

(2) 「共通語を話す度合」をいかに表現するか

「共通語を話す度合」を調べるのに、われわれは六つの事項を調査票に盛ったが、実際に、「共通語を話す度合」を表わす指標として選ぶことのできたのは、調査票の四つの項目であった。この四つの項目のうちから最後に選んだのは、調査者の判定による被調査者の「共通語を話す度合(J)判定」である。

すなわち、「判定」を

正しい共通語	(A+)
共通語だがどことなくちがう	(A)
共通語がまざる	(B)
共通語を話さない	(C)
共通語が通じない	(D)

のように五つの段階に分けてみた。

さて、そのような指標をもった個人の集団を考え、その集団におけるなんらかの事実、傾向を見出し、それによって個人の「共通語を話す度合」に関する知識を得ようとした。

このため、集団としての「共通語を話す度合」を、個人の「判定」を使って一定の図表（K-図表）に表わすこととし、さらに、上の段階の最初のふたつの段階（A+A）の割合は、集団の「共通語を話す度合」を示すもっとも重要な数値と考えられるので、これを、k-数値として特に区別することにした。

1. 指標を選ぶまで

「共通語を話す度合をいかに表現するか」ということについて考えるのに、まず、「共通語を話す度合」をなにをもって表現すればいいかを決定しなければならない。その手段を決定するまでの過程を以下に述べる。

調査票における調査項目のうち直接、「共通語を話す度合」を表わす指標として選ぶことのできるのはつぎの四つの項目である。アラビヤ数字は調査票における調査項目の通し番号を示す。なお、調査票を参照。

8 〔ほかの村に知人がありますか。〕その人たちとお話しになるときは、標準語でしょうか、島のことばでしょうか。

9 0 無答 1 内地生れ・育ちの共通語 2 内地生れ・育ちの非共通語 3 内地のと区別がつかない共通語 4 島語はあらわれないが、どことなくちがう共通語（えせ共通語） 5 全体として共通語であるが時時島語が出る 6 全体として島語であるが、ときどき共通語が出る 7 島語で答えるが、こちらの共通語は分る 8 こちらの共通語さえわからない

21 内地生れ・育ちの共通語を話す人に対して、

島のことばはお使いになりませんか

なぜ島のことばをお使いになりませんか

共通語を話す人に対して、

いつから標準語をお使いになるようになりましたか
どうして標準語をお使いになるようになりましたか
家でも標準語をお話しになりますか
標準語のどこがむずかしいでしょうか

共通語を話さない人に対して、

なぜ標準語をお話しにならないのですか

22 あなたはお子さんに標準語をしゃべらせたいと思いますか

ところが、このうち項目22は、216人中95人が未記入で、参考資料としかならない。項目21は、くわしすぎて調査者を一様に反応させているとは思えない。そこで、8と9とが残る。

集計の際には項目8はさらに次のように分類した。

1 いつも共通語
2 共通語と非共通語（島のことば）を使い分ける
3 いつも非共通語（島のことば）
0 非該当（たとえば、ほかの村に知人がいない場合）
レ 不明

調査の結果は次のとおりである。

項目8について

1 いつも共通語	2 共通語と非共通語（島のことば）とを使い分ける	3 いつも非共通語（島のことば）	0 非該当（ほかの村に知人がいない）	レ不明	計
31人	40	98	45	2	216人

項目9について

0	1	2	3	4	5	6	7	8	レ(不明)	計
0人	18	4	57	35	48	30	8	0	16	216

空白が項目8では47人、項目9では16人。

前者は村と村との間、後者は内地人（つまり、われわれ調査者）に対する場合であろう。また両者のあいだには次のような常識的な関係が見られる。

項目8＼項目9	1	2	3	4	5	6	7	空白	計
1	6	3	15	3	3	0	0	1	31
2	2	0	12	13	11	0	0	2	40
3	1	0	24	13	26	24	5	5	98
空白	9	1	6	6	8	6	3	8	47
計	18	4	57	35	48	30	8	16	216

だから、どちらをとっても大差ないようである。しかし、どちらかと言えば、項目9の方が「共通語を話す度合」を表わすのには適当と思われた。判定（各段階の位置づけ）に調査者のくせが影響するだろうが、それでも質問8よりは信頼ができると思われた。そこで、まず項目9で「共通語を話す度合」を見ていくことにきめ、以後「項目9」を「判定」とよび、さらに分析を進めることにした。

2. 指標として選ばれた「共通語を話す度合の判定」

「判定」の0—8の段階は、共通語をどの程度話すかという基準のほかに、1, 2においては、内地生れ・育ちという基準によって段階づけられている。つまり、「判定」の0—8の段階は一次元的に配列されていない。

これを改めるため、まず「共通語を話す度合」は次の5段階にまとめた。

	ず通語が通じない	共通語を話さない	共通語がまざる	共通語だがどこかとなくちがう	正しい共通語
級の記號	D	C	B	A	A+
項目9の番號	8	7	6, 5	2* 4	1 3

なお、一方、被調査者全部を、5才から13才のあいだ（言語形成期）に八丈島にいた者（これを以後「土地人」とよぶ）と、そうでない者（これを以後「外來者」とよぶ）とに分け、さらに、八丈島の特殊性を考えて、外來者を、言語形成期に外地（八丈島ではほとんどが小笠原諸島、硫黄島、南大東島、サイパン島、テニヤン島などの「南方」）にいた者（これを以後

* 2のうちには B, C 級に入るものがあったかもしれない。

「外地人」とよぶ）と内地にいた者（これを以後「内地人」とよぶ）とに分けた。

土地人	外來者		計
	外地人	内地人	
154人	35	27	216人

ただし、八丈属島にいた者は「土地人」に、八丈島以外の伊豆諸島にいた者は「内地人」に入れた。

	D	C	B	A	A^+	不明
土地人	0	7	67	30	40	10
外地人	0	1	8	6	16	4
内地人	0	0	3	3	19	2
計	0	8	78	39	75	16

無答とD級は今回の調査ではあらわれていない。

なお、5段階よりあらく分けるとすれば、

4段階	D	C	B	$A+A^+$
3段階	D	C+B	$A+A^+$	
2段階	D	$C+B+A+A^+$		

となるであろう。

3. 個人と集團

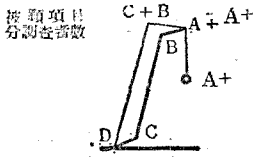
今までに述べた「判定」は、個人について「共通語を話す度合」を表現したものである。次に、われわれはこのような指標を持った個人の集團を考え、その「共通語を話す度合」を表現することにしよう。

このためには、集團に属する個人の「判定」の構成割合（百分率）によって集團の「共通語を話す度合」を表わすことにした。集團化することによって、「共通語を話す度合」についてなんらかの事実、傾向が見出されるならば、その知識は個人の「共通語を話す度合」についてもなんらかの寄與をするであろう。これから以後の考察においては、集團と個人との關係

についてたえず注意して見ることが望ましい。

4. 圖表化

集團の「共通語を話す度合」を表現するため、前記の各段階の構成割合を次の図表で表わすことにした。これから以後、これを「K-図表」と略称する。



K-図表

各点の水平線からの高さがその段階の構成割合を示し、高さ1mmが3%にあたる。横座標はDの位置からはかってC$\left(\frac{10}{3}\text{mm}\right)$, C+B$\left(5\text{mm}\right)$, B$\left(\frac{20}{3}\text{mm}\right)$ A+A^{+}(10mm (図の大きさは本質的なものでなく、ぜんたいの形が重要である。)実線は4段階、点線は3段階の分類に対應する。

今回はDの高さは0であるから、つねに

(Cの高さ)+(Bの高さ)+(A+A^{+}の高さ)=100%

の関係がある。したがって、Cの高さとA+A+の高さとをきめればBの高さはきまってしまい、図表の形は一定する。つまり、「共通語を話す度合」を、自由に動く変数ふたつで表わしたのである。

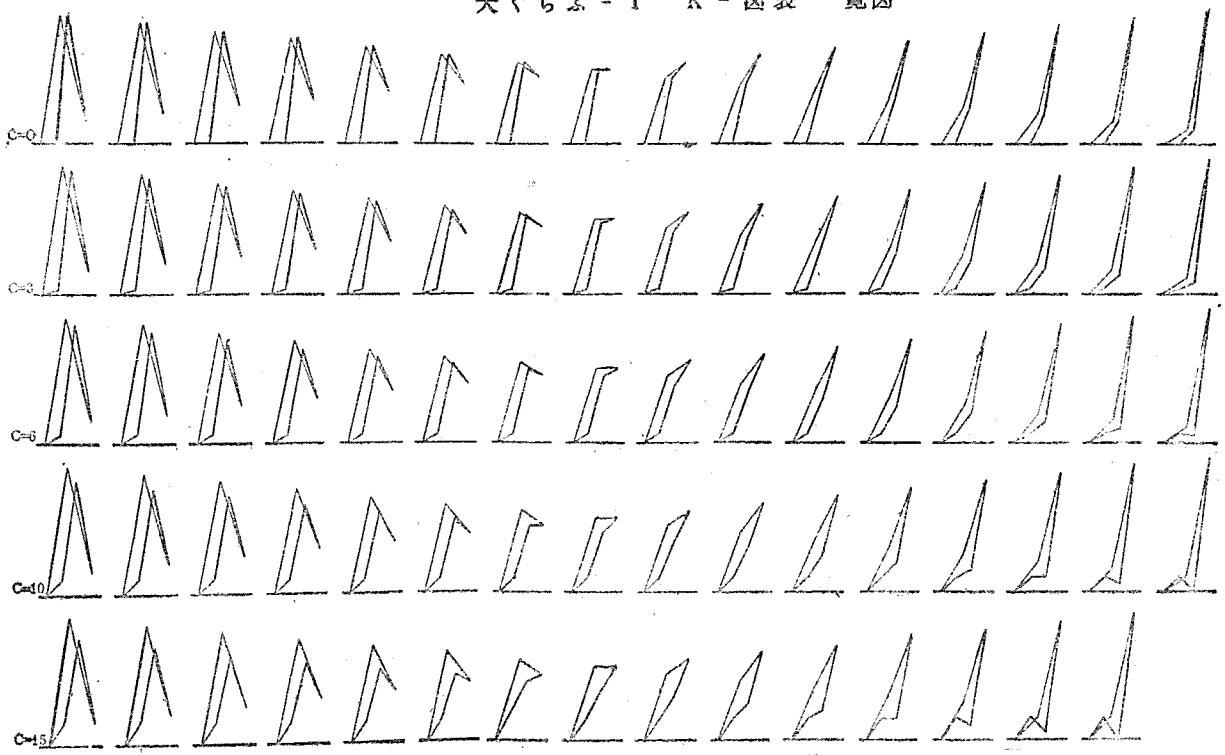
大グラフ-1にはCの高さとA+A^{+}の高さとをいろいろに変えてk-図表の形を見比べるのに便をはかった。*

また、A+A^{+}の割合は集團の「共通語を話す度合」を示す、もっとも重要な数値と思われるので、これを「k-数値」として区別することにした。K-数値が50%を越すかどうかにより、K-図表の形が大いに変ってくる。

さて、このように定義されたK-図表を使って、次に、われわれはなに

* いわゆる「サンプル調査」であるから、真の形とのくい違いが問題となる。この点では、被調査者が50人のとき、最悪の場合、四方八方へひとつ飛びこえたところのK-図表があらわれると思えばいい。例数が多いほど精確で、例数50以下のときはかなり真の形はくずれて来るであろう。また図の大きさは標準より小さくなっている。

図覧一 表図－K－1 ぐらふ－1



を調査して來たかをたがめることにしよう。

(3) 種種の集團における「共通語を話す度合」の狀態

われわれは前節で「共通語を話す度合」を表現する方法をきめ、集團における狀態を見ることにした。この節では、そのような狀態を種種の集團について調べてみた。これは、「共通語を話す度合」を要因別に分析することである。この結果、前節できめた方法が課題に対して適切なことがほぼ明らかになった。

この分析においては、ラジオをきく、きかないという要因をのぞいては、それぞれの要因の影響はわれわれの期待にほぼ一致する。

つまり、「土地人」(われわれは、「『言語形成期』に八丈島にいた人」と定義した)と「外來者」(われわれは、「『言語形成期』に八丈島にいなかった人」と定義した)とのあいだにはいちじるしい差のあることが見られる。

また、内地との行き來、島島との行き來、その他、学歴、年令、職業もある程度の影響を及ぼしていると見られる。

これらに対して、男女別、ラジオをきくか、きかないかはたいした影響を及ぼしていないようである。

なお、ほかの村の人といつも共通語で話している、と答えた人たちは「共通語を話す度合」がもっとも高く、ほかの村の人といつも固有の言語(非共通語)で話している、と答えた人たちは「共通語を話す度合」がもっとも低い。これは当然のことではあるが、上のような関係はきわめてきれいにあらわれているので、ほかの村の人とどういう言語で話しているかを聞くことは、「共通語を話す度合」を表現するひとつの方法になりうると考えられる。

また、村における外來者が多ければ多いほど、土地人の「共通語を話す度合」も高くなることが認められる。つまり、外來者は明らかに土地人に対して影響を及ぼしているのである。

村については、大賀郷がもっとも高く、以下、中之郷、末吉、三根、樫立の順に低くなる。

[土地人と外來者]

これから、いろいろな集團における「共通語を話す度合」の狀態を「K-図表」を使って表現する。

図1が示すように、土地人と外地人ないし内地人とのあいだにはいちじるしい差が見られる。外地人と内地人との差はそれほど大きくないので、

これから以後、二者をあわせて「外來者」として分類することが多い。

なお、全島200人に対するK-数値は57%である。すなわち、全島人の半数以上が「共通語を話せる者」と判定されたことになる。この57%という数字が日本の他の地点と比べたとき、どのような位置にあるかは現在まったく分らないけれども、おそらくそれほど低い方ではないと想像される。

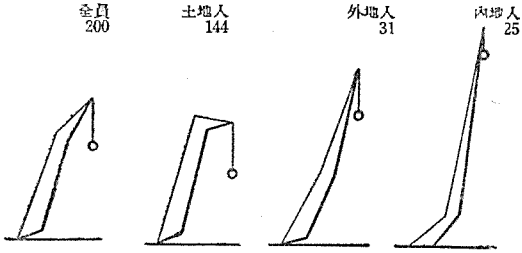


図1　土地人・外來者別

一般に図を見るときは、被調査者の人数と全体の形とを注意することが望ましい。土地人と全員との形は似ていることが多い。

〔村の比較〕

五つの村を
　全　員(図2を参照)
　土地人(図 3)
　外來者(図 4)
　純土地人*(図 5)

について比較すると、次のことが明らかになる。

（1） K-数値は、外來者の場合をのぞけば、つねに

大賀郷→中之郷→末吉・三根→樫立

の順に小さくなる。

（2） 外來者の場合をのぞけば、村のK-図表の形はいかなる集團から分析してもほぼ一定している。特に、土地人と純土地人との類似はいちじるしい。

図6が示すところによると、外來者の割合と土地人のK-数値(「共通語を話す度合」)とのあいだにはきれいな関係が見られる。つまり、外來者の

*「純土地人」というのは次のように定義される。「純土地人」とは、「土地人」のうちで言語形成期を送った村と現在住んでいる村とが同じ人を言う。
　この「純土地人」と「土地人」とは質的な差がないと認められるから、これから以後二者を分けることなく、「土地人」についてだけ集計する。

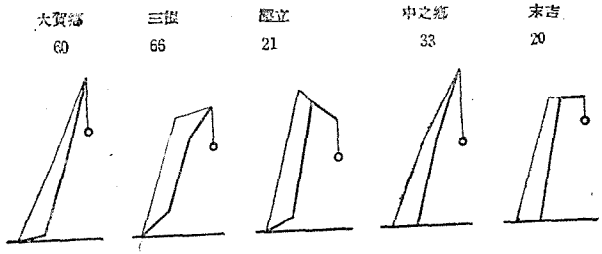


図2　村別（全員）

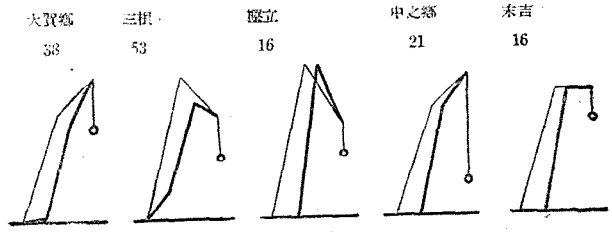


図3　村別（土地人）

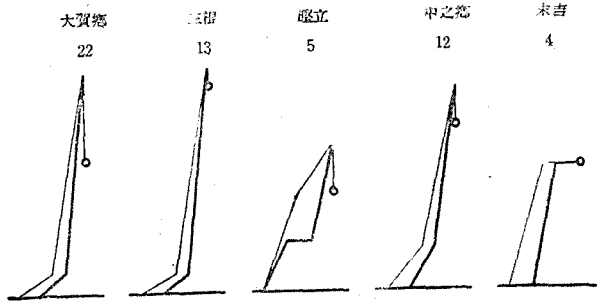


図4　村別（外來者）

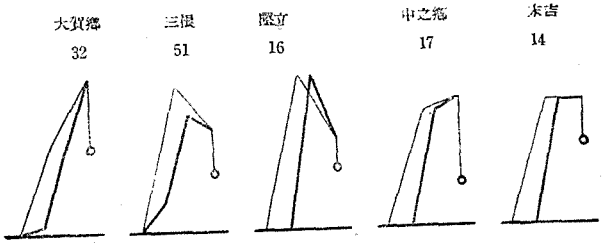


図5　村別（純土地人）

割合が多ければ多いほど K- 数値が高くなる。たとえば、大賀郷村は、外来者の割合が37%で五つの村のうち最高であり、土地人の K- 数値も最大である。図にはあげてないが、純土地人についても同じような関係が見られた。

〔ほかの村の人と話す言語〕

「ほかの村の知人とお話しになるときは、標準語でしょうか、島のことばでしょうか」(調査票の調査項目 8) にもとづいて、

全　　員(図 7)
土 地 人(図 8)
外 来 者(図 9)

について K- 図表を求めた。

その結果、項目 8 も共通語化を測るのにかなり信頼性があるように見受けられる。「ほかの村の知人といつも標準語を使う」と答えた土地人の K- 図表と「同じくいつも島のことばを使う」と答えた外来者の K- 図表との対立は印象的である。また、「使い分ける」集團と「いつも共通語を使う」集團とは、土地人と外来者とのあいだにそれほどの差を示さない。

すでに、(2) 1、において述べたように、項目 9(共通語を話す度合の判定)　われわれはこれによって K- 数値を計算している――と項目 8 とは、「共通語を話す度合」を表わす指標として大差のないことを述べたが、以上によってこのことはいよいよ明らかになった。

今後の調査にも、この種の項目はぜひつけくわえて、総合判定の資料にすべきであろう。

〔男女別比較〕

図10、11が示すように、男女別の差は、外地人をのぞいてはあらわれなかった。ただ、C 級(共通語を話さない、つまり、初対面のわれわれ調査者に対して方言でばかり答える人)は比較的女に多いように見える。

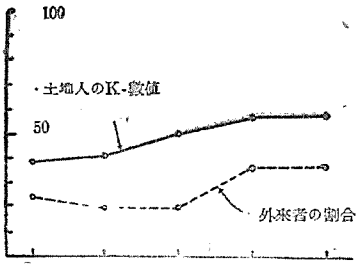


図 6 村の比較(外來者の割合)

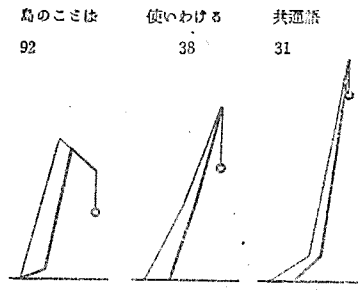


図 7 ほかの村の知っている人と話すときは島のことばか共通語か〔項目 8〕(全員)

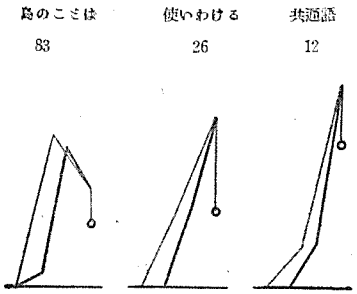


図 8 ほかの村の知っている人と話すときは、島のことばか共通語か〔項目 8〕(土地人)

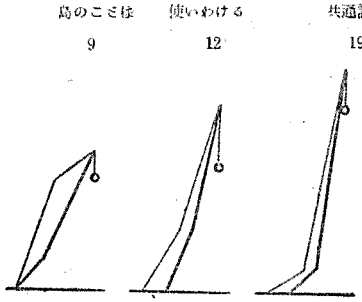


図 9 ほかの村の知っている人と話すときは、島のことばか共通語か〔項目 8〕(外來者)

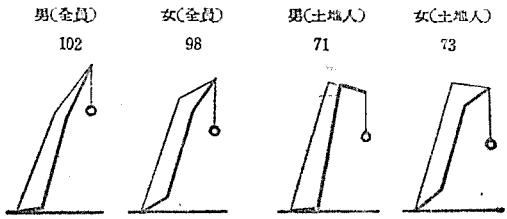


図10 男女別(全員)(土地人)

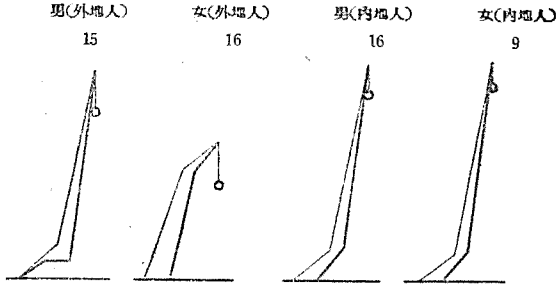


図11　男女別(外地人)(内地人)

〔年齢別比較〕

図12、13、14 が示すように、年令別に各集団の「共通語を話す度合」を比較すると、30才以下、30才代、40才以上の3段階の区別がややいちじるしい。社会的活動がもっとも盛んな30才代がもっとも高い K- 数値を示し、30才以下および 40 才以上はより低い K- 数値を示す。

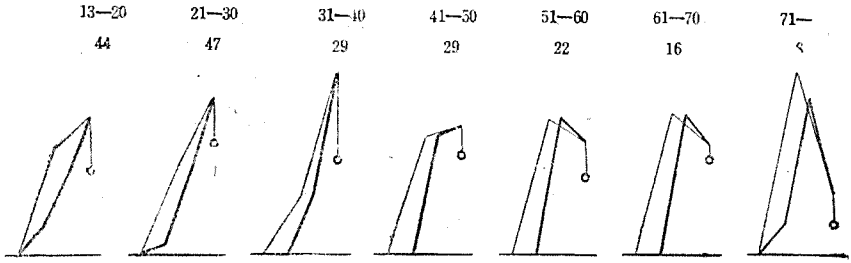


図12　年　令　別　(全員)

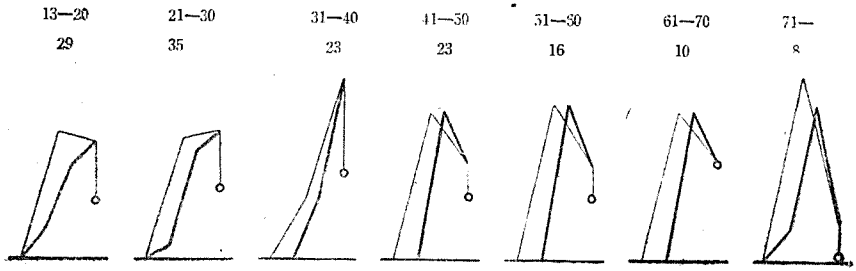


図13　年　令　別　(土地人)

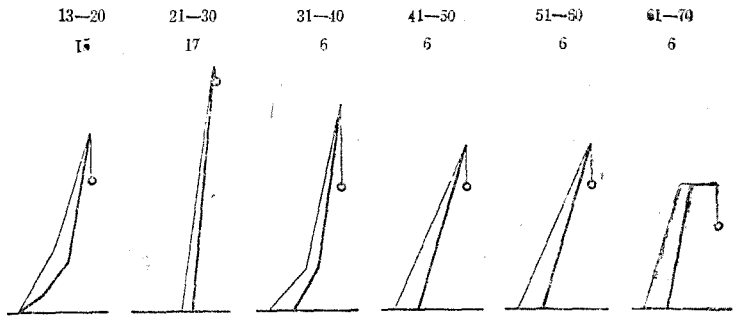


図14 年 令 別 (外来者)

〔職 業 別 比 較〕

図15、16、17が示すように、自由業と農業とのあいだには、それぞれの集團について、有意な差が見られる。なお、農業が全職業の65%を占め、ほかの職業の%はいずれも低い。「村の比較」のところで述べたように、職業別の集團について見ても、外来者の割合と K- 数値とのあいだにはきれいな関係が見られる (図18)。この関係は分類のしかたによっては疑わしい場合もあるけれども、原則としては、外来者の割合は「共通語を話す度合」の重要な指標になるであろうと思われる。今後の研究をまたなくてはならない。(工業その他 は2人しかないので、とりあげなかつた。)

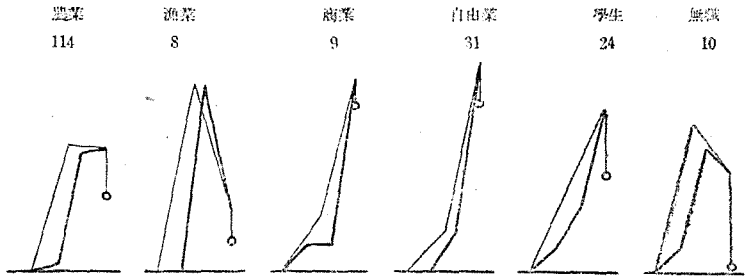


図15 職 業 別 (全員)

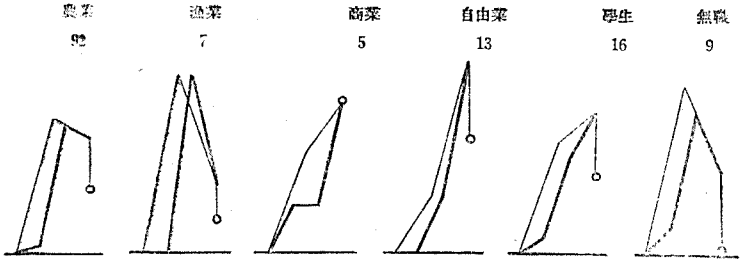


図16 職 業 別 (土地人)

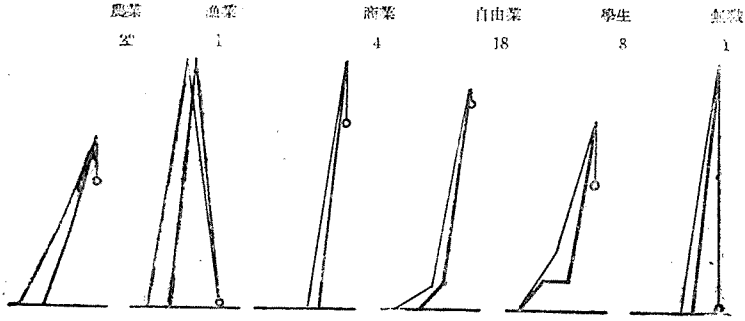


図17 職 業 別 (外來者)

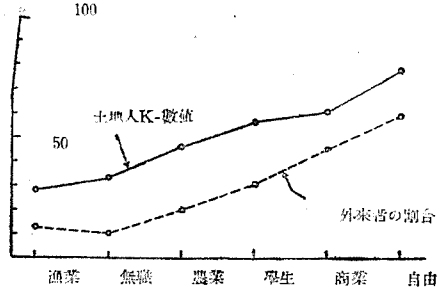


図18 職業別比較 (外來者)

〔學歷別比較〕

図19、20、21が示すように、学歷が高くなるにしたがって K-数値も大きくなることが各集團について認められる。

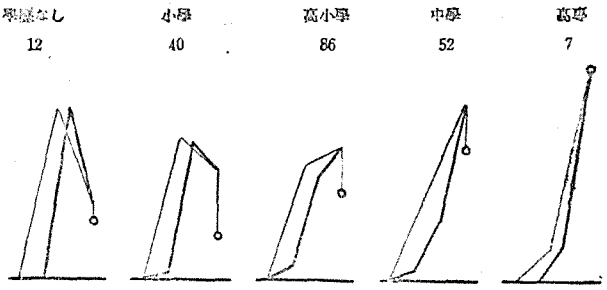


図19 学 歴 別 (全員)

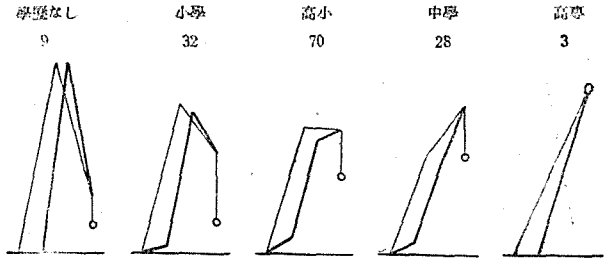


図20 学 歴 別 (土地人)

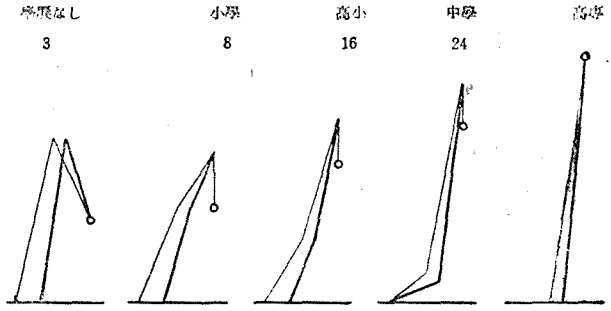


図21 学 歴 別 (外來者)

〔ラジオの影響〕

図22、23、24の示すところによると、ラジオをよくきく集團とラジオをきかない集團とのあいだにはたいした差を認めることができない。これはわれわれの常識的な予想に反する。

八丈島の特殊性によるか、ラジオがはたして「共通語を話す度合」に影響しないか、今後の研究にまたなければならない。

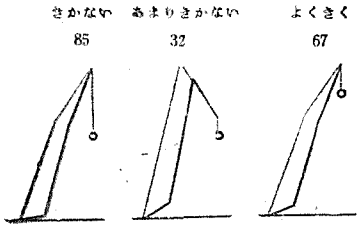


図22　ラジオの影響(全員)

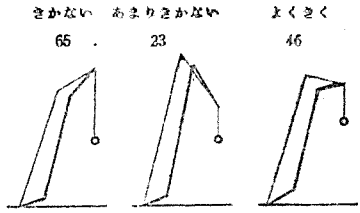


図23　ラジオの影響(土地人)

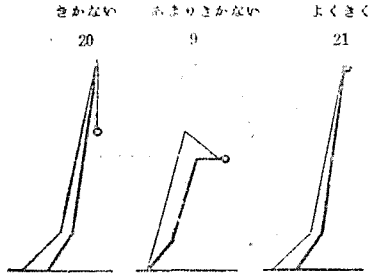


図24　ラジオの影響(外来者)

〔内地との行き来による影響〕

われわれは、「クニ（内地）へ行くことがありますか」という質問によって内地との行き来の度合を調べた（調査票の調査項目16）。その度合を次の5段階に分けた。

（i）　全然行かない

（ii）　ほとんど行かない

(iii)　あまり行かない（年に1回以下）

（iv）　時時行く（年に1回以上数回）

（v）　よく行く（年に数回）

上の五つの段階の集団について「共通語を話す度合」を見ると、図25、26、27が示すとおりである。五つの集団のうち、すくなくとも、「全然行かない」集団と「よく行く」集団とのあいだにはつねに差が見られる。しかし、一般に、この要因はあまり影響を及ぼしているとは思われない。

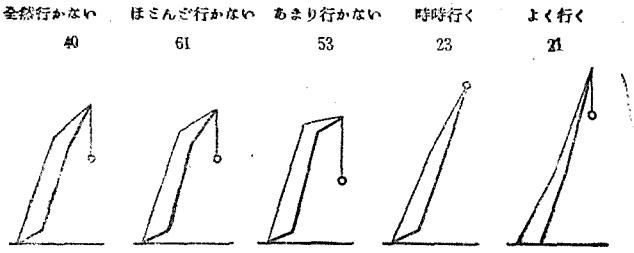


図25　内地との行き来(全員)

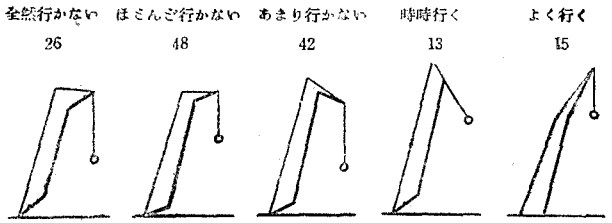


図26　内地との行き来(土地人)

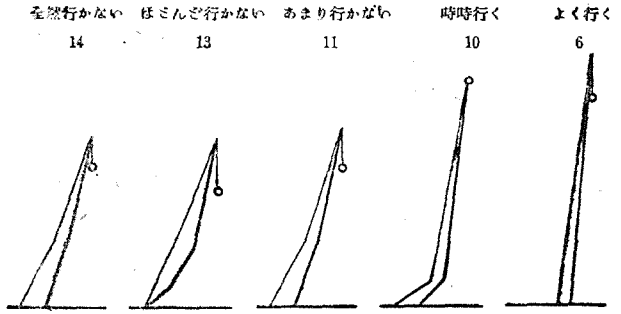


図27　内地との行き来(外来者)

〔島島との行き来による影響〕

われわれは、「ほかの島へ行くことがありますか」と質問し、その反應を次の3段階のいずれかに入れた（調査票の調査項目15)。

（1）　行かない

（2）　時時行く

（3）　よく行く

上の三つに対應する集團のK-図表は、図28、29、30である。全員、土地人、外來者それぞれについて総人数がことなるのは、調査もれないし調査不能があるためである。

三つの段階の集團のあいだには一應きれいな関係を見ることができる。

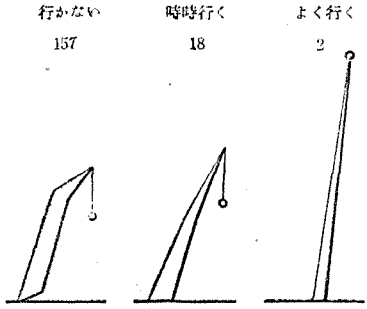


図28　島島との行き來(全員)

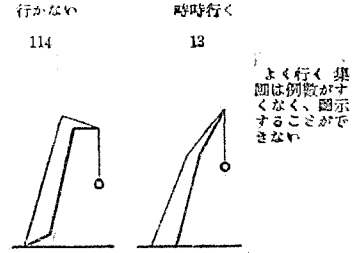


図29　島島との行き來(土地人)

「家で使う言語」

われわれは、おもにA⁺級とA級との全員およびB級の大部分に対して、「家でも標準語を話していますか」と質問し、その反應を、

（1）　非共通語(島のことば)

（2）　まじり

（3）　共通語

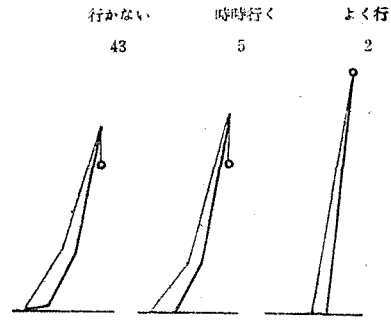


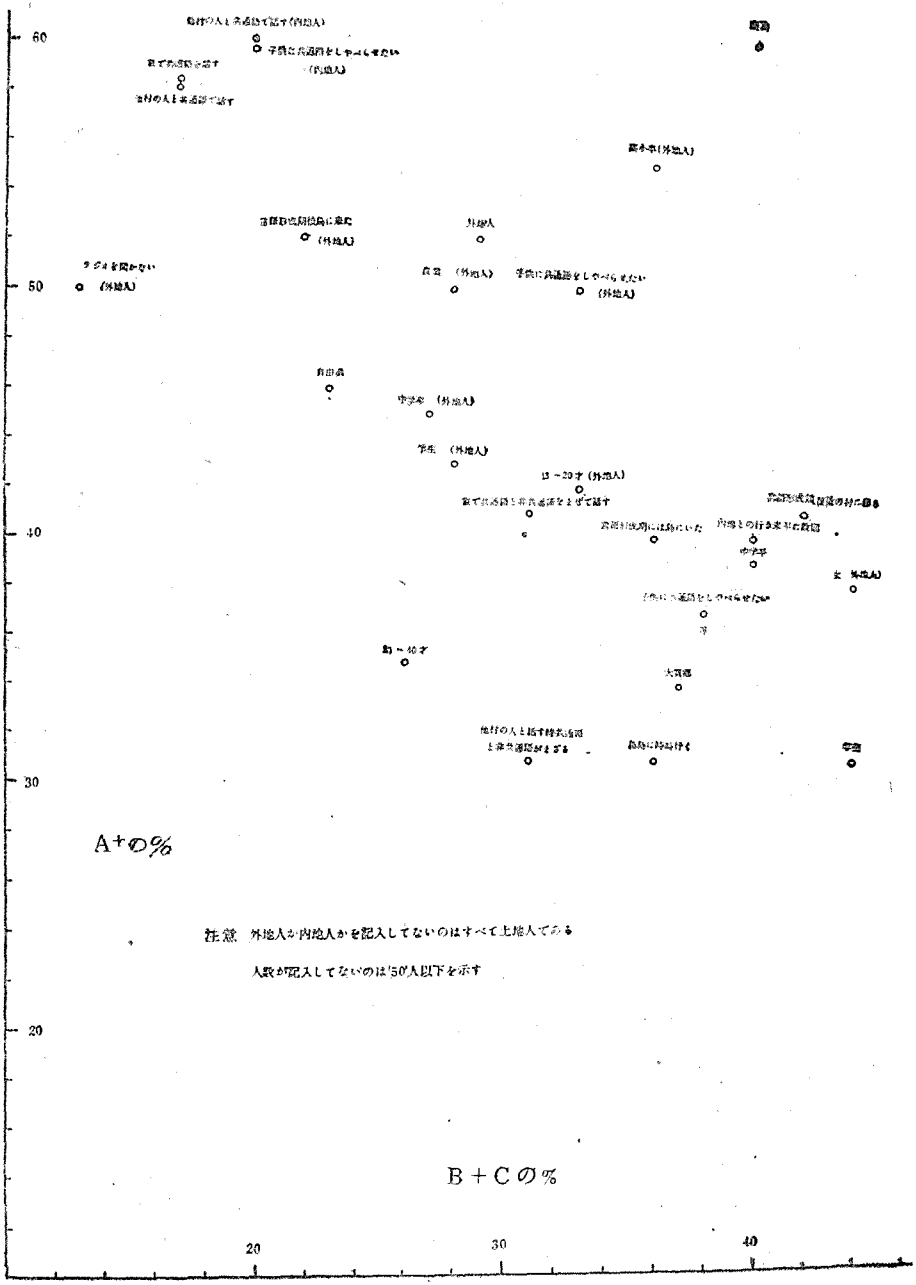
図30　島島との行き來(外來者)

の3段階のいずれかに入れた（調査票の調査項目21)。

上の3段階に対應する集團のK-図表を求めれば、図31、32、33の示すように、きれいな関係を見ることができる。

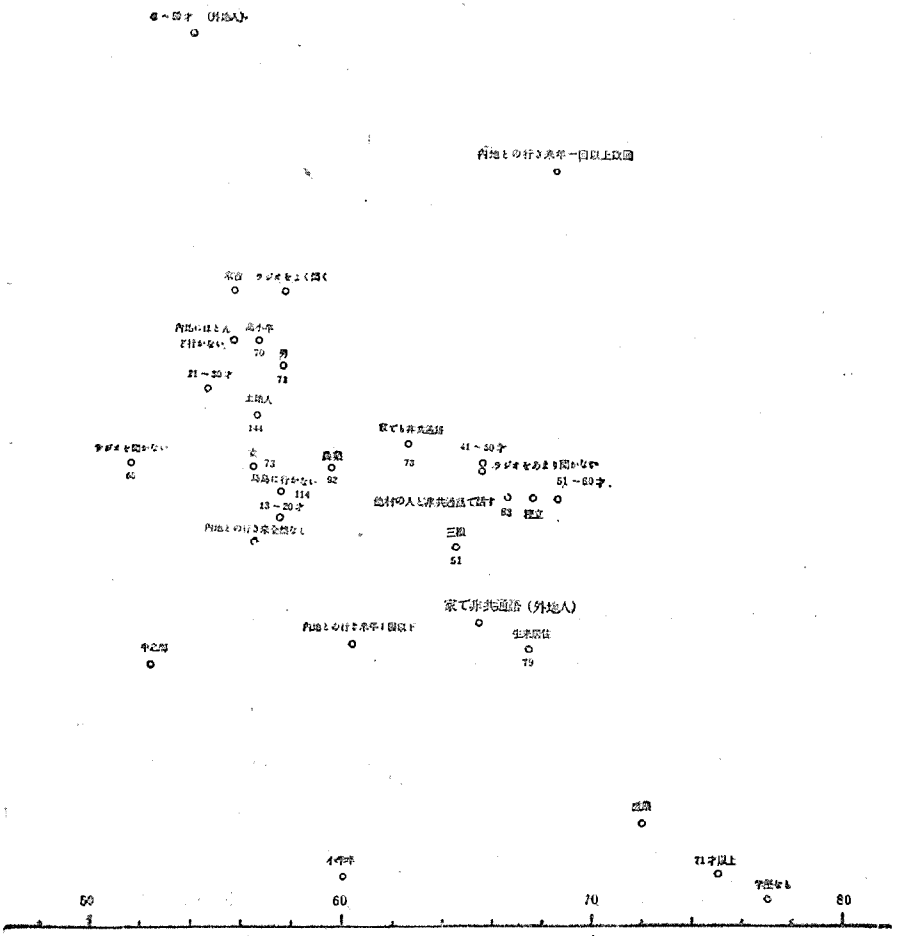
この節の結果をまとめると次のようである。

（i）「ほかの村の人と話す言語」と「家で使う言語」とは、「判定」ともっとも相関が高い。おそらく「共通語を話す度合」の同じ面を表現してい


60
50
40
30
20
20
30
40
A+の%
B+Cの%
注意 外地人か内地人かを記入してないのはすべて土地人である
人数が記入してないのは50人以下を示す

大ぐらふ－Ⅱ

A⁺　(特に正しい共通語)の割合と
B＋C (非共通語)の割合との相関図



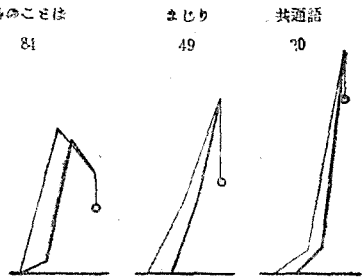


図31　家で使う言語(全員)

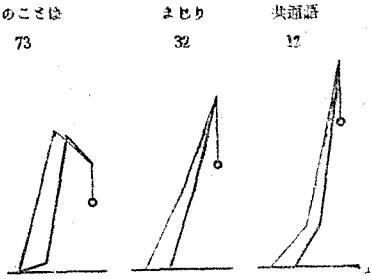


図32　家で使う言語(土地人)

るのであろう。

(ii)　土地人と外来者とは、あきらかに質的に異なる。村の違いもかなりいちじるしい。

(iii)「内地との行き来」「島島との行き来」のような要因はあまり重要とは思えない。

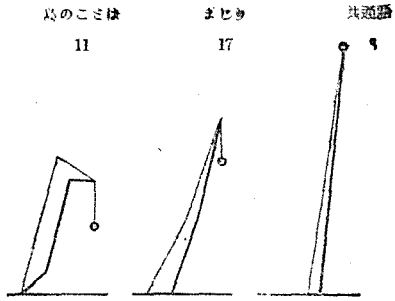


図33　家で使う言語(外来者)

(iv)　ラジオは「共通語を話す度合」にそれほど影響しないようである。

(v)　男女による差は認められない。

年令、職業、学歴は、常識的な差をひき起こすと思われる。

(4)　特に「正しい共通語」について

いままで「正しい共通語」、すなわち、A^+ 段階についてはあまりふれなかったが、いま、A^+ と B+C との関係を見ると、大ぐらふ-Ⅱが示すように、直線的関係であることが明らかである。つまり、集團について、A^+ の%が大きくなれば B+C の%は小さくなり、A^+ の%が小さくなれば B+C の%が大きくなる、という関係が見られる。

(5) 非共通語で反應した語の割合

「共通語を話す度合」を表現する方法として、われわれはとりあえず、いわゆる「判定」を使って來た。これはいわば主観的な方法であるが、これに対する客観的な方法として、新たに「非共通語で反應する語の割合（点数）」をとりあげ、これによって要因別の分析を試み、さらに「判定」との関係を種種の面から分析してみた。その結果、ふたつの点をのぞけば、「判定」も「点数」もともに「共通語を話す度合」の指標として役立つことが明らかになった。これは、われわれの分析における主観的な方法と客観的な方法とが密接な関係にあることを示すものである。今後の調査においても、このふたつの方法を併用して判断の正確を期すべきである。

1. 指標とするまで

いままでの考察では、「共通語を話す度合」を表わすのに、もっぱら (2) で定義した「判定」を使ってきた。この方法は、個人の「共通語を話す度合」に質的な段階を認め、各調査対象を調査者の主観でいずれかの段階に入れるのであった。集團に対しては、その中に、上記の各段階の者がどんな割合で構成されているか、を見ることにより、「共通語を話す度合」を表現した。

このような主観的方法は、調査者が変れば判定が変り得るから、指標としてまだ完全なものとは言えない。集團をとり上げた場合は、判定の変動はいくぶん相殺されるだろうからまだ安全であるが、それでも複雑な統計分析をするのには心配である。

もし知能指数のように「共通語を話す度合」を数量的に表現できたら、そしてこの「度合」の数値が客観的に得られるようになったら、上述した主観的方法の欠点は補うことができる。統計分析をこれ以上進めるためには、このような数量化はぜひ行わなければならない。

土地人と外來者　(全員)
200

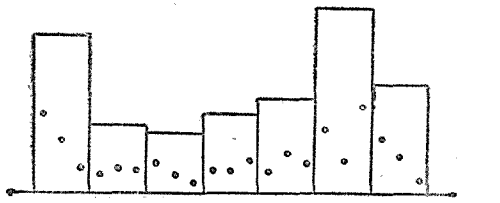


図　34

土地人と外來者　(土地人)
144

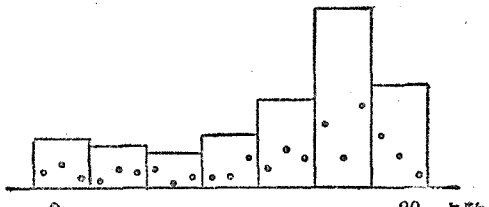


図　35

土地人と外來者　(外來者)
56

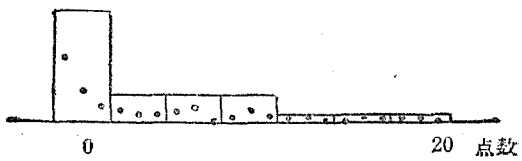


図　36

主観的方法とこのような客観的方法とを併用するならば、「共通語を話す度合」の表現に、一段と妙味が加わることであろう。

そこで、この節では、数量的に表現するひとつの方法をとり上げ、以下の分析を進めて見たい。

さて、われわれは新しい指標として、「非共通語で反應した語の割合」を使うことにした。すなわち、調査票の調査項目23—56のうち次の20項目について、反應が非共通語と出たのを1点に数え、合計点をとり、これについて分析してみた。

[1]大根 [2]來年 [3]俵 [4]あわもち [5]てぬぐい [6]先生 [7]かえる [8]苗植え [9]ていねい [10]寒い [11]しかる [12]歩く [13]額 [14]死んだ [15]急いで [16]行くなら [17]行こう [18]赤いけれど [19]下駄を [20]ここへ

もともと、これらの20の語は五つの村の違いを比較するために選んだのであるが、ここでは「共通語を話す度合」を測る指標として利用した。

なお、調査もれ、記載もれおよび調査不能などの理由によって「不明」のものは、共通語で答えたとみなし、0点として数えた。

また、今後ときどき使われる「点数」という語は、「非共通語で答えた語の割合」のことをさしている。

2. 要因別の分析

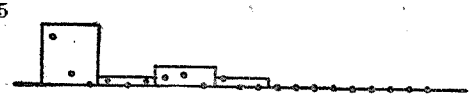
〔土地人と外來者〕

図34—41の図表は、高さ 0.5 mm を1人として「非共通語で反應した語の割合(点数)」の分布状態を表わし、これを3点間隔でまとめた度数分布図である。

図34の示すところによれば、傾向として山がふたつあり、これが土地人と外來者とで大体わかれることが図35と36とで認められる。外來者をさらに内地人（図37）と外地人(図38)とに分け、図36をも參照して考えれば、両者のあいだにはいちじるしい差はないようである。

土地人と外來者 (外來者中內地人)

25



0 図37 20

点数

土地人と外來者 (外來者中內地人)

31

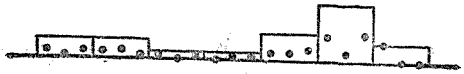


0 図38 20

点数

学歷別 (小学以下) (土地人)

41



0 図39 20

点数

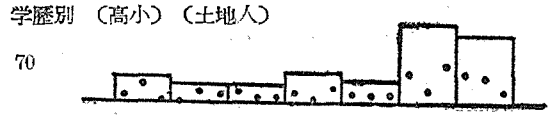


図40

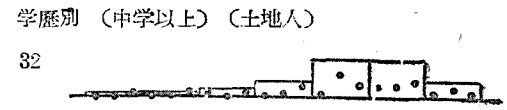


図41

[學歷別比較]

次に1例として土地人を学歴で3段階に分け、度数分布図を画いてみた。この結果からは、K-数値ほどの違いは見出されない。図39、40、41参照。

3. 「判定」と「点数」との関係

「共通語を話す度合」を表現するのに、われわれは第1指標と第2指標とを使うことができるようになった。では、第1指標、すなわち「判定」と第2指標、すなわち「点数」とのあいだに、はたして関係があるかどうか。もし、その関係がそれほどいちじるしくないならば、どちらが表現方法としてより適切であろうか。

[被調査者全員について]

まず、被調査者全員についての相関図表(図42)を見ると、7人の調査者が思い思いに、つまり主観的に判定したにもかかわらず、いちおう成功したと見られる(相関係数 0.64)。

第1指標と第2指標との相関(全員)

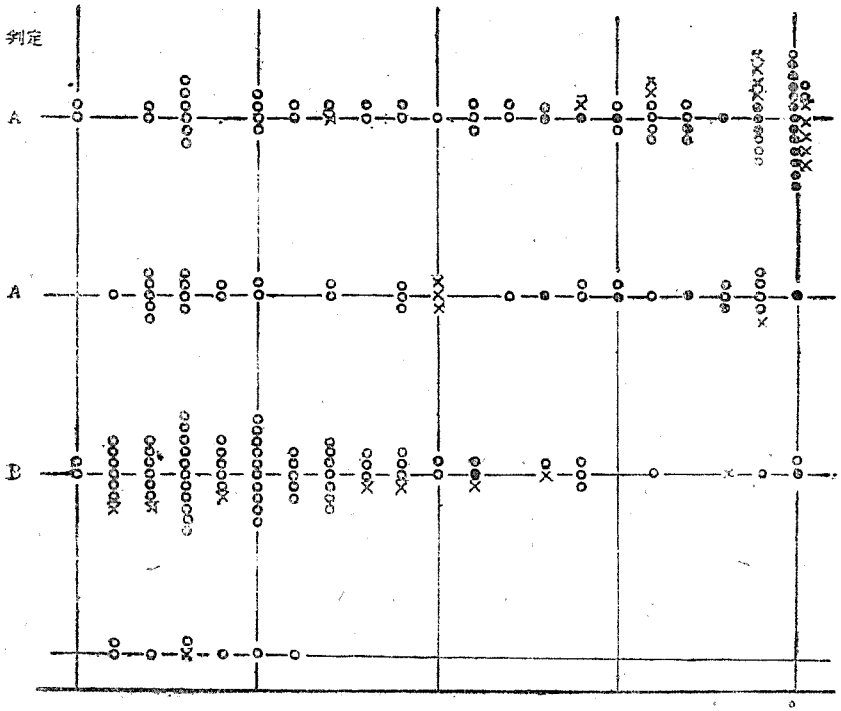


図42

◎ 内地人
○ 土地人
× 外地人

なお、土地人でA級と判定された者で点数15点以上を示す一群があることは注目される。これらの人人は共通語も非共通語も自由に使い分けることができると予想される。

[判定] の各級の平均点

「判定」の各級に属する個人の「点数」の平均値は、図43が示すように、でこぼこがなく、満足できる結果である。

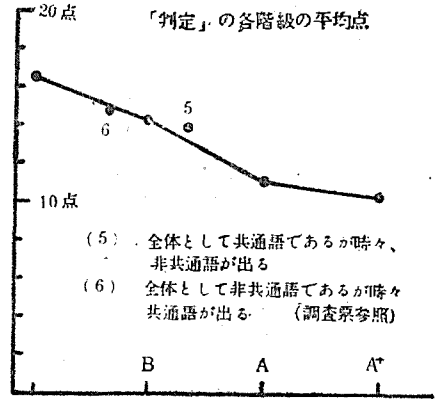


図 43

「非共通語の点数」により分数した時のK－数値

横軸はK－数値

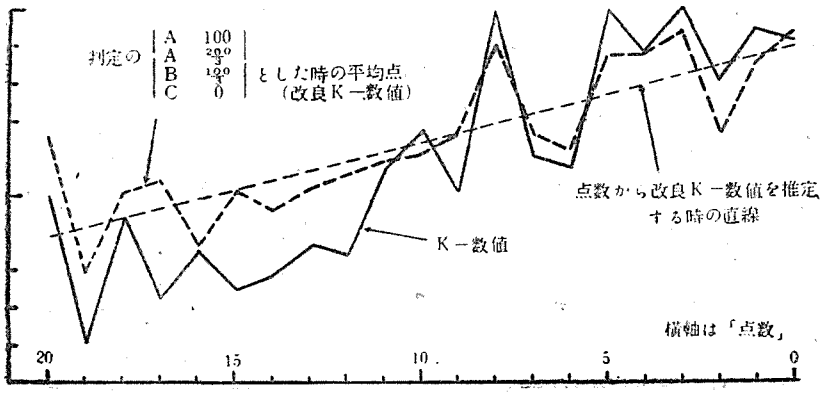


図 44

[「点数」から見た「判定」]

今度は、逆に、「点数」から「判定」を見ると図44の示すとおりである。つまり、ある「点数」を示す集團の「共通語を話す度合」を、K-数値および改良 K- 数値(C:0 点、B: $^{100}/_{3}$ 点、A: $^{200}/_{3}$ 点、A+: 100 点としたときの平均値)によって表わし、その分布を見た。図 44 の示すところでは「点数」が高くなれば高くなるほど「共通語を話す度合」は低くなり、やはり満足できる結果と言えよう。

また、次のようなグラフも画いてみた。

すなわち、土地人全員を

(a) 非共通語で反應した語の數が13以上(13という数に特別な意味はない。)

(b) 〃 〃 12以下 「すなわち(a)以外」

の2組に分け、各組の K- 数値を「非共通語で反應した語の數が13」という縦線上にとり、(a) 組は點線で、(b)組は實線でつないだ。

實線と點線とがまじわらないのはいい結果であるが、兩線の間隔の極大値が現れないのは、いささか期待はずれであつた。

實線の右が下り、點数の左が上るのは面白くない。

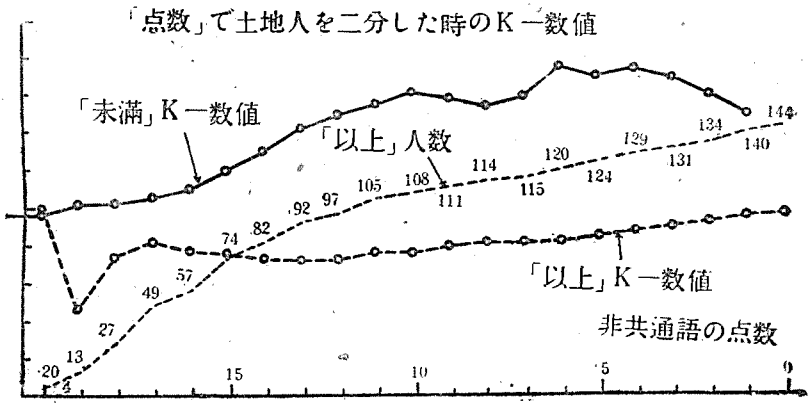


図 45

[要因別の分析]

<土地人と外來者>

われわれは、「共通語を話す度合」を表わすのに、二つの方法を得ることができた。この両者による表現で、つぎに、要因別の分析をしてみよう。

まず、土地人と外來者とを比較したのが図46である。この図では二つの方法の一致がきれいに表われている。

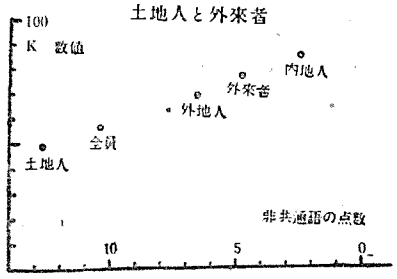


図 46

〈村 の 比 較〉

村別に、K- 数値と「点数」との関係を見ると、大賀郷はK-数値ももっとも大きく、非共通語の点数ももっともすくない（つまり、もっともよく共通語化しており、かつ、非共通語をあまりしゃべらない）。中之郷村がそれにつぎ、椌立村はK- 数値がもっとも小さく、「点数」もすくないほうではない。三根村の「点数」がやや高いのが注目される。

〈年 齢 別 比 較〉

年令別にK- 数値と「点数」の平均値との相関関係を見ると（図84）、31才—40才がK- 数値ももっとも高く、「点数」の平均値ももっとも小さい。41才—50才、51才—60才、61才—70才、71才以上の集團はだいたい同じ所にかたまり、K-数値が低い。13才—20才、21才—30才の集團は「点数」の平均値がもっとも高い。

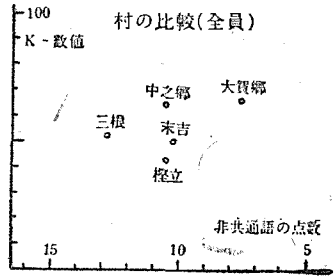


図 47

K-図表の形の比較だけでは、31才—40才に対して13才—20才も41才以上もともにより低い K- 数値を示すことしか分らなかったが、「点数」の平

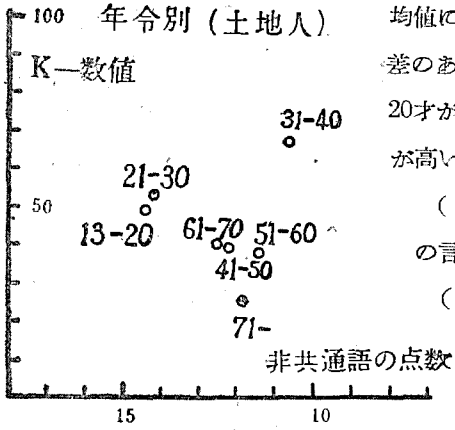


図48

均値について見ると両者のあいだには差のあることが明らかである。13才—20才が41才以上よりも平均して「点数」が高いが、これは、

（1） 日常生活ではより多く固有の言語（非共通語）を使っている

（2） 隠しだてなく、知っている非共通語を答える

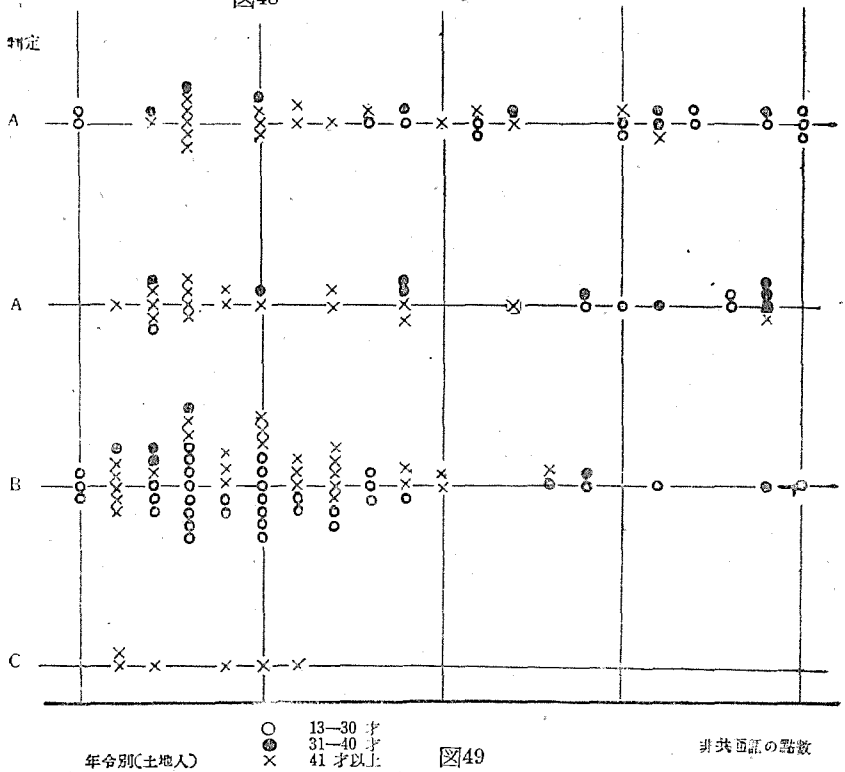


図49

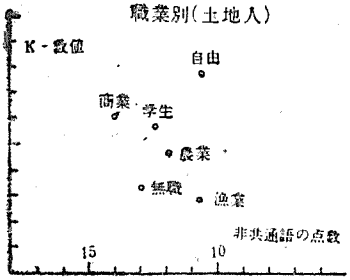


図 50

のいずれかのためであろう。いや、むしろ、そのいずれの原因も利いていると思われる。

図49 における、「判定」A で「点数」の高い一群では、年令が41才以上の者が優勢であることが明らかになった。

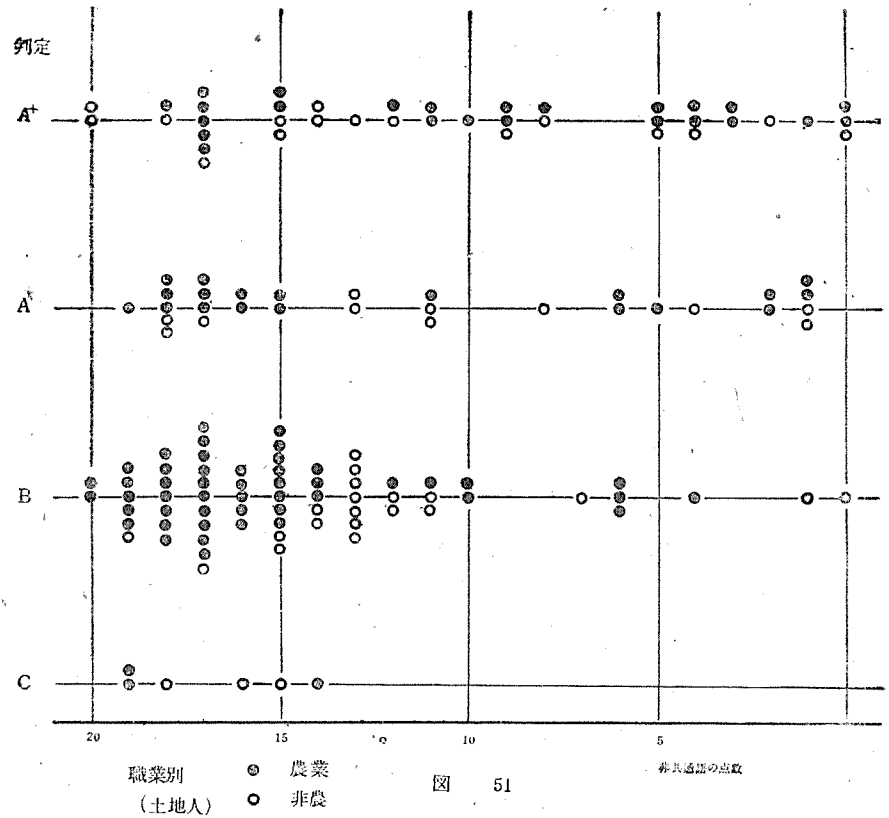


図 51

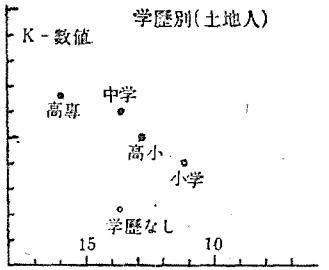


図 52　非共通語の点数

〈職業別比較〉

職業別にK-数値と「点数」の平均値との関係を見ると、図 50 が示すように、自由業はK-数値でもっとも高く、「点数」の平均値でもっとも低く、特にめだっている。これに対して、農業はK-数値も、より低く、「点数」も、より高い。

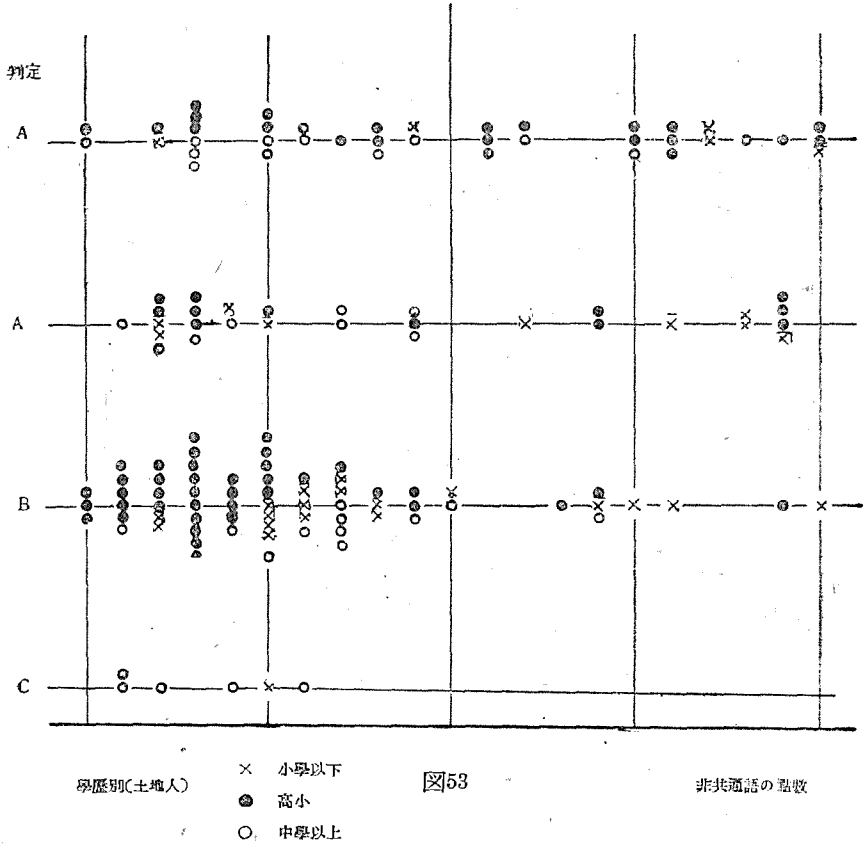


図53

〈学歴別比較〉

学歴別にK-数値と「点数」の平均値との関係を見ると、図52が示すように、むしろ逆の関係に分布する。すなわち、高専卒はK-数値がもっとも高いにもかかわらず、「点数」もっとも高い。以下、学歴なしをのぞけば順次逆の関係に並んでいる。

これはおそらく、高専卒の「非共通語の点数」の高いのは調査の趣旨をよくのみこんでいて、こちらの求める非共通語をよく答えたためであろう。

[「判定」も「点数」もともに指標として役立つ]

以上、種種の面から第1指標と第2指標との関係を見たが、次の二つの点をのぞけば、指標は二つとも「共通語を話す度合」の指標として役立つ。

(1) 「判定」がAで「点数」の高い一群のあること

(2) 学歴別ではむしろ逆の相関が見られること

しかし二つの指標は独立の表現方法ではなく、だいたい同等な一面をとり出したものと言えよう。

今後の調査においても、ふたつの方法をあわせ用いるならば、判断の正確さを増すことができると思われる。

(6) 共通語ないし非共通語で反応した集団の「共通語を話す度合」

この節では、「点数」を数えるのに使ったひとつひとつの語について、土地人と外来者、さらに共通語で答えたか非共通語で答えたか、によって分類してK-図表を画いておいた。

前節で考察した、「共通語を話す度合」の指標としての「点数」は、つまるところ、ひとつひとつの語が共通語形で答えられたかどうかということに帰せられる。したがって、各語について両者のK-図表を画いてみれば「点数」法の意味がさらによく理解され、今後調査するときにどのような語を「点数」法に用いたらよいかを決定するのに参考となるであろう。

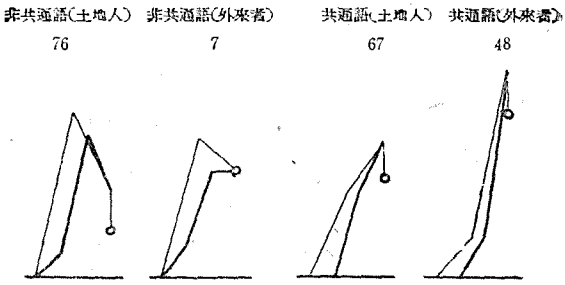


図54　大根

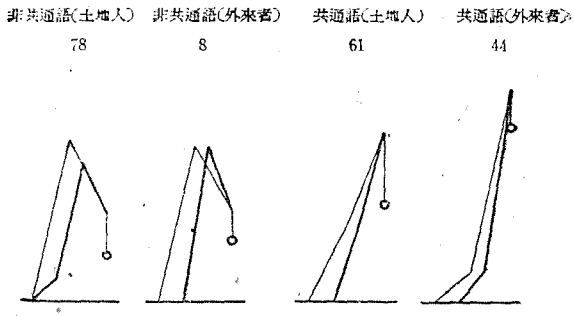


図55　來年

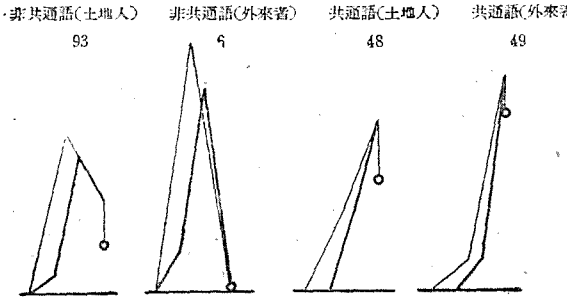


図56　俵

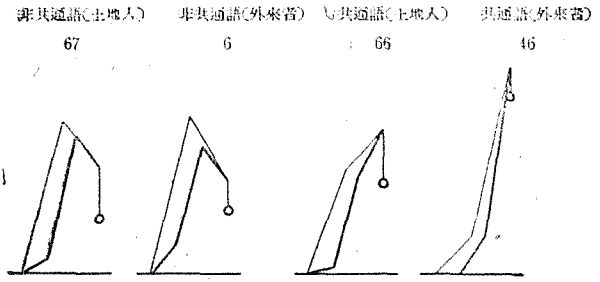


図57　あわもち

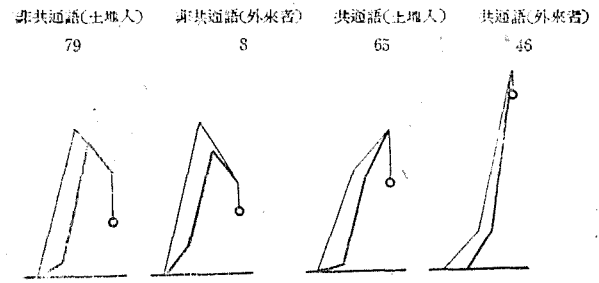


図58　てぬぐい

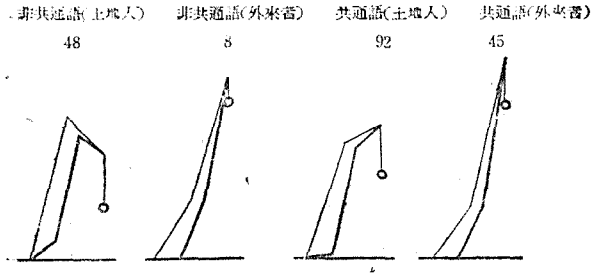


図59　先生

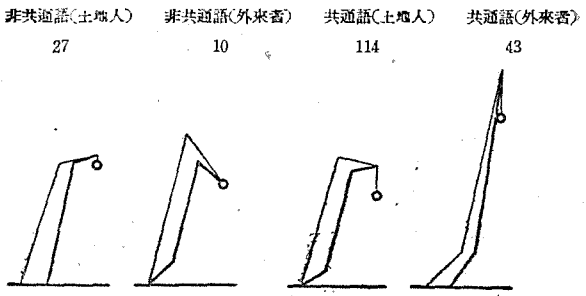


図60　かえる

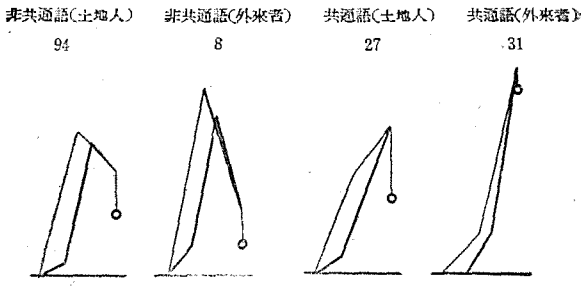


図61　苗植え

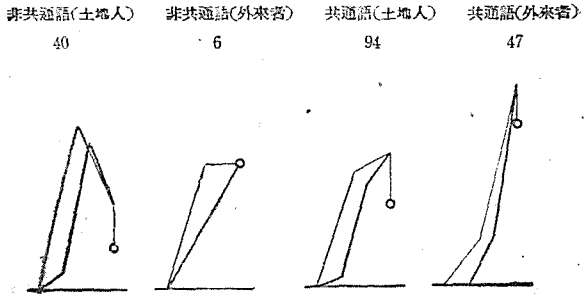


図62　ていねい

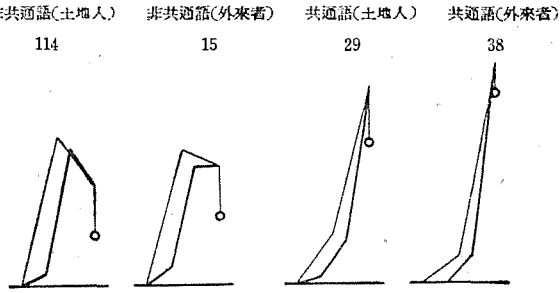


図63　寒い

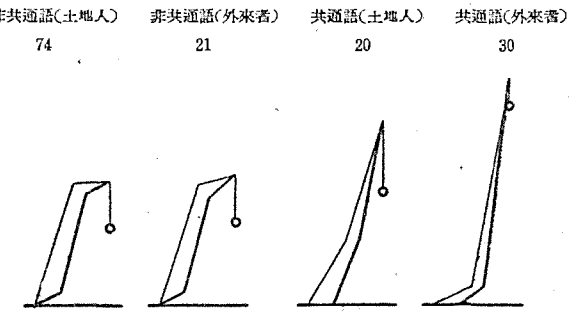


図64　しかる

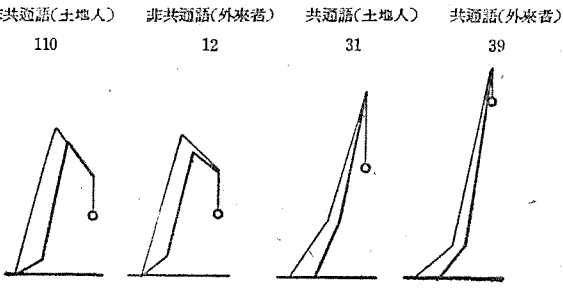


図65　歩く

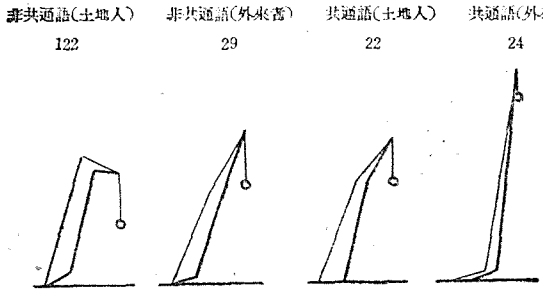


図66　額

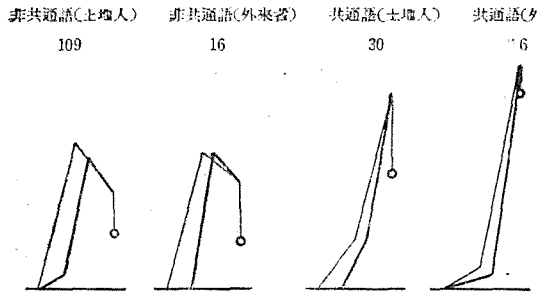


図67　死んだ

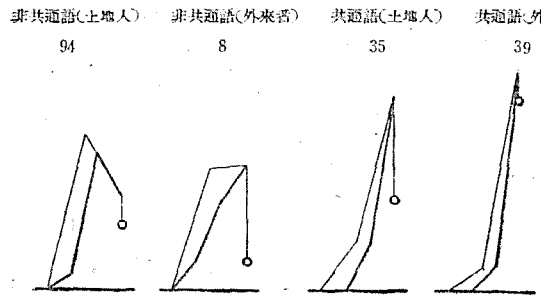


図68　急いで

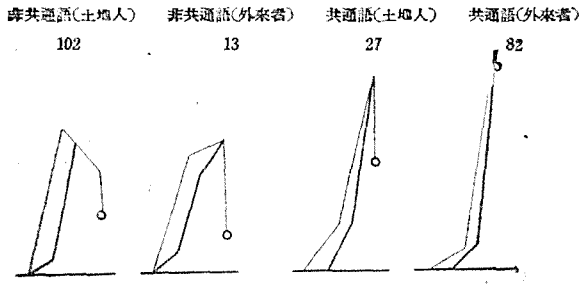


図69　行くなら

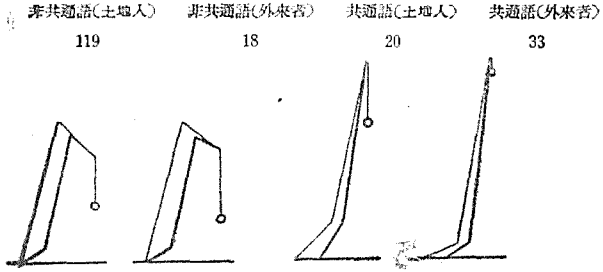


図70　行こう

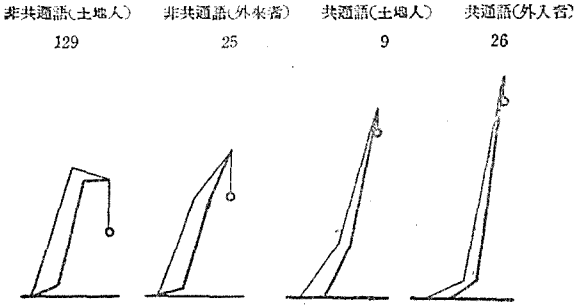


図71　赤いけれども

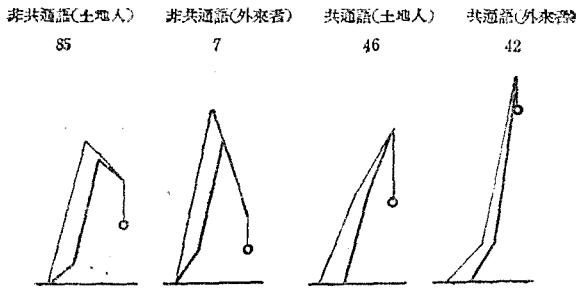


図72　下駄を

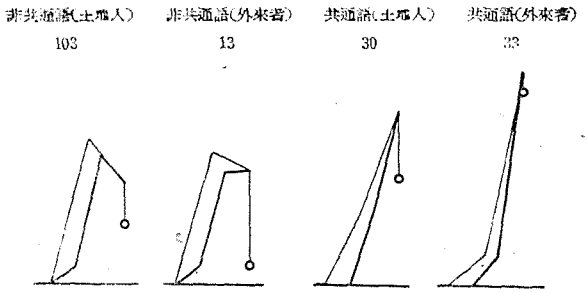


図73　ここへ

語の反応て分けた時のK－数値

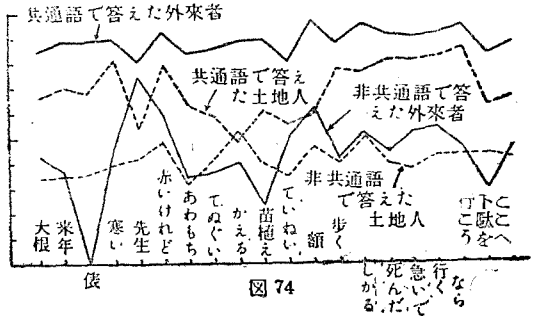


図 74

(7) 要因としての居住経歴

以上(2)から(6)までにおいて、「共通語を話す度合」を表わすのにふたつの方法を考え、それによって分析を進めてみた。その結果、いくつかの要因を見ることができたが、さて、そのほかに重要な要因はないかと考えてみた。そこで、まず考え浮ぶのは、調査の最初において仮定した「言語形成期」の影響である。ここでは、「言語形成期」についていろいろな面から分析を試みた結果、予期に反して、これがさほど重要な要因ではなく、むしろ、島外に出たか出ないかということが重要な要因であることを知るに至った。

1. 言語形成期は重要な要因か

居住経歴を問題にする意味は次のとおりである。

（1） 居住経歴は「共通語を話す度合」を決定する要因としてもっとも強いもののひとつではないか

（2） 特に言語形成期は「共通語を話す度合」を決定する重要な要因ではないか

われわれは調査票の調査項目で居住経歴について質問している。予定した五つの反応のうち同次元の四つを次のように修正し、整理した。

1. 生れてから今までずっと、ないしほとんど（疎開、入営など以外は）ここにいる(生来居住者)
2. 言語形成期（5才—13才)の全部ないしほとんど（70%以上）をここで過した（言語形成期居住者)
3. 言語形成期の全部ないしほとんどをここで過さなかったが、その前後はここにいた（言語形成期前後居住者)
4. 言語形成期後にここへきた（言語形成期後居住者)

調査の結果は全島で

経歴	1	2	3	4	計
	88人	51	14	63	216

經歷	1	2	3	4	計
土地人	88	51	2	13	154
外地人	0	0	10	25	35
内地人	0	0	2	25	27

土地人のうちに經歷の 3, 4 があらわれたのは、島内で住所をかえた者があるためである。なお、1+2 は「純土地人」である。經歷の 3 に該当するものは外地人をのぞいて目立たない。

言語形成期は言語のかたまる時期で、この時代の言語生活（どういう言語の行われる土地に住んでいたかをも含む）は後年までなんらかの影響を残すと一般に考えられている。今回の調査ではこの時期をかりに 5才—13才（數え年）の期間とした。5 才からとしたのは、満 3才—4才 ごろから一般に遊び友達をもち、遊び友達から言語的影響を強く受けると考えたからである。13才を上限にしたのは、初等教育の終る時期で、しかも11才—13才のころには別な面で言語がかたまると考えられたからである。たとえば、アクセントがかたまるのはこのころであり、また、このころ他の土地へ移ると、その土地の言語の影響を強くうける（13才ぐらいからのちに移る場合はそんなに影響をうけない）ことが一般に知られている。

さて、われわれは、言語形成期にどこに住んでいたかで分けた土地人と外來者との間に、質的な差を見ることができた。

ところで、言語形成期にどこに住んでいたかということが純粋に「共通語を話す度合」を決定する要因として大きいものならば、次のことが期待される。

（1） ひとしく言語形成期を八丈島で送った經歷 1 と經歷 2 とはわれわれの表現方法で同じ反應を示すであろう。

（2） 經歷 2 と經歷 4 との間に、あきらかな一線が引かれるであろう。

これに対してどのような答が出るか、いろいろな表現により、いろいろ

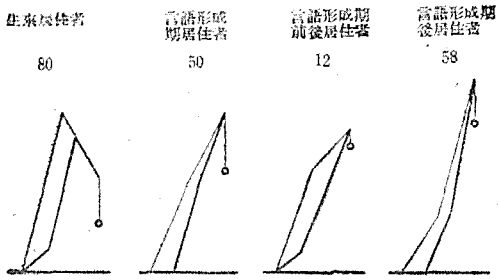


図75　居住経歴(全員)

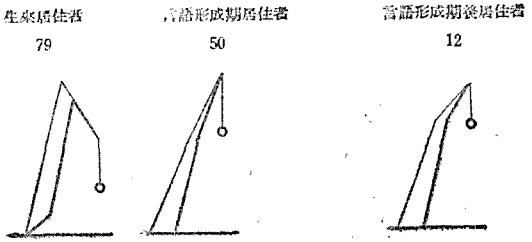


図76　居住経歴(土地人)

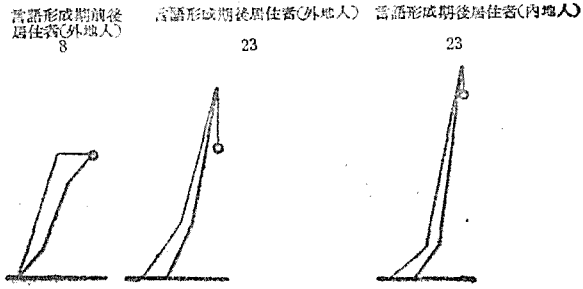


図77　居住経歴(外來者)

全員＝(全経歴) 216

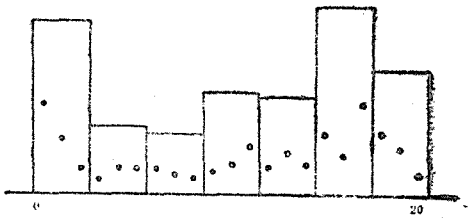


図　78

生来居住者
(全員中) 88

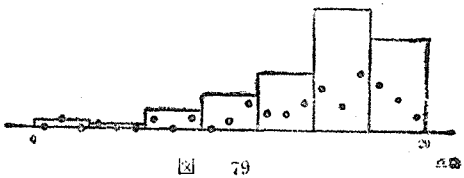


図　79

言語形成期居住者
(全員中) 51

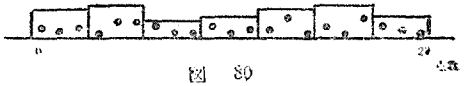


図　80

言語形成期後居住者
(全員中) 14

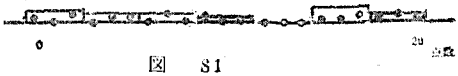


図　81

言語形成期後居住者
(全員中) 63

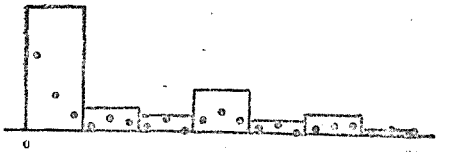


図　82

な要因について検討することにしよう。

2. K-図表による表現

K-図表を居住経歴別に、全員および土地人について画いて比較すると、経歴1と経歴2とのあいだには明らかな違いが認められ、かつ、経歴2と経歴4とのあいだの違いよりも大きいことも明らかである。(図 75—77)

3.「点数」による表現

「非共通語の点数」によって経歴別に度数分布図を画いてみた(図78—82)。

これらの度数分布図から、点数のふたつの山は経歴1と経歴4とがおもにつくっていること、および、経歴2は水平にもちあげるだけであることがわかる。

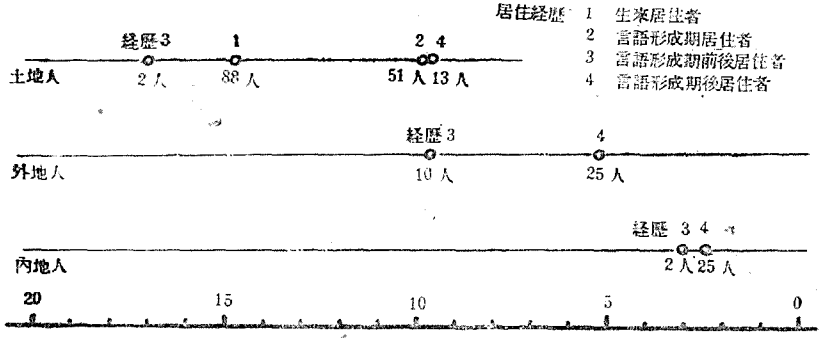


図 83　　居住経歴別平均点

4. 相関図表による表現

K-数値と「非共通語の点数」との相関図表によって、土地人の経歴分布を見ると、図84、85の示すとおりである。

図84によれば、言語形成期居住者(経歴 2)と言語形成期後居住者(経歴 4)とはほとんど違いなく、これらの集団と生來居住者(経歴 1)とのあいだには明らかな違いが認められる。

図85も、言語形成期居住者(経歴 2)と生來居住者(経歴 1)とのあい

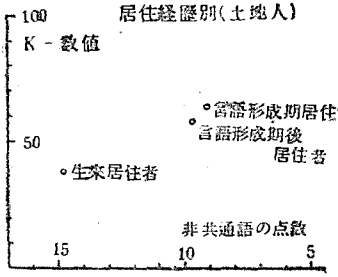

居住経歴別(土地人)
100
K－数値
50
言語形成期居住者
言語形成期後
居住者
生来居住者
非共通語の点数
15
10
5

図 84

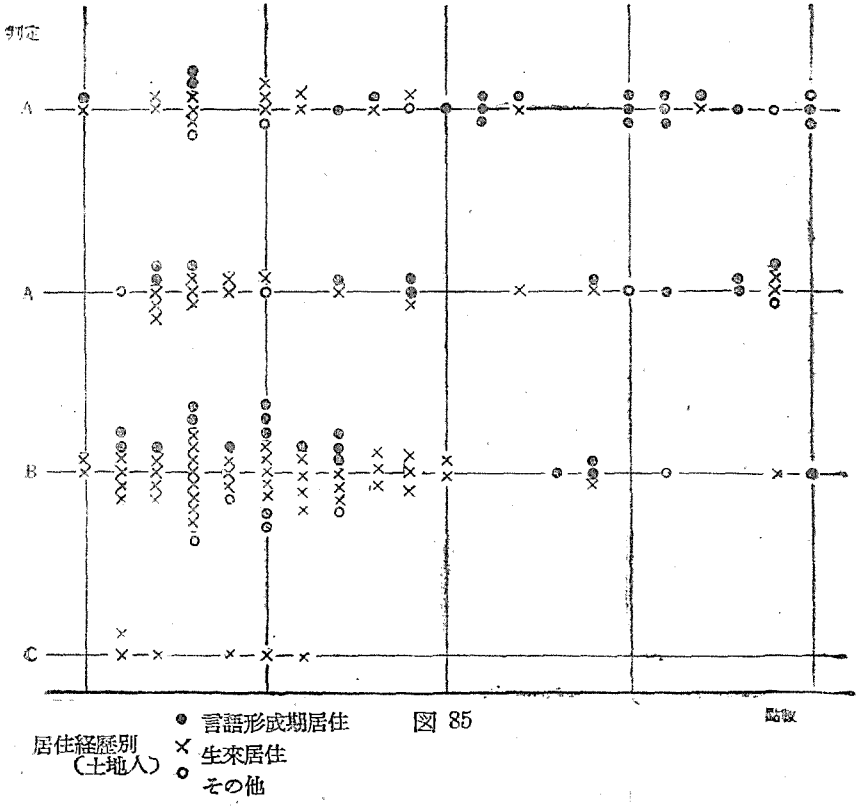

判定
A
A
B
C
点数
居住経歴別
(土地人)
言語形成期居住
生来居住
その他

図 85

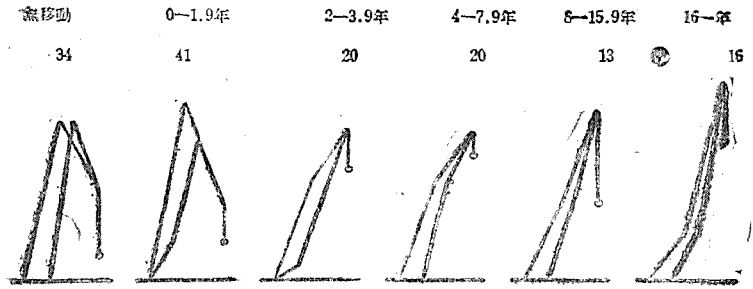


図86　島外居住年数(土地人)〔年数の区切り方には別に意味はない〕

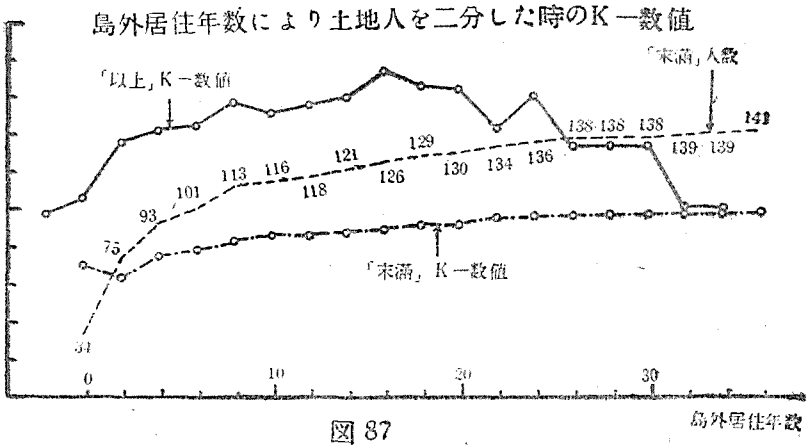


図 87

に明らかな違いを示している。

5. 言語形成期は重要な要因ときめることはできない

以上の図をながめると、予想に反し、経歴1と経歴2とのあいだに明らかな違いが認められ、経歴2と経歴4とのあいだのくい違いは前者よりすくないことが分る。さらに、土地人では経歴2のK-数値が一番高いことがわかった。

(8) 特に島外居住年数について

島外居住経験あり 117

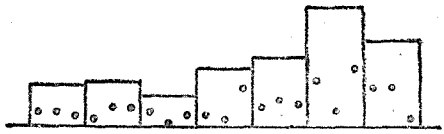


図 88

島外居住経験なし 37

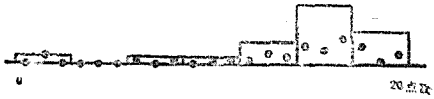


図89

島外居住年数0－1.9年 47

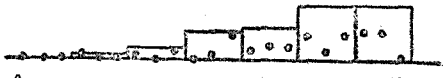


図 90

島外居住年数2－3.9年 18

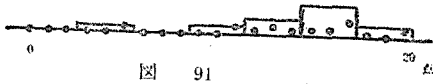


図 91

島外居住年数4－7.9年 20

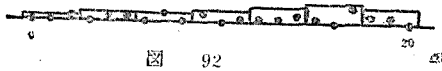


図 92

島外居住年数8－15.9年 14

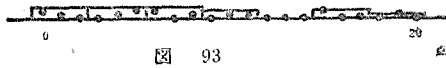


図 93

島外居住年数16年以上

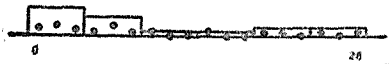


図 94

前節で、おなじ土地人でも、島外に長く出たことのある人は、「共通語を話す度合」が高くなる傾向が認められた。そこで、この節では、島外にのべ何年出ていたかを数えあげて分析の表面に出し、上の関係をくわしく調べてみた。

この分析の結果、島外にのべ何年居住していたか、という数字は、「共通語を話す度合」を決定するのに、非常に注目すべき指標であることがわかってきた。

疎開でちょっと出たぐらいでは、まったく変化は見られないが、それ以上は年数が長くなればなるほど、共通語を話せるようになることが確かめられた。

居住経歴を分析した結果、島で生れ、島で育った人でも、島外に出たことのある人は、「共通語を話す度合」が高まるように見うけられた。そこでこの「島から他の土地に住む」という現象をもっと分析してみようと考えたのである。

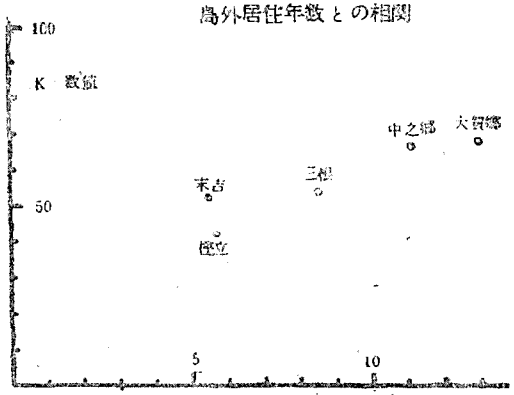


図 95

1. 島外居住年数

最初に考えに浮んだのは、島外にのべ何年住んでいたかという年数がひとつの指標になるだろうということであった。この「島外居住年数」は、調査票の質問11の欄をていねいに調べれば求めることができよう。

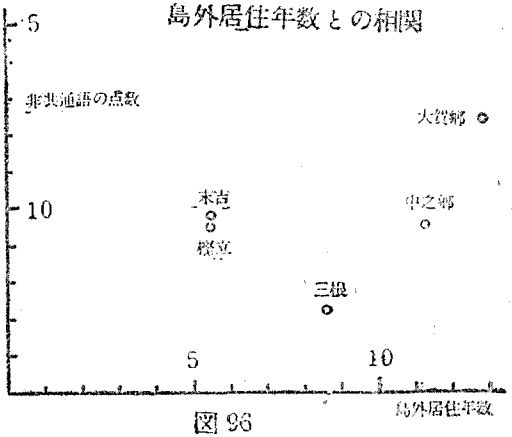


図 96

この操作を土地人についておこない、まずK-図表を画

いてみた。やはり想像どおりであり、「島外居住年数」が増すにつれて「共通語を話す度合」が進む傾向が表われてきた(図86参照)。ここで年数 0—1.9年と 2—3.9年(2年以上4年未満)との間にはいちじるしい開きが見られる。そこで、この模様をたかめるため図 87 のような図を画いた。

例えば、土地人の中で、島外居住年数が4年未満の人は、全部で 93 人おり、そのK-数値は 37%である。一方、島外居住年数が4年以上の人は、全部で 141－93=48 人で、その K- 数値は71%である。

このような図を画くと、全土地人を島外居住年数で二つに分割したとき、何年のところで区切れば一番K-数値に差が表われるか、という問題を一目ではっきりさせることができる。

実際には、期待に反してこのような最大点を見出すことができなかった。

「以上」の線が右の方でまた下ってきたのは、年寄りばかりになるせいであろう。

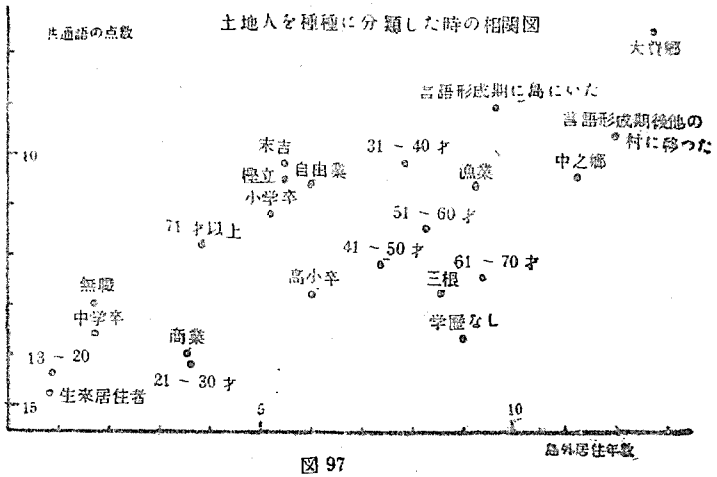


図 97

次に「非共通語の点数」を使い、柱状図を画いてみた。この一連の図からも、「年数」が多くなるにつれて「共通語を話す度合」の進む様子を見ることができるのである。

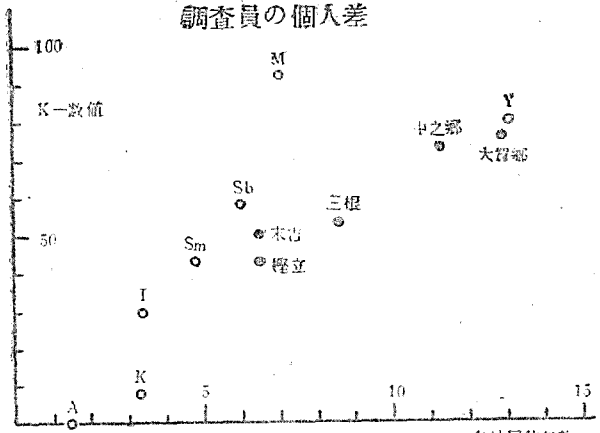


図 98

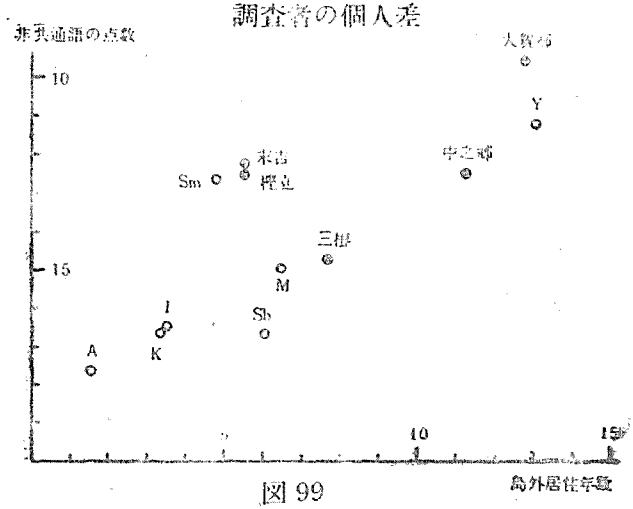
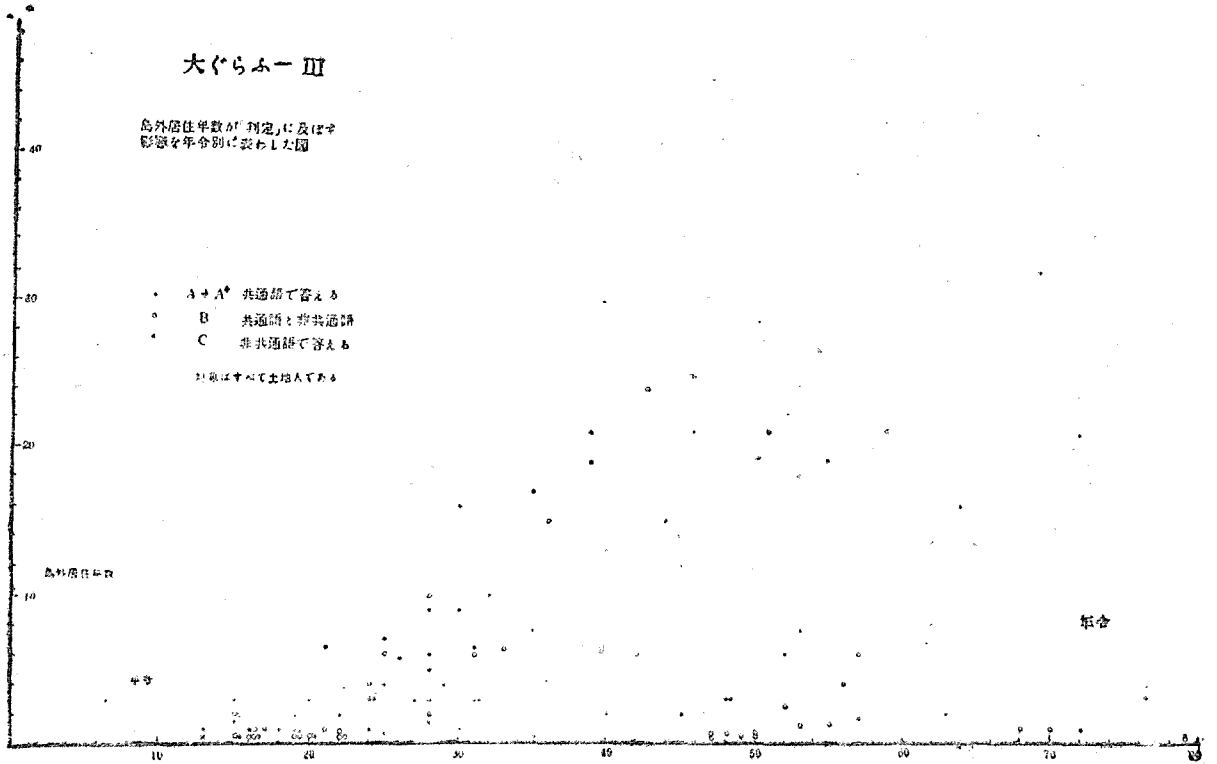


図 99

大ぐらふ－ III

島外居住年数が「判定」に及ぼす影響を年令別に表わした図



今度はいろいろの要因によって土地人を分類し，「島外居住年数」との相関を調べてみた。その結果，「島外居住年数」がふえるのにつれて，「共通語を話す度合」が高まることは，ほとんど間違いないようである。*(図 95,96,97 参照)

また、つぎのような分析もおこなってみた。すなわち，7 人の調査者の、判定に対する「個人的なかたより」が安定していないならば、このような調査は多分に危険性が伴うのであるが、平均島外居住年数と、「共通語を話す度合」を表わす指標（K-数値、非共通語の点数）との相関を、われわれ 7 人の調査対象ごとにとって見ると、図 98, 99 のような結果になっていて、調査者のための変動は思つたよりすくないようである。（なお、ローマ字は調査者を示す。）

そしてこのことは、一方から言えば、島外居住年数が重要な要因であることを示すものと言えよう。

参考として土地人全員の年令別による相関図表をあげておく(大ぐらふ-III)。

2. はじめて島から出たときの年令が「共通語を話す度合」に影響するか

「島外居住年数」の他に「はじめて島から出たときの年令」をもう一つの指標にとって相関図表に示したのが大ぐらふ-IV である。

分布している点のうち特異なものは次のような人人であった。

年数44年で判定 B の人と年数 35 年で判定 B の人とはいずれも外地人であった。

また、右下の、67才のとき島から出た判定 A の人は、72才の末吉人で 1 年間東京に疎開したのであった。

---

* 島外居住年数と K- 数値との相関図表（図95）は、「点数」との相関図表(図96)よりも傾向がきれいにあらわれていない。この点では「点数法」の方が「判定法」よりもすぐれた方法といえよう。

判定Cの人人はさすがに「年数」がすくない。しかもみな疎開で島から出た人人であった。

しかし、このほかにも分析してみたが、「はじめて島から出たときの年令」が及ぼす影響のぐあいに関しては、あるともないとも、積極的な結論を見出すことができなかった。

3. 島外へ出たことのない者と疎開を經驗した者との比較

前の図を見ると、島外居住年数が2年未満と2年以上との間に質的な差が見られる。さらに、ていねいに調べたところ、2年未満の41人のうち3人をのぞいて全部疎開者であった。そこで、この38人と、まったく島から出たことのない34人とを比較してみた。結果は次のとおりである。

判定	C	B	A	A+	計	k-數値
疎開者	6	21	5	6	38	29%
無移住者	0	22	8	3	33	33%
移住年數2年以上4年未満	1	6	3	8	18	61%

移住年数が2年以上、4年未満の18人のうち疎開者は7人である。この結果をみると、島外へ出たことのない者（無移住者）と島外へ疎開したとのある者（疎開者）との間に質的な差は認められない。(6)で経歴を分類するとき、疎開者を生來居住者にまとめたのは妥当であった。

4. その他の試み

島外居住の模様と、それが「共通語を話す度合」に及ぼす影響のぐあいをみるため、さらにいろいろと分析方法を変えてみたが、とりたてて新しい結果は出なかったので、省略しよう。その一部分は次の章で記述しておいた。一般に島外居住年数のこれ以上の分析には、サンプル数がややすくないと思われる。

(9) 「共通語を話す度合」を決定する要因はなにか

前節までの考察によって、いまは「『共通語を話す度合』を決定する要因はなにか」という問に、いちおう、答えられる段階に達した。

われわれは、個人の環境としては、共通語を話さなければならない生活をのべ何年送ったか、ということが、もっとも強い要因であると言うことができる。この事実は、「標準語を普及する」ためのひとつの方策を暗示するものである。

年齢、職業、学歴などの要因は、上記の主要因に還元される。

この主要因のさらに奥にひそむ要因、および、これと同等に決定的かも知れない他の要因を見つけることは、今後の調査に残された問題である。

いままでの考察で得られたところを総合して、「共通語を話す度合」という概念をさらに精密にして行こう。

ある個人の「共通語を話す度合」をなにによってきめるのが妥当であろうか。また、それに影響する要因の強さとはなにか。

1. 「共通語を話す度合」の定義

さて、われわれは、「共通語を話す度合」の定義をするのに次のような立場をとった。

「共通語を話す度合」というのは、まったく新しくつくられた概念で、われわれは、今回の調査のために、そして今回の調査を通じて、この概念を明確にして行こうとしているのである。

具体的な方針として、つぎのようなことが考えられる。

(i) われわれが実際に調査できる事項を選ばなければならない。

(ii) はじめから完全な定義を与えようとはしないで、調査の結果得られた知識をつみかさね、補正していって、いっそうりっぱなものにするという方法をとる。

なお、「共通語を話す度合」という概念には質的なものと量的なものとが考えられる。つまり、

a) 共通語としてどれだけ完成されたものであるか、あるいは、流通性の高いものであるか

b) 言語構造のどんな部分から共通語になって行くか

c) ある個人が場面によって、種種の段階の共通語を使いわけているのではないか

などが前者で、

d) 毎日使用する言語のうちどのくらいの割合で共通語が使われているか

という問題が後者と言えよう。

ここまで来て、現実の障害にぶつかる。すなわち、調査はひとりについてそんなに多くのことを聞けるものではなく、また、調査班の能力から言って一度に200人ぐらいしか調べられない。さらに調査事項についてはいろいろな方面の要求をいれなければならない。

そこで、今回の調査では、a) に重点を置くことにした。すなわち、われわれは次のような定義をとることにしたのである。

> ある個人の「共通語を話す度合」は、初対面の「正しい共通語」を話す人と応答するときに使う言葉を、耳で聞いて、共通語と認められるかどうかを主観的に判断することによって表わされる。

主観的判断を5段階に分けたのはこの線を押し進めたものであり、「点数」を数えたのも、さらによい定義を得るためのひとつの試みなのである。

2. 「共通語を話す度合」に影響する要因 その1

以上のような定義のもとに調査に出かけ、いろいろな人に面接すると、種種さまざまな反応を示すことを発見する。このような反応を、さて、どのようにまとめたらいいであろうか。われわれの知りたいのは、共通語

を使うようになった原因とその影響のぐあいとである。しかし、相手はなにしろ人間であるから、実験的にこちらの都合のいい状況をつくって観察するというわけにはいかない。どうしても同じ種類のひとびと、つまり、ある要因の影響を同じ程度に受けているひとびとをかなり多数集めて、「一般的傾向」としてのひとつの知識を得る、という方法をとらなければならないのである。

ここで、要因とはなにか、影響するとはどんなことか、という問題をすこし考えてみよう。例えば、「職業」というものが「共通語を話す度合」に影響を及ぼす、と述べるとき、そぼくな考えでは、職業の種類によって「共通語を話す度合」が違ってくる、しかも、それがかなり目立つということを表わしている。ところが、実際には、職業が違っても同じ程度の人がいるし、また同じ職業のなかでも非常に広い段階に散らばっているのがふつうである。したがって、「職業が影響している」という表現は意味がないかのように思われる。そして、これは一般的なことで、職業にかぎらず、どんな方法で分類してみても、「共通語を話す度合」の点できっちり層にわかれるということはありえない。われわれは、多数の類例を集めて、一般的傾向を知ることで満足しなければならない。

ここで、例の k- 数値を思い出すことにしよう。集團を構成する個人個人の「共通語を話す度合」が高くなればなるほど、その集團の k- 数値は高くなる。つまり、k- 数値は「共通語を話す度合」を表わすいちおうの目やすになっているのである。職業別に分類して k- 数値を比較することが、すなわち、職業の「共通語を話す度合」に及ぼす影響の一般的傾向を見るということになる。この場合、「影響している」とは k- 数値が違うということで表わされる。さらに、影響の強さは、職業別に分類しない全体の k- 数値と比較することによって、いっそうよく表わされる。

一般に、ある集團をある分類基準で数個の部分集團に分けたとき、それ

らに一定の方法で数値を入れたとする。このとき、各部分集團の数値を認識することが、この分類基準が影響を及ぼしているということであり、その分類基準がひとつの要因なのである。影響の強さは、全集團の数値から部分集團の数値がどれだけくいちがつているかということで感じとることができる。*

ここで、ことわりなく部分集團の特徴づけに「数値」を使ったことを許していただきたい。けだし、このような強さは「数値」で表わすのがもっとも適切であると思われたからである。また、このような「数値」は集團を構成する個人に與えられる「数値」の平均値であることが多い。

平均的な一般傾向では個人個人の状態を説明するのになんの役にも立たないからだめだと言われるかもしれない。しかし、一面から見ると、社会政策というのは、ある集團を全体としてひとつの方向に押し進めるように計画されるのであるから、要因の影響力を上に述べたようにとらえることは正しいと言えよう。

なお、実際には、調査はサンプル調査で、一部分をとって調べるのであるから、全体をよく代表するようにサンプリングを工夫はするが、それでも眞の値とはいくらか違った結果が得られるということは覚悟しなければならない。さて、このように考えを整理した上で、要因の種類について考えてみよう。これも、考察が深く進み、経験が増すにつれて、よりよい要因が浮びあがるだろうが、とりあえず次のものを考えることにした。

(i) 自然に備わった條件　例えば、性別、年令など。

(ii) 境遇によってきまったもの

例えば、職業、学歴、居住経歴。

(iii) 被調査者の言語に対する心理的関心度

* ここでいう分類基準とは、かなり抽象的な概念的なものである。われわれは純粋に一つの要因だけを分離することはできない。

また、別の見方をすれば、應用上は、環境の改善で変えられる要因を重点的に検討すべきであろう。

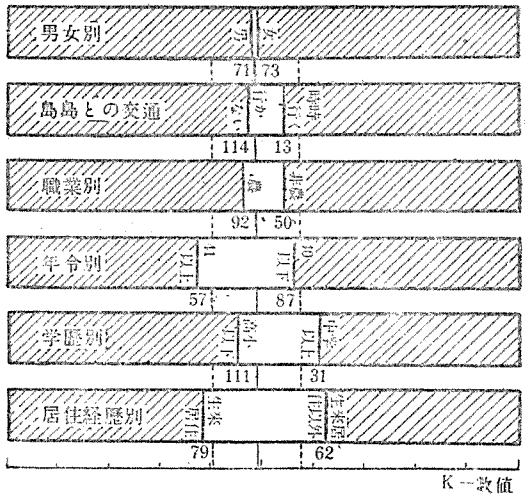
3. 「共通語を話す度合」に影響する要因　その 2

前節で述べた定義のもとに(3)から(8)までを見直してみると、すべてが、部分集團の數値を比較することにより表現されていることがわかる。そして、これらの結果はだいたいわれわれの常識と一致するのである。このことはわれわれの調査方法と表現方法とが第一段階として成功したことを意味している。

したがって、図1—図99にわたる図表から「共通語を話す度合」に影響すると考えられた、いろいろな要因の強さを比較することもいちおう許されると思う。

さて、この強さを比較するために、今までの結果を書き直して、次のようなスペクトル図表を画いた。すなわち、それぞれの要因別に、土地人に限って、部分集團の k- 数値の刻線を書き入れ、それらが全集團の K- 数値を示す実線に対して、どのように分布しているかを見る。

図 100.　2線スペクトル　（数字は人数）



刻線と刻線とのひろがりの大きい要因ほど影響が強いとみなされる。

点線については後に説明を加える。

以下、実際のス

ベクトル図表をながめよう。

図100が示すところによると、2段階に表わされた男女別、島島との行き来の度合、職業別、年令別、学歴別、居住経歴別という諸要因についてはこの順序に影響が強くなるとみなされる。

つまり、男女の別は「共通語を話す度合」にたいした影響を與えないが、居住経歴はかなりいちじるしい。すくなくともこれらの要因のうちでは最大の影響を與えるとみなすことができる。

図101 3線ベクトル (数字は人数)

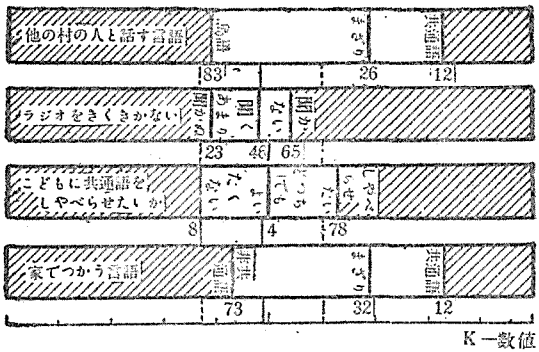


図101によれば、「こどもに共通語をしゃべらせたいか」よりも、「家で使う言語」および「他の村の人と話す言語」の方が共通語化の段階を際立たせている。なお、「ラジオをきく、きかない」は、すでに述べたように、われわれの常識に反するので。ここではふれないでおく。

図102の示すところによれば、「非共通語の点数」(調査票の調査項目3—56のうち20項目について、非共通語で答えた項目の数。)
2
はかなり明瞭な段階を示す。特に、次の3段階において差がいちじるしい。

(1) 0—5点

(2) 6—10点

(3) 11—20点

図102における居住経歴の示す段階は、言語形成期に八丈島にいたかどうかということは「共通語を話す度合」にとって重要な要因ではないこと

を示している。むしろ、図100に示したように、「生来居住者」と「それ以外」とのあいだにいちじるしい段階を見ることができる。

図103において、学歴別はかなり明瞭な段階を示すが、内地との行き来は「ラジオをきく、きかない」の要因と同じように、予想された段階順とくい違いを見せている。この要因はさして強くないか、段階の分け方が不適当であるか、そのいずれかであろう。

図102　4線スペクトル　(数字は人数)

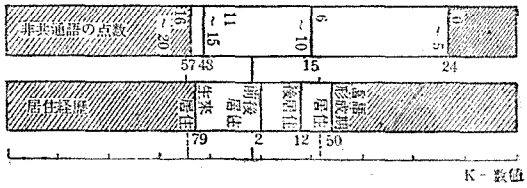


図103　5線スペクトル　(数字は人数)

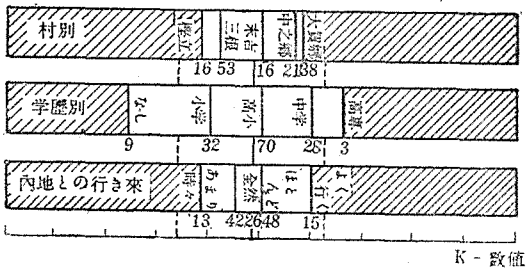


図104　7線スペクトル　(数字は人数)

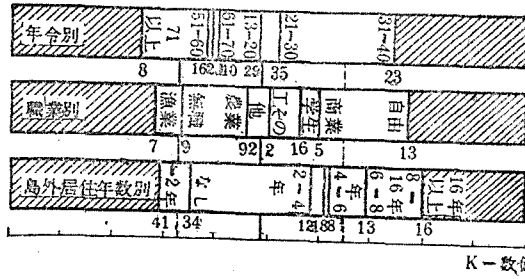


図104における「島外移動年数別」は居住経歴を別な面から集計したもので、特に次の段階にいちじるしい差が認められる。

（1） 16か年以上

（2） 2か年　15.9か年（1.6か年未満）

（3） 0か年　1.9か年（2か年未満）

4.「共通語を話す度合」に影響する要因　その3

しかし、ここで注意しなければならないことは、われわれの調査がサンプル調査であるから、ほんとうの値をそのまま反映しているとは限らないということである。集團ではもっと差がはなはだしいのが、サンプルではいくらも差がないように表われ、逆に、ほんとうは差がないのにいかにも差があるように見えることもある。

これらのくい違いにごまかされることなく眞相を見究めるにはなんらかの工夫が必要となる。このため次のように考えを進めていく。

1. まず部分集團の数値は同じである（母集團では差がない）。すなわち、この要因はすこしも影響力がないと仮定しよう。
2. ところが、サンプルのスペクトル図表では差があらわれてくる。
3. しかし、この差はふつうそんなにひどいものでなく、くい違いが大きければ大きいほど（刻線の変動がはなはだしければ、はなはだしいほど）、それは起りにくいことである。
4. 統計的にある限度以上のくい違いは、めったに起らないという限界を計算することができる。
5. この限界を計算して、スペクトル図表に点線で書き入れた。刻線のひろがりの巾が両点線の巾より廣くなれば、めったに起り得ないことが起ったのだから、それはおかしいということになる。
6. このように廣すぎるのは母集團でもたしかに差があるからである。すなわち、この要因は「共通語を話す度合」に影響を及ぼしている

ことはたしかである。

以上の考察により、たしかに差があるのは見分けられるが、こんどは母集團でかなり差のあるのを見落してしまうおそれがある。しかし、この難点は1回だけの調査では決定できない問題である。数回同じような調査をやれば、影響力ある要因なら、かならず差が明瞭になることがあるが、1回だけの調査では影響力の有無を判定するのは危険といわねばならない。また k- 数値の大小関係も、あまり二つの数が接近していると、母集團とサンプルとでは順序がひっくりかえる可能性がある。

このように反省してみると、前節のスペクトル図表のうちで、ともかく母集團で差があるとみられるのは次の要因である。

（i） 居住経歴（2 線スペクトル）

（ii） 他の村の人と話す言語（3 線スペクトル）

（iii） 家で使う言語（3 線スペクトル）

（iv） 「点数」（3 線スペクトル）

（v） 島外居住年数（7 線スペクトル）

すでに述べたように、(ii)、(iii)、(iv) は「共通語を話す度合」そのものを表わしているのであるから、くい違いが大きいのは当然で、要因とは言えない。結局残るのは居住経歴、しかも島外にのべ何年出ていたかという要因である。

ここでは省略したが、内地人や外地人についてスペクトル図表を画いても、また平均点数でスペクトル図表を画いても、同じような傾向が見られる。*

島外居住経歴以外の要因は、このような考えのもとでは、まだ決定的の要因とはみなせない。もちろん、前節までの考察のように常識に一致する

* スペクトル図表は、本質的には、すでに記述された k- 図表や相関図表と同じものである。

という見方をすれば、ラジオの場合を除いてはそれぞれそれ相應に「共通語を話す度合」に影響を及ぼしていると判断していいであろう。

「『共通語を話す度合』を決定する要因はなにか」という問に対する答は、このようにして、いちおう島外居住経歴を注目しなければならない、という結論のほかは、かなり弱いものになってしまった。

要因の解釈のしかたにもよるが、調査の現段階ではこれ以上の断定を下すことは危険である。

5. 上の4.に関する數學的説明

ここで、上の4.におけるような見方が、いわゆる χ^2 の計算を行っていると同じなことを説明しておこう。

ある集團Gの大きさをNとし、その構成員がAまたは non-A の判定を持つとする。いま、Gをある分類法で G_1, G_2, ……と分解し、N個の物が下の表のように分けられたと考えよう。

	G_1	G_2	G_3	G_4	計
A	n_{11}	n_{12}	n_{13}	n_{14}	$\alpha_1 N$
non-A	n_{21}	n_{22}	n_{23}	n_{24}	$\alpha_2 N$
計	$\beta_1 N$	$\beta_2 N$	$\beta_3 N$	$\beta_4 N$	N

また χ^2 を計算する場合の期待度数は次のようになる。

$\alpha_1\beta_1 N$	$\alpha_1\beta_2 N$	$\alpha_1\beta_3 N$	$\alpha_1\beta_4 N$
$\alpha_2\beta_1 N$	$\alpha_2\beta_2 N$	$\alpha_2\beta_3 N$	$\alpha_2\beta_4 N$

そこで、

$$\chi^2 = \sum_{j=1}^{4} \frac{(n_{1j} - \alpha_1\beta_j N)^2}{\alpha_1\beta_j N} + \sum_{j=1}^{4} \frac{(n_{2j} - \alpha_2\beta_j N)^2}{\alpha_2\beta_j N}$$

$$= \frac{1}{\alpha_1} \sum_{j=1}^{4} \beta_j N \left(\frac{n_{1j}}{\beta_j N} - \alpha_1 \right)^2 + \frac{1}{\alpha_2} \sum_{j=1}^{4} \beta_j N \left(\frac{n_{2j}}{\beta_j N} - \alpha_2 \right)^2$$

ここで、$\frac{n_{1j}}{\beta_j N}$, $\frac{n_{2j}}{\beta_j N}$ はそれぞれ G_j 集合の A, non-A の比率を示している。また、この比率に調査人数である $\beta_j N$ の重みをつけて平均すれば、

$$\sum \frac{n_{1j}}{\beta_j N} \cdot \beta_j N \Big/ \sum \beta_j N = \frac{\alpha_1 N}{N} = \alpha_1$$

non-A についても同様である。そこで、比率 $\frac{n_{1j}}{\beta_j N}$ に重みをつけて分散を計算すると、

$$V_1 = \frac{1}{N} \sum \beta_j N \left(\frac{n_{1j}}{\beta_j N} - \alpha_1 \right)^2$$

$$V_2 = \frac{1}{N} \sum \beta_j N \left(\frac{n_{2j}}{\beta_j N} - \alpha_2 \right)^2$$

したがって、

$$\chi^2 = \frac{1}{\alpha_1} N V_1 + \frac{1}{\alpha_2} N V_2$$

ところが、

$$\frac{n_{1j}}{\beta_j N} + \frac{n_{2j}}{\beta_j N} = 1$$

であるから、実は、

$$V_1 = V_2$$

となる。すなわち、

$$\chi^2 = N V_1 \left(\frac{1}{\alpha_1} + \frac{1}{\alpha_2} \right) = \frac{N}{\alpha_1 \alpha_2} V_1$$

Gをたとえば土地人とし、Aを共通語の判定の A+A⁺ の階級とすれば、G_1, G_2……などの分類方法をいろいろ変えても $\frac{N}{\alpha_1 \alpha_2}$ は一定である。だから、その度に V_1 を計算すれば χ^2 の模様はわかることになる。そして、V_1 の値は大体スペクトル図で予想がつくのであるから計算量はかなり節約できよう。

なお、G_1, G_2……の分け方が細かくなれば V_1 は当然大きくなるから、そのままでは影響の度合を表現していない。この点は、目盛の大きさのことなるグラフ用紙を使用することによりうまくいくと思われる。前節の図

ではこの点を点線の巾（5% point）で解決しておいた。

またこのような方法は、一般に層内分散と層間分散との比の限界を見るのにも使うことができる。

6. ひとつの試み

島外の生活を経験することは、たしかに「共通語を話す度合」に影響を及ぼすらしい。そこで、はたして何才ごろの経験がもっとも影響力が強いかを推定して見ようと考えた。

1. 一般に x_i という人間が島外に出たことを表現するため、島外居住函数 $x_i(\tau)$を次のように定義する。

   τ は年令で数える。

   年令 τ のとき島外にいれば $x_i(\tau)=1$、島内にいれば $x_i(\tau)=0$ とする。

2. 共通語化函数 $p(\tau)$ を次のように定義する。

   いちおう個人差を考えないで、平均的に年令 τ のとき島外にいれば $p(\tau)d\tau$ に比例した共通語化を受ける。

3. 共通語化の力は、加算されて、ある程度以上になると共通語が話せるようになる、と仮定する。

4. x_i の現在の年令が τ_i であれば、「共通語を話す度合」は

$$\int_0^{\tau_i} p(\tau)x_i(\tau)d\tau$$

   で表わされる。

5. 年令が τ_i を越えたとき $x_i(\tau)=0$ と考えると、

$$\int_0^{\tau_i} p(\tau)x_i(\tau)d\tau=\int_0^{\infty} p(\tau)x_i(\tau)d\tau$$

6. ある部分集團に属する人を、$x_1, x_2, \cdots\cdots, x_n$ で表わせば、この集團の平均的な「共通語を話す度合」は次のとおりである。

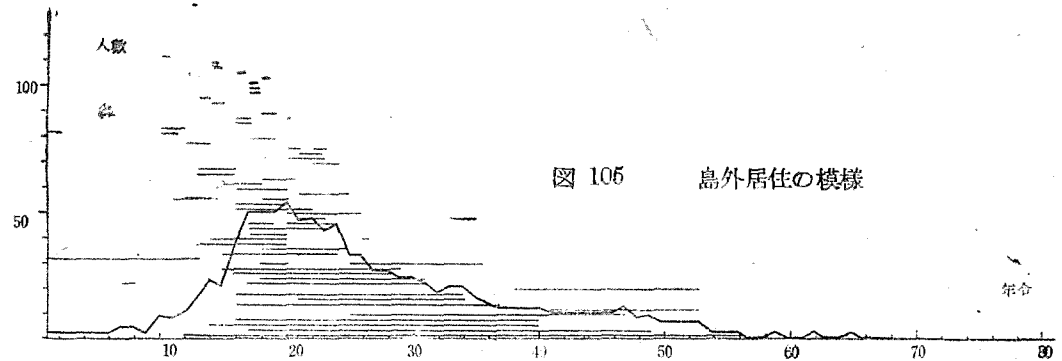


図 105　　島外居住の模様

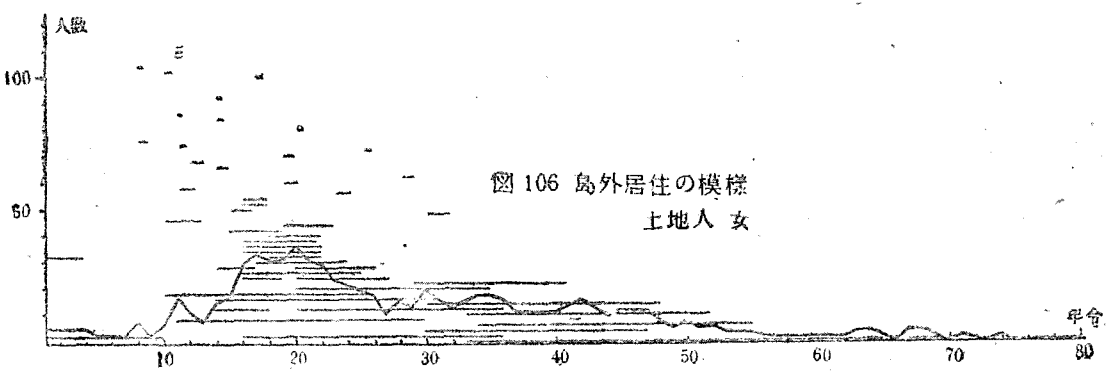


図 106 島外居住の模様
土地人 女

$$\frac{1}{n}\sum_{i=1}^{n}\int_{0}^{\infty}p(\tau)x_i(\tau)d\tau=\int_{0}^{\infty}p(\tau)\frac{\sum_{i=1}^{n}x_i(\tau)}{n}d\tau$$

7. そこで $\frac{\sum_{i=1}^{n}x_i(\tau)}{n}$ の形を具体的にするため、次のような作業をおこなった。

まず、島外に居住した期間を、各個人について実線で引く。これを島外居住年数の順でつみ重ねて行き、その合計を求める。この線は $\sum x_i(\tau)$ で、太い点線で示してある(図105、図106)。

8. 次に $\int_{0}^{\infty}\sum_{i=1}^{n}x_i(\tau)d\tau$ を分割して、5～10, 10～15, 15～20, 20～25, 25～30, 30～40, 40～50才の和とし、各区間ごとに面積をはかった。

9. この面積の値を n で割って

$\int\frac{\sum_{i=1}^{n}x_i(\tau)}{n}d\tau$ が得られた。その結果の一部は次のとおり。

	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～40	40～50
全 体 人	144	0.019	0.092	0.270	0.243	0.149	0.218	0.145
A+	40	28	150	460	430	248	265	165
A	30	30	70	247	264	210	326	127
B	67	10	58	187	134	79	143	125
C	7	29	143	14	71	0	0	0
大 瀬 郷	38	45	145	400	400	266	376	213
三 根	53	2	53	213	134	79	132	187
樫 立	16	25	131	137	169	0	94	62
中 之 郷	21	33	71	257	318	252	271	19
末 吉	16	0	62	294	206	112	62	25

		5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～40	40～50
男	71	24	99	317	314	192	231	137
女	73	36	92	214	188	110	206	129
40才以下	87	56	137	306	269	141	105	—
31～40	23	109	148	591	643	482	330	—
41以上	57	0	46	226	214	177	414	351
自由業	13	23	31	500	354	100	—	—
生來居住者	79	13	61	86	81	15	11	10
言語形成期居住者	50	40	118	522	426	336	476	298
言語形成期後居住者	12	0	158	425	492	342	542	417

10. 今度は「共通語を話す度合」を数値で表わさなければならない。これには、もっとも適当と思われる「非共通語の点数」を20点から引いて使った。その数値は次のとおり。

土地人	7.3	男	7.4
		女	7.2
A+	9.6		
A	8.8		
B	5.6	40才以下	6.8
C	3.4	31～40才	9.8
		41才以上	8.0
大頭郷	10.3	自由業	9.4
三根	5.0		
樫立	3.7	生來居住者	5.2
中之郷	6.0	言語形成期居住者	10.9
末吉	8.5	言語形成期後居住者	10.2

11. $p(\tau)$ という函数を前記の年令区分内では一定とみなすと、積分方程式は1次方程式となる。

12. 合計19本の1次方程式から人数の重みをつけて最小二乗法の正規方程式を作った結果は次のようになった。

5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～40	40～50	定数項
1,030	2,691	7,991	7,556	4,849	5,468	2,419	1,882
	8,897	25,779	23,964	15,001	19,180	10,892	6,421
		83,886	76,792	49,615	63,019	36,478	20,189
			71,641	46,618	58,747	32,962	18,468
				31,508	40,176	22,465	11,838
					57,235	35,601	15,861
						25,408	9,560

13. しかし、この連立7元1次方程式を解いた結果は不成功で、$p(\tau)$の平均値として次のような数値になってしまった。

5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～40	40～50
0,071	0,160	0,227	0,027	−0,329	0,246	−0,100

14. はじめの予定では $p(\tau)$ の値が負数になるとは思えなかった。また25～30, 30～40 のところは数値が飛躍しすぎる。

以上の試みは結局失敗に終った。「なぜか」という理由はまだわからない。今後の調査がよりよい分析方法を示してくれるだろう。

(10) 結　　論

1. 結　論

われわれは主観的な判定から出発して「非共通語の点数」という指標を加え、「共通語化」現象の周辺をいくぶんか明らかにすることができた。到達した段階は前章で述べつくされている。それは一言でいえば「共通語を話さなければならない場面がつみ重ねられることによって『共通語を話す度合』は高まっていく」という結論である。

われわれはここでひとまず作業を中止したい。

これから先の解明は

1) 綿密に計画される調査と

2) より進んだ分析方法と

3) なによりも十分な時間と人手

とによって、さらに展開されることを期待する。

2. 分析のたりなかった諸点

(i) われわれは土地人の共通語化に並行して外來者の「方言化」をもっと分析すべきであった。ことに、内地から來た人と南方から帰ってきた人との比較はなにか得るところがあるように感じられる。

(ii) A^+ という段階の分析はほとんどできなかった。今度の調査技術では A^+ と A とを差別するほどの自信がなかったのにもよる。

(iii) 「非共通語の点数」を定義するのに使った20の語は、いろいろな方法でさらに分類することができる。この分析を進めたら「共通語化」の判定に新しい手段を供給したかもしれない。

(iv) 分析の重点を集團においたため、個人個人の「共通語化」を判定する手段についてはほとんど進歩が見られなかった。

3. 將來に期待する課題

(i) 「共通語」とはなにか、について、さらにくわしく考える必要がある。京浜地区に生れ・育った人の「共通語」と、京浜地区以外に生れ・育った人の「共通語」とは、どのように違い、どのような関係にあるだろうか。

(ii) 「共通語」として許される範囲はどのようであるか。アクセントの違いは「共通語」という点では問題にならないのではないか。イントネーションはどうであろうか。

(iii) 「共通語を話す必要に迫まられる場面」を明確にする必要がある。

(iv) いかなる場面から共通語化が進むかを明らかにする必要がある。そのためには、日常の言語生活をくまなく、くわしく記録し、分析することが必要である。同時に、言語構造のいかなる部分から共通語化が進むかも明らかにしなければならない。

（v）「共通語化」とともに「方言化」の分析も重要な項目である。いかなる要因が「方言化」をひきおこすか。

（vi）「共通語を話す度合」を判定する手段としては、「非共通語の点数」による方法がほとんどただひとつの道である。今度の調査でも、相関係数が0.5を越したのは「非共通語の点数」と「島外居住年数」との関係だけにすぎない。この方法は、統計解析をおこなうにももっとも都合がいい。ただし、ある人が共通語を話しているという印象は多分に心理的なものを含んでいるから、この方面からの分析も忘れてはならない。

（vii）調査する側の「くせ」の影響は相対的にたえずつきまとう問題である((8) 図98、図99を参照)。

4. むすび

われわれがやりだしたこの仕事で法則を見出すにはひとつの方法しかない。くりかえしくりかえし調査すること、がそれである。

よく計画された調査はたとえ失敗（否定的）に終っても、なお得るところは多い。それは、調査技術を改善する、経験をつむ、二度と同じあやまちをくり返さない、というほかに調査の前に仮定したよりどころを反省させる効果をもつからである。

このような調査のくりかえしを通して、定義をより正確にし、判定（測定）をより適切にし、要因を明確にすることができるのである。

そして、こうして得られた法則は実際に応用してみることによりいっそう安定感と重要性とを増してくるのである。

八丈島の調査ではまだ決定的に要因が得られたわけではない。今回の調査では真理に到達できそうな道の入口を探し求めただけである。われわれはさらに準備を整え、基礎訓練をつんで、次の機会を待つことにしたい。

V　結果2　5か村の言語はいかに違うか

(1) はしがき

八丈島の五つの村、すなわち、大賀郷(O)、三根(M)、樫立(K)、中之郷(N)、末吉(S)が、言語的に、すくなくとも音韻的にかなり違うことはすでに知られている（東條操『本州東部の方言〔後編〕関東方言』「國語科学講座」49ページ）。

われわれの調査の目的のひとつは、「言語の地域による違いを調べる」ことであり、調査の課題として設けたことのひとつは、この「5か村の言語はいかに違うか」ということである。

ここで、われわれは、一般的に言語社会の言語的比較をいかにすべきか、ということについて、次のようなことを考えた。

（i）言語社会（ここでは、村）相互の、ひとつひとつの言語的違いについて、どのようなものを同一言語（同一の言語社会におこなわれていると仮設される同一言語、de Saussure の langue にあたる）の変異と認め、いかなるものをことなる言語（langue）の特徴と認めるか

（ii）言語社会相互の言語的違いの度合はいかにして測るか

（iii）言語社会相互の言語的違いとしていかなるものをとりあげるか

われわれは、八丈島の五つの村の言語的比較によって、上の問題のいくつかに答えようと努めた。すなわち、上の（i）に対しては、個別的な違いよりも体系的、法則的な違いを重く見た。（ii）に対しては、ひとつひとつの言語的違いによって得られる、五つの村のグループ的対立（たとえば、O と M では a.と言うが、K N, S では b と言うという事実から、OM/KNS というグループ的対立が得られる）相互の比較を試みた。（iii）につ

いては、従来のように、言語構造上の違いだけではなく、言語社会における言語の使われ方（ここでは「共通語を話す度合」をとりあげる）および言語社会の成員がほかの言語社会に対してもっている主観的意識をもとりあげた。

さて、われわれの研究の計画は次のとおりである。

本論に入るまえに、まず、八丈島の自然と文化の点から村相互の違いおよび関係を述べる。これが本論の理解のための参考になると思われるからである。自然と文化としてここで述べることは次のようなものである。

自然地理的状況

交通の状況

行政的関係

産業の状況

なお、参考として、姓の分布について述べる。八丈島の歴史と文化については、「附録1」の「八丈島の文化と文献」を、人口動態については「附録2」を参照されたい。

村相互の言語的違いとして調べることは、まず、

（a） 現住者が村相互の言語的違いについてもっている主観的意識

である。われわれは、調査票の調査項目6において、次のような質問を出している。

「島のことばはずいぶんかわっているようですが、あなたの村はほかの村のことばに比べてどうでしょうか。大賀郷のことばは？ 三根のことばは？……」

これについて得られたかなり多様な答のうちから、主観的意識の一般的傾向を探ろうと思う。

こういう主観的意識が客観的（科学的）な言語的違いとは必ずしも一致しないことは言うまでもない。われわれにとって問題になることは、このような主観的意識が、言語社会の違いにもとづくものか、言語（構造）そ

のものの違いにもとづくものか、あるいは、言語以外のものにもとづくものか、ということである。

つぎに、(b) 客観的に、言語社会相互の言語的違いを調べる。

われわれは、それを調べるのに、「共通語を話す度合」というものをひとつの目やすにする。言語社会相互の言語的違いは、次に述べる(c)言語の構造的違い とは必ずしも一致しない。言語社会相互の違いは、その自然および文化と密接な関係にあると考えられるからである。一般に自然および文化の違いは言語構造そのものの違いとは必ずしも一致しない。同じ自然および文化をもつ社会がことなる言語をもち、ことなる文化をもつ社会が同じ言語をもつことがあるからである。したがって、方法論的には、言語社会の違いと言語の構造的違いとは一致あるいは平行しないと仮定して進まなければならない。しかし、考えてみるに、この違いは同じ場所、同じ人間において見られるのであるから、これらの違い相互のあいだになんらかの関係を見出すことができるはずである。

つづいて、

(c) 客観的に、言語そのものの構造的違いを調べる。

われわれは、それを、従来の言語研究のやり方にしたがって、便宜上、音韻、文法、語いの三つの面から明らかにする。音韻と文法は体系的、法則的事実であり、語いは個別的事実であるために、両者は別の取扱いをうけ、相互に比較される。そのうち、さきに述べたように、前者を重んずることにした。

(2) 自然と文化

1. 自然地理的状況

八丈島は新旧ふたつの火山によって二分される。ひとつは、島の南東にある三原山（東山）であり、ひとつは島の北西にある八丈富士（西山）で

ある。三原山は八丈富士に比べて古い火山で、いちじるしく風化して異様な姿をしている。(八丈富士は、それに対して、火山の原形を保った美しい姿をしている。八丈島小島青が島要図を参照)

このふたつの火山のすそ野が合してできた中央の平地には、大賀郷、三根の2か村がある。この2か村を、坂下(サカシタ)と呼んでいる。

これに対して、三原山の南西のすそに、樫立、中之郷、末吉の3か村がある。この3か村を坂上(サカウエ)と呼んでいる。

坂下の大賀郷と坂上の樫立とは、大坂(オオサカ)と呼ばれる険しい道によってへだてられ、昔はこの2か村の交通はきわめて困難であった。現在はトンネルによって連絡され、バスが通っている。

坂下の三根と坂上の末吉とは、登龍(ノボリユウ)と呼ばれる、大坂に劣らない険しい坂によってへだてられている。

また、中之郷と末吉との村境にも、上のふたつの坂ほどではないが、かなり険しい道があり、切通しができるまではここを越えるには相当の困難を伴ったことと想像される。

このように、坂下と坂上とは地勢的にはっきり違うが、土質もいちじるしく対照的である。つまり、坂下はいたるところ溶岩が露出し、道路も溶岩のこまかい粒でできているが、坂上は完全に風化している。このような土質の違いは坂下、坂上それぞれの産業に大きく影響している。

なお、坂上のうちでも末吉は、地理的にも特殊な位置にあって孤立している。

以上五つの村の地理的関係を図によって示すと図107のようである。大賀

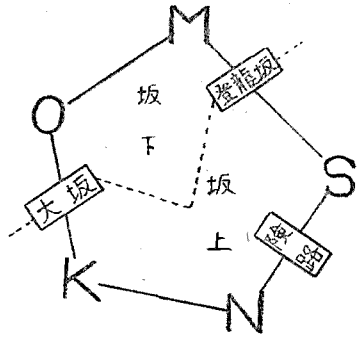


図 107

郷、三根、樫立、中之郷、末吉をそれぞれ O, M, K, N, S で示す。

2. 交通の状況

島の自然はそのまま島の交通状況に反映する。

現在は、大坂のトンネルができて、M⇆O⇆K⇆N⇆S のようにバスが走っている。しかし、大坂のトンネルができたのは 1903-4 (明治 36-7 年) であって、それまでは登龍をこえるほうが容易であったらしい。したがって、かつては、大賀郷の八重根港ないし三根の神湊港から入る内地の物質的・精神的文化は、両村を起点として末吉を経て中之郷、樫立に至ったが、現在は、逆に、坂下の両村を起点として樫立、中之郷を経て末吉に終るという状況である。

昔　O→M→S→N→K

今　M→O→K→N→S

　　O→K→N→S

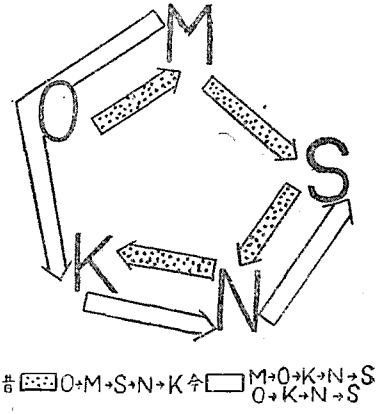


図 108

三根ないし大賀郷でバスに乗るひとはほとんど樫立、中之郷で降りてしまって、末吉まで行くひとはすくない。バスも末吉まで日に2往復しかしない。末吉は、かつては、坂下と中之郷、樫立両村との文化の中継所の役割をはたしていたであろうが、現在はさびれていて、「孤島の寒村」という感が深い。

現在、内地との交通は月6回の定期船（黒潮丸、600 トン）によって保たれている。東京を17時に出帆すれば翌朝8時ごろには着く。風向きのぐあいでどこに入港するかわからないが、八重根港（O）でなければ神湊港（M）であることが多い。したがって、内地からの物資はまず坂下に入り、ついで坂上へ及ぶという状況のた

めに、坂上は経済的にも坂下に依存している。坂上のうち末吉はこの点でも特にはなはだしい。

3. 行政的関係

八丈島に関する記録の存在する最初から、島はこの五つの村に区分されていたらしい。各村は、内地の旧村に比べてかなり規模が大きい。

大賀郷の大里（オオサト）には、すくなくとも江戸時代のはじめから陣屋が置かれていた。現在は、同村の向里（ムカイサト）に八丈支庁（東京都）があり、八丈島全体および属島の小島と青ヶ島とを統轄している。同村には、支庁のほかに東京区裁判所八丈島出張所、八丈島警察署および測候所がある。大賀郷は昔から行政・司法の中心地であると言うことができる。

これに対して、三根は新興村であって、経済的に島をリードしつつある。5か村のうちではもっとも商業的活動がかっぱつであり、築港（神湊港）工事も進んでいる。

大賀郷と三根との関係は、規模を小さくして、坂下の末吉と中之郷、樫立とのあいだにも見られる。

上の事情は、島の歴史的事情によって明らかになる。古く鎌倉時代に島へ渡り、全島を統治した北条氏の代官長戸路七郎右衛門貞政が本拠としたところは末吉であった。そして、江戸中期ごろまでは、末吉の長戸路家、大賀郷の菊池、奥山の両家が幕府の地役人の家柄として島内に大きな権力をもっていた。ところが、江戸中期以後は、八丈島の特産「黄八丈」がたくさん幕府に納められることになり、その出荷を引きうけた「お船所」が商業的利潤を得て、しだいに勢力を得てきた。その「お船所」が、三根の高橋家、中之郷の笹本家、山下家、樫立の服部家であった。幕府では、かれらの経済的勢力を利用して、かれらを地役人より上の「取締役」の役につけた。各村を支配したこれらの家の性格がそのまま5か村の機能的性格をつくり、それが今日まで残っている。

なお、代官の記録には、各村の報告が次の順に記されている。

O→M→S→N→K

4. 産業の状況

現在、5か村の主要産業はいずれも農業であって、その点大きな違いはない。「東京都八丈支廳管内概況」(1949年4月1日)によって、各村の産業別人口構成を示すと次のとおりである。

表 1

	農	漁	商	土工建業	自由・公務	無職	計
O	2,431(62.8)%	220(5.8)%	83(2.1)%	303(7.9)%	586(15.2)%	239(6.2)%	3,873(100)%
M	2,864(68.6)	296(7.1)	98(2.3)	363(8.7)	465(11.1)	91(2.2)	4,177(100)
K	1,068(82.4)	5(0.4)	27(2.1)	52(4.0)	106(8.2)	37(2.9)	1,295(100)
N	1,412(71.8)	154(7.8)	87(4.4)	54(2.7)	183(9.3)	79(4.0)	1,969(100)
S	929(79.6)	84(7.2)	23(2.0)	8(0.7)	87(7.5)	35(3.0)	1,166(100)
計	8,704(69.8)	765(6.1)	318(2.5)	785(6.3)	1,427(11.4)	481(3.9)	12,480(100)

特にめだつことは次のとおりである。

坂下は、坂上に比べて、商工業が多く、農業がすくない。大賀郷は三根に比べて自由、公務が多く、農業がすくない。三根は大賀郷に比べて、自由、公務がすくなく、農業が多いが、商工業ではやや上廻る。坂上3か村のうち、中之郷は自由、公務および商工業においてもっとも多く、坂上の中心をなしている。樫立はもっぱら農業で、漁業がふるわないのに対し、末吉は漁業がややさかんである。

(参考) 姓 の 分 布

八丈島の五つの村の姓の分布には次のような特色が見られる。

(1) 同じ姓が同じ村にかたまりかたまって分布する傾向が見える

(2) 村にそれぞれ特有の姓が分布する

姓の分布のこのような特色は五つの村の社会的独立性を知るひとつの手がかりとなる。

表 2　5か村の姓の分布状態（1949. 6. 30）

	最も世帯数の多い姓 五つ						他村に多い五つの姓の分布状態									総計
O	菊池	奥山	淺沼	沖山	佐々木	（計）	山下	小宮山	高橋	伊勢崎	大澤	玉置	佐藤	持丸	笹本	その他	
	261 (26.0)	124 (12.4)	66 (6.6)	58 (5.8)	49 (4.9)	558 (55.6)	9 (0.9)	8 (0.8)	8 (0.8)	6 (0.6)	5 (0.5)	5 (0.5)	4 (0.4)	3 (0.3)	0	411 (40.9)	1,004 (100.0)
M	淺沼	持丸	小宮山	奥山	高橋	（計）	沖山	菊池	佐々木	佐藤	山下	大澤	笹本	伊勢崎	玉置	その他	
	188 (18.5)	83 (8.2)	62 (6.1)	60 (5.9)	35 (3.4)	428 (42.1)	31 (3.0)	29 (2.9)	15 (1.5)	11 (1.1)	10 (1.0)	10 (1.0)	9 (0.9)	3 (0.3)	3 (0.3)	458 (45.0)	1,017 (100.0)
K	笹本	佐々木	伊勢崎	奥山	佐藤	（計）	山下	大澤	菊池	淺沼	沖山	持丸	小宮山	高橋	玉置	その他	
	33 (13.0)	27 (10.7)	26 (10.3)	26 (10.3)	17 (6.7)	139 (54.9)	15 (5.9)	12 (4.7)	5 (2.0)	3 (1.2)	2 (0.8)	0	0	0	0	87 (34.4)	253 (100.0)
N	菊池	山下	大澤	佐々木	沖山	（計）	奥山	淺沼	笹本	高橋	伊勢崎	持丸	小宮山	佐藤	玉置	その他	
	87 (22.0)	44 (11.1)	31 (7.8)	25 (6.3)	23 (5.8)	210 (53.0)	10 (2.5)	4 (1.0)	3 (0.8)	2 (0.5)	1 (0.3)	0	0	0	0	166 (41.9)	396 (100.0)
S	沖山	淺沼	佐々木	菊池	佐藤 玉置	（計）	奥山	持丸	伊勢崎	山下	大澤	高橋	小宮山	笹本		その他	
	133 (50.4)	32 (12.1)	21 (8.0)	20 (7.6)	4 (1.5)	210 (80.8)	2 (0.8)	2 (0.8)	1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	0	0		44 (16.6)	264 (100.0)

表2は、物資配給台帳により全世帯について調べた結果である。そのうち特にめだつことは次のとおりである。

Sの「沖山」は50%以上であり、そのかたまりの度合は注目に値する。しかも、「沖山」はS以外にはあまりあらわれない。

ついで、OおよびNの「菊池」がめだつ（22.0～26.0%）。「菊池」は、ほかの村では 7.6～2.0%にしか達しない。

（3） 他かの村に対する主観的意識

5か村のそれぞれの現住者が、じぶんの村およびほかの村の言語に対してどういう意識をもっているかについて、調査票の調査項目6で得られた結果を資料にして考えてみる。

調査項目6は次のような質問である。「島のことばはずいぶんかわっているようですが、あなたの村はほかの村のことばに比べてどうでしょうか。大賀郷のことばは？　三根のことばは？……」

これに対して得られた答は、かなり多様であり、その上、複雑であるので、厳密な分析は困難である。ここでは一般的傾向を印象的に述べることとする。

まず、じぶんの村の言語についてほめる傾向がいちじるしい。

	O	M	K	N	S
ほめる人の数	18 (36.8%)	15 (24.5%)	5 (35.7%)	6 25.0%)	6 (35.2%)
答えた人の数	50	61	14	24	17
被調査者の数	63	69	21	41	22

つまり、どの村も$\frac{1}{4}$ないし$\frac{1}{3}$のひとがじぶんの村の言語をほめているわけである。そのほめ方は次のようである。

> よいことば（O M K S）、ていねいなことば（O M K）、標準語になりやすい、標準語に似ている（O M N S）、やさしみがある（N）、あっさりしている（O）

Kだけが、「標準語になりやすい。標準語に似ている」と意識していないことが注目される。

さて、O については、K をのぞいて、ほかの村では比較的ほめていることと、OとMとの類似（O＝M）を指摘していることとが注目される。

MはO に対して:標準語に近い（$^{10}/_{6}$）、わかりやすい（$^{9}/_{61}$）、O＝M（$^{19}/_{61}$）

KはO に対して:そさつ、悪いことば（$^{4}/_{24}$）

NはO に対して:標準語に近い（$^{2}/_{24}$）、きれいな、やさしいことば（$^{3}/_{24}$）、O＝M（$^{4}/_{24}$）

SはO に対してなめらか、おだやか、やわらか、ていねい（$^{4}/_{17}$）、O＝M（$^{8}/_{17}$）

つづいて、Mについては、OおよびKでは悪く言うほうが多く、NおよびSでは、むしろよく言うほうが多い。やはり、OとMとの類似を指摘している。なお、Kに、「Mの [ou]（例えば [tour] 俵）が耳につく」と答えている者がいる（[ou] はMの音韻の重要な特徴のひとつ）。

Kについては、O,M およびNでは、非常に変っていることを強く意識している。Sにはむしろ悪口を言う傾向がある。具体的な答は次のようである。

ていねい、純朴（O M N）、昔のことばを使っている（O M N）、独特のことば（O）、全然ちがう（O M N）、早口（O M）、舌切れ（O）、ズーズー弁（M）、聞きづらい（M）うるさい、荒い、強い、聞きづらい（S）

次に、Nについては、各村で「Kと似ている、Kよりは聞きやすい」と意識している傾向がめだつ。ただし、Kでは「らんぼう、荒っぽい」のように悪く言う。Nについて「標準語」になりやすく、OないしMと似たところがあると答えている被調査者（O M）のあることは注目すべきであろう。NがO ないしM と似たところがあると答えている者はOで 50 人のうち 5 人、 Mで 61 人中 15 人ある。

最後に、Sについては、ほとんど各村とも、「ずいぶん変っている」と答える者と「標準語になりやすい」と答える者とがあり、それぞれすくなくない。

Oでは　ききにくい、なまりがひどい　(11/50)「50 人中 11 人」
　　標準語が多い、東京なれが早い　(4/50)
Mでは　かわっている、ききづらい　(15/61)
　　東京語に近い　(6/61)
Kでは　全然ちがう、ききにくい　(5/14)
Nでは　かわっている、荒い　(9/24)
　　東京語に似ている　(1/24)

なお、各村とも一般に、言語の上で村がたがいに違っていると意識している。

以上を総合して、主観的意識による5か村の言語の違いは次のようであると言えよう。Oは「いいことば」としてほめられ、MとOとの類似が指摘される。Kはずいぶん変っていると考えられており、Nは、Kに似ているがKほどは変っていないとされている。Sについては、一方、変っていると意識されるとともに、他方、「標準語」になりやすいと考えられている。

以上は、次に述べる客観的な分析による言語の違いとも比較されるべきである。

なお、島の民謡「シュメ節」にも村ごとの言語の違いが歌われている。

au wa kaʃitate,
hjonge wa mitsune,
a'teketʃi: nakanojo: ʃa: dʒi: dokoro

これは樫立で聞いたものであるが、全島において歌われているようである。ただ、中之郷では ʃa: dʒi: dokoro を sedʒidokoro としている点が違う。

さて、樫立で聞いた解釈によると、au は樫立において、なにかを求められて断るときの「いや」にあたる。hjonge は三根において「つまらない」の意味。a'teketʃi: はよく分らない。ʃa: dʒi: dokoro は、中之郷にサイゾウという人が数人もいたためにそう言うとのこと。sedʒidokoro は、「おせ

じを言うところ」の意味。

この民謡の文句の意味は全体としてはつきりしないが、ともかく各村の言語的違いを、特徴的な語によって示したものである。

(4) 共通語を話す度合

本論 IV で述べたように、外来者(内地ないし小笠原、南洋から来た者)をのぞけば、「共通語を話す度合」は次の順に低くなる。

O→N→M →K

その上、同じく外来者の場合をのぞけば、「村の共通語を話す度合」はいかなる集団に分けて分析してもほぼ一定である。

表 3

階級 / 全員	人數	A^{+}+A(A)	B+C(C)
O	60人	66%(43)	34 (2)
M	66	52 (35)	48 (9)
K	21	43 (29)	57 (5)
N	33	64 (33)	36 (0)
S	20	50 (40)	50 (0)

表 4

階級 / 土地人	人數	A^{+}+A(A+)	B+C(C)
O	38人	58 (37)	42 (3)
M	58	41 (24)	59 (6)
K	16	38 (25)	62 (0)
N	21	57 (14)	43 (0)
S	16	50 (38)	50 (0)

土地人 とは、全員から、外来者、つまり、内地ないし小笠原、南洋から移住した者をのぞいた者。

表 5

段階 / 純土地人	人數	A+＋A(A+)	B＋C(C)
O	32人	63%(34)	37 (3)
M	51	41 (23)	59 (12)
K	16	37 (25)	63 (0)
N	17	53 (18)	47 (0)
S	14	50 (33)	50 (0)

「純土地人」とは、「土地人」のうち、生れた村と同じ村に住んでいる者。

表 6

段階 / 外來者	人數	A+＋A(A+)	B＋C(C)
O	22	91%(54)	9 (0)
M	13	92 (84)	8 (0)
K	5	60 (40)	40 (20)
N	12	83 (67)	17 (0)
S	4	50 (50)	50 (0)

「外來者」とは、内地ないし小笠原、南洋から移住して來た者。

なお、表7が示すように、全員から純土地人をのぞいた者の割合が多ければ多いほど、つまり、純土地人の割合がすくなければすくないほど、「共通語を話す度合」は高くなる。

表 7

	純土地人の A+＋A(＝K-臨値)	純土地人をのぞいた者の割合
K	37%	24%
M	41	23
S	50	30
N	53	48
O	63	50

次に、非共通語で反應した語の割合（点数）は次のようである。

O	M	K	N	S
7.6点	12.8	10.5	10.5	10.2

したがって、上の意味における「共通語を話す度合」の順に村を並べれば、

O→S K N→M

さきにあげた K- 数値 (A⁺+A) から見た「共通語を話す度合」による村の順と比較すると、次のとおりである。

O→N→M S→K (K-数値)

O→S K N→M (点数)

Oが、つねに、「共通語を話す度合」について特に高いことが注目される。

(5) 言語の構造的特徴

1. 音 韻

音韻について各村がことなる形で対応する型は次の三つである。

1. OS/M/KN
2. O/M/KN/S
3. OKNS/M

上の1.は

OS [e:] /M [ei] /KN [ja]

のように対応するもので、その例は次のようである。

(1) 共通語 ai に対応するもの

例 1. 共通語 daiko(n)「大根」 OS de:ko M deiko KN dʒa:ko

例 2. 共通語 rainen「来年」 OS de:nen M deinen KN dʒa:nen

例 3. 共通語 hitai「額」 O ʃitai (例外) S ʃite: M ʃitei KN ʃitʃa:

例 4. 共通語 kata「肩」cf. kaina OS ke:na M ke:na (例外) KN kja:na

例 5. 共通語 kjo:dai「兄弟」O kjo:de: MS ? kjo:de:(例外) KN kjo:dʒa:

例 6　OS me:re　K mja:re　M me:re (例外)「食べろ」[maire]
例 7　K hja:rigutʃi「入り口」　N hja:roɯka「はいったわ」[hairu]
例 8　KN ho:bja:「ともだち」[ho:bai 朋輩]
例 9　KN dzoɯdʒa:na「粗末な」[dzoɯdzaina]
例10　OS ke:darui「疲れた」[kaidarui] cf. M ke:darui

例11　O -kure:dara「くらいなら」[-kurainara]
例12　O more:ni「もらいに」[moraini]
例13　O nare:「北風」[narai]
例14　M dzudzei「自在」[dʒidzai]
例15　K mja:ritasoga「行きますが」[mairi-]
例16　N dʒa:doko「台所」[daidokoro]
例17　N tsukja:jare「使いなさい」[tsukai-]
例18　N ja:da「間」[aida]
例19　N dʒi'puɯkurja:「十分くらい」[-kurai]
例20　S he:'puki「南風」[haibuki]
例21　N hja:「灰」[hai]

[例外]
ai
1. ONS -nai　例　a'tanai「あったね」
2. NS -kai?　例　ikokai?「行くか」
3. S -gai　例　i:tasogai「言いますよ」
4. O daidokoro「台所」 tarai「たらい」 narai「北風」 haibuki「南風」 hai'te「はいって」 taisau「体操」(金土川) ʃokai「疎開」 tetsutai「手伝い」 tane maite「種まいて」

M heitaitɛngome「くも (虫)」 sotai「世帯」 mainitʃi「毎日」 tʃatʃai「熱い」 dze'tai「絶対」 taihen「大変」 i'pai「一杯」 jerai「偉い」

K saiku「細工ものをする人、大工」 dzoɯdzaina (例 9 と同一人)

N narai「北風」 kumagai「ある種類のさつまいも」 aɯdai「なんだい」 onegai「お願い」 urusai「汚い」

S narai「北風」 haibuki「南風」 dokodai「どこだい」 taigidaʃi「大儀だし」 nidai「2 台」 taitʃigaida「大違いだ」 heitaitɛngome「くも (虫)」 tsukaijare「使いなさい」 saiku「大工」 itaiɯdesuga「痛いんですが」
5. KN okitaina「起きたいな」

6. OMKNS -nai 例 dekonai「できない」 ʃiranaidaro:「知らないだろう」
7 ON -mai 例 narumai「なるまい」

その他

1. O kanja:「家内」[kanai] konja:da「此の間」[konaida] kja:darui「疲れた」[ka'tarui] murja:e「もらいに」[moraini] nja:daro:「ないだろう」[naidaro:] jamja:「病」[jamai] o'kanja:「こわい」[o'kanai] norumja:「乗るまい」[norumai]

2. S dzudʒa:「自在」[dʒidzai]

3. K seiku「細工」[saiku]

4. M で e: のあらわれる例: otoge:「あご」[otogai] kasuge:「かすがい」[kasugai] he:me「はい(虫)」[hai] tare:「たらい」[tarai] nare:「北風」[narai] ʃinpe:dara「心配だ」[ʃinpai-] domone:「どうもない」[nai] など

(2) 共通語 ae に対応するもの

例 1 共通語 kaeru「かえる(動物)」 O ke:ru(me) M ke:ru(me)(例外) KN kja:ru(me) S kaeru(me)(例外)

例 2 共通語 nae「苗」 OS ne: KN nja: M nei

例 3 共通語 omae「お前」 OS ome: KN omja: ; 例外 O omae M omja:, ome: N ome:

例 4 S jame: N jamja:「山へ」[jamae]

例 5 O kange:ru「考える」[kangaeru]

例 6 O je:ne「八重根」[jaene]

例 7 O wagase:「私さえ」[-sae]

例 8 S sobe:「側へ」[soba e]

例 9 S name:「名前」 K namja:「名前」[namae]

例10 K jakubja:「役場へ」[jakuba e]

[例外]

1. O mukja:ni「迎えに」[mukae ni]

2. M ke:ru「帰る」[kaeru] kange:ru「考える」[kangaeru] kote:ru「耐える」[kotaeru] ko'kube:「台所へ」(ko'kuba「台所」e) kase:「かさ(雨の降るときの)へ」[kasa e]

3. ae で現われる例: O tontsubae「頂上へ」 jaene「八重根」 jamae「山へ」 kaeru「帰る」 M kaesu「帰す」 N weʃimae「上へ」 S kaeru「帰る」

jamae「山へ」

（3） なお、次のような例がある

例 1 OMS kawe:ʃike NS kawja:ʃike「かわいらしい」 ただし、O kawja:tʃike K kawe:ʃike もある。

例 2 OS atsuke: kaku M atsuke kaku, atsukeo kaku NS atsukja: kaku「あぐらをかく」 ただし、O atsukja:, atsukai もある。

例 3 O ame:goʃite, amaegosuru M ame:goʃite, ameigosuru KN amja:-gosuru「甘える」

例 4 OS e:mu M eimu KN jamu「歩く」

2 の O/M/KN/S と対立するものには次のふたつがある。

O [o:]/M [ou]/KN [oʊ]/S [a:] のように対應するものと、

O [e:]/M [ei]/KN [ê:]/S [i:] のように対應するものとがある。いま、前者を 2·1、後者を 2·2 とすれば、2·1 には次のような語が属する。

（i） 共通語 awa に対應するもの

例 1 共通語 tawara「俵」 O to:ra M toura KN toʊra S ta:ra

例 2 共通語 awamotʃi「あわもち」 O o:motʃi(:) M oumotʃi(:) KN oʊmotʃi(:) S a:motʃi(:)

例 3 O mo:rijado「廻り宿」

例 4 K koʊ「水が自然に流れているのをためたところ」 M は同様の意味で kawa を用いている。

例 5 O ko:mura「北風」 N koʊmura「北風」 S ka:mura「北風」 ONS には kawamura (kadze) の形もある。

例 6 N tʃigoʊnai「違わない」[tʃigawanai]

例 7 O so:runa「さわるな」[sawaruna]

例 8 O so:gu KN soʊgu「しかる」[sawagu] cf. M waikjuru, KNS idʒimeru [しかる]

（ii） 次の諸例も（イ）と同様の対應を示す（類似の対應を含む）

例 1 O geto: M getou KN getoʊ S geta: 共通語 geta o「下駄を」（共通語 ao に対應する例はこのほかにはなかった）

例 2 O marubo: M marubou KN maruboʊ S maruba:「死んだ（死んだ人）」

例 3 OM joso:suru KN josoʊsuru S josa:suru「手傳う」

例 4　OM ho:(dono)　KN hoʁ(dono)「母親」

2·2 には次のような語が属する。

（i）共通語 ui に対應するもの

例 1　共通語 tenugui「てぬぐい」　O tenege:　M tenegei　KN tenegé:　S tenegi:

[例外]

1. OMKNS huri:　共通語 hurui「ふるい（ふるいでふるう）」
2. OMKNS uguisu, ugujusu, ugurusu　共通語 uguisu「うぐいす」
3. O suidʒiba「炊事場」
4. O -tsuite「…について」
5. O suijarodʒa「吸いますよ」
6. N tsuide「ついで」

（ii）共通語 e: に対應するもの

例 1　共通語 sense:「先生」　O sense:　M sensei　KN senʃé:　S sense:

(例外)

例 2　共通語 te:ne:「ていねい」　O te:ne:　M.teinei　KN te:né:　S tʃi:ni:

例 3　M heika「陛下」

例 4　M teito「帝都」

例 5　O me:ʃi「迷信」

[例外]

1. K me:ʃi「迷信」
2. S heitai「兵隊」
3. S me:dʒihe:ka「明治陛下」

(iii) 共通語 oe に対應するもの

例 1　O koge:ru　M kogeiru　KN kogé:ru　S kogi:ru「凍い」 cf. 共通語 kogoeru

例 2　共通語 kokoe「ここへ」　O koke:　M kokéi　KN kokê:　S koki:

例 3　共通語 dokoe「どこへ」　O dokei　M dokei　N dokê:　S doki:

例 4　O soke:「そこへ」

例 5　KN obé:te「知る」 cf. 共通語 oboeru

(iv) その他のもの (?)

O he:te: M heitei K hé:té: N hé:té: S hi:tʃi:「久しく」

上の 3.(129 ページ) の OKNS/M は

OKNS [o:] / M [ou]

のように対応するもので、その例は次のようである。

すべて、共通語 [o:] に対応するもの

例 1 共通語 ga'ko:「学校」 OKNS ga'ko:/M ga'kou

例 2 共通語 so:to:「相当」 OKNS so:to:/M soutou

例 3 共通語 (o-)ko:ko(:)「つけもの」 OKNS ko:ko:/M koukou

例 4 共通語 to:kjo:「東京」 OKNS to:kjo:/M toukjou

例 5 共通語 o:kago:「大賀郷」 OKN o:kago:/M oukagou

例 6 共通語 dʒo:bu「丈夫」 OKNS dʒo:bu/M dʒoubu

例 7 共通語 so:dan「相談」 OKNS so:dan/M soudan

例 8 共通語 binbo:「貧乏」 OKNS binbo:/M binbou

例 9 共通語 so:ko「倉庫」 OKNS so:ko/M souko

例10 共通語 honto:「本当」 OK honto:/M hontou

例11 共通語 ro:soku「ろうそく」 OKNS ro:soku~do:soku/M rousoku~dousoku

例12 共通語 dzo:ri「草履」 OKNS dzo:ri~dʒo:ri/M dzouri~dʒouri

例13 共通語 to:ika「遠いか」 OKNS to:keka~to:ika/M toukeka~touika

以上の例11—13については、調査票の結果を示すことができる。これによっても、ou が M の特徴的代表形であることは明らかである。

表 8

ro:soku

	O	M	K	N	S
o:	32人	30	13	20	15
ou	1	21	2	2	0
ou の割合	3.0%	41.2%	13.3%	9.1%	0%

表 9

dzo: ri

	O	M	K	N	S
o:	33人	23	14	14	14
ou	1	26	0	5	0
その他	0	2	2	2	0
ou の割合	2.9%	51.0%	0%	23.8%	0%

表 10

to: ika

	O	M	K	N	S
o:	34人	16	13	20	14
ou	0	33	2	0	0
その他	0	0	0	1	0
ou の割合	0%	67.3%	13.3%	0%	0%

2. 文法

文法上のいろいろな特徴について村別の対立を見るために、この調査の後半におこなった「方言調査」における実験的方法（質問的方法）による結果および随時おこなった観察的方法による結果を利用した。前者は、厳密に、被調査者を、純土地人に限った。

なお、戸別訪問による調査の結果をも参考までにつけ加えた。また、この調査における被調査者が純土地人に限られないとは言うまでもない。

さて、文法上の特徴についての村別の対立には次の五つの場合がある。

1. OMNS/K
2. OM/NS/K
3. OM/KNS
4. OM/KN/S
5. OMS/KN

1. OMNS/K のような対立を見せるものは次のとおりである。

(1) OMNS -do: mo, -doumo/K -do: ni「…けれども」

(2) OMNS -domo/K doɴ「…けど」

(3) OMNS -ɴte/K -ite「…から」

(4) OMNS ure/K ore「あれ」

(1) OMNS -do: mo, -doumo/K -do: ni に該当するものは、例えば、

「行くけれども」

OMNS ikedo: mo, ikedoumo/K ikedo: ni

なお、K. 伊郷名のある個人（女、20代、インテリ）においては -do: ni と -do: mo とが平行してあらわれる。OMの影響をうけているのであろう。

akakaido: ni	「赤いけれども」
akakaredo: mo	「赤いけれども！
okitaido: mo	「起きたけれども」

各村における例を示せば次のとおり。性別のあとの数字は年令を示す。

ikedo: mo O 女30; S 女45; ikedoumo M 女47/ikedo: ni K 男33, 50, 67,「行くけれども」

okiredo: mo O女16, 53; M 女47; N 男54; S女 20/okiredo: ni K 男33, 67「起きるけれど」

akakedo: mo O 女78; M 女47; N 男54, 女70; S 女20, 30 / akakedo: ni K 男33, 67「赤いけれども」

akakaido: mo O 女53; M 女47, 68; akakaredo: mo N 女20, 34; O女78; S女20, 34/akakaido: niK(伊郷名) 女20代「赤いけれども」(意味は現在akakedo: -mo とほとんど同じ)

ikaido: mo O 女30, 53; M 女47; ikaidoumo M 男47, 女68; ikaredo: mo N 女70; S女25/ikaredo: ni K 男33, 67「行ったけれども」

kitaido: mo O 女53; M 女47; kitaidoumo M 女68; kitaredo: mo N女70/kitaredo: ni K 男33, 67「来たけれども」

(2) OMNS -domo/K -don に該当するものは、例えば

「遠へけれども～よいけれども」

OMNS to:kedomo/K jokedon

各村の例を示せば次のとおり。

ikedomo O 男65 「行くけれども」
to:kedomo O 女73 「遠いけれども」
kurujikedomo S 「苦しいけれども」
okitaredomo O 男65; N 「起きたけれども」
wara kogondomo M 女28 「わたくしはこんなだけれども」
akakaidon K 「赤いけれども」
dʒo:budonto jokedon K 男33, 67 「丈夫だといいけれど」

(3) OMNS -nte/K -ite に該当するものは、例えば

「行くから」

OMNS ikonte/K ikoite

なお、2. (5) を参照。すなわち、

	「行くから」	「行ったから」
OM	ikonte	iko:te
NS	ikonte	ikonte(N),ika:nte(S)
K	ikoite	ikonite

さて、各村における例は次のとおり。

ikonte O 男65, 女16, 40; N 男28, 54, 68; S 女45; ikojonte N 女68, 70/ikoite K 男37, 50, 67 「行くから」

kuronte O 女53; N28, 54; S 女20, 24; kurojonte N 女70/kuroite K 男33, 67 「來るから」

akakente O 女16; M 女28; S 女20/akakeite K 男33, 57 「赤いから」

(4) OMNS ure/K ore 「あれ」に該当するものは、各村において次のとおり。

ure O 女; M 女28, 40代、50代、70代; N 女68; S 女25/ore K 男33

「あれ」

uno O 男30; M 女20代、28, 48; N 男25, 54; S 女24/ono K 男33, 67

「あの」

uja O 男30; urja M 女68; N 男54; 女68; S 女24/orja K 男33, 67

「あれは」

2. OM/NS/K という対立を見せるものは次のとおりである。

（5） OM -te/NS -ɴte/K -ite 「…ったから」

（6） OM -goɴ/NS -gaɴ/K -goʊɴ 「いっしょに…しよう」

（7） OM ai-, wai-, are-, ware-/NS are-, ware-/K wai-, ware-

「わたくし」

(5) OM -te/NS -ɴte/K -ite に該当するものは、例えば、

「行ったから」

OM iko:te/N ikoʊɴte, S ika:ɴte/K ikoʊite

各村における例は次のとおり。

iko:te O 女16, 53; M 女28/ikoʊɴte N 男25, 54; ika:ɴte S 女29, 25/ikoʊite K 男67 「行ったから」

ikiɴno:te O 女16; M 女28/ikiɴnoʊite K 男33, 50, 67 「行かないから」

dʒo:budo:te O 女16; dʒo:budoute M 女28 「丈夫だから」/sogandoʊɴte, sogoʊndoʊɴte N 男54, 女68 「そうだから」; dʒo:budaɴte 「丈夫だから」/sandzuɴdoʊite K 男33, 67 「三寸だから」

(6) OM -goɴ/NS -gaɴ/K goʊɴ に該当するものは、例えば、

「行こう」

OM ikogoɴ/NS ikogaɴ/K ikogoʊɴ

なお、

kogoɴ/kogaɴ/kogoʊɴ	「このように」
sogoɴ/sogaɴ/sogoʊɴ	「そのように」
ugoɴ/ugaɴ/ugoʊɴ	「あのように」

-gondara/-gandara/-goendara　　「…(の)ようだ」

各村における例は次のとおり。

ikogon　O 男65, 女30, 40, 45, 71;　M 男27, 47,　女28, 33/ikogan　N 男25, 28, 54;　O (金土川)男50,　女30/ikogoen　K 男23, 50, 67「行こう」

(do:ʃini) odʒarogon　O 女;　M 男47/(do:ʃini) odʒarogan(jo:)　S 女20「(いっしょに) まいりましょう」

kitakegondara　O 女30「来たいようだ」

ainno:gondo: kiga ʃowano:　M 女20「会わないような氣がするね」

ikogandaraba　N「行くようなら」

なお、戸別調査による結果は次のとおり。

	O	M	K	N	S	計
ikogon	32	50	8	3	0	93
ikogan	3	1	1	19	14	38
ikogoen	0	0	9	2	0	11

これによっても、OM が圧倒的に ikogon を示し、NS が ikogan を示す。K では、ikogon と ikogoen が同じ勢力で行われている。もちろん、この調査の被調査者はそれぞれの村の純土地人（その村に生れ、そこに育った者）ばかりではなく、それぞれの村の現住者の代表であることは前に述べたとおりである。

(7)　OM ai-, wai-, are-, ware-/NS are- ware-/K wai- ware-「わたくし」に該当するものは各村において次のとおり。

OM

aidara　O 男30;　M 女28, 48, 68「わたくしだ」

aja　O 男30,　女16, 53;　M 女68「わたくしは」

waidara　O 男30;　M 女28, 68「わたくしだ」

waja　O 男30,　女16, 53「わたくしは」

aredara　O 男30,　女53, 78「わたくしだ」

aren　O 男30,　女16, 53;　M 女28, 48, 68「わたくしに」

waredara　O 男30,　女53「わたくしだ」

ware: M 女48「わたくしを」

NS

aredara S 女24「わたくしだ」
are: N 男54; ari: S 女24「わたくしを」
wara N 男25; warja S「わたくしは」
waredara S「わたくしだ」

K

waidara 男33, 50, 67「わたくしだ」
wara 男33, 50, 67「わたくしは」
waren 男50「わたくしに」
wari: 男50「わたくしを」

3. OM/KNS という対立を見せるものは次のようである。

（8） OM -aba, -raba/KNS -raba「(もし)…なら」

（9） OM -ido: mo, -redo: mo/KNS -redo: mo「…けれども」

(8) OM -aba, -raba/KNS -raba に該当するものは、例えば

（a）「(もし)赤いなら」

OM akaka: ba, akakaraba/KNS akakaraba

（b）「行かないなら」

OM ikindʒa: ba, ikindʒaraba/KNS ikindʒaraba

(a) に該当する例は各村において次のとおり。なお、(b) に該当する例は省略する。

OM

akaka: ba O 女53; M 女28, 47「(もし)赤いなら」
akakeda: ba O 女53; M 女47「(もし)赤いなら」
ikoda: ba O 男65; 女40; M 女28「(もし)行くなら」
okita: ba O 女53; M 女28, 47「(もし)起きたら」
akakaraba O 女78; M 女47「(もし)赤いなら」
ikodaraba O 男65; M 女68「(もし)行くなら」
okitaraba O 男65; M 女47「(もし)起きたら」

KNS

akakaraba K 男33, 67; S 女20, 34「(もし)赤いなら」

ikodaraba　N 男28, 54「(もし)行くなら」
okitaraba　K;　N 女70;　S 女25「(もし)起きたら」

戸別調査の結果は次のとおり。

	O	M	K	N	S	計
ikoda: ba	22	24	0	2	0	50
ikodaraba	5	3	4	12	3	26

これによっても、OM/KNS の対立を見ることができる。

(9)　OM -ido: mo, -redo: mo/KNS -redo: mo に該当するのは、例えば

(a)「赤いけれども」

OM akakaido: mo, akakaredo: mo/K akakaredo: ni, NS akakaredo: mo

(b)「言いたいけれども」

OM i: takaido: mo, i: takaredo: mo/KNS i: takaredo: mo

(b) に該当する例は各村において次のとおり。なお、(a) に該当する例は省略する。

OM

akakaido: mo　O 女53;　M 女47, 68「赤いけれども」
ikodaido: mo　O 女16;　M 女47「行くのだけれども」
ikaido: mo　O 女30, 53;　M 女47「行ったけれども」
okitaido: mo　O 女16, 53;　M47「起きたけれども」
akakaredo: mo　O 女78「赤いけれども」
nosetaredo: mo　O 男65「載せたけれども」
okitaredo: mo　M 女68「起きたけれども」

KNS

akakaredo: ni　K 男67; akakaredo: mo　S 女20, 34「赤いけれども」
dʒo: budaredo: ni　K 男67; dʒo: budaredo: mo　N 男54;　S 女20, 25「丈夫だけれども」
ikaredo: ni　K 男67: ikaredo: mo　N 男70;　S 女25「行ったけれども」
okitaredo: mo　N 男25, 54,　女68;　S 女25, 34「起きたけれども」

4.　OM/KN/S という対立を見せるものは次のとおりである。

(10)　OM -ra/KN -ʃa: /S -tʃe:　(代名詞の複数語尾)

上に該当するものは、例えば、

「わたくしたち」

OM waira (,warera)/KN warenʃa: /S warentʃe:

各村における例は次のとおり。

OM

waira　O 女53, 70;　M 女68「わたくしたち」
aira　O 女16;　M 女47「わたくしたち」
ome:ra　O 男30, 女16;　M 女28「あなたがた」
unura　O 男30;　M 女28「おまえら」
koira　O 男30「これら」

KN

warenʃa:　K 男33, 67;　N 男11「わたくしたち」
omja:ʃa:　K 男33, 67;　N 男54「あなたがた」
omjanʃa:　N 男54「あなたがた」
unanʃa:　K 男33, 67;　N 男25, 54, 女68「おまえら」
koreiʃa:　K 男25「これら」
korenʃa:　N 男25, 54「これら」
koraiʃa:　K 男25「この人（目上）たち」
darenʃa:　K 男33, 67;　N 25, 54「だれたち」
narenʃa:　N 女68「おまえら」(unanʃa: より、いっそうののしる時に用いる)

S

warentʃe:　女24「わたくしたち」
omintʃe:　女24「あなたがた」
darentʃe:　女24「だれたち」
narentʃe:　女24「おまえら」

5. OMS/KN という対立を見せるものは次のとおりである。

(11)　OMS -nde/KN -'de

上に該当するものは、例えば、

「死んで」

OMS marunde/KN maru'de

ただし、Sにおいては、両形がほぼ同じ勢力で行われているらしい。

-bu. -gu, -mu に終る動詞について一般的に上のような対立が見られる。

各村における例は次のとおり。

OMS

marunde　O 男65; M 女28; S 女34「死んで」

isonde　O 女40;　M 老女「急いで」

asonde, asunde　M 女40;　S「遊んで」

ただし、

jasu'de　O 女70,　S「休んで」

iso'de　S 男20「急いで」

-nde の方が有勢。

KN

maru'de　K 男 33, 67;　N 男20「死んで」

ojo'de　K 女20;「泳いで」

ja'de　K;　N 男13, 54「歩いて」

ただし、

marunde　N 男11「死んで」

asonde　K (他郷名) 女20「遊んで」

-'de の方が有勢。

戸別調査による結果は次のとおり。

	O	M	K	N	S	計
isonde	28	41	0	3	3	75
iso'de (iso'te)	2	3	16	16	4	41

KN と OM とは明らかに対立するが、Sには両方の形が行われていて、どちらともきめがたい。

3. 語い

ここで扱う語いは、おもに、III (2) 3 で述べた50語である。この50の共通語の語形に当る各村の語形（共通語および非共通語）は 145 ページ以下にあげるとおりである。

なお、その前に、50語以外に、戸別訪問による調査において調べた「し

かる」,「歩く」および「方言調査」の際にたまたま観察し得た「知っている」の3語について特に述べれば次のとおりである。

「しかる」については、各村、次のように分布している。

	O	M	K	N	S	計
0 ʃikaru	22	12	4	9	5	52
1 so:gu	29	0	1	0	0	30
2 waikjuru	1	50	0	0	0	51
3 idʒimeru	5	0	13	29	14	61
4 sawagu	1	1	0	0	0	2
7 okoru	4	3	2	2	2	13

共通語形をのぞけば、

O so:gu
M waikjuru
K idʒimeru
N 〃
S 〃

したがって、

O/M/KNS

のような対立を見ることができる。

「歩く」については、

	O	M	K	N	S	計
0 aruku ajumu	23	16	6	16	7	74
1 e:mu	30	35	0	0	15	80
2 cimu	0	15	0	0	0	15
3 jamu	1	0	14	23	0	38
4 juku	3	3	1	2	0	9
						216

共通語形をのぞけば、

O e:mu

M eimu～e:mu

K jamu

N 〃

S e:mu

したがって

OSM/KN

のような対立を見ることができる。

次に、共通語の「知っている（知る）」にあたる語を。

OMNS で ʃo'kja

K で obé:ru

と言う。前者は、akakja「赤い」と同様な活用をし、後者は deru「出る」と同様な活用をする。

ʃo'kja 知っている
ʃokunakja 知らない
ʃokeni 知っているのに
ʃoke hito 知っている人
ʃoka(r)aba 知っているなら
ʃoka'te:ja 知っていると言うことだ

obé:nai 知らない
obé:te arowa 知っているよ
obé:tarara 知っていた

さて、50の共通語の語形にあたる各村の語形をあげよう。20, 60などの数字は、被調査者の年令が20才代、60才代であることを示す。

（1）夕 立

O	ju:datʃi [30,40,50,60,70]	bu'kake, bu'kakiame [70] [50]	×
M	ju:datʃi, ju:tatʃi [40] [50,60]	×	odoʃiame* [60]
K	×	bu'kake [30* 50,60]	×
N	×	bu'kake* [50,60,70]	×
S	ju:datʃi [20,30,80]	×	×

* にわか雨の意。

(2) 夕 方

O	×	kuregata [60,40]	kureje: [70]	kurejai [70]	kure:, [30,70]	hinokure [40]
M	×	kuregata [40]	kureje, kurje: [40] [60]	×	kure: [ ]	×
K	ju:gata, jo:gata [50] [30,60]	kuregata [60,30]	×	kureja [30,50,60]	×	×
N	×	kuregata [10,20,50,60,70]	×	kure(:)ja [20,50]	×	×
S	×	kuregata [30,20]	kureje:gata [80]	×	×	×

(3) おけ(水を入れる)

全村 oke

(4) 井 戸

O	ido judo kawa*** [40*,50,60,70] [70]	nagare'kawa [70]	tanku*** [70]	×	×	
M	ido judo [0] [70]	×	×	×	tourago**** [40]	tenbougawa [40]
K	× × koe [30,50,60]	×	×	×	×	
N	× judo [0**60,70]	×	×	×	×	
S	ido judo [40] [30,80]	×	×	×	×	

*しみずを汲む所 **泉をためておく所 ***タンク ****しみずのわいてたまっている所

(5) 水たまり

O	midzutamari, tamari [30,40,50] [70]	×	×	×	
M	midzu'tamari [40]	dobu [50]	×	×	
K	×	dobu [30,50,60]	×	×	
N	×	dobu [50,60,70]	doro [70]	midzo [20]	
S	midzutamari [20,30,80]	×	×	×	

(6) かまきり

O	kamakiri [30,40,50*,60,70]	kasegi, kasegime [70**] [40,50**,70]	ba'tsime [40***,50**]	×	bo:katsugi [40]

M	kamakiri [40,60]	×	ba'tʃime [40**,60]	×	×	
K	×	kaseɡime [30,50,60]	×	×	×	
N	kamakirimuʃi [60]	×	×	ɡeɴbi:me, ɡeɴbe:me [70] [20,50]	×	
S	×	×	×	ɡeɴbi:me [20,30,80]	×	

*青色のもの　**紫色のもの　***人の悪口にも使う

(7)　う　そ

O	uso [50,70]	oso [40,50,60]	jamaʃu [50,70]	horahuki, [40,70]	hora:huku [50]	kitsune [70*]	×
M	×	×	jamaʃu: [40,60]	horo:huku [50]		×	×
K	×	oso [50]	jamaʃi [30,60]	×		×	tereɴ [30,50,60]
N	×	oso [50,60,70]	×	×		kitsune [10,20,50,70]	×
S	×	oso [20,30,80]	×	×		×	×

*悪口

(8)　地　面

O	dʒimeɴ [70]	midʒa [40,50,60,70]	×	×
M	×	midʒa [40,50,60]	×	×
K	×	midʒa, midza [30,50] [60]	×	×
N	×	midʒa [20,50,60,70]	hita [20]	×
S	×	midʒa [20,60]	×	dʒibeta [30,80]

(9)　ふるい(粉をふるいでふるう)

O	hurui, huri: [30] [30,40,50*,70]	muɡuruʃi [50**,60,70]	×	×	×
M	huri: [40***,50**]	muɡuruʃi [40*,50**]	nukahuri: [50]	×	×
K	huri: [30,50,60]	×	×	sosori [20]	×
N	huri: [20,60]	muɡuruʃi [50,60,70]	muɡihuri: [50]	×	×
S	hurui, huri: [80] [30]	muɡuruʃi [20,30****,80]	×	×	(oroʃi) dʒaru

*目のあらいもの(米選用)　**目の細かいもの(麹、ぬか用)　***大きいもの　****小さいもの

(10) 肩

O	kata [30]	ke:na [40,50,60,70]	×
M	×	ke:na [40,50,60]	hi'tʃo'te [50]
K	×	kja:na [30,50,60]	×
N	kata [20]	kja:na [50,60,70]	×
S	×	ke:na [20,30,80]	×

(11) かかし(田んぼのかかし)

O	kakaʃi [30,40,50,70]	odoʃi [30,40,50,70]	×	×
M	kakaʃi [40,50]	odoʃi [40,50]	tsutsumeʤaodoʃi [60]	×
K	×	odoʃi [30,50,60]	×	×
N	×	odoʃi [20,50,60*,70]	×	×
S	kakaʃi [20]	odoʃi [30]	×	toriodoʃi [80**]

*人形ミガラガラミを含む　**ミりおざしに使うなわを言う

(12) 稲

O	ine [30,70]	tabu [30,40,50,60,70*]	×
M	×	tabu** [50,60]	ne:**** [40,50,60]
K	×	tabu [30***,50**,60****]	×
N	×	tabu [20***,50,**30**,70**]	×
S	×	tabu** [20,30,80]	ne:**** [20,30,80]

*実の入って枯れるとき　**穂が出てから　***穂の出ないときも　****小さいとき

(13) ぼ　ろ

O	boro [40,50,60,70]	donsaboro [30]			kakou**** [30]	×
M	boro [40]	donsaboro:, [60]	donsakuboro*, [40]	donʤaboro** [40]	kakou**** [60]	×
K	boro [30,50,60]		×		kako:**** [30,60]	horo [50]

N	boro dondza***, dondzaboro*** [20] [50,60,70] [50]	×	horo**** [50,60,70]
S	boro (dondza) [20].30 昔	×	×

*いかにもきたないぼろ **ひどいぼろ ***ぼろ着 ****ぼろ布

---

(14) 太い薪

O	musukubi, muʃiki [40,50,60,70] [30]	gomi [30,40,50,70]	bo'ko [70]
M	musukubi [.0,50,60]	gomi [30,50,60]	×
K	musukubi [30,50,60]	gomi* [30,50,60]	×
N	mukubi [.0]	gomi [10**,20,50,60,70]	×
S	musukubi [20,30,80]	×	×

*まきの総称 **総称でもある

---

(15) おきゅう（おきゅうをすえる）

全村 jahi（ただしNに jahe [70] あり）

---

(16) 持って來る

全村 mo'te kuru

---

(17) 起きる

全村 okiru

---

(18) こく（稲や麦をこく）

O	ʃigoku [30,40,50,60,70]	naderu [50,60,70]	×
M	ʃigoku [40,50,60]	naderu [40]	×
K	ʃigoku [30,50,60]	×	×
N	ʃigoku [20,50*,70**]	naderu*** [70]	jagi'te**** [60]
S	ʃigoku [20,30,80]	×	×

*昔の稲こき機について言う **麦の場合 ***粟の場合 ****機械でこく

---

(19) すわる

O	suwaru [30,40]	iro [30,40,50,60,70]	hidʒamatsuke [50]	itasube [70]
M	suwaru [40]	iro [50,60]	hidzamadzuite [40]	×
K	×	iro [30,50,60]	×	×
N	×	iro [10,20,50,60,70]	×	×
S	suwaru [20,80]	iro [30]	hidʒamatsu'te [30]	×

(20) あぐらをかく

O	aguru, aguro [30] [40,70]	atsukja:, [70]	atsuke(:), [30,50]	atsukai [70]	adzukura [40]	igoro [70]
M	agura [4 ,60]	atsuke [40,50]			×	×
K	agura [30]	atsukja: [50,60]			×	×
N	×	atsukja: [20,50,60,70]			×	×
S	×	atsuke: [20,30,80]			×	×

(21) びっくりする

O	bi'kuriʃitara [40,70]	bu'tso:bete [30]	so:be:tara [40,70]	tʃobeitara [50]	tamaketa [30]	×
M	×	bu'tsobeita [50,60]	sobe:ru [50,60]	tʃobeita [60]	tamageta [40,50,60]	tsu'tsobeirowa [40]
K	×	bu'tʃobe:ru [30,50,60]	×	×	×	×
N	×	bu'tsobe:ru, [20,50] bu'tsobieta [60,70]	sobe:ru [20,50]	×	×	×
S	bi'kuriʃita [20,80]	bu'tsobi:tara [30]	×	×	×	×

(21) 手傳い人

O	tetsudai [70]	joso:ʃi, [30,40,50] josowaʃi, [60] joso [70]	×	
M	×	joso:ʃi [40,50,60]	×	
K	×	josoʊʃi, [50] josa:ʃi [30,60]	suke: [30,60]	
N	×	josoʊʃi, [20,50,60,70] josa:so hito [10]	×	
S	×	josasuru hito [20,30,80]	×	

(22) 疲れた (その1)

O	tsukareta [70]	×	ke:darui, darukja [70] [70]	ɡe'suriʃita [30,40,50,70]	×
M	×	×	ke:darui [50,60]	ɡe'suriʃita [40,50]	×
K	×	×	×	×	×
N	×	kutabireta [60,70]	×	×	kowakja [60]
S	×	×	ke:darui [20,30,80]	×	kowakute [30]

(23) 疲れた (その2)

O	×	×	×	
M	×	×	×	
K	pidʒikete, o'pidʒikete [30,60] [30,50,60]	kakutʃa:ru [30,60]	×	
N	×	×	hi'tʂiketa* [20]	
S	×	×	×	

* 20年前ごろ島に入って来た

(24) 晴着

全村 madara

(25) 年長者

O	meueno hito [70]	×	toʃijori, toʃori [70] [30,40,50]	dodʒiɴ [70]	×
M	meue [50]	×	toʃori [40,50,60]	×	×
K	×	×	toʃori [30,50,60]	×	×
N	×	×	toʃori [50,60,70]	dodziɴ* [60]	ojakata [20]
S	×	toʃiueno mono [80]	toʃori [30]	×	×

* 一ばんの年寄り

(26) かわいらしい

O	kawja:ʃi:, [60]	kawe:ʃikja, [40,50,70]	kawe:raʃikja [30]	joke [40,70]	×
M	kawe:ʃikja [40,50,60]			joke [40]	de:dʒiso: [50]
K	kawja:ʃike [30,50,60]			×	×
N	kwja:ʃike, [20,50,70]	kaja(:)ʃike [10,60]		×	×

S	kawe:ʃike [30,80]				joke [30]	×		

(27) 腐る

O	kusarowa [30,40,50,70]	×		suerowa [30,70]	×			
M	kusaru [40,50,60]	×		×	×			
K	kusaru [30,50,60]	hi:'kusaru [30]		×	×			
N	kusaru [20,50,60,70]	×		×	tokeru [20,50,60]			
S	kusaru [.0,80]	hi'kusarara [30]		×	×			

(28) 粗末な

O	somatsu [70]	dzora [60,70]	otsu: [60,70]	×	hendo: [30,40,50,70]	×	×	×	×
M	×	dzora [60]	otsudo: [40,50]	×	×	waruke [40]	×	×	×
K	×	×	×	×	×	×	×	dzondzaina, [60] dzondja:na [30]	×
N	×	×	×	hetadoe [.0,50]	×	×	o'kaʃike [50]	×	×
S	×	×	×	hetado [30]	×	×	×	×	deira [80]

(29) ひるむ

O	juwakja [30,40.50,60,70]	×	
M	juwakja [40,50,60]	×	
K	×	kati:ru, [60]	katʃi:ru [30,50]
N	×	kati:ru, [70]	kate:te [20,50,60]
S	juwakja: [20,30,80]	×	

(30) ながらく

全村 he:te:～heitei～hi:ti:～he:tʃi:～hi:tʃi:

(31) 茶わん

O	tʃawaɴ [30,50]	goki [30,40,50,60,70]	kikudzara [50]	dʒo:gi [老人]	nanatʃa [40,50,60,70]
M	×	goki [40,50]	kikudzara** [60]	×	×

K	×	gɔki* [50]	×	dʒɔ:gi, dʒɔ:bi*** [60] [30]	×
N	×	gɔki* [20,50,60,70]	×	×	×
S	×	gɔki [20,30,80]	×	×	nanatʃa [30]

*飯茶わん　**いくらか平たいもの　***茶わん一切

(32) おか（海に対して）

O	oka [40,50,60,70]	×	×	
M	oka [60]	jaburo [50]	×	
K	oka [30,60]	jaburo* [30,60]	okudʒi**** [50]	
N	oka [60,70]	jaburo**, jaburo [50] [20]	×	
S	×	jaburo*** [20,30,80]	×	

*家、器物の奥　**山、家の山　***家の外でも内でも山手の方　****暗いところ

(33) たくさん

O	ʃi'kari [30,40,50,60,70]	ʃo:bu [70]	dzonbun [30,70]	×
M	ʃi'kari [50]	×	×	×
K	ʃi'kari [30,50,60]	×	×	jera [50]
N	ʃi'kari [10,20,50,60,70]	×	×	×
S	ʃi'kari [20,30,80]	×	×	×

(34) 玉れに

O	tama(:)ni [30,40,50,70]	×	he:te: [60]
M	×	×	heitei [50]
K	tokitama, toki'tama [30,60] [30]	tokijama [60]	×
N	×	×	he:te:buri [60,70]
S	tama:ni, tokitama [30] [80]	×	×

(35) うらやましい

O	urajamaʃi:, [30]	urajamaʃikja, [40,50]	urja:maʃi: [70]	×	to'toʃigaru [60]
M	urja:maʃi: [50]			toʃiraʃikja [40]	×
K	urajamaʃi: [30,50,60]			×	×
N	urajamaʃike [60]			toʃiraʃi:	×
S	urajamaʃike [20,70]			×	×

(36) にじ

全村 nidʒi

(37) 腹を立ててぶすぶす言う

O	haro:ta'te [30,40,70]	suneru [30]	×	jakamaʃikja [50]	gudzuru [30,40,50,70]	×	×
M	haro:tatete [40]	×	×	×	×	×	×
K	×	×	muʃiga wa'te [30,50,60]	×	×	idʒirete [50,60]	×
N	×	×	muʃiga wa'te, [20,50] muʃo wakaʃite [60]	×	×	×	×
S	×	×	×	×	×	×	hukurete [80]

(38) 惜しい

O	oʃi: [30,40,50,70]	mo'tainai [70]		a'taraʃi [60]
M	oʃi: [60]	mo'te:nakja [40]		a'taraʃi: [50]
K	×	mo'tʃa:na'kja, [30,60]	motʃana(koto) [50]	×
N	oʃi: [60,70]	×		×
S	oʃike: [20,30,80]	×		×

(39) うるさい

O	urusai, urusakja [30,70] [40]	jakamaʃi:, [30,70]	jakamaʃikja [50]	kitanai [60]
M	urusai, urusakja [60] [50]	jakamaʃi:, [40,50]	jakamo:ʃikja [40]	×
K	urusai, urusakja, uru'ʃa: [50] [30,60] [30,60]	×		×

N	urusai, urusakja [70] [50]		jakamaʃikja, jamakaʃikja [10] [20]			kitanakja [60]
S	×		jakamaʃi:, jakamaʃisa [20,80] [30]			×

(40) くすぐる

O	kusuguru [30,40,70]	mutsuko:ʃi [70]	mutsuko:ʃikja [50]	gusuguru [30,40,70]	×
M	kusuguru [40,50,60]	mutsuko:ʃikute [40,50,60]		×	musugu'tai [50]
K	kusugu'takja, [30,60] kuʃoguru [50]	mudzukoʊʃikja [60]		×	×
N	kusugu'te* [10]	mutsukoʊʃi:* [70]		gusugu'te, [20,50] gusuguru [10,60,70]	×
S	kusuguru [80]	×		×	×

*くすぐったい

(41) めん類（うどん、そばなど）

全村　共通語に同じ。

(42) きたない

O	kitanai, [70]	ki'tanai, [30]	kitanakja [40]	buʃoɯ. [40,70]	biʃou [50]	biʃo:da [60]	urusai [60]	ni'kuke [60]
M	×			biʃou [40,50,60]			×	×
K	kitanja: [50]			buʃo:doʊ [30,60]			×	×
N	kitanai [60,70]			buʃo:doʊ [50]			urusai [60]	×
S	kitanai [80]			×			urusai [20,30]	×

(43) まぶしい

O	mabuʃi(:)kja [40,50,70]	megakurande [30]		×	×	×
M	mabuʃi:, [60] mabuʃikja [40]	megakurande		×	×	×
K	（記録なし）					
N	mabuʃi: [60,70]	×		×	je:tsukute [20]	jamete [10]
S	×	×		tʃiratʃiraʃite [80]	×	×

(44) 甘える

O	amaeru, [30] ama'tarerowa [40]	ame:gosuru, omja:gosuru [40,50,70] [60]	×		×
M	ama'tareru [40]	ame:gosuru, ameigosuru [40,60] [50]	×		×
K	×	amja:gosu [50,60]		ʃitʃa:wosu [50]	
N	×	amja:gosu [50,70]	×		waɡamamaʃite [60]
S	×	amɜ:gosuru [40,60]	×		×

(45) (つめで) ひっかく

O	hi'kaku, hi'kadʒiru [30,40,70] [40]	×	ka'tʃiɡiru, katʃi'te [30,40,50] [70]		bu'katʃi'te, [40] bu*kadʒirara [70]
M	×	kakimuʃi'te [50,60]	ka'tʃaɡiru [40]		×
K	×	×	ka'tʃaɡiru, ka'tʃaku [30,60] [50]		×
N	×	×	ka'tʃaɡiru, ka'tʃiɡi'te, [10,20,50] [60] ka'tʃaku [70]		×
S	×	kaɜmuʃiru [50]	ka'tʃaɡiru [50]		×

(46) 母

O	o ka:tʃaɜ, o'ka, [30] [70] o'kasaɜ, o*ka:tʃaɜ [40] [50]	uɜma [30,40,70]	hoa [60]	ho:, ho:do no) [30,70] [40]	×	a'pa****
M	ka:tʃaɜ, o*ka [40] [40]	uɜma [40,50,60]	×	ho:sama [60] ho:tʃa, ho:do [40,60] [50]	kako:sama [60]	×
K	×	×	hoɤ dono) [30,50,60]	×	kakoɤ, kaka [30,50,60] [50]	×
N	×	uɜma [20,50,60,70]*	hoɤ** [70]	×	kakoɤ*** [70]	×
S	o'ka: [30]	×	×	×	×	a'pame [80]

*ふつうの人が使う　**身分の低い人が使う　***身分の高い人が使う　****小さい子供が使う

(47) 兄

O	antʃan, anisan [30,40,50] [70]	asei, aseidono [30,40] [30,40,60,70]	nanna: [50]	×
M	antʃan [40,50]	asei [50*,60]	nanna [60]	×
K	antʃan [30,60]	aʃe:, aʃe:dono [30,50,60] [30,60]	×	×
N	antʃan [10.50]	aʃi:, aʃi:do, aʃi:dono [20,60,70] [50] [70]	×	×
S	ani: [30]	aʃi: [80]	×	ʃo: [80]

*義理の兄

(48) お客が來たときの食事

全村 gotʃiso:

(49) ふだんの食事

O	asa'meʃi [70]	asake [40,60,70]	×	hiru [70]	hjo:ra, [40,60,70]	ju:meʃi [70]	jo:ke, [30,60,70]	×
					hjo:roɴ [70]		jouke [70]	
M	×	asake [40,50,60]	×	hiru [60]	hjoura [40,50,60]	joumeʃi [40,50]	jouke [40,60]	×
K	×	asake [30,50,60]	asamono [50]	hiru [50]	hjo:ra [30,50,60]	×	jo:ke [30,50,60]	jo:mono [30,50,60]
N	×	asake [10,20,50,60,70]	×	×	hjo:ra [10,20,50,60,70]	×	jo:ke [10,20,50,60,70]	×
S	×	asake [20,70]	×	hiru [0]	hjo:ra [0]	×	jo:ke [20,40,70]	×

(50) 燒ける

O	jakeru [40,70]	ʃaʃakute [70]	×
M	jakeru [40,50,60]	ʃaʃaku [40,50,60]	tʃatʃaku [0]
K	×	ʃaʃaketa [30,50,60]	tʃatʃaketa [30,50,60]
N	×	ʃaʃakeru, ʃaʃakute [10,60,70] [20,50]	×
S	×	ʃaʃakeru [0,30,80]	×

4. 結 論

音韻および文法は、語いと性質および取扱いの点で次のように違うので、別別に扱うこととする。

(1) 音韻および文法は体系的事実であるが、語いは個別的事実である。

（2） 音韻および文法については、その特徴がすべてとり出されていると言ってもいいが、語いについては、そのごく一部分が、しかも適宜に(作為的に）選ばれているにすぎない。

（3） 音韻および文法については、積極的事実によって、語いについては、積極的および消極的事実によって5か村の対立が見られている。つまり、前者については、たとえば、共通語のAという音韻に対して、X村ではbともcとも言わないがaと言い、Y村ではaともcとも言わないがbと言い、Z村ではaともbとも言わないがcと言うという事実によって

X[a] / Y[b] / Z[c]

という対立を見ることができる。これに対し、後者については、たとえば、共通語のAという語いに対して、X村とY村とではaと言い、Z村ではaとは言わないし、同じAという語いに対して、さらに、Y村とZ村とではa'と言うが、X村ではa'とは言わないという事実によって

XY(a) / Z （—）

YZ(a') / X （—）

という対立を見ることができる。斜線の左側は積極的事実であり、同じく右側は消極的事実である。

音韻について得た村の対立は次のみっつである。

OS/M/KN

O/M/KN/S

OKNS/M

文法について得た村の対立は次の五つである。

OMNS/K

OM/NS/K

OM/KNS

OM/KN/S

上の8種類の村の対立によって、各村が同じ対立項に属する回数を調べると、次のとおりである。

M	K	N	S	
5	1	2	4	O
	0	1	2	M
		6	2	K
			4	N

以上の回数によって村相互の結合度を図に示せば図109のようになる。なお、村をかこむマルは、その村がほかの4か村に対して独立する回数を示す。

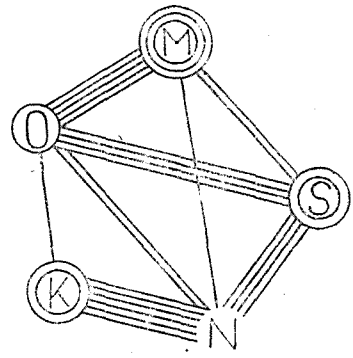


図 109

また、以上の回数によって、ふたつの村がつくるグループの序列をつくり、その等級をきめれば次のとおりである。

第1級	KN	6
	OM	5
第2級	NS	4
	OS	4
第3級	ON	2
	MS	2
	KS	1
	OK	1
	MN	1
	MK	0

以上によって、KとN, OとMとの結合の度合が高く、KとS, OとK, MとN, MとKとの結合の度合が低いと考えることができよう。

次に、語いについて見れば、まず、50の共通語に対して出て来た非共通表形のそれぞれについて、そう言うか言わないかによって、五つの村をつねにふたつのグループに分けると、その組合せの場合は次のようである。

	非共通語形だけ	cf.全部(共通語形+非共通語形)
OM/KNS	11	18
OK/MNS	3	3
ON/MKS	4	5
OS/MKN	2	3
MK/ONS	1	1
MN/OKS	1	1
MS/OKN	1	2
KN/OMS	3	3
KS/OMN	1	1
NS/OMK	2	2
OMK/NS	3	5
OMN/KS	4	6
OMS/KN	6	11
OKN/MS	3	3
OKS/MN	0	1
ONS/MK	1	1
MKN/OS	2	2
OMKN/S	3	5
OMNS/K	3	4
OKNS/M	1	2
MKNS/O	1	1
O/MKNS	15	25
M/OKNS	11	11
K/OMNS	12	13
N/OMKS	13	14
S/OMKN	6	8
計	113	156

以上によって、ふたつの村が非共通語形に関して積極的に一致する（結合する）回数は表11の示すとおりである。ここで、非共通語形だけについて考えた理由は、共通語形は、おそらくどの村にも多少はおこなわれているはずで、村の対立を見る手がかりとするには適当でないと考えたからである。なお、回数を数える際に、上にあげた対立の最後の五つはのぞいた(160, 164 ページ参照)。

表 11

	O	M	K	N	S	計
O		30	13	19	13	75
M	30		10	14	11	65
K	13	10		13	3	39
N	19	14	13		8	54
S	13	11	3	8		35

次に、ふたつの村が消極的に一致する（結合する）回数は次のとおりである。

表 12

	O	M	K	N	S	計
O		6	4	3	7	20
M	6		9	6	13	34
K	4	9		20	20	53
N	3	6	20		18	47
S	7	13	20	18		58

以上により、ふたつの村がそれぞれ一致する割合を次のように計算してみる。積極的一致には重み 2 をかける。その理由は、たとえば、ふたつの村が同じ語をもっていることはよくよくのことであり、それに対して、ほかの村が同じ語をもっていないということによって一致するということは、それほど重要なことではないと考えられる。一般に「ない」というこ

とを確実に知ることは容易ではなく、そもそも「似ている」ということは、「同じ特徴を積極的に示す」ということと考えられるのである。

さて、その計算は、

$$\text{ある村のある村との一致度}=\frac{\text{ある村と積極的に一致する回数}}{\text{ほかの村と積極的に一致する全回数}}\times 2+\frac{\text{ある村と消極的に一致する回数}}{\text{ほかの村と消極的に一致する全回数}}$$

たとえば、KのNに対する一致度は、

$$\frac{13}{39}\times 2+\frac{20}{53}=1.04$$

のように計算され、NのKに対する一致度は、

$$\frac{11}{54}\times 2+\frac{20}{47}=0.908$$

のように計算される。これらによつて、K N の一致度は、

$$\frac{1.04+0.908}{2}=0.908$$

すなわち、平均値によって求めてみた。

このようにして、各村の一致度を計算すれば次のようである。

M	K	N	S	
1.10	0.65	0.72	0.78	O
	0.63	0.63	0.68	M
		0.98	0.53	K
			0.73	N

以上により、ふたつの村がつくるグループの序列と等級とを見れば次のとおりである。

第 1 級	OM	1.10
	KN	0.98
第 2 級	OS	0.78
	NS	0.73
	ON	0.72
第 3 級	MS	0.68

OK	0.65
MK	0.63
MN	0.63
KS	0.53

音韻と文法および語いとは、性質および取扱いの点で違うので別別に扱ったが、結果において、以上のようによく一致した。

OM、KN 一致度の高いこと、KS、M N、MK の一致度の低いことが注目される。

ここで、さきに出した音韻、文法による等級と比較すると、次のようによく一致する。

	第1級	第2級	第3級
音韻、文法	KN, OM	NS, OS,	ON, MS, KS, OK, MN MK
語い	OM, KN	OS, NS, ON	MS, OK, MK, MN KS

次に、各村の独立性を、あるひとつの村が、他の四つの村と対立する語いの数によって測ることとする。この場合も積極的独立（さきに残した四つの対立）と消極的独立とに分けて考える。

積極的独立	
O/——	15
M/——	11
K/——	12
N/——	13
S/——	6
消極的独立	
——/O	1
——/M	1
——/K	3
——/N	0
——/S	3

各村のほかの村村に対する独立度を次のような計算によって調べた。

$$\text{ある村の独立度} = \frac{\text{積極的に独立を示す回数}}{\text{グループの対立を積極的に示す回数}} \times \text{重み} + \frac{\text{消極的に独立を示す回数}}{\text{グループの対立を消極的に示す回数}}$$

たとえば、

$$O = \frac{15}{81+15} \times 2 + \frac{1}{20}$$

こうして、各村の独立度は次のように表わされる。

O	0.36
M	0.33
K	0.53
N	0.41
S	0.34

K がめだって独立度の高いことが注目される。

(6) 結　　論

以上、5か村の言語的および言語的以外の違いないし関係として明らかにされたことは、次の事項である。

(1) 今の交通と昔の交通

(2) ほかの村に対する主観的意識

(3) 共通語を話す度合

(4) 言語の構造的特徴による村相互の類似度

言語の構造的特徴による村の独立度

さて、大賀郷は今も昔も交通の起点であって、内地からの精神的・物質的文化の流入口のひとつである。その上、今も昔も行政・司法の中心地である。ほかの村からは、「いい言葉」としてあがめられている。共通語を話す度合は五つの村のうちもっとも高い。したがって、大賀郷では、上の(1)、(2)、(3)が相互に関係がある。

大賀郷と三根とは、地域的にも接近し、坂上に対する坂下の2か村である。ほかの村からも、大賀郷と三根とは似ていると考えられている。言語の構造的特徴についても、両村はもっとも類似度が高い。

樫立は、昔の交通の終点である。ほかの村からはずいぶん変っている言葉だと言われる。共通語を話す度合は、K-数値から見ると、もっとも低い。言語の構造的特徴によっても樫立はもっとも独立している。樫立では、上の（1）、（2）、（3）、（4）が相互に関係がある。

中之郷は、樫立と似ているが、樫立ほど変ってはいないと、ほかの村では考えられている。共通語を話す度合は、K-数値から見ると、大賀郷と同じ程度に高い。言語の構造的特徴によると、両村の類似度は大賀郷、三根のそれと同じ程度に高い。

末吉が、ほかの村から、変っていると考えられていることは、今の交通において、末吉が終点であることと考えあわされる。また、ほかの村から「標準語」になりやすいともされていることは、同村の「共通語を話す度合」がそれほど低くないことと比較される。

以上のように、各村における、いくつかの言語的違いと言語的以外の違いとは密接な関係をもっていることが明らかである。

しかし、各村の言語の違いを以上のようにして比較することがはたして正しいかどうか、全然問題がないというわけではない。今回の研究においては、その結果はわれわれの期待に遠くないばかりか、ほとんど一致さえしたが、他の場合について、この方法を検討する必要があることは言うまでもない。ここには、ひとつの試みとして提出した次第である。

最後に、われわれは、（i）「はしがき」で述べたような、一般的に言語社会の言語的比較をいかにすべきか、という問題について、ふたたび考えることとする。

（i） 言語社会相互の、ひとつひとつの言語的違いについて、いかなる

ものを同一の言語（langue）の変異と認め、いかなるものをことなる言語（langue）の特徴と認めるか。

われわれは、これに対して、個別的なものよりも体系的、法則的なものを重く見ることにしたのであったが、実際には、個別的なもの（語い）も体系的、法則的なもの（音韻、文法）も結果として同一であった。

（ii） 言語社会相互の言語的違いの度合はいかにして測るか。

われわれは、構造的違いを目じるしに村相互の類似度と独立度とを見たのであるが、村相互に共通する（違わない）部分と違う部分との関係についても考えるべきではないか。すなわち、ある村とある村とは、違う部分が多いか、違わない部分が多いか、ということを見なければならない。たとえば、内地の任意の一地点と八丈島の5か村とを比較するならば、八丈島の5か村相互の間のほうが、5か村のうちのある村と内地の任意の一地点との間に比べて、違う部分がすくない、という場合が起りうるのではないか。

（iii） 言語社会相互の言語的違いとしていかなるものをとりあげるか。

われわれは、言語の構造的違いのほかにいろいろなものをとりあげたが、言語の構造的違いそのものについても、もっととりあげるべきものがあるのではないか。たとえばイントネーションなど。

われわれは次の調査までにこのような問題の理論的考察を十分につくし、新しい調査によってその理論に関する実験を試みるようにしなければならないと考えるのである。

VI 今後の調査のために

ここでは、八丈島の言語の社会的調査全体について反省し、今後の調査のためにいくつかの指針と課題とを提供しようと思う。

(1) 反　　省

われわれが失敗したことと成功したこととを、上の本論 I—VII の記述の順を追って述べる。

目的: 目的を完全に達しえたか。　まず、目的を、ひとつは附随的ではあるにせよ、ふたつ立てたのは失敗であった。なにを調査するか、それはひとつのことであったほうがいいし、はっきりしたものである必要がある。目的をふたつ立てたために、限られた調査期日には、ひとつさえ十分達することができなかった。「共通語を話す度合」を決定する要因だけを調べるならば、サンプリングの計画はもっと慎重におこなうことができたであろうし、もっと多くのサンプルをとることができたであろう。ひとつの目的に限ることのできなかったのは、このような調査がはたして実施しうるかどうか、計画者に確信のなかったことが大きな原因になっている。

調査をはじめるにあたって、「なにを調べるのか」ということは、明らかであるようであって、事実明らかでないことがある。われわれは、調査の目的をたてるにあたって、その数を最小限にとどめ、しかも、明らかなものに限るようにしなければならないことを教えられた。

八丈島を選んだこと: 八丈島を選んだのはだいたい成功したと言えよう。ただし、遠い島のために、現地における準備的調査が困難であったことは反省しなければならない。

課題: 課題には答えることができたか。一般に、目的の数はすくなくしなければならないのに対し、課題の数はなるべく多いほうがいい。課題が多ければ多いほど、調査の内容は豊富になる。われわれは、そのうち、可能なものだけに答えればいいのである。今回の調査では、設けた五つの課題のうち四つにいちおう答えることができたと思うが、いずれも結論を得るまでには至らなかった。すべて、ひとつの試みにすぎない。

「共通語を話す度合」を決定する要因については、そのありかを探るいろいろの方法を提示することができた。5か村の言語を資料として、一般に言語社会相互の比較をいかにすべきかの試みを示すことができた。八丈島の言語の歴史についても、今後の研究のための資料を提供することができた。

方法: ことなる方法を短かい期間にふたつとったことは、まず失敗と言えよう。戸別訪問による調査は言語調査の方法としてははじめてのものであるが、一應の成功をおさめたと言えよう。もちろん、このような方法ですべてが解決するわけではない。「共通語を話す度合」を決定する要因をつきとめるのにも、少数個人についての長い期間にわたる観察も必要である。多数の人について調べるのにも、もっとダイナミックな方法があるであろう。

「方言調査」だけをおこなうならば、もっと小人数の調査者がもっと長い期間滞在すべきであろう。

準備および準備的調査: 準備および準備的調査は成功したか。八丈島に関する情報の收集、文献の調査および関係方面への連絡などはほぼうまく行った。文献のうち「一話一言」など二三の重要なものを出発前に見るように努力しなかったのは失敗であった。もっともいけなかったのは、準備的調査の不足と現地において準備的調査をおこなうことができなかったことである。準備的調査の重要なことは、III (1) (iii) で述べたとおりである。ここにふたたびくりかえそう。「準備的調査は回を重ねれば重ねるほど、そして、被調査者を多く、しかも、いろいろにとればとるほど有効である。この種の調査の成否は準備的調査できまると言ってもいい。本調査は仕事のしあげにすぎないとも言える。準備的調査で結果をで見通せるくらいでなければならないと考える。」

調査者のひとりが先に一航海して、現地で準備的調査をしてくれれば、多

くの失敗を避けることができたであろう。たとえば、八丈島では、支廳、学校以外には見ることのできない「かわら」を音韻の調査項目に入れたことなど。

期日：期日は適当であったか。八丈島が農村であることを考えて、農家にとってもっともひまな時期を選ぶべきであった。一部で迷惑がられ、一部で調査不能だった理由は、つゆ明けのジャガイモ堀りに農民がほとんど畑へ出かけたためであった。しかし、つゆ明けが遅れて毎日天氣が悪く、ほとんどの被調査者が家にいたために、われわれはほぼ計画どおりに実施することができたのは幸であった。

組織：調査者全体の数はやや多すぎるように思われた。もっとも、戸別調査にはもっと大勢のほうがよく、「方言調査」にはもっと小勢のほうがいいようにも思われる。なお、調査の運営の中心になるひと（調査には直接たずさわらない）と庶務・会計の担当者が必要であった。

調査票と質問の方法：調査票のうち社会環境に関する部分には不要ないし調査困難な事項がすくなくない。たとえば[4]**公職、團體**；[9]**ほかの村との折りあい**；[14]**同居者**。また17と19とは重複しているし、21はもっと整理すべきであった。なお[5]**話題**は、話のきり出しに用意したわけであるが、実際には使わなかった。1—4についても役場であらかじめわかるつもりでいたが、実際には、1以外はあらかじめわからなかった。なお、一体に、反應の分類が一次元的でない部分があり、複雑でありすぎる部分がある。たとえば、9(=18=35), 1, 17, 19, 21。

調査票のうち言語に関する部分についても不適当な項目がある。さきに述べたように、[27]**かわら**は支廳か学校にしかふかれていないので、予期したような非共通語形が現われない。[39]**しかる**、[49]**歩く**は、コンテキストを用意しておくべきであった。（たとえば、「そんなに子供をしかるな」のように）[47]**死んだ人**は、とくに老人に向っては聞きづらかった。途中で、

「死んだ犬がいる」というコンテキストで聞いた。[44] 末子については、「末子のことをなんと言いますか」と質問すると、じぶんの子供ないし兄弟の末子の名前を答える被調査者がすくなくなかった。コンテキストを用意しなかったためである。[52] 山の上にある [53] 山の上へ行った のふたつの区別を求めるのは無理であった。準備的調査を現地でしていれば、このような調査項目をつくらなかったであろう。[55] 下駄をはくは、 -a で終る名詞の曲用を知るためであったが、これに対しては、 bo'kuri という別の形を答えるものが多かった。別の、a- に終る名詞、 たとえば kasa「かさ（雨の日にさす）」などを選ぶべきであった。

全般的に言って、言語的特徴は音韻についてはまず十分であったが、文法、語いについては不十分であった。「方言調査」で部分的に補うことができたが、完全とは言えない。

言語の調査にはできるだけ絵を使った。それは、言語や文字を媒介にすると、媒介物そのものを理解できないかもしれない被調査者に対して有効であったし、調査に伴うややもするとかたくるしい氣分をやわらげるのに役立ったし、それにもまして、被調査者じしんの日常の言語をひき出すのにききめがあったと思われる。しかし、絵を使っても、こちらがなにを質問しているかわからない被調査者があった。「これはなんですか？」と「草履」をゆびさしたつもりなのに、aʃi と答える者がある。また、絵がまずくて失敗したこともある。「あわもち」の絵（あわもちらしく色をぬっておいた）は、「もち」までは引き出すことができても、「あわもち」までは困難であった。

被調査者の選び方：サンプリングについて反省されることは次の諸点である。

（i） 八丈島の特殊性を考え、南方からの引揚者、すなわち「外地人」をひとつの層にまとめて割当てる予定で出かけたのであったが、島に着い

てから、抽出技術的にやや困難と感じたので、この計画はやめてしまった。しかし、共通語を話す度合の点では、確かに「土地人」と違った模様を示すことがだんだんわかってきたので、少し無理をしても構成割合をととのえて置くとよかった。

(ii) 共通語を話す度合の判定不明が、中之郷でいちばん多かった（8人：調査不能全体の半分）けれども、かえって集計のときには、他の村と回収率の点でつりあいがとれてきた。しかし樫立の回収不足はどうにもならなかった。

(iii) 年令別で31才—40才の部分が回収できなかったのは失敗である。あと6人か7人余計に割当てると、きれいになったであろう。しかし、集計には回収率の不同を考慮に入れなかった。

(iv) 結果から見て、追加サンプルはあまり活躍をしなかった。集計の重点が「共通語を話す度合」の問題に集中されたからである。

総合的に考えて、291人という全数は調査可能な最大限であった。村ごとの配分にはなお工夫の余地が見出されるが、現在の島の交通状態ではこれ以上の全数の増加は無理である。この点ではまず成功したと言えよう。

しかし、理想的には次のようにすべきであった。

(i) サンプリング班が先発する。

(ii) 各村のサンプリングを同じ個人ないし班がおこなう。

(iii) サンプル数を500ぐらいにする。戸別訪問による調査だけにすれば、あれだけの期間中に500人を調べることは不可能ではなかった。

(iv) 年令は15才—64才とする。これより以下および以上の年令層は社会的活動をおこなっていないことが多く、また、調査に應じられないことがすくなくない。

「方言調査」とその調査事項：5か村の言語を比較するためには、調査項目を一定にしておく必要があったが、それが完全におこなわれなかった。

現地で一應整理をする必要がある。整理することによって新しい課題を発見することができるからである。資料の整理を東京ばかりでおこなうときには、疑問の個所、資料不足の個所を補うことができない。こんとは、整理のために時間を十分とることができなかった。

被調査者の選定は現地側にばかり委せることは危險である。調査の目的に應じて、われわれじしんが選定するのを理想とする。

文法を調査する方法は、質問にするかぎり、共通語の飜訳という形をどうしてもとらなければならなかったが、ほかにいい方法はないだろうか？

さきにも述べたように、「方言調査」だけを目的とするならば、もっと少数のひとがもっと長い間滞在して、言語構造のすみずみまで徹底的に調べるべきである。

整理、集計、分析：整理に際して、調査項目の多くについて整理をしなければならなかったのは、計画に愼重を欠く部分があったためと考えられる。準備的調査が現地で行われていたならば、調査項目の整理はもっとすくなくてすんだであろう。

集計、分析に際しては、サンプルのすくないことが細かい分析を困難にした。

特徴的代表形を決定する手続、集計カードによる集計などは、細かいことながら、われわれの苦心したところである。

調査全體の運營：ここでは調査の運営が重要であること、実施→分析→報告と一氣におこなうべきであることだけを述べておく。

結果 1：「共通語を話す度合」をいかに表現するか、「共通語を話す度合」を決定する要因はなにであるか、についてひとつの試みを提示した。サンプルがすくないため確実なことの言えない部分が多いが、今後の調査にまつこととする。

結果 2：5か村の言語的違いを明らかにし、一般に、言語（社会）の比

をいかにすべきかのひとつの客観的方法を提出した。このほかにもいくつかの方法があるであろう。われわれはいろいろな方法によって対象の真実へ迫らなければならないと思う。

（2） 今後の調査のために

「共通語を話す度合」を決定する要因はなにか、をさらに確実につかむためには同じような調査を次のような計画のもとに試みるべきである。

（1）地　点

もっとふつうの地点（八丈島は地点として変りすぎたところである）

固有の言語に誇りを感じて、共通語をうけつけないところ

調査者の話す共通語さえ理解できない人の見出せるところ

（2） 調査項目

社会環境はもっと整理されるであろう

居住経歴はもっとくわしく調べるべきである

個人の性格ないし社会的態度を調べるべきであろう

言語そのものについては、全国共通に同一の語で調べることができれば理想的である。つまり、たとえば、日常生活にもっとも必要な基礎的な（basic）語いに対して、どの程度固有の言語（非共通語）で反応するかを見ることによって測ることはできないであろうか。

（3） 被調査者

500人ぐらいについて調べるべきであろう。調査がくりかえされるにつれて、被調査者の数はすくなくてすむであろう。

（4） 調査者

主観的判定を指標にして「共通語を話す度合」を測るとするならば、調査者は経験をつめばつむほど、訓練を受ければ受けるほど、その技術は向上するであろう。調査の計画者と実施者、つまり、面接者（interviewer）とは別でもよくはないか。

このようにして、「共通語を話す度合」を決定する要因が明らかになれば、次に、

（1） 共通語化の過程

（2） 共通語化の支点

について調べるべきであろう。（1）は、共通語化は言語構造のどのような部分からはじまるか、どのような速度で進行するか、について調べるべきである。（2）は、どのような媒介物によって共通語化が進むか、その媒介物はラジオか新聞か、でなければ、ある特定の個人（「言語ボス」）ないしグループか、について調べるべきである。

しかし、われわれは、このようなことを調べるまえに、もっと根本的な問題について考えておかなければならないのではないか。つまり、

（1） 共通語とはどのようなものであるか

（2） 共通語としてどの程度および範囲のものを認めるか

（3） 共通語を話す必要に迫られる場面はどのようなものか

というような根本の問題から考えていかなければ、実際に調査しても成果はあがらないのではないか。

しかし、このような根本問題が完全に解決しないならば、実際の調査は不可能であると言うのは間違いである。くりかえしおこなわれる調査によってこそ、根本的な問題を明らかにすることができる。

われわれは、理論と「実験」とを交互にくりかえし、得られた知識をつぎつぎと積みかさねて、めざす目標に一歩一歩、肉迫していかなければならない。

附錄 1

八丈島の言語と文化について

I. 八丈島方言の二、三の音韻現象について

§1 はしがき

「本州東部の方言」（國語科学講座 VI）には、八丈島方言の音韻上の特質として次の四つがあがっている。

（1） ラ行音がダ行音となる。

（2） ザ行音が多く拗音化して⁀ジャ・⁀ジュ・⁀ジョと発音される。

（3） 全般的に見て〔o〕,〔oa〕,〔a〕の音を村によつて用あることが多く、これは島内の方言区劃を立てるのに重要な特質をなすものである。五ケ村の中、三根、大賀郷の両村は〔o〕を用ゐ、樫立、中之郷両村は〔oa〕を用ゐ、末吉村に於ては〔a〕を用ふ。

（4） 村によつて直音と拗音との使用が区別される。

以上のうち（3）については、本論 V. 結果 2.（5）1. 音韻 において述べた。（4）は、おそらく次の事実をさすものと思われる。すなわち、樫立（K で示す）、中之郷（N）の「拗音」（口蓋音）がほかの村で「直音」（非口蓋音）で対応する。実例をひとつふたつあげると次のようである。

	大 根	苗植え	ていねい
O	de:ko	ne:je	te:ne:
M	de:ko	ne:je	teinei
K	dʒa:ko	nja:je	tʃi:ni:, tɛ́:né:
N	dʒa:ko	nja:je	tɛ́:nɛ̀
S	de:ko	ne:je	te:ne:

ここでは、上の（1）、（2）についてわれわれの調査の結果の概略を報告することとするが、その前に、アクセントについて簡単にふれてみたい。

§2 アクセント

八丈島方言* のアクセントは、平山輝男氏の報告** にあるように、「アクセントなし」（いわゆる「一型アクセント」）である。

われわれは、観察的方法によって調査するほかに、戸別調査の調査票においては、「橋」と「箸(はし)」との2語についてアクセントを調べた。つまり「橋」の絵を見せて、「これはなんと言いますか？」のように聞いた。「箸(はし)」についても同様である。このようにして、アクセントの区別があるかどうかを調べた。

表 13

土地人の型の区別の有無

型の区別の有無 ＼ 村別	O	M	K	N	S	計
ナ シ	39	53	15	25	17	149
ア リ	0	0	1	0	0	1

この結果は、表13のように、Kの1人をのぞけば全員、「橋」と「箸(はし)」とのアクセントの区別がない。この、Kの1名（15才）は、つぎのような経歴をもっている。

・15才、女。父はK出身者、母は青森縣出身者。

・1才～7才　Kに居住、7才～10才　Mに居住、10才～13才　静岡縣へ疎開、13才～15才　Kに居住。

この人について、「橋」、「箸」以外の数語のアクセントを調べたところ、つぎのようであった。

「足」アシ、「耳」ミミ

「ねこ」ネコ　「舟」フネ

「牛」ウシ　「かき（くだもの）」カキ

「花が」ハナガ　「鼻が」ハナガ

---

* 「八丈島方言」とは、現在八丈島に居住し、言語形成期（5才～13才）の全部ないしほとんど（70%以上）を八丈島で過した者の言語をさすことにする。

** 平山輝男氏「言語島八丈島と黒潮」『コトバ』3, 4　1941年, 51—54ぺ。

なお、平山氏はMの数例をあげて、尾高氏の「一型アクセント」であることを注意されたが、われわれは次のような結果を得た。つまり、われわれが「橋」ないし「箸(はし)」の絵を示して、「これはなんと言いますか？」とたずねたのに対して答えたアクセントの型を村別に示せば表14のとおりである。ただし、ここでとりあげた被調査者は純土地人に限られる。

表 14

村別 / 型の種類 / 年令別	O			M			K			N			S					計		
	○○	○○	不明	○○	○○	不明	○○	○○	不明	○○	○○	不明	○○	○○	不明			○○	○○	不明
13 ～ 20	3	2	2	1	11	1	2	0	1	4	2	0	1	4	0			11	19	4
21 ～ 30	2	3	1	4	7	1	2	0	3	1	2	2	0	2	1			9	14	8
31 ～ 40	2	2	2	4	1	0	1	0	1	5	1	0	1	1	0			13	5	3
41 ～ 50	1	2	0	2	5	1	1	1	1	1	1	0	1	2	0			6	11	2
51 ～ 60	1	5	2	2	2	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0			5	8	2
61 ～ 70	0	0	0	1	4	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0			2	4	3
71 ～	2	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0			5	2	0
計	11	14	7	15	31	5	8	1	6	12	6	3	5	11	1			51	63	22

以上の表により、MとSとでは○○型が多く、KとNとでは○○型が多くあらわれる。年令別にはいちじるしい差は認められないようである。

つぎに、外来者について調べた結果は表15の示すとおりである。

表 15

村別		O		M		K		N		S		計	
型の區別の有無		アリ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	ナシ	アリ	ナシ
外来者	外地人	1	11	0	4	0	4	0	9	0	3	1	31
	内地人	8	1	7	2	0	0	6	0	2	0	23	3

「外来者」：言語形成期の全部ないしほとんどを八丈島以外の土地で過した者
「外地人」：「外来者」中、小笠原諸島、南洋方面から引揚げて来た者
「内地人」：「外来者」中、内地から移住して来た者

これによると、内地からの移住者はほとんど型の区別をしているのに対して、南洋方面からの移住者はほとんど型の区別をしない。内地からの移住者の型の区別の有無はともかく、南洋方面からの移住者がます「一型アクセント」と認められるという事実は注目すべきである。つまり、南海の島島のかつての日本語が「一型アクセント」であったことを思わせる。

参考のために、かれらがわれわれとの面接の際にどのようなアクセントの型を示したかを表16にあげる。

表 16

型の種類＼村別	O	M	K	N	S	計
○ ○ 型	6	1	2	4	3	16
○ ○ 型	4	1	0	3	0	8
不　明	1	2	2	2	0	7

なお、八丈島属島の小島、青が島のアクセントについては、両島の出身者について調査した結果、平山氏の報告にもあるように、「一型アクセント」であることを確かめることができた。Sで調査した青が島出身者は平板的な「一型アクセント」であった。

§3 いわゆる「ラ行音がダ行音となる　現象について

この現象については次のことが注目される。

（1） この現象は語頭の場合に見られる

（2） われわれの資料によれば、音節によって d-, dʒ-, dz- であらわれる場合がある

（3） 土地人にだけあらわれ、外来者にはあらわれない

（4） 村別にはいちじるしい差は認められない

（5） 年令別には差が認められる。つまり年令が高くなるにつれて d-, dʒ-, dz- のあらわれることが多い

さて、（1）については、以下にあげる例によって明らかである。

（2）については、まず、

（i） da-, de(:)-, do(:)-, dai-, dei-, dou-

dambo:「乱暴」O 女 73才; dentogen「レントゲン」O 女 70代, de:nen「來年」O S の特徴的代表形; do:dʒin「老人」N 女 68才, do:soku「ろうそく」、この語についてはのちに詳しく述べる; dainen「來年」O M S; deinen「來年」Mの特徴的代表形; dousoku「ろうそく」、主としてM,

（ii） dʒi-, dʒa:-

dʒindʒi「臨時」K 男 60代; dʒiko:「利口」S 女 40代; dʒa:nen「來年」K N の特徴的代表形

（iii） dzu-

dzusu「留守」O 女 50代; M 女 68; dzunin「流人」O 老婆

なお、次のような例がある。

dʒo:te「両手」O 女 50代 O 女 73; dʒo:ho:「両方」O 女 50代

（3）、（4）、（5）について。調査票の25項「來年(rainen)」、33項「ろうそく(ro:soku)」について調べた語頭子音は、まず、「ろうそく」について、土地人・外來者別に見ると表17のとおりである。

表 17

ろうそく

村別	O		M		K		N		S		計		
r-か d-か	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	d のあらわれる割合
土地人	35	5	45	10	15	0	21	5	17	0	133	20	13.1%
外來者	19	1	13	0	5	0	16	0	5	0	58	1	1.7%

土地人は153名のうち20名（13.1%）が d- で反應したのに対し、外來者は59名のうち1名（1.7%）が d- で反應したにすぎない。しかし、その1名は63才の女で、樫立村で生れ、6才まで樫立で育ち、以後終戰まで、父島、利島、沖繩、硫黄島を轉住した者であるが、兩親、夫は八丈島出身者である。したがって本人は、言語形成期のほとんど、および、それ以後を島外で過しているが、八丈島固有の言語の影響を全くうけていないとは

言いがたい。調査票のその他の項目についてみても、來年：dainen, かえる：kja:rume, 苗植え：ne:ue などのように、土地人と同じような反應を示している。したがって、「ろうそく」については、d- は土地人にだけあらわれる音韻的特徴とみなされる。

「來年」について、同じく土地人と外來者の反應をくらべると表18のようである。

表 18

來 年

土地別 / r-か d-か	O		M		K		N		S		計		d のあらわれる割合
	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	
土地人	26	13	14	37	6	10	14	11	5	11	65	82	55.8%
外來者	19	2	13	1	3	0	12	4	4	1	51	8	13.6%

O S de:nen/M deinen/K N dʒa:nen

土地人147名のうち、d- で反應した者は、82名（55.8%）で半数以上であるが、外來者は59名のうち8名（13.6%）が d- で反應した。しかし、8名のうち、O, M の各1名は、内地からの移住者で、あとの6名は「ろうそく」の場合 d- で反應した外來者と同様、八丈島固有の言語の影響を全くうけていないとは言いがたい者である。

次に、「ろうそく」、「來年」について村別の差を見ると、表19、表20の示すとおりである。なお、この場合は純土地人だけをとりあげ、かつ、調査票による結果に限られる。

表 19

ろうそく

村別 / r-か d-か	O		M		K		N		S	
	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-
純土地人	29	4	44	8	15	0	20	2	15	0
d-の割合	12.1%		15.4%		0%		10.0%		0%	

表 20

来年

村別 / r-か d-か	O		M		K		N		S	
	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-	r-	d-
純土地人	21	9	14	35	6	10	10	11	5	9
d-の割合	30.0%		71.4%		62.5%		52.4%		64.3%	

(ただし、d- には d5- もふくむ)

「ろうそく」では K, S に d- で反應する者が1名もなく、「來年」では、d- が O の30%以外は MKNS とも50%以上あらわれている。

しかし、われわれが「方言調査」の際に採集したところによると、d- は各村にあらわれ、そのあらわれ方にいちじるしい差は認められなかった。

さて、ここで、d- のあらわれ方を、年令、學歷、産業、調査者の判定による「共通語を話す度合」、非共通語で反應した語の割合による「共通語を話す度合」との相關のもとにながめれば表 21—25 のとおりである。

表 21

ろうそく

コード	r-かd-か 年令別	r-	d-	計	d-のあらわれる割合
1.	13 — 20	28	0	28	0%
2.	21 — 30	34	0	34	0
3.	31 — 40	22	1	23	4.4
4.	41 — 50	22	2	24	8.3
5.	51 — 60	14	2	16	12.5
6.	61 — 70	4	6	10	60
7.	71 —	2	6	8	75
	計	126	17	143	11.9

表 22

ろうそく

コード	r-かd-か 學歷別	r-	d-	計	d-のあらわれる割合
1.	學歷なし	2	7	9	77.8%
2.	小學	30	2	32	6.3
3.	高小	63	7	70	10.0
4.	中等	27	0	27	0
5.	高專	3	0	3	0
6.	大學	1	0	1	0
	計	126	16	142	11.3

表 23

ろうそく

コード	職業別 \ r-かd-か	r-	d-	計	d-のあらわれる割合
1.	農業	80	12	92	13.0%
2.	漁業	6	1	7	14.3
3.	商業	5	0	5	0
4.	工業その他	2	0	2	0
5.	自由業	13	0	13	0
6.	學生	15	0	15	0
7.	無職	5	4	9	44.4
	計	126	17	143	11.9

表 24

ろうそく

コード	判定別 \ r-かd-か	r-	d-	計	d-のあらわれる割合
1.	正しい共通語	38	1	39	2.6%
2.	共通語だがとことなく違う	29	1	30	3.3
3.	共通語がまざる	52	14	66	21.1
4	共通語を話さない	6	1	7	14.3
	計	125	17	142	12.0

表 25

ろうそく

コード	点數別 \ r-かd-か	r-	d-	計	d-のあらわれる割合
1.	0 — 4	19	1	20	5 %
2.	5 — 9	15	0	15	0
3.	10 — 14	32	3	35	8.6
4.	15 — 20	60	13	73	17.8
	計	126	17	143	11.9

点数： 非共通語で反應した語の数

この関係を図表にあらわすと図111のようになる。

つまり、上記の諸要因のうち、もっとも相関度の高いのは年令別であることが認められる。すなわち、年令がふえるにしたがって d- のあらわれる割合も増加する。そこでふたたび土地人152名について、d- の反応を村別、年令別に分析すると、表26の示すとおりである。

図 111 ろうそく

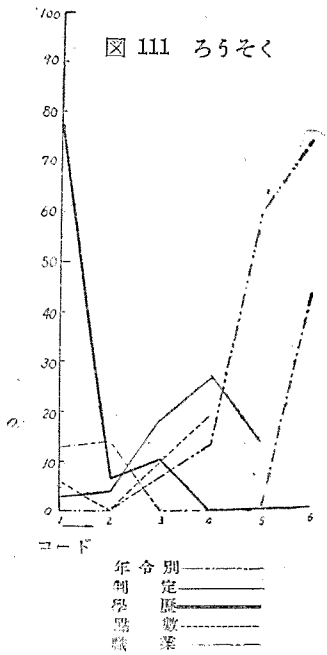


表 26

ろうそく(土地人)

村別 / r-かd-か / 年令別	O r-	O d-	M r-	M d-	K r-	K d-	N r-	N d-	S r-	S d-	計 r-	計 d-	d-のあらわれる割合
13 — 20	6	0	13	0	4	0	6	0	3	0	0	32	0 %
21 — 30	8	0	13	0	4	0	7	0	3	0	0	35	0
31 — 40	6	0	6	0	2	0	5	2	3	0	22	2	8.3
41 — 50	6	0	6	2	3	0	3	0	4	0	22	2	8.3
51 — 60	8	1	4	1	1	0	0	0	2	0	15	2	11.7
61 — 70	1	1	3	4	0	0	0	1	1	0	5	6	54.5
71 —	0	3	0	3	1	0	0	2	1	0	2	8	80.0
計	35	5	45	10	15	0	21	5	17	0	133	29	13.0

「ろうそく」では、各村とも d- は老年者ほどよくあらわれ、しかも、

51才～60才と61才以上のあいだに相当の開きのあることが認められる。

「來年」について、やはり調査票によって年令別に d- のあらわれる割合をみると、表27のようである。

表 27

來　年（土地人）

村別 / r-かd-か / 年令別	O r-	O d-	M r-	M d-	K r-	K d-	N r-	N d-	S r-	S d-	計 r-	計 d-	d-のあらわれる割合
13 — 20	5	0	4	9	2	2	1	5	0	3	12	19	61.3%
21 — 30	4	4	1	12	3	2	6	1	2	1	16	20	55.6
31 — 40	6	0	2	4	0	2	5	2	1	2	14	10	41.3
41 — 50	6	0	2	5	1	2	2	1	1	3	12	11	47.8
51 — 60	4	5	4	1	0	1	0	0	0	2	8	9	52.9
61 — 70	1	1	1	3	0	0	0	1	0	0	2	5	71.4
71 —	0	3	0	3	0	1	0	1	1	0	1	8	88.9
計	26	13	14	37	6	10	14	11	5	11	65	82	55.7

この場合は30才くらいから上は d- がだんだん増加するが、13才～20才、21才～30才では「ろうそく」とことなり、d- が50%以上をしめて、31才～40才、41才～50才、51才～60才よりも多い。

「ろうそく」、「來年」両者に共通した特徴は、71才以上ではほとんどd-で反應していること、61才以上とそれ以下で相当の差の認められることである。

「方言調査」の際に調べたところでは、「ろうそく」、「來年」以外の語においてこの現象の見られるのは、年令の若い者ではなく、主に50才以上の老年者であった。

「來年」において d- が若い者に比較的多くあらわれたのは、別の要因（「來年」という語のもつ語い的性格など）によると考えられるが、これは、さらに調査を要する問題である。

§4 いわゆる「ザ行音が多く拗音化して ジャ、ジュ、ジョ と發音される」現象について

dz～dʒ が交替する現象は次のように各村に見られる。

（1） 語頭の場合

例 1. dzo:ri～dʒo:ri「草履」、これについては後に述べる。

例 2. dzaru～dʒaru「さる」、dzaru N 小学校6年生; dʒaru O 老婆

例 3. dzora～dʒora「そそっかしい、粗末な」、dzora O 男 65才、女 73才、M 女 68才; dʒora, M 女20才代、

例 4. dzoku, dʒo'ku(me)「牡牛」、dzoku S (?); dʒo'ku (me) N 男 54才

（2） 語中の場合

例 1. midzo～midʒo「下水」、midzo K 男 25才、男 67才、N 男 25才; midʒo O 女 30才、女 48才、女 58才、女 73才、M 女 40才、男 52才、K 男 50才、N 男 25才、男 54才、女 68才、S 女 50才代

例 2. midza～midʒa「地面」midza K 男 67才; midʒa O 女 50才代、男 65才、女 73才、M 女 40才代、男 52才、女 68才、K 男 33才、男 50才、N 男 25才、男 54才、女 68才、女 70才、S 女 25才、女 35才、男 85才

いま、調査票の調査項目 30「草履」の語頭の子音について、dz- と dʒ- のあらわれかたを検討してみよう。調査可能の調査票 216 のうち、「草履」については、209 の資料を得た。

土地人と外來者との反應をくらべると表 28 のようである。

草履　　表 28

村別 / dz-かdʒ-か	O		M		K		N		S		計		dʒのあらわれる割合
	dz	dʒ	dz	dʒ	dz	dʒ	dz	dʒ	dz	dʒ	dz	dʒ	
土地人	36	4	43	12	14	2	12	13	12	4	117	35	23.0%
外來者	21	0	12	1	4	0	12	2	4	1	53	4	7.0

外来者57名のうち、dʒ- で反應した者が4名（7.0%）あるが、うち3名には八丈島方言の影響が認められる。したがって、dʒ- は土地人にあらわれ、外来者にはほとんであらわれないと言えよう。

第2に、地域別（村別）に検討してみると表29のようである。

表 29

草履

村別 / dz-かdʒ-か	O		M		K		N		S	
	dz-	dʒ-	dz-	dʒ-	dz-	dʒ-	dz-	dʒ-	dz-	dʒ-
人數	31	3	42	10	14	2	10	11	11	3
dʒ- の割合	8.8%		19.3%		12.5%		52.4%		21.4%	

これによると、dʒ- が五か村ともにあらわれるが、O, M, K, S に対してNがいちじるしく多く、21名のうち11名（52%）で半数以上を占めている。

つぎに、土地人全体としてみて、dʒ- がどのような要因と相関度が高いか、年令、学歴、調査者の判定による「共通語を話す度合」、非共通語で反應した語の割合による「共通話を話す度合」との相関を調べると、表30—33のようである。

表 30

草履

コード	dz-かdʒ-か / 年令別	dz-	dʒ-	計	dʒのあらわれる割合
1.	13 — 20	25	3	28	10.7%
2.	21 — 30	31	5	36	13.9
3.	31 — 40	16	6	22	27.3
4.	41 — 50	17	6	23	26.1
5.	51 — 60	12	4	16	25
6.	61 — 70	7	3	10	30
7.	71 —	4	4	8	50
	計	112	31	143	21.6

表 31

草履

コード	學歷別 \ dz-かd5-か	dz-	d5-	計	d5- のあらわれる度合
1.	學歷なし	3	6	9	66.7%
2.	小學	25	5	30	16.7
3.	高小	58	13	71	18.3
4.	中等	24	4	28	14.3
5.	高專	2	1	3	33.3
6.	大學	0	1	1	100
	計	112	30	142	21.1

表 32

草履

コード	判定別 \ dz-かd5-か	dz-	d5-	計	d5-の あらわれる度合
1.	正しい共通語	39	2	41	4.9%
2.	共通語だがどことなく違う	24	4	28	14.3
3.	共通語がまざる	42	24	66	36.3
4.	共通語を話さない	6	1	7	14.3
	計	111	31	142	21.8

表 33

草履

コード	点數別 \ dz-かd5-か	dz-	d5-	計	d5のあらわれる割合
1.	0 —— 4點	20	0	20	0 %
2.	5 —— 9	16	0	16	0
3.	10 —— 14	29	6	35	17.1
4.	15 —— 20	47	25	72	34.7
	計	112	31	143	21.6

以上の関係を図示すると図112のようになる。

すなわち、d_5- のあらわれる度合は、非共通語で反應した語の割合による「共通語を話す度合」(「点数」と略称する)ともっとも高い相関度を示し、以下、判定による「共通語を話す度合」(「判定」と略称する)、年令、学歴の順である。

年令別に見れば、だいたい、年令が多い者ほど d_5- が多くあらわれる傾向が認められる。表34を見よ。

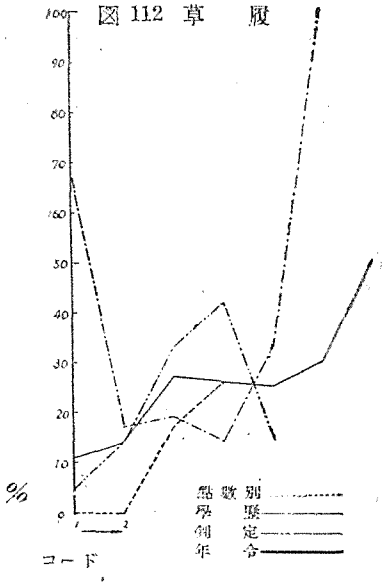


図 112 草履

表 34

草履　(土地人)

村別	O		M		K		N		S		計		
dz-かd5-か	dz	d5	dz	d5	dz	d5	dz	d5	dz	d5	dz	d5	
13 — 20	7	0	12	1	4	0	3	3	2	0	28	4	12.5%
21 — 30	8	0	12	1	5	0	2	5	3	0	30	6	16.6
31 — 40	5	1	4	2	1	1	5	2	2	1	17	7	29.2
41 — 50	5	0	6	2	2	1	2	1	2	2	17	6	26.1
51 — 60	8	1	3	2	1	0	0	0	1	1	13	4	23.5
61 — 70	1	1	6	1	0	0	0	1	1	0	8	3	27.3
71 —	2	1	0	3	1	0	0	1	1	0	4	5	55.6

II. 屬島の言語の二三の音韻的特徴について

(1) 宇津木の言語
(2) 鳥打の言語
(3) 青が島の言語

八丈島の屬島である小島の宇津木村および鳥打村、同じく八丈島の屬島である青が島、以上3か所の言語の、特に音韻について、二三の特徴をあげることとする。
宇津木村の言語と、鳥打村、青が島の言語と、記述のしかたがいくぶん違うけれども、いまはさしあたりそのままにしておく。

(1) 宇津木の言語

§1. あらまし

小島の宇津木村の言語は、八丈島本島および屬島の8か村のうちで、音韻的に特に際立っている。つまり、ほかの7か村で odʒare「いらっしゃい」と言うところを odʒae と言い、dare「だれ」と言うところを daje と言う。また、ほかの村で sense: ないし sensei「先生」と言うところを sensai と言う。さらに、ほかの村で ga'ko: ないし ga'kou「学校」と言うところを ga'kau と言う。

このような音韻的特徴についてやや詳しく報告することにしよう。

§2. 小　島

小島は昔から八丈島の屬島で、八丈島本島の 7.41 キロ の西の沖合にあり、面積3.16平方キロ、周囲8.70キロの、文字通りの小さい島で、村は鳥打と宇津木しかない。

§3. 宇津木村

宇津木村は1949年現在人口74（男39、女35)、世帯数16の小さな村で、全人口「菊池」姓であると言う。ちなみに、八丈島において「菊池」姓はOとNとによく分布している。Oで26.0%で第1位、Nで22.0%で第1位いずれも世帯別の全数調査による（122ページを参照)。

§ 4. 被調査者

被調査者は、現在八丈島に在住のつぎのふたりである。

菊池正文氏：35～40才。現在、中之郷の小学校長。小さいときから、内地をふくむ諸地域を轉轉と移られたが、つねに、宇津木語を日常会話語とする御両親といっしょに暮され、成人後、宇津木に住まわれたこともある上に、するどい言語感覚の持主であるから、氏から聞きえた宇津木語は相当信頼できると思う。

菊池ニキ氏：68才。20年ほど前に大賀郷に移住、現在に至る。

調査の結果、両氏の言語はまず同一の言語（langue）と認めてさしつかえないようである。

§ 5. 音韻的特徴

宇津木語の音韻的特徴として特に注目されるのは、次のようなものである。比較のため各村における代表的な対應形をあげることにする。大賀郷、三根、樫立、中之郷、末吉、鳥打、宇津木、青が島をそれぞれ、O, M, K, N, S, T, U, Aで示す。

（1） OMKNSTA [-r-] /U [-j-], [-0-]

（2） OSTA [e:]/KN [ë:]/M [ei]/U [ai]

（3） OST [o:]/MA [ou]/KN [oʊ]/U [ʊu] /A [ɔu]

鳥打が同じ小島の村でありながら、宇津木といちじるしくことなることが注目される。

§ 6. OMKNSTA [-r-]/U [-j-], [-0-]

宇津木の [-j-] は強い摩擦音である。以下、比較のために、大賀郷の形だけを [ ] のなかに示した。

1） OMKNSTA [-ara]/U [-aja] [-a:],

例。sa: (さら[器])、ha:～haja (腹)、kaika: (きょうから)、ika: (行った) [O. ikara]、a:a: (いたことがある) [O. arara]

2) OMKNSTA [-ora]/U [-oja]

例。to:ja (橈)

3) OMKNSTA [-ura]/U [-uja]

例。tsuja ([75] 商)

4) OMKNSTA [-era]/U [-eja]

例。heja (しゃもじ) [hera]

5) OMKNSTA [-ori-]/ [-ŏi-]

例。njta'ŏime (嫁)

6) OMKNSTA [-eri-]/U [-ɜi-]

例。'hɜ:ijɐe (入りなさい) [O. he:rijare]

7) OMKNSTA [-ari-]/U [-ɐi-]

例。sa'pɐi (さっぱり)、odʒɐijɐe (いらっしゃい) [O. odʒarijare], hai(針)、wakɐinnaka (分りません) [wakarinnaka], agɐijɐe (あがりなさい) [O. agarijare], na'tɐi wu'tɐi (泣いたり笑ったり)、anmɐi (あんまり)

8) OMKNSTA [-aru-]/U [-ɐu-]

例。tɐu (たる [みそなどを入れる])、mɐuba: (死んだ。) [O. marubara]、wɐukja (悪い) [O. warukja]

9) OMKNSTA [-are-]/U [-ɐe-], [-aje-]

例。daje (だれ)、odʒɐe (いらっしゃい)、ajeto (わたくしと) [O. areto. aito], he:ijɐe (入りなさい)、odʒɐijɐe (いらっしゃい)

10) OMKNSTA [-ire-]/U [-ɪe-]

例。okɪeba (起きれば)

11) OMKNSTA [-urɜ]/U [-ɐe]

例。kabɐe ([かさを] させ)

12) OMKNSTA [-iro-]/U [-ijo-]

例。ijo (色)、hijo'tau (拾ってくれ)、okijo toki (起きるとき) [O. okiro toki]、okijogɔɐ (起きよう) [O. okirogɔɐ]、mijo (見ろ) [O. miro], omoijo-

kja (おもしろい) [O. omoʃirokja]

13) OMKNSTA [-ero]/U [-ejo]

例。agejo (あげろ) [O. agero]

14) OMKNSTA [-oro]/U [-ojo] [-o:],

例。to:wa (取ります) [O. torowa], bo: (ぼろ)、mujo:jo mono (もらった物) [O. *muro:ro mono]

15) OMKNSTA [-uro]/U [-ujo]

例。mujo:jo mono (もらった物)、kujoka (来るか)

(16) なお、「とっくり(徳利)を」[O. to'kurjo] を、[to'kujo] と言う。

以上に関連して、八丈島の坂下2か村には、-r- と -0- とが交替する文法的語形があり、その後者が好まれることを注意したい。

O M akaka:ba, akakaraba/K N S akakaraba「赤いならば」

O M ikindʒa:ba, ikindʒaraba/K N S ikindʒaraba「行かないならば」

O M akakaido:mo, akakaredo:mo/K N S akakaredo:mo「赤いけれども」

O M i:takaido:mo, i:takaredo:mo/K N S i:takaredo:mo「言いたいけれども」

O M waira (,warera) /K N warenʃa:/S warentʃe:「わたくしたち」

§ 7. d-

ほかの多くの村と同じように、共通語の r- に対して d- の対応することがある。記録することのできたのは次の1例。

例。dokujo:～dokuro: (六男) [O. rokuro:]

§ 8. 容易に「回帰」しうる

§6 と §7 とにおける、宇津木語の [-j-], [-0-] および [d-] は容易に「回帰しうる (régressive)。」つまり、共通語音になおそうとすれば、かなり容になおしうる。

§ 9. 舌切れちゃっちゃ

§6 ないし §7 の特徴をとらえて、ほかの村の人は、「宇津木のことばは

ʃitagiretʃa'tʃa だ」と言う。宇津木の人じしんはこれを tʃitagije と言う。

§ 10. OSTA [e:]/KN [ė:]/M [ei]/U [ɐi]

例。kɐiwa (今日は) [O ke:wa], tɐinɐi (ていねい) [Ó te:ne:], kantɐide kake (勘で書け) [O kante:], tʃu:gakusɐi (中学生) [S tʃu:gakuse:], sensai (先生) [O sense:], jɐi (家へ) [O je:], kinɐi (きのう) [O kine:], kagɐi (影を) [O kage:], mɐi (目を) [O me:], tɐi (手を) [O te:], dakinnaka'taija (できなかったということだ) [O -te:ja], kogɐirowa (寒いよ) [O koge:rowa], kogɐite (寒くて) [O koge:te]

ただし、次のような例外がある。

	O	U
額	ʃitai, ʃite:	ʃite:
歩いて	e:de	e:de
大 根	de:ko	de:ko

なお、O の金土川(カナド ガワ)という部落には tʃu:gakusɐi, tʃu:ga'kɐu と言う老婆がいた。

§ 11. OST [o:]/M [ou]/KN [oɐ]/[ɐu] /A [ɔu]

U の [au] で表記した [a] は、[ai] の [a] と同じように [ɐ] と認められる。

例。ga'kɐu (学校)、dʒidzɐusama～dʒidzɐutʃama (地蔵さま)、dʒɐubu (丈夫)、benkjɐu (勉強)、dɐusoku～dɐutʃoku (ろうそく)、tɐukjɐu (東京)、hontɐuni (本当に)、ausama (おじいさん、王様)、bau (棒)、ʃautʃu: (しょうちゅう)、ikunɐuwajɐu (たぶん行くだろう) [O. ikuno:wajo:], akakedɐu (赤いけれども) [O. akakedo:]/tsu'te i'tɐu (つれていってくれ) [O. i to:], kɐute jowa (来いというじゃないか) [O. ko:te jowa]

ただし、次のような例外がある。

「俵」　O [to:ra]/U [to:ja]

§ 12. OMST [s], [ʃ] / U [tʃ], [ts]

例。dɐutʃoku (ろうそく) [O. ro:soku], tʃugo:ni (そのように) [O. sogo:ni] tʃitagije (舌切れ) [O. ʃitagire], mutsukubi (蕨) [O. musukubi]

§ 13. OMKNST [-b-]/U [-β-]

語中に両唇摩擦音のあらわれることがある。

例。kaβi（かび）[O kabi], neβu'te neβu te ʃowa（ねむくてねむくてしようがない）[O nebu'te nebu'te ge'suridara（ねむくてねむくてしようがない）]

§ 14. OMKNST [dz-]/U [dʒ-]

OMKNST でもおもに老人に dʒ- のあらわれることがある。

例。dʒɐuj（草履）、dʒaru（ざる）、hedʒa（ひざ）。

（2） 鳥打の言語

§ 1. 鳥打村

小島の鳥打（トリウチ）村は人口 110（男63、女47）、世帯数31である（1949 年4月1日現在）。

§ 2. 被調査者

被調査者は八丈島在住の次の3名である。

（1） 浅沼孝氏：男、13才、新制中学一年生。生れてから13才（3月）まで鳥打村に過し、現在は中之郷に住んでいる。その間、7か月長野縣へ疎開していたが、両親も鳥打村出身者であって、その言語は鳥打語と認めてさしつかえない。

（2） 浅沼甚之助氏：男70才、O在住。（経歴未詳）

（3） 男42才：N在住。生れてから20才まで鳥打村、20才から26才まで東京、26才から38才まで小笠原で生活し、以後Nに住んでいる。両親も鳥打村出身者である。

以上3人の言語は、同一の言語（langue）と認められる。

§ 3. 音　韻

（1） OSA [e:]/M [ei]/K N [ja]/T [e:]

1. 東京語 [ei] に対応する例。

例。de:ko「大根」(/O S de:ko/M deiko), de:neɲ「來年」(/O S de:neɲ

/M deinen)

2. 東京語 [ee] に対應する例。

例。ke:rume「かえる(動物)」(/O S ke:rume/K N kja:rume) ome:「お前」(/O S ome:/K N omja:). hame:「濱へ」

3. その他

例。ke:wa「今日は」(/O. ke:wa) e:de「歩いて」(/O e:de/M. eide)

(2) O A [o:]/M [ou] /K N [oɐ]/S [a:]/T [o:]

1. 東京語 [awa] に対應する例。

例。to:ra「俵」(/O to:ra/M. toura), o:gome「あわ」(/O. o:gome/M ougome) mo:re「漏れ」、tsuko:nai「使わない」、so:gu「しかる」(東京語 sawagu に対應すると考えられる。O so:gu/K N soegu)

2. 東京語 [ao] に対應する例。

例。geto:「下駄を」(/O geto:/K N getoɐ), de:kobo:「大根の葉を」、kotobo:「ことばを」、joso:ʃi「手傳いに」(/O joso:suru/K N josoɯʃi)

3. その他、同様の対應を示す例。

例。marubo:「死んだ(人)」(/O. marubo:/M. marubou)

次の例は OM で短母音 [o]、S で短母音 [a] であらわれるが、やは 0 類似の対應を示す。

ikogoɒ「行こう」(/O M ikogoɒ/K N ikogoɯɒ/S. ikogaɒ)

(3) O A [e:]/M [ei]/K N [ë:]/S [i:]/T [e:]

1. 東京語 [ui] に対應する例。

tenege「てぬぐい」(/O tenege:/M tenegei etc.)

2. 東京語 [e:] に対應する例。

te:ne:「ていねい」(/O te:ne:/M teinei, etc.), sense:「先生」(/O sense:/M. sensei, etc.)

3. 東京語 [oe] に対應する例。

koge:rowa「寒い」(東京語 kegɔeru に対應する語と思われる。O koge:rowa/M kogeirowa, etc.) koke:「ここへ」(O koke:/M kokei, etc.)

4. その他

例。he:te:「久しく」(O he:te:, M heitei, etc.)

（4） 子音について

1. r-～d-

語頭で r-とd- とが交替する現象は、八丈島5か村と共通である。

例。ro:soku～do:soku「ろうそく」de:neɯ「來年」

2. dz～dʒ

この現象も八丈島の5か村と共通である。

例。dzo:ri～dʒo:ri「草履」、midʒa「地面」(K midza, midʒa O M N S midʒa)

以上（1）、（2）、（3）（4）の音韻対應について鳥打語は、O とまったく同様の特徴をもっていることが注目される。

（3） 青が島の言語

§1. 青が島

八丈島属島のひとつ青が島は、八丈島よりさらに南へ 66.67 キロの地点にある火山島で、周囲9キロ、東西3.82キロ、南北3.60キロ、全島ほとんど山地である。1785年（天明5年）の噴火により当時の住民は全滅したというから、現在の住民はそれ以後の移住者で、107世帯、人口425（男214, 女211）、人口は小島の2倍あまりである（1949年4月1日現在）。

今のところ、東京。八丈島間の定期船が月1回だけ、青が島に寄港している。

この島の言語は、今回調べた限りでは八丈本島の言語とよく似ている。

§2. 被調査者

被調査者は八丈島在住の青が島出身者5名である。

（1） 奥山ふじえ氏：女、45才、S在住、30才くらいまで青が島で生活し、夫も青が島出身者である。自分の言語が八丈島本島の言語とちがっていることを自覚している。

（2） 只本おたよ氏：女、84才、O在住。

（3） 庭江きわ氏：女、40才、S在住。25歳まで青が島、25才からほとんどSで生活した。両親も青が島生れ、夫はS出身で30年間アメリカにいた。

（4） 男、40代、S在住。

（5） 女、37，8才、S在住。

以上5名の言語は、同一の言語(langue)と認められる。

§ 3. 音韻の二三の特徴について

（1） O S T [e:]/M [ei]/K N [ja:]/A [e:]

1. 東京語 [ai] に対応する例。

例。de:neɴ「來年」(/O. de:neɴ/K N dʒa:neɴ), ʃide:ni「しだいに」a'do-mone:「とんでもない」(ne:/-nai)

2. 東京語 [ae] に対応する例。

例。ome:「お前」(/O ome:/K N omja:), jakube:「役場へ」(/N. jakubja:), jame:「山へ」(/S jame:) koʃire:sase「こしらえさせ」

3. その他の例。

例。e:de「歩いて」(/O e:de/K N ja:de)

（2） O T [o:]/M [ou]/K N [oɔ]/S [a:]/A [o:]

1. 東京語 [awa] に対応する例。

例。to:ra「俵」(/O to:ra/M toura」

なお、次のような交替も見られる。

例。ome:gawa～ome:go:「お前のは」、imanogawa～imanogo:「今のは」

2. 東京語 [ao] に対応する例。

例。kotobo:「ことばを」、kuso:「草を」ʃibo:「しばを」

3. その他の例。

以上と類似した対応を示すものに sojoɴ「そのように」などがある。この語は O M sojoɴ/K N sojoɔɴ/S sojaɴ で O M [-o-]/K N [-oɔ-]

/S [-a-]/A [-o-] となる。語尾 -gon (たとえば O ikogon「行とう」/K N ikoˌoɴ) も同じ対應を示すと思われる。

(3) O T [e:]/M [ei]/K N [ė:]/S [i:]/A [e:]

1. 東京語 [ui] に対應する例。

例。tenege:「てぬぐい」(/O tenege:/M. teneǥei)

2. 東京語 [oe] に対應する例。

例。koke:「ここへ」(/O koke:/K N kokė:), kogə:te「寒くて」(/O kogə:te/KN kogė:te, この語は東京語 kogoeru に対應するものと認められる。) he:ru「ほえる」

3. 東京語 [e:] に対應する例。

例。teˌne:「ていねい」(/O te:ne:/M teinei)

(4) O K N S T [o:]/M [ou]/A [ɔu]

1. 東京語 [o:] に対應する例。

例。toukjou「東京」(/M toukjou), dʒidzou「地藏」、dʒɔudzu「上手」、haˈʃou「八升」、hjakuʃou「百姓」

ただし、青が島の [ɔu] は次のような場合にもあらわれる。

jouke「夕飯」(/O K N S jo:ke/M jouke), hiroˈtou「拾ってくれ」(/M atsumetou/N hiroˈto:, U hiroˈtau)

なお、前に述べた(2)の対應の場合も、[ɔu] があらわれることがある。たとえば、東京語 [soǥaʃima]「青が島」は(2)によれば、A [o:ǥaʃima] となるはずであるが、[ɔuǥaʃima] である。また、つぎの対應も、これと同じ関係にある。

O sogondo:te「それだから」
M sogondoute 〃
K sogɔndoite 〃
N sogoundoɴte 〃
S sogaɴda:ɴte 〃
A sogɔndoute 〃

すなわち、Aでは -do:te でなく -doute となる。しかし、-do:te にか

ぎり、只木、奥山の2氏は -dó:te であった。

（5） 子音についても、だいたい八丈島の言語と同じ特徴をもっている。たとえば、語頭で、[r-] と [d-] とが交替する。

例。dousoku「ろうそく」(~rousoku), dodʒi「路地」(~rodʒi)

ただ、只木氏には、[di], [du] のような音節があらわれた。

例。midu「水」、hudi「ふじ（の花）」

また、[du] は O K の naburu「隠す」に対応する nadusu「隠す」(nadureru「隠れる」) にもあらわれるが、この語は時時 naβusu と交替する。

以上にあげた青が島の音韻的特徴はほとんど、他の7か村のどこかに見られるものである。すなわち、

上の（1）は、O S T に一致し、

〃 （2）は、O T 〃

〃 （3）は、O T (U) 〃

〃 （4）は、A 独特であるが、M の [ou], U の [eu] と、二重母音である点においても類似する。

以上によって、青が島の音韻的特徴が特に O T と一致する場合の多いことが注目される。

III. 八丈島の言語の二三の文法的事実について

（1） 代名詞、特に自称代名詞について

（2） 「ヨクカ イキンジャラレ」という言い方について

（3） 大賀郷村における動詞の活用形について

（4） いわゆる「音便形」について

（5） 特殊な活用について

はじめに

八丈島では固有の言語と考えられるもののほかに共通語もかなり盛んに用いられている。たとえば、共通語の「赤いけれども」に対応する言い方（厳密に言えば「『赤いけれども』は島のことばでなんと言いますか」という質問に対する答）をすべてあげるならば、次のように実にさまざまである。

akake-

akakedo:, akakedou:, akakedo; akakedaido:, akakedaedo:, akakedaido, akakedaredo:; akakedo:mo, akakedoumo, akakedomo, akakedom(ɲ), akakedoɯn, akakedo:ni; akakendo; akakente; akakedoɯnte; akakeŋa.

akakare-

akakaredo, akakaredo:, akakaredoɯ; akakaredo:ni, akakaredoɯn.

akakai-

akakaido:, akakaidou, akakaido, akakaidomo, akakaido:mo, akakaidouni

akakere-

akakeredo, akakeredo:; akakeredomo, aka:keredomo, akakeredoɯn.

akai-

akaikeredo, akaikeredomo, akaikedo, akaiŋa, a:kaido.

このように共通語の形も盛んに行われているのであるから、もしも八丈島語の現実そのものを記述することを主眼とするならば、共通語の形をも含めて論ずべきであろうが、以下、おもに八丈島固有の言語と考えられるものについて、二三の文法的事実をとりあげて記述することにする。

（1） 代名詞，特に自称代名詞について

§1 八丈島語の代名詞

八丈島で現在用いられている代名詞は、地域、年令などによってさまざまな違いを示している。

いま、八丈島語の代名詞をその使用地域を顧慮しつつ表（204, 205ページ）に示せば次のようになる。

§ 2. 自稱代名詞

自称の代名詞として注目されるのは ware, are, wai, ai である。

ware は O M K N S の5か村に通じて用いられる。

are は O M S の 3 か村では一般に用いられるが、K ではほとんど用いられない。Nでは、若い人には用いられるが、老人には用いられない傾向がある。

wai, ai は O M で用いられる。

したがって、O M においては ware, wai, are, ai の四つの形が用いられる。それらのうち、are, ai が多く用いられ、ware, wai はすくない。またware, wai は目上の人に対して多く用い、are, ai は同輩以下に用いるという意識を持っている人がすくなくない。

K では ware, (wai) を用いる。

N S では ware, are を用いる。

これを図に示せば図112のようである。

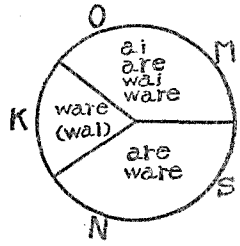


図 112

§ 3. 文中での形

ware, wai, are, ai などが文の中でどんな形をとるか、その二三を示せば次のようである。Mを例にとる。

共通語でめたる形 ＼ 自稱代名詞	ware, wai	are, ai	備考
—が	waga	aga	
—の	waga	aga	
—に	wareni waren	areni aren	waren, aren が普通。wareni, areni はややあらたまった場合
—を	ware: warei ware:i	are: arei are:i	ware:, are: が普通。 S では ari:, K では wari: も聞かれた。
—は	warja waja wa: wara	arja aja ara	warja, arja が普通。 waja, wa: はおもに O Mで、wara は各村で用いられる。ara は MNで聞いたが、O S にもあるそうである(菊池正文氏の報告)。

表 35　　代　名　詞　一　覧

		自称	対称	他称 近称	他称 中称	他称 遠称	不定称	備考
人	単	are (OM NS) ai (OM) ware (OMKNS) wai (OMK)	ome: (OM S) omja: (OM) omi (OMKNS) una (ウミKNS) nare (OMKNS)	kore (OMKNS) koi (OM) koitsu(オMカナス)	sore (OMKNS) soi (OM) soitsu(オMカナス)	ure (OM NS) ui (OM) uitsu(オMナス) ore (K) オイツ (カ)	dare (OMKNS) dai (OM) ドイツ(オミカナス)	omae Oは多，Mは少。 omi OM老人に多。 ore (違)はKえこナ。
	複	ore, waʃi, wa'tʃi, watasi, ko'tʃi.	omae, omai, ura, uitsu, ansa:, kimi	konohito	sonohito	unohito onohito (K) are	donohito	
	単	arera (OM) aira (OM) arenʃa: (N) arentʃe: (S) warera (OM) waira (OM) warenʃa: (KN) warentʃe: (S)	ome:ra (OM) (omja.ra) (カN) omja:ʃa: (KN) omjanʃa: (KN) omintʃe: (S) unura (OM) unara (Oミ) unanʃa: (KN) unantʃe: (S) ナレラ (オミ) narenʃa: (カN) narentʃe: (S)	korera (OM) koira (OM) koraiʃa: (K) koreiʃa: (K) korenʃa: (KN) koranʃa: (カN) korentʃe: (S) korantʃe: (S)	sorera (OM) soira (OM) soraiʃa: (K) soreiʃa: (K) sorenʃa (KN) soranʃa: (カN) sorentʃe: (S) sorantʃe: (S)	urera (OM) uira (OM) urenʃa: (カN) uranʃa: (N) urentʃe: (S) uraatʃe: (S) oraiʃa: (K) oreiʃa: (K) orenʃa: (K)	ダレラ (オミ) ダイラ (オミ) dareiʃa: (カ) darenʃa: (KN) daranʃa: ( ) darentʃe: (S)	aira 多，arera 少.(OM). warera まれ.(OM). ore-Kだけ. —renʃa:(korenʃa: など)はKでは人に対してまれに用いる。 —raiʃa: (koraiʃa: など)はKでは目上の人に対して用いる傾向がある。
	複	wa:ʃa: ワレンセー ワインヤー	オミンセー omi:ʃa	konohitora	sonhitora	unchitora	donohito	
方	単			ko'tʃi (OMカナS) kogata(OMカナS)	so'tʃi (OMカナS) sogata(OMカナS)	u'tʃi (OMKオS) ugata (OMカナS)	do'tʃi (OMカナS) dogata (OMカナS)	
	複				hi'tʃi	a'tʃi ngata		
向	単複			(コチラ)	(ソチラ)	(アチラ)	(ドチラ)	

事物	単数			kore (OMKNS) koi (OM) koitsu(オMカナス)	sore (OMKNS) soi (OM) soitsu(オMカナス)	ure (OMNS) ui (OM) uitsu (オMナス) ora (K) are	doro (OミカNS) doi (Oミ) doitsu(オミカナス) ani (OMKNS)	ore はKだけ
	複数			korera (OM) koira (OM) (koraiʃa:) (K) koreiʃa: (K) korenʃa: (KN) (koranʃa:) (N) korentʃe: (S)	sorera (OM) soira (M) (soraiʃa:) (K) soreiʃa: (K) sorenʃa: (KN) (soranʃa:) (N) sorentʃe: (S)	urera (OM) uira (OM) urenʃa: (N) (uranʃa:) (N) urentʃe: (S) (oraiʃa:) (K) oreiʃa: (K) orenʃa: (K)	dorera (OM) doira (OM) dareiʃa: (Kナ) dorenʃa: (Kナ) dorentʃe: (S) (doraiʃa:) (doranʃa:)	oreはKだけ —raiʃa:(koraiʃa: など) —ranʃa:(koranʃa: など)は物に対してはまれに用いる。
場所	単数			koko (OMKNS)	soko (OMKNS)	uku (OMKNS) oko (K) asuku	doko (OMKNS)	okoはKだけ(あまり用いない)。Sではasuku,ukuの区別の意識をもっている人がいる。asuku近い,uku遠い。
	複数			kokora(OMカNS) kokoira(オMKNス)	sokora (OMKNS) sokoira(オMKNS)	ukura(OMカNS) ukuira(OMKNS) アスクラ アスクイラ	dokora(OMカNS) dokoira(オMKNS)	—raをつけるのは共通語的な言い方
備考		O オ 大賀郷 M ミ 三根 K カ 恩立 N ナ 中之郷 S ス 末吉	仮名のものは筒池氏により補ったもの。 発音記号でないのは国府犀川の定めたもの。	もちろん上の表は概略を示したものであり，実際にはもっと複雑である。 複数の—tʃe: は尖端ばかりでなく三根でもまれに聞かれたし，また人や事物を表わす場合の複数形 -ra は大賀郷，三根ばかりでなく末吉や中之郷でもまれに聞かれた。 人，家畜，場所，方向の順序でなく，人，方向，事物，場所の順序を表わすつくったのはスペースの関係からであって，ほかに意味はない。		

—も	waremo	aremo	
—だ	waredara waidara	aredara aidara	waidara, aidara は O M で多く用いられる。

なお、次のように以詞が言い表わされないこともある。

ware bakani suna. M 女 28 才「私をばかにするな」

ware tonmete okitara. N 男 11 才「私は朝早く起きたよ」

unu tsu'te'ie kerowa. N 男 54 才「お前を連れて行ってやるよ」

(2)「ヨクカ イキンジャラレ」という言い方について

八丈島語には、ikindʒarara「行かなかった」に対して、jokuka ikindʒarare「行かなくてよかった」のような言い方がある。つまり、ka に「呼應」して、-ra が -re に変る現象が見られる。

われわれが採集しえた実例をあげれば次のようである。

kadzega huko:mono: jokuka ikindʒarare. M 女 68 才「風が吹いたんだもの行かなくてよかった」

kadzega huko:te jokuka dendʒarare. O 女 16 才「風が吹いたんだから出なくてよかった」cf. dendʒarara「出なかった」

jokuka ʃo: tsukurindʒarare. M 女 68 才「畑仕事をしないでよかった」cf. ʃo:tsukurindʒarara「畑仕事をしなかった」

聞きえた範囲では、多く、否定の、しかも過去を表わすときに用いられる。しかし、次のような例も聞かれた。

jokuka ikarare. M 女 20代「行ってよかった」

この現象は、jokukoso……, jokudzo…… のように「呼應」する例は見あたらなかった。

この現象は、われわれの離島直前にM村で発見したもので、各村について觀察することも、この現象をさらに深く調べることもできなかった。

そこで、M村在住の浅沼きみ子氏に依頼して、この種の現象を記錄していただいた。いま、それを原文のまま次にのせる。

yokuka kitararega.「きてよかった」(ママ)
yokuka kitarararega.「きてよかったワー」
sogondōteka ikinnarare.「そうだから行かなかった」
ugondōteka yararega.「あんなだからこそ言ったのよ」
soidōteka kogonshitarare.「それだからこうしたのよ」(ママ)
amega furōnteka ikinnararega.「雨がふったから行かなかった」(ママ)
sokomade kitoteka kitemetare.「そこまできたからきてみたの」
koudakeka syodare.「これだけするのだ」
agaka warukare.「私が悪いのだ」
agaka warukarare.「私が悪かった」
chiitoka arare.「少しあった」
chiitoka araraɾe.「少しあったっけ」
koudakeka shitare.「したのはこれだけ」
koudakeka shitarare.「　　」(ママ)

以上によると、この現象は否定ないし過去に限られないようである。なお、jokuka のような形に限られないこと、および -koso…, -dzo… のような言い方の用いられていないことが注目される。

(3) 大賀郷村における動詞の活用形について

§1. 活用の種類とその活用形

大賀郷村で現在用いられている動詞の活用の種類とその活用形を表に示せば次のようにまとめられる。

	活用の種類 / 接續することば / 代表語	1a iku (行く)	1b ju (言う)	1c njou (うたう)	2 okiru (起きる)	3 kuru (來る)	4 suru (する)
1	-ba	ika-	ja-	njowa-	oki-～okira-	ko-	se-～ʃe-～ʃa-
2	-ra～-tara*	ika-	ja-	njowa-	oki-	ki-	ʃi-
3	-nnaka, -itasu -takja	iki-	i-～i:-	njoi-	oki-	ki-	ʃi-
4	-te (～-de)	i*-	i'-	njo*-	oki-	ki-	ʃi-
5	言いきり, to, te:ja	iku	ju～ju:	njou	okiru	kuru	su～suru
6	-na, -no:wa	iku-	ju-～ju:-	njou-	oki-～okiru-	ku-～kuru-	su-～suru-
7	-wa, ka, toki, dara, -gon,** -nie***	ikɔ(-)	jɔ(-)	njo:(-)	okiro(-)	kuro(-)	so(-)～ʃo(-)
8	-ba, -do:mo****	ike-	e-～je-	njoe-	okire-	kure-	se-～ʃe-
9	言いきり	ike	e～je	njo(w)e	okiro	ko～ko:	se～ʃe

*　-ra は 1 に接続し、-tara は 2, 3, 4 に接続する。

**　付によって、-goŋ～-gɔaŋ～-gaŋ のように変る。

***　K では、-ɲte のかわりに -ite があらわれる。

****　K では、-do:mo のかわりに -do:ni があらわれる。

§2. iku（行く）の活用

いま、iku（行く）を例にとって、どんなことばに連っているか。つまり、文の中でどんな位置にあるかを示せば次のとおりである。

waga ikaba「もし私が行けば」
ikaredo: nakarara.「行ったけれどもいなかった」
iki:tasowa.「行きますよ」
sogoŋ ikitakaraba「そんなに行きたいなら」
ikiɲnaka「行かない」
doke: i'tekito:.「どこへ行って來た？」
i'te arowa.「行っているよ」
ara iku.「私は行く」
urega ikuto omo:wa.「あれが行くと思うよ」
ikute:ja.「行くということだ」
uno hitowa ikuno:wa.「あの人は行くでしょうよ」
una: ikuna.「お前は行くな」
waga ikowa.「私が行くよ」
waga ikoɲte「私が行くから」
una: ikoka.「お前は行くか」
areto do:ʃini ikogoŋ.「私といっしよに行こう」
doke: ikedo:.「どこへ行くのだ？」
waga iko toki「私が行くとき」
ikeba maniawarai do:mo「行けば間にあったんだけれど」
wara ikedo:mo「私は行くけれども」
mo:miŋ ike.「早く行け」

(4) いわゆる「音便形」について

上の §1 の表における4の活用形、つまり、-te（～-de）に接続する形はやや複雑である。

上の §1 の表では、つまり、大賀郷村では、

活用形 oki-(2), ki-(3), ʃi-(4)/接続することば -te……(a)

活用形 i'-(1a), i'-(1b), njo'-(1c)/接続することば-te … (b)

のようにふたつの型があらわれているが、ほかの村では、次のような形であらわれる。

ojo'de「泳いで」K 女 20代。

kato'de「かついで」N

joroko'de「喜んで」S 男 85 才。

これは次のような型と認められる。

活用形 ojo'- (1a), kato'-(1a), joroko'-(1a)/接続することば-de…(c)

また、次のような形でもあらわれる。

ojoɴde「泳いで」O 女 70 才

isoɴde「急いで」M 老女、N 男 20代。

katsuɴde「かついで」S 女 20 才

これは次のような型と認められる。

活用形 ojoɴ-(1a), isoɴ-(1a), katsuɴ-(1a)/ 接続することば-de…(d)

以上をまとめると次のようになる。

	活用形	接続することば	村	例
(a)	-	-te	OMKNS	oki-
(b)	-'-	-te	OMKNS	i'-
(c)	-'-	-de	KNS	ojo'-
(d)	-ɴ-	-de	OMS	ojoɴ-

(5) 特殊な活用について

なお、イロー「もてあそぶ」、ハリョー「争う」の活用は特殊であるが、われわれは直接調べることができなかったので、調査後、菊池正文氏（M村だけは山田茂子氏）に依頼して調べた結果は次のとおりである。

イ ロ ー

	村 / 接續することば	O	M	K	N	S
2	-ra,	イロー	イロー	イロアー	イロー	イラアー
3	-naka, -takja	イレー	イレー	イリヤー	イリヤー	イリー
4	-te	イロッ	イロッ	イロッ	イロツ	イロツ
5	言いきり	イロー・	イロウ・イロー・	イロー・	イロー・	イルー・
6	-na	イロー	イロウ イロー	イロー	イロー	イルー
7	toki, -wa	イロー	イロウ イロー	イロー	イロー イロウ	イロー
8	-do:mo	イレー	イレー	イリヤー	イリヤー	イレー
9	言いきり	イレー・	イレー・	イリヤー・	イリヤー・	イレー・

ハリヨー

	村 / 接續することば	O	M	K	N	S
2	-ra	ハリアワ	ハリオー ハリオウ ハリヨー	ハリヨア	ハリヨア	ハリヤア
3	-naka, -takja	ハリエー	ハリエー	ハリエヤー	ハリヤー	ハリイー
4	-te	ハリヤッ	ハリアッ	ハリヤッ	ハリヤツ	ハリヤツ
5	言いきり	ハリヨー・	ハリオー, ハリヨウ, ハリオウ, ハリヨー・	ハリオー・	ハリオー・	ハリヨー・
6	-na	ハリヨー	ハリオー, ハリヨウ ハリオウ, ハリヨー	ハリオー	ハリオー	ハリヨー
7	-toki, -wa	ハリエー	ハリオー, ハリヨー ハリヨウ	ハリヨア	ハリヨア	ハリヨー
8	-do:mo	ハリエー	ハリエー	ハリヤー	ハリヤー	ハリエー
9	言いきり	ハリエー・	ハリエー・	ハリオー・	ハリヤー・	ハリエー・

以上、O村だけについて見ると、以上ふたつの動詞は§1の表における1a—4の活用の種類のどれにも属しない。1a—4のほかにふたつの種類の活用をたてるべきではないかと思う。

IV. 八丈島の言語の敬語資料

§1. はしがき

八丈島におけるいちじるしい敬語現象と、敬意をあらわす特殊な語いの

存在とは、従来から一部の研究者の注目するところであった。

八丈島のひとびとも、「八丈島にはていねいなことばがたくさんある」ということを自慢にしている。それは、島に生れ、島に育ったひとばかりではなく、内地（クニ）から来て住みついたひとたちもひとしく語るところである。そして例にあげられるのが、きまって、odʒare「いらっしやい」という語である。

この八丈島における敬語について、いままで徹底的に調査したものはない。こんどの調査においても、残念ながら、調査のおもな目的が別なところにあったので、特に敬語をとりあげて調査する余裕がなかった。ここには現地においておこなった後半の「方言調査」の際に採集したもののうちから、敬語に関する資料をぬき出してならべてみた。したがって、八丈島という言語社会において敬語がいかにおこなわれているか、というような機能的観察の結果を示すことはできない。ただ、敬意をあらわすいくつかの動詞とそれにつづく「補助動詞」ないし語尾とについて簡単な説明を加えるだけである。さらに詳しい研究は今後の調査にまつこととする。

§ 2. 敬意の動詞

（i） ある、いる

arowa「ある、いる」に対して、odʒarowa「あります、います」などの形がある。

juwano odʒarowa「岩があります」O 女 70 代。
ʃi'kari odʒaro(wa)「たくさんあります」M 老女。
hibi odʒaredo「毎日いらっしゃいますが」M 女 40 代。
anmimo odʒanno:ga「なにもございませんよ」K 男 50才代。
odʒarinnante「ありませんで」(cf. na' kente「なくて」) S 女 30～50才。
kawja:ʃiku odʒarowa「かわいらしくいらっしゃいます」K 男 25。
bouku odʒaro koto「大きくていらっしゃること」M 女 40代。
ʃoku odʒaru「知っていらっしゃる」O 女 50才代。

K 村で「いらっしゃいませんでした」を特にていねいに目上にむかって

言うとき、ʃindʒarara を使う。同じことを言うのに目下にむかっては、waʃindʒarara または waʃinnarara を使う。

なお、次のような一例が採集されている。

joke koto owaʃimaʃitada「よいことがございましたよ」O 女 73 才。

(ii) 行　く

K 村（男 20代）では、「(わたくしが) 行く」は次のような敬意の段階で種種の形をもっている。mja:rimo:soga がもっとも敬意が強く，順次弱くなって，ikowa は敬意がもっとも弱い。語幹について見れば、ik-/mja:r- の対立しかない。×は該当形のないことを示す。

mja:rimo:soga
mja:ritasoga
mja:roga:(wa)
ikimo:soga
iki:tasoga
(× odʒarowa)
(× wasowa)
ikowa

N村については記録されていないけれども、各村に次のような形がある。

kaimono meirowa「買物に行きます」女 20代。
mja:rowa, mja:roga, mja:ritasoga, mja:rimo:soga, mja:rijare 男30代。

(iii) 行　け

「行く」の場合と同じように、K 村（男 20代）では、「行け」は次のような敬意の段階で種種の形をもっている。odʒarimo:se がもっとも敬意が強く，順次弱くなって ike はもっとも敬意が弱い。語幹について見れば、ik-/wja:-/ was-/se-/odʒar- のような対立が見られる。

odʒarimo:se　(個人的、老人的)
odʒa'te tamo:re　(× ite tamo:re)

odʒarijare
odʒare
se
wase
wja:te　tabe
ike

いちばん敬意の程度の高い動詞として、odʒar- は全島に分布する。語尾ないし「補助動詞」を伴う形は、K 村の上の例にある、-mo:se, -jare, -te tamo:re のほかに、odʒari:tase （男 小学生）のように -:tase を伴うことがある。O M では、目下に対する oideba, oidereba に対して、目上に対する odʒaraba という形が行われている。

se は、K 村だけに用ひられる形らしい。

wase は各村において一般に用いられる。一般に、ike は目下、odʒar- は目上、wase は同輩に対して用いられる。

muko:ʃan wase「むこうへ行け」S 男 30代。

(iv) 行った

K 村で、目上の他人の行為について用いる形に ʃitara がある。なお、ʃitara は「行った」のほかに、「來た」、「言った」の敬語でもある。

(v) 言った

N 村（女 70 代）では、目上の人の行為として、sunara を用いる。sunara に対する、目下の人の行為を言うのには jara を用いる。jara は全島に分布している。

上の (iv) に述べたように、K 村では ʃitara が用いられる。

(vi) くれ

kero（共通語の「(物を) くれ」にあたる）に対して、tamo:re, tabe が O M K S の各村にある（N については採集もれ）。tamo:re は目上に対して、tabe は同輩に対して用いられる。

(vii) **くれる（やる）**

目下に対する「(物を）やる」にあたる kerowa（O [金土川]、S）に対して、moɯserowa～ma:serowa という同輩にたいする言い方がある。ただし、K 村では、ma:seru は目下に対してのみ用いる（男 25才）。

(viii) **来　た**

すでに（iv）で述べたように、K. 村では「来た」の敬語として ʃitara を用いる。

(ix) **来　い**

O村金土川（女 73才）では、

目上に対して		odʒare
同輩	〃	wase
目下	〃	koi, ko:

のように使いわけられている。

（x）**食べろ**

K 村（男20代）では、「食べろ」は次のような敬意の段階で種種の形をもっている。mja'te tamo:re がもっとも敬意が強く、順次弱くなって、kame はもっとも敬意が弱い。語幹について見れば、kam-/agar-/mja:r- のように対立する。

mja'te tamo:re
mja'te tabe
aga'te tamo:re
ka'de odʒare
mja:rijare
mja:re
agari:tasoka
agarijare
agare

kamijare
kame

agar- は全島、目上に対する言い方として用いられる。

O 村（男 50代）では、

目上に対して	agar-
同輩に対して	me:re, mja:re
目下に対して	kame, kue

のように使いわけられる。

§ 3. 敬意の「補助動詞」ないし語尾

(i) -te ageru～ageru

共通語の oSiete ageru「教えてあげる」に ose:te ageru（M 女 40代）があたる。共通語と同じように、敬意の程度は高い。

O 村では、

目上に対して		-te agerowa
同輩	〃	-te moɴserowa
目下	〃	-te kerowa

のように使いわけられる。

なお、O 村（女 73才）では、ose: agejo:kano:「教えてあげようか」のような形でも用いられる。

(ii) -jare

各村においてもっとも一般的に用いられる。-mo:se, -te tamo:re, -te tabe より敬意はうすいが目上に対しても用いられる。

agarija'taka
ojorija'taka
jasumija'taka
} 「あいさつのことば」 M 女 50才

atsukja kakijaroɡoɴa「あぐらをかきましょう」N 男 54才
Sijariɴnaka「なさらない」O 女 73才

(iii) -te jatara

iki: te jatara「いらっしゃった」O 男 65才 M 女 73才

上の1例しか採集しえなかったが、目上に対して用いると言う。

(iv) -de me: ru

asuɴde me: rowa「遊んでまいります」M 女 40代

(v) -mo: se～-te moɐse

共通語と同様の意味で用いられる。-jare, -te tamo: re に対し、目上に対して用いられる最高の敬語であったが、現在ではすでに個人的、老人的なものになりつつあるようである。

例: ikimo: soga (cf. ikowa)「行きますよ」 K 男 30代
ikimo: ʃi:「まいります」 N 男 54
totsu'te moɐserowa「縫ってあげます」 O 女 73才

(vi) -te odʒaru～de odʒaru

共通語の「……していらっしゃる」の意で、-te arowa が目下ないし同輩に対して用いられるのに対し、目上に対して用いる (O)。

例: kaite odʒarowa「書いていらっしゃる」 O 女 73才
matʃite odʒarejo「待っていらっしゃいよ」(cf.—— arijarejo) M 女 20才

つぎに、dara に対して、いっそうていねいな言い方として de odʒaru という形がある。

aɴde odʒaro「なんですか」 M 女 20代
kjo: djade odʒaroga「兄弟ですよ」 N 女 68才
soɡoɴde odʒari: tasuka「そうでございますか」 M 男 27才

(vii) -te tabe

「……して下さい」の意。-te kero よりは敬意が強く、-te tamo: re よりは敬意が弱い。

to'te tabe「取って下さい」 S
mja'te tabe「お食べ下さい」 K 男 20代

(viii) -te tamo:re

-te kero, -te tabe より目上の人に対して用いる (M)。各村にある。

agaʼte tamo:re (cf. agare)「上って下さい」 O 男 50代、K 男 30代
odʒaʼte tamo:re「おいで下さい」 K 男 30代、N 男 22才
ose:te tamoure「教えて下さい」 M 女 40代
joʼte tamo:rijare「お寄り下さいませ」 M 女 28才

(ix) -:tasu～-tasu

各村において一般的に用いられている。

-te odʒaru～de odʒaru が他人の行為について言われるのに対して、-:tasu～-tasu はおもに自分の行為についてていねいに言う場合に用いる。したがって、命令形はほとんどあらわれない。ただし、K では他人の行為についても、例えば agari:tasoka「召し上りますか」のように用いることがある。

O 村の 73才の女によると、-:tasowa は目上に対して、-moʁserowa は同輩に対して用いると言うが、K 村では -mo:soga の方をより目上に対して用いている。-:tasu にさらに敬意を表わす -jare をつけた形も用いられる。

soɡoʁde odʒari:tasuka「そうでございますか」 M 男 27才
iki:tasoɡa「行きます」 K N S
kaki:taʃijare「お書きなさい」 M 女 20代
koɡe:tasuno「寒いですね」 N
marubi:tasoɡa「死にますよ」 K 男 33才、67才
aɡe:tasowa「あげます」 N 女 68才
mja:ritasoɡa「参りますよ」 K 男 30才
i:taʃiɴnaka「言いません」 O 男 65才

(x) -:te:tara

M 村のみで用いられる。ikara「行った」の敬意ある言い方として、iki:te:tara が用いられる。iki:taʃita (-:taʃita は -:tasu の「過去」)「い

らっしゃいました」とほとんど同じ程度の敬意と言われる。

kaki:te:tara (cf. kakara)
oki:te:tara (cf. okitara)
ʃi:te:tara (cf. ʃitara)

(xi) -te wase

S 村で次のような言い方がある。

asonde wase 「遊んで下さい」 S
ka'te wase 「買って下さい」 S

M 村では 60 才以上の人に使われているそうである。

V. 「一話一言」と八丈島語い

§ 1. 「一話一言」

大田南畝 (1748—1823) の「一話一言」(巻26) に八丈島語の語い 208 語 (注記のなかに出て来るものを入れれば 210 語) が見える (「八丈島方言」の項)。これは「八丈島俗通志」から引用されたものと思われる。これらの語いは、カタカナ書き (ひらがな、漢字も少しまざる) で、それに当時の共通文語の意味が当ててあり、事項分類別と思われる順序にならんでいる。

「一話一言」は、1779 (安永 8) 年ごろから 1820 (文政 3) 年ごろにわたって書き集められたものと言い (日本文学大辞典、「一話一言」による)、八丈島語の記載されている現存の文献のうち、もっとも古いもののひとつである。

いまから約150年をさかのぼる当時の言語が、現在どのように使われているか。——八丈島語の歴史的変化を知るための資料を得る目的で、O M K N S の 5 か村からそれぞれ 4 名ずつ選んだ合計 20 名の被調査者について調査した。

§ 2. 調査の方法

被調査者の選定および調査の実施はN村小学校長　菊池正文氏（國立國語研究所昭和24年度地方調査員）に委嘱した。

被調査者は、だいたい次の條件のもとに適宜選んでもらった。その氏名は下に記すとおりである。

（1）　各村4名ずつ。

（2）　各村、次の年令層別に1名ずつ。70代以上; 50, 60代; 30, 40代; 10, 20代。

（3）　各村2名は男、2名は女。

調査の期日は、1949年12月中旬　－　1950年1月上旬。

調査の方法はいわゆる記入方法によった。つまり、調査票を配り、被調査者自身に記入してもらった。記入のしかたは、現在使っている語には○、使っていないものには×をつけるというやり方である。なお、特に記すことがあれば備考のところに記入するよう指示した。

調査票には、日本隨筆大成別巻下、一話一言下巻（1928—IV—10発行，集成館）の記載による 208～210 語を印刷した。ただし、印刷の手ちがいで、次の1語が調査もれとなった。したがって、調査した語いは207～209語である。

ワセ　ござれと云事

この語は現在も用いられているが、あまりていねいな言い方ではない（「八丈島の言語の敬語資料」参照）。なお、1826(文化9)年の写本（國立國会図書館上野支部藏）との相違はカッコのなかに示す。

さて、調査に協力願った20名の被調査者の氏名は次のとおり。敬稱は略す。

O—1　菊池オイサ（女, 75才）
O—2　菊池　明吉（男, 51才）
O—3　増淵みさを（女, 40才）

O—1　菊池　晉（男，19才）
M—1　小宮山金一郎（男，97才）
M—2　小宮山キミカ（女，66才）
M—3　雨森　讓夫（男，43才）
M—4　雨森　千代（女，15才）
K—1　笹木榮三郎（男，71才）
K—2　笹本　きえ（女，60才）
K—3　笹本　正道（男，37才）
K—4　峯元　明子（女，16才）
N—1　神山おべん（女，71才）
N—2　大澤　徳一（男，53才）
N—3　山下　鈴江（女，40才）
N—4　大澤　一勝（男，19才）
S—1　神山惣五郎（男，84才）
S—2　神山　きつ（女，49才）
S—3　神山　常光（男，32才）
S—4　淺沼まり子（女，20才）

§3. 表の説明

被調査者の記述にもとづいて、村別および年令別の使用状態を表わしたものが表36および表37である。年令別の数字-1は70代以上、-2は50、60、代-3は30、40代、-4は10、20代を表わす。

表36において、○じるしを付けたものは形、意味ともに「一話一言」の記載の通りに現在使用している語いである。●じるしは違った語形あるいは意味で現在使用されている語のあることを示す。文献の欄の数字は「一話一言」以外の諸文献の番号である。歴史的変化を知る手がかりとするために、同じ形の見える文献を示したのである。文献の番号は別項「文献目録」(附録2II.)参照。

表37は、表36と同じく、村別および年令別に現在使用している形をすべて示したものである。意味のことなるものは注記した。なお、現在は使用していないが、了解はしているという語をカッコのなかに示した。

表36および表37はたがいに参照しつつ見ていただきたい。たとえば表

36 で○じるしを付けたものの中には、2・S-3の「トヽオ」のように「一話一言」の表記「トヽウ」と多少ことなってはいるが、実際は同じ形の語であろうと思われるものがいくらかまざっている。これらは○じるしの肩に *を付けてあるから、表 37 を見られたい。なお、注を付けたものは備考を含むもので、すべて表37の注と重複する。(260 ページを参照)

§4. 結　果

(1) 現在、形、意味とも「一話一言」のままでどこの村かで使われている語は、207のうち163 (78.8%) である。それ以外の語は次に示す44語(表36において総計 0 であるもの) である。この44語のうち * じるしのついてない 29 語は、「一話一言」と多少違った形では使われているもの(○も●もひとつもついていないもの) である。

したがって、* じるしの15語(7.0%)は、ここ150年のうちに使われなくなった語いと言うことができよう。

(12)* ゼイ　(23)フト　(26)テコ　(28)チイロウ　(30)クウロウ　(38)* セダ　(41)テイ○ソサ　(42)トツギ　(48)ニロノツテ　(57)* コツテイ引　(62)アイラシキヤア　(65)ノシタ　(76)* ホウケシユ　(85)トウフ　(86)ヲコル　(93)フツケフツケ　(100)* ダドノツ○トツ○テイ　(102)サンマイ　(105)* シヨシヨゲル　(110)マハル　(114)タカタラ　(115)タヒ　(119)ミシヒトヲモフ　(124)* デイ　(125)* ナカンデイ　(127)ワイタカ　(129)ケドワス　(130)ヌスタマ　(142)ヨヒ　(144)トンサ　(147)フンダミ　(149)テカ　(151)ヤキ　(152)シヤウギ　(153)ケントン　(155)* カナウト　(160)タイサン　(170)ケネイダ　(199)* イトツミ　(200)* カワフクロ　(203)* トミサガリ　(*204) ヲュフク　(205)* クロヲトコ　(206)* 國がへ

(2) 今回の被調査者の報告に関するかぎり、「一話一言」の語いは、N村の被調査者にいちばん多く知られており、O村のそれにいちばんすくなく知られている。「村の合計」のところを参照。

（3） これらの被調査者は、平均して、207語のうち約58語（28.0%）の語いを知っていることになる（個人の総計1167語を人数の20で割れば58語となる）。

（4） なお、各村とも老人（50才以上）のほうが若い者（50才未満）よりよく知っている。

表 36

No.	形	意味(備考を含む)	文献	O -1-2-3-4	M -1-2-3-4	K -1-2-3-4	N -1-2-3-4	S -1-2-3-4	計 -1-2-3-4	総計
1	テ、	父の事	5, 6, 17, 27, 31, 32, 44			○○	○○○	注 ○	3 2 1	6
2	ト、ウ	父の事	11(トトフ), 12(トトフ), 31, 35(トトー) 37(トトー)		○○			○ * ○○	2 1 1 1	5
3	ハア	母の事	17, 18, 31(ハー), 35(ハー), 37(ハー)		●	●●		注 ○	1	1
4	カ、ア (シ)	母の事	35(カ、ー), 37(カ、ー)		●	○		○ ○○	1 1 1 1	4
5	ヲ、ジ (ウ)	祖父の事	31(オーヂ)				○○○	○	2 1 1	4
6	タロヲジ (シ)	惣領の伯父の事	19(たろうぢ), 35(タロージ), 37(タロージ)		○○		○ ○	○	3 1 1	5
7	シウジ	二男の伯父の事			●○	●	●	●	1	1
8	サボウジ	三男伯父の事	19		○○		○	○	3 1	4
9	シヨウジ	四男伯父の事	19		○○		○	○○	3 2	5
10	ゴロウジ	五男伯父の事			○○		○	○	3 1	4
11	アセイ	兄の事	6, 11, 17, 18, 19(あせへ), 30, 31(アセー),44		●	●●	○○	●●	1 1	2
12	ゼイ	弟の事	4(知る事), 13(妹), 17, 18(セイ),							0
13	アネイ	姉の事	11, 17, 19(あねへ), 31(アネー), 32(アネー), 35(アネー)		注 ○	○●	○○	●●	3 1	4
14	ヲシウバ	伯父伯母の事	6(をぢうば)			●●	●●○		1	1
15	タロウ	惣領の子の事	4(タラウ), 5(タラウ), 12(太郎坊, 男の子の事), 18, 19, 20(太郎), 31(タロー), 32(タロー), 35(タロー), 37(タロー), 44(たらう)		● ○	○○	○	○	3 1 1	5
16	ジロウ	次男の事	12(二郎), 20(次郎)		● ○	●●	○	○	2 1	3
17	サボウ	三男の事	4, 5, 6, 12(サホウ, 三郎), 17, 19, 20, 29, 31(サボー), 32(サボー), 35(サボー) 37(サボー), 44		○ ○	○○	○	○○	4 2 1	7

No.	形	意味(備考を含む)	文献	O -1	-2	-3	-4	M -1	-2	-3	-4	K -1	-2	-3	-4	N -1	-2	-3	-4	S -1	-2	-3	-4	計 -1	-2	-3	-4	総計
18	ショウ	四男の事	4, 5, 6, 10, 12, (四郎), 17, 19, 20, 29, 31 (ショー), 35(ショー), 44					○		○		○	○			○				○				4	1		1	6
19	ゴロウ	五男の事	4(ゴラウ), 6, 12(五郎), 17, 20(五郎), 29, 31(ゴロー), 35, 37, 44					○		○		○	○			○				○				4	1		1	6
20	ロクロウ	六男の事	4(ロクラウ), 5(ロクラウ), 12(六郎), 17, 20(六郎), 29(ロクラウ), 35(ロクロー), 44(ロクロー),					○		○		○	●			○				○				4			1	5
21	ヒッテウ	七男の事	35(ヒッチョー), 37(ヒッチョー)					○								○				○				3				3
22	ハッテウ	八男の事	4(ハッチョウ), 5(ハツチヨウ), 6(ハッチヤウ), 10(ハッチョウ), 19(はつてふ) 20(八チヤウ), 29(ハツチョウ), 31(ハツチョー), 32(ハツチヨウ), 35(ハツチヨウ), 37(ハツチョー), 44(ハツチヨウ)					○								○				○				3				3
23	フト	(注1) 男女ともに唱る	17(フド, 女の名), 30(フド, 男女共小児)										●								●							0
24	ニヨコ	女の惣領の事	4, 5, 6, 11, 12(ニョウゴ), 17, 20, 29, 30, 31(娘), 32, 35, 37, 44					○	○				○			○				○				4	2			6
25	ナカ	二女の事	4 3, 5, 6, 10, 12(四女), 13, 19, 20, 29, 30, 31(長女, 娘), 35, 37, 44					○	○				○			○				○				4	2			6
26	テコ	三女の事	4(テゴ), 12(テゴ), 17(てご), 20(テゴ) 30, 31(テゴ, 次女)					●	●				●			●				●								0
27	(ウ)クス	四女の事	4, 6, 13, 17, 18(三女), 19, 20, 29, 30, 31(三女), 32(四男), 35, 37, 44					○	○				○			○				○				4	1			5
28	チイロウ	五女の事	4(チイロ), 20(ヂイロ), 30(チイロー)					●					●															0
29	アツハ	六女の事	10(女), 12(女のふたりめ), 13(五女), 17(あつば, 幼女の惣名)										●				●			○				1				1
30	クウロウ	七女の事	4(クウルウ, 六女) 10(九男), 17(くうろふ, 六女), 19(六女), 20(クウルウ, 六女)										●															0
31	メイ○ヨウシ	蜉蝣の事	6(メイヨウシ), 19(メイヨウシ) 31(メーヨーシ)	○				○	○	○		○	○	○		○	○	○		●	●	●	●	4	3	3		10

32	トンコ（コ）	はかの事	((どんご), 11(馬鹿), 17(どんこ, 馬鹿) 19(どんこ), 29(どんご), 3(ドンコ, 馬鹿), 31(どんご, 馬鹿), 44(どんご)	◉○	●	●●●●	●●●	●●●●	●●●●		1		1
33	マゴロク	どぬけた事	4(孫六), 17(孫六, 馬鹿), 30		○○○			○	○		2	2	1	5
34	マハリヤド（ト）	遊びに行先の家を指して云ふ	17(マワリ宿), 31(マーリヤド, 麻宿)	◉○	○●○	◉○○		○○○○	●●●○		2	3	3	2	10
35	イタリ	同上(但椹立村にて限りて唱候)				○○○					1	1	1		3
36	ヨマ	隣の事	30	○○	◉	●	○	○○○	○○○		3	3	3		9
37	ヨキリ	炭の火の事	30, 31(岩火)	○○	○○○○	○○○		○○○○	○○○○		5	5	4	3	17
38	セダ	似せる事													0
39	ワセン	利倍する事				○○					1	1			2
40	ヒヨウ○ウ	畫めしの事	11(ヒョフロフ), 17(ヤウラ), 18(ビヤウラ), 30	●●	◉ ●○	◉●●		●●○○	◉●○●				2	2	4
41	テイ○ソサ（キ）	一寸した事			◉										0
42	トツギ	相互に力同じき事	30(トツキ), 31(トツキ, 労働交換)	◉	◉ ●	● ●		●●●●	●●●●						0
43	デヤク	嘲する事	17(ものいふ)	○	○○○	◉●●●		○	○		3	2	1		6
44	シヤアヽヲガム	ことば多き事	11(しやあがみ, わる口に云)			●●		○○			1	1			2
45	ヤドル	寢る事	12(やとる), 17	○	○○	○○○		○○○	○○○○		5	4	3	1	13
46	ウガアヽニ	先をさして云事			◉	●●●●		○○○○	●●●		1	1	1	1	4
47	コカウテ	跡をさして云事						●●○○					1	1	2
48	ニロノツテ	共々にといふ事	30		●										0
49	アツカヒ	あぐらかく事		○○	○○ ○	●●●		○○○○	●●●●		2	3	1	2	8
50	ヒザマツク	居る事	((ヒジャマズク)	○○	洋洋洋 ○○○○	○●○●		○○○○	●○○○		4	4	4	3	15
51	ソガアンダレ	左様にと云事	2((ソグァンダ)		◉ ○	●●●●		○○○○	○○○○		2	2	2	3	9

No.	形	意味（備考を含む）	文献	O -1-2-3-4	M -1-2-3-4	K -1-2-3-4	N -1-2-3-4	S -1-2-3-4	計 -1-2-3-4	総計
52	ネツコヒ	ちいさい事	4(子ッコイ), 5(ネッコイ), C(ねっこい) 11(ネッコ), 12(子ッコイ), 2(子ッコイ), 25(ネツケー), 37(ネツコイ)	○	○○●●○	●○○○	○○○○	＊＊＊＊＊	4 4 3 5	16
53	イデン（ラ）	とれといふ事				＊○●	○	●●●	2	2
54	マゴヲニ	誠にと云事	4(マコウニ), 18(マガウ),	○	● ●○	●●●	○○ ○	●●●●	2 1 2	5
55	マアミニ	はやくと云事	4(マアミ), 11, 17(まあみ), 20(マアミ)	●	●●○	●●●●	○○○		1 1 2	4
56	マアミニマアミニ	早く早くと云事		●	○●	●●●●	○○○		2 1 1	4
57	ヨツチイ引	悉ひ事								0
58	ハツテモシヤラス	動かぬ事		○	○	●●	○○○○	○	2 2 1 1	6
59	カワンタラ	そうだと云事		●	●●	●●●●	○○○	●●●●	1 1 1	3
60	シヤレ	のけと云事	17(そこをのけ)	○	○○○ ○	○○○○	○○○○	○○○○	5 4 3 5	17
61	ヒヨンゲニ	何故にと云事	17(なんのことを)			○○○			1 1 1	3
62	アキラシキヤア	あいそもないと云事					●			0
63	デロ	來れと云事(注2)	4(デコ), 11	○	●●●	●●●●	●○○○	●○○○	2 2 2	6
64	ヨワクテ	空腹の事	11(ヨワイ), 17(ヨワクッテ)	●	● ●○			●●●●	1 1	2
65	ノシタ	沢山喰た事					●●			0
66	ダヒジヒ	見事た事	4(ダイデイ), 11(ダイシイ, うつくしき物にうつくしき人に用ゆ), 17(だいじい, うつくしい), 18(ダイジイ, 美しき事), 20(ダイデヤイ, 美キ事)	●	● ●○	●	○○ ○	●●●●	1 1	2 4
67	カスルナ（テ）	覚えて居よと云事		○	○○●	○	○○	●●●●	4 2	6
68	カスル	忘れた事	4(カスッタ, 忘る事), 11, 12(かすった, しれた)	○	○○○	○	○○	●●●	4 2 1	7

69	ヘタ（ウ）	わるい事		○○	○	○	○○○○	○○○○	4	3	3	2	12
70	ショクナヒ	しらぬ事	4(ショクナイ), 11, 17(しよくなけ), 18(しよくもない), 20(ショクモナイ)	○○　○	○○●○		○○○○	*○*○*○*○	4	4	2	4	14
71	ボヲイ	大きた事	4(ボヲケ), 11(ボウイ, いらいと云事), 2.(ボウケ), 31(ボー)	●○　○	○○○○	*○*○○*○	○○○○	●○○○	3	5	4	5	17
72	モウニ	多き事	17(もふに), 30(モー)	○	○		○		3				3
73	コシ	すくなき事	4(少シ), 6(少シ), 11, 17(すこし), 18(少シ), 37(少シ)	○○　○	○○○○	○○○	○○○○	○○○○	5	5	4	4	18
74	ショウブ	余計の事	30	○　　○	○○注○		○○	○○○○	4	3	2	2	11
75	ホヲイ	せい高き事		●　　●	●●●○	●●○●	●●●●	●●●●			1	1	2
76	ホウケシュ	重立候者の事											0
77	ミジヤイ	ひくき事	17(ミジャク)	○○	○○○○	○○　○	○○○○	●○○○	4	5	3	4	16
78	ウルサイ（ヒ）	きたなき事		○	●	○○	○●	●○○○	3	2	1	1	7
79	ズイフン	病の重き事		●			○●	●	1				1
80	マルフ	死る事	11(マロブ), 31(マルブ)	○●	●●●●	●●●●	○●○○	●○●●	1	1	1	1	4
81	ヨウナシ（ク）	いらざる事	13	○○　○	○○○○	○○○	○○○○	*○○○○	5	5	4	4	18
82	マグレル	氣絶の事		○○　○	○○○○	●○○	○○○○	○○○○	4	5	4	4	17
83	ヨロケ	用に立たぬ事		●	●●	●●●	○●○	●○○●	1	1	2		4
84	トンフ（ケ）	高き所の事	9(トンブ, 小山)	●●　○	●●●○	●●●	○●　○	●●	1			3	4
85	トウフ	洞沢の事	30(トーフ)										0
86	ヲコル	さわぐ事			●　●	●●	●●●●	●●●					0
87	シク	あるく事					○		1				1
88	ハラクロウ	いたづらの事	4(ハラクロ, 悪敷事), 20(ハラクロ, 悪敷事)	○	●●●○	○○	○●	●●●	3	1		1	5
89	トマス	火を消す事		○　　○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	5	4	4	5	18

No.	形	意味(備考を含む)	文献	O -1	-2	-3	-4	M -1	-2	-3	-4	K -1	-2	-3	-4	N -1	-2	-3	-4	S -1	-2	-3	-4	計 -1	-2	-3	-4	総計
90	コンゴニナッテ	腰の曲る事	17(こんご), 31(コンゴヂー, コンゴバー, 腰の曲った老人)	○		○		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○			5	4	2	3	14
91	ヒヨンゲ	つまらぬ事		○								○	○	○			○			注				2	1	2		5
92	モヨリ	快晴の事		○	○			○	○	○	○	○	○			○	○			○	○			5	5	1	2	13
93	フッケフッケ(ッツ)	むら雨の事		●				●								●				●								0
94	ヅルンテ	亡る事		○								●	●	●			●			○	●				1			1
95	ザレ	戯れの事						○	○	○	○	●	●	●		○	○	○	○	●	●			2	2	2	2	8
96	イロウ(ク)	人にからかふ事	17(いろふな)	○		○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	●	○	○	5	3	4	4	16
97	トヅケ○グチスル	つげ口する事		●		○		○	○	○		○	○			○	○	○		●				3	3	2	1	9
98	ハラクリ	驚く事			●	○						●	●			○	●			●				1			1	2
99	メンサ○ナシ	了簡なしの事	11(メンザナシ)			○		●	○							●	●	●		○					1	1	1	3
100	ダドノツ○トツ○テイ	休ろふ事														●												0
101	フシヤウ○ナ	きたなき事		○				●	●	●		●	●	●		●					○	○	●		1	1		2
102	サンマイ	捨て置と云事										●		●		●												0
103	サガス	尋る事		○	注3	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	3	4	5	5	17
104	マシレタ	物の見へぬ事	4, 17(マジレル, 失る)	●				●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●		1			1
105	シヨシヨゲル	乾く事		●					●																			0
106	ウスナル	被仰と云事						●	●			●		○											1			1
107	タモウレ	くれろと云事	11(タマフレ), 12(タモレ), 17(たもれ)	○		○		○	○	○	○	○	*	*	○	○	○	○	○	*	*	*	*	5	4	4	5	18

108	ケル	くれる事	11(やる), 27(ケロジヤナシ, くれやすまいが)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	4	3	4	16
109	イテミヒ	どれみせろと云事		●				●		○●		●		1				1
110	マハル	みる事			●	●	●			●	●							0
111	ヨウラ	静にと云事	6(ヨウラニヨウラニ), 9(ヨウラニヨウラニ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●*	○	○	4	4	5	17
112	ソカンニ	そんなにと云事		●	○	●	●	○	●	●	●	○	○	○	○	1	1	1	4	7
113	キメヒノミヘテ	はらの立事	31(キメーノメール)	○	○		●	○	○	●	○	○		●	●	2	1	1	2	6
114	タカタラ(ク)	竹にて作る籠の事	4(タカダラ, 穀物を入るうつは), 5(穀物を入るゝ器), 11(タケダラ, 穀物を納め置籠のことなり), 37	●		●		●			●	●						0
115	タヒ	女経水にて他の家へ出る事	17(他火), 18(旅), 30(タビ), 31(タビ), 32(タビ)	●		●	●	●	●	●								0
116	ミヨケ	糸籠の事	4, 5, 6, 11, 20, 30, 31(ミヨ), 37			○	○	○	○	○	○	注○		4	3	1		8
117	ヲツビニタッテ	うつかりと立ている事						○	●					1				1
118	ツグリニシテ	糸の類を丸めて置し事をたとへていふ		●		●	●	○	●	●	○	●	●	1		1		2
119	ミシヒトヲモフ	みたくでもないと云事				●	●			●	●							0
120	挑灯に鐘	能釣合たる事				○	○			○		○		2	2			4
121	ヘヽラメク	笑ふ事				●				○	○			1	1			2
122	シンゲタ(ホ)	尻の事	4(シゲタ), 11(しりげた), 17(しっぺた), 18, 20(シゲタ)	●	●	○	○	●	●	●	○	●	●	○	●	2	1	1		4
123	ヒノヒボ	火炎の事	30			○	○		○	○	○		○	2	4			6
124	デイ	座敷の事	11, 30															0

No.	形	意味（備考を含む）	文献	O -1-2-3-4	M -1-2-3-4	K -1-2-3-4	N -1-2-3-4	S -1-2-3-4	計 -1-2-3-4	総計
125	ナカンデイ	小座敷の事	30							0
126	ヲジヤレ（ッ）（タ）	お出と云事	11（おざれ），4（ヲシヤレ，帰る時貴人に）	○	○○○	○○○○	○○○○	○○○○	5 4 3 5	17
127	ヲイタカ	来たかと云事	4	◎	●●	●●	●●	●●		0
128	ッヘ（トウ）	家根の事	17（つべ，屋の棟），30，31（ッベ）		●● ●	●●●	●●○●		1	1
129	ケドワス	下水の流をいふ	31（ケドーズ）		●●	●●	●● ●	●		0
130	ヌスタマ	盗人の事	5，11（ヌスダマ），37（ヌスダマ）		●	●		●		0
131	マシレタ	うしのふ事	4，17（マジレル，失る）	◎	●●●●	●●●●	●●○○	●●●●	1 1	2
132	ヒツウスル	みへをする事			●●	●●	○○	●	1 1	2
133	ナムテント（ホ）ウ	有かたき事 奈なき事					○○	○	2 1	3
134	トンツムリ	山の頂の事	30，31（トンツブリ）	◎	●● ●	●●●	●○●	●○●●	2	2
135	コシ	谷々けんそなる所の事	31（山腹）	○	○	○○○	○○○○	○	5 2 2 1	10
136	ヤワ（ッ）	洞穴をいふ	4（ヤハ，岩屋），5（ヤハ），11（ヤア，山にあるあな），12（ヤハ），31（ヤー），37（ヤハ）	◎	●●	●●●	○	●●●	1	1
137	カヲトル	桑をとる事			○● 注正	●○	○	●○○○	1 3 1 1	6
138	カ子イ	桑の花の事	31（カネェー）		○○○	●●	○○○	○○○○	3 3 3 1	10
139	メナタ	涙の事	4，5，11（メナンダ），24（メナダ），29（メナダ），3.（メナダ），32（メナダ），37（メナダ），44（メナダ）	◎	●●●●	●●●○	○●●●●	●●○ ●	1 1 1 1	4
140	ヘヒラ	衣類の事	4（ヘブラ），8（ヘビラ），11（ヘビラ，やぶれつきたる着物の事なり），17（ヘビラ），18（ヘヘラ），19（ヘビラ），30（ヘビラ），31（ヘビラ，ヘベラ），32（ヘビラ），35（ヘビラ）	◎●	● ●●●●	●●●	●●○○	●●●●	1 1	2

141	マダラ	模様の事	8(マダラ), 11(マダラ, よき着物), 17(マダラ, 美服), 19(マダラ), 30(マダラ), 31(マダラ, 晴着), 32(マダラ)	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●		1	1	1	3
142	ヨヒ(ビ)	帯の事	11(ヨオビ), 31(ヨビ)								●	●				●											0
143	ドロ	ぼろの事	17(帯), 19(あしき着物), 31	○			○	○		●	○	○			○	○	○		○	○	○	○	5	4	2	1	12
144	トンサ(ザ)	古き大布子の事	31(ドンザ, さしこ), 32(ドンザ, 襤褸)				●	●							●	●	●	●									0
145	ユマキ(イ)	女の二布の事	11, 31, 35	○	○		○	○			●	○	●		○	○	○		○	○	●	○	4	5	1	1	11
146	コシマハシ	同上		●			○	●							○		○						2		1		3
147	フングミ	男の下帯の事	31(ふんごん)	●				●												●	●	●					0
148	ヒボン	烟草盆の事	30, 31	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	5	4	4	3	16
149	テカ	片手小鍬の事	30, 31(テガ, 平鍬)	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●					0
150	マカマ	鎌の事	17(まがま), 30(まがま), 31(まがま), 32(まがま)	●			●	●		○	●	●	●	●	●	○	○	●		●	●	●		1	1	1	3
151	ヤキ	釣竿の事	5, 17(ヤギダケ), 18, 30, 31(ヤギ), 37	●			●	●			●	●			●	●	●	●			●						0
152	シヤウギ(キ)	貴人の椀の事	17(じゃうぎ, 飯椀)								●	●	●			●											0
153	ケントン	うがひ茶椀の事	29(ケンドン, 丼), 31(ケンドン, 五郎八茶碗)	●			●	●			●	●			●	●	●		●								0
154	クリ	徳利の事	17, 18, 31	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○			○	○	○	○	5	4	3	2	14
155	カナウト	かなてこの事																									0
156	トンメテ	朝の事	11, 17, 18, 29, 30, 31, 32, 37, 44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	5	4	5	19
157	ヤアヨウ	夕方の事	11(ヤイユフ, こんや)	●			●	●			●	●	●		●	○			●	●	●	●	1	1			2
158	アサヒル	四ツ時比の事	18(アサビル), 31(アサビル), 32(アサビル)				●	●							●	○	○						1	1			2
159	マヒル	正九ツ時の事	31(正午)	○			○	○			●	●			●	○	○	○					2	2	1	1	6

No.	形	意味（備考を含む）	文献	O -1 -2 -3 -4	M -1 -2 -3 -4	K -1 -2 -3 -4	N -1 -2 -3 -4	S -1 -2 -3 -4	計 -1 -2 -3 -4	総計
160	タイサン	八ッ時過の事	11(ダイシャンドキ), 17(ダイサン), 30(ダイサン, ダイシャン)		●	●	●			0
161	トウヤク	後刻と云事	12, 17(そろそろ), 18, 30(トーヤク)			○○	○○○	⁂	3 3 2 1	9
162	ソロソロ	後程と云事	30	○	○	○○○	○○	○○○	5 3 2	10
163	コゞヘル	寒き事	17(こゝゑる)	◎	●○○○○	●●●●	○○○○	●●●●	2 2 2 2	8
164	ホドヲツテ死テ	あつさ堪がたき事		●	●●●●○	●●●●	●○○○	●●●●	1 1 2	4
165	(、)コゞヘテ死テ	寒さたへがたき事		●	●○○ ○	●●●●	○○○○	●●●●	2 2 1 2	7
166	ウレシクテ死テ	甚だ嬉しき事		○	○○ ○	●●●●	○○○○	○○○○	4 3 2 3	12
167	ソウメ	雄牛の事	11(ゾウメ), 17(ぞうめ), 31(ゾーメ, ゾックメ)	●●	●●●●	●●	○	●	1	1
168	(ハ)バメ	雌牛の事	10, 17, 19, 29, 30, 31, 32, 35, 37, 40, 44	○	○○○○○	○○○	○○○○	○○○○	5 4 4 4	17
169	ゾク	老牛の事	19, 29, 31(おうし), 35, 40		○○●○	●●○	●○○○	●●●	1 2 2 2	7
170	ヲシヨ○コ(コメ)	小牛の事	17(オシヨコ), 31(オショコメ)	●○	○○	●	●○	●○	1 4	5
171	ケネイダ	疲牛の事	30					●●●		0
172	カトウ	松魚の事	17(かとふ), 31, 32(カトー), 40(カトー)	○●	○○	○●	○○	●○	4 3	7
173	アブキ	小鮑と唱へ候とこぶしの事	5, 8(あふき), 13(あふき), 30, 31, 32, 40	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	5 5 5 5	20
174	ヨ	魚類惣名	29, 30, 31	○○ ○	○○○○	○○	○○○○	○○○○	5 5 3 4	17
175	コナ	盃の事	31(コナサマ), 32, 35, 37(コナサマ)	○○	○○○○	○○○	○○○○	○○○○	5 5 4 3	17
176	マエ	薦の事		●○	●●●○	●●●○		●●●●	1 2	3

177	ヌセメ	鳶の事	31		○	○○○○	◉			◉◉◉(	1	1	2	1	5
178	シヤアトメ	鳩の事	31(シヨートメ), 40(キジバト)	◉◉	◉	◉◉	○○○	○○○○	◉		2	2	1	8
179	コツコメ	腹の赤き鳥の事	31, 40(ハチジヤウコッコ)	○○○○		○○○○	○○○○	○○○○	○○○(	5	5	5	5	20
180	チンチカラ(ツ)	四十雀の事	30, 31(チンチガラ)	◉		○◉◉◉	◉						1	2
181	カブナ	鴈の事	31(カブナメ)			○○	○	○○ ○	○○○(	1	3	1	2	10
182	ホヲリツヽメ	鶺眉鳥の事	31(ホーリツヅメ, 頬白)	○		○◉	◉◉◉	○○○◉	○○○(	1	2	2	1	9
185	ツヽメ	雀の事	17, 31(ツズメ), 32(ツヅメ), 35(ツヅメ), 37(ツヅメ)	◉	○◉	◉◉	◉○◉	○○	◉○◉(	1	3	1		5
184	ベヽイメ	蟷螂の事	30				○○		○	2	1			3
185	ヘツ○ソメ	蜻蛉の事	17(へっぞ, へっそ°, アカトンボ), 18(ヘツソメ), 31(ヘッツオメ)			○○○	◉○	◉○○	◉◉	1	3	2		6
186	ナベコシキ	蚰蜒の事	31(ナベコジキ), 32(ナベコジキメ), 35(ナベコジキメ), 37(ナベコジキメ)	○		○◉◉	◉◉◉	○○○	◉	3	1	1		5
187	ケイビヤウ	蜈蚣の事	17(けいひやう), 31(ケービョーメ), 37, 40(ヲカダトカゲ)	* ○	○○	○○○○	◉◉◉○	○○	◉◉○◉	3	2	3	3	11
188	(ホ)クボナ	蚓の事	17, 24, 30, 31, 35(クボナメ), 37(クボナメ)				○○			1	1			2
189	ヒイル	蝶の事	17(ヘイル), 30			◉◉◉	○○○○	○○○○	○○	3	3	2	2	10
190	クツカワシ	蟬の事	17, 30, 31(クツコウシ, クツコーシ, クツクヮーシメ)	◉	◉	○○○○	◉○◉○	○○○○	◉◉◉	2	3	2	3	10
191	ヅクメ	木兎の事		◉		○○	◉◉◉○	○○	◉ ○	2	2		2	6
192	三ケ三日	上巳の事	32	○	○	○○	○	○○○○	○○○○	○○○○	5	4	4	4	17
193	五ケ五日	端午の事(七月は他國に同じ)	32	○	○	○○	○	○○○○	○○○○	○○○○	5	4	4	4	17
194	九ケ九日	重陽の事		○		○○	○	○○○○	○○ ○	○○○○	5	4	2	3	14
195	イチニチ(ヒ)	元日の事 以下正月祝ことば	30	○		○○		◉◉◉○	○○○○	○○	4	3	1	2	10

No.	形	意味(備考を含む)	文献	O -1-2-3-4	M -1-2-3-4	K -1-2-3-4	N -1-2-3-4	S -1-2-3-4	計 -1-2-3-4	総計
196	フツカビ	二日の事		○	○○	○○○	○○○○	○○○○	5 4 3 2	14
197	ミツカビ	三日の事	31(ミツカノイワイ)	○	○○	○○○	○○○○	○○○○	5 4 3 2	14
198	コウニチ	九日の事	17	◉	○	●●○	● ○	○●○◉	2 3	5
199	イネツミ	煩ふ事								0
200	カワフクロ(ト)	猫の事 常々はネツコメといふ	30							0
201	ヨメゴドノ	鼠の事	17(ヨメドノ), 31(ヨメドノ), 32(ヨメドノ), 35(ヨメドノ), 37(ヨメドノ)	○	○○	●●	●	◉	2 1	3
202	マイタマ	芋頭の事	30			○●	○○○		1 1 1	3
203	トミサガリ	雨降る事	30(よき雨)							0
204	ヲヽフク	福茶を祝ふ事								0
205	クロヲトコ(カ)	出家の事(但正月四日前計りいふ)	4, 6, 11, 20, 30, 37							0
206	國ガヘ	死去の事								0
207	イトヒキ	女経水の事	11, 17, 30		○				1	1
	個人の合計			57_{23} 8 29	$91_{74}41_{59}$	$65_{64}42_{22}$	$116_{96}85_{60}$	$70_{64}53_{48}$	$399_{321}229_{218}$	1167
	村の合計			117	265	193	357	235	720 447	
	個人の平均			29.3 36.3 注4	66.3	48.3	89.3	58.8		

注1 備考(これは九男十男の外すべてフトと云 トヲスは格別愛子に用唱へ候)

注2 備考(最後にデロの下来れの字疑らくは行きやれの誤りならん)

注3 調査票に不備の点があったため、O-2 の 103～135 まで調査不能。

注4 O-3 は 1945-7月 に八丈島に移住した者であるから、O-3 を除いた数を出してみた。

表　37

No.	O—1	O—2	O—3	O—4	M—1
1					
2	(トトー)				トヽウ
3	(フオー)				(ホオ,ウンマ,カコウ,ホウチヤ)
4	(カヽア)				
5	(ヲヽジ)				
6	(タロウジ)				タロヲジ
7	(ジヨウジ)				ジョウジ
8	(サボウジ)				サボウジ
9	(シヨウジ)				ショウジ
10	(ゴロウジ)				ゴロウジ
11	(アセイ)				ナンナ
12	(ゼイ)				
13	(アネイ)				注 アネイ、インネ
14	(ヲジウバ)				
15	(タロウ)				ヤツコ
16	(ジロウ)				ジヨウ
17	(サボウ)				サボウ
18	(シヨウ)				シヨウ
19	(ゴロウ)				ゴロウ
20	(ロタロウ)				ロクロウ
21	(ヒツテウ)				ヒツテウ
22	(ハツテウ)				ハツテウ
23					
24	(ニヨコ)				ニヨコ
25	(ナカ)				ナカ
26	(テゴ)				テゴ
27	(グス)				クス
28	(ヂイロー)				ヂイロウ
29					
30	(クウルー)				
31	メイ○ヨウシ				メイ○ヨウシ
32	ドンゴ 注	トンコ		ドンゴ	ドンコ
33					マゴロク
34	モーリヤド	マハリヤド			マハリヤド
35					

（そ の 1）

M—2	M—3	M—4	K—1	K—2
			テ 、	テ 、
ト 、 ウ				
			フ ア ー	フ ア
（ウ ン マ）				カ 、 ア
（オ ウ サ マ）				
タ ロ ヲ ジ				
シ ウ ジ				
サ ボ ウ ジ				
シ ヨ ウ ジ				
ゴ ロ ウ ジ				
（ナ ン ナ）			ア シ イ	ア シ イ
（イ ン ネ）			ア ネ イ	ア ニ イ
			ヲ ジ ユ ウ パ	ヲ ジ ユ ー パ
（タ ロ ウ ジ）		タ ロ ウ	タ ロ ウ	タ ロ ウ
（ジ ヨ ウ ジ）		ジ ロ ウ	ジ ヨ ウ	ジ ヨ ウ
（サ ボ ウ ジ）		サ ボ ウ	サ ボ ウ	サ ボ ウ
（シ ヨ ウ ジ）		シ ヨ ウ	シ ヨ ウ	シ ヨ ウ
（ゴ ロ ウ ジ）		ゴ ロ ウ	ゴ ロ ウ	ゴ ロ ウ
（ロ ク ロ ウ ジ）		ロ ク ロ ウ	ロ ク ロ ウ	ド ク ロ ウ
			（ヒ チ ロ ウ）	（シ チ ロ ウ）
			（ハ チ ロ ウ）	（ハ ツ チ ヨ ウ）
			フ ド	
ニ ヨ コ			ニ ヨ コ	ニ ヨ コ
ナ カ			ナ カ	ナ カ
テ ゴ	（テ ゴ）		テ ゴ	テ ゴ
ク ス			ク ス	ク ス
（デ イ ロ ウ）			ジ ユ ウ ル ウ	
			ア ツ パ	
			ク ル ウ	
メ イ ○ ヨ ウ シ	メ イ ○ ヨ ウ シ		メ イ ○ ヨ ウ シ	メ イ ○ ヨ ウ シ
ト ン ゴ	ド ン コ	ド ン コ	ド ン ゴ	ド ン ゴ
	マ ゴ ロ ク			マ ゴ ロ ク
モ オ リ ヤ ド	マ ハ リ ヤ ド		ム ア ー リ ヤ ド	マ ハ リ ヤ ド
			イ タ リ	イ タ リ

表　37

K--3	K—4	N—1	N—2	N—3
		テ　ヽ	テ　ヽ	テ　ヽ
		カ　ヽ		
		ヲ　ヽ　ジ	ヲ　ヽ　ジ	ヲ　ヽ　ジ
		タロヲジ		タロヲジ
		(ジ　ウ　ジ)		
		サボウジ		
		シヨウジ		
		ゴロウジ		
		ア　セ　イ	ア　セ　イ	
		ア　ネ　イ	ア　ネ　イ	
		ヲジウバ	ヲジウバ	ヲシウバ
		タ　ロ　ウ		
		ジ　ロ　ウ		
		サ　ボ　ウ		
		シ　ヨ　ウ		
		ゴ　ロ　ウ		
		ロクロウ		
		ヒツテウ		
		ハツテウ		
		ニ　ヨ　コ		
		ナ　カ		
		テ　ゴ		
		ク　ス		
			(デイロウ)	
			ア　ツ　パ	
メイ〇ヨウシ		メイ〇ヨウシ	メイ〇ヨウシ	メイ〇ヨウシ
ドンコ		ドンコ注	ドンゴ注	ドンゴ注
			マゴロク	
		マハリヤド	マハリヤド	マハリヤド
イ　ヌ　リ				

（その 1 続）

N—4	S—1	S—2	S—3	S—4	No.
	テ、注				1
	ト、ウ		ト、オ	ト、ウ	2
	ハ ア注				3
	カ、ア		カ、ア	カ、ア	4
	ヲ、ジ				5
	タロヲジ				6
	ジヨウジ				7
	サボウジ				8
	シヨウジ	シヨウジ			9
	ゴロウジ				10
	ア シ イ	アニイ			11
					12
	アニイ、アンド、インネ	アネイ、インネ、アンド		（インネ、アンド）	13
					14
	タロウ				15
	ジロウ				16
	サボウ	サボウ			17
	シヨウ				18
	ゴロウ				19
	ロクロウ				20
	ヒツテウ				21
	ハツテウ				22
					23
	ニヨコ				24
	ナカ				25
	テゴ				26
	クス				27
					28
	アツハ				29
					30
	ミイヨウシ	ミイヨウシ	ミイヨオシ	ミイヨオシ	31
ドンゴ	ドンゴ	ドンゴ	ドンゴ	ドンゴ	32
	マゴロク				33
マハリヤド	マアリヤド	マアリヤド	マアリヤド	マハリヤド	34
	（イタリツコ）注				35

表　37

No.	O—1	O—2	O—3	O—4	M—1
36	ヨ　マ	ヨ　マ			ド　マ
37	ヨ キ リ	ヨ キ リ			ヨ キ リ
38					
39					
40	ヒョウラ	ヒヨウラ			ヒヨウラ
41					テイドサ 注
42	ドッギィー				ド ン ギ
43	デ ヤ ク				デ ヤ ク
44					
45	ヤ ド ル				ヤ ド ル
46					ウガア、ニ 注
47					
48					
49	アツケイー	アツカヒ			アツカヒ
50	ヒザマツク	ヒザマツク			ヒザマツク 注
51					ソガアンダラ
52	ネツコヒ			ネツコヒ	ネツコヒ
53					
54	マゴヲニ				マゴヲニ 注
55	モウイニ				モオミニ
56	モウイニ				モオミニ
57	モウイニ				モオミニ
58	シャラズ				
59	カンダヤ				カンダラ
60	シ ヤ レ			シ ヤ レ	シ ヤ レ
61					
62					
63	デ　ロ 注	(デ　ロ) 注			デ　ロ 注
64	ユワクテ	(ユワクテ)	(ユワクテ)		ユワクテ
65					
66	デイジイ				デエジイ
67	カスルナ				カスルナ
68	(ヒツカスルナ) カスッテ				カ ス ル
69	(ヒツカスッテ) ヘ　ダ				
70	ショクナイ	ショクナヒ		ショクナヒ	ショクナヒ

M—2	M—3	M—4	K—1	K—2
ド マ			トマ、ドマ	
ヨ キ リ	ヨ キ リ	ヨ キ リ	ヨ キ リ	ヨ キ リ
			ワ セ ン	ワ セ ン
（ヒヨウラ）	ヒヨウラ	ヒヨウ○ウ	ヒヨウラ	ヒヨウラ
（ドンギ）	ドンギ	（ドンギ）	ドヅキ	（オツツキ）
デヤク	デヤク		デヤーク	ジャーク
（ショオグ）			ショアガミ	ショアガミ
ヤドル			ヤドル	ヤドル
			ウガン	ウガン
（ドウシニ）	モロノツテ			
アツカヒ	アツカヒ	アツカヒ	アツキャア	アツキャア
ヒザマツク注	ヒザマツク注	ヒザマツク	ヒザマツク	ヒザマヅク注
ソガアンダレ注		ソガアンダレ	スガンダラ	スガンダラ
ネツコヒ	ネツコイ	ネツコヒ	ネツコイ	ネツコヒ
			イデン、イデ	イデ
（マゴヲニ）注	マゴヲニ注	マゴヲニ	マグン	マグン
モオミニ	マアミニ		モァーミン	ムァーミン
モオミニ			モァーミン	ムァーミン
モオミニ			モァーミン	ムァーミン
ハツテモシ	（ハツテモシ）		ハツテモシ	
ヤラス	ヤラズ		ヤラニヤア	ハツテモシヤラソ
カンダラ	（ソゴンダラ）		コヮンダラ	コワンダラ
シヤレ	シヤレ	シヤレ	シヤレ	シヤレ
			ヒヨンゲニ	ヒヨンゲニ
デロ注	デロ注		デロ注	デロ注
（ユワクテ）	ユワクテ	ヨワクテ		
			（ヌシダ）	
（デエジイ）	デエジイ注	ダヒジヒ	（ジャアジイ）	ジャアジイ
カスルナ	ヒツカスル		カスルナ	（ヒツカスルナ）
カスル	カスル		カスル	（ヒツカスル）
	ヘダ		ヘダ	
シヨクナヒ	シヨクナイ	シヨクナヒ		

K—3	K—4	N—1	N—2	N—3
ヨ　マ		ヨ　マ	ヨ　マ	ヨ　マ
ヨ　キ　リ		ヨ　キ　リ	ヨ　キ　リ	ヨ　キ　リ
ヒ　ヨ　ウ　ラ	(ヒョウラ)	ヒヨウ○ラ	ヒヨウ○ラ	ヒヨウ○ウ
ド　ツ　ギ		ド　ツ　ギ	ド　ツ　ギ	ド　ツ　ギ
ヂ　ヤ　ク	ヂャアク	デ　ヤ　ク		
		シヤア、ヲガム	シヤア、ヲガム	
ヤ　ド　ル		ヤ　ド　ル	ヤ　ド　ル	ヤ　ド　ル
ウ　ガ　ン	ウガーン	ウガア、ニ	ウガア、ニ	ウガア、ニ
		コガウテ	コガウテ	コカウテ
ア　ツ　キ　イ		アツカヒ	アツカヒ	アツカヒ
ヒザマツク	ヒザマーツク	ヒザマツク	ヒザマツク	ヒザマツク
スガンダラ	スガーンダレ	ソガアンダレ	ソガアンダレ	ソガアンダレ
ネ　ツ　コ　ヒ	ネツコヒ	ネツコヒ	ネツコヒ	ネツコヒ
		イデン		
マ　ダ　ン		マゴヲニ	マゴヲニ	
ム　ァ　ミ　ン	ムァミニ	マアミニ	マアミニ	マアミニ
ムァミンムァミン	ムァミニ ムァミニ	マアミニマ アミニ	マアミニマ アミニ	マアミニ マアミニ
		ハツテモシ	ハツテモシ	ハツテモシ
		ヤラス	ヤラス	ヤラス
コワンダラ	コワンダラ	カワンタラ	カワンタラ	カワンタラ
シ　ヤ　レ	シ　ヤ　レ	シ　ヤ　レ	シ　ヤ　レ	シ　ヤ　レ
ヒヨンゲニ				
				注 アキラシキヤア
デ　ロ 注	デ　ロ 注	デ　ロ 注	デ　ロ	デ　ロ
		クンノシタ	クンノシタ	
		ダヒジヒ	ダヒジヒ	
		カスルナ	カスルナ	
		カ　ス　ル	カ　ス　ル	
		ヘ　タ	ヘ　タ	ヘ　タ
		シヨクナヒ	シヨクナヒ	シヨクナヒ

（その２続）

N—4	S—1	S—2	S—3	S—4	No,
	ヨ マ	ヨ ウ	ヨ マ		36
ヨ キ リ	ヨ キ リ	ヨ キ リ	ヨ キ リ	ヨ キ リ	37
					38
					39
ヒヨウ〇ウ	ヒ ヨ ウ ラ	ヒ ヨ ウ ラ	ヒヨウ〇ウ	ヒ ヨ ウ ラ	40
					41
ド ッ ギ	ド ッ ギ	ド ッ ギ デ ヤ ク	ド ッ ギ	ド ッ ギ	42 43
					44
	ヤ ド ル	ヤ ド ル	ヤ ド ル	ヤ ド ル	45
ウガア、ニ コカウテ	ウ ガ テ	ウガテエ	ウガテエ		46 47
					48
ア ツ カ ヒ	ア ツ ケ エ	ア ツ ケ エ	ア ツ ケ エ	ア ツ ケ エ	49
ヒザマツク	ヒジヤマツク	ヒザマツク	ヒザマツク	ヒザマツク	50
ソガアンダレ	ソガアンダレ	ソガアンダレ	ソガアンダレ	ソガアンダレ	51
ネ ツ コ ヒ	ネ ツ コ イ	ネ ツ コ イ	ネ ツ コ イ	ネ ツ コ イ	52
	イ デ ミ ー	イ デ ミ イ	イ デ ミ イ		53
マ ゴ ヲ ニ	マ ゴ ニ	マ ゴ ニ	マ ゴ ニ	マ ゴ ニ	54
	（キ ル ッ デ）				55
					56
					57
ハツテモシヤラス	ハツテモシヤラス				58
	ソガンダラ	ソガンダラ	ソガンダラ	ソガンダラ	59
シ ヤ レ	シ ヤ レ	シ ヤ レ	シ ヤ レ	シ ヤ レ	60
					61
	（アイソウシキ）注				62
デ ロ	デ ロ	デ ロ	デ ロ	デ ロ	63
	ユ ワ ク テ	ユ ワ ク テ	ユ ワ ク テ	ユ ワ タ テ	64
	（シツカリ カンダ）				65
ダ ヒ ジ ヒ	デ エ ジ イ	デ エ ジ イ	デ イ ジ イ	デ イ ジ イ	66
	ヒ ツ カ ス ル ナ	ヒ ツ カ ス ル ナ	ヒ ツ カ ス ル ナ	ヒ ツ カ ス ル ナ	67
	（ヒ ツ カ ス ッ タ）	ヒ ツ カ ス ル	ヒ ツ カ ス ル	ヒ ツ カ ス ル	68
ヘ タ	ヘ タ	ヘ タ	ヘ タ	ヘ タ	69
シ ヨ ク ナ ヒ	シ ヨ ク ナ イ	シ ヨ ク ナ イ	シ ヨ ク ナ イ	シ ヨ ク ナ イ	70

表　37

No.	O－1	O－2	O－3	O－4	M－1
71	ボオイイ	ボヲイ		ボヲイ	ボヲイ
72	モウニ				モウニ
73	コシ	コシ		コシ	コシ
74	シヨウブ			シヨウブ	シヨウブ
75	ボウイイ	(ボヲイ)		ボヲイ	ボオイ
76					
77	ミジヤイ	ミジヤイ			ミジヤイ
78	ウルサイ	(ウルサイ)注			
79	ゼイブン○オモイ				
80	マルブ	マルブ	(マルブ)		マルブ
81	ヨウナシ	ヨウナシ		ヨウナシ	ヨウナシ
82	マグレル	マグレル		マグレル	マグレル
83	ヨロゲ		(ヨロゲ)		ヨロケ
84	トッフ	トンブ		トンフ	トンブ
85					
86		(ヲコル)注			ヲゴル
87					
88	ハラクロウ				ハラク
89	トマス	トマス		トマス	トマス
90	コンゴニナツテ			コンゴニナツテ	コンゴニナツテ
91	ヒヨオンゲ				
92	モヨリ	モヨリ		モヨリ	モヨリ
93	フッカケ				
94	ヅルゲテ				
95					ザレ
96	イロウ			イロウ	イロウ
97	トヅケ○グチョスル			トヅケ○グチスル	トヅケ○グチスル
98		ビックリ		ハラクリ	
99				メンサ○ナシ	メンザ
100					
101	ブシヤウ○ナ		(ブシヨウ)		ブシヤウ○ナ
102					
103	サガス	注	サガス	サガス	サガス注
104	マジケタ				マジレタ
105	ハシャグ				

（そ の 3）

M－2	M－3	M－4	K－1	K－2
ボ ヲ イ	ボ ヲ イ	ボ ヲ イ	ボ ヲ イ	ボ ー イ
コ シ	コ シ	コ シ	コ シ	コ シ
シヨウブ	シヨウブ注			
ボウイイ	ボ ヲ イ注	ホ ヲ イ	ボ ー イ	ボ ー イ
			（ボーケシユー）	
ミジヤイ	ミジヤイ	ミジヤイ	ミジヤイ	ミジヤイ
	ウルサイ注		ウルサイ	ウルサイ
マ ル ブ	マ ル ブ	マ ル ブ	マ ル ブ	マ ル ブ
ヨウナシ	ヨウナシ	ヨウナシ	ヨウナシ	ヨウナシ
マグレル	マグレル	マグレル		マグレル
ヨ ロ ゲ			ヨ ロ ゲ	ヨ ロ ゲ
ト ン ブ	ト ン ブ	ト ン フ	ト ン ブ	ト ン ブ
	ソ オ ゲ注		ヲ コ ル注	ヲ コ ル注
ハ ラ ク	ハ ラ ク	ハラクロウ	ハラクロウ	ハラクロウ
ト マ ス	ト マ ス	ト マ ス	ト マ ス	ト マ ス
コンゴニナツテ	コンゴニナツテ	コンゴニナツテ	コンゴニナツテ	コンゴニナツテ
			ヒヨンゲ	ヒヨンゲ
モ ヨ リ	モ ヨ リ	モ ヨ リ	モ ヨ リ	モ ヨ リ
			ヅベツテ	ヅベツテ
ザ レ	ザ レ	ザ レ	ジヤレ	ジヤレ
イ ロ ウ	イ ロ ウ	イ ロ ウ	イ ロ ウ	イ ロ ウ
トヅケ○グ	トヅケ○グ		トヅケ○グ	
チスル	チスル		チスル	トヅケ○グチスル
			ハラグリー	ハラグリー
	メンサ○ナシ			
ブシヤウ○ナ	ブシヤウ○ナ	（ブシヤウ○ナ）	ブシヨウナ	ブ シ ヨ ウ
			ザンミヤア	
サ ガ ス	サ ガ ス	サ ガ ス	サ ガ ス	サ ガ ス
マジレタ	マジレタ	マジレタ	マジレタ	マジレタ

K－3	K－4	N－1	N－2	N－3
ボヲイ	ボーイ	ボヲイ	ボヲイ	ボヲイ
		モウニ		
コシ		コシ	コシ	コシ
		シヨウブ	シヨウブ	
ホヲイ	ボーイ	ボヲイ	ボヲイ	ボヲイ
	ミジヤイ	ミジヤイ	ミジヤイ	ミジヤイ
		ウルサイ		
		ズイフン	ズイブン	
マルブ	マルブ	マルフ	マルブ	マルフ
ヨウナシ		ヨウナシ	ヨウナシ	ヨウナシ
マグレル		マグレル	マグレル	マグレル
ヨロゲ		ヨロケ	ヨロゲ	ヨロケ
トンツブロ		トンフ	トンブ	
		ヲゴル	ヲゴル	ヲゴル
		シク		
		ハラクロウ	ハラコウ	
トマス	トマス	トマス	トマス	トマス
		コンゴニナツテ	コンゴニナツテ	コンゴニナツテ
ヒヨンゲ				ヒヨンゲ
		モヨリ	モヨリ	モヨリ
		フツテフツテ		
ズペル		(ヅルンデ)		
ジヤレ		ザレ	ザレ	ザレ
イロウ		イロウ	イロウ	イロウ
		トヅケ○グ	トヅケ○グ	トヅケ○グ
		チスル	チスル	チスル
		ハラクリ	ハラグリ	
		メンザ○ナシ	メンザ○ナシ	(メンザ○ナシ)
			(タドノッデ)	
ブシヨウダラ		フジヤウ○ナ	(フジヤウ○ナ)	
ザンミヤー		ザンマイ	(ザンマイ)	(ザンマイ)
サガス	サガス	サガス	サガス	サガス
マジケタ		マジレタ	マジレタ	マシレタ

（その 3 続）

N－4	S－1	S－2	S－3	S－4	No.
ボ ヲ イ	ボオイイ	ボ オ イ	ボ オ イ	ボオイ	71
	（シツカリ）		（シツカリ）		72
コ シ	コ シ	コ シ	コ シ	コ シ	73
	シヨウブ	シヨウブ	シヨウブ	シヨウブ	74
ボ ヲ イ	ボ ヲ イ	ボ オ イ	ボ オ イ	ボオイ	75
					76
ミジヤイ	ミジャサア	ミジヤイ	ミジヤイ	ミジヤイ	77
	ウルササア	ウルサイ	ウルサイ	ウルサイ	78
	カナシイ				79
マ ル フ	マ ル ブ	マ ル フ	マ ル ブ	マ ル ブ	80
ヨウナシ	ヨオナシ	ヨウナシ	ヨウナシ	ヨウナシ	81
マグレル	マグレル	マグレル	マグレル	マグレル	82
	ヨンゲエ、ヨロゲ	ヨ ロ ケ	ヨ ロ ケ	ヨ ロ ゲ	83
ト ン フ	（トンツブリ）トッブ		ト ン ブ	ト ン ブ	84
	（ト オ ゲ）				85
ヲ ゴ ル	（サ ア ゲ）	ヲ コ ル 注	オ ゴ ル	オ ゴ ル	86
					87
	（ハラクー）	ハラクウ	ハラクウ	（ハラクウ）	88
ト マ ス	ト マ ス	ト マ ス	ト マ ス	ト マ ス	89
コンゴニナツテ	コンゴニナツテ	コンゴニナツテ			90
	（ヒヨンゴメ）				91
モ ヨ リ	モ ヨ リ	モ ヨ リ 注	モ ヨ リ		92
					93
	（ヅルンデ）	ヅルンテ	ズ ベ ル		94
ザ レ	（ターサレ）	ジ ヤ レ	ジ ヤ レ		95
イ ロ ウ	イ ロ ウ	イ ル ウ	イ ロ オ	イ ロ ウ	96
		トズケル			97
（ハラグリ）		ハラグリ			98
メンザ○ナシ	（メ ッ ザ）	メンサ○ナシ			99
					100
（フジヤウ○ナ）	（ブ シ ヨ オ）	フシヤウ○ナ	フシヤウ○ナ	ブショウナ	101
	（ブツチヤレ）				102
サ ガ ス	ミチケル	サ ガ ス	サ ガ ス	サ ガ ス	103
マ ジ レ タ	マジレル マジヤケル	マ ジ レ タ	マ ジ レ タ	マ ジ レ タ	104
					105

No.	O－1	O－2	O－3	O－4	M－1
106					オスナル
107	タモウレ			タモウレ	タモウレ
108	ケ　ル			ケ　ル	ケ　ル
109	イデミイ				
110					マバル
111	ヨウラ			ヨウラ	ヨウラ
112	ソガンニ (ソゴンニ)			ソカンニ	ソゴン
113	キメイノミエテ			キメヒノミヘテ	(キメイノメ イテ)
114	タタガラ				タカダラ
115	タ　ビ				タ　ビ
116					ミヨケ
117					
118	ツンダニシテ				ツングリニシテ
119					ミジイトオモウ
120					挑灯に鐘
121					ヘ、ラク
122	シンヘタ			シンゲタ	シンゲタ
123					ヒノヒボ
124					
125					
126	ヲジヤレ			ヲジヤレ	ヲジヤレ
127	ワシタカ				ワシタカ
128					ツ　ベ
129					ケドウス
130					ヌスダマ
131	マジケタ (マジレタ)				マジレタ
132					ヒツツウスル
133					
134	トンツベ				トンツベ
135	コ　シ				コ　シ
136	ヨ　オ				ヨ　オ
137					カヲトル
138					カ子イ注
139	メナダ				メナダ
140	ヘビラ	ヘビラ		ヘビラ	ヘビラ

（その 4）

M－2	M－3	M－4	K－1	K－2
オスナル			ナスナル	(オスナル)注
タモウレ	タモウレ	タモウレ	タモーレ	タモーレ
ケ ル	ケ ル	ケ ル	ケ ル	ケ ル
			イデミン	(イデミン)
マバル	マバル	マバル		
ヨウラ	ヨウラ	ヨウラ	ヨウラ	ヨウラ
ソゴン		ソカンニ	スガンニ	スガンニ
キメイノメイテ	キメイノミヘテ	キメヒノミヘテ	キミーノミエテ	キメヒノミヘテ
			タカダラ	
タ ビ			タ ビ	タ ビ
ミヨケ			ミヨケ	ミヨケ
			ヲツビニタツテ	
ツングリニシテ	ツングリニシテ		ツグリニシテ	ツングリニシテ
ミシイトヲモフ			(ミツトウモナイ)	
挑灯ニ鐘				
(ヘ、ラク)				
シンゲタ		(シンベタ)	シツベタ	シツベタ
ヒノヒボ			ヒノヒボ	ヒノヒボ
ヲジヤレ		ヲジヤレ	ヲジヤレ	ヲジヤレ
ワシタカ	(ワシタカ)		ウィアタカ ワシタカ	ワシトゥアカ
ツ ベ	(ツ ベ)	ツ ベ	ツ ベ	ツ ベ
ケドウス	(ケドウス)		ケドウズ	ケドウズ
(ヌスダマ)			ヌスダマ	(ヌルダマ)
マジレタ	マジレタ	マジレタ	マジレタ	マジケタ
ヒッツウスル			シツツウスル	ヒツウス
トンツベ	(トンツベ)	トンツベ	トンツブロ	トンツブロ
			コ シ	コ シ
ヨ オ			ヨウアー	ヨウワー
カペエトリ			クヮートル	カヲトル
カ子イ注	カネイ		カ子イ	カニイ
メナダ	メナダ	メナダ	メナダ	メナダ
ヘビラ	ヘビラ	ヘビラ	ヘベラ	ヘベラ

表　37

K－3	K－4	N－1	N－2	N－3
ウスナル	(オスナル)			
タモーレ	タモウレ	タモウレ	タモウレ	タモウレ
ケル		ケル	ケル	ケル
(イデミン)		イテミヒ	イデミヒ	(イデミヒ)
		マバル	マバル	
ヨウラ	ヨウラ	ヨウラ	ヨウラ	ヨウラ
スガン	ソカンニ	ソカンニ	ソカンニ	ソカンニ
スグァーニ		キメヒノミヘテ		
		(タガタラ)	タカダラ	
(タビ)		タビ		
ミヨケ		ミヨケ	ミヨケ	
ヲツビニナ				
ツテタツテ				
(ツングリニシテ)		ツングリニシテ	ツングリニシテ	ツグリニシテ
		ミジヒトヲモフ	ミジヒトヲモフ	
		挑灯に鐘		
		ヘヽラメク	ヘヽラメク	
シツペタ		シンゲタ		
		ヒノヒボ	ヒノヒボ	
ヲジヤレ	ヲジヤレ	ヲジヤレ	ヲジヤレ	ヲジヤレ
		ワシタカ		ワシタカ
ツペ		ツペ	ツペ	ツペ
		ケドウス	ケドウス	(ケドウズ)
マジケタ	マジケタ	マジレタ	マジレタ	マシレタ
(ヒツツウス)		ヒツウスル	ヒツウスル	
		ナムテントウ	ナムテントウ	
トンツブロ		トンツブリ	トンツムリ	トンツブリ
トンツブリー				
コシ		コシ	コシ	コシ
ヨウア			ヤワ	
			カヲトル	
		カ子イ	カ子イ	カ子イ
メナダ	メナタ	メナタ	メナダ	メナタ
ヘペラ		ヘビラ	ヘビラ	ヘヒラ

（その 4 続）

N－4	S－1	S－2	S－3	S－4	No.
					106
タモウレ	タモオレ	タモオレ	タモオレ	タモオレ	107
ケ ル	ケ ル	ケ ル	ケ ル	ケ ル	108
（イデミヒ）	（イデミイ）	イデミイ			109
					110
ヨ ウ ラ	ヨオーラ	ヨ ウ ラ	ヨ オ ラ	ヨ ウ ラ	111
ソカンニ	ソ ガ ニ	ソ ガ ニ	ソ ガ ニ	ソ ガ ニ	112
	キミイノミイテ	キミイノミイテ	キミイノミイテ		113
					114
		（タ ビ）			115
	ミ ヨ ケ 注				116
					117
	注 ツングリニシテ				118
					119
		挑灯に鐘			120
	（ヘヘラメツテ）				121
	シツピラ	シッペタ	シンゲタ	シッペタ	122
	シツペタ				
	ヒノヒボ	ヒノヒボ			123
					124
					125
ヲジヤレ	オジヤレ	ヲジヤレ	ヲジヤレ	ヲジヤレ	126
	（キタアカ）		ワシタカ	ワシタカ	127
ツ ペ					128
		ケドーウス	（ケドーウズ）		129
	ヌスツタマ 注				130
マジレタ	マジレタ	マジレタ	マジレタ	マジレタ	131
	ヒツウスル 注				132
	ナムテントウ				133
	トンツブリ	トンツムリ	トンツブリ	トンツブリ	134
コ シ	コ シ	（コ シ ペ）			135
	（ヤ ア）	ヤ ア	ヤ ア	ヤ ア	136
	カペエモギ	カヲトル	カヲトル	カヲトル	137
	カ子イ	カ子イ	カ子イ	カ子イ	138
メナダ	メナダ	メナタ		メナダ	139
ヘヒラ	ヘ ビ ラ	ヘ ビ ラ	ヘ ビ ラ	ヘ ビ ラ	140

表　37

No.	O－1	O－2	O－3	O－4	M－1
141	マダラ	マタラ		マタテ注	マダラ注
142		(オビ)			
143	ホロ				ホロ
144					ドンザボロ
145	ユマキ	ユマキ			ユマキ
146	コシマキ				コシマハシ
147	フンドオシ				(フングミ)注
148	ヒボン				ヒボン
149	テガ				テガ
150	マガマ				マガマ
151	ヤギ				ヤギ
152					
153	ケンドン注				ケンドン注
154	クリ				クリ
155					
156	トンメテ	トンメテ		トンメテ	トンメテ
157	エイヨオ	(エーヨウ)			エェヨウ
158					アサビル
159	マヒル				マヒル
160					デイシャン
161					
162	ソロソロ				ソロソロ
163	コゲエル			コゲール	コゲヘル
164	ホトーテ死ンデ	(ホトヲツテ死テ)		ホトーテシンデ	ホトウテシンデ
165	コゲーテ死ンデ			コゲーテシンデ	コゲヘテ死テ
166	ウレシクテ死テ				ウレシクテ死テ
167	ゾタメ	(コテイメ)		ゾクメ	ゾクメ
168	バメ			バメ	バメ
169					ゾク
170	チョンコメ	ヲシヨ○コ			ヲシヨ○コ
171					
172	カトウ	カツウ			カトウ
173	アブキ	アワビ	アブキ	アヴキ	アブキ

（その 5）

M－2	M－3	M－4	K－1	K－2
マダラ注	マダラ注	マダラ	マダラ	マダラ
			ヨビ	ヨビ
ホロ		ボロ	ホロ	ホロ
ドンザボロ				（ドンサ）
ユマキ			イマキ	ユマキ
コシマキ				
フソグミ注			（フンドウシ）	
ヒボンソ	ヒボンソ	ヒボンソ	ヒボンソ	ヒボンソ
テガ	テガ，ツボテガ	テガ	テガ	テガ
マガマ	（マガマ）	マカマ	マガマ	マガマ
ヤギ	（ヤギ）		ヤギ	ヤギ
			ジョウギ注	ジョウギ
（ケンドン）注			ケンドン注	ケンドン
クリ	クリ	クリ	クリ	クリ
トンメテ	トンメテ	トンメテ	トンメテ	トンメテ
エニヨウ			ヤイヨウ	ヤイヨウ
アサビル				
マヒル			マツビル	マツビル
			ジャアサン	
			トウヤク	トウヤク
			ゾロソロ	ソロソロ
コベヘル	コベヘル	コベヘル	コゲール	コギール
ホトウテシンデ	（ホトウテシンデ）	ホドヲツテ死テ	ホトーツテシツデ	ホトオツテシノワデ
コベヘテ死テ		コベヘテ死テ	コゲーテシツデ	コギーテシノワ
ウレシクテ死テ		ウレシクテ死テ	ウレシクテシツデ	ウレシクテシノワ
ソクメ	（ゾクメ）		ゾウメ注	ゾウメ
バメ	バメ	バメ	バメ	バメ
ゾク	ゾク注	ゾク	ゾック注	ゾック
ヲシヨ○コ			ヲシヨ○コ	
カトウ			カトウ	カッウ
アブキ	アブキ	アブキ	アブキ	アブキ

表　37

K－3	K－4	N－1	N－2	N－3
マ ダ ラ	マ ダ ラ	マ ダ ラ	マ ダ ラ	マ タ ラ
			ヨ ビ	
		ホ ロ	ホ ロ	ホ ロ
		ド ン ザ	ド ン サ	ド ン ザ
イ マ キ		ユ マ キ	ユ マ キ	ユ マ キ
		コシマハシ		コシマハシ
ヒ ボ ン		ヒ ボ ン	ヒ ボ ン	ヒ ボ ン
テ ガ	テ ガ	テ ガ	テ ガ	テ ガ
マ ガ マ	マ ガ マ	マ ガ マ	マ カ マ	マ カ マ
(ヤ ギ)		ヤ ギ	ヤ ギ	ヤ ギ
ジョウギ			ジヤウギ	
(ケンドン)		ケンドン	ケンドン	ケ ン ド ン
ク リ		ク リ	ク リ	
トンメテ	トンメテ	トンメテ	トンメテ	トンメテ
ヤイヨウ		ヤアユウ	ヤアヨウ	ヤアヨウ
		アサビル	アサヒル	アサヒル
		マ ビ ル	マ ヒ ル	マ ヒ ル
			ダイサン	
		トウヤク	トウヤク	トウヤク
ソロソロ		ソロソロ	ソロソロ	
コギール	コギール	コゞヘル	コゞヘル	コゞヘル
ホトーツテシヅデ	ホトーツテシツデ	ホトヲツテ死デ	ホドヲツテ死テ	ホドヲツテ死テ
コギーテシヅデ	コギーテシツデ	コゞヘテ死テ	コゞヘテ死テ	コゞヘテ死テ
ウレシクテシヅデ	ウレシクテシツデ	ウレシクテ死テ	ウレシクテ死テ	ウレシクテ死テ
バ メ		バ メ	バ メ	バ メ
ゾ ク		ゾ ッ ク	ゾ ク	ゾ ク
		ヲシヨ○コメ	ヲシヨ○コ	
		カ ト ウ	カ ト ウ	
ア ブ キ	ア ブ キ	ア ブ キ	ア ブ キ	ア ブ キ

（その 5 続）

N－4	S－1	S－2	S－3	S－4	No.
マ タ テ	マ ダ ラ	マ ダ ラ	マ ダ ラ	マ ダ ラ	141
					142
	ホ ロ	ホ ロ	ホ ロ	ホ ロ	143
（ド ン ザ）					144
	ユ マ キ	ユ マ キ	ユ マ キ	ユ マ キ	145
					146
		フ ン ド シ	フ ン ド シ	フ ン ド シ	147
ヒ ボ ン	ヒ ボ ン	ヒ ボ ン	ヒ ボ ン	ヒ ボ ン	148
テ ガ	（テ ガ）	テ ガ	テ ガ	テ ガ	149
マ ガ マ	（マ ガ マ）	マ ガ マ	マ ガ マ	マ ガ マ	150
ヤ ギ		（ヤ ギ ダ ケ）	ヤ ギ ダ ケ		151
					152
	ケ ン ド ン				153
	ク リ	ク リ	ク リ	ク リ	154
			（ゲ ン ノ オ）		155
ト ン メ テ	ト ン メ テ	ト ン メ テ	ト ン メ テ	ト ン メ テ	156
エ ー ヨ ー	エ イ ヨ オ	エ イ ヨ オ	エ イ ヨ ウ	エ イ ヨ オ	157
（ア サ ビ ル）					158
マ ヒ ル					159
					160
	ト ウ ヤ ク	ト オ ヤ ク	ト オ ヤ ク	ト オ ヤ ク	161
	ソ ロ ソ ロ	ソ ロ ソ ロ	ソ ロ ソ ロ		162
コ ヾ ヘ ル	コ ギ イ ル	コ ギ イ ル	コ ギ イ ル	コ ギ イ ル	163
ホ ド ヲ ツ テ 死 テ	ホ ト オ ッ テ シ ン デ	ホ ト オ ッ テ シ ン デ	ホ ト オ ツ テ シ ン デ	ホ ト オ ツ テ シ ヌ	164
コ ヾ ヘ テ 死 テ	コ ギ イ テ シ ン デ	コ ギ イ テ シ ン デ	コ ギ イ テ シ ン デ	コ ギ イ テ シ ヌ	165
ウ レ シ ク テ 死 テ	ウ レ シ ク テ 死 テ	ウ レ シ ク テ シ ン デ	ウ レ シ ク テ シ ン デ	ウ レ シ ク テ 死 テ	166
	ゾ ウ メ				167
バ メ	バ メ	バ メ	バ メ	バ メ	168
ゾ ク	（ゾ ー ク）	ゾ ッ ク	ゾ ッ ク	ゾ ッ ク メ	169
	ウ シ ョ コ メ	ヲ シ ヨ ○ コ			170
	ケ ダ イ ダ	ケ デ イ 注	ケ デ イ ダ	ケ デ イ ダ 注	171
	カ ツ ウ	カ ト ウ			172
ア ブ キ	ア ブ キ	ア ブ キ	ア ブ キ	ア ブ キ	173

No.	O－1	O－2	O－3	O－4	M－1
174	ヨ	ヨ		ヨ	ヨ
175	コ ナ(サマ)	コ ナ			コ ナ
176	メ エ ー	マ ユ			メ エ
177			ヌ セ メ		ヌ セ メ
178	ショウトメ (ハ ト メ)	ショウトメ		ショートメ	シヤアトメ
179	コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ
180	ヘイデガラ				チンチカラ
181					カ ブ ナ
182	ホヲリツ、メ				ホヲリツ、メ
183	ツ ゞ メ		ツ 、メ	ス ズ メ	ツ ゞ メ
184					
185					ヘツ○ソメ
186	ナベコシキ				ナベコシキ
187	ケイビオー(メ)		ケイビヤウ	ケイビヤウ	ケイビヤウ
188					
189					ヘ イ ル
190	クツコオシ		(クツコオシ)	クツカワシ	クツカワシ
191	ツ ク メ				ヅ ク メ
192	三ケ三日		三ケ三日		三ケ三日
193	五ケ五日		五ケ五日		五ケ五日
194	九ケ九日				九ケ九日
195	イチニチビ				イチニチビ
196	フツカビ				フツカビ
197	ミツカビ、				ミツカビ
198	カ ー チ				コウニチ
199					
200					
201	ヨメゴドノ				ヨメゴドノ
202					
203					
204					
205					
206					
207					

M－2	M－3	M－4	K－1	K－2
ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ
コ ナ	コ ナ	コ ナ	コ ナ	コ ナ
メ エ	メ エ	マ エ	ミ ヤ ー	ミ ヤ ア
ヌ セ メ	ヌ セ メ	ヌ セ メ	ニ セ メ	
シヨオトメ			シヤアトメ	シヤアトメ
コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ
チンチガラ	チンチガラ	チンチカラ		ヒイジコメ
カ ブ ナ			カ ブ ナ	
ホヲリツペメ			ホーリツヅメ	ホーリツヅメ
ツ ペ メ			ツ ヅ メ	ツ ツ メ
			ペ、イメ	ペ、イメ
ヘツ○ソメ	ヘツ○ソメ		ヘツツオメ	ヘツ○ソメ
ナペコジキ	ナペコジキ		ナペコジキ	ナペコジキ
ケイビヤウ	ケイビヤウ	ケイビヤウ	キヨウアヴアーメ	キヤーバウア
			ク ボ ナ	ク ボ ナ
ヘ イ ル	ヒ イ ル 注	（ヒ イ ル）注	ヒ イ ル	ヒ イ ル
クツカワシ	クツカワシ	クツカワシ	クツクワーシ	クツカワシ
ヅ ク メ	（ツ ク メ）		ツ ク メ	ツ ク メ
三ケ三日		三ケ三日	サガサンチ	三ケ三日
五ケ五日		五ケ五日	ゴガゴンチ	五ケ五日
九ケ九日		九ケ九日	クガクンチ	九ケ九日
イチニチビ			イチンチビ	イチンチビ
フツカビ			フツカビ	フツカビ
ミツカビ			ミツカビ	ミツカビ
			コーンチ	コーウチ
ヨメゴドノ			ヨメドノ	ヨメドノ
			ミヤーダマ	ミヤーダマ

表　37

K－3	K－4	N－1	N－2	N－3
		ヨ	ヨ	ヨ
コ　ナ		コ　ナ	コ　ナ	コ　ナ
ミ　ヤ　ー	マ　エ			
シヤアトメ		シヤアトメ	シヤアトメ	シヤアトメ
コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ
		カブナ	カブナ	
ホヲリツヅメ		ホヲリツ、メ	ホヲリツ、メ	ホヲリツ、メ
ツ　ヅ　メ		ヅ　、　メ	ツ　、　メ	
		ヘツ○チヨメ	ヘツ○ソメ	ヘツ○ソメ
ナベコジキ		ナベコシキ	ナベコシキ	ナベコシキ
キウアーヴアー	ケイビヤウ	ケイビヤウ	ケイビヤウ	
ヒ　イ　ル	ヒ　イ　ル	ヒ　イ　ル	ヒ　イ　ル	ヒ　イ　ル
クツクワーシ	クツカワシ	クツカワシ	クツカワシ	クツカワシ
ツ　ク　メ	ヅ　ク　メ	ヅ　ク　メ	ヅ　ク　メ	
三ケ三日	三ケ三日	三ケ三日	三ケ三日	三ケ三日
五ケ五日	五ケ五日	五ケ五日	五ケ五日	五ケ五日
九ケ九日		九ケ九日	九ケ九日	九ケ九日
イチンチビ	イチニチビ	イチニチビ	イチニチビ	イチニチビ
フツカビ		フツカビ	フツカビ	フツカビ
ミツカビ		ミツカビ	ミツカビ	ミツカビ
コウニチ		コウンチ		コウニチ
		ヨメドノ		
		マイタマ	マイタマ	マイタマ

（その 6 続）

N－4	S－1	S－2	S－3	S－4	No.
ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	174
コ　ナ	コ　ナ	コ　ナ	コ　ナ	コ　ナ	175
	メ　エ	メ　エ	メ　エ	メ　エ	176
	ニシエメ	ニシエメ	ニシエメ	ニシエメ	177
シヤアトメ	（ハ　ト　メ）	ヒヤアトメ	（ヒヤアトメ）		178
コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ	コツコメ	179
		（ヒイデガラメ）	（ヒイジガラメ）		180
カブナ	カブナ	カブナ	カブナ	カブナ	181
ホヲリスヽメ	ホヲリツヽメ	ホヲリツヽメ	ホヲリツヽメ	ホヲリツヽメ	182
	ツ　ヅ　メ	ツ　、　メ	ス　ズ　メ	ス　ヾ　メ	183
	ベ、イメ				184
	ヘツテヨメ	ヘツツオメ			185
	ナベコジキ				186
	ケエビヨウ	ケエビヨウメ	ケイビヤウ	ケエビヨウメ	187
			（テンゴメ）		188
ヒイル	ヒイル	ヒイル			189
クツカワシ	（クツカアシ）	クツカアシ	クツカアシ	クツカアシ	190
	（ツ　ク　メ）	ツ　ク　メ	（ツ　ク　メ）	ヅ　ク　メ	191
三ケ三日	三ケ三日	三ケ三日	三ケ三日	三ケ三日	192
五ケ五日	五ケ五日	五ケ五日	五ケ五日	五ケ五日	193
九ケ九日	九ケ九日	九ケ九日	九ケ九日	九ケ九日	194
イチニチビ	イチニチビ	イチニチビ			195
フツカビ	フツカビ	フツカビ	フツカビ	フツカビ	196
ミツカビ	ミツカビ	ミツカビ	ミツカビ	ミツカビ	197
	コウニチ	コオンチ	コウニチ	コオンチ	198
					199
	注	（ネツコメ）			200
	（アマドノ、テゴドノ、ケゴドノ）	（ネズミメ）			201
	メーダマ		（メーダマ）		202
					203
					204
					205
					206
					207

表 37 注

1・S-1, 3・S-1 貧乏人のいやしいことばの使い方。

13・M-1 アネイは大家方（報告のまま）。

32・O-1, 32・N-1, 32・N-2, 32・N-3 馬鹿の事。

35・S-1 冗談的に悪口を言う。

41・M-1 坐っていてちょっとした仕事をする事。

46・M-1 向うの方に（方向を指示する時）。

50・M-1, 50・M-2, 50・M-3 坐る事。

50・K-2 正坐する事。

51・M-2 そうだ。

54・M-1 ちょっと人をからかったりして本気にさせてから訂正する時の用語。

54・M-2 いいやそうではない。

54・M-3 もっとも。

62・N-3 かわいらしい。

63・O-1, 63・O-2, 63・M-1, 63・M-2, 63・M-3, 63・K-1, 63・K-2, 63・K-3, 63・K-4, 63・N-1, 63・S-1 行け。

66・M-3 きれいな事。

74・M-3 多い事。

75・M-3 せいの高い事および体の大きい事。

78・O-2 やかましい事。

78・M-3 うるさい。

86・O-2, 86・M-3 怒る事。

86・K-1 くやしがって何やかや言う。

86・K-2 くやしがって怒る事。

86・S-2 あばれる。

92・S-2 天候をさす。

103・O-2 調査票に不備の点があって、O-2 の 103～135 まで調査不能。

103・M-1 さがす。

106・K-2 言う。

116・S-1 ざるの中に女の人がオヤリ（まゆの太い糸）をひねって入れるもの。

118・S-1 ていねいに。

130・S-1 悪人を盗人になぞらえて言った。

132・S-1 きれいになる、おしゃれの事。

138・M-1, 138・M-2 桑の雄花の事。（雌花はカノミ。）

141・O-4 きれいな着物。

141·M-1, 141·M-2, 141·M-3　よそゆきの着物。
147·M-1, 147·M-2　女が月経の時血止めに使った古布。
152·K-1　だれの茶わんをも言う。
153·O-1　大きい茶わんの事。
153·M-1, 153·M-2　どんぶりの事。
153·K-1　大きい茶わん(どんぶり)。
167·K-1　大きい雄牛。
169·M-3　雄牛。
170·K-1　中著の牛を言う。
171·S-2, 171·S-4　なまけ牛。
189·M-3, 189·M-4　が(虫)の事。
201·S-1　ねずみがいたずらするので、させないためのほめことば。

VI. 八丈島の文化と文献

昭和13年の春、当時柳田國男先生の下で進められていた海村総合調査の一員として、わたくしは八丈島を採訪し、約半か月滞在した。それ以後、わたくしには外地の生活がつづき、終戦後に引揚げてから、10年前の調査資料を基礎とした「八丈島の傳承」と題する民俗誌がほとんど脱稿に近づいていた。あたかもその時、國立國語研究所の調査班に加わり、戦禍の跡のなお生生しい八丈島へふたたび渡る幸運に恵まれ、第1回調査の疑問をきき ただし、不備を補い、かつ、いくつかの新しい資料を採集することができた。本稿はかかる2回の調査を土台としたわたくしの八丈島觀の一端である。内容は2部から成り、第1部では八丈島文化の若干の主要なる事象を捕えて外界との関連性を述べ、第2部では管見に入った古文献の重要なるものを解題する。(大間知篤三)

第1部　八丈島文化と外界との關連性

(1) 伊豆諸島と八丈島　(2) 始祖傳說　(3) 漂着者　(4) 民家　(5) 諸家　(6) 織物　(7) 流人

§1. 伊豆諸島と八丈島

伊豆諸島は、本土の腰部から黒潮の中へ突き出された列島であり、飛石のごとく南へ延びながら、果ては行きづまりであった。古來、本土の諸地、

6-700年来は特に相模伊豆、おくれては江戸から、日本文化が断続的にこの島傳いに南流していたが、ここからはいずれの方向へのはけ口も無く、このいわば一種の袋小路に停滞し累積するのみであった。アジヤ大陸に消滅したあまたの大陸文化の遺産が日本に保存せられたように、日本本土に消滅ないしは衰微した諸種の文化が、この列島に近年まで濃厚に傳承せられ、その若干は島島相影響しつつ特異な展開をさえ示した。

伊豆諸島に至る文化の路は、しかし北からだけ延びていたのではない。本土の南部を洗う黒潮はこの島島の間を、ゆうきゅうの昔から絶えず東に向って流れていたのであり、それがまたこの島島にとどく文化の路であった。北からのものが、意図された必然的な交通であったのに対して、西からのものは、多くは意図されざる偶然的な漂着であったかも知れない。紀州熊野から、土佐から、九州から、奄美や沖縄の列島から、あるいはその南の島島からも、西の大陸からも、諸種の文化が黒潮に運ばれて伊豆諸島に流れ着いた。この種の文化的漂着は、近世以降もかなり豊かであるが、中世以前の書かれざる歴史の時代には、相対的に比重を増し、伊豆列島文化の基盤を形成する因子となったものと想像せられる。

伊豆10島の文化圏は、南北2区に大別し得る。南部は八丈島とその属島たる小島、青が島との3島から成り、北部は大島から御蔵島に及ぶ7島から成っている。かかる2区の差異を生ぜしめた原因は、前者が距離的に遠く南に隔たり、風土の條件が熱帯的台風圏的特色を濃厚に帯びていたことにもよるが、さらに根本的には八丈島と御蔵島との中間に古来黒瀬川と呼ばれた黒潮の急流があり、それが一つには南北に通ずる意図的必然的交通を妨げて、八丈島の孤立性を大ならしめたばかりでなく、また一つには黒潮文化の漂着をこの島により繁からしめたことによるものである。

§ 2. 女祖傳説

八丈島文化の特殊性を極めて象徴的に物語るのは、この島に関する三つ

の始祖傳說の存在である。

（i） タナ婆傳說。——これを書き留めた最も古い文獻は、匏翁交語の著者高橋與一の絲島噺話であろう。八丈実紀巻2に、

> 絲島噺話云、いづれの時にやありし、八丈島に大潮おこりて、民戸ともに埋沒せしが、一姙婦のみ舟の艫にすがりて、大岡郷川口ヶ洞に助命して、一男子を出生し、後に母子交会して類葉繁茂す。

とある。これが八丈島住民の始祖とされているのであり、タナ婆はロカコミニョコ（艫抱長女）とも呼ばれている。大賀郷湯梅原の釈迦堂の境内に一つのイシバ（累石塚）があり、それが艫抱長女の古墳とされている。末吉村の芦川の坂上にも、タナ婆の古墳と呼ばれるものがあり、石碑が建っている。

（ii） 女護が島傳說。——この傳說は、馬琴の弓張月に流麗な筆致をもって書き留められたが、それは彼個人の空想の産物ではなく、おそらく黒潮によって運ばれてこの島に根を下した女人國傳說に、大陸の徐福傳說がおおいかぶさることによって生れたものであろう。秦始皇帝が臣の徐福に命じて東海に仙丹を求めさせた。徐福は熊野に着き、隨從の女500人を八丈島に、男500人を青が島に遣わした。男女共に住むのは海神の怒りに触れるというので2島に分れ住んでいたが、ただ1年に1度南風が吹く日に男たちが八丈島へ渡り來て、夫婦の契りを結んだ。そして男子生るれば青が島へ送り、女子生るればこの島に残した。以上が此の傳說の骨子である。

（iii） 八十八江姫傳說。——これは世を避けて三宅島に住み給うた事代主命が、妃の一人八十八江姫を沖ノ島すなわち八丈島に遣わしたという傳說である。八丈実記巻 25 につぎのごとく記されている。

> 三宅記云、沖の島に置き玉ふ后の御名は八十八江とぞ申ける。其御腹に王子五人まします。其后かくれさせ玉ひぬれば、嫡子二郎の王子、ともに手を執り合思ひ死に終らせ玉ひ、石となりて弟兄の命とこ立玉ふ。二人は未だ幼少にしてかくれさせ玉ふ。五郎の王子ばかり沖の島に在ます。

以上3傳說のうち、八十八江姫傳說は伊豆諸島に色濃い出雲系神話の末端であり、北からの通路を経て來た日本文化に屬する。八丈3島の総鎮守大賀郷大里の姥大明神賓大明神はこれら2神を祭った神社とも言われている。女護が島傳說は一種の黒潮文化の系統に屬するものであるが、そこには中國文化との複合が顯著である。タナ婆傳說にいたっては、石田英一郎氏によると東南太平洋の諸族に廣く認められる始祖傳說であり、そのタナという語にさえも黒潮文化圏に脈絡が認められるものである。そしてかかる驚くべき母子交会の始祖傳說は、八丈島を除き日本本土のいずこからもいまだ知られていない。八丈島文化は、日本文化圏の黒圏の中に深く突き出された一突端であるが、また同時に黒潮文化圏が日本文化に投影する末端でもあった。

八丈島の歷史において、神代から人代への過渡期に出現して、数多の奇蹟を残した巨人は源爲朝の名をもって呼ばれている。爲朝が大島を逃がれ三宅島を経て八丈島へ來たという傳說は、古くから島内に廣がり、島民の堅い信念にまで成長している。弓張月の描くところによると、爲朝は八丈島で東七郎三郎の長女と婚し、さらに南の青が島にも渡ったのであるが、二つの島に別れ住む男女を教えさとして、男の島人を分って女の島に移し、また女の島人を分けて男の島に移したので、その恩沢によって初めて兩島に男女ともどもに住むことができるようになったというのである。いわばこの島を、神の世から人の世にもたらした者が爲朝である。またこの島は爲朝の教化によって開けた地であるから、女護が島という旧名を改めて八丈島と呼ぶことになったのであるが、後に八丈島の字があてられることになったと附会されている。このように男女の同せいならびに島名の起原まで爲朝に由來せしめているほどであり、八丈島およびその屬島には爲朝にちなむ各種の傳說が極めて豊富である。かくして北からの文化要素が、西からの文化要素を覆い包んでしまった。ちなみに八丈島では、爲朝は從臣と

共に小島に渡って自刃したものと信じられており、その霊を祭ったのが小島宇津木村の正一位八郎大明神とされている。その神主は為朝の従臣忠次郎の末葉といわれ、この家に馬琴に八丈島関係の資料を提供した武亭三馬が生れている。

§3. 漂着者

伊豆列島は、西日本からのあまたの漂流船にとって、本土の中央部から長く太平洋上に垂らされた救助の網であった。帆破れ、かじ折れて黒潮のままに流され来る船にとって、この網の目を素通りすればふたたび人の世に漂い着くことはほとんど絶望に近いものであり、このいずれかの島に取着けるか否かが生死の分れ目であった。殊に八丈島は南端に位置し、この網の性格は八丈島において最も端的に現われていた。

八丈島には、島自身の船の遭難した記録も数多いが、國地ならびに國外の船が漂着した例も極めて数繁く、それらは八丈島の歴史を古今にわたって貫く太い縦糸である。諸國の漂着船の数は、八丈実記巻3によると、文明6年（1474）から元治2年（1865）まで約390年間に、知れたるものおおよそ199そうだという。それは島の不完全な記録から得られた数字であろうから、実数はさらに上回るものと思われる。八丈島年厂漂着之部には、「一、寶永七寅年（1710）三ケ島え漂着都合十三艘有之、何れも登り船也」とある。またそれから5年後の正徳5年（1715）正月から翌享保元年（1716）にかけて、八丈1島に漂着した船が10そうに達することが八丈島日記から知られるが、それらのうち9そうは5か月以内に集中されており、都合120人の漂着者が八丈島へあがっている。彼らは大阪ならびにそれ以西薩摩に及ぶ諸國の人人であった。この5か月間あるいは宝永7年（1710）のごときは、八丈島漂着史上の異例に属するものであろうが、しかし、それかと言って、400年近い年代に200そうに満つる数であったとはとうてい考え得られない。

難破船の漂着は、ひとり八丈島とは限らず、離島の歴史に深い悲しみと喜びと明暗二種の色彩を與えている。それらのしばしば巨大なる分量にさえ達する積荷が、困窮の島に與えた幸福は決して小さく評價さるべきものではない。しかし、漂着の船は、物品の富と廣い世間の知識だけをこの孤島にもたらしたのではない。例えば八丈島日記によると、正徳元年（1711）12月三峰村に漂着した19人乗りの大阪傳法舟によって、島に疱瘡が流行し翌年夏までに三峰村、大岡郷、末吉村3か村で980人以上の病死者を出したという不幸があった。

漂着船には薩南の島島からのものもあった。元祿11年（1698）には奄美大島の船が中之郷へ漂着し、同14年には種子島船が青ヶ島に流れ寄っており、また安永4年（1755）には奄美大島西間切から10人乗りの船が大賀郷八重根へ漂着したことが記錄せられている。

さらにわれわれの注意を引くのは、大陸からの漂着船である。八丈実記巻26によると、明徳3年（1392）11月大岡郷前崎浦に明國の大船が流れ寄り、400人の乗客があったが、同夜西の悪風荒んで31人死し、上陸した者のうち46人は翌年餓死した。漂着者のうちには宗閑宗有という師弟の僧があった。地代官奥山伊賀は宗閑を、大岡郷楊梅原の大善寺5代の住職にすえた。宗閑は在職36年で遷化し、つづいて宗有は第6世住職についた。宗閑の漂着よりおくれること150年、天文16年（1547）にも明船が漂着しこれには宗感という僧が乗っていた。小田原北條氏の地代官菊池武蔵が、大善寺を大岡郷大里ガ原に移し、長楽寺と改号し、その開山に宗感を迎えた。この僧は寛永元年（1624）に示寂している。このように漂着の異國僧3人までがつぎつぎ1寺の住職に迎えられたということは、八丈島宗教史に異彩を添えるものであるばかりでなく、この島がいかに特異な環境に位置しているかを物語るものである。くだって宝暦3年(1753)にも、八重根へ清國からの漂流船が着き、乗組71人がゆかりの長楽寺へ收容せられてい

る。彼らは難破の船材をもって山門を造り寺へ寄進したばかりでなく、諸種の記念品を島に残した。それら宗派以来の諸種の遺品は、長楽寺の現在地たる中之郷において、爆撃のためにすべて焼け失せたことは惜しみても余りあることである。

この宝暦3年（1753）の漂着者には、海路の便も比較的開けた時代であり、極めて民宜に適した方策がとられ、翌年にはすべて出島し、下田を経て長崎へ送られている。しかし明徳年間漂着の生き残り300余人の明人については、かかる処置は一つも傳へられていない。匿翁交語には、

> 何れの頃か華人流れ來る。其墓所村々にあり、其山に入る時は祟りをなし、村民惱み煩ふ事時々なり。此由を漂流の南京人高山輝に語りければ、其神靈を祭り鎭めて、今其患更になし。

と記されている。高山輝は宝暦3年（1753）の漂着者の中心人物である。たたりをなした華人たちは何年の漂着者であるか不明であるが、宗派宗有と同船の人人は、おそらくこの島ですべて他界したのではないかと思われる。古き時代にさかのぼるほど、華人とは限らず、國地の諸地からの漂着者の中にもかかる運命をたどらなければならなかった者はすくなくなかったのであろう。

§4. 民　家

八丈島の民家形式には、かなり大きな特徴がある。その主屋は床下が吹きぬけの高床造りで、屋内には土間がない。間取りは、小さな家屋では内ノ間と外ノ間との2間からなり、やや大きなものは内ノ間の背後に帳台があり、まれには4間となっている大型のものもある。土間が無く、いわんや玄関などはなく、したがって妻入りとも平入りとも決し難く、右勝手左勝手の差別さえもその建築形式からは認め得ない。かかる建築様式は、極めて古い日本建築の傳承であり、現在は日本本土のいずれの地方の民家にも見出し難く、かつ御蔵島以北の伊豆諸島にも存在せず、同一の類型は奄

美沖縄の列島に見出しうるのである。それらの室の四周には3尺の下屋を取りこみ、四方は本來廻り縁に相当する部分であるが、その部分と各室との間には敷居がないという特異な形式になっている。八丈島民家の今一つの大きな特色は木造の高倉であり、イタクラ、ツムグラ、アシアゲグラなどと呼ばれている。この種の高倉は現在内地には存在せず、われわれはやはり同系統の建物を奄美列島以南の島島に求めなければならない。かかる高倉が八丈島において、いつ、いかにして建てはじめられたか、もはや知るよしもない。われわれはただ書かれざる歴史において、この島が遥かに遠い黒潮のかなたの島島と、いかに深い関連性を有していたかを思うのである。

§5. 諸　家

八丈島の名族旧家の出身を調べてみると、そのほとんどすべては相模伊豆もしくはその近接地帯から移り來た家家である。そして小島の神主菊池氏が祖先を爲朝の従臣に由來せしめ、また宗福寺が遠い開山を爲朝の子に結びつけているごときは別として、幕府時代に栄えた家家は二つの群に大別しうる。

第1群は、足利時代、第15世紀に武相の諸権力の代官として來島し、その子孫が島にいついたことに発する家家である。この伊豆列島の先端部は第15世紀において一時、神奈川、三浦、小田原を根拠とした3勢力の対立抗争時代があった。当時神奈川の奥山宗麟の代官として奥山忠茂という者が來島しているが、彼は明治に至るまで代代八丈島の神主役であり、かつ、しばしば地役人を兼ねて、島の行政の中心勢力の一つであった大賀郷奥山家の祖先である。小田原北條家の代官には前後幾人かの長戸路氏の者がいるが、末吉村の豪家として長く栄えた長戸路家の出自はそこまでさかのぼる。同じ北條家の代官に菊池右馬之助武信という者がいる。彼は大賀郷の名族として、徳川時代を通して代代地役人の家柄であった菊池氏の祖先である。

地役人は徳川中期まで、ほとんど菊池、奥山兩氏の独占であると言っても

過言でないが、文化中葉以降ようやく他姓の者が現われ、文政以後は兩氏の地役人の数は著しく減じ、それに代って中之郷の山下氏、三根村の高橋氏などの名を多く見る。しかし、この際今一つ八丈政治史上に注目さるべきは、寛政8年（1796）代官三河口太忠の巡視後に、古來の慣例を破り地役人の上にさらに取締役と称する一役を設けたことである。そしてそれには後に長戸路氏も見えるが、主として山下氏、高橋氏、樫立村の服部氏がついている。これらの家家は八丈島名家の第2群に属するものであり、徳川期の航海に結びついて興った家家である。幕府は八丈島へ官船2そうを配し、伊豆諸島は伊豆國代官の管轄下にあった関係から、これら2そうの官船の乗組みは伊豆半島の者が多く、彼らは後に八丈島に住み着いた。山下家も甲州浪人で下田にいた與左衛門を入りむことして御船との関係を生じたのであり、服部家も下田が故郷である。兩家は共に御船預りで、苗字帯刀を許されていた。高橋家は三河の出身、多分徳川期に三根村に住み、官船との交渉は薄いが、江戸通いの私船を有し、航海を介した商業利潤によって栄えた家らしい。

このように八丈島の中心勢力であった家家の大部分は、本來島にとってのよそものであり、相模伊豆を中心とした東海諸地からの來住者であった。

§6. 絹織物

黄八丈の名で知られ、島で丹後と呼ばれた絹織物は、黄、かば、黒の3色をもってそまく平明なさまざまのしまに織上げられている。その黄色は明るくして寂しさをたたえ、かば色は強い落着きを示し、極度に色濃い焦茶の化した黒は、黒ながらに親しみを感じさせる。絹物らしい光を消したこの渋い織物は、使われ、洗われ、年経て色あいいよいよ鮮かであったと言われている。この織物の特色は染色法にあった。黄染の原料にはカリヤス草が、かば色にはマダミの皮、黒色にはしいの皮が用いられ、しかも数

十回にわたって浸しては乾すという手数をいとわなかった。

足利期に武相の諸家が三つどもえとなって八丈島の占有を争った最大の目的は、この絹織物にあったろう。八丈島文献の一異彩たる北條五代記巻5所収「八丈島渡海の事」の一文も、この貢絹取立てに使した者のみやげばなしをつづったものである。貢絹は徳川幕府によって引継がれたばかりでなく、明治に入っても地租として上納せしめられ、この物納が全く金納に変ったのは明治42年（1909）のことであった。だから八丈織は染織技術の方面で特異なものであったばかりでなく、日本税制度の資料としても興味深いものである。徳川幕府がこの離島に対して特殊な関心をいだいていたのは、一つには遠島流罪の地として重要視したことにもよるが、また一つにはこの産物のゆえであり、御船と呼ばれる幕府の官船二そうが島に配せられた理由の最大のものは、此の上納を無事に江戸へ運ばしむることであったろう。そしてその船ゆえに、八丈島には御船預り以下の特権階級が新たに生れ、その船ゆえに島の航海史は特殊な色彩を附與せられた。

特に徳川中期以降、上納の絹以外に、多くの絹が江戸の市場をめがけて積み出されることになった。それは江戸の大奥を初めとして時代の一魅力であった。それを送り出すことが御船および私船の関係者のまた魅力であり、その商業利潤が島の社会経済史に及ぼした影響は極めて大きなものであった。かかる事実はまた八丈島の女性たちを機織作業に専念せしめ、伊豆の他の島島とはことなって、山野に働く女性の姿をこの島から消さしめる結果を生んだ。貢絹二織る業は八丈島では極めて重要視せられていた。七島日記5月13日の條には、

> 文貢の機おる家には、しめ引まはして、はき清めたり

とある。また寛延二年（1749）嘉儀請書には、

> 御仕置場無御座候。先年流人死罪両度被仰付候へ共、當島之儀は御織物に血穢を忌申候間、其段御願申上、高山之腰よりおとし候。云々

という一節がある。絹織る業の慎しみが、いかに大きかったかをうかがうに足る。

絹織物は八丈島の歴史を貫く最も美しい縦糸の一つである。そしてそれは八丈文化の外に向って流れ出した唯一の物であった。島の歴史には、北および西の通路を経て、島に流れ来たものばかりが多く、島から外に流れ出したものは絹以外にはなかった。しかし、その絹さえも、それが外に運び出されるために、それよりも遙かに多くの政治的、社会的、文化的な諸要素が島に向って流れこんで来ている。

§7. 流　人

私は最後に、この島に大きな影響を及ぼした今一つの外来要素について述べなければならない。八丈島の歴史は、徳川時代の初頭に流刑地となることにより、著しく特色を増し、かつ、複雑性を加えた。流配の初めは、記録の存する限り、慶長11年（1606）宇喜多秀家の主従13人であり、最後は明治4年（1871）上野國倉賀野村百姓啓次郎等5名である。この間265年、1800名以上の流人がこの島へ移されて来た。その詳細は八丈島支廳所藏の流罪人明細帳、年別村別の流人在命帳等によって知られる。

慶長より延宝末年（1680）まで約75年間、流罪回数は5回、総人数30人に過ぎず、内裏の女官2人を除き総て士分以上の者に属する。第5代将軍の時代以降はようやく雑多な階級の者を含むことになるが、全体として士分以上の者の数が最も多く、おそらく450人に近く、流人総数の約40%を占めている。僧侶、神官、山伏の類は240名に達するらしい。その他百姓約280人、町人約300人、無宿約320人などを数えるが、いわゆる教養階級に属する者が比較的多かったことは、八丈流罪史のひとつの特色である。徳川中期から明治に及ぶまでは、島内5か村どの村にも、いつも30人から60人に及ぶ流人がいたことになる。彼等がろうにつながれていたわけでなく、ほとんど自由に村民と交っていたのであるから、村に及ぼした諸種の影響

は大きかった。

村村の書役は多く流人であった。島行政の中心たる陣屋の書役にさえも幾人かの流人があたっている。流人のうちには幾人かの優れた宮大工木匠がおり、社寺の再建にはしばしば頼りようとなり、島の建築技術が彼らによって進んだ。木びき、曲尺算も彼らから教えられるところが多かった。その他、石工、屋根ふき、建具師としてすぐれた者も多く、八丈島で初めて石を切って石碑を造り文字を刻み、社寺大家の仏像器具のすぐれたものも彼らによって造られた。島で初めてぼくりを造って交易したのも流人、養蚕、機織、糸車の術を改良したのも流人、しょうちゅう、切りぼしなどの製法を傳えたのも流人。有形無形の文化を島に持ちこみ、廣い世間の見聞を傳えた功績は、けだし、はかり知れざるものがある。さらにまた、八丈島文化の古き姿を書きとめ、後の世のために残してくれた流人の功績は極めて大きなものであった。それについては、第2部で詳しく論ずるつもりである。

徳川幕府の八丈島流罪政策はかなり無謀なものであった。この島は古來諸種の天災地変、凶作ききんがひん発してゐる。徳川中期以降は人口もすでに飽和状態に達していたことは、安永前後における数回の出百姓の事実からでも推定し得る。その状態にもかかわらず、幕府は連年春秋二回ずつ流人を送りこんで來た。凶年に願い出れば、糧穀の融通をしてくれることはあったが、それ以外になにひとつとして幕府は島に報いることはしていない。八丈島は徳川幕府のために、270年の長きにわたり、1800人以上に達する厄介居候(いそうろう)を、無償で養いつづけて來たとさえ言えよう。流人のもたらした文化はあり、流人の果した良き役割はあった。しかし流人のために島人達が耐え忍ばなければならなかった物心両面の負担は、それらに比して幾十倍か大きなものであったに相違ない。物惜しみせぬ寛容な氣風の島であったことは、流人たちにとって眞に大きな幸であった。

流人たちには諸種の犯罪者が含まれていた。悪質不良の徒が決してすく

なくなかった。それにもかかわらず270年間、彼らが島人に対して加えた極悪非極内な犯行は、不思議なほどすくなかったと断じてよい。その原因として、彼らの多くが陥っていた悲しいあきらめや虚覚の状態が考えられるし、また日日を励んで、しゃ免の早きを待つという心境も考えられるのである。しかし、それらにも増してわたくしは、島人たちの温かい包擁力を高く評価すべきだと思うのである。

第2部　八丈島の古文献

(1) 八丈島年代記　(2) 八丈島日記並に日記　(3) 八丈島年番文書　(4) 御条文語——(5) 寛延二己巳年諸間諸書　(6) 伊豆国附島々様子大概書　(7) 安永六酉年被指遣候御条目御請書——(8) 北条五代記　(9) 八丈島雪霰記　(10)伊豆海島風土記　(11)南方海島志　(12)七島日記　(13)八丈島筆記　(14) 椿葉月録月　(15)八丈島物語　(16)一話一言——(17)伊豆七島風土細覧　(18)八丈島流人之明　(19)八丈志　(20)三宅島新島八丈島三ヶ島刑法大要鑑　(21)やたけの寝覚草　(22)流人在命帳　(23)流罪人明細帳　(24)八丈島年表　(25)八丈實記

八丈島は関係文献のかなり豊富な島である。その原因はいくつか考えられる。まず、起原が徳川期以前にさかのぼる社寺旧家の多くが、明治に至るまで連綿として地位を保ち、よく各種の文書を傳え得たことが数えられなければならない。次に、徳川幕府がこの島を貢絹の地として、また流刑の地として重要視し、あるいは代官をして視察せしめ、あるいは諸種の調査を進めるなど、たえず注意を怠らなかった結果、諸種の記録が残されたという事情がある。第3に、この島の流人には教養ある階級の者が比較的多く、彼らによって諸種の記録がつづられたということがあげられなければならない。この種の記録の存在は、八丈島文献の一特色であるが、なかんずく特筆すべきは近藤富蔵翁であり、その著「八丈実記36巻」は翁じしんの記述によってさんぜんたる光彩を放つばかりでなく、あまたの古記録を複写することによって資料を散逸から防いだ点においても偉大な価値を持つものである。最後に指摘したいのは、この島の気候風土、生活文化、特に言語が、極めて異色に富むものであり、耳目をそばだたしむるに足る諸

種の傳承に富んでいたという事実である。そしてこの事実こそ、あまたの貴重な文献を残さしめた最大の原因である。

1. 八丈島年代記

八丈実記巻5所收。一に八丈島事蹟記とも題する。建武2年（1335）から承應2年（1653）に及ぶ八丈島最古の記錄であり、天災地変ききんおよび國地との交渉を主内容とする。八丈島宗福寺第11世一巻智心が元祿6年（1693）に複写したものの写しである。島の根本資料として價値は極めて高く、近藤翁も「島中の古記此外に一切なし」と評している。國立國会図書館上野支部藏本の『八丈島小島青ケ島年代記』写本1巻は、同書以下諸種の年表を集めて作成されたものらしい。

2. 八丈島日記並に日記

八丈実記巻5所收。前書は万治3年（1660）から元祿16年（1703）に及ぶ記錄で、近藤翁は「是又古文の正本なれども何人の筆記と知るべからず、疑らくは神主奥山氏の日記なるべし」と言っている。後書は宝永6年（1709）から享保3年（1718）に及ぶ記錄で、近藤翁は「是又同書也。古本の正本、……已以の二書は大賀郷菊池の惣本家の秘藏なり」と述べている。ともに島役人の家に書き傳えられた記錄らしく、天災地変、國地との海上交通などを多く記し、八丈島年代記につづく島の年代記として貴重な資料である。

3. 八丈島年歷抜書

八丈実記巻5所收。慶長9年（1604）より天明2年（1782）に及ぶ記錄で、元祿以降に詳しい。記事の性質は前掲2書と類似のものであるが、別書と思われ、かつ、特に漂着に注意を向けている。

4. 圓翁交語

高圓愼著、美濃版写本1巻、八丈島支廳所藏。巻頭に掲げた漢文の序によると、著者は幼少にして八丈島をいで、壯年にして島に帰り、閑暇のま

まに友圀翁と島の古今を談じ、故郷の旧事を忘るること無からんがために小著を作り、圀翁交語と名づけたという。民俗に関して『亀卜の記録、卜部湯之本ノ唱など価値ある資料を含んでいるが、本書の特色はむしろ約200語の『八丈島語集』の収録にある。彼は漢学を学んだため、方言音を漢字で写し、それに仮名をふるというまわりくどい方法をとった。例えば、欲加法吏、カンナギノアタラヌ古ヲ形容シテウソヲ云。山穴、山ニ穴アル。」など。それのみたらず漢字に拘り過ぎて、しばしば無理な附会を犯している。例えば、「身除、糸篇ノコト也。糸ノ乱レヲイトヒ、人ヲサケタルヨリ称スル名ナリ。僧銘、牡牛ノスルドキヲイフ、象トホムル也。」かかる欠点をもつにしろ、本書はおそらく当時の島人自身にも珍しく感じられた語いを集めたものと思われ、今日全く廃語と化している語を多く含み、珍重すべき方言集である。序に享和2年（1802）6月とあり、圀翁交語もそのころに成ったものだろう。

著者の本名は高橋與一、八丈実記巻17によると、三根村の高橋宗家3世長兵衛宣栄の4男として宝暦3年（1753）出生、18才で江戸鉄砲洲本湊町に八丈島屋與市と号して呉服商を営み、妻の縁故により初めて柳営の奥まで八丈織を商って裕福となった。妻は松村と称する旗本の娘であった。彼は28才で学に志し富裕にまかして漢学に関する文献を多く刊行した。八丈島については、他に『絲島噺』『絲島俚語』などの著書があり、八丈実記の数数の引用文によって価値高いものであることが察せられるが、今は共に逸書である。彼はまた古来禁忌の地であった三根村神止山を開墾して多くの畑地を作るなど、その一生の活動は多方面にわたっているが、旧幕時代八丈島が生んだ学者としても唯一の人である。

5. 寛延二己巳　尋問請書

八丈実記巻5所収。寛延2年（1749）、代官大屋杢之助から発せられた約35箇條の質問に対して、地役人、神主、名主など連名で提出した返書であ

る。島の歴史並びに生活の諸方面にわたる重要事項に関して、質問適切、返答また的確かつ要領を得、社会史研究の好資料である。

6. 伊豆國附島々様子大概書

八丈実記巻5所収。安永3年（1774）代官江川太郎左衛門から幕府に提出した報告書で、八丈島関係は最後の一部を占めるのみであるが、当時の戸数人口並びに年貢に関する記録が特に注目に価する。

7. 安永六酉　被指遣候御條目御請書

代官江川太郎左衛門の下した約40箇條の質問に対して、地役人以下五人組まで連名で提出した請書であり、社会史の好資料を多く含む。

8. 北條五代記

改訂史籍集覧第5冊所収。三浦茂信の著『見聞集』32巻から小田原関係の文を集めたのが本書である。茂信の祖は北條第4代氏政に仕え、北條氏滅亡の後に江戸へ出て商人となったものであるが、茂信も江戸にあって、小田原関係のことを多く含む見聞集を残したのであろう。本書巻5ノ4に『八丈島へ渡海の事』の一文を載せているが、初代早雲の代にこの島を見出し、5代氏直の代まで3年に1度下田から渡海して、上上の絹を年貢として納めしめたとある。その年貢取立てのために、下田郷の眞言宗の僧侶で、氏直の右筆であった板部岡江雪入道が渡海した際に、妻良村の住人村田久兵衛が配下として従っていたが、そのみやげばなしをつづったのがこの一文である。婚姻並びに旅人歓待の興味深い資料を含んでいる。ちなみに氏直の時代は、天正元年（1573）から同18年にわたるものである。

9. 八丈島漂流記

土佐國群書類従巻78所収。土佐國幡多郡清水浦湊に近い久保津はくじら漁の村で、その骨は肥料として売買されていた。それを運ぶため、延享2年(1745)冬、紀州海士郡（はしかみ）橋本村の船頭傳六以下4名を乗せた船が清水へ入津した。その求めにより、久保津の船頭藤五右衛門兄弟がくじらの骨250

俵を積み，紀州方船子２名が同船して清水に向ったのが12月26日。その申の刻であったというのは、年暮にせかれて無理をしたのであった。足摺岬を廻るところから風はげしくなり、ついに漂流し、７日後の正月２日に八丈島三根村に漂着した。以後３月19日まで島にとどまり、浦賀、江戸を経、伊勢に参宮し、紀州新村ではその地からの２人に別れ、８月30日に藤五右衛門兄弟は郷土に帰っている。その体験と見聞とを、延享３年（1746）に当務清水浦館吏池則満が筆録したのが本書である。藤五右衛門は一介の船頭であるが、よく世事進退をわきまえたりっぱな男であったことは行文の間から察せられる。本書は聞書ではあるが、八丈島筆記や八丈島流人之咄などに比して格段の価値をもちえたのは、また一つには池則満の功績に帰せらるべきである。本書の価値は、まず諸種の見聞の要点を、作為なしにそぼくかつ正確に記したことにある。次に、本書が他の八丈島文献とは全く無関係につづられ、かつ無関係に保存せられたことにあり、したがって他の諸文献と比較対照して諸種の資料を確認するのたよりがあるばかりでなく、また本書独自の好資料を含んでいる。本書の成った年代はかなり古い。本書は漂流談として興味あるばかりでなく、八丈島最古の民俗誌の名に値するものであり、八丈島文献中に占める地位は高い。

１．伊豆海島風土記

美濃版写本３巻、佐藤行信著、國立國会図書館上野支部所蔵。上巻に八丈島、小島、青ケ島、中巻に大島、三宅島、新島、神津島、御蔵島、利島について、各島の起源、沿革、自然、人文などの状況を記す。下巻は産物之部で、木、草、魚、鳥、海草などの図を記し、説明を加えている。伊豆諸島の古き地誌として高く評価されるが、産物を図示したことも特色である。國立國会図書館上野支部蔵本『沖の小島記』も類書であるが、ここでは各島の記述は上巻にまとめ、中下両巻は産物を記し、図は数多く詳細であり、原書のより正確な写本と思われる。『海島風土記』は佐村氏國書解題

にも記され、それによると6巻本であり、巻3以下が図説の部で、それぞれ諸木の図、諸施草芝の図、薬品草木の図、魚鳥海藻の図を掲げてあるという。同書によると佐藤行信は典農司の官吏であり、天明元年（1781）吉川義右衛門秀道をして、伊豆諸島を検討せしめた時の記録である。八丈関係の語い約80が列記されている。

11. 南方海島志

写本3巻、寛政3年（1791）豆州秋山章の編集。伊豆海島志とも、伊豆海島記ともいう。八丈実記巻11所収。上巻は凡例、中巻は大島、新島、上津島、利島、三宅島、三倉島、下巻は八丈島、小島、青ケ島、小笠原十島について記した総括的地誌であるが、八丈島に関する記述が最も詳しい。近藤翁は本書を「八丈の記の大成とすべし、然れども八丈年代記をすこしものせず、寺記の偽文を信たり」と評している。思うに本書は海島風土記を基礎とし、伊豆にいて得られた諸種の聞書を加えて編集せられたものであろう。本書をさらに補修したのが『伊豆七島志』半紙版活字本3巻2冊明治34年（1901）刊であり、編集者萩原正夫は秋山章の孫である。

12. 七島日記

美濃版版本3巻、國立國会図書館上野支部所蔵。寛政8年（1796）代官三河口太忠の八丈渡海は、八丈の政治生活に大きな変化をもたらした点で注目さるべきものであるが、またその行程が従者應齋によって正確詳細に記録された点において特筆されてよい。日記は4月14日江戸鉄砲洲を出帆してから12月4日帰着するまでのすぐれた紀行であり、七島日記とはいえ、実質はむしろ八丈日記である。本書の特色の一つは、下巻が22葉の図絵から成ることであり、当時の風俗を知るに便があるが、これも應齋の筆に成る写生である。文政甲申年（1824）鵬齋龜田興の序文があり、刊行が代官渡海より約30年遅れていることが察知される。伊豆日記、伊豆島日記、八丈島記など異名の写本がある。國書解題には應齋は小寺氏、江戸の市人とあ

る。日本民俗研究会編民俗資料叢書第4冊に、この七島日記と並べて巡島日記抄が収められてあり、原本『巡島日記』は國立國会図書館上野支部藏本であるというが、現在は逸書となったものか閲覧し得なかった。七島日記とは全く同一行程を記したものであるが、記事内容に若干の相違を示しているばかりでなく、文体において巡島日記は、代官名こそ記さないが隨従記の体裁を取り、文章もすぐれている。多分その筆者も應斎であり、版本にははばかるところがあって私人の紀行のごとく記したのであろう。

13. 八丈島筆記

半紙版写本1巻、國立國会図書館上野支部藏本。古松軒古河辰記。三河口太忠は八丈島を巡視した翌寛政9年（1797）、備前児湯郡天城村に滞在した。七十二翁古松軒が70余日側近に侍している間に、三河口から得た八丈島の話をつづった聞書で、島の沿革、航路、氣候、風俗などを記し、島語約30を書きとめている。馬琴が弓張月に用いた機織唄（はたおりうた）を載せていることなど民俗資料として價値あるものを含むが、西遊雜記の著書の筆として稍薄な感を免かれないのは、かかる聞書たるためであろう。

14. 椿說弓張月

馬琴は文化2年（1805）に本書の稿を起し、文化8年（1811）に初版を刊行したという。八丈島関係のことは「後篇卷之一、第十六回飛鳥を瞻て爲朝女護島（にようごのしま）に渡る。靈夢に因て長女（によ）和語を譯く。第十七回勇婦刀を振て山猫忽死す。猛將計を定て夫婦全聚る。第十九回爲朝の武威嫗（もがさのかみ）痘鬼を退く。忠重罪せられて十の指を失ふ。」などに描かれている。本書は戯作ではあるが馬琴の八丈3島に関する理解は、女護島傳說、機織、不淨小屋、怪異、痘神等に関してかなり深いものであったことは明らかである。彼は諸種の八丈島関係の文献を渉猟し、たかんすく伊豆海島風土記から多くのものを得ている。また小島出身の式亭三馬から、また三馬を介して、資料の收集に努力したのであり、その手は八丈島にまで伸ばされた。八丈実記卷9によ

ると、小島八郎大明神の神主菊池武幾の長男茂兵衛が江戸表に出で、浅草田原町で家主となり、板木職をしていたのが後の三馬であり、「此者江戸戯作者曲亭馬琴に頼まれ爲朝御曹司の八丈島にての行狀を尋ぬ」とある。また同書巻26によると、三馬の依頼に應じて、宗福寺15世林河靈音という常に三國志軍談を好んだ僧が、流人にして講談に秀でた谷秀弘、並びに藝者中の山田栄蔵らと示談して、返書を送ったとある。林河靈音は寛政7年(1795)より住職23年、文化14年(1817)の入寂であるが、谷秀弘は流罪人明細帳によると、「当時無宿、軍書読渡世いたし候」とあり、文化7年(1810)の流罪である。したがってその報告が、初版刊行までに馬琴のともに届いたか否かは疑問である。

15. 八丈島物語

写本1巻、筆者年代共に不明、國立國会図書館上野支部藏本。記述平板で特異性無く、誤記も多い。島語約80を載せているが、これも他書からの拾い集めらしく、特色がない。

16. 一話一言

48巻から成る大田南畝の随筆、安永から文政に及ぶ間の見聞を記す。その巻26に、八丈島俗通志から轉載した約210の八丈島方言が記載されているが、原典の著者年代共不明。(「『一話一言』と八丈島語い」を参照)

17. 伊豆七島風土細覧

2巻。飛騨大野郡白川郷一色村三島正英の著。大正7年(1918)から9年(1920)にわたり飛騨史談に連載された。高山町の上木屋甚兵衛自賢が百姓騒動に加担した罪で新島に流されたのは安永3年(1774)であった。年久しくして齢80に達し病に苦しむのを傳え聞き、実子三島正英は家督を譲って新島に渡り、孝養につとめた。自賢は寛政10年(1798)他界したので、正英はなきがらを葬り、喪に服し、寛政12年(1800)帰郷したが、本書の成ったのはその翌年(1801)である。乾巻に大島、利島、新島、坤巻に神

津島、三宅島、御蔵島、八丈二島、青ケ島、無人島の順序で、それぞれの土地、風俗、人情、物産、史蹟、社寺などを記している。新島の記述が最も詳細であり、八丈島関係は船頭水主からの聞書に属し、八丈3島の語い約80が附記されている。一名を豆州風土記という。

18. 八丈島流人之咄

写本1巻、國立國会図書館上野支部蔵。尾張藩の江戸木挽町藩邸に仕えた屋敷方手代山下平六が、八丈島に流罪となったのは明和5年（1768）、しゃ免は享和3年（1803）、翌文化元年（1804）に江戸へ帰っている。松田兵右衛門が彼からの聞書をつづったのが本書である。島の風俗習慣などを箇條書とし、島語も少数記しているが、在島35年の流刑生活の産物としては内容が乏しい。

19. 八丈志

半紙版写本1巻、大原正矩著、國立國会図書館上野支部蔵本。著者は元飛騨郡代大原竜五郎の長子、父親が寛政2年（1790）八丈島流罪となった時は2才であつた。享和2年（1802）、14才で願い出でて八丈島に渡り、父と共に中之郷で10年の歳月を過ごし、文化8年（1811）に國地へもどっている。その間の見聞を録したのが本書である。大原氏はつりが好きで、しばしば夜づりにも出ているが、そのために氣象風位名、動植物に関する記述に優れたものがあるが、また冠婚葬祭についても興味ある記録を残している。

2．三宅島新島八丈島三ケ島刑法大祕鑑

写本1巻。流人たちが江戸で遠島の判決を受けてから、これら三か島に住み着くまでの往路の情況、船の構造、各島の実情を、かなり精密に記述している点に本書の特色がある。筆者は不明であるが、やや教養ある八丈島流人の一人らしい。流刑年代も不明。ただし当時八丈島5か村の流人頭の名前、および御船頭りの名前などから考えれば、天保2年（1831）から弘化

4年(1847)の間に当り、幕府最後の時代の遠島事情の記錄とみなし得る。八丈島語約30を記している。

21. やたけの寢覺草

半紙版版本1卷。序文に「弘化五のとし、つちのえの仲春、鶴窓山人述」とある。著者は八丈実記によると豆州君沢郡の人とあるが、詳細は不明である。幕末の流人であることだけは確かであろう。彼は文筆のたしなみのあった人らしく、自己の見聞に他書の記載を參照してこの一書をつづったのであるが、本書の最大の價値は島語約80を記する以外に、變文形式と夫婦対談形式と二つの文章によって語法を示していることであろう。本書には別種の版本があり、それには島の少女の初潮に際する初い出祝における訪問贈答の狀景を記した、興味深き方言会話体が揭げられてあるらしく、八丈実記その他数種の書物に引用せられているが、まだ管見には入らない。

22. 流人在命帳

八丈島支廳に村別年代別のものが數冊藏せられているが、安政年間(1854—1859)天保年間(1830—1843)のものが比較的よく整っている。

23. 流罪人明細帳

美濃版写本5冊、八丈島支廳所藏。慶長11年(1606)宇喜多秀家主從13人に初まり明治4年(1871)に及ぶ260余年間、1800名以上に達する八丈島流人について、姓名、身分、出身地、流罪年月、しゃ免年月など、若干の部分には罪名を附記した貴重な資料である。

24. 八丈島年表

近藤富藏著、八丈島支廳所藏。文久元年(1861)辛酉多有無庵不名誌とある。

25. 八丈實記

美濃版写本36卷。近藤富藏守眞編著。本書は八丈島関係文献のうち最高

の価値を有するものである。ただに量的に他の全関係文献の総和に匹敵するばかりでなく、内容的価値においても、かかる比較が許される。ゆえに本書の由来、内容ばかりでなく、著者に関しても少しく詳細に説明しておきたいと思う。

著者は重蔵守重の長子である。隣家百姓の不誠意を怒って七人切りをした件で、文政9年（1826）に22才で遠島申しつけられ、翌10年（1827）島に着き、三根村に割当てられた。彼は宇喜多秀家の第2子小平次の子孫なるオイヅをめとり、3子をあげた。明治13年（1880）しゃ免されて、一度関地へ渡ったが、15年（1882）再び島に帰り住み、明治20年(1887)6月に83才の高齢をもって、多彩な一生の幕をおろした。

彼はぼうようたる風格の巨大漢であった。しかし生来器用な一面を持つ人であったらしく、仏像を刻み、欄間を彫り、仏龕を造り、絵を描き、石垣を築き、経師屋の仕事までして生活を支えた。詩、和歌、俳諧にもたしなみを示し、後には島民の教育にも熱心であり、明治大正期に活躍した島の有志たちには、翁の学恩感化を受けた者が多い。翁は弱年血気の殺人を悔い、深く仏道に帰依し、身にわくしらみを殺すことすらせず、ために翁の立ち跡にあまたのしらみが残されたという類の話は、その大力、大食、無慾、おとこ気に関する常軌はずれのあまたの逸話と共に語り傳えられている。翁は多方面の活動をしながら、なによりも筆を取ってあまたの記録を残し、その量はついに69冊に達した。その約半分が東京府に買い上げられて、ここに録する八丈実記36巻となったのであるが、その経過は次のごときものであった。

東京府の官員が渡島して、近藤翁の八丈実記に初めて接したのは明治11年（1878）（明治13年？）のことであるが、その時の翁の感激がいかに大きかったかということは、同書巻7の次の一文がよく証明してゐる。

御一新明治十一年、八丈島え渡海ある東京府警視本署の官員あらせらるゝ事抔

所へ召さるゝにより、何故にやと至る處に、豈はからんや、八丈島戸長高橋馬渡の吹挙にて、八丈実記を御一覧に持参せよとあるにより、即刻差出す處に、官員方より清書して献ぜよとの仰にて紙筆を賜りぬ。時なる哉、ときなるかな。安政二年より星霜二十四年、むなしく捨てゝものうかりしが、残念の迷雲は文明のひかりに晴て、開化の嬉しさ。流囚の罹るべき身をも忘れて、七十有余歳老もふとはいいながら、恐れもかへり見ず筆採りて、附するに明治の八丈神社あるため、島中学校の塾まで識記して、謹んで上申。

と当時の喜びをもらしている。安政2年（1855）は彼の来島28年目でありそれから星霜24年は明治11年（1878）にあたるが、「その間むなしく捨てて云云」というのは、八丈実記が安政2年（1855）までにほぼ書き上げられていたことを意味するのであろう。

また同書を書上げて献納したる時の喜びが巻3に記されている。

書筆して守眞より献納、報賞金二十七円を賜りぬ。此事東京新聞にいでたりと云ふ。まことに囚流人の身にして、書籍上進おゝせつけらるさへ身の面目なるに稟美を受る嬉さは、ことばにのべがたし。（下略）

七十七翁　聞斎守眞

七十七翁とあるから、明治14年（1881）のことである。しかるに東京府の処理がすんだのは、遥かに遅れて明治20年（1887）のことであった事実は、次の一文によって明らかである。

曩きに銀林書記官の伊豆國諸島を巡視するや、此書を獲て贇し回る。因て其中本島の事実に係るもの三十巻を擇んで之を買收し、本府の架藏とす。其余四十冊は他雑著の抄撮なれば、其家に保存すべき旨地役人に口諭して還し戻さる。其書たる未定の稿本にして、記載錯雑、頗る検閲に苦むの憾少からずと雖、要するに其人久しく島地に在て筆録する所なれば、記述する所一の虚構なし。以て他日島志を修するの用に供するに足れり。乃ち其来歴を巻首に誌す如此。

明治二十年十月二十七日　　東京府文書課記録係

これは東京庶藏本の巻頭に掲げられた由来書である。そして続いて、府から八丈島地役人菊池作次郎にあてた同年10月20日附け文書の写しが掲げられてある。

其島三ヶ根村近藤富藏生存中編纂せし八丈実記六拾九冊の内、全く八丈の実記

に係る分二拾九冊、今般代價五拾円にて府廳へ買上げ相成候に付ては、右代價及送付候也、同人孫近藤近藏へ下付、請書を徴し廻送有之度、此段及照会候也、追て殘り四拾冊及返付候也。

すなわち東京府側の処理が終ったのは、翁が死んだ直後である。否、翁の他界を知って、取急ぎ措置を終えたものとさえ考えられる。もし翁の生前にこの事がなされていたら、孤島老殘の翁をしていかに狂喜せしめたことであろう。われらは官府の手ぬるさを嘆かずにはいられない。

しかし、とにかく、翁の筆稿の約半分が東京府の藏本となり、保存の方法が講ぜられたことは眞に幸であった。府は買上げの部分を整理して、一應の体裁を整えたのである。巻1の序文には、

原書巻次錯雜して閲覧に便ならず、故に組部類を以て相從ひ、或は合し或は析て、通計三十六巻とする。

と述べているが、その巻次は次のごときものである。

第一巻　目錄
第二巻　記略
第三巻　抜書
第四巻　八丈島地圖
第五巻　八丈島年代記、八丈島日記、事蹟請書、伊豆島々大概書
第六巻　奏條稿、五村惣評、八丈島一覽
第七巻　海道圖、風文、潮汐、八丈方言、安永年中島々大概書
第八巻　青ヶ島
第九巻　小島
第十巻　八丈島戸籍、小島、青ヶ島
第十一巻　南方海島志
第十二巻　小笠原島
第十三巻　鳥島、小笠原、琉球
第十四巻　島人系圖
第十五巻　圖寫家系私語
第十六、十七、十八、十九、廿巻　沿革人物
第廿一、廿二、廿三、廿四巻　沿革聖蹟
第廿五巻　神社
第廿六巻　佛閣
第廿七、廿八巻　神道
第廿九巻　菊池氏系圖
第卅巻　沿革人道

第冊一巻　総論
第冊二、冊三巻　土産
第冊四、冊五巻　貢税
第冊六巻　書籍、新古諸人詩歌、八丈雑業

本書はかく多方面にわたる大部の書であり、貴重な資料を数多く含み、いかなる方面にせよ、事八丈島に関する研究である限り、拠ってもって見るべき書である。方言資料としては巻3に約300余の島語が録せられ、天地、時刻、人倫、支体、衣服、飲食、家居、器財、動物、言語の10部分に分けて列挙されてあり、巻2にも重複記載されている。身分による言葉の使い分けの例が若干示されていること、動詞にも注意を向けていることなどが特色であり、それ以外にも各巻に方言資料が散見せられ、本書は八丈島方言研究にとっても最も重要な資料の一つである。

現在の八丈島支庁の蔵本は、東京都庁所蔵の原典の写しである。別に数部の写本が作られ、その一部は柳田國男先生の書架にあり、わたくしの記した巻数はそれによっている。東京府から八丈島へ返送された40冊は散逸して所在不明であり、近藤という人も國地へ出て、近藤の家系は島に絶えてしまった。

富蔵翁は配流以前に江戸で書籍に親しんだ人ではない。来島以後に彼に教える師があったわけではない。時には下谷広徳寺の釈義勉のごとき流僧の、彼を励ます者はあったとしても、彼にあっては全く孤独独力の学問であった。翁は自己の稿が日の目に会う春が来ようなどとは、夢想だにしていなかったであろう。ただなにかにつかれたごとく書きつづけたのである。明治16年（1883）に翁が作った一首の和歌がある。「もふいはじかゝじと思ひおもへども、またあやなくもしめす水茎」。翁の心境の一端をよく示している。かかる教養、かかる環境、あまつさえ翁の小事にこだわらぬ性格は、行文の間におのずから現われている。脱字誤字の間間見出せることによって責められるべきではない。多くの流人たちは島においてただ虚脱

の状態で日を送ったのであり、ある者は島人を怒り、ある者は恨み、そしてまた彼らの書き残した文章にはしばしば島人に対するあなどりの念がこもっている。八丈実記の全巻を通じて、かかる消極的な暗い心理の陰えいはいささかも認められず、翁は島の人になりきっている。翁こそはこの終生の八丈実記をもって、島の恩きに最もよく報いた流人であったが、またそれ以上に、後の世のためにも最も大きな遺産を残してくれた流人であった。翁に対するしゃ免の来ることの遅過ぎたのは、後世のためには、かえって幸でさえあったと言わなければならない。

附錄2　　資料

I. 統計的資料

以下にあげる統計的資料は、A: 戸別調査による結果から得た種種の資料 と、B: 役場の資料によって作った人口動態表 とである。

目 次

(1) 調査によって得られた資料

1. サンプルの職業別構成 (表 38)
2. 同 学歴別構成 (表 39)
3. 同 ラジオの利用状況 (表 40)
4. 同 子供に標準語をしゃべらせたいか (表 41)
5. 同 他村人と会話する際の言語 (表 42)
6. 同 家で使う言語 (表 43)
7. 同 内地生れの人の島のことばの使用程度 (表 44)
8. 同 共通語に対する関心 (表 45)
9. 同 内地との行き来 (表 46)
10. 同 島島との行き来 (表 47)
11. 同 学歴と職業との関係 (表 48)
12. 同 経歴と学歴との関係 (表 49)
13. 同 年令と学歴との関係 (表 50)

(2) 五つの村の人口動態表(役場の資料によるもの)

1. 大賀郷村の人口動態 (表 51)
2. 三根村の 〃 (表 52)
3. 阿立村の 〃 (表 53)
4. 中之郷村の 〃 (表 54)
5. 末吉村の 〃 (表 55)
6. 流入率 (表 56)
7. 流出率 (表 57)
8. 総合動態 (表 58)
9. 島内の他村に対する流入・流出 (表 59)
10. 内地に対する流入・流出 (表 60)
11. 東京に対する流入・流出 (表 61)
12. 東京をのぞく地方に対する流入・流出 (表 62)

13. 総合（表63）

（1） 調査によって得られた資料

表38 職業別構成

	大賀郷	三根	櫂立	中之郷	末吉	計
農業	28	42	12	25	14	121
漁業	2	3	0	1	2	8
商業	6	2	0	1	0	9
工、その他	2	1	0	0	0	3
自由業	8	11	2	7	4	32
無生	11	6	7	4	2	30
無職	6	4	0	2	0	12
不明	0	0	0	1	0	1
計	63	69	21	41	22	216

表39 學歷別構成

	大賀郷	三根	櫂立	中之郷	末吉	計
なし	5	6	0	3	1	15
小學	13	9	4	9	9	44
舊小	27	34	8	13	8	90
中學	15	15	9	14	4	57
高專	2	4	0	1	0	7
大學	1	0	0	0	0	1
不明	0	1	0	1	0	2
計	63	69	21	41	22	216

表40 ラジオの利用狀況

	大賀郷	三根	櫂立	中之郷	末吉	計
よくきく	14	26	10	11	7	68
あまりきかない	10	7	5	6	6	34
きかない	27	34	5	20	8	94
不明	12	2	1	4	1	20
計	63	69	21	41	22	216

表11　子供に標準語をしゃべらせたいか

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
しゃべらせたい	29	35	11	21	12	108
しゃべらせたくない	2	5	2	0	0	9
どっちでもいい	2	1	1	0	0	4
不明	30	28	7	20	10	95
計	63	69	21	41	22	216

表12　他村人と會話する際言語

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
いつも共通語	15	7	3	3	3	31
共通語と島のことばとを使いわける	14	7	3	10	6	40
いつも島のことば	20	35	14	18	11	98
非該當	13	19	1	10	2	45
不明	1	1	0	0	0	2
計	63	69	21	41	22	216

表　家で使う言語

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
家でも島のことば	18	35	12	15	7	87
兩方	14	13	6	7	9	49
共通語	18	2	0	1	2	23
空白	12	17	3	7	4	43
不明	1	2	0	11	0	14
計	63	69	21	41	22	216

表14　内地生れの人の島のことば使う程度

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
島のことばを使えないし、使いたいと思わない	6	7	0	6	0	19
使えないが使いたいと思う	0	2	0	1	0	3

ときに使う	2	1	1	1	1	6
空白	55	59	20	33	21	188
計	63	69	21	41	22	216

表15 共通語に對する關心

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
共通語を話せないし話したいと思わない	1	2	2	1	0	6
話せないが話したいと思う	1	4	1	0	3	9
ときに話す	1	0	0	0	0	1
空白	55	59	14	39	19	186
不明	5	4	4	1	0	14
計	63	69	21	41	22	216

表16 内地との行き來

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
よく行く（年に數回以上）	6	9	2	3	2	22
時時行く（年に1回以上數回）	8	5	0	7	3	23
あまり行かない（年に1回以下）	18	21	3	7	6	55
ほとんど行かない	19	16	13	10	5	63
全然行かない	10	16	3	13	5	47
不明	2	2	0	1	1	6
計	63	69	21	41	22	216

表17 島島との行き來

	大賀郷	三根	榎立	中之郷	末吉	計
よく行く	2	5	0	0	0	7
時時行く	13	0	0	1	0	14
行かない	44	53	16	36	18	167
不明	4	11	5	4	4	28
計	63	69	21	41	22	216

表48　學歷と職業との關係

	農業	漁業	商業	工、その他	自由業	學生	無職	計
な　し	7	0	0	0	0	0	2	9
小　學	25	4	2	0	0	0	1	32
高　小	49	3	0	2	8	4	4	70
中　學	11	0	12	0	3	1	1	28
高　專	0	0	2	0	1	0	0	3
大　學	0	0	0	0	1	0	0	1
計	92	7	16	2	13	5	8	143

表49　經歷と學歷との關係

	生來居住者	言語形成期居住者	言語形成期前後居住者	言語形成期後居住者	計
な　し	5	0	0	4	9
小　學	19	9	1	3	32
高　小	34	31	0	5	70
中　學	20	7	1	0	28
高　專	0	2	0	0	3
大　學	0	1	0	0	1
計	79	50	2	12	143

表50　年令と學歷との關係

	13-20	21-30	31-40	41-50	51-60	61-70	71—	計
な　し	0	0	1	0	2	2	4	9
小　學	4	2	6	10	6	1	3	32
高　小	5	29	12	11	6	7	0	70
中　學	18	4	3	1	2	0	0	28
高　專	2	0	0	1	0	0	0	3
大　學	0	0	1	0	0	0	0	1
計	29	35	23	23	16	10	7	143

（2） 五つの村の人口動態表（役場の資料によるもの）

五つの村の1949年（昭和24年）における人口動態を、人の交流という点から村相互およびある村と内地との関係をうかがうひとつの資料として掲げる。

その目的のために婚姻や離婚件数などを無視して、おもに流出・流入から生ずる人口の変化を、流出先・流入先に区別して示した。なお、資料の関係で、島内のある村がほかのある村とどのような交流をしているかについて分析することのできなかったのは残念である。

資料は 1949 年の各月 1 日現在の役場の報告書類である。なお、資料の入手および整理は、國立國語研究所昭和24年度地方調査員 菊池正文氏（中之郷村小学校長）の御援助によったことを特に記す。

表51　大字郷村の人口動態

月別	増加人口						減少人口						過去一か月の変化	1日現在の居住人口	流出入人口の合計
	流入人口			出生	不明	計	流出人口			死亡	不明	計			
	島内他村から	内地東京都から	内地他域から				島内他村へ	内地東京都へ	内地他域へ						
1	7	19	13	8		47	13	9	7	3		32	+15	3881	68
2	0	10	21	7		38	4	36	6	1		47	− 9	3872	77
3	15	10	7	18		50	8	12	14	1	2	37	+13	3885	66
4	5	19	15	10		49	11	45	11	2		69	−20	3865	106
5	9	11	7	7	3	37	4	24	10	1		39	− 2	3863	65
6	12	28	5	12	5	62	0	13	11	1		25	+37	3900	69
7	10	15	4	7		36	6	12	9	3		30	+ 6	3906	56
8	19	16	4	13		52	6	11	3	2		22	+30	3936	59
9	9	21	13	15		58	4	23	10	2		39	+19	3955	39
10	19	15	6	8		48	12	27	15	1	1	56	− 8	3947	94
11	11	8	10	15	1	45	4	19	7	1		31	+14	3961	59
12	12	14	14	15	1	56	21	22	12	1		56	0	3961	95
計	128	124	181	135	10	578	93	253	115	19	3	483	+95		894

表52　三根村の人口動態

月別	増加人口						減少人口						過去一か月の変化	1日現在の居住人口	流出入人口の合計
	流入人口			出生	不明	計	流出人口			死亡	不明	計			
	島内他村から	内東京都から	地他地域から				島内他村へ	内東京都へ	地他地域へ						
1	4	4	4	12		24	3	2	6	3		14	+10	4204	23
2	0	5	23	23		51	0	14	9	5	2	30	+21	4225	51
3	6	15	64	10	1	96	4	9	3	2		18	+78	4303	101
4	6	15	7	20		48	8	31	44	2		85	−37	4266	111
5	5	24	22	7	1	59	0	21	20	2		43	+16	4282	92
6	9	37	41	15		102	11	45	44	3		103	− 1	4281	187
7	7	7	21	11		46	8	9	5	2	1	25	+21	4302	57
8	4	24	12	11		51	11	12	4	3		30	+21	4323	67
9	2	13	13	8	1	37	6	26	23	0		55	−18	4305	83
10	5	8	3	12	1	29	2	12	20	6		40	−11	4294	50
11	9	4	11	16		40	5	21	5	4		35	+ 5	4299	55
12	3	16	5	12	4	40	3	39	11	2		55	−15	4284	77
計	60	172	226	157	8	623	61	241	194	34	3	533	+90		954

表53　樫立村の人口動態

月別	増加人口						減少人口						過去一か月の変化	1日現在の居住人口	流出入人口の合計
	流入人口			出生	不明	計	流出人口			死亡	不明	計			
	島内他村から	内東京都から	地他域から				島内他村へ	内東京都へ	地他域へ						
1	1	0	1	4		6	0	0	0	0		0	+ 6	1299	2
2	0	1	0	7		8	0	7	0	2		9	− 1	1298	8
3	9	1	1	6		17	4	1	4	1		10	+ 7	1305	20
4	6	1	2	4		13	1	3	5	0		9	+ 4	1309	18
5	4	1	1	5		11	15	2	2	1		20	− 9	1300	25
6	2	0	0	5		7	7	6	2	2		17	−10	1290	17
7	0	2	1	2		5	4	4	0	1		9	− 4	1286	11
8	4	1	1	6		8	1	5	4	2		12	− 4	1282	12
9	1	2	2	2		7	1	1	1	1		4	+ 3	1285	8
10	2	2	0	4		8	2	5	0	0		7	+ 1	1286	11
11	3	7	0	5	2	17	10	1	0	1		12	+ 5	1291	21
12	4	0	1	0		5	7	3	6	0		16	−11	1280	21
計	32	18	10	50	2	112	52	38	24	11	0	125	−13		174

表54　中之郷村の人口動態

月別	増加人口						減少人口						過去一か月の変化	1日現在の居住人口	流出入人口の合計
	流入 島内他村から	人口 島内東京都から	人口 地他地域から	出生	不明	計	流出 島内他村へ	人口 島内東京都へ	人口 地他地域へ	死亡	不明	計			
1	5	5	1	7		18	3	2	1	0		6	+12	1995	17
2	1	1	1	5		8	0	4	0	1	1	6	+ 2	1997	7
3	2	5	2	4		13	4	2	3	1		10	+ 3	2003	18
4	1	2	2	5		10	2	9	5	3		19	− 9	1991	21
5	15	1	1	7		24	4	2	3	1		10	+14	2005	26
6	4	2	1	1		8	7	14	3	2		26	−18	1987	31
7	2	2	2	4		10	0	1	2	1		4	+ 6	1993	9
8	4	6	6	7		23	0	6	2	1		9	+14	2007	24
9	3	12	0	7	1	23	2	4	1	4		11	+12	2019	22
10	0	3	3	13		19	0	10	1	2	1	14	+ 5	2024	17
11	4	0	1	6		11	1	10	1	2		14	− 3	2021	17
12	6	4	6	7		23	4	9	0	0		13	+10	2031	29
計	47	43	26	73	1	190	27	73	22	18	2	142	+48		238

表55　末吉村の人口動態

月別	増加人口						減少人口						過去一か月の変化		1日現在の居住人口	流入人口の合計
	流入人口			出生	不明	計	流出人口			死亡	不明	計				
	島内他村から	地内東京都から	地内他地域から				島内他村へ	地内東京都へ	地内他地域へ							
1	0	2	6	2		10	2	0	0	2		4	+	6	1181	10
2	0	3	5	7		15	0	4	4	0		8	+	7	1188	16
3	0	0	1	5		6	6	4	1	2		13	−	7	1181	12
4	0	2	5	4		11	2	9	3	2		16	−	5	1176	21
5	1	4	1	2		8	5	2	0	0		7	+	1	1177	13
6	3	1	0	1		5	1	1	0	0		2	+	3	1180	6
7	0	1	0	2		3	1	4	5	0		10	−	7	1173	11
8	1	7	4	1		13	1	1	4	2		8	+	5	1178	18
9	1	4	1	1		7	0	4	2	1		7		0	1178	12
10	0	5	2	6		13	0	9	0	0		9	+	4	1182	16
11	1	1	6	3		11	1	6	8	1		16	−	5	1177	23
12	2	2	0	2		6	1	0	5	0		6		0	1177	10
計	9	32	31	36	0	108	20	44	32	10	0	106	+	2		168

表 56　流　入　率

	O	M	K	N	S	計
島内他村	128 (32.3)	60 (10.4)	32 (25.0)	47 (23.1)	9 (7.6)	276 (21.7)
内　地	305 (77.0)	398 (92.9)	28 (21.9)	69 (34.0)	63 (53.5)	863 (67.8)
東　京	186 (47.0)	172 (40.1)	18 (14.1)	43 (21.2)	32 (27.2)	451 (35.4)
東京以外	119 (30.0)	226 (52.8)	10 (7.8)	26 (12.8)	31 (26.3)	412 (32.4)
計	433 (109.3)	458 (106.9)	60 (46.9)	116 (57.1)	72 (61.1)	1139 (89.5)
現住人口 (24.12.1)	3961 (1000.0)	4284 (1000.0)	1280 (1000.0)	2031 (1000.0)	1177 (1000.0)	12733 (1000.0)

表 57　流　出　率

	O	M	K	N	S	計
島内他村	93 (23.5)	61 (14.2)	52 (40.6)	27 (13.3)	20 (17.0)	253 (19.7)
内　地	368 (92.9)	435 (101.5)	62 (48.4)	95 (46.8)	76 (64.6)	1036 (81.4)
東　京	253 (63.9)	241 (56.1)	38 (29.7)	73 (35.5)	44 (37.4)	649 (50.9)
東京以外	115 (29.0)	194 (45.4)	24 (18.7)	22 (10.8)	32 (27.2)	387 (30.5)
計	461 (116.4)	496 (115.7)	114 (89.0)	122 (59.6)	96 (81.6)	1289 (101.3)
現住人口 (24.12.1)	3961 (1000.0)	4284 (1000.0)	1280 (1000.0)	2031 (1000.0)	1177 (1000.0)	12733 (1000.0)

表 58　総合動態率

	O	M	K	N	S	計
島内他村	221 (55.8)	121 (28.2)	84 (65.6)	74 (36.4)	29 (24.6)	529 (41.6)
内地	673 (169.9)	833 (194.4)	90 (70.3)	164 (80.3)	139 (118.1)	1899 (149.2)
東京	439 (110.9)	413 (96.2)	56 (43.8)	116 (56.7)	76 (64.6)	1100 (86.3)
東京以外	234 (59.0)	420 (98.2)	34 (26.5)	48 (23.6)	63 (53.5)	799 (62.9)
計	894 (225.7)	954 (222.6)	174 (135.9)	238 (116.7)	168 (142.7)	2428 (190.8)
現住人口 (24.12.1)	3961 (1000.0)	4284 (1000.0)	1280 (1000.0)	2031 (1000.0)	1177 (1000.0)	12733 (1000.0)

以上の表 56, 57, 58 をさらに　表59　島内の他村に対する流入・流出まとめて、島内の他村に対する流入・流出(表59)内地に対する流入・流出(表60)、東京に対する流入・流出(表61)、東京以外に対する流入・流出（表62)、一般に他地域に対する流入・流出の総合（表63)の五つの図表を得た。

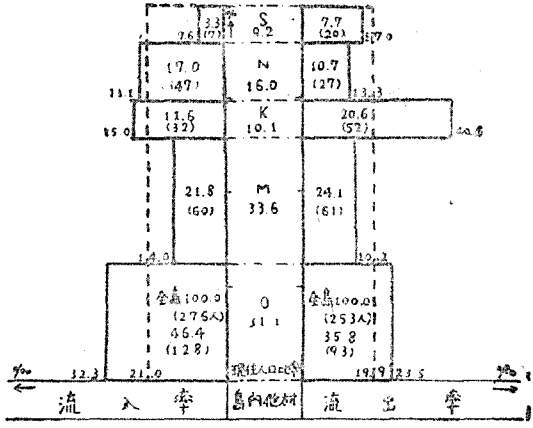


表60　内地に対する流入・流出

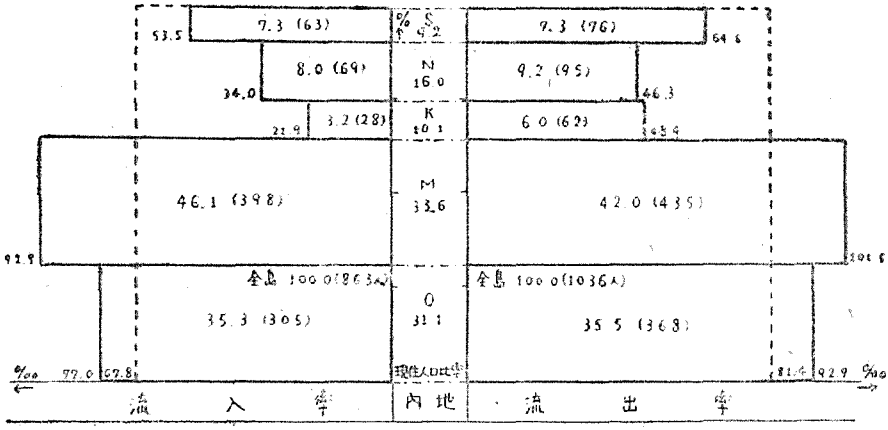


表61　東京に対する流入・流出

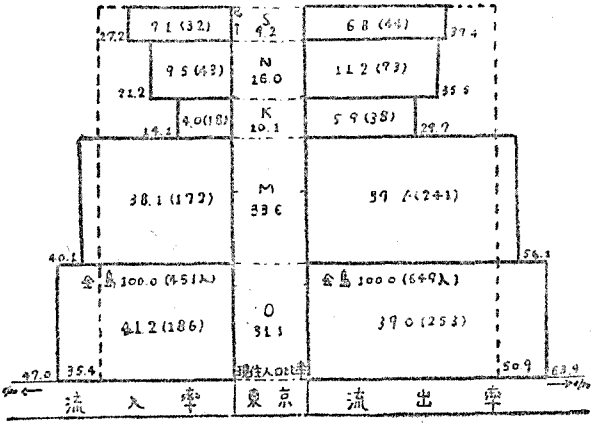


表62　東京を除く地方(区地)に対する流入・流出

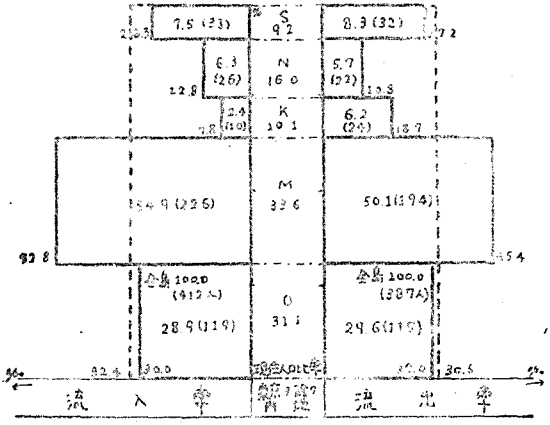
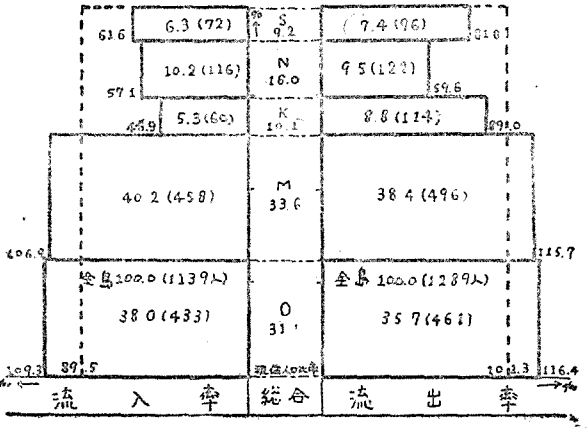


表63　一般に他地域に対する流入・流出の総合



II. 文 献 目 録

われわれは、調査の準備の段階において、八丈島関係の種種の文献を集めた。その目的は、八丈島に関する歴史的・文化的事情を知り、八丈島の言語に関する研究の状態を確かめ、八丈島の言語の歴史的研究のための資料を探し、さらに調査票をつくるための言語資料を集めることであった。

まず、「本州東部の方言」(國語科学講座 VII) に紹介されている文献書目を手がかりとし、その他、雑誌、論文および個人的情報を参考にして、できるかぎり多くの文献に目を通すように心がけた。それらのうちの大部分は、國立國会図書館上野支部から借覧したものである。その他、東京大学、特定の個人から借覧したものもある。なお、現地で筆写した文献が三つある (文献番号11, 24, 25)。

以下、47種の文献は八丈島関係の文献をすべて盡したものではない。しかし、ともかく、われわれが調査の準備の段階において問題とした文献である。

われわれのとりあげた文献は、廣く八丈島文化という観点からは、かなり足りないものがある。この点は、この報告書の「八丈島の文化と文献」で補いたい。これによって、特に明治以前の文献についてはほぼすべてを盡しているのではないかと思われる。

以下の文献は、明治以前の二三の文献をのぞいて、だいたい年代順に並べ、番号をつけた。明治以前の文献で年代のわからないものは、便宜上、明治以後の文献のすぐ前に置いた。* は語い集に採録したことを示す。

通し番号	文献番号 (「八丈島の文化と文献」における)	書名
1	(1)	八丈島年代記
2	(9)	* 八丈島漂流記
3	(10)	(*) 海島風土記

4	(10)	*	伊豆海島風土記
5	(10)	(*)	沖の小島記
6	(11)	*	伊豆七島志
7	(12)	*	伊豆七島日記（七島日記）
8	(12)	*	巡島日記抄（巡島日記）
9	(12)		八丈島記
10	(13)	*	八丈島筆記
11	(4)	*	八丈島語集（「円翁交語」所收）
12	(18)	*	八丈島流人之咄
13	(19)	*	八丈志
14	(19)	*	八丈誌
15			八丈裁衣織
16		*	八丈島方言（「一話一言」所收）
17	(25)	*	八丈実記
18	(15)	*	八丈島物語（「本多利明異國話」所收）
19	(21)	*	八丈の寝覚草
20		*	八丈四島日記「海島誌」抄
21			八丈島全図謄写
22			Notes of a Visit to Hachijo in 1878. —Dialect
23		*	八丈島方言（保科孝一氏の調査）
24		*	音韻取調書
25		*	口語取調書
26			八丈島方言（島教育会発行）
27		*	八丈ヶ嶋
28		*	八丈島仙郷誌（初版）
29		(*)	八丈島仙郷誌（再版）
30		*	八丈島方言上（田村栄太郎氏の報告）
31		*	八丈島方言の研究（望月誼三氏の研究）
32		*	八丈島方言——中之郷村方言集——
33			八丈島方言（松本茂雄氏の報告）
34			八丈島方言と八丈節（一名ショメ節）
35		*	八丈島に於ける村別方言異同に関する二三の報告
36			八丈島方言集（菊池治可氏の編集）
37		*	海島民俗誌　伊豆諸島篇
38			本州東部の方言（國語科学講座所收）

39		八丈島物語　第1輯（金原田八郎著）
40	*	伊豆七島八丈島動物方言
41		八丈島方言の系統
42		八丈之現勢　上巻
43		八丈島三ッ根村方言集
44	*	趣味の東京府八丈島誌
45		言語島八丈島と黒潮
46	*	伊豆諸島の音韻アクセントところどころ
47		八丈島方言の研究（北條忠雄氏の研究）

1. 八丈島年代記

建武2年（1335）から承應2年（1653）に及ぶ八丈島のもっとも古い記錄。特に言語に関する資料として見るべきものはない。國立國会図書館上野支部にある。詳しくは、「八丈島の文化と文献」（1）を参照。

2. 八丈島漂流記

延享2年（1745）から翌3年（1746）にわたる、土佐の一船頭の漂流記。語いはほとんど見当らない。國立國会図書館上野支部にある（土佐國群書類從卷78）。詳しくは「八丈島の文化と文献」（9）を参照。

3. 海島風土記

天明2年（1782）。約80語の語いが見える。この語いは、「伊豆海島風土記」のそれと同じ。國立國会図書館上野支部にある。詳しくは、「八丈島の文化と文献」（10）を参照。

4. 伊豆海島風土記

天明年間（1781—1788）。「3. 海島風土記」を参照。

5. 沖の小島記

「本州東部の方言」（國語科学講座 VII）によれば次のようである。「美濃版写本3冊 中島嘉春命名の由を表紙裏に自書せり。」語いは、「3. 海島風土記」のそれと同じ。

6. 伊豆七島志

明治34年(1901)刊。「南方海島志」(寛政3年、1791)を補修したもの。特に言語に関係ある記載はない。國立國会図書館上野支部にある。「八丈島の文化と文献」(11)を参照。

7. 伊豆七島日記

昭和4年(1929)刊。文政年間(1824)の版本を「民俗資料叢書第4編」として、「8. 巡島日記抄」とともに刊行。両書とも内容同じ。特に言語に関係ある記載は見られないが、ところどころ文中に語いが見られる。國立國会図書館上野支部にある。「八丈島の文化と文献」(12)を参照。

8. 巡島日記抄

7. を参照。原本は寛政8年(1796)著、文政7年(1824)発行。「七島日記」と内容はほぼ同じ。詳しくは「八丈島の文化と文献」(12)を参照。昭和4年(1929)「民俗資料叢書第4編」として刊行。原本の所在場所は不明。

9. 八丈島記

年代、筆者不明。菊判写本上下2冊合本。内容は七島日記と同一であるが、本書巻末の記載は七島日記にはない。後に加えたものと思われる。國立國会図書館上野支部にある。

10. 八丈島筆記

寛政9年(1797)ごろの島の状況を記す。語い約30語。國立國会図書館上野支部にある。「八丈島の文化と文献」(13)を参照。

11. 八丈島語集

「円翁交語」所收。享和2年(1802)という序がある。約200の語いがある。音を漢字で写し、それに仮名をふるという方法をとっている。八丈島支廳にある。写しは國立国語研究所にもある。詳しくは「八丈島の文化と文献」(4)を参照。

12. 八丈島流人之咄

文化年間（1804—1817）。島の風俗習慣をあげるとともに、少数の語いも見える。國立國会図書館上野支部にある。（「本多利明異國話」のうちに「18. 八丈島物語」とともに收める）。詳しくは「八丈島の文化と文献」(18) を参照。

13. 八丈志

文化8年（1811）ころ。語い63語。國立國会図書館上野支部にある。「八丈島の文化と文献」(19) を参照。

14. 八丈誌

「本州東部の方言」（國語科学講座 VII）によれば、「文化8年 [1811] 大原正矩著　美濃版写本4冊、内閣文庫蔵　島語63語掲載」。まだ見ることができない。「13. 八丈志」と同じ内容かと思われる。

15. 八丈島衣類

「本州東部の方言」（國語科学講座 VII）によれば、「文化8年 [1811] 服部義高著　美濃版写本　表紙共42枚　内閣文庫蔵　島語81語掲載」。まだ見ることができない。

16. 八丈島方言

大田南畝著「一話一言」所收。「八丈島方言俗通志云」として引いてある。語い約210語。現在、「一話一言」は次のように活字となって出ている。

集成館発行50冊本「一話一言」
「新百家説林」中「蜀山人全集」の「一話一言」
「随筆大成」附録「一話一言」
風俗画報伊豆七島図会

この語いは、比較的まとまった、古い八丈島語として注目される。この語いが現在の八丈島にどの程度残っているかを、この報告書の別の箇所（「一話一言」と八丈島語い）で調べてみた。

17. 八丈實記

「八丈島の文化と文献」(25) にきわめて詳しく論じられている。天地・

時刻・人倫・支体・衣服・飲食・家居・器材・動物・言語の10部門に分けて300余の語いが記録されている。原本は東京都廳にある。写しは、八丈支廳、柳田國男氏などのところにある。

18. 八丈島物語

年代不明。語い約80語。「本多利明異國話」のうちに、「12. 八丈島流人之咄」とともに收まる。國立國会図書館上野支部にある。「八丈島の文化と文献」(15) を参照。

19. 八丈嶋寢覺草

語い約80。國立國会図書館上野支部にある。「八丈島の文化と文献」(21) を参照。

20. 八丈四島日記「流島志」抄

原本はまだ見ることができない。抄本（大田栄太郎氏　昭和16年[1941] 筆写）は国立国語研究所にある。筆者年代不明。語い約40語。

21. 八丈島全圖眞寫

筆者、年代不明。八丈島と属島の肉筆採色の絵巻1巻。言語には関係ない。國立國会図書館上野支部にある。

22. Notes of Visit to Hachijo in 1878. — Dialect.

1878年. F. V. Dickens & E. Satow 両氏論文。「日本アジヤ協会会報」第6巻所收。1877年10月27日から1878年6月22日まで両氏が調査、整理したものである。八丈島の言語の特殊性を、本州東部の古い言語の遺存と現在の京都方言との共通性にもとめ、その観点から八丈島の言語の音韻、文法、語いを論じている。はじめに「八丈の寢覺草」所收の女子成年の祝の行事に関する島人の会話を、英訳を附して載せ、この会話に含まれている言語から語い集を作成し、対應する日本語の共通語訳を附し、江戸語、日本古代語、京都方言などに関連を求めている。その後で、形容詞の語尾変化、動詞の否定形、助動詞の否定形、特殊な二・三の助動詞の変化を論じてい

る。そのほか、音韻の変化に簡単にふれ、語いとしては、昔の日本語で現在八丈島に行われている語37、昔の日本語と違っている語5、八丈島にだけ見られる語61をあげている。最後に、日本語源学への暗示として、八丈島の言語と中国語（支那語）との共通性を指摘している。

現在から見ると記述には種種問題もあるが、これだけの実地調査が1878年に行われたことは驚くべきことである。

23. 八丈島方言

明治33年（1900）。保科孝一氏論文。言語学雑誌第1巻第2, 3, 4, 7, 10号所載。掲載ページ65。緒言に八丈島の文化を述べている。本論は声音論、単語論、文章論の3部に分れている。単語論は代名詞、名詞、動詞、助動詞、敬語、接続詞、感動詞、テニヲハに分れ、本論のうちでもっともくわしく論じられている。文章論もふたつに分れ、第1は中村花痩の小説「抓み塩」(1898) の第1, 第7, 第8の1節を八丈島固有語で訳しており、第2は、同島の口碑、おとぎばなし、朝夕の応答を紹介し、共通語による訳を附している。声音も文法も表記は仮名で、5か村の違いにはふれていない。しかし、八丈島の言語の研究としては画期的な論文であることには今日も変りない。

24. 音韻取調書

明治42年（1909）。半紙版稿本。表紙ともに44枚。八丈島教育会編。いま原本は八丈支庁にあるが、写しは国立国語研究所にもある。

「音韻取調書」の成立事情については、東條操氏著「方言と方言学」(初版161ページ以下）に詳しい。

八丈島では、佐佐木眞一、佐佐木清吉、大沢高藏（代表者）、佐佐木郷藏、沖山順作、奥山直一の諸氏が調査員として報告書を作成し、当時の八丈島教育会会長吉川八郎氏を通して提出された。最初に「音韻調査ニ関スル説明」として「本調査ハ本島在来ノ音、即チ教育ナキモノノ発音ヲ標準

トセリ」とあり、さらに「本島ノ如キ小区域内ニ於テ村ニヨリ発音ヲ異ニスルハ主トシテ地勢ニ関係スルモノト思考ス」と説明されている点から、調査方針を推測することができる。表記は假名書きであるが、村の別が記されていることは注目される。記述もかなり正確と思われる。当時の調査としては特筆に値する出來で、今日の研究者にとっても参考になるところがすくなくない。

25. 口語取調書

明治42年（1909）。半紙版稿本。表紙ともに106枚。八丈島教育会編。原本は八丈支廳にあるが、写しは国立国語研究所にもある。「口語取調書」の成立事情については、東條操氏「方言と方言学」（初版 161 ぺ以下）を参照してほしい。「口語取調」の調査者も「24. 音韻取調書」と同一である。最初に「口語法取調」に関する説明として、「本調査ハ本島在来ノ口語法、即チ等ロ教育ナキモノノ口語ヲ標準トセリ」と、ことわってある。表記は假名書き。村の違いは特に記していない。記述はかなり正確で、「音韻取調書」とともに、今日の研究者にも参考になる。

26. 八丈島方言

明治44年（1911）。島教育会雑誌1巻より6巻までに所收。島教育会発行。まだ見ることができない。

27. 八丈ケ嶋

大正3年（1914）。薄想一、青木秀虎共著。國文館発行。菊半截（3ぴ）」276ぺ。洋つづり。概括的に、八丈島の歴史、産業、社会、民謡、流人を紹介したもので、「島の文学」（31ぺ）の項に、語い約70、短文数例が、八丈島のうたとともに假名書きで記されている。これらの語いは特別の基準のもとに体系的に集めたというようなものではなく、八丈島の文学の記述のなかにたまたま島のことばを用いたというにすぎない。

28. 八丈島仙郷誌

大正10年（1921）。大脇繁吉著。大正13年（1924）、小山二郎がこれを補い、大賀郷村大脇商店から発行。四六判216ページ。

八丈島の位置・自然・地理・風俗・島政・教育・交通・産業・寺社・名勝旧跡・流人などについて記し、巻末の附録（22ページ）に、畜産、氣候に関する統計資料をかかげた。言語については、風俗のところに、女子成年の祝の際の島人のあいさつ（75ページ—77ページ）、および語い135を集めてある（82ページ—93ページ）。おもに名詞、動詞、形容詞を語い的な立場から、なんの基準もなくならべてある。假名書きで、村の違いにはふれていない。語い集のあとに、島固有の言語による朝夕、時候、祝の應答を、5例、訳をつけて紹介している。筆者大脇氏は大賀郷村の人。別に特色のある記述はないが、明治以後の文献としては着実なほうであり、大きな誤はないように見える。

29. 八丈島仙郷誌

昭和3年（1928）。大脇繁吉著。渡辺渡補。黒潮会発行。四六判160ページ。大正13年（1924）発行の初版を改訂したもので、内容は同一のところが多いが、記載項目は、八丈島の歴史・地誌・風俗・産業・属島・流人錄のように整理されている。附錄に、「流罪人島抜け日記」、「金右衛門漂流帖」、「八丈島一周道しるべ」を載せ、統計的資料はのぞかれている。初版の資料的價値はいちじるしく減じ、読物風のものになった。

30. 八丈島方言上

昭和3年（1928）。田村栄太郎氏論文。「國語國文の研究」第20号所載。8ページ。序文に、八丈島の言語の従來の研究を批判し、4-5冊の文献をあげている。なお、序文には、「円翁交語」、「音韻取調書」、「口語取調書」から調査すべき語を拾い、実地に調べたとある。上巻で音韻法則をのべ、下巻で文法体系、八丈島の言語の系統を述べるつもりであったらしいが、下巻は発表されていない。語は假名書きであるが、村別の違いを明らかにし、音

韻法則にもとづいて論じてある。内容は、語いと音韻部とに分れ、前者には五十音順に配列された名詞36語、副詞18語がのっている。後者の音韻部は音韻法則別に村の違いを示しながら述べてある。全体としてよくまとまっているが、音韻法則、用例、村別の記入、ともに、「音韻取調書」とほぼ同一と思われるので、ここでは詳しく紹介しない。

31. 八丈島方言の研究

昭和5年（1930）。未刊。望月誼三氏の研究。東京帝國大学國文学科卒業論文。400字づめ原稿紙272枚。前篇と後篇とにわかれている。前篇は八丈島の沿革（41枚）、八丈島方言所載文献（82枚）、椿說弓張月と八丈島方言（22枚）にわかれており、後篇は音韻（3枚）語法（46枚）、語い（78枚）にわかれている。「八丈島方言所載文献」としては、「伊豆海島風土記」など14種の文献についての紹介ならびに批判が試みられている。「椿說弓張月と八丈島方言」は、「椿說弓說月」に見えている八丈島の言語をとりあつかったものである。「音韻」はわずか3枚にすぎず、筆者みずからの言葉どおり未完成である。「語法」は、名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、助詞、接続詞、副詞、感嘆詞にわたって、その大体を、要をつかんで記述してある。語いは「天文」「地理」「人倫」「肢体及び病名」「住宅」「飲食」「服飾」「生業」「人事」「年中行事」などにわたり、「天」、「太陽」など741語について、八丈島固有の語いをあげてある。この論文は、もっぱら言語を扱ったものとして、保科孝一氏の「23. **八丈島方言**」、「24. **音韻取調書**」、「25. **口語取調書**」につぐものである。以前の三つの論文に比べて、いっそう視野が廣いこと、村の違いをはっきり記していることが注目される。われわれも、この論文を参考にすることがすくなくなかった。

32. 八丈島方言　中之郷村言集

昭和6年（1931）。丸尾芳男著。方言誌第1輯。國学院大学方言研究会

発行。謄写刷菊判30ぺ。著者が昭和5年（1930）7、8、9月、八丈島中之郷において、東條操氏の「方言採集手帖」によって忠実に採録したもの。被調査者は大沢数美氏　農（25才）、大沢寛氏　農（23才）、大沢誠氏　蚕（20才）、大沢元四郎氏　農（25才）、福田富一郎氏　農（23才）、大沢文太郎氏　漁（19才）、大沢佐太郎氏　農（50才）、大沢とみ氏　農（49才）、大沢六左右衛門氏　農（18才）、沖山おきう氏　農（50才）、その他。このように、被調査者は年令的にかたよりのないように注意されているが、記述は年令別に行われていない。編集の方法は、東條氏の「方言採集手帖」に従っている。単語集には、約800語が集められ、つぎに60例の短文があがっている。音韻法則、活用変化についてはふれていない。最後に、「方言歌謡」が二、三紹介されている。この研究は、ひとつの村を対象にしたこと、被調査者を多数とっていることが注目されるが、語いだけに限られている。

33. 八丈島方言

昭和6年（1931）。松本茂雄氏。東京都八丈島水産現業所にあるよし。まだ見ることができない。

34. 八丈島方言と八丈節（一名ショメ節）

昭和7年（1932）[初版]。昭和9年（1934）[増訂]。吉田貫三著。大賀郷仙郷堂発行。仮とじ小型パンフレット。16ぺ。最初に、凡例として、共通語による短文7例に対応する島固有の言語を、常体、敬体、最敬体の3種に分けてあげ、本文は「方言」と「語法篇」との2部に分ち、「方言」の方は五十音順に84の語いをならべ、「語法篇」では島固有の言語による短文を、共通語の訳をつけて、12例示している。いずれも村の別を示していない。また、集められた語にも特色がない。最後に、ショメ節をはじめいろいろの民謡を紹介している。なお、ショメ節を紹介したパンフレットには、菊池廣四郎氏（大賀郷）の「八丈節」（大正12年[1923]、著者編集兼発行）

がある。

35. 八丈島に於ける村別方言異同に關する二三の報告

昭和8年（1933）。本山桂川氏論文。國学院雑誌第39巻第2号所載。掲載13ページ。はじめに、島の言語現象の特色について述べている。すなわち、全島を第一区――大賀郷、三ッ根村；第二区――樫立、中之郷村；第三区――末吉村の3区に分け、a音のそれぞれの変化を述べているが、本論では音韻や文法の相異にはまったくふれていない。もっぱら民俗学的な立場から、風位称呼、地形称呼、動植物方言、人倫称呼、住居称呼、服飾称呼、勝手道具名称などの語いを、村別に表をもって示してある。風位称呼の違いの説明がややくわしい。民俗学的に特殊な語いをいくつか含む以外に言語の研究としてはそれほど大きな意義はない。同氏著「7.海島民俗誌」所收の論文も、ほぼ同一の体裁のものである。

36. 八丈島方言集

昭和8年（1933）。菊池治可編。編者のもとにあるよし。まだ見ることができない。

37. 海島民俗誌 伊豆諸島篇

昭和9年（1934）。本山桂川著。一誠社発行。洋とじ四六判220ページ。特に八丈島にふれたところは多くなく、廣く伊豆諸島の服飾、民家、風俗、祭祀を民俗学的立場から述べている。そのほかに、別箇の随筆として「七島流人追想」「八丈島方言抄」「御蔵島採訪記」の3篇を載せている。「八丈島方言抄」（164ページ―182ページ）は、國学院雑誌第39巻第2号所載の著者論文（35）とほぼ同一である。なお」「椿説弓張月」「伊豆海島風土記」に見える語いを紹介したり、助動詞の活用を記述してあるほか、島固有の言語による二、三の会話の例をあげている点は、前掲論文にはなかった点である。助動詞の活用は参考になりうる点もある。村別の違いにはふれていない。

38. 本州東部の方言

昭和9年（1934）。橋正一、東條操両氏共著。國語科学講座 VII。八丈島については、後篇　関東方言　第2章　伊豆諸島方言　のなかに記述されている。これは、安田秀文氏の報告を主要な材料として、東條操氏によってまとめられたものである。「伊豆諸島方言」約16ページ（42ページ—55ページ）のうち大部分が八丈島の言語についての記述である。音韻については、さらに、村によって直音（大賀郷、三根、末吉）と拗音（樫立、中之郷）とが使い分けられることを指摘している。文法については、動詞の活用に特色のあることを注目し、動詞の種類は活用形の種類から言って12種類認められると述べている。記述は、簡単ではあるが、従来のすべての研究に比べていちじるしく進んでいる。八丈島の言語の研究としては現在もっともすぐれたもののひとつであり、われわれも調査にあたってたえず参考とした。なお、この論文に見える八丈島の文献書目も、われわれの調査の準備にあたって大いに役立った。

39. 八丈島物語　第1輯

昭和9年（1934）。金原田八郎著、安田次郎編。発行所不明。菊判パンフレット。八丈島の言語・文化にはまったく関係ない。わずかに源為朝の古事を述べてあるが、「八丈島物語」の書名のゆえんは明らかでない。全5輯（しゅう）のうち第1輯のほかは見ることができない。もちろん、「本多利明異國話」所收の「八丈島物語」とはなんの関係もない。

40. 伊豆七島八丈島動物方言

昭和9年（1934）。粟山徳太郎編。粟山鳥学研究所発行。菊判洋仮とじ24ページ。八丈島に住んでいる動物のなまえを島固有の語で示したもの。分類は動物学の分類法によっている。採集された動物名は非常に多く、ごく特殊なものまでを含んでいて興味ある方言集であるが、島の人でさえ知らないものが多いと思われる。採集は大賀郷、三根村で行われたが村の違いは示されていない。

41. 八丈島方言の系統

昭和11年（1936）。橘正一著「方言学概論」四六判洋とじ411ページ（148ページ—164ページ）所收。丸尾芳男「32. 八丈島方言」、本山桂川「35. 八丈島に於ける村別方言異同に關する二、三の報告」を主な材料とし、「八丈島方言俗通志」（大田南畝「一話一言」所收）を參考としながら、日本の各地の言語と比較して、八丈島の言語の系統について述べた。すなわち、八丈島固有の言語のうち、イサナ（東南風）、ナライ（北風）など72語の語いをとりあげ、それらの語が日本のどのような地域に用いられているかを調べた。その結果として、地方としては東北地方が、縣としては岩手縣と靜岡縣とが、もっとも近いということになった。關東地方について見ると「關東の海岸部の方言とは共通性が多いが、東京や山間部の方言とは似ても似つかぬものである」という結果になっている。そこで、八丈島方言は「黒潮方言」とも名づくべきものであるが、黒潮の流れる關東、東海道の海岸とともに「黒潮方言区」を設けることは適当と考えられない。結局、「八丈島方言」は孤立したものと言う外はない、と結論を出している。さらに「八丈島方言」は鎌倉・室町時代の伊豆・相模地方の方言を傳えたものであろうが、伊豆、相模、八丈島はそれぞれここ數百年のうちに大変化をとげたために、相異性の方が多くなったのだとも述べている。方言の系統を論ずる際に、語いだけにたよることはどうであろうか。さらに、その語いのえらび方はもっと嚴密におこなわなければならないのではないか。しかし、系統論のひとつの試みとしては意義がある。なお、この論文は、「國語教育」（昭和11年1月）に発表したものを、のち「方言学概論」に收めたものである。

42. 八丈之現勢　上巻

昭和11年（1936）。國井末吉編。八丈島文化協会（大賀郷村）発行。菊判102ページ。八丈島の簡單な概括書。島の産業、經済については当時の統計

的資料が多くかかげられ、巻末に大賀郷村の畜産、公共施設の歴史、黄八丈についてやゝ詳しい解説がある。言語についてはわずかに2ぺ、短かいあいさつ文4例のほか、語い54語が集められている。語いの多くは動詞、形容詞、名詞である。動詞は同じひとつの語について二、三の活用形を併記していて、文法についての参考になりうるが、あまりにも例がすくない。著者は三根村の人。下巻はまだ見ることができない。

43. 八丈島三ツ根方言集 (附)方言歌謡

昭和11年(1926)。宮本馨太郎著。土俗趣味社発行。趣味叢書第22篇。A5判12ぺ。著者が昭和6年(1921) 7, 8月、三根村に滞在し、「服飾の調査と服物の採集」にもっぱら当っていた際に、書きとめた語いを集めたものである。方言採集が目的ではないので、語いは、主に特殊な民俗語いであって、その数200余にのぼる。假名書きであるが、正確に記述され、説明も要領をえている。最後に附録として、共通語に改作されない前のシヨメ節を6例紹介し、注釈をつけている。

44. 趣味つ東京府八丈島誌

昭和12年(1927)。永久保満著。南日本新聞社発行。菊判138ぺ。八丈島の地誌、歴史、黄八丈、流人、傳説、言葉、風習、民謡、属島、出身名士などについて記述している。昔の記録を引用しながら良心的に編集されており、八丈島の歴史、民俗を調べるのに適当な参考書である。黄八丈の八丈島発展における意義、流人の文化的役割、移民など詳しく、風習についてもあまり主観をいれることなく忠実に記録されている。「八丈島史概要」のなかの八丈島史年表は便利である。言語についてはあまりくわしくふれていない。(掲載4ぺ)。なるべく昔の八丈島語を紹介するよう努めている。「八丈島寐覚草」から例の女子成年の祝の島人の会話ほか数例、現在では理解しえない短文数例を引用し、訳をつけ、そのあとに、特徴のある語い、あいさつの言葉、動植物名、音韻轉化などに分類しながら150ほ

どの語いを集めている。

45. 言語島八丈島と黒潮

昭和16年（1941）。平山輝男氏論文。「コトバ」第3巻第4号（51ページ—54ページ）、國語文化研究所発行。系統不明の八丈島の言語の研究は、島の歴史と環境、とくに黒潮による漂流の歴史を考慮にいれなければならない点を強調し、アクセントについては、実地調査を行った結果からつぎのような事実を認めている。(1) 八丈島の言語は、まったくの一型アクセントで、あいまいアクセントのおもかげすらない。その点で、他の伊豆諸島と区別され、黒潮がその境界線となっている。(2) 尾高氣味の一型である（三根村の数語例をあげている）。(3) 属島の小島、青が島、鳥島も一型アクセントである。(4) 小笠原諸島の父島、母島も、同島の出身者によれば、一型アクセントである。八丈島の言語のアクセントについてはじめてふれた点で注目すべきものである。

46. 伊豆諸島の音韻アクセントところどころ

昭和8年（1943）。金田一春彦氏論文。「方言研究」第8輯掲載19ページ(47ページ—65ページ)。おもに、大島、新島本村、神津島、三宅島、三宅島伊豆村の音韻とアクセントをあつかい、八丈島のそれにもふれている（4ページ)。八丈島の音韻とアクセントとは、昭和15年（1940）10月、青山師範で八丈島出身の生徒4名（三根村2名、樫立村2名）について観察したもので、東條操氏の「簡約方言手帖」（音韻篇）にある語例について観察した発音を假名書きで表記したものである。

47. 八丈島方言の研究

昭和23年（1948)。北條忠雄氏論文。「日本の言葉」第2巻第1，2号。B5判。掲載12ページ。この論文は「八丈島方言」を「上代性の遺存」という観点から観察したものである。東條操氏、保科孝一氏らの研究をもとにして、万葉東歌防人歌などを「八丈島方言」と比較している。

III. 語い集

§1. 語い集について

ここにあげた約4700の語いは、八丈島に関する各種の文献に記載されている八丈島の語いであり、われわれの調査の準備の段階において、それぞれの文献ごとにカードにとったものを整理し、五十音順に並べたものである。

この報告書の「文献目録」(附録2, II)の項に述べた文献のうちで、われわれが直接に見ることができた、ほとんどすべての文献にわたって集めたものである(別項「文献目録」[附録2, II]参照)。これらの文献のうちで、「17.八丈實記」および「2.八丈島日記『海島誌抄』」は原本が見られず、國立國語研究所蔵(大田栄太郎氏旧蔵)の写本によってカードをとったが、この写本にはかなりの誤写のあるらしいことを注意しなければならない。

この語い集は、それぞれの語いについて、その形、意味および村による使い分けを示し、かつ、それぞれの文献における、それらの記載の異同を明らかにして、八丈島の言語の歴史的研究ならびに今後の調査のための資料として使いうるようにとの意図のもとに作成したものである。

§2. 語い集を見る上の注意

(1) 語いはその形(字面)によって五十音順に並べてある。原則として「濁音の字」は「清音の字」のすぐ次に、「つまる音の字」(ッ)はツと同じと見なし、「はねる音の字」(ン)はヌの次に並べた。なお、「長音の字」(ー)のあるなしは配列順序に関しては無視した。

(2) 算用数字によって示したのは文献の番号である。別項「文献目録」に記してある番号を参照。

（3） 見出し語はすべてカタカナ書きとした。ひらがな書きのものは文献番号のあとに（ひ）と注記し、漢字あるいは特別の表記を用いているものは（ ）の中にその形を示した。

（4） 同じ形で、ほとんど同じ意味の語いが二つ以上の文献に載っているときは、代表的な意味をあげ、それぞれの文献による違いは文献番号のあとの［ ］の中に記した。

（5） 村による使い分けのあるものは、文献番号のあとの＜ ＞の中に、O（大賀郷）、M（三根）、K（椛立）、N（中之郷）、S（末吉）、U（宇津木）、T（鳥打）、A（青が島）の略字によって示した。

（6） 漢字で記載されている語いで、判読の不可能なものは、一括して最後にあげた。

ア

アー　アー大変ダ「アー大変ダ」25
アイ　中より下へ（の挨拶）12(ひ)　アーイ　アーイデャーチソァー「アア綺麗ダ」25
アイケイノヘイ　不存寄　37
アイス　メジナの一種　40<全>
アイタ　あした草　19(ひ)
アイタバ　あした草の葉　19(ひ)
アイチヤ　むかしの女の名　17
アイツ　他人　25
アイノキシバ　紫陽花　31(アイノキシバ)
アウ　上立候人への挨拶　12(ひ)
アウェー　青い24<O. M. K. N. S>
アオ　アヲムロアジ　40<全>
アオガシマベッツォ　やんま　31
アオサギ　アヲサギ　40<O, M>
アオゼ　チビキの一種<全>,ブダヒ<M>40
アオトビ　トビウヲの一種　40
アオヒフキダケ　アヲヤガラ　40<O,M>
アオボンシ　コシアキトンボ　40<O>
アオミズザメ　アヲザメ　40<M>
アオムロ　アヲムロアジ　40<全>
アカ　垢　31
アガ　自分　25,27 吾が　己れ
アカイノ　草の名　5
アカイノキ　山中所々ニアリ、木性梧ニ似テ和也、鳴人梶筍ノ類ニ造ル　5
アカウオ　形かさごに似て色紅なり　8（あか魚）
アカエー　アカエヒ　40<全>
アカガメ　アカウミガメ　40<全>
アカジキー　さつまいも　32<N>
アカズモリ　アカズモリ、アカベラ40<O>
アカゼ　オタカムロ　40<O, M>
アカゼムロ　オタカムロ　40<M>
アカチチ　赤土、粘らぬ土　31
アカチャッチャ　駒鳥　40<O>
アカドロ　キンメダヒの稚魚？　40<全>
アカバ　アカハタ<O, M>, アカメバル<O, M>, カサゴ<O, M>, アコウ<全>　40
アカハラ　ハチジヤウコツコ(鳥)　40<O其の他>
アカビ　欠伸(あくび)　24<K>27, 30<K>, 31(アカビ)<K>,　44
アカヒフキダケ　アカヤガラ　40<O,M>
アカブリ　オキブリ　40
アカベーシ　赭色小形の蜻　40<O>
アカベッツオ　赤蜻蛉　31(アカベッツオ)
アカヘビ　蝮　40<全>
アカマス　ヒメダヒ　40<M>
アカミノキ　モッコク　5
アカムツ　チビキの一種　40<M>
アカムロ　オタカムロ<M>, アカムツ<全>40
アカメ　南京蟲　31(アカメ)
アカメシ　小豆飯　31(アカメシ)
アカメダマ　ベニメバル、ヨロヒダヒ　40<M>
アカメメズ　ミミズの一種　40
アカボン(シ)　アカトンボ類　40<O, M?>
アカヤシ　ヒラゴイワシ　40<O>
アカヨ　アカメバル　40<O, M?>
アカヨー　アカハタ<O, M>, カサゴ<O, M>, アコウ<全>, バラメヌケ　40
アガリヤッタカ　「今晩ハ」（食事ヲスマシタカノ意）　25

アキタ （過去） 25〈飽キタ〉
アキタラバ （假定） 25〈飽キタラバ〉
アキナミ 厄浪、秋 31
アキャー 赤い 24〈O, K, N〉
アキルダロー （推量） 25〈飽キルダロー〉
アキンド 商家 31
アク 灰（アヅ） 24〈O, M, K, N, S〉
アグ 顎 31〈S〉
アケー 赤い 24〈M, S〉
アケガタ 曉 31
アケシハ 冬青（木ノ名） 5
アケロヒ 翌日 31〈アケロヒ〉, 32〈K〉
アコ 灰汁（アヅ） 30
アコウゾリ 赤牛、牡 31〈M〉
アコウバメ 赤牛、牝 31〈M〉
アコビ 欠伸 24〈O, M, N, S〉, 30, 31〈U〉
アーゴメ 粟 31〈S〉
アサ 朝 31〈アサ〉
アサケ 朝飯を云 伊勢國下官と云も昔は館官と云 かれいを呈する所なり 11〈ひ、朝膳〉、17〈ひ〉〔朝餉、朝飯〕 31〈アサケ〉〔朝食〕, 32〈ひ〉朝餉、朝食〕〈N〉, 44〈ひ〉〔朝餉、朝食〕
アサゲ 朝食 13
アサチイ 朝露 32〈N〉
アサチャガシ 午前間食 31（アサチャガシ、アサチャガシ）〔午前十時頃間食、午前十時頃〈M〉〕、32〈アサチヤガシ〉〈N〉
アサッテ 明後日 31, 32〈アサッテ〉〈N〉
アサナギ 朝風 31
アサネ 暗礁 31, 35〈M, S〉
アサヒル 四つ時比の事 12
アサビル 午前十時頃 18〔朝四ツ時な〕, 31〈M〉, 32〈アサビル（ゴロ）〉〈N〉
アサモノ 朝飯 18〈朝物〉
アシ 足 31〈アシ〉
アーシ ソグヮンダーコトガアルィーシ「ソンナコトガアルモノカ」 25
アシケコトタリ わるひことだと云事なり 11〈ひ、惡事等〉
アシケコトニ わるいこと 17〈ひ〉
アーシケマアー アーシケマアー人シクオヂャリーテャータ「ドーモマアシバラクデシタ」 25
アシー 兄 32〈アシー（ドノ）〉〈N〉, 35〈S〉
アシードノ 兄 37〈N, S〉
アシタ 藺草、八丈嶋ノ民多ク植テ朝夕ノ餉ニ充ツ 37〈アシタ又アイタ〉
アシタグサ 八丈島人の常食にする草、凡そ十人の食に麥三合許りを煮たゝらかし、あした草をしたゝか入れうしぞ又はあんばいを入れて食う、之をざうすいと云 8〈あした草〉
アシタバ 八丈草という、野生の多年生植物、伊豆諸島に於ける救荒食物として貴重なもの 37〈あした葉〉
アシド 足駄 23〈O, M〉, 35
アシドァ 足駄 23〈K, N〉, 32〈アシドァ〉, 35〈アシドァ〉〈K, N〉
アシナカ 足半草履 31〈アシナカ〉, 32〈N〉
アシナカ 海老の一種 31, 40〈アシナカ（エビ）〉〔ウチワエビ〕〈全〉
アシナカエビ セミエビ 40〈全〉
アジ マアジ 40〈O, M〉
アジ 蜘蛛の巢 32〈アジ〉〈N〉

アシァーテシテアロワ　死ヌァーシャーテシテアロワ「死ノートシテイル」25
アジエ・畦　32(アジエ)〈N〉
アショアテシテアロワ　死ヌアショアテシテアロワ「死ノートシテイル」25
アス　明日　31
アスク　場所を指す語　25
アスッデ　遊んで　24〈O, M, K, N, S〉
アスナラウ　仙伯(イスコキ)　一名羅漢樹　5
アスナロー　あすならふ　31(アスナロー)
アスノエイヨウ　明晩　31〈M〉
アスノエーヨー　明晩　31〈O〉
アスノユル　明晩　31〈O, K〉
アスノヨッペ　明晩　31
アスビヤル　「オ遊ビニナル」　25
アスブ　遊ぶ　24〈O, M, K, N, S〉
アセー　兄　31(アセー)〈M, K, N, S〉
アーセ　裕衣　31〈S〉
アセイ　兄　6(ひ)、11(ひ、悪、姓(ワクセイタ))[兄の事を称して云ふことばなり]、12(ひ)、16, 17(ひ)[兄、又人を敬ふても阿兄(アセイ)と言ふ]、18(ひ)、30(ひ)、31(誰アセイ)[夫]、44(ひ)
アセイトノ　他人の男子を称して云　1(ひ、安盛殿)
アセイドノ　兄　28(ひ)35〈K〉, 37〈K〉
アセードノ　兄　31[兄、夫、対称]、35〈O〉, 37〈O, M〉
アセードメ　兄　35〈M〉
アセヘ　兄　19(ひ)
アソッデ　遊んで　27
アダケチナ　あやしきうきめにおふを云　11(ひ、仇怪知那)
アダニシタラ　どうしやう　17(ひ)
アヂ　蜘蛛の巣　31〈M〉
アチー　暑い　24〈O, M, K, N, S〉
アヂオカケル　蜘蛛、巣を張る　31
アヂクリ　蜘蛛の巣　31〈K〉
アツカヒ　あぐらかく事　16
アッカホァラ　あかはら　31
アッカリ　あかぎれ　32(アッカリ)〈N〉
アツキ　あづき　31(アッキ)
アヅキ　あづき　31(アヅキ)
アツキメシ　小豆飯　31
アツケー　踵　31(アッケー)、32(アッケー)〈N〉
アツケイ　踵　28(ひ)、44
アッコウシ　赤牛　31(アッコウシ)
アツサイシバ　紫陽花也　5
アツタ　居ツタ「居タ」(過去)　25
アッチ　場所を指す語、方向を指す語　25
アッチョシバ　紫陽花　31(アッチョシバ)
アッチョーシバ　紫陽花(葉は壁紙として使用される)28(アッチョーシバ)、32(アッチョーシバ)〈N〉
アッツイシバ　紫陽花　31
アッデ　何故(独立詞的)　32(アッデ)〈N〉
アッデモ　ホントーニアッデモシサシーコトデオヂャッタ「誠ニドーモ皆ケデゴザイマス」　25
アッデカ　いかゞ　19(ひ)、23[何での]〈O, M〉
アツト　上　31(アット)〈S〉
アツハ　五女　10[女]、12(ひ)[女のふたり目]、13, 16[六女の事]
アッパ　五女　6(ひ)、17(ひ)[幼女の惣

名]、28(ひ)、31[乳兒]、(アッパ)[嬰兒]、(アッパ(メ))[子供、特に女子の称]、32[五男](N)、35[老人に多い](N)、37(M, N)、44

アツパメ　乳兒　35(O, M, N)、37(アッパメ)(O, M)

アツブン　いかにも　19

アツベル　集める　24(O, M, K, N, S)、27

アツリヤール　誂へる　32 (アツリヤール)(N)

アテコーラ　謎　32(N)

アトツギ　嫡子　35(K)

アトデ　後刻　32(N)

アトトリ　嫡子　31, 35(O, M, K, S)

アナ　洞穴　31, 35[洞](K)

アナウック　ミノカサゴ　40(O, M)

アナゴ　アナゴ　40(O, M)

アナシタ　蹴(アシノウラ)　17(ひ)

アナタ　相手　25

アニ　指示代名詞(不定称)事物について云ふ　23(ひ)、44(ひ)[いゝえ]

アニガ　いゝえ　28(ひ)、44(ひ)

アニサン　兄　44(ひ)

アニセイデソカアニスルヤ　なぜそふするのだと云所に用ゆ　11(ひ、爲レ豈爲二其何一乎)

アニセイデワレニカアイワザルヤ　なぜ我に其のことをいわっしゃらぬと云言葉なり　11(ひ、爲レ豈而于レ我不二彼レ云一乎)

アニツキニカ　なにゝよりてかと云言葉なり　11(ひ、豈就乎)

アニードノ　姉、敬称　31(S), 35(S), 37

アニノオスナル　なにのいわしゃる云言葉なり　11(ひ、豈乎爲レ云)

アニヨウ　なによう　19(ひ)

アニョカ　なにか　19(ひ)

アニンカモ　なにかまふものか　32 (アニンカモ)(N)

アニンガモ　干渉(カンセウ)するな　27

アネ　畦道　31(アネ、アネ)、32[畦](N)

アネー　姉　31(アネー) 32(N), 35

アネイ　姉　11(ひ、安寝伊(ヤスンスルネヤノヒト))[これより年寄の婦人をさして称すことば]、16, 17(ひ)

アネイドノ　姉　6(ひ)[奥サマ]、17(ひ)[大家の女房]、28(ひ)、44(ひ)

アネエドノ　姉　35(K)、37(アネェドノ)(M, K)

アネードノ　姉　31[姉、丁寧の称、妹妻(O)]、37(M)

アネヘ　姉　19(ひ)

アネヘドノ　大家の女房たもいう　19(ひ)

アノヲトコノウターテヤラバトテモキカレタモンデヤナツキヤ　あの男の頓(とて)と來たら迚も聞かれたものぢやない　27 (あの男のウターテヤラバトテキカレタモンヂヤナツキヤ)

アバタ　痘痕　31

アビ　盆子(オチコ)　5, 32[いちご](N)

アブキ　あしなかおび、とこぶし多し、うしほにて煮て食とす　8(ひ)、13[國地では　トコブシという貝という　貝の如きもの]

アブキ　とこぶし　5[貝名(小鮑(コアワビ))]、16小鮑と唱へ候　とこぶしの事]、30[鮑]、31(アブキ)、32[鮑](N)、40(O, M)

アブメ　虻　31，40[ウシアブ(他のアブと区別す)]〈O〉
アブラムシ　油蟲　31
アブラヨー　メジナの類？　40〈M〉
アマ　天井　6(ひ)，17(ひ)，19(ひ)，31[天床裏]，32(ひ)〈N〉
アマスガー　銀河　31〈S〉
アマド　雨戸　31(アマド)
アマノゴア　銀河　32(アマノゴア)
アマノヒト　鼠　40〈全〉
アマバシ　はしご　6(ひ)，17(ひ)，19(ひ)，31[梯子，家の中で多く用ひる]
アマミメ　チャバネゴキブリ　40〈O〉
アマヤスゴワ　銀河　31(アマヤスゴワ)〈K〉
アミサ　メジナ(稍長じたるもの)，ソラスズメダヒ？〈O〉　40
アミヤーゴスル　甘える　32(アミヤーゴスル)〈N〉
アメイデ　斑牛，赤，白，黒の混つた赤の多い牛　31〈M〉
アメガタ　カハグモ　40〈O〉
アメザトー　飴　31(アメザトー)
アメニヘイシタル　あめしづく出るほどぬれたと云事　11(ひ，雨龍滝)
アラ　自分　25
アラギトァオケ　洗桶　31〈N〉
アラシ　風，凪をあげるに好い位の風　31〈X〉
アラバ　(假定)　25(居ラバ)
アララバ　(假定)　25(居ララバ)
アリ　蟻　31(アリ(メ))，35〈O〉
アリータス　善クアリータス「善クアリマス」，悪クアリータス「悪クアリマス」，廣クアリータス「廣クアリマス」，酸クアリータス「酸クアリマス」，涼シクアリータス「涼シクアリマス」，黄イロクアリータス「黄イロクアリマス」，オッカナクアリータス「恐シクアリマス」ネツコクアリータス「小サクアリマス」，靜デアリータス「靜デアリマス」，ヤデアリータス「イヤデアリマス」，僅カデアリータス「僅カデアリマス」，樂デアリータス「樂デアリマス」，綺麗デアリータス「綺麗デアリマス」，四角デアリータス「四角デアリマス」，氣ノ毒デアリータス「氣ノ毒デアリマス」，ソゲワンデアリータス「ソンナデアリマス」「ソノヨーデアリマス」，ウゲワンデアリータス「アンナデアリマス」「アノヨーデアリマス」，ドゲワンデアリータス「ドンナデアリマス」「ドノヨーデアリマス」　25
アリメ　蟻　35〈K〉
アリャ　自分　25
アリンナカ　イヤーシナイ　25
アルダロー　(推量)　25(居ルダロー)
アレ　ココンアレ「ココニ居ロ」，「ココニ居レ」　25
アレ　自分，物を指す語　25
アレンシヤー　物を指す語　25
アロ　ソゲワンコトガアロモンドァート大変ダラ「ソンナコトガアローモンナラ大変ダ」(未來)　25
アロー　(未來)　25(居ロー)
アワタナライ　艮の風　17(ひ)
アワダチ　干潮　31，35〈N〉
アヰラシキヤア　あいそもないと云事12
アンケノヘイ　思ひよらぬ事　18(アンケのヘイ)

アンゲノベイ　ばからしひと云ことなり　11(ひ，按戯之倍)
アンコ　女の子　30
アンコウ　アンコウ　40
アンシー　(何しに)何故　32(アンシー)〈N〉
アンジタ　(過去)　25(案ジタ)
アンジバ　(假定)　25(案シバ)
アンジルダロー　(推量)　25(案ジルダロー)
アンセイ　ハヤク　19(ひ)
アンダ　何んだ　24〈O, M, K, N, S〉
アンタンモカンタンモ　どうも手におへませぬ　18
アンチヤン　兄　32(アンチヤン)〈N〉, 35(アンチャン)〈M, K〉
アンド　姉　32, 35〈K, S〉, 37, 44
アンドァー　ウラアンドァー「アレハ何ダイ」　25
アンドフ　ばかになつて口をあいてつられる形容なり　11(ひ，鹹鰊)
アンニヨウテモ　何にも云へぬといふ事　18
アンネ　姉　28(ひ), 31(ひ)〈M〉, 44
アンノゲザリニ　なんの故に左樣に仰せあるぞ　そふではないと云言葉なり　11(ひ，豈之解于ニ左理ニ)
アンマリ　あんまりと云　11(餘)
アンヤイヤイ　アンヤイヤイデャーヂソァー「アラマア綺麗ナコト」　25

イ

イイ　飯　17(ひ), 19(ひ)
イイモヨリ　晴天　31〈K〉
イウダロー　(推量)　25(云ウダロー)
イェノアマ　天床裏　31〈M〉
イェリ　襟　31
イェンドー　えんどー　31
イカ(メ)　アヲリイカ〈全〉，イカ類総称　40
イカメ　いか　31
イキゴケ　寡婦　31
イキャシンナカ　「イキャーシナイ」　25
イクテンチノモフレイカミ　怪敷事にあふて大にまよひし時悪口と云　11(ひ，何天地盲靈神)
イクボ　えくぼ　31〈M, K, N〉
イクマ　八丈島其他ニ產ス　根水仙ノ如シ　凶年ニハ水飛シテ糧トス　漢名未詳　5(ひ)[草の名]，6(ひ)
イケ　用水池　31(イケ)
イゲ　湯氣　24〈O, M, K, N, S〉, 30
イゲーモ　菱芋　24, 〈O, M, K, N, S〉, 30
イケンナカ　イケヤーシナイ　25
イゴク　動く　24〈O, M, K, N, S〉, 30
イコボ　えくぼ　31〈O〉
イゴロ　斛　31, 32〈N〉
イゴロー　斛　31
イシガニ　マンジュウガニ類　40〈O〉
イシガリ　クモンマンジュウガニ，マンジュウガニ　40〈M〉
イシガンモン　ミノカサゴ　40〈M〉
イシゴツコ　鶺鴒　37〈S〉
イシヤシヤルラ　ちょとといふ事を　18
イスホウツキ　土ホウツキ同性ト見エ形小シ　5
イズミ　用水池　31(イズミ)
イセコウ　(十一月)廿日ニハ村々思ヒ思ヒニ連中アリテ伊勢參宮ノ代參酒盛

リ賑ヤカ也コレヲ伊勢講ト云フ 17(伊勢講)

イセマイリ 参宮 31(イセマイリ)

イソ 釣 31(イソ)

イソカゴ 魚籠 31

イソカシャギメ ヒメデ類 40 〈U, T〉

イソギンチャクヤドカリ ヤドカリの一種?(イソギンチヤクに着生) 40

イソグミ 胡頽子 5

イソクルミ 無花果(イチヂク)ノ小キモノ 5(磯(イソ)クルミ)

イソゴキ(メ) イソヒヨドリ 40〈N〉

イソゴッコ 鶺鴒 35〈S〉, 40[イソヒヨドリ]〈O, M, K〉

イソザル 貝名(色味トモニイラカヂニ等シキ貝也) 5, 40[ウニの一種]〈O〉

イソッツル 魚名 40〈O〉

イソネズミ キタマクラ 40〈O〉

イソノオ 釣糸 31〈O〉

イソマグロ イソマグロ 40

イソマメ 渡辺ニ生ス, 豆形蚕豆ニ似テ粒丸シ 5

イソヤドカリ イソヤドカリ 40

イタドリ すいば 31(イタ下リ)

イタリ 遊びに行先の家を指して云ふ 16, 30[廻り宿のこと]〈K〉

イタリコ 寝宿に泊るもの 31(イタリコ)

イタリヤド 寝宿(古) 31(イタリヤ下)

イチゴウ 米麦とも一合といへば弐合五勺の由 12(一合)

イチダイヒクッン 其身一代の召仕を云, 又卑官とも書すべし 11(ひ, 一代卑僮(クン))

イチヂク 無花果 31(イチヂク)

イチニチビ 元旦, 時に一日の意もある 16[元日の事(正月祝ことば)] 30

イチビ 木芙蓉也 5

イチンチ 終日 31(イチンチ)

イッシェツ 一切 32(イッシェツ)〈N〉

イッショウ 米麦とも一升といふは弐升五合のこと 12(一升)

イッソノコト いつそ 32(イッソノコト)〈N〉

イッタ (過去) 25(射ッタ)(云ッタ)

イッタラ 吉田トイッタラコノ頃ワチツトモキンナカ「吉田トイエバコノ頃ハチツトモ来ナイネ」 25

イツチヤ 俗ニエゴト云木也, 実ヲ絞レハ油タル又此実ヲ以テ小鳥ヲ飼事アリ 5

イツトキマチロ しばし 17(ひ)

イヅノキ 楪(ユヅリ)ナリ 5

イツブキ 一足 24〈O, M, K, N, S〉

イデミ まて 17(ひ)

イテミヒ どれみせろと云事 16

イデン とれといふ事 16

イト 糸 10[尻], 31(イト)

イトウリ 糸瓜 31

イトキリヌカバ 犬歯 31(イトキリヌカバ)

イトコ 従弟 17(ひ), 31(ひ)

イトヒキ 正月他火ヱ出ルヲバ糸引ニ出ルトイフ 11(ひ, 糸引)[正月経水の婦人を形容の詞], 16[女経水の事(正月祝ことば)]17, 30[月経]

イトヨリ イトヨリダヒ 40〈M〉

イナサ 東南風 15〈N〉, 31〈K〉, 32, 35〈O, M, N, S〉, 37〈O, M, S〉

イナツコチ　東風　17(ひ)
イナヅマ　雷　31(イナヅマ)
イヌメ　犬　32,35,37,40〈全〉
イネコギ　稲扱　24〈O,M,K,N,S〉,30,31(イネコギ)
イネツミ　煩ふ事(正月祝ことば)　16
イネラ　ゆり　31(イネラ)[赤百合],32〈N〉
イノーサメ　刈止祝　31
イビ　指　11,24〈O,M,K,N,S〉,30,31
イヒダマ　指環　31
イビワ　指環　31(イビワ)
イブクロ　胃臓　31
イブリ　煙　32〈N〉
イヘー　位牌　31
イマ　茶の間(居間)　31(イマ)
イマキ　女衾　35〈K〉
イミアケ　忌明　31(イミアケ)
イムシメ　すいっちよ　31
イモ　里芋　31
イモバムシ　芋蟲　31
イヤー　吉田トイヤーコノ頃ワチツトモキンナカ「吉田トイヘバコノ頃ハチツトモ來ナイネ」　25
イヤーサツ　挨拶　音韻轉訛アイ　32(イヤーサツ)〈N〉
イヨ　魚(うを)　32(イヨ)
イヨー　硫黄　32(イヨー)〈N〉
イライ　左縒なら　30
イラカジ　雲丹　32〈N〉
イラカネ　貝名　15(イラカヂ)
イララバ　(假定)　25(射ララバ)
イリ　入江　32〈N〉
イリナベ　ひどりなべ　19(ひ)
イリムコ　入夫　31
イリヤーニ　君ガウダウンドアーコトーヨーイリヤーニ先方モヒドク困ッテシモアッテーヤ,「君ガアンナコトヲイフモノダカラシテ先方モヒドク困ッテシマッタッテサ」　25
イルダロー　(推量)　25(射ルダロー)
イロ　コケー座ロ「ココヘオ座リ」　25
イロ　喪服　35〈O,K,N,S〉
イロイロ　色々　37
イロー　(未來)　25(射ロー)
イロウ　人にからかふ事　16
イロオキル　忌中又は忌中に着る服　30
イロフナ　いもるた　17(ひ)
イロリ　本朝の爐のことたり　11(圖爐裏)
イロヲキル　忌なる間ごみをはなさず着用す　古利の明なり　11(着異絹)
イワラバ　(假定)　25(云ワラバ)
インヂル　陰水　31(インヂル)
インドー　煙草入,男子のもの　31〈K〉
インナ　兄　31(インナ)[母,自称]〈S〉,33(インナ)〈S〉
インネ　姉　15(ひ),28(ひ),31(ひ)〈M,S〉,31(インネ)[兄]〈S〉,32(インネ)〈N〉,35(ひ)〈O,N,S〉,37(ひ)〈O,M,N,S〉,44(ひ)
インネー　姉　35〈M〉
インネヘ　姉　19(ひ)

ウ

ウァー　粟　31〈K,N〉
ウイツ　他人　24[あいつ]〈O,M,K,N,S〉,25
ウイデ　娘ノ子始テ月役ニナルヲウイ出

トイヽ，親類并ニ懇意ノ方ヨリ見舞トシテ稻一束(玄米三升五合ナリ)或米麥粟ノ類ヲハタゴニテ一盃(二合、五合)又ハ蔬ヲ進物ニツカワス也親元ニテハ祝ノ餅ヲ搗　又濁酒ヲ造ル也　17(ウイ出)

ウエカゼ　南風　シタカゼと共に用ふ　31<K>

ウエタ　(過去)　25(植エタ)

ウエタラバ　(假定)　25(植エタラバ)

ウェーニャ　買ウェーニャ「買エナイ」　25

ウェーヘー　いや(感動詞)　23

ウェル　随分ウマククウェル「随分ウマク食エル」　25

ウエルダロー　(推量)　25(植エルダロー)

ウエロー　(未來)　25(植エロー)

ウオア　粟　31<O>32(ウオア)<N>

ウガアニ　先をさして云ふ事　16

ウガアタ　むこうの方　19(ひ)

ウガイ　ウミウ(鳥)　40<N>

ウガタ　方向を指す語　25,11(ひ,右方)[あなたと云事]

ウカタコガタ　あなたこなた　5

ウガタコガタ　アナタコナタ　6(ひ)

ウガタロガタ　あなたこなた　4

ウカタエツイテハミシャトウシイ　道の行衛なとを尋るをゝ　足其方へ往けば　道が危いと云事なり　4

ウガラス　ゴキサギ<O,M,N>,　ササゴキ<M>　40

ウギース　鶯　31<K,N>

ウキス　アカウニ？　40<O>

ウタ　場所を指す語　18<O,M>,23(ひ)[指示代名詞(遠称)，地位について云う]，24[あそこ]25<O,M,K,N,S>

ウグイス　鶯　31(ウグイス(メ))<S>,40<全>

ウグイスノコ　蟲喰　40<M>

ウグイスメ　鶯　40<K,N,S>

ウクイラ　場所を指す語　25

ウグユス　鶯　24<O,M,K,N>,30<O,M,K,N>,31(ウグユス)<O,M,K>40<全>

ウグユスメ　鶯　40<K,N,S>

ウクラ　場所を示す語　25

ウグヮンダ　アンナ，アノヨーナ　25

ウケ　浮子　31

ウサギメ　兎　32<N>35,37

ウサバ　ウバザメ　40<O,M>

ウシ　ヨイ人　10

ウシアイタ　藪草ノ姿性，臭氣ハナハタシク，不食モノナリ　5(牛ウシアイタ)

ウジガミ　氏神　31(ウジガミ)

ウシセリ　莨菪(草ノ名)　19

ウシノコク　丑滿　31(ウシノコク)<O,N>

ウシベー　サシハイ　40<O>

ウシミツドキ　丑滿　31(ウシミツドキ)<K>

ウシメ　牛　5<N>,40<全>

ウシヨ　潮　31(ウシヨ)，32(ウシヨ)<N>

ウショツキ　虚言者　31

ウシヨモキ　益母草　5

ウシエベス　エヒツル也　5(牛エベス)

ウス　臼　31(ウス)

ウスナル　被仰と云事　16

ウズワ　スマ　40<O>

ウズワカツウ　スマ　40〈M〉
ウソヲシテ　どふだか　17(ひ)
ウチチー　一昨日　24〈O, M, K, N, S〉, 31〈M, K, N〉, 32〈N〉, 44
ウチノマ　屋間　13〈S〉
ウチワトミ　センマイハギ？　40〈O〉
ウチワドミ　ウチハフグ　40〈O〉
ウック　ミノカサゴ　40〈M〉
ウッチ　場所を指す語，方向を指す語　24[あっち]〈O, M, K, N, S〉, 25, 30[彼地]
ウツチヤキノウチチー　一昨々日　32(ウツチヤキノウチチー)〈N〉
ウッツェー　一昨日　31〈O, M, U〉
ウツツェイ　一昨日　31〈M〉
ウデ　腕　31
ウドリ　ウミウ(鳥)　40〈N〉
ウナ　相手　25
ウナギ　ウナギ〈全〉　40
ウナシ　家裏の空地　30
ウナジ　うしろの人うちと云　医家にも項をうなじと云　同意なり　11(ひ)
ウナツク　うなつく　24(ウナヅクトモ発音ス)〈O, M, K, N, S〉
ウナトウ　三, 四十才の女　16, 18
ウナル　泣声　4[鳴], 12, 18
ウヌ　相手　25
ウネガインツウニ　其方位の器量でと云所に用ゆ　尊しる言葉なり　11(ひ, 廷奴乎於ル課)
ウノトリ　ウミウ(鳥)　40〈O, M, K, N〉
ウノ(メ)　ウミウ(鳥)　40〈M〉
ウノヒト　他人　25
ウハホチギ　軍器に上を覆ふ物をほうと云に同　かつきの如く下を穏す上着の事なり　11(ひ, 上掲書)
ウブスナ　産土神　31(ウブスナ)
ウベズラ　あけび　32〈N〉
ウヘツラ　木通(アケビ)　5
ウマ　母　自称(古), 敬称, 対称(古)　31
ウマクサ　蘆　17(馬クサ)
ウマズ　石女　31
ウマメ　馬　32〈N〉, 35〈N〉, 37〈N〉, 40〈全〉
ウマメハギ　ウマヅラハギ　40〈M〉
ウマヤ　牛屋　17
ウミーヂ　なまこ　31〈S〉
ウミウシ　アメフラシ　40〈M〉
ウミガリ　鹹水湖のヤドカリ類総称　40〈O〉
ウミジンノコ　ウメボシイソギンチャク？　40〈O〉
ウミスズ　カンムリウミスズメ　40〈O, M, N〉
ウミデンボ　イソギンチャクの一種　40〈O〉
ウミドリ　ウミウ(鳥)　40〈N〉
ウミマツ　エダツノサンゴ？　40〈O, M〉
ウムマ　母　自称(古)　31
ウメーヂ　なまこ　31〈O, M〉
ウメエヂ　アメフラシ　19〈O〉
ウヤツ　あやつ　24〈O, M, K, N, S〉30
ウラ　入江　31(ウラ)〈K, N, S〉
ウラ　裏手　31
ウラベ　神の事をあつかる役を云　11(ひ, 卜部), 31(ウラベ)[卜師(古)]
ウラベ　1月15日　粟の粥を煮竹筒に入れて年の吉凶を卜する式あり　6(卜部)
ウラメ　斜視　31(ウラメ)
ウリ　青瓜　31

ウリムシ　ウリハムシ　40〈O〉
ウルサイ　きたなき事　16
ウレ　あれ　24〈O, M, K, N, S〉, 25〔物を指す語〕, 44, 30
ウレ　他人　25
ウレ　あき　23〈O, M〉
ウレシクテシテ　甚だ嬉しき事　16〔ウレシクテ死テ〕
ウレンシヤー　物を指す語　25
ウロウドシ　閏年　31〈M〉
ウロードシ　閏年　31〔ウロードシ〕〈O, K, N〉
ウワーレ　ココンウワーレ「ココニ居ロ」「ココニ居レ」　25
ウワキモノ　好色者　総称　31
ウワテジホ　沙の流れの一名　13
ウエ　上　31〔ウエ〕
ウン　目下ニ対シテ「ハイ」「ヘイ」ノ代リニ使用ス　25
ウンゲン　心地よき〔こと〕　18
ウンドン　温飩　31
ウンボーメ　牛　32〔ウンボーメ〔兒〕〕〈N〉
ウンマ　馬　28〔ひ〕, 32〈母, 乳母〉〈N〉, 35〔ひ〕〈O, K, N, S〉, 37〔ひ〕〈O, K, N, S〉, 44〔ひ〕,

エ

エー　網類　40〈全〉
エー　善イ　25
エイ　エイ〔近〕〔呼かけ〕　25
エイヨー　今夜　31〈S〉
エイヨウ　今夜　31〈M〉
エーガ　壺を蓋う籠　31
エーガザシ　藺玉, 椎の木にさす, 藺を作る際挿入する葉　31
エーガダナ　壺を蓋う籠を載せる棚　31
エキリ　襟領〔稀なり, 疑あり〕　40〈N〉
エゴ　入江　31〈O, M〉
エーサ　釣の餌　31
エーゾー　アヲベラ, ササノハベラ, セトベラ, スッパオオトウ, スッパオオトウの一種, ニシキベラ　40
エツゾ　錦絵　32〔エツゾ〕〈N〉
エッタ　屠児　31〔エッタ〕〈K〉
エッチューフンドァシ　越中　31
エビ〔メ〕　イセエビ類　40〈全〉
エビメ　海老　31, 40〔エビ類総称〕
エビラ　盆の遊びに男が着る短かい單衣　6
エベス　恵比壽　24〈O, M, K, N, S〉30
エル　カナリ食ウエル「カナリ食エル」　25
エール　買ウエール「買ハレル」　25
エンガリ　縁側　35〈K〉
エンガワ　縁側　31〔エンガワ〕, 35〈S〉
エンキユー　メジナの類　40〈O〉
エンゴー　縁側　35〈M〉
エンニヤー　買ウエンニヤー「買エナイ」　25
エンノ　縁側　35〈O, N〉
エンハイ　味噌醤油ヲ製造使用スル富者ノミニシテ通例魚ヲ肉醤トシテ貯ヘ置キ之ヲ塩配〔エンパイ〕ト称シテ上水ヲ醤油ノ代用トシ沈澱ヲ味噌ノ代用トス　6〔エンハイ, 塩配〕

オ

オー　應答　25〔朱註〔東京語ニテ「ハイ」「ヘイ」トイフベキ場合ニ使用ス〕〕, 32〔諸の場合〕

オヤセ　袷衣　31〈O, M, K, N〉
オイ　目下ニ対シテ「ハイ」「ヘイ」ノ代リニ使用ス，呼かけ　25
オーイ　オーイ（遠）（呼かけ）　25
オイオイ　呼かけ　25
オイコラ　呼かけ　25
オイテ　順風　31（オイテ）〈M, K〉
オイミキテ　鬼事　32〈N〉
オイラン　さつまいも　32〈N〉
オウ　栗　31〈M〉
オウ　は，はい　44（ひ）
オーウ　はい　37
オウゴメ　栗　31〈M〉
オウサマ　曾祖父　31〈M〉
オオ　はい　28（ひ）
オオギョー　ワチハフゲ　40〈M〉
オーオデーサマ　曾祖父　31（オーオヂーサマ）〈K〉
オオデドノ　祖父　28（ひ）
オオチフチ　蒲公英（タンポヽ）　5（大チフチ）
オオトウ　アカベラ〈M〉，ササノハベラ，スッパオオトウ（或はその一種），ニシキベラ，ベラの類　40
オオトシ　大晦日「家内本膳ニテ節ヲ祝フ事國地ト同シ　タヽ美味ノスクナキノミ　隣家ヲモ呼フ也」　15
オオヒケクサ　ヲトロノルイ　5（大ヒケ草）
オオフリ　福茶　30
オオムロ　オオムロアジ（オオムロの成長せるもの）　40
オカガリ　陸蟹ガニ　40〈O〉
オーガシマユリ　島百合　31
オーカメ　狼　24〈O, M, K, N, S〉
オカヤドカリ　オカヤドカリ　40
オキ　沖　31
オキガリ　タイワンガザミ　40〈O, M〉
オキタ　（過去）　25（起キタ）
オキタラバ　（假定）　25（起キタラバ）
オキドミ　マハギ　40〈M〉
オキナエビ　セミエビ　40〈全〉
オキノフモト　沖，末吉のみにて沖の太陽の出る方を云ふ　31〈S〉
オキフゲ　イシガキフグ　40〈M〉
オキリ　岩火　31（オキリ）〈N〉
オクノマ　寢間（奥の間）　31（オクノマ）
オクビニナル　おそれたかたちとゝ　11（ひ，作レ於二臆徴一）
オクリー　葬儀　31〈O〉
オケ　桶　31（オケ），35〈K〉
オコジユガヒデ　オコゼ，ヤマノカミ　40〈O, M〉
オゴセ　ミシマオコゼ　40〈O, M〉
オゴセ　奥サマ　6（ひ）
オコワ　強飯　31
オーサギ　アヲサギ　40〈O, M〉
オサナゴ　乳兒　35〈K, S〉
オーサマ　祖父　31［祖父，曾祖父〈O〉］，32〈N〉
オザレ　きおかと云言葉なり　貴人に用ゆ　11（ひ，被二御座一）
オーシ　啞　31
オジ　伯叔父　32〈N〉
オジイサン　ウミゴヒ　40〈M〉
オーシケ　暴風　32〈N〉，35〈O〉
オージケ　暴風　35〈K〉
オージトツ　祖父　32〈N〉
オシフイチ　葺屋根の裏に張る竹，簀竹　31
オシミャーヤッタカ　「今晩ワ」（他俗ヲ

シマッカノ意) 25

オシメ　襁褓　35〈O, K〉

オジヤ　雜炊，米だけで作りたるもの　31(オジヤ)

オジヤッテタモーリヤルト　コケーオジヤッテタモーリヤルト「ココエオイデアソバセ」 25

オシャブリ　おしやぶり(新) 31

オジヤミ　御手玉　31(オジヤミ)32〈N〉

オジヤリータス　ドグヮンデオジヤリータス「ドンナデ，ドノヨーデゴザイマス」，ウグヮンデオジヤリータス，「アンナデ，アノヨーデゴザイマス」，コグヮンデオジヤリータス「コンナデ，コノヨーデゴザイマス」，ソグヮンデオジヤリータス「ソンナデ，ソノヨーデゴザイマス」，氣ノ毒デオジヤリータス「氣ノ毒デゴザイマス」，沢山デオジヤリータス「沢山デゴザイマス」，綺麗デオジヤリータス「綺麗デゴザイマス」，四角デオジヤリータス「四角デゴザイマス」，樂デオジヤリータス「樂デゴザイマス」，僅デオジヤリータス「僅デゴザイマス」，イヤデオジヤリータス「イヤデゴザイマス」，ヌクトクオジヤリータス「暖クゴザイマス」，靜デオジヤリータス「靜デゴザイマス」，ネッコクオジヤリータス「小サクゴザイマス」，オッカナクオジヤリータス「恐シクゴザイマス」，黃イロクオジヤリータス「黃イロクゴザイマス」，涼シクオジヤリータス「涼シクゴザイマス」，酸クオジヤリータス「酸クゴザイマス」，廣クオジヤリータス「廣クゴザイマス」，善クオジヤリータス「善クゴザイマス」，惡クオジヤリータス「惡クゴザイマス」 25

オジヤリヤレ　コケーオジヤリヤレ「ココエオイデナサイ」 25

オジヤルカ　今日ワ(途上訪問の場合共) 25

オショーサマ　僧侶　31(オショーサマ)

オショコメ　小牛　31[とうし，総称]〈O M, K, S〉，32(オショコメ)〈N〉

オシリェー　白粉　音韻轉訛オイ　32〈N〉

オジロ　ギンユゴヒ　40〈金〉

オソ　應答(否)　32〈N〉

オソ　嘘　24〈O, M, K, N, S〉，30，32[虛言]〈N〉，44

オタフク　醜女(新)　31

オヂ　伯叔父　35〈M〉

オーヂ　祖父，曾祖父　31

オヂウバ　伯父又伯母(区別なく云ふ) 19(ひ)

オーヂガチ　紫菫　31〈O, M, K, N〉

オチキサマ　月　31〈K〉

オーチサマ　曾祖父　31〈S〉

オーヂサマ　祖父　31

オチサン　伯叔父　35〈M〉

オヂヤツテ　來て(上)　17(ひ)

オヂヤリヤシンナカ　入ラッシャリヤーシナイ　25

オヂヤリヤル　ドケーオヂヤリヤル「ドコエオイデ遊シマス」 25

オヂヤリヤロ……オヂヤロワ　コッチーオヂヤリヤロ方ガヨロシクオヂヤロワ「コチラエオイデナサル方ガヨ

ロシュウゴザイマショー」25

オヂャリンヂャランノーヂャ　先達話シヤツタ品ハ探シテヤツテモオヂャリンヂャランノーヂャ「先達ノオ話ノ品ヲオ探シニナリマシテモ御座イマセンデシタデショー」25

オヂャンノーワ　ソレデヨロシクオヂャンノーワ「ソレデオヨロシューゴザイマショー」25

オツ　粗末ナ　30

オツィサン　伯父　31

オツカー　母　35〈M, K〉

オツカチヤン　母　35〈N〉

オッカニヤー　31

オッカネー　31

オッサマ　月　31, 32〈N〉

オッキーテ　山麓，海ならびに村より下の山腹海岸をいふ　31〈S〉

オツケ　味噌汁，清汁をもいふ　31(オツケ)

オッタラ　なしのことだまつていろと云言葉なり　11(ひ，鶴ヶ嘴)

オッチャゴ　末子　31〈O, M〉

オツチヤン　伯叔父　35〈M〉, 37

オツトー　父　35〈M〉, 37

オデコ　アヲブダヒ〈O〉, カンダヒ, コブダヒ　40

オデコ　突額　31(オデコ)

オテダマ　御手玉(新)　31

オテマ　土間〈O, M, K〉, 納屋〈N〉　35

オテル　落ちる　24〈O, M, K, N, S〉

オテンバ　おてんば(新)　31

オード　祖父　31(オード)

オトアネエ　兄弟　6(ひ)

オトウチヤン　父　35〈K〉

オトギヤー　顎　32(オトギヤー)〈N〉

オトゲー　顎　31

オトコヤモメ　寡夫　31

オートシ　大晦日　31(オートシ)

オドシ　鳴子，案山子　31, 32〈N〉

オトツチヤン　父　35〈N〉

オトトコイシヤ　ほとゝぎす　31〈S〉

オトトシ　一昨年　31(オトトシ)

オトナ　大人　31

オードレ　大漁　32〈N〉

オドロア　粗朶　31〈N〉

オナガ　オナガザメ　40〈仝〉

オナガ　スギ　40

オナガマス　チビキの一種　40〈N〉

オナシ　同じ　24, 30(オナシ(オンナシ))〈O, M, K, N, S〉

オニゴッコ　鬼事　31

オニベツゾ　蜻蜓(ヤンマ)　17(ひ)

オノ　オノアッデオヂャロー「アノ如何デゴザイマセウ」25

オノ　アツデオヂャロ　オノ　アッデオヂャロ　ヂードノワハヤキャーリャロヲーカ「アノ　ナンデゴザイマスカ　叔父様ワモオ帰リニナリマシタカ」25

オノ……オノ　オノワレモオノドーシニミャーリテヤートオメータソガ「アノ私モアノ御一所ニ参リタイト存ジマスガ」25

オノコゴ　男　31, 32「男児」〈N〉

オノコゴノコ　男ノ子　31

オノコゴメ　牡牛　32〈N〉

オバ　姑叔母　35〈M〉
オハグロ　鉄漿(古)　31
オーバーサマ　曾祖母　31(オーバーサマ)〈K〉
オバタ　嶺，峠　31〈M，S〉
オバフリ　鶺鴒　40〈O〉
オバフリメ　鶺鴒　40〈O〉
オハリ　裁縫　31
オビシメ　メジナの類　40〈M〉
オフ　あいと云に同じ　11(ひ，應)
オフセ　布施　31(オフセ)
オフヂ　祖父　17(ひ)，19(ひ)
オフリ　葬式　30
オーベーシ　蟻(黒色大形の蟻)　40〈O〉
オベッカ　お世辞者　31
オベッコ　桶　30
オベール　覚える　24〈O，M，K，N，S〉
オベンヂニ　わきまへなくものをゆう人をそしりて云言葉なり　11(ひ，於ニ遠辨知ー)
オベンチヤ　心ヲ盡ス事　6(ひ)
オボユ　逢湯　31(オボユ)
オマイ　相手　25
オーマス　桝，三升五合入り　31(オーマス)
オミ　貴様　18，25[相手]
オミキ　神酒　31(オミキ)
オミクジ　おみくじと云　11(御閧)
オーミズ　洪水　32〈N〉
オミトコゲーニマツバラオゲヤリヤマツノツユドウメナダドウ　主と別れて松原ゆけば，松の露やら涙やら　27
オミャー　御前　24〈O，K，N〉，25[相手]，27〈O，K，N〉，25(オミヤー，オメー)
オミャー　夫　31
オミヤナ　お前は　27
オミャーラ　オミャーラ(復数)　25
オメー　御前(敬語)　24〈M，S〉，25[相手]
オモカジ　重舵　31(オモカジ)
オーヤ　母屋　35〈O〉，37
オヤク　親子　31
オヤコ　親類　31[親子(オヤコ)と判然たる音の区別あり]，32〈N〉，35[親戚]〈O，M，K，N，S〉，37[親戚を意味する語]
オヤコサカズキ　親類盃　31(オヤコサカズキ)
オヤシネコシネメ　ホホジロ(親死ね子死ねか)　40〈N〉
オヤナシゴ　孤児　31，32[私生児]〈N〉
オラ　自分　25
オーラ　自分　25
オリ　石垣　(オリ、〈M，K，N〉，オリ，)　31　32〈N〉
オーリ　石垣　31〈O，U〉
オリママ　石垣，石垣の面　31(オリママ)
オレ　物を指す語，自分　25
オレンシヤー　物を指す語　25
オンナゴ　女児　31[女]，32〈N〉
オンナゴノコ　女子　31
オンナゴノシエツク　雛祭　32(オンナゴノシエツク)〈N〉
オンナゴメ　牝牛(少)　32〈N〉
オンル　おりる　24〈O，M，K，N，S〉

カ

カ　アンカウマケモノワニヤーカ[何カ

ウマイモノワナイカ」，ドケーカオモシレートコレーイコー「何処カオモシロイトコロエイコー」，ダレカアロカ「誰カイルカ」，ドレーカイタダキテャーモノデオヂャロガ「ドレカイタダキタイモノデス」，マアドーカコーカモノニナリソーデオジャロワ「マアドーカコーカモノニナリソーデス」，ハラ／ハー／ハヤ／ハリャ｝干ロカ「モー干ルカ」，マダキンノアーカ「マダコナイカ」，之デヨケカ「之デイイカ」 25

カ 鍬 19(ひ), 31(ひ)

カ……カ アニヨカクヮーカ トリマゼルトソノ位ニハナリタスノーワ「何カカカトリマゼタラソノ位ニハナリマセウ」 25

カー 井戸 37

ガ ココノ方ガ靜カデエー「ココノ方ガ靜カデイイ」，此処ニ読賣新聞ガアロウ「此処ニ読賣新聞ガアル」，コレガエー「コレガイイ」，雨ワフロガ路ワソクヮーニワルクワニヤー「雨ハフルガ路ワソンナニワルクワナイ」 25

カイ 蛸 31

カイカイ 開会 24, 30

カイシ 干潮，月の出る時入る時の潮合ひ 31 (ガイシ)

ガイタ おのれが遽手と続くに用ゆ 未熟なそしる言葉 11(ひ, 遽手), 30[未熟]

カイホウシタ (過去) 25(介抱シタ)

カイホウシヨー (未来) 25(介抱シヨー)

カイホウスルダロー 介抱シタラバ 25

カウエーラシー かはいらしい 24〈M, S〉

カウダロー (推量) 25(買ウダロー)

カウナ ツマラニヤーモノー買ウナ「ツマラナイモノヲカウナ」 25(買ウナ)

カウヤーラシイ かはいらしい 24〈O, K, N〉

カウロク かわらけ(玉門無毛) 17(ひ)

カエシ 満潮 35〈N〉

カオ 顔 31

カカ 母 44(ひ)

カカー 母 35, 37〈S〉

カカア 母 16, 18

カカアサマ 名付け親(女) 13

カカシ 案山子 31(カカシ)

カガッテ 屈んで 24〈O, M, K, N, S〉

カカッテアロワ 死ニカカッテアロワ「死ニカカッテイル」 25

カカネイ 桑の花 30

カガミ 年玉ニ祝フトリヤリノ餅ハ センベイノ如ク薄シ コレヲ鏡トイフ 17(鏡)

カキ 垣 31(カキ), 35〈O, K, S〉

カキ 柿 31(ガキ)

ガキ 娘 31

カキジャネ 油虫 31(カキジャネ), 40[クモンゴキブリ，チャバネゴキブリ]〈O, M〉

カクトビ トビウヲの一種 40

カクレグマ 情癖 31

カクレヂージ　愚夫　31

ガケ　崖　35〈O, K, N〉

カゲキヨ　チビキの一種　40〈O〉

カケジ　掛軸　31

ガケンチョー　35〈S〉

カコー　母　敬称，対称　31〈M〉

カコア　母　敬称，対称　31

カコウ　母　30〔ひ〕，44〔ひ〕

カコウ　小ぎれ　19〔ひ〕，32〔布〕〈N〉

カコウサマ　母　6〔ひ〕〔奥さま〕，19〔ひ〕〔大家の女房たちをいう〕，35〔ひ〕〈O〉，37〔ひ〕〔カコーサマ〕

カコーサマ　妻妾　31

カゴツ　籠桶の類　17〔ひ〕〔籠桶擬ふ〕，19〔ひ〕

カゴナ　鰓　30

カコフ　襞　17〔ひ〕

カコフ　母〔上〕　17〔ひ〕

カゴフヂ　藍，堅莢樹ナル可シ　樹皮堅靭乾燥シテ折傷セサルヲ以テ　島民錨ネテ籠筐ノ縁トス　5〔ひ〕〔木性カタクシナヒテ折傷セス　鳴人籠筐ノ縁トスル故其名ニ唱カ〕，32〔ひ〕

カコマル　交合　31

カコム　交合　6〔ひ〕，17〔抱く〕〈N〉，19〔ひ〕，32

カサ　雨傘　竹子笠　31〔カサ〕

カサ　梅毒　31〔カサ〕

カザグネ　防風林，主として風を防ぐためのもの　31

カサゴ　カサゴ　40〈M〉

カザナギ　無風　31〈S〉

カザナミ　厄浪　冬の波　31

カジ　火事　31〔カジ〕

カジ　感冒　32〈N〉

カシカ〔ミ〕　アヲブダヒ〈O〉ブダヒ〈O，M〉　40

カシカミ　魚名　5

カジカミ　魚　八丈ニ多シ　長一尺ニ，三寸異形ナリ　味軽シ　6〔ひ〕

カシカミゾラ　鱗雲　31〈K〉

カジキ　マカジキ，メカジキ　40〈O〉

カシタテユーモ　山芋　31〈S〉

カシヤゲ　髪の毛　18

カシヤテ　屋ひ社人を云　11〔ひ，借社人〕

カスゲー　鎹　23〈O，M〉

カスッタ　忘る事　4，5〔した事〕，18〔した〕，37〔着てること〕

カスル　怠りをなすかと云なり　今忘ることに心得五音のたがいと云は誤ならん　11〔ひ，為レ誤〕，16〔忘れた事〕

カスルナ　覚えて居よと云事　16

カゼ　風　31

カゼ　風邪　31〔カゼ〕

カセギメ　蟷螂　31，35，37〈O，K〉

カタ　餅，大，二升位のもの，二つを並べて盆台に入れて送る，姑，聟に贈る，型に入れて固めるなり　31

カタ　肩〔衝〕　31

カタクチブツチ　ブツチの一種　40

カタケン　片足飛　31〈S〉

カタコ　当才の子　7〔ひ〕

カタシ　ヨイ男　10〔ひ〕

カタチチ　土塊　31〔カタチチ〕

カタッパシ　片端　24〈O，M，K，N，S〉

カタツムリ　蝸牛　35〈K，N〉

カタル　交合　19,6

カタル　加はる　32〈N〉

カヂ　栝蔞，天花粉　5（カヂ（イノシタ））

カヂキトヲシ　魚名（鋸沙）　5

カチョウ　ベラの類　40〈M〉

カツー　かつお　31〈O, M, S〉

カツウ　スマ〈M〉，カツヲ〈全〉　40

カツウザメ　カツヲザメ　40〈M〉

カツウドリ　オホミヅナギドリ〈全〉　40

カッカイ　母　敬称，対称　31〈M〉

カツキ　漁師（潜水夫）　32〈N〉

カツギ　潜水夫，男女共に云ふ　31

買ツタ（過去）　25

カッチョー　カツヲ　40〈M〉

カツテ　台所　35〈K〉

ガツテ　…がてら　23

カツテアロワ　マン（マニ）迚カカッテアロワ「今迚キカカッテイル」　25

カッテヤー（ヤミ）　瘧病　31

カツホトリ　海鵜の類　5

カツホブシ　鰹節　19〈ひ〉

カツヨフグ　カナフグ　40〈O〉

カツラノネ　葛根　5

カツヲサメ　魚名　5

カテイーラ　ひもじい　32〔カテイーラ〕〈N〉

カテウ　魚ノ名　5

カテール　飢ゑる　32〈カテール〉〈N〉

カトー　カツヲ　31〈K, N〉，32, 40, 〈O, K, N, S〉

カド　門　17, 31〈ひ〉

カトウ　松魚の事　16, 31〈M〉

カトウザメ　カツヲザメ　40〈M〉

カトウフグ　カナフグ　40〈M〉

カトオドリ　オホミヅナギドリ　40〈N〉

カドクナル　かしこい　17〈ひ〉

カトフ　鰹魚　17〈ひ〉

カトーブシ　鰹節　30, 21

カトフブシ　鰹節　19〈ひ〉

カナウト　かなてこの事　16

カナガメ　寄居　32〔やどかりく〈N〉，35, 37〈N〉

カナシミ　病氣　30

カナズツ　金槌　31〈カナズヅ〉

カナダ　トラウツボ　14〔魚名（形状ノ如シ）〕，40〈O, M〉

カナツツ　金槌（かなづち）　24〈O, M, K, N, S〉，30

カナド　焼山の石岩くだけしきて土となりたる体なり　19〈ひ〉

カナトカツラ　忍冬ノルイ　5

カナヤママツリ　鞴祭　31（カナヤママツリ）

ガナル　どなる　32〈N〉

カニ　カニ類総称　40〈カニ（メ）〉

カニヤー　家内　24〈O, K, N〉，30〈O, K, N〉，44

カネ　鉄漿（古）　31〈カネ〉

カネー　家内　24〈M, S〉，30, 31〔妻，名を呼ぶを普通とす〕

カネイ　桑の花の事　16〈カヲイ〉

カネエー　桑の花　31〈カネェー〉

カネブンムシ　黄金蟲　31

カネモチ，ブゲン　財産家　31〈カネモチブゲン〉

カノー　カヌー　31〈カノー〉

カノカラ　唐鋤　31〈カノカラ〉

カノキ　桑　31〈カノキ〉

カノミ　桑の実　31〈カノミ〉，32〈カノ

ミ〈N〉
カハナグ　ウナギの類　5
カハムラ　乾の風　13
カビアー　桑の葉　31
カヒムシ　すもふなどに　むぞうさにまけると云言葉なり　11〔ひ，皆無手〕
カビヤー　くわのは　32〔カビヤー〕〈N〉
カビヤア　桑葉　44〔ひ〕
カブツ　蛹〈N〉，ダイダイ，アヘタチバナ　5
カブナ　鶫の事　16，40〔カモメ類〕〈全〉
カブナメ　鶫　31〔カブナメ〕〈O，M，S〉35，37〈M〉
カブニヤアメ　鶫　32〔カブニヤアメ〕〈N〉
カブニャアメ　35〈N〉
カブニャァメ　37〈N〉
カブメ　鳧　32〈N〉，35〈N〉，37〈N〉，40〔カ類総称〕〈O，M〉
カブメ　鶫　35〈N〉，37〈N〉
カブラ　蕪　31
カボチヤ　南瓜　35〈O，S〉
カホルトノー　妻，血脈の正しい名家の本家の妻のみを特にトノを附けて呼ぶ　31
カマ　竈　35〈O〉
カマキリ　螳螂　31，40〔カマキリ類〕〈O〉
カマス　イボダヒ〈O〉，アウライカマス〈M〉　40
カマツカ　チンバエソ，アカエソ，オキエソ　40
カマツテカマツテ　にほふ　17〔ひ〕
カマド　竈　31，32〈N〉，35〈O，M，N，S〉，35〔竈〕〈K，S〉
カマドノセキ　本朝の嵐ふものそばと云事　11〔ひ，竈席〕
カマドバタ　カマドバタ　31〔竈端〕
カミ　髪〔新〕　31
カミキリ　かみきり　31
カミサマ　神社　31
カミサマノオツカイ　カマキリ類　40〈O〉
カミソリ　剃刀　31〔カミソリ〕
カミナリ　雷　31
カミハジメ　食初　32〈N〉
カミミヤーリ　参宮　31〔カミミヤーリ〕〈O〉
カム　喰　17〔ひ〕
カームグリ　げんごろう　31〈S〉
カムゴネイ　口をきくことおふきを云　11〔ひ，噛語侯（カム　ゴネイ）〕
カムマイリ　参宮　31〔カムマイリ〕〈K〉
カームラニシ　西北風，北より西へ廻り，西へまわりきらぬ風を「ワカフク」と言ふ　31
カメ　水甕　31〔カメ〕，35〈O，K〉
カメ　アガウミガメ　40〈全〉
カメノコ　小甕　31〔カメノコ〕
カメハンバ　二種類あり　一種は食べられず　サヽ魚の釣餌　一種は食用　13
カメムシ　くさがめ　31
カメ　亀　24〔鳥獣，蟲，魚ニハ末尾ニ「メ」ヲ附ス，但シスズメ，ツバメニハスズメメ，ツバメメト「メ」ヲ附セズ〕　31
カモエ　鴨居〔新〕　31〔カモエ〕
カモ〔メ〕　鴨類　40〈全〉
カモメ　鴨　31〈S〉，35〈O，K，S〉
カヤムグリ　雪加　40〈K〉

カヤモグリ　駒鳥　40〈M〉
カヤモグリ　雪加　40〈O, M, N〉
カユー　布　31〔カユー〕
カラカジ〔メ〕　百舌　40〈K, N〉
カラケーザメ　ガンギエヒ　40〈M〉
カラス〔メ〕　からす　31
カラスマハリ　無花果（イチジク）ノ小キモノ　5
カラスムシ　クモンゴキブリ　40〈O〉
カラスメ　鳥　31〔カラス〔メ〕〕, 40〈全〉, 44
カラダ　身体　31
カラヨモキ　菊花　5
ガリ　蟹　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31
カリキヌ　川萩　31, 40〔カンランハギ〕, 〈O, M〉
カリキヌ　ニザダヒ, ニザダヒノ一種　40〈全〉
カリタ　（過去）　25〔借リタ〕
カリタラバ　（仮定）　25〔借リタラバ〕
ガリバ　蟹　31〈N〉
ガリマ　小サイ蟹　6〔ひ〕
ガリマメ　蟹　31〔ガリマ〔メ〕〕, 〈O, M, K, S〉, 32, 35〈N〉, 37〈N〉
カリメ　蟹　31〈M〉
カリヤス　この草をせんじて黄色な染也　13
カリルダロー　（推量）　25〔借リルダロー〕
カリロー　（未来）　25〔借リロー〕
カレマツバ　枯松葉　35〈O〉
カレマツンバ　枯松葉　35〈S〉
カレル　借（か）りる　27
カロー　マズカロー（ワルカロー）〔マズカロー〕（未来）　25
カロウ　魚名　5
カワ　用水池, 井戸, 水溜, 流し元も共にカワと云ふ.　31
カワ　皮膚　31〔カワ〕
カワゴエ　さつまいも　32〈N〉
カワナダ　國地でいう　うなぎの類　川に住んでいる時, 川ナダと云う　13〔川ナダ〕
カワハギ　カハハギ〈M〉, カンランハギ〈M〉, センマイハギ？〈O〉　40
カワフクロ　猫の事, 常々はネツコメといふ.〔正月祝ことば〕　16, 30〔猫〕
カワムラ　西北風　35, 37, 〈N〉
カワムラナライ　乾の風　17〔ひ〕, 35〔西北風〕〈K〉, 37〔西北風〕
カワユイ　かわゆいと云　11〔可愛〕
カワラバ　（仮定）　25〔買ワラバ〕
カワンタラ　そうだと云事　16
カヲトル　桑をとる事　16
カン　猫　17〔ひ〕
ガン　雁〔メをつけず〕　40〈全〉
カンカン　ねこ, 呼び声, 子供などが猫をよぶ時　31
カンケイ　関係, 直音ニ発音ス　24〈O, M, K, N, S〉, 30
カンジタ　（過去）　25〔感ジタ〕
カンジタラバ　（推量）　25〔感ジタラバ〕
カンシヤ　薩摩芋　31〔カンシャ〕〈K〉
カンジヨ　雪隠　17〔ひ〕
カンジョー　便所　28, 30〔両便所〕, 31〔カンジョー〔バ〕〕〔便所（大便所）, 小便所は作らず〕, 32, 35〈O, M, K, N, S〉, 44
カンジヨシバ　紫陽花　28〔ひ〕, 31〔カンジョシバ〕
カンジョームシ　センチコガネ？40〈O〉

カンジルダロー （推量） 25〈感ジルダロー〉
カンゼウ こうかの変なり 11（ひ，聲院）
ガンゼウ 大丈夫と云ことなり，又は岩壁とも書べし 11（ひ，巌松）
カンダラ いかにも 11（ひ，感分）［本朝のそうだと云言葉なり，其詳理不当りたるを感ずるなり］，17（ひ）
カンヌシ 神官 31（カンヌシ）
カンピャウナダ ゴマウツボ 40〈M〉
カンベーナダ クロウツボ 40〈全〉
カンメ ねこ，呼び声 31
カンモ さつまいも 31〈O，M〉，32〈O，M，N〉，35〈O，M，K〉，37〈O，M，K〉
カンモノサケ 芋燒酎 31（カンモノサケ）
カンル 借りる 24〈O，M，K〉

キ

キイレー 黄 25
キウリムシ ウリハムシ 40〈O〉
ギギリメシ 握飯（古） 31
キキール 聞える 24〈S〉
キケール 聞える 24〈O，M，K，N，S〉
キサンショー タカノハダヒ 40〈M〉
キジアミドリ 駒鳥 40〈N〉
キジメメズ ミミズの一種 40
ギシャク 磁石 24〈O，M，K，N，S〉
キシャジ アタマジラミの卵 40〈O〉
キシヤナ 草ノ名 5
キゾメイロ 黄色，色にはすべて・・・色と付ける，クロイロ，シロイロ，ムラサキイロなどの如し 31
キタ 來タ 25（來タ）
キダケ 氣樂 24〈O，M，K，N，S〉，30
キタシオ 汐の流れの一名 13
キダマサマ 山の神 31
キタラバ （假定） 25
キツネ お世辭者 31
キツネ ハガツヲ 40〈O，M〉
キツネツキ お世辭者 31［虚言者］，32〈N〉
キツネメ 狐 32〈N〉，35，37
ギッパドア 立派な 32（ギッパドア）〈N〉
キトウニアツケ あほうになつたと云 11（ひ，彼レ徒ニ於阿鼻ー）
キニー 昨日 32〈N〉
キニューノヨツベ 昨夜 31
キニョー 昨日 31〈M〉
キネ 杵 31（キネ）
キネー 昨日 31〈O，K，N，U〉
キネヘ 昨日 19（ひ）
キビショー 急須 31
キブクロ 通草入（雅語） 女子の用いたるもの 31（キブクロ）
キーブシ 蹶，ウチキーブシ，ソトキーブシ 31〈K，N〉
キミ もろこし 31（キミ）［きび］，32〈N〉
キミガラボーキ 草箒 31（キミガラボーキ）
キミナゴ キミナゴ 40〈M〉
キミュワシ キミナゴ 40〈M，N，S〉
キメーノメール 癖（にまわる） 31
キメヒノミヘテ はらの立事 16
キモ 心臟 31
キヤ コレデヨッキヤ「コレデヨイノダ」，日カヌクトキヤ「日ガ暮ルダ」，ソレガヨクナッキヤ「ソレガヨクナイノ

デス」 25
キヤアボウメ とかげ 44(ひ)
キヤウダイ 弟妹(すべて吾より下なるもの) 19(ひ)
キャタツ 踏台, 脚立 31
キャツトリメ 鶏 31〈O, M〉
キャーナ 肩 31, 32(キヤーナ)〈N〉
キャーバアメ 蜥蜴 31〈K〉, 35, 37
キャーバーメ とかげ 31〈K, N〉
キャハン 脚絆 31(キャハン)
キヤーピヤメ とかげ 32(キヤーピヤメ)〈N〉
キヤーピョウ とかげ 23(ひ)
キャール 婿ル 24〈O, K, N〉
キャールメ 蛙 32(キヤールメ)〈N〉, 35, 37
キュークツ 退屈 44(究屈)
キョーカタビラ 経帷子 31(キョーカタビラ)
キョーダイ 弟妹 31, 35, 37〈M〉
キョーダイブラ 兄弟, 姉妹の関係にあるものゝ総称 31
キョーデヤー 弟妹 35, 37〈K〉
キョーデー 弟妹 35, 37, 〈O, S〉
キョトンメ 鼠 40〈O〉
キョネン 去年 31(キョネン)
キョーベヨメ 蜥蜴 35〈N〉, 37
キリ ソレッキリ「のみ」, 昨日出タッキリマダキャーツテキンナカ「昨日出タキリイマダニ婿ッテキマセン」, 始終ネトァーキリデアロワ「始終ネタナリデイル」, コレッキリ「のみ」 25
キリ 錐 31〈O, M〉
キリバン 組板 31(キリバン), 35〈O, M, K, N, S〉
キルフ いそぎあわてるを云 11(ひ, 婿留舅)
キルンデ いそいで 17(ひ)
キレ・布(新) 31
キロ キモノーキロ「着物ヲ着ヨ」 25
キワダ キハダ 40〈O, M〉
キンギョ イットウダヒ 40〈O〉
キンギョウヨー イットウダヒ類, イットウダヒ, ヨロヒダヒ 40〈M〉
キンギョメ キンギョ(移入) 40
キンケイ 魚名 40〈O〉
キンタマ 睾丸 31(キンタマ)
キンチャチヤ 四十雀 40〈N〉
ギンメダイ ギンメダヒ 40〈O〉
ギンヤシ カタクチ 40〈O〉

ク

クウェール 加へる 24〈M, S〉
クウャール 加へる 24〈O, M, N〉
クウルウ 六女 4, 6, 20, 37
クウロウ 九男 10, 16[七女の事], 19(ひ) [六女]
クウロフ 六女 17 (ひ)
クオアムラ 西北風 32(クオアムラ)〈N〉
クオワ 川 32(クオワ)〈N〉
クガクンチ 重陽の事 16(九ケ九日)
クケ 口 31
クサイ 魚名 5
クサダミ 女貞(ネブリテテ)ナルカ 5
クサナカ 草叢 32〈N〉
クサメ 草でつくった人形 女の子のおもちゃ 6(早草女), 31[人形, 八丈特有の人形]
クサヨア 草叢 32〈N〉
クジナ 鯨 40〈全〉

クシヤガリ　はやり風を引く事を云　11(ひ)[噴　嗽　薬]

クシヤガリ　風邪　又流行風邪　30

クシラクサ　魚鯉草　5

クス　四女　4, 6, 12　[三女], 13, 16, 17(ひ), 18[三女], 19, 20, 28, 30, 31[三女], 32[四男]〈N〉, 35[四女, 老人に多い]〈M, N〉, 37〈M, N〉, 44

クス　裘　31〈N〉, 32

クズ　四女　10

クスイ　下女の長なるものの呼唱　2

クスイリ　程子又久壽以里又富止，本朝にて末子を止松，末松などとしやくする如し　11

クスウバ　四番目の伯母　19

クスガリ　ヒライソガニ　40

クズクズムシ　六女　10

クストンビメ　鳶　40〈O〉

クスベ　黒子　31(クスベ)

クスボル　爛ル　24〈O, M, K, N, S〉

クズムシ　五女　10

クスリイビ　無名指　31(クスリイビ)[古]

クゼーモ　カハラヒハ　40〈M〉

クゼーモドリ　カハラヒハ　40〈M〉

クソガニ　ヒライソガニ　40〈全〉

クソダヒ　コロダヒ　40

クソラ　女の五人め　12

クゾーレー　崖　31〈N〉

クチビロ　唇　31

クチブト　ムロの一種　40

クチョウ　九男　九郎　44(ひ)

クヂニクサ　どくだみ　31

クツカワシ　蟬　16, 17, 30

クツキリベァーシ　喰い付く蟻　31

クツクヮーシメ　蟬　31〈S〉

クツケシラ　不実な人　5

クツコウシ　蟬　31〈M〉

クツコーシ　蟬　31〈U〉

クツコーシメ　ツクツクボウシ　40〈O, M〉

クツコワシメ　蟬　32, 35〈N〉, 37

クッチャ　蠅　31〈M, N〉, 32(クッチャ)〈N〉

クッチヤウ　九男　17(ひ)

クッツァ　蠅　31〈O, K, S〉

クッテウ　九男　19(ひ)

グテイ　亭主　6(ひ), 9

クテウ　九男　6

クトー　夫　30

グトウ　夫のことを云　11(ひ)(具レ頭)

グトウ　夫　或は忍男　13

クニ　江戸　13(國)

クニガヘ　死去の事（正月祝ことば）16(國ガヘ)

クニメンジョ　目白(七島目白でなく内地より渡来せるものを区別してかく云うことあり)　40〈O〉

クネ　防風林　家のまわりにするもの　31(クネ), 32〈N〉, 35[垣]〈M〉

クネ　垣　35〈M〉

クビ　襟　31

クビキリバツタ　クビキリバツタ　40〈O〉

クビシメ　縊死者　31(クビシメ)

クビツリ　縊死者　31

クベシ　マンゴロクベシ「今頃来ルモノカ」

クボ　山麓　末吉村は山が海に廻り湾入している。　31〈S〉

クボナ　蜘蛛の事　16, 17(ひ), 24, 30

クボナメ　蜘蛛　31(クボナ(メ))[蜘蛛, 中], 35〈K〉, 37

クマデ　熊手　35〈O, K, N, S〉

クマノミ　ブダヒの類　5[魚名], 40

クモ　蜘蛛, 大　31

クモキリナミ　厄浪　五月の靜かな浪　31

クモメ　クモ類總称　40〈O〉

クヨー　供養　31(クヨー)

クラ　倉裏　31

クラウ　九男　5

クラゲ　カツヲノエボシ　40〈全〉

クリ　霧の如きもの（その中吹く風は坤の風）　13

クリ　霧　24〈O, M, K, N, S〉, 30〈K〉, 31〈K〉

クリ　德利　12(ひ), 16, 17(ひ), 18(ひ), 31(クリ)

クリー　狂ひ　24〈O, M, K, N, S〉, 30

クルダロー　(推量)　25

クルスキ　鹹　31

ゲルミ　人物ゲルミケテシマツタ「人物ゲルミヤッテシマッタ」　25

クレー　黒イ　24〈O, M, K, N, S〉

クレエー　暮れ方　28(ひ), 31[夕方]〈M〉

クレヤ　夕方　32〈N〉, 44

クレヤー　夕方　31〈O〉

クレヨァ　夕方　31〈N〉

クレンガヘス「物をたつぬるに用ゆ　11(苦練復矣)

クロ　マグロ　40〈O, K, N, S〉

クロー　九男　30[七女], 31, 32〈N〉, 35[九男, 老人に多い]〈M, N〉, 37〈M, K〉

クロウ　九男　4, 20(九郎)

クロウシ　黒牛　31(クロウシ)

クロウゾク　黒牛　31〈M〉

クロエー　トビエヒ　40〈全〉

クロオトコ　僧　11(坊主)[淨家の衣色の形容詞なり]　20, 30[正月四日前の出家の称]

クロナダ　クロウツボ　40〈M〉

クロハゼ　クロハゼ　40〈O, M〉

クロバト　黒鳩　31(クロバト), 40(カラスバト)〈全〉

クロバトメ　カラスバト　40〈N〉

クロブ　クロアシアハウドリ　40〈O, M〉

クロヘビ　蝮　40〈全〉

クロマグロ　マグロ　40〈O, K, N, S〉

クロメ　鹽　31

クロメフヂ　ツル草の名　5

クロヲトコ　出家の事（但正月四日前計りいふ　正月祝ことば）　16

クロヲトロ　僧　4, 6, 37

クヮー　私ノ方デクヮニ　オ祇ヨ申シンノアートナリンノァーニ「私ノ方デコソ御祇ヲ申シ上ゲナケレバナラナイノニ」　25

グヮー　ワグヮーモアゲロワ「私ノモアゲル」　25

グヮノ　オミャーグヮノタモーレ「オ前ノヲオクレ」　25

クヮーブネ　湧き水　古語　今用ゐず　31

クワン　はや稲の支なり　11(稲)

ケ

ケ　マァトチットワルケモンドァトトテ

モ　クワーレタモンヂャ｛ニヤー／ネー｝
｜モー少シマズカローモノナラトテ
モクエタモノヂャナイ｜(未來)　25
ケー　今日　31, 32〈N〉
ケーゴウ　貝　28(ひ)
ケーゴードリ　モズ　40〈O, M〉
ゲジキ　値段高キヲイフ　12(下直)
ケイゼイ　今日　6(ひ)
ケイダルクッテ　草臥　17(ひ)
ケイビ　今日　12, 18
ケイビイ　今日　4, 5, 37
ケイヒヤウ　不能子(トカグ)　17　(ひ)
ケイビヤウ　蝮蛇ノ事　16
ケイブシ(ガビ)　鍼「内けいぶし　外けいぶし」
17(ひ)
ケケ　少しも　39
ケケシフヌ　少しも致せぬと云言葉なり
11(ひ, 毛經不ル義)
ケケュー　敷居　35〈K〉
ケゴドノ　ねずみ　31〈O, S〉
ゲジゲジメ　オホゲジ　40〈O〉
ケジメ　オホゲジ　40〈O〉
ゲタ　駒下駄　31(ゲタ)〈K〉
ケダイモノ　惰け者　31〈O, M, N, S〉
ケダモノ　けだもの　31(ケダモノ)
ケチサンケ　ふしぎがったと云に用ゆ
11(揔知散下)
ケチンボウ　吝嗇者(新)　31
ケツアナ　肛門　31〈K〉
ケツケシラ　不実の人　6
ケッケンジョー　片足飛　31〈O〉,　32
(ケツケンジョー)｜片足跳｜〈N〉
ケツシシラ　不実な人　37
ゲッパ　踏台, 踏踏台　31(ゲッパ)
ケデァモノ　怠惰者　32(ケデァモノ)
〈N〉
ケデーヤミ　惰け者　31
ゲト　下駄　23, 35〈O, M〉
ゲトァ　下駄　23〈K, N〉, 31(ゲトァ), 35
ケドウハソウ　草ノ名　5(ケドウ葉草)
ケドース　下水の流　30
ケドーズ　下水　31
…ケドツモ…　…けれども　19(ひ)
ケドワス　下水の流をいふ　16 (ケドワス)
ケーナ　カタ　31〈肩〉〈U〉
ケーナゲー　肩上を取る　ケーナは肩
31
ケネイダ　疲牛の事　16, 30 今夜　31
〈N〉
ケーノバン　今夜　31〈N〉
ケーノユル　今夜　31(ケーノユル)〈O,
K, N〉
ケービ　今日〈K〉, 今夜〈N〉31
ケビシヨガリ　ケブカマンジウガニ　40
〈M〉
ケービョーメ　とかげ　31 (ケービョー
(メ))〈O, M, S〉, 35〈O〉, 37, 40(ケ
ービョー(メ))｜ヲカガトカゲ｜〈O,
M〉
ケーフシ　躁　31〈O〉
ケフダイ　妹　17(ひ)
ケフダイブラノ　兄弟たちの　19(ひ)
ケフヒ　けふと云ことなり　11(今日日)
ケブリ　陰毛　31(ケブリ)
ケブリ　煙　32〈N〉
ケヘイクウ　いかなること　37
ケヘイソウ　いかふ　4(いかる事), 5
ケーラメ　とびはぜ　31〈S〉
ケリウ　たわむれによしと云所に用ゆ

11〈ひ，戯良〉
ケーリャル 『オ婦リニナル』 25
ケル やると云言葉なり 11〈ひ，被レ遣〉 16〔くれる事〕
ケール 婦ル 24〈M，S〉，27
ケロジヤナシ 呉れやすまいが 27
ケーロメ とびはぜ 31〈O，M〉
ケーロメ オニギンボ 40〈M〉，21〔キンボ〕〈O〉
ケーローメ オニギンボ 40〈M〉，21〔ギンボ〕
ケンケン 片足飛 31〈M〉
ケンケントビ 片足飛 31〈S〉
ケンコ 喧嘩 23〈O，M〉，35
ゲンコー 拳 31
ケンコア 喧嘩 23〈K，N〉，35
ゲンザク 似付カナイト云事 6〈ひ〉
ケンサリ 似附もないといふこと 5
ゲンザリ 似附もない 4〔似附もなひといふ事〕，37
ゲンヂンバ すみれ 31
ケントン うがひ茶碗の事 16
ケンドン 井 28 31〈ケンドン〉〔五郎八茶碗〕
ゲンビーメ かまきり 32〈N〉，35，37
ゲンベー 蟋蟀 31〈N，S〉
ゲンベイ 蟋蟀 35〈N〉，37

コ

コ 鷲ノナコー聞クト，ハヤ春ニナロアーダヮーニオメータソワ『鷲ノナクノヲ聞クト，イヨイヨ春ニナッタヨーニ感ジマス』，鷲ノ垣根ノアタリー来テナコモゼイブヨケモンダラ『鷲ノ垣根ノアタリニ来テナクノモズイブンイイモノダ』 25
コキーコ，コケーコ，コケイコ『ココヘコイ』 25
コ ドケーイコ『ドコエイクカ』 25
コー 手，甲 31
ゴー 脫ゴー『脫ゴー』〈意志〉 25
コア 川 30〈O〉
コア 井戸 31
コアゴアメ げんごろう 32〈N〉，37
ゴアサッテ 明々々後日 31〈ゴアサッテ〉
コアムラ 西北風，北西北 31〈K〉
コアメ 小雨 32〈N〉
コイツ 相手，他人 25
コイビ 小指 31
コウ 身のせなかに着るものを 頭にいただくものに用ゆ 11〈甲〉
コウコク 廣告，直音ニ発音ス 24〈O，M，K，N，S〉
コウサビレ ヒラアジ 40〈M〉
コウジキ 安き物をいふよし 12〈高直〉
コウゾク 皇族，直音ニ発音ス 24〈皇族〉〈O，M，K，N，S〉
コウニチ 九日の事〈正月祝ことば〉 16，17〔〈正月〉九日ハコウニチトテ諸ヲ椿ノ油ニテ揚五ニ祝フ〕
コウミヤ 產所を前にこしらへ置名なり 11〈子生家〉，30〔產所〕
コウミヤー 產室 31〈コウミヤー〉
コカウニ 跡をさして云事 16
ゴガゴンチ 端午の事 13〈五ケ五日〉，32〔端午節供〕〈N〉
ゴガサツテ 明々々後日 32〈N〉
コガシ 麦香煎〈新〉 31
コガタ こなたと云事 11〈ひ，此方〉，25

［方向を指す語］
コガタナドアートココニアロワ 小刀(こがたな)なら此所にある 27（小刀(こがたな)ドアートココニアロワ）
コガネエビ イセエビの一種 40
コーガリメ げんごろう 31
コギ 椀 6(ひ)
ゴキ 茶椀 11(ひ，飯器)［椀の事なり］，17［飯椀］，19，28，30，31(ゴキ)［飯茶椀］，32［飯椀］，40［飯椀］<N>
コギミ きび 32<N>
コクセコクラク いかにもくるしんでゐたなぞに用ゆ 11(ひ，斯世刻落)
コグヮンダ コンナ，コノヨーナ 25
ゴケ 寡婦 31
ゴケイリ 後妻 31(ゴケイリ)，32<N>，35<M，S>
ゴケイレ 後妻 35<O，K>
ゴゲータソヂャ オサムー（寒イコトヲコゲールトイフ） 25
コーケン 鳳仙花 35，37<M，K>
ココ 具名 5
ココ 場所を指す語 25
コーコー 伯叔母 32，35，37<N>
コーコーサマ 伯母 31<S>
ココセガツキ 久しい事を 12，18［久しい事］
コゴヘテシテ 寒さたへがたき事 16（コゴヘテ死テ）
コゴヘル 寒き事 16
コゴ(メ) ヤスリヒザラガヒ 40<O>
コーゴメ シマゲンゴラウ，ヒメゲンゴラウ 40<O>
ココラ 場所を指す語 25
コーゴリメ ヤスリヒザラガヒ 40<M>
ココヱル 寒 17(ひ)
コゴヨフ こちらへ 17(ひ)
コーゴンメ あめんぼ 31
ゴザ 莞筵 31
コシ 少シ 4(ひ)，6(ひ)，11(ひ，粉子)，［すこしと云言葉なり］，12，16［すくなき事］，17，18，37
コシ 山腹 31
コシ 腰 31
コーシ アンゴロコーシ「今頃来ルモノカ」 25(コーシ)
コシカケ 椅子 31(コシカケ <O，M，K>
コジキ 乞食 無き由 31(コジキ)
ゴシキエビ ゴシキエビ 40<M>
コシヒボ 腰紐 35<O>
コシマハシ 古き大布子の事 16
コジヤシキ 離家 31
コジュートウ 眞姑 31
コショカケ 椅子 31<N>
コシヨケ 釣箱 17(ひ)
ゴージロ コレーゴージロ「之ヲ御覧」 25
コスル 交合の事 18(ひ)
ゴセ 御新造，おかみなどということ 9，12(ひ)［女ぼう］，17(ひ)［妻］
ゴゼ 人の女房を云，夫の世帯をうけまもるゆえに云 11(ひ，護(モル)ヨリ出)，12［女房，(地役人の)女房］，18［女房］，
ゴゼ ごぜと云 11(瞽者)
コソ 夫コソ大変ダ「夫コソ大変ダ」 25
ゴゾウ 子供(悪口に) 17(ひ)
ゴタウク 不浄 17(ひ)<O>
コチ 東南風，悪風なり 31
コヂウト 徳あり又さ心あり 古き文に

通する人を云 11(ひ，古間人)

コチフチ 蒲公英(タンポポ)の類 5(小チフチ)

コチラ…オヂヤロワノー コチラワ大層靜カデオヂヤロワノー「コナタワ大層オ靜カデゴザイマスネ」 25

ゴツ 本箱ゴツ買ワラ「本箱トモ買ッタ」、盆ゴツヤル「盆サラヤル」，重箱ゴツイタダッテオキータソー「重箱ゴトイタダイテオキマショー」柿ヨザルゴツムロー「柿ヨザルゴトモラウ」 25

コヅカヒ 小使 清濁両様に発音す 24(小使)<O, M, K, N, S>

コツクドコロ 台所 30

コツクバ 台所 32(コツクバ)<N>

コッケンコケジャ ほとゝぎす 31(コッケンコケジャ)<O, N>

コッケンコケジャレ ほとゝぎす 31<K>

コッケンコケジョウ ほとゝぎす 31<M, S>

コッケンコケジョメ 時鳥 40<O, M>

コッコメ ハチジャウコッコ(鳥) 40<全>

コツコメ 腹の赤き鳥の事 16, 31[あかはら]

コツチ 方向を指す語 場所を指す語 25

コッチーオヂヤリヤロホウガヨロシクオヂロワ 此方(コッチ)へお出(い)でなさる方(ほう)が宜(よろ)しうございませう。 27(コッチーオヂヤリヤロ方が宜しくオヂロワ)

コッチヤ 指示代名詞(近称) 方向について云う 23(ひ)

コップ 昆布 23<O, M>

コッポードリ アヲバヅク 40<O, M>

コテー こうし 牡 31(コテー)

コーテー 牡牛 35, 37<N>

コテイ 牡牛 28(ひ)

コテーメ 牡牛(少) 32<N>

コトー アアヤドヲコトー「アアイヤダコト」，ホントニ寒ケコトー「ホントニ寒イコト」，困ロコトーノー「困ルコトネー」 25

コトウト 篤実ノ人 (ひ), 37

コトウド 篤実な人 4, 20, 37

コトフト 学徳才識者 30

コドモ 子供 31<M, K, N>

コトーヤ 吉田ガコトーヤコノ頃ワテットモキンナカ「吉田トイエバコノ頃頃ワチットモ來ナイネ」 25

コドリ 耳たぶ 31<O>

コナ 蚕の事 16

コナサマ 蚕 31, 32(コナ(サマ))<N>, 35(コナ(サマ))<全>

コーナシタ 誕生 31

コニヤーダ 此の間 32(コニヤーダ)<N>

コニラ 韮 31(コニラ)<O>, 32<O>

ゴネイタカンゲ 事を分けいひ聞るということ 4, 37

ゴネイヲカンデ 事を分けいひ聞るということ 5

コーノキ 樒 32<N>

コノサマ カヒコ(幼蠶) 40<O>

コノツキ 今月 31(コノツキ)

コハ 鶯ノ垣根ノアタリー來テナユハタイヘンノドカデヨケモンダラ「鶯ノ垣根ノアタリニ來テナクノワ大層ノドカデイイモノダ」 25

コバンバメ コバンイタヾキ 40<M>

ゴヒ　五男　10

コビル　九ツ時　18

コブ　昆布　24〈O, M, K, N, S〉

コブシ　拳　31

コブタエー　トビエヒ，アカエヒ　40〈全〉

コープリメ　蝙蝠（コキクガシラカウモリ）　40〈全〉

コーペ　皮膚　31

ゴヘイ　御幣　31

ゴボー　ごぼー　31

コボトケ　臍　31（コボトヲ）

コボンシ　イトトンボ類　40〈O〉

コマ　独楽　31（コマ）

コマイサラゲ　草ノ名　5

コマガ　こま楸　4, 5［農具のこま鍬］, 31［こま鍬］

コマガテ　農具の鍬　37（コマガ手）

コマデ　熊手　35〈S〉

コマドリ　駒鳥　40〈M, N〉

ゴマナダ　トラウツボ〈O〉，ゴマウツボ〈O, M〉　40

コマヒル　午前十時頃　31（コマヒル）〈O, N〉

ゴマフグ　トラフグ　40〈M〉

ゴマメ　トラフグ　40〈M〉

コマロコトーノー　困ることネー　27（困ロコトーノー）

ゴミ　薪　6(ひ), 17(ひ)［柴］, 19(ひ), 31（ゴミ）［薪，小さき薪］〈O, M, U,〉32(ひ)〈N〉

コムラ　腓　31

コームラ　西北風　35, 37〈M〉

コームラナレー　東北風　35, 37〈O〉

コメ　小牛　30

コメゴーシェン　米香煎　31〈N〉

コメコーセン　米香煎　31（コメコーセン）〈O, K〉

コメツキバッタ　キチキチバッタ　40〈O〉

コメビツ　米櫃（新）　31（コメビツ）

コモリ　下女の幼なるものの呼唱　2, 31（コモリ）［子守］

コモリ　祭前夜　32〈N〉

コユミ　暦　24〈O, M, K, N, S〉, 30

コラ　（呼かけ）　25

ゴラウ　五男　4, 5

ゴラゴラ　早く　28, 30, 32〈N〉

ゴラス　懲らす　24〈O, M, K, N, S〉

コリ　行李　24［但し行李ニ限ル］〈O, M, K, N, S〉, 44

ゴリェードノ　ねずみ　31〈K, N〉

コリャマア　コリャマアスミータサーニャー「コレハマアスミマセン」　25

コレ　物を指す語　25

コレンシャー　物を指す語　25

ゴロー　五男　31, 35（老人に多い）, 37

ゴロウ　五男　6(ひ), 11（男子元服前）［一男太郎，二男二郎，三男三郎，四男四郎，五男五郎，其下之に順ず］, 35［老人に多い］, 12（五郎）［男の子の事をいふ，但し郎とはいはず坊といふ也］, 16, 17(ひ), 19(ひ), 20(五郎), 28(ひ), 37, 44(ひ)

ゴロウジ　五男伯父の事　16

コロガル　清濁両様ニ発音ス　24（轉がる）〈O, M, K, N, S〉

コーロギメ　コホロギ類総称　40〈O〉

ゴロージロ　コレーゴロージロ「之ヲ御覧」　25

コロモ　子供　31〈O〉
コワ　川　24〈O〉, 27, 32〈N〉
コワダ　ひび　32〈N〉
コワツパメ　みずすまし　32（コワツパメ）〈N〉, 37（コワッパメ）
コヲミヤー　産婦　32（コオミヤー）〈N〉
コンキュー　飢饉　31, 32〈N〉
コンキュードシ　飢饉　31
コンゴ　老人の腰かかむ　17（ひ）
コンゴデー　腰の曲つた老人，男，男の蔑称にも使ふ　31
コンゴニナツテ　腰の曲る事　16
コンゴバー　腰の曲つた老人，女，女の蔑称にも使ふ　31
ゴンゴロウ　ソラスズメダヒ？　40〈O, M, N, S〉
コンデ　夫　30
コンチノヒ　一月九日，餅を油揚となして朝餐に食す　6（コンチノ日）
コンド　今年　31, 32（コンド（多））〈N〉
コンピラガニ　タイワンガザミ　40〈O〉
コンドーベーシ　黒き大蟻　31
コンヤ　今夜（古くは云はず）　31

サ

サアー　沢　44
サイカツタ　草ノ名　37
サイズツ　才槌　31〈O, M, S〉
サイノツ　藤木ノルイ　実ハ双角ノコトシ　故ニコノ名アルカ　37
サイノツノ　姫枝花　37
サエマノキ　豆州東南海濱ニテハ酒もつこくト呼ブ　海岸巌石ノ間ニ生シテ大木ヲ見ズ　季春五辨ノ白花ヲ開キ晩秋実熟ス　味佳ナリ　樹皮ハ茶褐色ノ染料トス　八丈新島等ニ多シ　18（ひ，さえまの木）
サガ　西北風　31
サカキ　榊ノルイニテ別種ナリ　37
サガサンチ　雛祭　16（三ケ三日）〔上巳の事〕, 32〈N〉
サガス　尋る事　16
サカズキ　盃　31（サカヅキ）
サガノカゼ　西北風　悪風なり　31
サギ　アヲサギ　鷺　40〈金〉
サキアー　境　30, 44
サキウウツェー　一昨々日　31〈O, M, U〉
サキウチチー　一昨々日　31〈K, N, S〉
サキカワ　爪皮　31
サキャー　境　24〈O, K, N〉
サキャワカラニヤー　先は分らない　24〈O, M, K, N, S〉
サキャワカラネー　先は分らない　24〈O, M, K, N, S〉
サク　錆雨　31〈N〉
サク　白黄色（シマユリ）　37
サクタラ　食案，八丈，三宅，大島等山中ニ産シ往々大木アリ，其新芽ヲ食フ（ひ）
サクダラ　山中ニ有テ大木トナル島人板ニ作テ器ヲ造レ　仲夏花咲キ秋ニ至リテ小実ヲ結フ　新芽ヲ取テ喰フニ味美也　37
サグレ　竹子　31〈K〉
サケ　酒，芋焼酎　31（サケ）
サケ　境　24〈M, S〉
サケー　境　30〈M, S〉
サゲシヨ　干潮　31
サケーノム　酒を呑む（さかの）　24（飲む）, 27

サザイ　コシタカサザエ　40〈O, M〉
ササウオ　八丈，三宅，神津島等ニテ漁ス　其形黒鯛ニ似テ脂多ク臭氣アリ　冬夏ノ候バンバトニ　海藻ヲ餌トシ釣ル18〈ささ魚〉
ササウヲ　黒鯛ニ似テ油深シ〈魚名〉　37
サザエ　さざい　31
ササギオケ　頭に載せる桶　31
ササグネ　竹の防風林　32〈N〉
サヽバヘンコ　牛夏〈草ノ名〉　37
ササスグリ　駒鳥　40〈N〉
ササメ　鰯　32, 35, 37〈N〉
ササメジロ　虫喰　40〈O〉
ササモグリ　駒鳥　40〈N〉
ササヤマ　籔　31〈M〉
ササヨ　雀魚　31〈ササヲ〉
ササヨー　メジナ，最大なるもの 150匁以上1貫4－500匁　40〈全〉
サシ　物差　31〈サシ〉, 32〈N〉
ザシキ　母屋　35, 37〈K〉
サシコ　さしこ　31
サシズツ　才槌　31〈サシズヅ〉〈K〉
サジャー　螺鰒　24〈O, K, N〉, 30
サシン　写眞　24〈O, N〉, 30
サスミ　刺身　24〈O, M, K, N, S〉
サズム　沈む　24〈O, M, K, N, S〉, 32〈N〉
サセル　働キサセル「働キサセル」, 案ジサセル「案ジサセル」, 射サセル「射サセル」, 起キサセル「起キサセル」, 借リサセル「借リサセル」, 來サセル「來サセル」, 感ジサセル「感ジサセル」, 損サセル「損サセル」, 足リサセル「足リサセル」, 延ビサセル「延ビサセル」, 干サセル「干サセル」, 封ジサセル「封ジサセル」　25
サゼー　螺鰒　24〈M, S〉, 30
サチー　古畑〈毎年種をまく比較的肥沃の地〉　31〈サテー〉〈M〉
サツキ　先　24〈O, M, K, N, S〉
サッチョ　汐の流れの一名　13
サツマ　甘藷　31〔薩摩芋〕, 32〈サツマ〈多〉〔さつまいも〕〈N〉, 35〈S〉
サツマジョ　さつま島　19〈ひ〉
サツマノ　甘藷の　27
サヅム　沈む　44
サテー　古畑〈毎年種をまく比較的肥沃の地〉　31〈サテー〉〈O, M, K, N〉
サトーバ　ソラスヾメダヒ？　40〈O, M, N, S〉
サナガシ　南風，西よりの風　17〈ひ〉〔風，弱〕, 31〈サナガシ〉〈S〉〔東南風〕
サバ　サバ　40〈全〉
サバク　裂ク　24〈O, M, K, N, S〉
サバフグ　サバフグ　40〈M〉
サヒレ　魚名〈シマヂヒ似た形のもの〉　37
サビレ　ヒラアジ　40〈M〉
サブサ　寒さ　24〈O, M, K, N, S〉, 30
サブロウ　男の子の事をいふ，通し郎とはいはず坊といふ也　12〈三郎〉
サブロジロドリ　カハラヒハ　40〈N〉
サボー　三男　31, 32〈N〉, 35〔三男，老人に多い〕〈M, N〉, 37〈M, N〉
サホウ　三男18
サボウ　三男　4, 5, 6〈ひ〉, 10, 16, 17〈ひ〉, 19〈ひ〉, 20, 28〈ひ〉, 44〈ひ〉
サボウジ　三男伯父の事　16, 19〈ひ〉〔三

番目の伯父]

サマ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25

サミー　寒い　24〈O, M, K, N, S〉

サミナミ　南風　17(ひ)

サメ　鮫類　40〈全〉

サメクサ　魚名　40〈M〉

サヨーオヂャロガ「サヨーナラ」25

サヨーオヂャロガゴキゲンヨク「サヨーナラゴキゲンヨー」25

サヨリ　サヨリ　40

サラシキ　高慢者　32〈N〉

サリャー　淡へ　24〈O, M, K, N, S〉

サリャール　30〈O, K, N〉

ザル　笊　31(ザル), 35〈K, N, S〉

サルボー　片手桶　31

サルメ　猿　32, 35, 37〈N〉

サレー　淡へ　24〈M, S〉

ザレ　戯れの事　16

サレガク　大笑ひといふ事を　18

サレル　サレル「焉ラレル」25

サワ　沢　31〈K〉

サワラ　サハラ, オキサハラ　40〈全〉

サエマノキ　蘇木ノ類カ　37

サン　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25

サンジツ　算術　24〈O, M, K, N, S〉

サンジャクヨビ　三尺帯　之は凡て麻の葉なりしと云ふ　31

サンドーラ　俵藁　31

サンナギ　カヒコ(蛹)　40〈O〉, 31[蛹]

サンナサッテ　明々後日　31(サンナサッテ), 32(サンナサッテ)[明後日]〈N〉

サンネンアシタ　藺草ノ三年ニナルヲ云フ　37(三年アシタ)

サンヒツ　蚕室　30, 24〈O, M, K, N, S〉

サンマ　サンマ　40〈全〉

サンマイ　捨て置と云事　16

サンマイハギ　カンランハギ　40〈O, M〉

サンメ　貝名　37

サンモ　薩摩芋　31〈K, N〉

サンヤマチ　二十三夜　正, 五, 九月　31(サンヤマヂ)

シ

シ　太陽　31〈K〉

シ……シ　雨ハフルシ風ハフクシ困ツテシマーラ「雨ハフルシ風ハフクシ困ツテシマッタ」25

シー　誰実　31〈O, N, S〉

ーシ　綺麗ダルヤーシ「綺麗ナモノカ」之ガスッパカルァーシ「之ガスイモノカ」之デヨカルァーシ「之デイモノカ」25

ジー　祖父(敬称として), 父(自)　32〈N〉

シアサッテ　明々々後日　31(シアサッテ)

シイ　牛をよぶ詞(をふ)　17(ひ)

シウデ　鰯魚を水にてくさらせ置き其汁を(云ふ)　18

シイドー　水道　24〈K, N, S〉, 30

シイモノ　吸物　24〈K, N, S,〉30

シイラ　シイラ　40〈O〉

シイリョー　推量　24〈K, N, S〉, 30

ジイロウ　五女　17(ひ)

ジイロフ　仲と云又次位(じいろふ)と云　11(其次)

シウジ　二男の伯父の事　16

シウデ　塩辛　骨なども入れて造りたるもの　31

ジウロウ　六女　13, 14〈O〉[七女～十女]

シェ　瀬　32(シェ)〈N〉

シェ　コレーシェ「コレヲシロ」　25

シエッカク　折角　32〈N〉

ジェニゲサ　かたばみ　31〈M, S〉

ジエネ　金銭　32(ジエネ)〈N〉

ジェヒ　是非　32(ジェヒ)〈N〉

シオカラ　通常の塩辛　31(シオカラ)

シカエ　控へ　30

シガサツテ　明々後日　32(シガサッテ)〈N〉

ジーガチ　すみれ　32〈N〉

シカヘ　控え　24〈O, M, K, N, S〉

シカメ　鹿　32, 35, 37〈N〉

シキ　咳　31(シキ)

シキー　咳　31

ジキー　甘藷　30〈K〉, 32〈N〉

ジキイ　甘藷　35(ジキイ)〈N〉, 37〈N〉

ジキム　力む　32〈N〉

シギムシ　オホザウムシ　40〈M?〉

シギメ　ヤマシギ　40〈全〉

ジギョ　地形，田の底を固めること　31〈K〉

シキヰー　敷居　35〈S〉

シク　引く　24〈O, M, K, N, S〉, 30

シク　あるく事　16

シゲ　格注(シダ)ノルイ　ヘゴト云モノナルベシ　5

シグラ　台所　35〈N〉

シグレ　時雨　31

シグレン　熟練　24〈O, M, K, N, S〉

シケ　暴風雨　31(シケ), 35[暴風]〈M, N, S〉, 32((オー)シケ)〈N〉

シケー　敷居，鴨居　23[敷居]〈O, M〉31(シケー)

シケイ　敷居　35〈N〉

シゲタ　尻　4, 18(志げた), 19, 20, 37

シゲダ　尻　37

シコ　曾孫　31(シコ)

シシ　とゝまれとゆうことに用ゆ　11(止止)

シーシ　しんし　31

シーシー　牛の掛声，行く時　31(シーシー)〈O, M, K, N, S〉

シシクジリ　タマヤスデの一種　40〈O〉

シジム　沈む　24〈O, M, K, N, S〉

ジジヤー　自在鍵　31〈O, K, N〉

ジジユーガラ　四十雀　40〈K, N〉

ジジユーニチ　さつまいも　32(シジューニチ)〈N〉

ジシン　地震　31(ジシン)〈K〉

シス　縞子　24〈O, M, K, N, S〉

シズ　筋(すぢ)　24〈O, M, K, N, S〉, 27

ジゼー　自在　23〈O, M〉

シソ　しそ　31

ジゾーコー　地蔵祭　31

シタ　(過去)　25(爲タ)

シタ　舌　31(シタ)

シタオビ　褌，男褌〈S〉　31, 35[褌]

シタカゼ　南風　31〈K〉

シダキ　木性ツヨク嵩人斧鉈ノ柄トス　5

シータス　ウグヮーニシータス「アンナニシマス」アノヨーニシマス」，黄いろくシータス「黄いろくシマス」，綺麗ニシータス「綺麗ニシマス」，四角ニシータス「四角ニシマス」，涼しくシータス「涼しくシマス」，ソグヮー

シータス「ソンナニシマス」『ソノヨーニシマス』、沢山ニシータス「沢山ニシマス」ドゲァーニシータス「ドンナニシマス」『ドノヨーニシマス』、ヌクトクシータス「暖くシマス」、ネッコクシータス「小さくシマス」、ヒロくシータス「廣くシマス」、マヅくシータス「まずくシマス」、善くシータス「善くシマス」、薬ニシータス「薬ニシマス」、僅ニシータス「僅ニシマス」、悪くシータス「悪くシマス」25

シダタミ　イキダタミ　40〈O, M〉

シタタミゴウ　丈鳩特有の小さな貝　27

シタダンクンクン　鳩がボウボウ啼いて居る　27

シタダンクンクンテ、トホアガライモノチンゴヲヤイテオカツトロガサンメーカ

シダンノー　鳩がボウボウ啼いて居るその鳩の啼声に迂かと聞き惚れて居つたが憶い出した父と母親が孝の小さいのを殺いて置いて下さつたもう焦げて了ったか知れない早く帰って見て来よう　27

シタハ　格注ナリ（草の名）　37（シタ葉）

シダヨウ　紫珠ノ一種ナリ　長丈許ニシテ叢生ス　秋季結実ス　16（志だよう）

ジダラ　不浄　17（ひ）〈M〉

シタラバ　（假定）　25

シダリメ　ダニ類　40〈O〉

シチヤノイワイ　七夜祝　31

シチロウ　七男　12（七郎）［男の子の事をいふ，但し郎とはいはず坊といふ也］，17（ひ）

シッカリ　沢山　32（シッカリ）〈N〉

シッキー　隆準鼻　31（シッキー）〈N〉

シッダ　（過去）　25（死ッダ）

ジッタ　糖味噌　31（ジッタ）

シッタカ　ヒメクボガヒ　40〈O, M〉

ジッタズケ　糖味噌漬　31（ジッタズケ）〈O, K〉

シッタラニヘイタ　あめにあふてしほる雨ぬれたと云事　11（ひ）（足レ敗爲レ濕）

シッタラヘイタ　雨水にぬれたこと　18

シッタラベイタ　雨杯にぬれたる事　4

シッチヤウ　七男　6, 14（ひ），20

シッチョー　七男　31, 32（シッチョー）〈N〉

シッチョウ　七男　5, 28（ひ），44［七男，七郎］

ジッチョウ　十男，十郎　44（ひ）

ジッテウ　七男　6（十ってう）

シッテフ　七男　19（ひ）

ジッテフ　十男　19（ひ）

シッテョウ　七男　10

シツニュー　出入　24〈O, M, K, N, S〉

シツバシゴ　末子　32〈N〉

シッパツ　出発　24〈O, M, K, N, S〉

シッパリー　心張棒（古）　31（シッパリー）〈O, M〉

シッパリボー　心張棒　23〈O, M〉

シッペタ　女陰　31, 17（ひ）［尻］，19［尻べた］

シッペヰ　肛門　31〈O, M〉

シツホウ　身の廻り立派なること　4, 5, 37

シテー　額　24〈M, S〉，31

シテァー　額　31（シテァー）〈K, N〉

シテーモノ　單衣　31

シテャー　額　24〈O, K, N〉，31〈O〉，30

シト　人　24〈O, M, K, N, S〉
ジード　伯叔父(少)　32〈N〉
ジートイ　牛の掛声　行く時　31〈M〉
シトコ　仲春花咲夏ニ実ル　木ハ細ク立延テ二丈ニ余　37
シトダマ　人魂　31(シトダマ)
シドデモ　尻尾でも　27
シトミ　蠶　31(シトミ)
シートメ　白鳩　31〈O, M〉
シナ　砂　31(シナ)〈K〉
シナモト　男の前をいふ　9(ひ)
ジナラシ　地形　31(ジナラシ)
シナラバ　(假定)　25(死ナラバ)
シニマス　嬉しい　18(ひ)
シニャー　爲ない　24〈O, K, N〉
シヌダロー　(推量)　25(死ヌダロー)
シネー　爲ない　24〈M, S〉
ジネンジョ　自然薯　31(ジネンジョ)
シノー　(未來)　25(死ノー)
シノークロ　椎実　31(シーノークロ)〈K〉
シバムカヒ　十二月ハ塩釜五ケ村ニテ焼也　年納メ廿八日ヲ芝向ヒトテ餅搗　17(芝向ヒ)
ジバン　襦袢　31(ジバン)
シブ　海中の毒氣なり　8(ひ)
ジーブ　随分　32〈N〉
シホウ　草ノ名　5
シマアジ　ヒラアジ　40〈全〉
シマウリ　青瓜　31
シマヂ　魚名　5
ジマツリ　地鎭祭　31(ジマツリ)
シマナダ　ウツボ〈O〉, シロウツボ〈M〉　40
シマハ　ウラジロノコト　5(シマ葉)
シマバラ　草ノ名　5
シマユリ　島百合　31
シミヤーゴ　末子　32(シミヤーゴ)〈N〉
ジミョー　壽命　24〈O, M, K, N, S〉
シヤー　家ンシャー(複数)オミヤンシャーソゲゥンドヤーコトンシャー(複数)ワレンシャー(複数)ワレンシャーワアダンデモヨクオヂャロワ「私ナゾワドーデモヨーゴザイマス」「私ナンゾドーデモヨーゴザイマス」「私ナドドーデモヨーゴザイマス」「私ナンカドーデモヨーゴザイマス」「私ヤナンカドーデモヨーゴザイマス」、ソレーワ子供デシャーショケモノー「大ワ子供サエ知ッテイルモノヲ」本シャー(複数)　25
シヤアアノガ…　ことば多き事　16
シヤアイ　さまを見る　17(ひ)
シヤアカミ　每家に祭る蚕神　20
シヤアガミ　社殿　5, 6[蚕神], 37[社頭]
シヤアガミ　口きく事かづかづなる形容を見てわる口に云ことなり　11(ひ, 白淡鹽)
シヤアトメ　鳩の事　16
シヤアエナシ　心なきと云ふ事　4, 5, 6(志やあえなし), 37
ジヤイモク　材木　23〈O, M〉
ジヤウ　次男　6(ひ)[次郎], 10(ひ), 17(ひ)[二男], 19(ひ)
シヤウギ　貴人の椀の事　16
ジヤウギ　飯椀　17(ひ)
ジャウナギ　トラウツボ　40〈M〉
ジャガイモ　馬鈴薯　31, 35〈O, M, N〉
ジャガタラ　馬鈴薯　31, 35〈K, S〉
シヤーク　大工　32(シヤーク)〈N〉
シヤクシ　杓子　31〈O, M, N, U〉

シヤクトリ　しやくとり　31

シャクフ　酌婦　31〈M, K〉

ジャクロ　櫛　24〈O, M, K, N, S〉, 30〔栉櫛〕

シヤケ　鮭　5〔魚名(國地ノ鮭ニ似ルユヘ此名アルカ)〕, 11〔鮭〕, 24, 30, 44

シャコ　シヤコ類総称, フトコビシャコ　40

シャゴツコ　ハチジヤウコツコ(鳥)の雌　40〈O, M〉

シヤジキ　棧敷　24〈O, M, K, N, S〉, 30

ジヤシキ　座敷　24〈O, M, K, N, S〉, 30　31, 32(ジヤシキ, 音韻轉訛, ザ行)〈N〉, 35〈O, M, K〉

シヤシヤケル　火でやける　17(ひ), 28〔焼ける　熱い〕

シャツガ　粗桑　31

シャックリ　しやっくり　31〈K〉

ジャッタ　イキンジャッタ「行カナカッタ」, アスビンジャッタ「遊バナカッタ」　25

ジャツ(ザッ)コク　ごった煮　14(ジヤッ(ザッ)コク〈N〉

シャッチ　是非ともにと云事　4, 11(ひ, 赫智)〔道理をのけてむりにもと云言葉なり〕17(ひ)是非共(シヤツチ)に, 18(ひ)〔是非ニト云〕, 19(ひ)〔ぜひぜひ〕37(ひ)〔是非共(シヤツチ)に〕

シャッツラ　憎らしい　28, 32(シヤッツラ)〈N〉, 44(憎い奴)

シャッツラ　顔　31

ジャードコロ　台所　35〈K〉

シャットリムシ　シャクトリ類(幼蟲)　40〈O〉

シャートメ　キジバト　〈40N〉

ジヤトリアビ　苺(イチゴ)ノルイ　5ッ(ザッコク)〈N〉

シヤネ　実　17(ひ)

ジャノメカラカサ　蛇目傘　31(ジヤノメカラカサ)

シヤハトコメ　接骨木(ニハトコノキ)　5

ジャブリー　饒舌者　31

シャブリコ　おしやぶり　31(シャブリコ)

ジャームク　材木　24〈O, K, N〉, 30〈O K, N〉

シヤル　退く　32(シヤル)〈N〉

ジヤル　笊　35〈O〉

シヤレ　のけと云ふ事　16, 17〔そこをのけ〕

シヤエイナシ　おのれのなすべき芸をとり失ふものを云ふ　11(ひ, 無一射(イレロヤモル)藝)

ジャンケン　石拳(新)　31

シャンコズラ　痘痕面　31

シヤンミ　しらみ　31

シヤンメ　虱　28(ひ), 31, 37(シャンメ)〈N〉, 40(シャンメ)〔シラメ類総称〕〈O, M〉, 44

シヤンメ(ミ)　虱　32〈N〉

シューゲン　祝言　31

ジュス　留守　23〈O, M〉

シューセン　彼岸花, 根　31(シューセン)

シユーデ　塩辛　32(シユーデ)〈N〉

シュモクザメ　シュモクザメ　40〈全〉

ジュリ　地震　31

ジュロー　十男　32〈N〉, 35〔老人に多い〕〈N〉, 37〈M, N〉

シヨ　塩　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 44

ショ　畑　18(ひ), 19

ショ　潮　31<O, M>

ショ　私ワカショクイテャー「私ワ菓子ガタベタイ」25

ショー　四男　31, 35[老人に多し]<M>, 37<M>

ショー　ショー「ショー」(意志)　25

ショー　(未來)　25(爲ヨー)

ジョー　次男　28(ひ), 31, 32<N>, 35[老人に多い]<M, N>, 37<M, N>

ショアト　白鳩　31(ショアト)<K, N>

ショアトメ　キジバト　32(ショアトメ)[鳩]<N>, 40<N>

ショアリメ　イヘシロアリ　40<O, M>

ショイウリ　行商人　31(ショイウリ)

ショイウリジー　行商人　32(ショイウリジー)<N>

ショウ　負ふ　32(ショウ)<N>

ショウ　四男　5(ひ), 6(ひ), 10, 16, 17(ひ), 18[二男], 19(ひ), 20, 28(ひ), 44[四男, 四郎]

ジョウ　次男, 次郎　44(ひ)

ジョウダク　少数ノ人ハ清音ニモ発音ス　24(承諾)<O, M, K, N, S>

ショウジ　四男伯父の事　16

ショウヂ　四番目の伯父　19(ひ)

ジョウヂ　伯父(二番目の伯父)　19(ひ)

ショウブ　余計の事　16

ショーガクボー　アカウミガメ　40<全>

ショガニツ　満潮　32(ショガニツ)<N>

ショガヒル　干潮　32<N>

ジョーギ　茶碗類の総称　31(ジョーギ)

ショクダイ　ガンギエヒ　40<O>

ショクテン　料理屋　31

ショクナイ　知らぬと云言葉なり4[知らざる事]、11 (ひ, 無ㇾ識),

ショクナケ　知らぬ　17(ひ)

ショクナヒ　しらぬ事　16

ショグネ　防風林　海岸に作り汐を防ぐもの　31

ショクモナイ　ヽヤレ知事　18(ひ)[しらぬ], 20

ショケ　知る　17(ひ), 37

ショゲ　知ル事　20

ショケダ　知つたと云言葉なり　11(しよけた？(識方))

ショゴ　カンパチ　40<O, M, N, S>

ショサイ　魚名　5

ショージ　障子　31

ジョーシ　漁師　32(ジョーシ)<N>

ショーシャーメ　あめんぼ　31<S>

ショショゲル　乾く事　16

ショーショーメ　あめんぼ　31<K, N, S>

ショーチキ　祥月命日　31

ショーチュー　芋焼酎　31

ジョツクメ　肥大な牛　32(ジョツクメ)

ショツケ　鮫膚　31<O, M>

ショツケ　干魚(古)　31

ショツケラ　鮫膚　31<K, N>

ショツチュー　始終　32(ショツチュー)<N>

ショツパイ　塩辛い　23

ショテ　最初　32(ショテ)<N>

ショテツ　蘇鉄　24<O, M>, 30<O, M>, 31

ショート(メ)　白鳩　31<O, M, S>, 40[キシバト]<O, M>

ジョードノ　息子, 名を云ふもの多し　31

シヨナクチ　フエフキダヒ類　40

シヨナヌカ　初七日　31(シヨナヌカ)

シヨハト　キジバト　40<M, K>

シヨーブ　年長　7, 32(シヨーブ)<N>

シヨーブ　余計　30

シヨボブリ　小雨　31<K>

ジョーリ　料理　32(ジョーリ)<N>

ジョーリ　草履　23<O, M>, 24<O, M, K, N, S>

ジョーリニン　料理人　23<O, M>

ショーリメ　イヘシロアリ　40<M>

ジョーリヤ　料理屋　31

ジョーロ　酌婦　31<O>

ジョーロヤ　料理屋　31

ションベン　尿(新)　31

シラシラアケ　薄明　31<O, K, N>

シラタケ　蘆竹(ナヨタケ)ノルイカ　5

シラブ　鳥名　(海鴉ニモアルカ)　5, 40　[アハウドリ]<O, M>

シリ　女陰　6(ひ), 9[女の前を云う], 10, 17(ひ), 19(ひ)[女根], 31

シリゲタ　ふしきのことをいふ　11(ひ, 尻歌)

シルシギ　鷸(稀なり)　40<O>

シレー　白イ　30, 24<O, M, K, N, S>

シレニャー　マワリハ靜カダカシレニャ=「マワリハ靜カカシラン」　25

シレンニャー　味ハドーダカシレンニャ=「味ハドーカシラン」　25

ジロ　鹽　32<N>, 35<K, N>

シロウ　一男太郎二男二郎三男三郎四男四郎五男五郎其下之に順ず　11(男子元服前), 12(四郎)[男の子の事をいふ, 但し郎とはいはず坊といふ也]

ジロウ　一男太郎, 二男次郎, 三男三郎, 四男四郎, 五男五郎, 其下之に順ず　11(男子元服前), 12(二郎)[男子の事をいふ, 但し郎とはいはず坊といふ也], 12[次男の事], 20(次郎)[次郎]

ジーロウ　末女　31

シロウリ　白瓜　31

シロサギ　白色鷺類　40<全>

シロサツマ　さつまいも　32<N>

シロハト　キジバト　40<K, N>

ジロブチ　蟾蜍　32<N>

ジロブチ　蟾蜍　31

シワシンナカ　シヤーシナイ　25

ジキサマ　流人御はたた元は老人にても若きにても　18(じの誤)

ジンキ　やきもち　17(ひ)

シンキチメ　ばった　31<K>

シンゲタ　尻の事　16, 18

ジンジー　老人　35<N>

シンジンバナ　菫　35<O>

ジンジンバナ　菫　37<O>

シンゾードリ　カハラヒハ　40<K>

シンノコ　女陰　11(ひ, 尻壺)[後門のことをいふなり], 30, 31[肛門]<M, K>, 32<N>,

ジンバシー　鳥に対して諧謔的にいふ　30

シンブチ　草ノ名　5

ス

ス　暗礁　35<O>

スイカ　西瓜　31

スイゲン　水源　31

スイスイメ　虫喰　40<O>

ズイフン　病の重き事　16

スエツコ　末子　35〈M〉
スガキ　台所　17〈ひ〉[流しもと], 28〈ひ〉, 30, 31〈スガキ〉46〈ひ〉,
スキイタ　敷板　24〈O, M, K, N, S〉
スキモノ　敷物　24, 24〈O, M, K, N, S〉
スク　敷く, 布く（或ハヒク, トモイフ）24〈O, M, K, N, S〉
スクトーシ　蟬　31〈M〉
スクトーシ　東子　31
スケニャー　少イ　24〈O, K, N〉
スケネー　少イ　24〈M, S〉
スシハ　羊蹄大黄（草ノ名）　5
スジガツー　ハガツヲ　40〈O, M〉
スズ　雀（稀に云う）　40〈全〉
スズ　珠数　44
ズズ　珠数　24〈O, M, K, N, S〉, 30
スズガモ　鴨類　40〈M〉
ススタマ　盗賊　4
スヽダマ　孫六盗賊　6〈ひ〉
スズメ　雀　32〈N〉, 35〈K〉
ズゼー　自在鍵　31〈M, U〉
スダコ　アナダコ, イヒダコ〈O〉　40
スチウヲ　魚名（厳地ノフナニ似タリ）5
スツポー　筒袖　31〈O〉, 35〈S〉
スッポン　筒袖　31〈N〉, 32〈スツポン〉〈N〉, 35〈N〉
スッポンガメ　スッポン　40〈O, M〉
スヅメ　雀（稀に云う）　40〈全〉
ステゴンボンボン　アヲバヅケ　40〈K〉
スト　ストソケー蛙ガピョイピョイトビデャーテキテ「スルトソコエ蛙ガピョコピョコトビ出シテ来テ」　25
ストモウ　物に穴をあけることなり　11〈ひ（爲通採）〉
スナ　オソースナ「ウソヲユーナ」ソゲヲンドゥーコトースナ「ソンナコトヲスルナ」　25
スナ　砂　31〈スナ〉〈O, M, N, S〉
スナゴー　砂浜　35〈S〉
スナジ　砂地, 砂地のあるのは三根村垂戸ケ浜だけ　31〈M〉,
スナヂ　砂浜　30〈O〉
スナッパ　砂浜　35〈M〉
スナバ　砂浜　35〈O〉
スナバマ　砂浜　35〈K〉
スナモグリ　ベラ又はテンスダビ類?　40〈O〉
ズニャナリンナカ　コレカライカズニャナリンナカ「コレカライカナケレバナラナイ」「コレカライカナケリャナラナイ」　25
ズニン　流人　13
スネ　脛　31
スノー　砂原　31
スバリ　スバル　31〈O, M〉
スバル　スバル　31〈N〉
ズベル　辷る　24〈O, M, K, N, S〉, 30
スミ　疑問（奥の間）　31〈スミ〉〈K〉
スモ　角力　24〈O, M, K, N, S〉
ズリー　づるい　24〈O, M, K, N, S〉, 30
スリバツチ　摺鉢　35〈O, M, K, S〉
スリーモノ　玩具　32〈N〉
スリーヤー　飯事　31〈S〉
スルス　鞍轡　31
スルダロー　（推量）　25〈爲ルダロー〉
ズルベル　辷る　24, 30
スレイヤド　飯事　31〈M〉

セ

セ　コレーセ「コレヲシロ」 25
セー　栄　35〈O, M〉
セイ　弟妹　18
ゼイ　弟の事　13[妹], 16, 17(ひ)
ゼイ　知る事　4
セイセノ　吸物　30〈M, S〉
セーイチトビ　トビウヲの一種　40
セーイチドミ　カンランハギの一種　40〈M〉
セイドー　水道　24〈O, M〉, 30
ゼイモ　知ル事　20(ゼイモ)
セイモノ　吸物　24〈O, M〉
セイリョー　(推量)　24〈O, M〉, 30〈M, S〉
ゼウギ　自分の腕　19(ひ)
セウブ　いらひを云ことなり　11(ひ, (勝レ分)カツワクニ)
セガレ　息子, 自称(新)　31
セキシツ　石筆　24〈O, M, K, N, S〉, 30
セジル　煎じる　32〈N〉
セダ　似せる事　16
セチブン　節分　31
セツコリ　しづかに　17(ひ), 18[そつといふこと]
セツタン　沢山なること　5
セッポ　高い畑　31(セッポ)
セーテン　早熟　31
セドカド　うらくち　19(ひ)
セドミチ　小路　31(セドミチ)
セトモノ　陶器　31
ゼニガリ　トゲアシガニ　40〈O, M〉
セニグサ　5(セニ草)
ゼネ　銭　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31
[金銭]
ゼネガネ　金鑑　31(ゼネガネ)
ゼネクサ　かたばみ　31
セビレ　高い畑　31〈K〉
セヘツコリト　ひそかに　19(ひ)
セミトビ　アカトビウヲ　40
セムシ　傴僂　31
ゼーモク　材木　24〈M, S〉, 30〈M, S〉
セル　居セル「居(オラ)セル」, ユワセル「云ワセル」, 介抱サセル「介抱サセル」, 買ワセル「買ワセル」, 評サセル「評サセル」, ブッチャラセル「捨テサセル」, 勉強サセル「勉強サセル」, 見セル「見セル」, 列サセル「列サセル」 25
セール　副える　24〈O, M, K, N, S〉, 30[副へる]
センタク　清音ノミニ発音ス　24(洗濯)〈O, M, K, N, S〉
ゼンノツナ　人死て棺に附て送りの人忌を変る原漏よりて例を定る縄なり　11(ひ, 善縄)
センムシ　傴僂　31

ソ

ソー　伏ソー「伏ソー」(意志)　25
ソー　澤　31〈O〉
ゾ　アンゾウマケモノワニャーカ「何ゾウマイモノワナイカ」, ドケーゾオモシレートコレーイコー「何処カオモシロイトコロエイコー」, ダレゾアロカ「誰ゾイルカ」　25
ソア　谷, 澤　32〈N〉
ソアー　澤(さわ)　24〈M〉, 27, 30〈M〉

ソイカサレタ　魅セラレタ　6〈ひ〉
ソイデ　ソイデサツキノコトドゥーガノー「ソコデ先刻ノ件デスガネ」　25
ソウォアグ　騒グ　32〈ソウオアグ〉〈N〉
ソウォル　触ル　32〈ソウオル〉〈N〉
ソウダカツヨ　スマ　40〈O〉
ソウタキ　花の紫陽花(アヂサイ)に似た木　5
ソウタヲバフン　返答スル　4
ソウメ　雄牛ノ事　16
ゾウメ　牡〈ヲウシ〉　17, 11〈ひ, 僧銘〉[牡牛のするどきを云]
ソウメヲオフ　かりをおぶと云言葉なり　11〈屈=増迷--〉
ソウメヲハラフ　がりをはらふを云　11〈拂=添迷--〉
ソウメン　素麺　31
ソウレイ　葬儀　31
ソウヲオウ　借用するを　4
ソガアンダレ　左様にと云事　16
ソガタ　方向を指す語　25
ソガンシテ　さうして　32〈N〉
ソカンニ　そんなにと云事　16
ゾク　牡牛　16[老牛の事], 17〈ひ〉[牯〈ヲウシ〉], 19〈ひ〉, 28〈ひ〉, 31[うし, おうし], 35〈O, M〉, 37〈O, M〉, 40〈全〉
ソクノウ　そこなふ　24〈O, M, K, N, S〉
ソグヮンシテ　ソグヮンシテソノアトワアダンオリーテャータ「ソーシテソノアトワドーナリマシタ」, 「ソシテソノアトワドーナリマシタ」, 「シテソノアトワドーナリマシタ」, 「デソノアトワドーナリマシタ」　25
ソグヮンスト　ソグヮンストソケー蛙ガピョイピョイトビデャーテキテ「ソースルトソコエ蛙ガピョコピョコトトビ出シテ来テ」　25
ソグヮンダ　ソンナ, ソノヨーナ　25
ソグヮンダラノー　ソグヮンダラノーアダンモコマリータソワノー「ソーデスネドーモコマリマスネー」　25
ソコ　場所を指す語　25
ソコガリマ　大キイ蟹　6〈ひ〉
ソコサメ　魚名　5
ソコド　流人悪事ヲ爲ス時ハ之ヲ捕ヘテ官府ニ訴ヘ死罪ナル時ハ之ヲ海岸ノ高巌ノ上ヨリ眼下ニ突落シテ殺ス其処ヲソコドト呼ヘリ　6
ソコラ　場所を指す語　25
ソコリ　干潮　35〈S〉
ソコレ　干潮　35〈K〉
ソコンデハナイ　左様デハナイ　18
ソサ　一寸　30
ゾーセー　雑穀, 麦その他にて造りたるもの　31
ソゾシイ　涼イ　24〈O, M, K, N, S〉, 25, 30
ソゾメ　雀　30
ソダー　粗菜　31
ゾツカ　牡牛　35, 37〈ゾッカ〉〈S〉
ゾック　牡牛　35〈ゾック(メ)〉〈K〉, 44〈ひ〉
ゾックメ　牡牛　31[うし, おうし]〈M, N, S〉, 37〈K〉
ソツゾケ　ふせいなき貌　17〈ひ〉
ソッチ　場所を指す語, 方向を指す語　25
ソッチャ　指示代名詞　(中称)方向について云ふ　23〈ひ〉

ソデ　袖　27

ゾーテ　今日ワクロゾーテイッテアララ「今日ワタルトイッテイタ」25

ソデナシ　袖無　35〈O, K, S〉

ソトノマ　居間　35, 37〈S〉

ソナヘグ　勝手向の器のことを云　11（ひ, 備具）

ソナヘコ　野菜の類を入るる器　5

ソナヘゴ　野菜の類を入れる道具　4[野菜の類を入れる器], 37

ソナラベ　女子　5

ゾーニ　雑煮　丸い餅(フクデ)を入れる　31

ソノツギ　仲と云又次位等と云, 程子又久諺以理又富止本朝にて末子を止松末松などとしゃくする如し　11

ソバカサレタ　ばかされたなどいうこと　9

ソバカサレタ　化サレタ　44

ソバカス　蕨ス　32〈N〉

ソフ　桁　17(ひ)

ソマ　樵夫　31

ソミザケ　清酒　31(ソミザケ)

ソメ　蜻蛉　30

ゾーメ　うし, おうし　31〈K〉

ソメヤ　紺屋　31(ソメヤ)

ソモジ　旋毛　31〈O〉

ソラ　天　31(ソラ)

ソーラ　ソーラキータソワ「ソーラ来マスヨ」25

ソラソラ　ソラソラキータソワ「ソーラ来マスヨ」25

ソラマメ　そらまめ　31(ソラマメ)〈K, N, S〉, 35[蚕豆]〈O, K, S〉

ソリ　かみそり　18, 31(ソリ)[剃刀]

ゾーリ　草履　31

ソリャーワリー　それは悪い　24〈O, M K, N, S〉

ソリャソレテ　ソリャソレテキネーノ話ワアダンナリーテャータ「トコロデキノーノオ話ワドーナリマシタ」25

ソレ　物を指す語　25

ソレカンダコトダ　左様の事では　18

ソレヂヤーダレダリヤーテコマロヂヤノー　それぢや誰れだつて困るものネ　27（それぢやー誰ダリヤーテー困ロヂヤノー）

ソレール　揃える　24〈O, M, K, N, S〉30[揃へる]

ソロ　梭摺　5

ソロソロ　後程と云事　16, 30[後程]

ソロフス　氣分すぐれず床につくを云　9(ひ, 這臥)

ソワオ　澤　31〈N〉

ソンジタ　（過去）　25(損ジタ)

ソンジタラバ　（假定）　25(損ジタラバ)

ソンジルダロー　（推量）　25(損ジルダロー)

ソンナコタニヤー　そんなことはない　24, 27

ソンナコタネー　そんな事はない　24〈O, M, K, N, S〉

ソンノア　釣糸　31〈K〉

ゾンブンマイレ　たんとあがれ　17(ひ)

タ

タ　買ツタ「買ツタ」, 借リタ「借リタ」, 來タ「來タ」, 爲タ「爲タ」, 飛ビタ「飛ンダ」, ソグゥンダツタカノー「ソーダッケカネー」, ボーカツタ「大キカツタ」, 善カツタ「善カツタ」25

ダ　死ンダ「死ンダ」，ソコダソコデマツトテツヒドクツッコンデヤリャヨカロァーニ……「ソコダソコデモーツスルドクツッコンデヤルトヨカッタノニ……。」 25

ダ……ダ　ウレダコレダトイロイロエリキリヤー申シーテャーテ「アレノコレノトイロイロエリキライヲ申シマシテ」，アンダカンダトイツテ「アアノコーノトイツテ」 25

ダイサン　八ツ時過の事 16

ダイサン　八ツ時 17(ひ), 30

ダイサンサガリ　七ツ時 17(ひ)

ダイサンドキ　八ツ半時 18

ダイシイ　うつくしき着ものうつくしき人に用ゆ 11(ひ，題辞衣)

ダイジイ　うつくしい 17(ひ), 18[美しい事]

ダイジケソフ　うつくしくして人の言葉にのせるを云 11(ひ，題辞化粧)

ダイシャン　八ツ時 30

ダイシャンドキ　八ツ時より七ツ時にうつる頃を云 11(ひ，代寫時)

ダイヂイ　美しき事 4, 5, 6[美キ], 37[美しい]

ダイヂャイ　美キ事 20

ダイドコ　台所 35〈O〉

ダイネン　来年 24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31〈M, S〉

ダイヤ　隼夜 31

ダイロ　平地（山の上にある草地などをも） 31〈O〉

ダェロメ　なめくじ 31〈S〉

タカ(メ)　鷹 40〈全〉

ダガ　人代名詞(不定称) 22(ひ)

タカカラ　竹にて作る籠の事 16

タカガリ・ガザミ類〈O〉，イボシヨウジンガニ〈O, M〉 40

タカサウシ　天南星同性(草花ノ名) 5

タカダラ　穀物を入るる器 4, 5, 37

タカノハ　タカノハダヒ 40〈O〉

タカヤブ　籔 31〈O〉

タカラ　竹籔をいふ 12

タキ　滝 31(ダキ)

タキャ　之モブッチャリタキャ「之モ捨テタイ」 25

タギヤーニ　互に 32(タギヤーニ)〈N〉

ダク　容易い 32(ダク)〈N〉

タケ　云イタケコトガ沢山アル「云イタイコトガ沢山アル」，買イタケモノガ沢山アル「買イタイモノガ沢山アル」 25

ダケ　アナタダケ「のみ」，アレダケ「のみ」，ウレダケ「のみ」，オレダケ「のみ」，オミヤーダケ「のみ」，コレダケ「のみ」 25

タケダラ　穀物を入れる籠 11(ひ，竹詫褒)[穀ものを納め置籠のことなり] 30

タケフォアキ　箒，竹箒 31

タケヤマ　籔 31〈S〉

タコ　マダコ，テナガダコ 40〈全〉

タコーナ　たけのこ 31(タコーナ)[筍], 32〈N〉

タコノフネ　タコブネ 40〈O, M〉

タコメ　たこ 31, 40[タコ糸経称]

ターシ　東子 35〈S〉

ダシ　味噌 6(ひ), 17(ひ), 19(ひ)

タシギ　田鷸 40〈全〉

タス　補ふ 32〈N〉

タス　アキータス「アキマス」，アリータス「居リマス，居マス」，案ジータス「案ジマス」，云ータス「云イマス」，射リータス「射マス」，植エータス「植エマス」，起キータス「起キマス」，買ウィータス，買イータス「買イマス」，私モ買(カウイ)ータス「私モ買イマス」，介抱シータス「介抱シマス」，借リータス「借リマス」，感ジータス「感ジマス」，キータス「キマス」，シータス「シマス」，シニータス「シニマス」，損ジータス「損ジマス」，足リータス「足リマス」，延ビータス「延ビマス」，ヒータス「干(ヒ)マス，干(ホ)シマス」，評シータス「評シマス」，封ジータス「封ジマス」，ブッチャリータス「捨マス」，勉強シータス「勉強シマス」，ミータス「ミマス」，列シータス「列シマス」　25

タスケマ　盗人　30

タセメ　鳶　30

タタッデ　疊んで　24〈O, M, K, N, S〉

タチ　オミヤータチ(複数)　25

タヂ　ねずみいらず　19(ひ)

タチグモ　入道雲　31〈K〉，32「旗雲」〈N〉

タチヨー　タチノウヲ　40〈M〉

タツ　龍巻　31〈O, K〉

ダツ　ダツ　40

ダッゴ　双生児　31，32(タツゴ)〈N〉

タッコメ　マダコ〈全〉，タコ類総称　40

タッズケ　醜女　31

タッタ　買ツタッタ「買ッタ」，借リタッタ「借リタ」，來タッタ「來タ」，爲タッタ「爲タ」，飛ビタッタ「飛ンダ」，ボーカッタッタ「大キカッタ」，ヨカッタッタ「善カッタ」，マットキレーダッタ「モット綺麗ダッタ」，チョードコグヮンダッタ「丁度コンナダッタ」，シズカダッタ「靜カダッタ」，行カズニシャアセダッタ「行カナクテ仕合ダッタ」，死ンダッタ「死ンダ」，ソグヮンダッタ「マアソノヨーデアッタ」　25

タツノオトシゴ　タツノオトシゴ　40〈M〉

タツノコ　タツノオトシゴ　40〈O〉

タッポー　掌　31〈O, M, K, U〉

タツミ　東南風　35〈N〉，37

タツメ　龍巻　32〈N〉

タトアツキ　先月　32〈N〉

ダドノツトツテイ　休ろふ事　16(ダドノツ○トツ○テイ)

タナサガシ　(正月)四日ハ棚サガシトテ芋トフクデトテ径二寸位ノ餅ヲ雜煮ニ祝フ　17(棚サガシ)

タナシタ　稼の下　17(ひ)，19(ひ)

タネ　血統　31〈O, N〉

タネツル　血統　31〈O〉

タバコ　貝名(味メツタカヨリカルキ貝也)　5

タバコイレ　ハタタテダヒ　80〈M〉

タバコースウ　煙艸をすふ　24〈O, M, K, N, S〉

タバコボン　煙草盆(新)　31(タバコボン)

タバコボン　ツノダシ　40

タバラ　田　6(ひ)，19(ひ)，31(タバラ)，32〈N〉

タヒ　女経水にて他の家へ出る事　16

タビ　月経　18(旅)「女月やくに出ること」，30，31，32〈N〉

タビ　貴賤トモ天発ノトキハ村離レノ片里或ハ深山又ハ屋口隅ニ別室ヲカマ(虫食)ヘテ是ヲ他火ト名付テ世間ト火ヲ同フセス　コレニアルコト早キハ五日遅キハ十五日ニシテ年中ニ家ニ在ルコトワツカ也，月水のうち住宅　17(他火)

ダヒジヒ　見事な事　16

タビショ　他屋　37

タビーデル　旅へ出る　24〈O, M, K, N S〉

タヒヘテル　妊人脛水を見れば別家別家となす今は脛になりしをたびと云　11(ひ，他火用)

タブ　猶　6(ひ)，17(ひ)，19(ひ)，31，32〈N〉

タブカリ　刈人　31(タブガリ)，32〈N〉

タブミ　茶筅の木に生ずる茸　13

タブラ　クラゲ類総称　40〈全〉

タベダノ……タベダノ　漬モノーカッテタベダノオビョカッテタベダノーテイッテワガママバカリヨデ「漬物ヲカッテクレダコトノ漬ヲカッテクレダコトノッテワガマヽバカリイウノデ」　25

タボ　掌　31〈N〉

タボー　掌　32〈N〉

タボウ　男の子の事をいふ，但し郎とはいはず坊といふ也　12(太郎)

タマカケメメズ　ミミズ(頭に環あり)　40〈O〉

タマサカニ　稀に　32〈N〉

タマシダ　貴家ノ一種　八丈島ニ産ス　多湖マズ　6

ダマス　(子供を)あやす　32〈N〉

タマフレ　ものを乞ふ言葉なり　11(ひ被賜)

タマムシ　タマヤスデの一種　40〈M？〉

タミ　蚤(蚤に限る)　30

タミシバ　メジナ(最小のもの)　40

タミノキ　たぶの木　31

ダムブ　ランプ　31(ダムプ)

タメトモエリ　鳥百合　31

タメノキ　たぶの木　31〈O〉

タモウレ　くれろと云事　16

タモレ　くれろ　17(ひ)，18[下さりませ]

タヤ　(他屋)婦女臨産及経水ニ際シテハ家ニ居ルヲ禁シ山中ニ他屋(タヤ)ヲ云フヲ作リオキ之ニ入ラシム　6(ひ，他屋)17(他屋)[月水のうち住宅]

タヤナラデ　10

タラ　借リタラ「借リタ」，來タラ「來タ」，爲タラ「爲タ」，トビタラ「飛ンダ」25

ダラ　コレカラアスブダラ，コイカラアスブダラ「コレカラ遊ブノダ」，天氣ガ靜カダラ「天氣ガ暖カダ」，ウリャ人ダラ，オラ人ダラ「アレワ人ダ」，ソリャワガダラ(アガダラ)，ソラワガダラ(アガダラ)「ソレワワタシノダ」　25

タラウ　一男　4，5[其家の一男]，44(ひ)[長男，太郎]

タララ　借リタララ「借リタ」，來タララ「來タ」，爲タララ「爲タ」，トビタララ「飛ンダ」　25

ダララ　マットキレーダララ「モット綺麗ダッタ」，チョードコグヮンダララ「丁度コンナダッタ」，シズカダララ「靜カダッタ」，ソグヮンダララ「マアソノヨーデアッタ」，ソリャキネー

ノトンメテダララ，ソラキネーノトンメテダララ「ソレワキノーノ朝ダッタ」ヨック｛ミタン｛ニヤーヤ／ネーヤ｝／マバララ／見タリヤ｝ショクナッケ人ダララ オベーノァー人ダララ「ヨク見タラ知ラナイ人ダッタ」25

タリ……タリ　来タリ行ッタリショワ「来タリ行ッタリスル」，ネタリ起キタリシテアル「ネタリ起キタリシテイル」25

タリゴ　垂木　17，(ひ)24,30,31(タリゴ)

タリゴ　梁，31(タリゴ)〈O〉

タリタ　(過去)　25(足リタ)

タリタラバ　(假定)　25(足リタラバ)

タリャー　盥　24〈O，K，N〉，27，30〈O，K，N〉

ダリャーテ　ソリャワレダリャーテショキャ「夫ワ僕ダッテ知ッテイル」25

ダリャーテー　足袋一足ダリャーテーケワシンニャー「足袋一足ダッテクレヤーシナイ」イクラワタクシダリャーテーソグゥンドァーコトワシンナカ「イクラワタクシダッテソンナコトワシナイ」25

タリルダロー　(推量)　25(足リルダロー)

タルキ　垂木(新)　31

タレー　盥　24〈M，S〉，30〈M，S〉

ダレ　他人　25

タロ　長男　10，28(ひ)

タロー　長男　31〈M，S〉，32〈N〉，35[老人に多い]〈M，N〉，37〈M，N〉

ダロー　アダンダロー「如何デショー」，ソノ苦ワアダンダロー「ソノ苦ワドンナダロー」，ソコンアルダロー「ソコニアルダロー」，オッカニャーダロー「恐シカロー」，来ルダロー「来ルダロー，来ヨー，来ヨー」，ハヤ死ヌダロー「モー死ヌダロー」，爲ルダロー「爲ルダロー，爲ヨー」，ソノ苦ワドグゥンダロー「ソノ苦ワドンナダロー」，止メルダロー「止メルダロー」，ヌクテーダロー「暖カダロー」，延ビルダロー「延ビルダロー，延ビヨー」(未來)，ボーイダロー「大キイダロー」，ワリーダロー「悪イダロー」，一本五銭ダロー三本買ウ「一本五銭ノヲ三本買ウ」25

タロウ　總領の男子　11(太郎)[一男，男子元服前]，12[一男]，16[惣領の子の事]，18(ひ)，17(太郎)[長子]，25(太郎)[長子]

タロウヂ　伯父(最長伯父)　19(ひ)

ダローカ　ハー～ハヤ～ハリャ～ハラ死ヌダローカ「モー死ヌダローカ」，コレデ十分ダローカ「之デ十分カシラ」，コレデ沢山ダローカ「之デ沢山カシラ」25

ダローガ　ハヤ死ヌダローガ「モー死ヌダローガ」25

タロージ　伯，叔父　35，37〈N〉

タロードノ　息子，名を云ふもの多し　31

タロブチ　俗ニ玉ツハキト云ヘル類　5

タロヲジ　惣領の伯父の事　16

タワアシ　東子　35〈K〉

タワシ　東子　35〈N〉

タンゴ　絹服　31，32〈N〉

タンゴ　疔(フタゴ)　17(ひ)

ダンゴヨー　ゲンロクダヒ〈M〉，オヤビッチヤ，カゴカキダヒ，シマイサギ，スズメダヒの類，セホシスズメダヒ，ナンヨウスズメダヒの一種，ロクセンスズメダヒ　40

ダンシン　乱心　13, 24, 30[狂者]

ダンナ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　19〈ひ〉[大家すじのせがれ], 25

ダンナサマ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25, 31[僧侶]〈O〉

ダンプ　ランプ　24〈O, M, K, N, S〉, 30

ダンボー　乱暴　23〈O, M〉, 24, 30

ダンボードア　乱暴な　32(ダンボードア)〈N〉

タンメ　蚤　30

チ

チ　乳房　31, 32〈N〉

チ　乳汁　31

ヂ　伯父　17〈ひ〉

ヂー　老爺　21

チイ　歯　32〈N〉

ヂイカチ　蓮　35〈N〉

ヂイサマ　流人(流人にむかっていう)　19

ヂイドノ　伯叔父　44〈ひ〉

チイロ　五女　4

チイロー　五女　30

ヂイロ　五女　5, 6〈ひ〉, 20

チイロウ　五女の事　16

ヂイロウ　五女　19〈ひ〉

ヂウメンヲツクル　なかんとしてなかぬ所の形容なり　20〈ひ, 作二重面一〉

チェバクラ　つばくら　23〈O, M〉

チオヤ　乳母　31

ヂガアル　利の有る　19

チカタ　土塊　31(チカヅ)

ヂーカチ　蓮　37(ヂーカチ, バーカチ)〈N, S〉

ヂーガチ　紫蓮　31〈S〉

チカヤ　國地ノ白茅(チガヤ)ヨリタケ長シ　5

チキ　太陽，子兒の語　31

チキガサ　日量，月量　31

チギノキ　膽八樹　八丈，三宅，神津，新島等ニ自生多シ其材ヲ薪材トナスニ過ギズ島中自生多ク大小少ナカラス材質緻密ニシテ白色ナリ普有用ノ材ナル可シ　6

チキリ　イットウダヒ(キンメダヒの類)　40〈M〉

チキリ　ゴンベ　40〈O〉

ヂクイモ　薩摩薯　31〈K〉

チスヂー　血統　31〈M〉

チズム　(或はシジムとも)沈む　30

チズル　血統　31〈K〉

チータチ　崩　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31(チータヂ)〈K, N, S〉

チチ　土　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31[垢，土の意なり], 32〈N〉

チチカージメ　ミソサザイ(鳥)　40〈N〉

ヂヂガチ　蓮　35〈K〉, 37(ヂヂガチ, ババガチ)〈K〉

チチコアジ(メ)　ミソサザイ(鳥)　40〈N〉

チチツカズ　足心　31

チーチーバ　すみれ　31〈M〉

チーチーバナ　蓮　35〈M〉, 37〈M〉

チーチフサー　乳房　31〈O〉

チッチ　血統　31

チットモ　少しも　32(チットモ)〈N〉

チッボコ　陰茎　31〈O, M, N〉

デード　伯父　31〈N, S〉

デドノ　伯父　31(デドノ)〈O, M, K,〉(誰デドノ)［伯父，又三郎伯父など云ふ］, 35〈K〉, 37〈K〉

ヂードノ　伯，叔父　35, 37〈S〉

チドリ　ムナグロ(鳥)　40〈全〉

チヌハヘナ　死と云こと（死ヌトイフコト，死ヌワイナ？）　10

チノミゴ　乳兒　35〈K〉

チービラ　單衣　31〈S〉

チーブ　中風　31

チブサ　乳房　31

チフノ　草ノ名　5

チャーイケニャー　コケー來チャーイケニャー「ココエ來チャーイケナイゾ」　25

チャウダマウス　言葉さたまらず人をあざむかんとするを云　11（ひ，喃解轉）

チャウダイ　納戸　17(ひ)

チャガシ　午後間食　32(チャガシ)〈N〉

チヤガシ(ドキ)　午後三時頃　32〈N〉

チヤガシドキ　午前十時頃　31〈K〉

チャガマ　ちやまかと云　11

ヂャーコ　大根　31〈K〉

チャッチャメ　ハチジャウコッコ(鳥)鶺〈全〉，駒鳥〈K〉，蟲喰〈O, N〉　40

ヂャーネン　來年　31(ヂャーネン)〈K〉

ヂャニャーカ　コレデヨカンノーヂャニャーカ「コレデヨカローヂャナイカ」ハヤ來ルノーヂャニャーカ「モー來ルダローヂャナイカ」，ハヤ始ッタヂャニャーカ「モー始マッタローヂャナイカ」，ハヤハジマルノーヂャニャーカ「モー始マルダローヂャナイカ」　25

ヂャノ　ソレヂャ誰ダリャーテー困ロヂャノー「ソレヂャ誰ダッテ困ルモノネ」　25

チャノマ　居間，茶の間　35, 37[居間]〈K〉,[茶の間]〈O, K, S〉

チャーロ　平地（山の上にある草地などをも）　31(tʂairóa)

ヂャンコ　痘瘡　31

チューキ　中風　31

ヂューギ　流儀　24, 30〈O, M, K, N, S〉

チューデ　序　24〈K, N, S〉, 27

チューナタ　中銃　31

チューバカラ　燕　35, 37〈N〉

チューバクラ　つばめ　31〈O, M, N〉, 40[燕，アマツバメ]〈全〉

チューバクラメ　燕　32［老人に多い］〈N〉, 35, 37〈O〉, 40[アマツバメ]〈N〉〈O〉

チューバクロ　アマツバメ　40〈O〉

チョー　蝶　35〈O〉

チョー　四男　32, 35[老人に多い], 37〈N〉

チョー　神社　32(チョー)〈N〉

チョイ　石拳　31

チョーザ　財產家　31

チョーズバ　便所　35〈M〉

チョヂョガシラ　好色者　31〈古O〉〈今N〉

チョーチョーメ　蝶　35〈K〉, 40[テフ類総称]〈O〉

チョーテンニカネ　能釣合たる事　16［挑灯に鐘］

チョーテ　両手　24〈O, M, K, N, S〉,30
チョーディア　茶の間　35〈N〉
チョーディアー　茶ノ間　32（チョーディアー）〈N〉, 37〈N〉
チョーナーメ　蝶　37〈K〉
チョンコ　こうし総称　31（チョンコ）〈M, K, S〉, 35〔チョンコ〕〔仔牛〕〈O N, S〉, 37〔チョンコ〕〔仔牛〕〈O, K, S〉
チョンコメ　こうし総称　28〔ひ〕〔子牛〕, 31（チョンコメ）〈O, K〉, 32（チョンコメ）〈N〉, 35（チョンコメ）〈M, K〉, 37（チョンコメ）〈K〉, 40（チョンコメ）〈全〉, 46
チョンボリ　僅か　32（チョンボリ）〈N〉
チラウ　二男　4, 5
チリフグ　モンフグ　40〈M〉
チローダイ　納戸　31
チンチカラ　四十雀　16, 30
チンチガラ　四十雀　31（チンチガラ）〈M〉, 40〈M〉
チンチン　男根　6, 19, 31〔陰茎, 〔児〕〕
チンボコ　陰茎　31〈K〉

ツ

ツイタカ　人の来りし時同輩へは……といふ　5
ツエ　杖　31（ッエ）
ツェイタチ　朔日　31〈M〉
ツェータチ　朔日　31〈O, M, U〉
ツキ　月　31〈O, M〉
ツキミ　十五夜, 十三夜, 特にこれらに相当する言葉なし　31（ツキミ）
ツキンボー　杖　31
ツク　大牛, 老牛　30
ツク（メ）　八丈フクロウ〈O, M, N〉, シマオホコノハヅク〈全〉　40
ツクシ　土筆　31
ツクヅクシ　土筆　31
ツクテモ　山芋　31
ツクミ　脚　4, 6〔ひ〕, 37
ツグミ　鶫？　5
ツクメ　醜女　31（ツクメ）, 32, 35
ツクメ　木兎　31（ツクメ）
ツクメ　みゝづく鳥　30, 37〔梟〕〈N〉
ツクメ　木兎の事　16
ツグメ　膝　17〔ひ〕, 28〔膝頭〕, 30
ツクメフヂ　土茯苓（草ノ名）　5
ツクメヲヤム　からだの筋のいたむこと　11〔ひ, 病-鄰駒ヨー〕（スヘテカミノヲ）
ツグリニシテ　糸の類を丸めて置し事をたとへていふ　16
ツケル　浸す　32
ツケル　点す　32（〔ヒョ〕ツケル）〈N〉
ツケンジョー　片足飛　31〈K〉
ツケンボー　杖　32〈N〉
ツジ　旋風　35〈M, N〉
ツズ　雀　40〈全〉
ツス　留守　23〈O, M〉, 24〈O, M, K, N S〉, 30
ツズメ　すずめ　31, 40〔雀〕〈全〉
ツセイ　人の帰る時同輩へは……ドイフ　5
ツタ　草の名　5
ツダキ　唾　31（ツダキ）〔ツバキは椿〕, 32〈N〉
ツチカージメ　ミソサザイ（鳥）　40〈N〉
ツヂカゼ　龍巻　31〈O, M〉
ツチカワジ　ミソサザイ（鳥）　40〈N〉
ツチコアジ（メ）　ミソサザイ（鳥）40〈N〉

ツチコージ　ミソサザイ〔鳥〕 2, 40〈N〉
ツツ　槌 44
ツツコトス　突落す　24〈O, M, K, N, S〉
ツツッポー　筒袖 31〈K〉
ツツテ　搗いて 24, 27, 35〔ツッテ〕
ツツテ　連れて 24, 27, 35〔ツッテ〕
ツッパネ　ばった 31〈U〉
ツツバネメ　いなご〔ばったをふくむ〕 32〔ツツバネメ〕〈N〉, 35〔蝗〕〈N〉
ツッパネメ　蝗 37
ツッパリボウ　心張棒 〈U〉
ツツボ　筒袖 35〈N〉
ツツボー　筒袖 35〈O, K〉
ツツメ　雀 16〔ツヽメ〕, 17〔ひ〕
ツヅメ　雀 32〔老〕〈N〉, 35〈O, M, K, N, S〉, 37
ツテーヤ　金サンモデキニ出征ショダツテーヤ「金サンモ今ニ出征スルノダトヨ」 25
ツナミ　海嘯 31〔ツナミ〕
ヅニン　流人 19〔ひ〕, 23〈O, M〉, 24, 27, 30, 46
ツノクチ　メジナの類 40〈O, M〉
ツノサメ　魚名 5
ツノザメ　ツノザメ 40〔ホシザメ〕〈全〉
ツノマツ　ウミゴヒ 40〈O, M〉
ツハイタケ　國地ノ榎茸ニ似タリ 5
ツバキムシ　けむし，單に毛虫とは云はずその樫む植物の名の下にムシを付けて呼ぶ。椿に棲むもの 31
ツバクラ　燕 35〈M, S〉, 40〔アマツバメ〕〈N〉
ツバクラドリ　40〈N〉
ツバクラメ　燕 35〈K〉
ツバクラメー　つばめ 31〈K, S〉
ツバクリャメ　アマツバメ 40〈K〉
ツバクリャーメ　つばめ 31〈K〉
ツバメ　燕 31〔ひ〕〈K〉, 32〈N〉, 35〈K〉, 40〔アマツバメ〔内地よりの導來語？〕〕
ツフイタ　つかれること 37
ツブリ　頭，髪 17〔ひ〕, 28〔ひ〕, 30, 31, 44
ツブリノケ　髪 17〔ひ〕, 31
ツヘ　屋根 16, 30
ツベ　屋根 6〔ひ〕, 19〔ひ〕, 31〈O, K, S〉, 44
ツベ　棟 17〔屋の棟〕, 31, 32〈N〉
ツベツ　屋根の表に用ゐる竹 31
ツボシマ　汐の一種 13
ツボテガ　片手小鍬 31〔ツボテガ〕
ツマカケ　爪皮 31
ツマカタ　おくの方 19〔ひ〕
ツマサキノハシル　つめるき事を 18
ツマダイアシ　我足する 18
ツムジ　旋毛 31〈M, K, N〉
ツムジカゼ　旋風 35〈O, K, S〉
ツヤ　通夜 31
ツユマナコ　醜女 31〔ツュマナコ〕
ツラ　顔 31
ツラビドウ　人の男子を…… 5
ツリ　釣鐘 31〔ツリ〕
ツリダケ　葺屋根の裏に張る縦竹 31
ツルアフギ　蔓黄耆 5
ツルハコベ　はこべ 31
ヅルンテ　亡る事 16
ツワリ　悪阻 31〔ツワリ〕
ツンボー　聾，唖 31

テ

テ　手　31

テ　雨ノフロンテ今日ワイカニャー「雨ガフルカラ今日ワイカナイ」,今日ワ氣候カヌクトケンテ皆デ出カケロダラ「今日ワ氣候カ暖カダカラ皆デ出カケルノサ」,今日ワ天氣ノワルケンテ人出ガスケニャー「今日ワ天氣ガワルイノデ人出ガ少イ」,体裁ガウグヮンドァーシテ困ロワ「体裁ガアンナダカラ困ル」,マニキャッテコーシイテマチテワセ「今ニ帰ッテクルダローカラ待ッテキタマエ」　25

ーテ　山田ーテヨ人「山田トイウ人」　25

テー　樋　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 40

テー　アリテー「居タイ, 居リタイ」,イーテー「イイタイ」,イリテー「射タイ」,植エテー「植エタイ」,起キテー「起キタイ」,介抱シテー「介抱シタイ」,キテー「キタイ」,買ウィテー, 買イテー「買イタイ」,カリテー「カリタイ」,シテー「シタイ」,シニテー「シニタイ」,評シテー「評シタイ」,封ジテー「封ジタイ」,ブッチャリテー「捨テタイ」,勉強シテー「勉強シタイ」,見テー「見タイ」,列シテー「列シタイ」　25

テアー　買イテァーモノガ沢山アル「買イタイモノガ沢山アル」,之モブッチャリテァー「之モ捨テタイ」　25

デァシャンゴ　午後三時頃　31〈O〉

デアズ　大豆　32(デァズ)〈N〉

テアロ　橋ノ上ニ人ガ立ッテアロワ「橋ノ上ニ人ガ立ッテオリマス」,本ヨ買ッテアロワ「本ヲカッテイル」,路バタニ人ノ死ンデアロワ「路バタニ人ノ死ンデイル」　25

テアロワ　雨ノ降ッテアロワ「雨ガ降ッテイル」,風ノ吹ッテアロワ「風ガ吹イテイル」,鐘ノナッテアロワ「鐘ガナッテイル」,ガマンシテアロワ「勉強シテイル」,机ノウェニ本ヨノセテアロワ「机ノウエニ本ガノセテアル」,ヘビロァーミチバタニブッチャッテアロワ「荷物ガ路傍ニステテアル」,山ノ近クメーテアロワ「山ガ近ク見エテイル」　25

テイ　牛ニ与ふる詞(左リヘヤルヲ)

テイ　鯛　5

テイ　樋　24

デイ　ざしきのことなり　11(ひ, 亨), 16, 30[座敷]

ディアーネン　来年　32(デァーネン)〈N〉

デイジイ　うつくしいこと　8

テイシバ　各自の守神　31

テイス　手をつけるな　15(テイス(虫喰))

テイソサ　一寸した事　16(テイ○ソサ)

デイソフダテ　いたづらすぎると云ことなり　11(ひ, 擯斥[転])

テイッハ　石菖(草名)　5

ディャーコ　大根　音韻轉訛ディ　32(デァヤーコ)〈N〉

デイヤードコロ　台所　32(デァヤードコロ)〈N〉, 35(ディヤードコロ)

ティャーラ　平地(山の上にある草地などをも)　31〈N〉

テイロ　平地(山の上にある草地などをも)　31〈M〉

テウ　社殿　5

テウス　手白　31

テウダイ　納戸　18

テウナノキ　深山ニ有テ大木トナル　木ノ肌桶ニ似テ椙ニモ似ルトコロアリ　5

テカ　片手小鋤　16[片手小鉄], 30

テガ　平鍬　19(ひ)[手鍬], 31

テーガ　ムカーシ或トコロニテデートババーガアラッテーガ「ムカシムカシ或トコロニテーサントバーサントガアッタトサ」　25

テガガ　手鍬の形にて柄のながきもの　19(ひ)

テガタ　丸い餅，祝ひに一つを用ふ　大賀郷には用ゐず　31(テガタ)

デキデキ　歴々　24<O, M, K, N, S>

デーゲツ　来月　31<U>

テケロ　買ッテケロ「買ッテオクレ」，来テケロ「来テオクレ」　25

テコ　三女　16, 30

テゴ　下女の中なるものの呼唱　2

テゴ　三女　4, 5, 6(ひ), 12(ひ), [女の三人目], 13, 17, 19, 20, 28, 31[次女], 32[三男]<N>, 35[老人に多い]<M, N>, 37<M, N>, 44

テゴ　程子又久謂以里又窩止本朝にて末子を止松，末松などとしやすくする如し　11(其次)

デコ　きたれに用ゆ　4(出来), 37[来れといふ事]

デーコ　大根　24<M, S>, 30<M, S>, 31<M, S>

デーゴ　大根　23<O, M>

テゴウバ　三番目の伯母　19

テーコキンボ　干大根　31<M>

デーコクライ　カハラヒハ　40<O>

デーコクレー　カハラヒハ　40<O>

デーゴダネクレー　カハラヒハ　40<O, M, N>

デーゴダネクレーメ　カハラヒハ　40<O, M, N>

デコーツキ　来月　31, 32<N>

テゴナーデ　蜘蛛の巣　31<K. S>

テコブシ　拳　31

デシャー　ウゲッンエラケノデシャーショクナケコトガアロドテーンテ我々ワ無理ワニャーサ「アンナ大家デサエ知ラナイコトガアルノダカラ我々ワ無理ワナイサ」，ワレデシャーショクテアロニ，オミガショクニヤートユーコトガアロモンカ「僕デサエ知ッテイルノニ君ノ知ラナイトイウコトガアルモノカ」　25

デーシャンゴ　午後三時頃　31<O, M, N, S>

テショク　手ランプ　31<O>

テタベ　買ッテタベ「買ッテ下サイ」　25

テタモーレ　オジャッテタモーレ「来テ下サイ」，買ッテタモーレ「買ッテオクレナサイ」，此テガミョカッテタモーレ「此ノ手紙ヲ書イテ下サイ」，コノテガミョヨッデタモーレ「此ノ手紙ヲヨンデ下サイ」　25

テタンプ　手ランプ　31

デーデー　綺麗　28(ひ)

デーチキエビ　ゴシキエビ(桶に)　40

テツ　一ツ　18

テッジョー　天井　23<O, M>, 31[天床],

32(テッジョー)<N>

テテ　父　6(ひ), 16, 17(ひ)[下], 18, 19, 27, 30[自称], 32[少, 自]<N>, 35<O, M, K>, 37<O, M, K, N>, 44

テテサマ　父　28(ひ)

テテスジ　下流階級（ト、筋の女子は毛髪長くして容姿端正なれどもテ、筋の方は髪疎にして短く品格自ら賤しく其食なる者は襤褸の衣服を着且入浴する事希れなるを以つて塵垢皮膚に満ち悪臭鼻口を刺す。此二族今尚家格を論じて嫁娶せず）　6(テ、筋)

テテナシゴ　私生児　35<N>

テテホワ　両親　32<N>

デードコ　台所　35<O>

デードコロ　台所　35<S>

デナ　ソンナトコレーデナ「ソンナトコロエオイデナ」　25

テナガエビ　テナガエビ　40<O, M>

テナガダコ　テナガダコ　40<全>

テネギー　手拭　音韻轉訛ウィ　32<N>

テネゲー　手拭　23<O, M>, 24<O, M, K, N, S>, 30, 31<O, M, K, N, S>, 44

テネゲヘ　テヌグヒ　19

デーネン　来年　31<O, U>

テノサラ　掌　17(手のさら), 31

テノヒラ　掌　31

テノフトガ　うつわものこわしあやまちするを云　11(手能酒)

テブ　何首烏(草ノ名)　5

テブチソバ　手打蕎麦　31

テフテフヨー　テフテフウヲ　40

テボーシ　手袋　32<N>

テミヤー　相手　25

テメー　相手　25

デモ　雨ワヤッデモ降ガリリー「雨ガヤンデモ降ガワルイ」, イクラ私デモソグヮンドテーコトーワシータシンナカ「イクラ私デモソンナコトワイタシマセン」, 一冊デモ買イテャー「一冊デモ買イタイ」, 單衣デモ一枚ケルトヨケガノー「單衣デモ一枚クレルトイイガネ」　25

デモ……デモ　湯デモ水デモヨケンテチツトタモーレ「湯デモ水デモイイカラ少シ下サイ」　25

テヤー　アナテヤーサシアゲータソガ「アナタニサシアゲマス」, アリテヤー「居タイ, 居リタイ」, イーテヤー「イイタイ」, 云イテヤーコトガ沢山アル「云イタイコトガ沢山アル」, イリテヤー「射タイ」, 植エテヤー「植エタイ」, 起キテヤー「起キタイ」, 介抱シテヤー「介抱シタイ」, 買ウイテヤー, 買イテヤー「買イタイ」, カリテヤー「カリタイ」, キテヤー「キタイ」, シテヤー「シタイ」, シニテヤー「シニタイ」, 評シテヤー「評シタイ」, 封ジテヤー「封ジタイ」, ブッチャリテヤー「捨テタイ」, 勉強シテヤー「勉強シタイ」, 見テヤー「見タイ」, 列シテヤー「列シタイ」　25

テーヤ　アスノークルテーヤ「アシタマタクルトサ」, ウノ人モカウテーヤ「アノ人モカウトイウコトダ」, 随分イロイロドテーコトーステーヤ「随分イロイロナコトヲスルソーダ」, 大変ナ人出ダラッテーヤ「大変ナ人出ダッタソーデゴザイマス」　25

デヤク　噺する事　16, 17(ひ)[ものをいふ]
デャーク　大工　24<O, M, K, N, S>
デャゲツ　來月　31<O>
デャコ　大根　31<O>
デャーコ　大根　30<O, K, S>, 31<N>
デャーゴ　大根　24<O, K, N>
デャコノキンゴー　干大根　31<O>
デャドコロ　台所　31
デャードコロ　下屋，棟を別にし拳公人の煮炊き又は蚕室に用ふ　31
ーテヤラバ　ウノ男ノ唄ーテヤラバトテモキカレタモンヂャナツキャ「アノ男ノ唄ト來タラトテモキカレタモノヂャナイ」　25
テヨ　昨日林テヨ人ガ來テ「昨日林トイウ人ガ來テ」,東京テヨ所ワ随分ニギヤカカドヂー所ダラ「東京トイフ所ワ随分賑ヤカナ所ダ」　25
テヨコト　ウノ人ノ洋行ショゾーテヨコトワショーテカラキッテアララ「アノ人ノ洋行スルトイウコトワ久シイ前カラキイテイタ」　25
テヨモノワ　イッチャー橋テヨモノワアンノヤクニタツモンダカ「一体橋トイウモノワナンノ役ニ立ツモノカ」　25
テラ　蚤を守る神とて家毎に祭る持佛　4, 5, 11(ひ, 寺),[持佛の変なり，寺字詩混日名浮屠所レ居皆日レ寺]　37
テラ　寺院　31
テラツキ　山雀　40<O, M>
テラツキメ　山雀　40<O>
テラツク(メ)　山雀　40<K>
テラツツキ　山雀　40<M, S>
テラツツキー　きつつき　31(テラツツキー)
テラツツキメ　山雀　40<N, S>
テルコ　さつまいも　32<N>
テレン　たます　17(ひ), 31[虚言]
テレンツキ　虚言者　31
テレンモノ　虚言者　31
テーロ　平地（山の上にある草地などをも）　31<S>
デロ　來れと云事［掌按じるにデロの下來れの字疑らくは行きやれの誤りならん］　16
テン　天　高い意にして通常は用ひず　31
テンカン　癪癇　31
テンギネ　すりこぎ　18
デンギネ　擂木　6(ひ), 19(ひ), 31(デンギネ), 32<M>, 35<O, M, K, N, S>
テンクサ　天草　31
テンゲサガニ　ケブカアフギガニ　40<O>
テンゲサガリ　モクズガニ　40<O>
テンゲーサマ　山の怪　31
テンゲノアジ　蜘巣　17(ひ)
テンクラ　うそつき　30
デンゲ　蓮華　24<O, M, K, N, S>, 30
テンゴノアジ　蜘蛛の巣　31<N>
テンゴメ　蜘蛛　31(テンゴメ)<M, K, N, S>, 32<N>, 35, 37<O, N, S>
テンジ　13
テンジノヒ　テンジを見ておどろかないものは火の変をみるという　これをテンジの火という　18(テンジの火)
デンジュー　連中　24<O, M, K, N, S>
テンジョー　天床(新)　31

テンタウサマ　月　6〈ひ〉
デンヂュー　通中（ぬんちう）　27, 30
テンチラ　うそつき　30
デンデンムシ　かたつむり　32〈N〉, 35〈K〉, 40〔パウラマイマイ？〕〈O〉
テントウサマ　日，月　17〈天道さま〉
テントーサマ　月　31
テントーサマ　太陽　31〈テントーサマ〉〔太陽，月をもテントーサマと云ふ，夜のテントーサマとも云ふ〕, 32〈N〉
テントーダコ　ヒトデ類　40〈O〉
テントフサマ　お月さま　19〈ひ〉
テントームシ　テンタウムシ類総称　40〈O〉
テンニー　天　31〈テンニー〉〈S〉32〈N〉
テンネー　天　31〈テンネー〉〈O, M, K, N〉
テンネイ　天　17〈ひ〉, 28〈ひ〉, 31〔少老〕〈K〉
テンネヘ　空　6〈ひ〉, 19〈ひ〉

ト

ト　雨戸　31
ト　雨ノフルト路ノワルクナロワ「雨ガフルト路ガワルクナル」，一日ニドケートイケルカ「一日ニドコマデイケルカ」，キットクロダロートオモーワ「キットクルダロート思ウ」，マット一日モ雨ノフルト水ノデロワ「モー一日モ雨ガフルト水ガデル」25
トー　買ットー「買ッテオクレ」，來トー「來テオクレ」　25
ド　櫓　24〈O, M, K, N, S〉, 44
ドー　胴　31
トア　ワカケ時ニワ飯ノ七杯（ヒト）ヤ八杯ワゾーサナククウェトアーモンドアーガハヤコノゴロヂヤ四杯ガヤットダラ「若イ時分ニワ飯ノ七杯ヤ八杯ソワケナク平ゲタモンデスガモーコノゴロデワ四杯ガヨーヨーデス」　25
トァー　此絵ワ昨日一タビ見トァーダラ「此絵ワ昨日一ペン見タノダ」　25
ドァ……ドァ　コグワン上等ドァヨリモマット下等ドァーガエー「コンナ上等ノヨリモット下等ノガイイ」
ドァー　一本五銭ドァーヨ三本買ウ「一本五銭ノヲ三本買ウ」，ウグヮンドァー「アンナ，アノヨーナ」，キタナケヨリモ綺麗ドァーガエー「キタナイノヨリモ綺麗ナガイイ」，氣ノ毒ドァー「氣ノ毒ナ」，コグヮンドァー「コンナ，コノヨーナ」，四角ドァー「四角ナ」，シヅカドァー「靜カナ」，ソグワンドァー「ソンナ，ソノヨーナ」，沢山ドァー「沢山ナ」，ドグヮンドァー「ドンナ，ドノヨーナ」，ヤドァー「イヤナ」，樂ドァー「樂ナ」，僅カドァー「僅カナ」　25
ドァダラ　ソレガヨクナッケドァダラ「ソレガヨクナイノデス」　25
ドァート　小刀ドァートココニアロワ「小刀ナラココニアルヨ」　25
ドイツベーシ　蟻（黒色大形ノ蟻）　40〈O〉
トイトイ　牛の掛声（行く時）　31〈K〉
ドイヤーコクリァァメ　カハラヒハ　40〈N〉
ドイヤーコダネクリャァメ　カハラヒハ　40〈N〉
トウゴユワシ　トウゴイワシ　40〈全〉

トゥートゥーメ　ニハトリ　40〈O ソノ他〉
トウス　女の名(今もをゝくある)　12(ひ)[女の七人め], 17(ひ)
トウスミ　とうすみと云　11(燈心)
ドウドウ　うこけと云をとゝまれに用ゆ　11
トウノキ　常山(木ノ名)　5
トウフ　洞沢ノ事　16
トウヤク　後刻　16, 18
トウヤク　そろそろ　17(ひ)〈K, N〉
トウヨシ　唐葭ノルイナリ　5
トガアニテモカヾアニテモ　とふしてともこふしてもに用ゆ　11(ひ, 討ゝ何考ゝ亦考)
ドガタ　方向を指す語　25
トーガラシヨ　唐辛子　31〈O, K, N〉
トギ　通夜　31(トギ)
トギ　新郎ノ付添人　37
ドーギ　胴着　35〈O, K, S〉
トーギミ　玉蜀黍　31(トーギミ, トーギミ), 35〈全〉, 37〈全〉
トグ　誘ふ　32〈N〉
ドク　退く　24〈O, M, K, N, S〉, 30
ドクガツ　六月　23〈O, M〉, 24〈O, M, K, N, S〉
ドクガツヨー　ソウダガツヲ　40
ドクフグ　カナフグ　40〈O〉
ドクメメズ　ミミズ(青く光るもの)　40
ドクロ　六男　6(ひ)
ドクロー　六男　31, 32〈N〉, 35[老人に多い], 37〈M, N〉
ドクロウ　六男　19(ひ)
ドグヮンダ　「アンナ」『アノヨーナ」　25
ドコウチキニ　ちよっとした変りにゆくどうしてしりませうに用ゆ　二(ひ, 於二途交知已一)
トコブシ　鮑　32[少]〈N〉
ドコロカ　コレデワリードコロカホントーンゴーギダラ「コレデワルイドコロカ誠ニ結構デス」コレデエードコロカ大変ダラ,「コレデイイドコロカ大変ダヨ」　25
トコロブリ　夕立雨　32〈N〉
トーシ　タワシ　23〈O, M〉, 35
トシゴロ　発明(はつめい)　6(ひ), 19(ひ)[発明ナル]
トシトリ　節分　31(トシトリ)
トーシミ　燃心　31
ドージメ　腰紐　35〈K〉
トシヤミ　老病　31(トシヤミ)
トジョー(メ)　どぜう　31
トシヨリ　老人　31(トシヨリ), 32(トシヨリ)〈N〉, 35〈O, M, K, S〉
ドージン　老人　24〈O, M, K, N, S〉30
トース　愛子　30
トズル　縫ふ　32〈N〉
ドーソク　蠟燭　24〈O, M, K, N, S〉44
トータタク　戸を叩く　24, 27
トダナ　押入　31(トダナ)
ドーヂン　老人　31
トーヂンボル　座敷にある巣を張らぬくも　31
トッキ　相互力合　30
トツキ　労働交換, 田の時にのみ用ふ　31
トツギ　相互に力同じき事　16
トヅケグチスル　つげ口する事　16(トヅケ○グチスル)
ドッコ　何処　24〈O, M, K, N, S〉

トッチ　場所を指す語　方向を指す語　25

トッチャ　指示代名詞(不定称)方向について云う　23(ひ)

トッチャン　父　35(K)

トッデ　飛んで　23(O, M), 24(O, M, K, N, S)

トッパネメ　ばった　31(M)

トッパメ　ばった　31(トッパメ)

トツブ　山頂　35(O)

トツプ　山頂　31(トップ),[オバタ，トップを用ふ，峠(用ひず)]

トツプカタ　高い所　19(ひ)

ドッポアナ　塵捨場　31

トテモ　到底　32(N)

ドテラ　褞袍　35(O, K, S)

トト　父　18, 32[自], 35, 37(N)

トトー　父　31[父自称，夫自称], 35(M, S), 37(O, S)

トトウ　父の事　16, 31[父　自称]

トトウサマ　名付け親(男)　13

トトウドノ　父　28(ひ),31[敬称，対称], 44(ひ)

トトウノマ　両親　32(N)

トトサマ　父(上)　17(とゝさま)

トトーサマ　父(敬称，対称)　31

トードノ　父　35, 37(O)

トトフ　自らの父親を言ふことばなり　11(ひ，戸頭), 18[御家人以下は百姓にても]

トートーメ　ニハトリ　40(O，ソノ他)

ドドロ　櫓床　13

ドドロ　吃　32(N)

トーナス　とーなす　31

トーナスカボチャ　とーなす，カボチャだけは云はず　31

ドナベ　土鍋(鍋の総称)　31

ドーニ　雨ワソレドーニ路ハソグヮーニソルクワニャー「雨ワソルケレド路ワソンナニワルクワナイ」，「雨ワソルケレドモ路ワソンナニワルクナイ」　25

トノ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25, 31[妻，対称]

トノ　大家すじのむすめ　17[大家の娘], 19

ドノ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25, 31[妻，対称]

トノサマ　子供(ほめ言に)　17(ひ)

トノサマ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25

トノスジ　上流階級(トノ筋の女子は毛髪長くして容姿端正なれどもテ、筋の方は髪疎にして短く品格自ら賤しく……)　6

トノリ　牛飼　31(トノリ)(S)

トノリ　ばった　31(O, N, S, U)

トノリメ　蝗　35(S)

トビ　とび　31(N)

トビ　トビウヲ，トビウヲ類総称　40(全)

トビヤーガリ　おてんば　31

トビヤーガリー　滑稽家　31(O)

トビョー　トビウヲ，トビウヲ類総称　40(全)

トーフ　洞澤　30

ドブ　泥　31(O, M, S)

トフジンザル　蜘　17(ひ)

トブス　点す　24[點す], 30

ドブッケ　糠味噌漬　31(ドブッケ)

トフヤクニコイ　後にきたれと云事　11

(ひ, 遠後來)
トブラシバ (正月)十四日ハトブラシバラヤク 是ハ年中吉凶ヲミル也 17
トボウ 玄関口 28(ひ), 44[家の表]
ドマ 土間 35<S>
トマス 火を消す事 16
トーマメ そらまめ 31
トミ タミモンガラ 40<O, M>
トミ カハハギ 40<O>
トミサガリ よき雨 11(ひ, 富下)[よき雨といふに用ゆ], 16[雨降る事(正月祝ことば)], 30
ドーミヤー 米櫃 31
トムライ 葬儀 31<M>
トムリヤー 葬儀 31<O, K, N>
トモ 艫 31(トモ)
ドモ ワタクシドモ(複数) 25
トモクサ アヲクサガメ 40<O, M>
ドモリ 吃 31
トーモロコシ 玉蜀黍 35<K>
トーヤク 後刻, 後程 30
トーヤク シイラ 40<M>
トーラ 俵 23<O, M>, 31
トーラ 洞穴(ヨワの大なるもの) 31<K>
ドーラ 洞 35<M>
トーラク シイラ 40<O>
トラフグ ホシフグ<O>, トラフグ<O, M> 40
トリ 一人 4, 5, 11(ひ, 独雛)[ひとりと云事], 13, 37[ひとり]
トリオキ 晴着(年長) 32<N>
トリツボサ 鳥 ((少)老)32<N>
トリメ 鳥 32[(少)老]<N>, 35, 37
トリモノ 寡夫 32((ヒ)トリモノ)<N>
トリョトル 鳥を捕る 24<O, M, K, N S>
ドル 泥 24, 30, 31, 32<N>
ドレ 物を指す語 25
ドロ 泥 31<K, N>
ドロクヒ ベラ又ハテンスダヒ類? 40<O>
トワ コレデ頭ガマットボーケトワ大変ダラ「コレデ頭ガモウト大キカツタラ大変ダ」 25
トワシ 東下 31, 32<N>, 35
トワラ 俵 32<N>
トンガイショ 唐辛子 31<M, S>
トンコ はかの事 16
ドンコ 馬鹿 17(ひ), 30
ドンゴ 馬鹿 6[馬鹿モノ], 11(ひ, 純根)[ばかと云に等し, 言語と事(ワザ)と叶はさるものを云], 19, 28, 31, 44[鈍子, 馬鹿な子]
ドンゴザル 馬鹿, 罵称 31
トンサ 古き大布子の事 16
ドンザ 襤褸, さしこ 31, 32<N>, 37[出漁の場合の男の労働服]
ドンザボロ ひどきぼろ, さしこ 31
トンザル 蜘蛛 35<M>
トンザルメ 蜘蛛 37<M>
トンジヤウ 三ツ口 17(ひ)
トンジャルメ 蜘蛛 35<M>, 37
トンジョー 三ツ口 31
ドンジョー 小供を威す時に斯く言ふ 30
トンジョーバナ 三ツ口 31
ドンジヨメ ドゼウ 40<O>
ドンジョーメ ドゼウ 40<M>
トンゼウ 小児をおどしとんぜうにかま

せると云 11(ひ, 貧情)
トンダ 襤褸 30
トンツブリ 山頂 31〈N〉
トンツブロ 山頂 31〈K〉, 35
トンツペ 山頂 31〈M〉
トンツムリ 山の頂の事 16, 30[山嶺]
トンビー とび 31〈U〉
トンビメ とび 31〈O, K〉, 40[鳶]〈O, M, K〉
トンフ 高き所の事 16
トンプ 小たかき山を云 11(ひ), 山嶺, 30[小山]
トンメテ 早朝 11(ひ, 外厥天)[早朝の意なり], 16[朝の事], 17(ひ)[朝], 18, 28(ひ), 30, 31(トンメテ)[朝, 小兒], 32[曉]〈N〉, 37[トメテなるべし], 44(ひ)
トンヤ とんやと云 11(問屋)

ナ

ナ キンナカナ「コナイナ」 25
ナー キンナカナー「コナイカナー」 25
ナアー 蘿 44
ナイシヤウクミ 胡頽子 5
ナイニツケモ によりもせぬむりなことに用ゆ 11(ひ, 無ニ似付--)
ナカ 娘, 対称(名をいふを普通とす) 31
ナカ 二女 4, 5, 6(ひ), 10, 16, 17(ひ), 18(ひ), 19(ひ), 20, 28, 30(ひ), 3537 44(ひ)
ナカ 長女 31
ナカ 次男 32〈N〉
ナカ 仲と云又次位辭と云 11(其次)
ナカ 女の四人め 12
ナカ 中旬(上旬, 下旬は云はず) 31
ナカイビ 中指 31
ナガイレボウニ 我儘に 4
ナカシ 坤の風 13
ナガシ 坤風 17
ナガシ 西南風 31, 32〈N〉, 35〈O, M, K, N〉, 37〈O, M, N〉
ナガシ 西風 31
ナガシシバ 他植艸ノ類(エビネサウスノブリグサ) 5(ナカラン葉)
ナカシトツキ 市子 31(ナカシトツキ)
ナカドノ 娘(丁寧) 31
ナカメ 娘(多く名を称ふ) 31
ナカラニチ 干潮(満ちつくして引き始める汐) 31
ナカラビ 満潮(干つくしてから満ち始める汐) 31
ナカンデイ 小座敷 16, 30
ナギ 無風 31, 32〈N〉
ナギ ……ながら, ……とも 23
ナギャー 長い 24〈O, K, N〉
ナク 喃る 32〈N〉
ナゲー 長い 24〈M, S〉
ナス なす 31
ナゾ 謎 31(ナゾ)
ナタ 斧 32〈N〉
ナタ 魚名(海鰻鱺) 5
ナタノコ 小鉈 31
ナダ 國地でいう, うなぎの類, 海に住んでいる時 13
ナダ(メ) ウツボ 40〈M〉
ナツキ 眉間 17(ひ)
ナツキャ オソーショジャナツキャ「ウソヲオイイデナイヨ」 25
ナッコウバ 次の伯母 19

ナツコバ　伯母　17(ひ)

ナツニシ　西南風　17(ひ),[申酉の風],31[西風,少し南による](U),35(O,K,S),37(O,K,S)

ナナチャ　飯茶椀　31(ナナチャ)

ナバタケ　菜園　31(ナバタケ)(K)

ナブシテ　隠して　27

ナブス　かくす　17(ひ),18,31[隠す]

ナブリッコー　隠鬼　31(ナブリッコー)(O,K,S)

ナブル　隠れる　31(ナブル)(K)

ナブレッタジ　隠鬼　31(O)

ナブレル　隠れる　31(O)

ナベコシキ　蚰蜒の事　4,9,16

ナベコジキ　なめくじ　31

ナベコジキメ　なめくじ　32,35(N),37

ナベコチキ　なめくじ　31(N)

ナベコヂキ　なめくじ　31(O,M,K)

ナマコ　ナマコ類　40

ナマシイ　生煮なこと　18(ひ)

ナミョケ　テツイロナツモモ?　40(O,M)

ナムテントウ　有かたき事,忝なき事　16

ナムブセ　風,好いなねぶせだ,涼に云ふ　31

ナメクジリ　ナメクヂ　40(O)

ナモミ　ムヲラト云草ノルイ也　5

ナライ　北風　13(ならゐ),31,32,35(MK,N),37(M,K,N)

ナライ　東北風　31(S),44(ならひ)

ナラエー　北風　35(M),37

ナララバ　十二時ニナララバ出カケルダラ「十二時ニナルト出カケルノデス」　25

ナラヰカゼ　北風　7(ならゐ風)

ナリ　ソンナリ持ツテイク「ソレナリ持ッテイク」　25

ナリ……ナリ　新聞ナリ雑誌ナリアニョカー部買ッテケヤレ「新聞ナリ雑誌ナリ何カ一部買ッテヤリタマエ」　25

ナリャー　北風　32(ナリヤー)(N)

ナリンナカ　ソンナコトーシチャナリンナカ「ソンナコトーシチャーナランゾ」　25

ナルト　十二時ニナルト出カケルダラ「十二時ニナルト出カケルノデス」　25

ナルミフグ　ハリフグの一種　40(M)

ナレ　相手　25

ナレ　対称代名詞(罵言する時に用いる)　11(ひ,已)[人をののしる言葉訣て云ときおの字を除きたるなり]　23,32

ナレー　北風　35(O,S),37

ナレガ　汝が　27

ナレガアニンカモアガボクナロニサツマノシドデモケロジヤナシ　継母ァ放って置いて異んなよ,己れァ勝手に成長なるよ。芋の尻一つを異れる慈悲心もない癖に　27

ナレーカゼ　北風　31(S)

ナンガイシボウ　其方が手際にといふ事　18

ナンショ　菜園　31(N)

ナンセ　兄　35(M)

ナンテン　南天　31

ナンナ　兄　31(M),37(M)

ナンノゲザリ　ものを尋ぬ,まそうではないと云所へ用ゆ　11(ひ,何戯挨理)

ナンノジョー　条の條　23,24(O,M),35(案の定)(O,M,K,N,S)

ニ

ニ　オシモワストヨカロアーニアッデワシンデャルアー「オ前モ来レバヨカッタノニナゼ来ナカッタ」,昨日キテケレバヨカロアーニ「昨日来テクレレバヨカッタニ」,御佛前ニソニャール「御佛前ニソナエル」,ソグッンドアーコトーシャズトモヨケニ「ソンナコトワシナクテモイイノニ」,机ノ上ニノセル「机ノ上ニノセル」,東京ニ住ッデアロワ「東京ニ住ンデイマス」,私ニ手紙ノカケルト事情ヨヨック申シ上ゲロデオジャロガ「私ニ手紙ガカケルト事情ヲ委シク申シ上ゲルノデスガ」 25

ニイチャン　兄　35〈N〉

ニオートリ　庭鳥　35〈O, M〉

ニカン　蜜柑　24, 30, 31(ニカン)[密柑]〈O, K, N〉, 44

ニギ　右　31〈O〉

ニギリ　右　31

ニクサ　醜婦　32〈N〉

ニゴリザケ　濁酒　31(ニゴリザケ)

ニシ　西風　31〈K〉, 35〈O, M, K, N, S〉

ニシ　貝名(味ヒサイニ似タル貝也)　5

ニジ　虹　32〈N〉

ニジイッペエー　満潮　35〈M〉

ニーシエンメ　鳶　32, 35〈N〉, 37

ニシガク　七日の物忌六日の夜社人祭をなす　いにしへの雅言なり　11(ひ, 二四葉), 30[七日の物忌六日の夜社人祭の雅言]

ニシキエビ　ニシキエビ(稀に)　40〈M〉

ニショーマス, サンジョーマス　屋敷の廣さをいふ　12(弐升ます, 三升ます)

ニズィ　虹　31〈K〉

ニセ　鳶　40〈N〉

ニセメ　とび　31〈O, S〉

ニーセン(メ)　鳶　40〈N〉

ニチ　満潮　35〈S〉

ニチショ　満潮　31

ニチッパレ　35〈N〉

ニチル　満る　24〈O, M, K, N, S〉

ニツケモナイ　不レ知事　20

ニッコウ　直音ニ発音ス　24(日光)〈O, M, K, N, S〉

ニッショ　満潮　31(ニッショ)

ニット　糞　18[大便], 30[大便所], 31, 32(ニット)[多]〈N〉

ニットウマル　大便をするなり　博は膳に同じ　13(ひ, 人體生)

ニノウデ　腕　31(ニノウデ)

ニホンベーシ　赭色小型蟻　40〈O〉

ニヤ　此ノ本ワ私ニャヨメニャー「此本ワ私ニワヨメナイ」 25

ニヤー　前庭　35〈O, M, K, N, S〉

ニャー　無い　24〈O, K, N〉

ニャー　苗　24, 30〈O, K, N〉

ニャー　飽キニャー「飽キナイ」,居ニャー「居ナイ(ヲラナイ), 居ナイ」,案ジニャー「案ジナイ」,射ニャー「射ナイ」,云ワニャー「云ワナイ」,植エニャー「植エナイ」,起キニャー「起キナイ」,介抱シニャー「介抱シナイ」,借リニャー「借リナイ」,買ワニャー「買ワナイ」,感ジニャー「感ジナイ」,キイロジャニャー「黄色クナイ」,來ニャー「來ナイ(コナイ), 來ナイ(キナイ), 來ン(コン)」,靜カジャニャー「靜カデナイ」,死ナニャー

「死ナナイ」，爲ニャー「爲ナイ，爲ン」，損シニャー「損シナイ」，死ナレニャー「死ナレナイ」，ダクジャニャー「ラクデナイ」，足ラニャー，足リニャー「足ラナイ，足リナイ，足ラン，足リン」，延ビニャー「延ビナイ」，ヒニャー「干ナイ」，評シニャー「評シナイ」，封ジニャー「封ジナイ」，ブッチャラニャー「捨テナイ」，勉强シニャー「勉强シナイ」，ボークニャー「大キクナイ」，見ニャー「見ナイ」，ヨクニャー「ヨクナイ」，列シニャー「列シナイ」 25

ニャーダ 苗代田 31〈K〉

ニャットリメ 鶏 32（ニヤットリメ）〈N〉，40〈全〉

ニヤートリメ 鶏 31〈K，N，S〉

ニヤン 何をといふ事 4，5，37

ニャンショ 菜園 32（ニヤンショ）〈N〉

ニュズ 虹 31

ニューバイ 梅雨 31〈O，K〉

ニョ アニョシテアロ「何ヲシテイマスカ」，アニョヨ「何ヲイウカ」 25

ニョウゴ 女の惣領 12（ひ）

ニョコ 長女 5，6（ひ），17（ひ），18，28（ひ），30，32（ニヨコ），35［老人に多し］，37，44（ひ）

ニョコ 一女 4，20

ニョコ 娘，対称（名をいふを普通とす） 12［女］，13［女子］，19（ひ）［娘］，31

ニョコアツパ 都テ女子ノ通称ニモ用フ 6（ひ，にょこあっぱ）

ニョコソウリョウ 女子と云 男女とも小兒の時は安頭（あっぱ）と云 中華にも此三條ヲ孟仲季と云 11（女子惣領）

ニョコテロ 娘ノ三女（三番目ノ娘） 10

ニョコドノ 娘（丁寧） 31

ニョコメ 娘（多く名を称ふ） 31（ニョコメ）

ニラ 韮 31〈O〉

ニラクサ 香附子 5

ニンギョー 人形 31

ヌ

ヌカバ 糠 17（ひ），28（ひ），31（ヌカバ），44（ひ）

ヌキ 軒 24〈O，M，K，N，S〉，31

ヌキバ 軒 31

ヌク 脱ぐ 24〈O，M，K，N，S〉

ヌクテー 暖イ 25

ヌシ 相手 25

ヌシェメ 鳶 40〈S〉

ヌスタマ 盗賊 5，16［盗人の事］

ヌスダマ ぬすみをする心根ぢやと云所に用ゆ 11（ひ，盗魂）

ヌスダマヲタテ ぬす人のまへ方じや云所に用ゆ 11（ひ，立盗魂）

ヌセ とび 31〈M〉

ヌセメ とび 7，21［鳶］，31〈K，S〉

ヌブリ 臭身，裁縫の用具は他は凡て変らず 31

ヌベシ マダマダ死ヌベシ「マダマダ死ヌモノカ」 25

ヌミ 蚤（但シ蚤ニ限ル） 24〈O，M，K，N，S〉，44

ヌメハリ 顛病者のやうな滑かな膚，ヌメは粥の表面の粘 31

ヌリー 温い 24〈O，M，K，N，S〉

ヌンミ（メ） 蚤 32

ヌンミメ 蚤 37

ヌンメ　蚤　28〈ひ〉, 31〈ひ〉, 40〈ひ〉[ノミ類], 44〈ひ〉

ネ

ネ　暗礁　5, 31〈O〉, 35〈O, K, N〉
ネー　無い　24〈M, S〉
ネー　苗　9〈M, S〉, 24〈M, S〉
ネァーダ　苗代田　31〈N〉
ネウシナライ　東北風　32〈N〉
ネーエ　田植歌，田植，共に同一称呼を用う　31
ネギ　葱　31〈ネギ〉
ネコ　ねこ　31
ネコケ　小なること　9〈子コケ〉
ネーショダ　苗代田　31〈S〉
ネシラネ　むかしの女の名　17〈ひ〉
ネズミ　ねずみ　31〈ネズミ〉〈O, N, S〉〈ネズミ〉〈K〉
ネズミザメ　ネズミザメ　40〈全〉
ネズミフグ　キタマクラ　40〈M〉
ネズミメ　鼠　40〈全〉
ネズメ　ねずみ　31〈ネズメ〉〈K, N〉
ネーダ　苗代田　31〈M〉
ネタリオウ　餅栗　31〈M〉
ネデカネ　女の六人め　12〈称ち金〉
ネーチャン　姉　32〈ネーチヤン〉〈N〉
ネッカブナ　漢名未詳　或ハ云海鴨ナリト　海岸ニ群飛シ魚ヲ食フ　食フニ堪ヘズ　5〈ひ〉[海鴨(カモメ)], 6〈ひ〉
ネツケー　小イ　25
ネツコ　ちいさいと云事　本邦根っから葉っからと云如し　11〈ひ，根小矣〉
ネツコイ　小　4〈子ッコイ〉, 5, 6〈ひ〉, 12〈子ツコイ〉, 15[小サなること], 37
ネッコウバ　最長伯母　19〈ひ〉
ネッコサマ　伯母　31
ネツコーサマ　伯叔母　35〈S〉, 37
ネツコーバ　伯叔母（小さき叔母の意より一般に老女をさす）　32〈ネツコーバ〉〈N〉
ネツコヒ　ちいさい事　16
ネツコムシ　むかしの女の名　17〈ひ〉
ネツコメ　猫　24, 31[ねこ], 40[家猫]〈全〉, 44〈ひ〉
ネドキ　夜四ツ時　17〈ひ〉
ネネズ　みみず　24[蚯蚓]〈K, N〉, 30[蚯蚓]〈K, N〉, 31〈K, N〉
ネネズメ　蚯蚓　32, 35〈N〉, 37
ネムタ　合歓木　一名夜合樹　5
ネーヤ　姉　35〈M〉
ネヤーエ　田植　32〈ネヤーエ〉
ネヤーシロダ　苗代田　32〈ネヤーシロダ〉〈N〉
ネール　煮える　24〈O, M, K, N, S〉
ネロヨ　ネロヨ　ナカズニネロヨ　オミノ　ホーチヤァ　モノツキニ　寝ンね寝ンねよ，泣かずに寝やれ　坊やの母さん，お仕事ぢや　27

ノ

ノ　学校ノグヮー借リル「学校ノヲ借リル」，ココノ方ノ静カデェー「ココノ方ガ静カデイイ」，此処ニ読賣新聞ノアロワ「此処ニ読賣新聞ガアル」25
ノ……ノ　勉強スルノ勉強シニヤーノドコロヂャナッキャ「勉強スルノ勉強シナイノドコロヂャアリマセン」25
ノー　繩　24〈M〉
ノー　死ノー「死ノー」（未來），オミヤ

ーノータモーレ「オ前ノヲオクレ」，ソレカラノーコレーワアダンシータスカ『ソレカラシテコレワドーイタシマスカ』25

ノア　念を押すに用ゐる句尾，助詞（さうです）ネ，ヨ，ワの類　32〈N〉

ノアー　所ガノアー夫ガアッダンモウンマタイキンシャデ「所ガデス夫ガドーモウマタイキマセンノデ……。」25

ノアーシ　マダマダ死ノアーシ「マダマダ死ヌモノカ」25

ノアズルナベ　内耳鍋　31〈O，M，K，NU〉

ノーガ　ドーダソコニアンノーガ「ドーダソコニアルダローガ」，來ノーガ「來ルダロー，來ヨー，來ヨー」，爲ノーガ「爲ルダロー，爲ヨー」，止メノーガ「止メルダロー」，延ビノーガ「延ビルダロー，延ビヨー」，オッカナカンノーガ「恐シカロー」，ヌクトカンノーガ「暖カダロー」，ボーカンノーガ「大キイダロー」，善カンノーガ「善カロー」，ワルカンノーガ「悪イダロー」25

ノギシヨ　芒（ススキ，カヤ）ノコト　5（野ギシヨ）

ノコ　尻　10

ノコギリ　鋸　31（ノコギリ）

ノコギリザメ　ノコギリザメ　40〈全〉

ノコギリシバ　草ノ名　5

ノーシ　舳　32〈N〉

ノシタ　沢山喰た事　16

ノージャ　大抵コグワンダンノージャ「マアザットコンナデショー」，コレデヨカンノージャ「コレデイイデショー」25

ノズ　酢漿草（かたばみ）　5，31〈O，K，S〉，32（ノズ）〈N〉

ノーズルナベ　内耳鍋　31（ノーズルナベ）〈M〉

ノツトウ　大便　6，9

ノビタ　（過去）　25（延ビタ）

ノビタラバ　（假定）　25（延ビタラバ）

ノフタチ　草ノ名　5

ノヘンコ　天南星同性（草花ノ名）　5

ノマ　泥　31〈M〉

ノーワ　來ノーワ「來ルダロー，來ヨー來ヨー」，爲ノーワ「爲ルダロー，爲ヨー」，止メノーワ「止メルダロー」，延ビノーワ「延ビルダロー，延ビヨー」，オッカナカンノーワ「恐シカロー」，ヌクトカンノーワ「暖カダロー」，ボーカンノーワ「大キイダロー」，善カンノーワ「善カロー」，ワルカンノーワ「悪イダロー」25

ノンダクレ　酔漢　31（ノンダクレ）

ノンノ　伯父　31〈K〉，46〈ひ〉〔従兄〕

ノンノンサマ　（兄）月　32〈N〉

ハ

ハ　ココノ方ハ靜カデエー「ココノ方ガ靜カデイイ」25

ハー　母　31〈S〉〔自称〕，35〈S〉，37

バ　アス雨ノフラバイキンナカヨイ「アス雨ガフッタライカナイヨ，アス雨ガフレバイカナイヨ」，「モットドンドンフレバイイニ」25

バ　伯母，ナカーバ，テゴーバ等　31（誰バ）

バー　老婆，祖母　31

バー　おや(感動詞)　23
ハア　母　16, 17(ひ)[母(下)], 18
バア　祖母　28(ひ)
バアメ　牝牛　35<K>, 37
ハイトビ　トビウヲの一種　40<全>
ハイノキ　樫　ハリノキ又ハンノ木　5
ハイブキ　西南風　31
ハイリグチ　上リ口　35<O>
ハエブキ　西南風, 強風　31<K>
ハカ　墓　31(ハカ)[新], (バカ)
バカ　馬鹿　31
ハカショ　墓, 墓地　31(ハカショ)[墓地], (ハカショ)[墓]
ハカチ　薑ナリ　5
バーカチ　薑　35<N>, 37<N, S>
バガチ　白薑　31(バガチ)
バーガチ　薑　35<S>
ハガツヨー　ハガツヲ　40<O, M>
バカドリ　アハウドリ, クロアシアハウドリ　40<O, M>
ハガマ　釜　31(ハガマ)<O, K, U>
ハギ　脛　17(ひ)[足], 31
ハギ　羽子(竹製)　31(ハギ)<O, K, U>
ハギー　羽子(竹製)　31<M>, 32<N>
ハギイ　羽子ハ竹ヲサヽラノ如クコシラヘル　コレヲハギイトイフテモロ手ニテーツ羽子ヲ大勢ヨリテツク也　又芝ブチトイフ事アリ　17
ハギータ　羽子板　31<O, M, K, U>, 32<N>
ハキダメ　塵捨場　31
ハグ　歯茎　31
バク　風土病ニバクト云アリ　之ヲ病ムハ女子ニ多クシテ脚部浮腫シ常ニ倍スルニ至ル　此病小島ニ殊ニ多シ　6
ハクサ　草ノ名　5(葉クサ)
バクロ　仲買　32<N>
ハゲタ　口　17(ひ), 18
ハゲーツキ　追羽根　32
バケムシ　しやくとり　31
ハコツベ　棟　31<O, M>
ハコベラ　はこべ　31, 32[おほばこ]<N>
ハサツデ　挟ンデ　24<O, M, K, N, S>
ハーサン　母, 敬称, 対称　31
バサマ　祖母　17(ひ), 28(ひ), 31(バサマ), 32(ひ)<N>, 44(ひ)
ハジ　端　24(端)[濁音ノミニ発音ス]<O, M, K, N, S>, 30, 44
バシ　末子　35<O>
ハシギ　楊櫨ノ類也　37
バシクトウ　野原などの廣き所　4
バジクドー　人家遠き野原　30
ハシゴ　梯, 外で用ゐる　31
ハシツカ　麻疹　31
ハシノキ　紫荊　5
バシャクドフ　家里となき野原を云　11(ひ, 場宿違)
バショウイカ　アヲリイカ　40<全>
ハシヨリオビ　腰帯　32(ハシヨリオビ)<N>, 35[腰紐]
ハシヨリヒボ　腰紐　35<S>
ハシラ　柱　31
ハシリッコー　走競　31(ハシリッコー)
ハジリドウ　野原抔の廣き所を…　5
バズニ　ソグァーニアスバズニガマンシエ「ソンナニ遊バナイデ勉強ヲナシ」　25
ハズメテ　始めて　24<O, M, K, N, S>

バズン　ソグワンアスバズンガマンシエ「ソンナニ遊バナイデ勉強ヲオシ」25

バゼ　ハゼ　40〈O, M〉

ハダ　皮膚　31(ハダ)

ハタオリ　梵妻(古), 忌詞　31

ハタゴ　枡, 二合五勺入り　19(ひ)[二合五勺入りのます], 31(ハタゴ)

ハタモノ　機　31(ハタモノ)

ハダヨビ　下帯　17(ひ), 31[褌]

ハチ(メ)　はち　31

バチ　メバチ　40〈O, M〉

ハチジョウシマ　八丈では丹後織というむかし丹後の國の縞を手本としはじめたのであろうか　染織は黒黄とび三色に限る　8(八丈縞)

ハチジョウメナラヘフシギカ口 (一字判読不能) ホフズアタマノマルクナシフドウカエンヲセオイモセズクスハイシニモナリヤセマイヒモナキユマキノオチモセズソノクセシケタノオオキサハミモチノハラニコトナラス　アツタアツタト　イイナカライヤナオトコヲフリツケル

或者の江戸ぶしとつちりとんに　17(八丈めならへふしぎか口ほふず天窓の丸くなし　ふどう火ゑんを背負もせず　くすは石にもなりやせまい紐なきゆまきの落もせず　其のくせしけたの大きさは身持のはらにことならす　詞あつたあつたと　地いゝながらいやな男をふり付る)

ハチメ　アブ類(ウシアブを除く), ハチ類総称　40〈O〉

ハーチャ　母, 敬称, 対称　31

ハヂラフ　父子の中にてさしあいを云　11(ひ, 恥慮論)

バッカリ　コレバッカリ, アレバッカリ「ノミ」　25

ハツギー　羽子(竹製)　31〈S〉

ハツギイタ　羽子板　31〈S〉

ハッコフ　はやくたのむに用ゆ　11(ひ, 早乞)

ハツセ　魚名(鯔沙)　5

バツタ　ばつた　31

バツタメ　バツタ類総称　40〈O, M〉

ハツチヤウ　八男, 八郎 (八丈の語源の一説)　6(ハツチヤウ, 八ちやう), 20(八ちやう)[八男]

ハッチョー　八男　31, 32〈N〉, 35[老人に多い]〈N〉, 37〈M, N〉

ハッチョウ　八男　4, 5(ハツチョウ), 17(ひ), 28, 44

ハツテウ　八男の事　16

ハツテフ　八男　19(ひ)

ハツテモシヤラヌ　動かぬ事　16

ハツテョウ　八男　10

バットメ　ばつた　31〈U〉, 40[バッタ類総称]〈O, M〉

ハツノナヌカ　初七日　31

バッバ　祖母(古), 乳母　31, 32(バッバ)[祖母]〈N〉

ハツフイタ　物に労れ草臥し事　4, 5

ハツフシタ　寝ころんでゐる　18

ハテーツケタ　旗へ附けた　24〈M, S〉

ハテャーツケタ　旗へ附けた　24〈O, K N〉

ハト　鳩　31

ハドアシミャーリ　跣参り　31

バドノ　伯母　31〈K〉, 35[伯叔母]〈K〉

ハトメ　鳩　32, 35〈N〉, 37, 40[アヲバハゴロモ〈O〉, キジバト〈N〉]

ハトヨー　メジナの類　40〈O, M〉
ハナ　鼻　31
ハナ　岬　31(ハナ)
ハナカゼ　東南風　5, 35〈N〉
ハナカミ　目白(花噛み？)　40〈M〉
ハナガメ　目白　32, 35, 37, 40〈N〉
ハナガリ　目白　40〈K〉
ハナガリメ　目白　40〈K〉
ハナクソ　鼻くそ　31
ハナジル　鼻汁　31
ハナタテ　花瓶　31(ハナタテ)
ハナダレ　ナミノハナ　40〈全〉
ハナチチ　粘土　31〈S〉
ハナモト　陰茎　6(ひ)[男根], 31
ハネチャカリ　轉婆女(少)　32(ハネチャカリ)〈N〉
ハハガチ　蓮　35〈K〉
ハハゴロシ　さつまいも　32〈N〉
ハヒラ　朽ヤスキ弱木　5
ハビラ　金剛筭ノ一種ナリ，同島（八丈島）山野ニ自生シ長丈餘ノモノアリ　6(ひ)
ハマ　海濱　31(ハマ)
ハマウルシ　草ノ名　5
ハマグリ　子安貝　31〈K, S〉, 40[タカラガヒ類]〈O, M〉
ハムマ　祖母　31〈O, M〉
ハメ　牝牛　13, 16[雌牛], 17[牸(メウシ)], 19, 28, 30, 31[牝〈K〉, めうし], 32〈N〉, 35〈O, M, N, S〉, 37〈O, M, N, S〉, 40〈全〉, 44
ハメノコ　こうし，　31〈O, M, N, S〉
ハモ　ハモ　40〈O, M〉
ハラ　既に　32(ハラ)〈N〉
ハラクヤ　悪敷事　4, 20
ハラクリ　驚く事　16
ハラクロウ　いたづらの事　16
ハラコ　中華にては一家を潰すを破落戸と云　此義続きて徒らと云用ゆ　11(ひ, 破落戸), 30[破産者]
ハラノキ　猿トリ茨　5
ハラハヘ　子供(悪口に)　17(ひ)
バラフゲ　ハリフゲ　40〈全〉
バラムシ　芋蟲　31(バラムシ)
ハラメ　姙娠　17(ひ)[孕婦], 19, 31(ハラメ), 32〈N〉, 35〈O, M, N, S〉, 37, 44
ハラメオンナゴ　姙婦　35〈K〉
ハラヤクビョー　赤痢　31
ハラワタ　腸　31
ハリ　針　31(ハリ)
ハリ　梁　31
ハリダシ　台所　31〈O〉
ハリモノ　腫物　31〈Oを除く〉
ハルニナ　ラバユメサラシラレナイテキカセルホトトギス　27（春ニナロラバユメサラシラレ啼イテ聞カセル不如歸）
ハルトビ　トビウヲ　40〈全〉
ハルミドノー　妻，対称，名にドノ，又はトノを附す　31(ハルミドノー)
ハロー　クエ　40〈M〉
ハロワタ　腸　31
ハロウ　魚名　37
ハロータ　子供，卑称，腹わたの意　31
ハンガマ　釜　31(ハンガマ)〈M〉
ハンケ　滑稽家　32〈N〉
ハンゲ　馬鹿，薄馬鹿　30[馬鹿], 31
ハンダイ　飯櫃　30
ハンチチ　粘土　31(ハンチチ)〈O, M,

K, N〉

ハンハ　海草の名，大和本草ニアヲサト記スハ是ナルカ　5

ハンバ　はぐのり，島民採テ食用トシ又さゝ魚ヲ釣ル餌トス　はぐのりハ秋晩海中ノ巌石ニ附着シテ生ス西風吹ケハ大ニ生育シ春季南風吹テ枯ル　6〔ひ〕

ハンボ　飯櫃　31

ハンボン　飯櫃　31〈U〉

バンマ　祖母　28〔ひ〕, 31〔バンマ〕〔曾祖母〔古〕〕, 44〔ひ〕

バンリョー　魚籠　32〔バンリョー〕〈N〉

ヒ

ヒアシメ　アリ類総称　40〈O, K〉

ヒアトリ〔メ〕　虫喰　40〈K〉

ピアピア　虫喰　40〈N, S〉

ヒアーメ　ハイ類総称　40〈N〉

ヒイ〔ニ〕　稗　32〈N〉

ヒイットヒ　一日　18

ヒイテイ　久しかった　17〔ひ〕

ピィヤメ　鵯　40〈K〉

ヒイル　蝶の事　16, 30

ヒイルメ　蝶　12

ヒイル　煙草盆　31

ヒガシ　東風　31, 35〈O, M, K, N, S〉

ヒガシカゼ　東風　31, 32〈N〉

ヒガシナライ　東北風　31〔東北風〕〈M〉, 東風〈U〉, 35, 37〈M〉

ヒガシナラエー　東北風　37〈M〉

ヒガシナレーカゼ　東北風　31〈S〉

ヒガンバナ　彼岸花　31

ヒク　布く　24〈O, M, K, N, S〉

ビク　魚籠　31

ヒゲ　陰毛　10, 31

ヒケクサ　草ノ名〔ヲトロノルイ〕　5

ヒコ　曾孫　31〔ヒコ〕

ヒザカブロ　膝　31〈M〉

ヒサシ　庇　31

ヒザマツク　居る事　16

ヒサメル　ものをかたづける言葉なり　11〔ひ, 清〕

ヒシ　人の云ことをうけぬと佛法にゆびとばしくとあり　11〔ひ, 飛指〕

ヒジ　臂　31

ヒシダヒ　ベニヒシダヒ　40〈O〉

ヒジノコ　臂　31, 32〈N〉

ヒジャ　膝　31〈O, K, N〉

ヒジャマツク　跪　24〈O, M, K, N, S〉

ヒジャマヅク　ひざまづく　24〈O, M, K, N, S〉

ヒジャーマツク　ひざまづく　24〈O, M K, N, S〉

ヒショ　干潮　31, 35〈O〉

ヒソク　紙屑　11

ヒソコリ　干潮　35〈M〉

ヒタ　〔過去〕　25〔干タ〕

ヒタ　舌　31〔ヒタ〕〈K〉

ヒータ〔メ〕　搭牛　31〈S〉

ヒタラバ　〔假定〕　25〔干タラバ〕

ヒダリ　左　31

ヒダリマキ　タカノハダヒの類　40〈M〉

ヒチ　七　24〈O, M, K, N, S〉, 30

ヒーチゴリ　たまさか　30

ヒチソー　北斗星　31〔ヒチソー〕〈N〉, 32

ヒチヤ　質屋　24〈O, M, K, N, S〉, 30

ヒツウスル　みへをする事　16

ビッカン　被官　13, 17〔ひ〕〔下人〕

ビッケハン　下男下女　4,5
ビッケワン　下男下女　6(ひ), 20(ビッケヮン)
ビツコ　跛　31
ヒツコトス　引落す　24〈O, M, K, N, S〉
ヒツソコリ　干潮　35〈N〉
ヒツチカアーメーテ　引止めて　27
ヒッチョー　七男　35[老人に多い]〈M, N〉, 37〈M, N〉
ヒッツ　身のさまよくこびたるを云　こしらへすぎたることなり　11(ひ, 西部)
ヒッツァク　引裂　24〈O, M, K, N, S〉
ヒツテウ　七男の事　16
ヒツパシ　末子　31〈K, N, S〉
ヒツパシゴ　末子　35〈K, S〉, 37
ビツボー　貧乏　23〈O, M〉, 24, 27
ヒヅリシン　賤しき召使　30
ヒヅリソン　いやしき召使を云　11(ひ, 日通理存)
ヒーティー　久しく　32(ヒーティー)
ヒティーモノ　ひとえもの　32(ヒティーモノ)〈N〉
ヒテーモノ　單衣　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 44
ヒトクイザメ　ウバザメ　40〈O, M〉
ヒトコロ　一時　30
ヒトサシービ　人差指　31
ヒトツ　ゼヒゼンナク一ツガマンシテネギャーテャーモノダ「是非一ツ御奮発ヲ願イタイモノデ…。」　25(一ツ)
ヒトツナライ　北の風　17(一ツならい)
ヒトモアリ　一巡　23, 35〈K, N〉
ヒトモーリ　一巡(ヒトマワリ)　23〈O, M〉, 35
ヒドリナベ　いり鍋　17(火どり鍋)
ヒヌシ　火斗　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31
ヒノヒボ　火事　16[火災の事], 30
ヒノマンナカ　正午(白晝も同じ)　31〈O, M〉
ヒバシ　火箸　31
ヒバチ　火鉢　31(ヒバチ)
ヒバチ　ほち　31〈N〉
ヒバリ　雪加(實正の雲雀と誤称するなり)　40〈O, M, N〉
ビービーメ　虫喰　40〈M〉
ヒフキダケ　クダヤガラ？　アカヤガラアヲヤガラヲモイウ, 又ヤガラ類ヲ總称シテモイウ　40〈O, M〉
ヒボ　紐　24, 30, 31(ヒボ), 44
ヒボン　煙草盆　16, 30, 31(ヒボン)
ヒメ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　25, 32(ヒメ(ドノ))[娘(敬)]〈N〉
ヒメサマ　人の名を呼ぶときにその名の下にそへて呼ぶ語　17(姫さま)[子供(ほめ言に)], 25
ヒメダイ　ヂビキの一種　40
ヒモノ　干魚(新)　31(ヒモノ)
ヒヤー　蠅　24〈O, K, N〉, 27, 30〈O, K N〉
ヒャァタカ(メ)　鷹　40〈K〉
ヒャァトリ(メ)　虫喰　40〈K〉
ヒャウソゲ　不図して咄を發明に用ゆ　11(ひ, 憑曾戯)
ヒヤウラ　雪俵　17(ひ)
ビヤウラ　雪俵　18
ヒヤウラドキ　雪　17(ひやら時)
ヒャクショー　農家　31

ヒャクショーヤ　農家　31(ヒャクショーヤ)

ヒャクドミャーリ　お百度参　31(ヒャクドミャーリ)

ヒャクンチ　百ケ日　31, 32(ヒャクンチ)〈N〉

ヒヤシ　虫(人をさす)　8

ヒヤシメ　蟻　35〈M, S〉, 37[蟹]〈M, S〉

ヒャーシ(メ)　蟻　31

ヒヤタカ　鷹　40〈N〉

ヒャツヘン　スケベイ　19

ヒヤツペン　好色漢　17(百べん)[陰乱], 31[好色者〈O, M〉, 好色者, 女のみ〈N〉], 32(ヒヤツペン)

ヒヤーノキ　榛木　24〈O, K, N〉, 32(ヒヤーノキ)〈N〉, 44(ひやあの木)

ビヤビヤ　虫喰　40〈N, S〉

ビヤビヤメ　虫喰　40〈N〉

ヒャーメ　蠅　32(ヒヤーメ, ヒヤーメ)35〈N〉, 37

ビヤメ　鵯　40〈K〉

ビヤーモギ　くわのみ　32〈N〉

ヒヤーリゲチ　上り口　35〈K〉

ヒヨ　ひよ　31

ヒヨウウ　昼めしの事　16(ヒヨウ〇ウ)

ヒョウシタ　(過去)　25(評シタ)

ヒョウシタラバ　(假定)　25(評シタラバ)

ヒョウシタロー　(推量)　25(評シタロー)

ヒョウソー　(未來)　25(評ソー)

ビヨーキ　病(新)　31

ヒョーキンモノ　滑稽家　31〈Oを除く〉

ヒヨクサ　ヒユクサ　24〈O, M, K, N, S〉

ヒヨツコメ　雛　32(ヒヨツコメ),35〈N〉, 37

ヒヨドリ　ひよ　31, 40(ヒヨドリ(メ))[鵯]

ヒヨドリダカ　鷹　40〈O, M〉

ヒョーヒョーメ　ハチジャウコッコ(鳥)　40〈M〉

ピヨピヨメ　鵯　40〈K〉

ピョーピョーメ　虫喰　40〈N〉

ヒヨフロフ　ひるめしの事なり　11(ひ, 昼餉(ヒルカテ))

ヒヨメ　ひよこ　31〈S〉

ピヨメ　ひよこ　31〈O, M, K, N〉, 40[ニワトリ〈O, M其他〉, 鵯〈K〉]

ヒョーラ　午食　31(ヒョーラ), 32(ヒヨーラ)〈N〉

ヒョーロー　晝食　30

ヒヨンゲ　つまらぬ事　16

ヒヨンゲニ　なんの事を　16[何故にと云事], 17(ひ)

ヒョンドリメ　鵯　40〈O〉

ヒョンドリメクサリ　鵯　40〈O〉

ピョンピョンメ　虫喰　40〈N〉

ヒラガシラ　ヒラガシラ　40〈全〉

ヒラシナライ　巽の風　13

ヒラテガ　平鍬, 單ニ鍬ノコトモイウ　5, 31

ヒラデカ　平鍬　4

ヒラナライ　東北風　17(ひ)[東風], 31[東北風, 東よりの風], 35〈K〉, 37

ヒラナリヤー　東風　32(ヒラナリヤー)〈N〉

ヒラナレーカゼ　東北風　31〈S〉

ヒラマサ　カンパチ　40〈M〉

ヒラミゴウ　丈鳴特有の小さな貝　27

ヒラムツゴ　ウミゴヒ　40〈O, M〉
ヒラメ　ヒラメ　40
ヒラヨ　バセウカジキ　40〈O〉
ヒランデー　平たい　23
ヒランナライ　東北風　35, 37〈N〉
ヒランナレー　西北風〈O〉, 東北風〈S〉　35, 37
ヒルシギ　40〈O〉
ヒルダロー　(推量)　25(手ルダロー)
ヒルマ　雀　31
ヒールメ　蛾　31[ちょし, 蛾と区別なし], 32, 35〈N〉, 37
ヒールメ　蝶　32〈N〉, 35〈S〉, 37〈S〉
ヒヲトマス　火をけすことなり　11(ひ, 止レ火)
ビン　徳利　31
ビン　ビンナガ　40〈O, M〉
ビンギヨ　便宜　28(ひ)
ヒンタラペイタ　雨に濡れる　17(ひ)
ビンチョー　ビンナガ　40〈O, M〉
ビンナガ　ビンナガ　40〈O, M〉

フ

フイゴ　鞴　31
フウ　社頭　4, 37
フウキダケ　火吹竹　31〈O〉
フウジタ　(過去)　25(封ジタ)
フウジタラバ　(假定)　25(封ジタラバ)
フウジルダロー　(推量)　25(封ジルダロー)
フウジロー　(未來)　25(封ジロー)
ブウブウメ　豚(稀なり)　40〈全〉
ブウメ　豚　40〈全〉
フォア　母, 自称　31
フォアキ　爺　31
フォーキシバ　つはぶき　31〈O〉
フカ　鮫類　40〈全〉
フキ　ふき, Fu'kii　31
フギ　腸　31, 32〈N〉
フキダケ　火吹竹　31〈K, N〉
フキノト　ふきのとー　31(フキノ'ト)〈O, M, K, S〉
フキノハナ　ふきのとー　31〈N〉
フキバコ　鞴　31
フグ　人なみの行ひもなく柔弱なるを云　11(ひ, 不レ具(スナハラ))
フグ(メ)　フグ類〈全〉, マフグ〈O〉　40
フクデ　丸い餅(小), 二つ重ねて一組とす　31
フクロー　八丈フクロウ　40〈N〉
フクロヅク　八丈フクロウ　40〈N〉
フケ　雲脂　31
フサク　凶年　31(フサ'ク)
フサッタ　相應　11(ひ)
フサラヌ　不相應　11(ひ)
フシヤウナ　きたなき事　16(フシヤウ○ナ)
ブタ(ザメ)　アヲザメ　〈O, M, S〉
フタオヤ　両親　31
フタタラ　從弟　17(ひ)
フタハライトコ　再從兄弟　31
ブダヒ　ブダヒ(稀に)　40
ブタメ　豚　32, 35〈N〉, 40〈全〉
フダンギ　平常着　31(フダンギ')
ブチ　ブッチ　40〈Q〉
ブチウス　麥搗臼　31(ブチウ'ス)
フチクサ　草ノ名　5
フツカビ　二日の事(正月祝ことば)　16
フッギー　腸　31
フツギー　子供, 卑称, 臓腑の意　31(フ

ッギー)

フッギーメ　馬鹿，罵称　31

フツケフツケ　ぬか雨　16, 30(フッケフッケ)

ブッコテル　落ある　24<O, M, K, N, S>

フッダチ　縁側にある下駄脱ぎ　31(フッダチ)<K>

ブッチ　ブッチ　40<O, M>

ブッチヤッタ　突テタ(過去)　25

ブッチヤラバ　(假定)　25

ブッチヤル　(或ハブッツァルトモイフ)うちやる　24<O, M, K, N, S>

ブッチヤルダロー　(推量)　25

フッテ　吹いて　24<O, M, K, N, S>

フト　男女ともに唱る(これは九男十男の外すべてフトと云　トヲスは格別愛子に用唱へ候)　16

フド　女の名(今もむくある)　17(ひ)　30[男女共小兒]

ブド　ところ天の如く煮かためて食す　13

フトハギ　股(古)　31<O>, 32<N>

フトモモ　股　31(フトモモ)

フナ　フナ　40

ブナヱ　大家　17(ひ)

フネ　湧き水　31(フネ)

フネ　船　31(フネ)

フネダコ　タコブネ　40<O, M>

フーフ　夫婦　31

フモト　山麓　31

フユニシ　西北風　17(ひ)[西戌の風], 31 [西風，少し北による<O>，南風<M>，西北風<K>，35[西風<O>，西北風<S>，]37

ブヨ(メ)　ブユ類　40<O, M>

ブラ　衣　6(ひ), 20

フリー　篩　24<O, M, K, N, S>, 30, 31(フリー), 32<N>

ブリ　ブリ　40<O, M, N, S>

フリェーモノ　玩具　31(フリェーモノ)

フルシキ　風呂敷　24<O, M, K, N, S>, 30

フンクサフンクサカマツテソウロウイモセンビョウノイキトカマツテソウロウサツマセンビョウノイキトカマツテソウロウコメセンビョウノイキトカマツテソウロウタンゴセンハコノイキトカマツテソウロウカマツテソウロウ　(追難のときの祝詞)　17(フンクサフンクサカマツテ候芋千俵ノイキトカマツテ候サツマ千俵ノイキトカマツテ候米千俵ノイキトカマツテ候丹後千箱ノイキトカマツテ候カマツテ候)

フングミ　褌　16[男の下帯の事], 30

フンゴン　本朝にて踏通しと云古語ならん　中華の犢鼻褌と云　今股引と同し　今用る下帯と云は後世のことと思はる11(ひ，踏込)

フンドシ　男褌　35<N, S>

フンドーシ　男褌　31, 35<O, M, K>

フンドン　分銅　23<O, M>

ブンムシ　黄金虫，ぶんぶん　31, 40[コガネムシ類]<O>

ヘ

ヘ　屁　31

ヘー　稗　23<O, M>, 24<O, M, K, N, S>, 30

ヘー　東京ニテ使用スル「ヘー」ト同様ニ使用ス　25

ヘー　蠅　24〈M, S〉, 30〈M〉

ベー　牛の掛声，止める時　31〈O, N, S〉

ベーベー　牛の掛声，止める時　31〈K〉

ベイ　牛をよぶ詞(右エヤルヲ)　17(ひ)

ヘイテイ・ひさしぶり　17(ひ), 19(ひ), [ひさびさ]

ヘイル　蝶　17(ひ)

ヘイルメ　蝶　35〈N〉

ヘグリ　嬶(シヤクリ)の事なり　11(ひ, 返答聞)　30[嬶上(シヤクリ)]

ヘゲ　鬚　17(ひ)[玉門の毛], 24, 27, 30, 31[髭，ヒゲとは絶対に云はず]

ヘージガラ　四十雀　31(ヘージガラ)〈O, N, S〉, 40〈O, N〉

ヘージガリアヤメ　四十雀　40〈N〉

ヘージゴメ　四十雀　31(ヘージゴメ)〈K〉, 40〈K〉

ヘーシメ　ヤリ類総称　40〈O, M〉

ヘージメ　四十雀　40〈N〉

ヘージュメ　四十雀　40〈N〉

ヘソガラ　臍緒(臍の緒)　31

ヘタ　わるい事　16

ヘータ　将牛　31(ヘーダ)〈K, N〉

ベタ　メジナ(アミサより長じたるもの)　40

ヘダカ　脊　4, 5, 6, 17[セナカ], 20, 24[背中], 28(ひ)[背中，裸], 30(ひ)[背中], 31(ヘダカ), 32〈N〉, 37

ヘーダカ　臍　40〈O, M〉

ベタッコ　メジナ(アミサより長じたるものにてベタともいう)　40

ベタナギ　良い風　32〈N〉

ヘタニナル　物の出来悪敷なふ　4

ヘーダメ　牝牛(普)　32〈N〉

ヘダラ　今は背中の通称と心得誤り用ゆ　11(ひ, 胴体(アハラカラダコシオネ))

ベチ　別　24〈O, M, K, N, S〉, 27, 30

ヘチマ　絲瓜　31(ヘチマ)

ヘッ　蜻蛉　30

ヘックウ　嬶　37

ヘックリ　しゃっくり　31〈O, M〉

ヘッコ　天南星　31

ヘッソウ　嬶　4, 5

ヘッソメ　蜻蛉の事　16(ヘッ○ソメ)

ヘッゾ　赤卒(アカトンボ)　17(ひ)〈A〉

ベッゾー　吐氣を催す様なる氣分　30

ヘッ　蜻蛉　17(ひ)

ベッゾウ　人に附添ふ嬰し方の人を云　11(ひ, 別添)

ヘッソコ　臍　17(ひ)

ヘッゾッ　へどをつくような逆氣を云　11(ひ, 嬶逆)

ヘッソメ　とんぼう　18

ヘッチャダン　ぶらんこ　19

ヘッチャゴ　軟纏　31(ヘッチャゴ)〈K, S〉

ヘッチューダ(イ)　軟纏　31〈M〉

ヘッチョゴ　臍　31(ヘッチョゴ)〈N〉

ヘッチョーゴ　軟纏　31〈O〉

ヘッチヨーダ　軟纏　32(ヘッチヨーダ)〈N〉

ヘッチヨメ　蜻蛉　31〈N〉, 32(ヘッチヨメ), 35〈N〉, 37

ヘッツェー　笛　23〈O, M〉

ヘッツォゴ　臍　31(ヘッツォゴ)〈O, M K, S〉

ヘッツォメ　蜻蛉　31〈O, K, S〉

ヘツツヲゴ　臍　28

ヘットリ　しゃっくり　18〈N〉

ベニタケ　菌の一種　13
ベネ　紅　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 32, 〈N〉, 44
ヘーノキ　榛木　24〈M, S〉, 30〈M, S〉, 31
ヘビ　へび　31(ヘビ)〈M, N, S〉, 35[蛇〈O〉, 蝮蛇〈O, K〉]
ヘビー　へび　31(ヘビー)〈O〉
ヘヒアヒ　蛇海　5
ヘビメ　蝮蛇　35[蛇〈N, S〉, 蝮蛇〈S〉] 40〈全〉
ヘヒラ　衣類の事　16
ヘビラ　衣服　8[みじかい單衣], 11(ひ, 弊 革 羅(ヤブルイセシウスエノ)[やぶれつぎたる着物の事なり], 17, 19, 30[普段着], 31(ヘビラ)〈M〉, 32〈N〉, 35〈M, K, S〉
ヘビロ　着物　28
ヘブメ　へび, 蛇はまむしのみ　31〈K〉, 35[蛇〈M, K〉, 蝮蛇〈K〉], 37[蛇〈N〉
ヘブラ　衣　4, 37
ベベイメ　蟷螂　16, 30
ベベメ　蟷螂　31〈K〉
ヘヘラ　衣類　18
ヘベラ　着物　28(ひ), 31(ヘベラ)[衣服]〈O, K, N, S〉, 35〈O, N〉, 44(ひ)
ヘヘラメク　笑う事　16
ヘミ　へび　31〈N〉
ヘーメ　ハイ類, 蠅　28, 30, 40〈全〉
ヘヤ　厠間　35〈O〉, 37
ヘーヤンゴ　私生兒間の子　31
ヘラ　飯匙　31
ヘーリ　屁　31(ヘーリ), 32〈N〉
ヘーリグチ　上リ口　35〈O, S〉
ヘール　吠える　24〈O, M, K, N, S〉
ヘールメ　蝶　35〈M, K〉, 37〈M, K, N〉 40[カヒコ(成虫)〈O〉, アゲハの類, コテフ類, ガの類總称〈O, M〉]
ベンキョウシタ　(過去)　25(勉强シタ)
ベンキョウシタラバ　(假定)　25(勉强シタラバ)
ベンキョウシヨー　(未來)　25(勉强シヨー)
ベンキョウスルダロー　(推量)　25(勉强スルダロー)
ヘンコ　天南星(草ノ名)　5
ヘンゴ　蓋天南星ノ一種ナラム八丈御藏島等ノ山野ニ自生ス　6(ひ), 8(ひ)[いもの如くなる物を山より取り來りよく煮熟してつきもちの如くし小さく丸めてなげニゝ丸のみにす], 31[天南星]
ヘンコヘンコスル　交合(稀)　31
ベンジヨ　便所　35〈K〉
ヘンノトタマシイヲウチツフス　大きにきもをつぶしたと云事　11(ひ, 打ニ潰神魂ヽ)

ホ

ホー　母　35〈O, M〉, 37
ホー　アタマジラミの成虫　40〈O〉
ホアガラ　母親　27
ホアラ　腹　31
ボーイビ　拇指, ボーは大きいの意　31
ホウ　母　19(ひ), 28(ひ), 44(ひ)
ボウ　母　6(ひ)
ボウイ　いういと云事　11(ひ, 豊矣)
ホウキシハ　防葵　5
ボウケ　大　4[大を云], 6(ひ), 9(ひ), 16

[大きな事], 18[大きなる事], 20(ひ), 37
ホウケシユ　重立候者の事　16
ホウシサマ　子供(ほめ言に)　17(ひ)
ボウス　女の名(今もよくある)　17(ひ)
ホウダイ　一膳といふ事　4, 5[一膳といふ事], 37[一膳]
ボウタイ　このうへなきいかいと言事　11(ひ, 豊太)
ホウヌウ　ふとりしものなど　11(ひ, 豊豆)
ボウチ　大　37
ホウドノ　母, 敬称, 対称　31〈M〉
ホウノツラ　蔓荊子(草ノ名)　5
ホウフケ　蚤(ヒゲ)　17(ひ)
ホウボウ　ホウボウ　40
ホウリ　神の妻をおこのふ吏民の事を云　11(ひ, 法吏)
ホウリキ　うちかけ(裲襠)　6
ホウロク　かぶろけ, 五門無毛　17(ひ), 19(ひ)[カブラケ女]
ボーエ　母屋　35〈M, S〉, 37
ホオ　頬　31
ホーキシバ　つばぶき　31〈K, N〉
ボクナロニ　生長して行くに　27
ボクボク　ぼっくり(下駄の)(児)　32〈N〉
ボクリ　木履(ホクリ), 下駄などふ　27, 44(ひ)[木履, 下駄]
ボクリナブシテソデヒツチカアメーテオミヤナワソドワカコノアメニ　下駄を隠して袖引止めて主は帰るかこの雨に　27
ホゲチラス　取もらすと云ことなり　11(ひ, 放下散)
ホーケン　ほうせんくわ　32〈N〉
ホーコケジョー　鷺　31〈O〉
ボーコーゴメ　コガタノゲンゴラウ　40〈O〉
ボーサマ　僧侶　31(ボーサマ)
ボーザメ　鮫類　40〈全〉
ホシ　星　31
ホージ　法事　31(ホージ)
ボーシカブリ　ハチジャウコッコ(鳥)の雄　40〈O, M〉
ホシザメ　ホシザメ　40〈全〉
ホシデャーコ　千大根　31
ボージャシキ　母屋.　31(ボージャシキ)
ホーセンカ　鳳仙花　35〈O, S〉
ホソイ　燈心艸　5
ホソズル　さつまいも　32〈N〉
ホソーノトリ　鶴　40〈S〉
ボタミコ　19(ひ)
ボタモチ　握飯(ボタモチ)〈N〉, 牡丹餅(ボタモチ)　31
ホタルグサ　草ノ名　5(ホタル艸)
ホヂ　知恵　6(ひ), 11(ひ, 輔智)[智ある人を言], 19(ひ), 30(ひ)[智者]
ボチ　足(牛馬の)　32〈N〉
ホッカア　僊　4, 6(ひ), 37
ホツカアホウリ　がんなきの当らぬ右いを云に形容してうそをふことに用ゆ　11(ひ, 欲加法吏)
ボッキイニジ　辰巳の方に大数丈斗り虹のたつをいう, 棒杭の訛なるか　13(ボッキイ虹)
ホッキリ　蜂　6, 13
ボックリ　駒下駄　28, 31(ボックリ), 32(ボックリ)[ぼっくり(下駄の)]〈N〉

ボッコー　粗末な太い絲の織物　30[襤褸],31

ボッコメ　牡牛(下品なる語)　30,31[老牛]

ボッソウ　おどろきたる時　4,6

ホッチヤ　ほんとう　17(ひ)

ホツチヤヨ　うそを言わずにほんとふにと云所に用ゆ　11(ひ,法言),30(ホツチヤヨ)[本当]

ホッペタ　頬　31

ボテー　魚屋　31(ボテー)

ホテル　暑　17(ひ)

ホトケ　卒塔婆　31

ホトケサマ　位牌　31

ホトケザメ　ガンギエヒ　40<O>

ホトケノミミ　草ノ名　5(ホトケノ耳)

ホトトギス　時鳥　40<O,M,N>

ホトドキス　ほとゝぎす　31(ホトドキス)<K,U>

ホトドギス　ほとゝぎす　31(ホトドギス)<O>

ホトーリータソデヤ　「オアツー」　25

ホドヲツテシンデ　あつさ堪がたき事　16(ホドヲツテ死テ)

ホトヲル　暑　17(ひ)

ボーナタ　大鉈　31

ホービイヤー　友人　32(ホービイヤー)<N>

ホービャー　友人　31<O,K,N>

ホフ　自らの母親を云ことばなり　11(ひ,母)

ホブヤ　大家　17(ひ)

ボーフラ　孑　24<O,M,K,N,S>,30

ホーベー　友人　31<M,S>

ボーボン　ギンヤンマ　40<O>

ボーボンシ　ギンヤンマ　40<M>

ボーマメ　蚕豆　31[そらまめ],35<M>,37

ボーヤ　乳兒　35<O>

ホラ　谷,深き処又は水ある処　31,32[澗川]<N>,35<O,S>

ホーラ　ホーラデータソヲ「ホーラ出マスヨ」　25

ボラ　谷　31<S>,40[ボラ]<O,M>

ホラガヒヤドカリ　ヤドカリの一種?　40

ホラゲー　ホラガヒ　40<O,M>

ホラフキ　虚言者　31

ホーリ　牛飼　31

ホーリスズ(メ)　ホホジロ(ホーリツズ(メ)の内地化)　40<全>

ホーリヅク　牡牛(悪癖ある牛)　40<全>

ホーリツズ(メ)　ホホジロ　40<全>

ホーリツヅメ　頬白　31(ホーリツヅメ)<O,M,S>

ホーリメ　暴牛　31<M,S>

ホロ　襤褸　16[ぼろの事],17(ひ)[古着,帯],19(ひ)[あしき着物],31<K>

ボロ　襤褸,さしこ　31

ホワ　母(少)　32<N>

ホヲイ　せい高き事　16

ボヲイ　大きな事　16

ホヲリツツメ　書眉鳥の事　16

ボン　盂蘭盆　31

ボンオドリ　盆踊　31(ボンオドリ)

ホンコー　私生兒間の兒　31

ボンサンゴウ　ぼんに神佛に詣で賽銭の代りに手向る米を云　11(ひ,ホンマイノコヲ盆参詣)

ボンシ　蜻蜓(ヤンマ)　17(ひ),35(ボンシ(メ))[蜻蛉]<O,M>

ボンシメ　トンボ類総称　40〈O, M〉
ボンナダ　ウツボ　40〈M〉
ボンナミ　厄浪，土用波　31
ボンナリヤー　東北風　32(ボンナリヤー)〈N〉
ボンニシ　西風　31
ボンベッコー　タイマイ　40〈全〉
ボンボンドリメ　アヲバツク　40〈K〉

マ

マア　父　44
マア　マア困ッタコトダノー「マア困ッタコトネー」　25
マアセセベイ　人に物を好れてつかわさんと云ふに用ゆ　11(ひ，可二間合一)
マアミ　速、はやき事　4, 17(ひ)[早], 20
マアミニ　はやくと云事　16
マアミニコイ　早くこひと云事　走レ於二疾(はや)一来(こ)レ於二快(こころよ)一(たわ)(せ)意味ー早く行けと云事　11(ひ，来レ於二交合儀一)
マアミニマアミニ　早く早くと云事　16
マイタマ　寺頭(正月祝ことば)　16
マイタマ　寺頭　30
マイダマ　繭玉　31
マイレ　喰　17(ひ)
マイワイ　染出の大模様をつけた大漁着　37
マエ　繭の事　16
マエノヨメ　先妻　31(マエノヨメ)〈O, M, N〉
マガウ　誠に。誠なといふ事　18
マガフニ　まことにということ　4
マカマ　鎌の事　16
マガマ　鎌　17, 30, 31(マガマ), 32〈N〉
マクサ　まくさ　31(マクサ)
マグサボーキ　草箒　31(マグサボーキ)
マクラフグ　コンゴウフグ　40〈全〉
マグレル　氣絶の事　16
マグロ　マグロ　40〈O, K, N, S〉
マクワ　まくわうり　31
マゴ　孫　31
マコウニ　誠にといふ事　4, 37[マコウニ]
マゴウニ　誠に　5, 6(ひ)
マコフニ　まことにと云事なり　11(ひ，於二眞好一)
マゴロク　ばかということ　4(孫六), 16[どぬけた事], 17[馬鹿]　30
マゴヲニ　誠にと云事　16
マサキフヂ　草ノ名　5
マジー　マズイ　25
マシウヅラ　むかしの女の名　17(ひ)
マジク　人なのろふを云　11(ひ，咒(マジナイルシム)詛)
マーシュ　独楽　円錐形独楽　木製　西洋独楽の如き　31
マシレタ　物失し事　4, 16[うしのふ事、物の見へぬ事]
マジレル　失る　17(ひ)
マス　ヒメダヒ　5〈O〉
マス　枡　31(マス)
マスノウヲ　魚名(鱒トハチガウ)　5
マダ　未だに　32〈N〉
マダチート　今少し　32〈N〉
マタミ　揃ナルヘシ　5
マタラ　模様の事　16
マダラ　晴着　8[ひとえもの], 11(ひ，満多羅)[よき着物の称号なり], 17(ひ)[文], 19, 30, 31[模様], (マダラ)[晴着], 32(マダラ(幼))〈N〉, 40[美服]

マダラ　斑牛　31

マダラウウ　斑牛　31(マダラウウ)〈K, S〉

マダラウシ　犂(ブチウシ)　17(ひ)

マタラハシ　冬青ニ似テ柴ノルイ也　5

マダラヒフキダケ　クダヤガラ？　40〈O, M〉

マダラメ　蝶類(模様ある美しい蝶)　40

マチキメ　ホホジロ（マチク(呪ふ)者の意か)　40〈O, M〉

マヂニャー　禁厭　31〈K, N〉

マヂネー　禁厭　31〈O, M, S〉

マヂラカス　ものを失ふを云　11(ひ, 交散)

マツカサ　松毬　35〈S〉

マッカリ　椀　6, 17(古椀), 19

マッカリ　飯事　31〈O〉

マッカリガケ　飯事に用ある茶椀類, 陶器の缺け, 小兒がまゝ事に用ある時称す　31(マツカリガケ)

マツカリヤ　飯事する処　31〈O〉, 32(マツカリヤ)[ままごと]〈N〉

マツカリヤー　飯事　31〈K〉

マッコフタイ　心を用ひこなす所に用ゆ　11(ひ, 眞好太)

マッチロ　眞白　24〈O, M, K, N, S〉

マット　今少し　32(マット)〈N〉

マツノキンコブ　松毬　35〈M〉

マッピル　正午（白晝も同じ）　31〈O, K〉

マツボツクリ　松毬　35〈O〉

マツホト　茯苓（草木ノ名）　5

マツムシ　マツケムシ　40〈O〉

マツンバ　枯松葉　35〈M〉

マツンバラムシ　松に棲むもの　31

マデ　アナタニマデ御迷惑ヲカケテワスミータサニャー「アナタニマデ御迷惑ヲカケテワスミマセン」, ワタクシーマデタモール「私ニマデ下サツタ」, 一日ニドコマデイケルカ「一日ニドコマデイケルカ」, 鐘ノ音ガココマデキケール「鐘ノ音ガココマデキコエル」　25

マトリ　オホミヅナギドリ　40〈M〉

マナイタ　俎板　35〈K〉

マナコ　眼　31

マナニ　眼　11

マニシ　西風　17(ひ)

マハリヤド　遊びに行先の家をさしていふ　16

マハル　みる事　16

マバル　十分に氣の付目をはらいて見たと云形容の言葉なり　11(ひ, 眉張)

マヒタマ　正月アカツキテ元日ハ夜半二日ハ明七ツ三日ハ明六ツニマヒ玉トテ雑汁ノ吸物ニテ明(アキ)ノ方ニムカヒ家内バカリニテ濁酒ヲ祝フ也。(餅ヲ)木ノ枝ニツケテ神棚ニササケ歳神ヲ祝フヲマヒ玉トイフ也。17(マヒ玉)

マヒル　正九ツ時の事　16, 31[正午(白晝も同じ)]〈M, N〉

マフニマイレ　たんとあがれと云事なり　11(ひ, 于レ望被レ喰)

マホウキ　草ノ名　5

ママ　崖, 石垣の高きもの　31, 35(崖)〈O, M〉

ママゴト　飯事(新)　13

ママーセイ　異母兄　31(ママーセイ)

ママホウキ　ゆきのしたに似ている　13
マミ　眉毛　31(マミ)〈M〉
マミー　眉毛　31〈O〉
マミゲ　眉毛　3J(マミゲ)〈K〉, 32〈N〉
マミマミ　はやくはやくということ　6(ひ), 9
マメウラナイ　(正月)十四日夜　豆占トテ大豆ヲ焼テ年中ノ風雨晴曇ヲコヽロ見ル　是國地ノ嬉遊(ヲキガノ)豪ニ同シ　17(豆占), 31[豆撒の豆を盆の中に十二並べ, それにて一年の運を占ふ事]
マメギ　眉毛　31〈N〉
マメツタ　鏡面草ナリ　5
マメヤキ　豆撒　31(マメヤキ)
マヤ　牛小屋　1J(ひ,(馬屋))[いにしへ馬を飼し頃の名なり, 今は牛家を馬屋と云], 28(ひ)[牛舎], 31(マヤ), 35(ひ)[厩, 牛小屋]
マーリコ　雇宿に泊るもの　31(マーリコ)
マーリヤド　雇宿(古)　31
マル　旋毛　32〈N〉
マル　ソウダガツヲ　40〈M〉
マルタ　魚名　40〈O〉
マルチヅナ　草ノ名　5(丸チヅナ)
マルデッポウ　ソウダガツヲ　40
マルテン　ソウダガツヲ　40〈M〉
マルフ　死る事　16
マルブ　死亡, 死ぬといふ動詞なり　31
マロブ　本朝にて立たるもの臥したるをまろぶと云　生たる人死ぬるも同意なり　1J(ひ, 轉), 18(死)
マワリバメ　渡り者　13
マワリヤド　男モ女モ二八ノ盛リニナリヌレハ　夜ルハ己カ家ニ寢ス　他人ノ宅ニ寢テ朝ハヤフ家ニ歸ル　是ヲマワリ宿ト云フ一軒少キモ二三人オオキハ十人ニモスキス　17(マワリ宿)
マンダリコ　餓鬼　32〈N〉
マンチウ　直なる事　4
マンナウ　直なること　6(ひ), 17, 18, 37
マンノウ　ひがまぬと云事に用ゆ　1J(ひ, 滿能)
マンノフ　まつすぐだと云事なり　1J(ひ, 眞能)
マンボー　マンボウ　40〈O〉
マンマ　昨日デヤーマンママダキヤーッテキンナカ[昨日デタママイマダニ歸ッテキマセン]　25

ミ

ミオクリ　(喪礼ノトキ)(前略)……行列セリ　其アトハ見送リクヤミノ人々ナリ　衆人群集シテ是ヲ見ルコト大阪ノ天王祭江戸ノ山王祭ヲ見物スル思ヒ也　コレヲ見送リト号ス　17(見送り)
ミガイ　苦い　24〈O, M, K, N, S〉
ミガタケ　苦竹　24〈O, M, K, N, S〉, 30
ミガリ　にがり　24〈O, M, K, NS〉, 30(塩汁)
ミカン　蜜柑　31〈M, S〉
ミキ　神酒　3J(ミキ)
ミギ　右　31
ミキチアカル　あるき廻る　18
ミクイ　醜女　31
ミケン　眉間　31
ミコ　市子　31
ミコ　神子　31(ミコ)
ミザ　つちのうへと云事なり　1J(ひ, 途

砂), 30[土の上]

ミジキャー　短い　24<O, K, N>

ミシヒトヲモウ　みたくでもないと云事　16

ミジャ　土間　32(ミジヤ)<N>, 35

ミジヤ　地　6(ひ), 19(ひ)

ミジヤイ　ひくき事　16

ミジヤク　ひくき　17(ひ)

ミシャドウシ　人の見のたすけなければあぶない所だとゝに用ゆ　11(ひ, 看者遠矣)

ミジョ　溝　31, 32(ミジヨ)<N>

ミシリゴ　野菜の類を入るゝ器　4, 5, 37[野菜の類を入れる道具]

ミズクミ　流人の妻　17(水汲)

ミズモト　水源　31(ミズモト)

ミセテタベ　ソレーミセテタベ「ソレヲオミセ」　25

ミセヤレ　ソレー見セヤレ「ソレヲオミセナサイ」, ソレー見セロ「ソレヲ見セロ」　25

ミソ　味噌　31(ミソ)

ミゾー　鳩尾　31<O, M>

ミソカ　晦日　31<O, K, N>

ミゾーチ　鳩尾　31<K, N>

ミタ　(過去)　25(見タ)

ミタラバ　(假定)　25(見タラバ)

ミチキ　箸(ビン)　17(ひ)

ミヂケー　短い　24<M, S>

ミヂケー　短い　24<M, S>

ミヂケル　見つける　24<O, M, K, N, S>

ミヂショ　満潮　35<O, K>

ミチーデル　道へ出る　24<O, M, K, N S>

ミヂヤ　地　17(ミぢや)

ミッカノイワイ　里帰り　31

ミッカノイワイ　みつめ　31(ミッカノイワイ)

ミツカビ　三日の事(正月祝ことば)　16

ミヅカメ　水甕　35<N, S>

ミッカヤ　月水あがりて後三日づゝ身を清めたる家のことなり　11(三日家)

ミド　針孔(但シ針ニ限ッテイフ)　24<O, M, K, N, S>, 30

ミトケ　見ておけ(小数者)　24

ミナミ　南風　17(ひ), 31<K, S>, 35<O M, N, S>

ミナミ　東風　31<K>

ミナミ　東南風　35<K>

ミネ　嶺　31, 35[山頂]<O>

ミノ　簑　31(ミノ)

ミハラゴッコ　鶺　40<O, M, K, N>

ミボトリ　ねつあるを云　11(ひ, 身熱)

ミホネ　身體　31

ミミ　耳　31

ミミクサ　はーこぐさ　31(ミミクサ)

ミミダブ　耳たぶ　31<M>

ミミタボ　耳たぶ　31<K>

ミミヅク　シマオホコノハヅク　40<K, N>

ミミノタレ　耳たぶ　31<N>

ミモリ　監視人(田の)　31

ミヤー　起キータスミヤー「起キマイ」, 起キミヤー「起キマイ」, 買ウィタスミヤー「買ウマイ」, 買ウミヤー「買ウマイ」, 來ータスミヤー「コマイ, 來マイ」, 爲ータスミヤー「爲マイ, 爲マイ」, 死ニータスミヤー「死ヌマイ」, 死ヌミヤー「死ヌマイ」, 爲ミヤ

ニ「島マイ，鳥マイ」，ブッチャリータスミャー「捨テマイ」，ブッチャルミャー「捨テマイ」，見ミャー「見マイ」 25

ミャーガ マダメーミャーガ「マダ見エマイガ」 25

ミヤケナダ モンガラドホシ 40〈M〉

ミヤコ 容ヲ蛇ニ類ス 白黒之斑文アリ 5

ミヤコナダ モンガラドホシ 40〈O〉

ミャーダレ 前垂 31

ミヤトコ にはとこ 31

ミャーヌカバ 門歯 31〈ミャーヌカバ〉

ミーヤネ 屋根 31〈O〉

ミャーノツキ 先月 31〈O〉，32〈N〉

ミャーノヨメ 先妻 31〈ミャーノヨメ〉〈K〉

ミャーリータス 私モミャーリータス「私モ参リマス」 25

ミヨ 蔵から糸をとる籠 31

ミヨケ 糸籠 5〈ミョケ〉，6〈ひ〉，11〈ひ，身除〉，［糸籠のことなり 糸の乱れるをいとひ人を除ける事より称せし名なり］，16［絲籠の事］，30〈ミョケ〉，37〈ミョケ〉

ミヨケ 糸を入れる器 4，20

ミョーシ 舳 〈ミョーシ〉

ミョージン 明星 31〈ミョージン〉〈O，M，K，N〉

ミルダロー （推量） 25〈見ルダロー〉

ミロ コレーミロ「コレヲ見ヨ」 25〈見ロー〉

ミロー （未来）

ミンナ 皆 32〈N〉

ミンナナギ 皆 32〈N〉

ム

ムカイカゼ 逆風 31〈ムカイカゼ〉〈M，K〉

ムカジ 百足，ムカデ 24〈O，M，K，NS〉，30，40

ムカジメ 百足 44

ムギ むぎ 31〈ムギ〉

ムギコーセン 麥香煎 31〈ムギコーセン〉

ムギブチボー 麥打棒，連枷ヲ用ゐずして唯の棒ヲ用ゐる 31〈ムギブチボー〉

ムグルシ 篩〈フルヒ〉 17〈ひ〉，32〈N〉

ムグルシー 篩 31

ムコウ 入夫 31〈ムコウ〉

ムコゴキ 嫁の家で婿に食べさせる大きな茶碗 37

ムコサン 入夫 31〈ムコサン〉

ムコドリ 婚姻 31〈ムコドリ〉

ムシオクリ 虫送 31

ムシキ 薪，小さき薪 31〈K〉

ムシキビ 薪，大なる薪木 31〈K，N〉

ムシダイコ 干大根 31

ムシツケ 薪，小さき薪 31〈O，M〉

ムシマツリ 蟲送 31〈ムシマツリ〉

ムシメ むし 31

ムシリクム どうも成ませぬ 18

ムスビ 握飯 31

ムツ ムツ 40〈O，M〉

ムツカシイ 清濁両様ニ発音ス 24〈ひ〉〈O，M，K，N，S〉

ムツゴ ウミゴヒ 40〈M〉

ムナイタ 胸 31

ムナタキ 額 31〈S〉

ムネ 胸 31

ムマ　乳母，テゴムマニヨコムマ之を普通とす　31〈誰ムマ〉
ムラウ　貰ふ　24〈O, M, K, N, S〉
ムル　漏る　24〈O, M, K, N, S〉
ムロ　ムロアジ，アヲムロアジ，ムロアジの一種　40

メ

メー　起キメー「起キマイ」，來ータスメー「來マイ」，來メー「コマイ」，「來マイ」，爲ータスメー「爲マイ」，死ニータスメー「死ヌマイ」，死ヌメー「死ヌマイ」，見ータスメー「見マイ」　25
メイヨウシ　甥，姪〈両者の区別なし〉　6〈ひ〉，16〈メイ○ヨウシ〉，17〈ひ〉，19〈ひ〉
メーウシ　姪　32〈N〉
メカケ　妾　17〈ひ〉[忍ひ女]，31
メカゴ　目笊　31
メカゴザル　目笊　31
メクサリ〈メ〉　ひよ　31〈O, S〉
メクサレ　鵯　40〈S〉
メクスリー　蛤の一種　31〈S〉
メグリ　近所　17〈ひ〉
メコ　嫡女　10
メシ　飯　31〈メシ〉
メジ　メヂマグロ　40
メシベラ　飯匙　31〈メシベラ〉
メダイ　メダヒ　40〈O, M〉
メツカチ　片目　31
メツジャ　高慢者　32〈N〉
メツタカ　貝名　5
メットー　サラサバテイ，ギンタカハマ　40〈O, M〉
メットウガイヤドカリ　ヤドカリの一種　?　40
メナウベ　女子　4
メナカ　涙　6〈ひ〉
メナタ　涙　4, 5[渡]，16, 37
メナダ　涙　24, 28〈ひ〉，31〈O, M, K, N S〉，32〈N〉，44
メナダ　襁褓　30
メナラエ　娘〈他〉　32〈N〉
メナラヘ　女兒　6〈ひ〉
メナラベ　若き女　9〈ひ，面晴良倍〉[若き女の總名なり先はみめよきを云]，17〈美並〉[十六，七ヨリ三十クライマテノ娘ヲ云フ女童ノ言葉ナマリカ]，19〈ひ〉，31〈メナラベ〉[女子　年頃の娘のみに云ふ]，32〈ひ〉[美人〈娘の〉]〈N〉，44〈ひ〉[女童，処女]
メナンダ　目に含む目涙と云　詛なかるるを涕を出すと云　今は涙の通称となる11〈ひ，目涙〉
メーノツキ　先月　31〈メーノツギ〉〈M, K, N〉
メバル　ヨロヒダヒ　40〈O〉
メブタ　瞼　31〈メブタ〉
メミズ　みゝず　31〈U〉
メメ　みめ　24〈O, K, N〉
メメ　耳　30〈O, K, N〉
メーメー　牛の掛声，仔牛を呼ぶ時　31
メメカタチ　みめかたち　13
メメズ　蚯蚓　24, 30〈O, M, S〉，40[ミミズ類]〈O〉
メメズメ　みゝず　31〈O, M, S〉
メーヨーシ　甥，姪　区別なし　31, 32[甥]〈N〉
メラベ　女子　20

メール　燃える　24〈O, M, K, N, S〉
メール　見える　24〈O, M, K, N, S〉
メロ　何のメロ(女のことか？)　10
メンサナシ　了簡なしの事　12(メンサ○ナシ)
メンザナシ　思ひやりなく口をききたわけものといふことなり　11(ひ，無レ兎レ座)
メンジメ　目白　40〈M〉
メンジョメ　目白　40〈O〉
メンジロメ　目白　40〈M〉
メンナ　みんな(皆)　24〈O, M, K, N, S〉, 30
メンノメ　醜女　31, 32(メンノ(メ))〈N〉

モ

モ　雨ワフッテモ路ワワルクワニャー「雨ワフッテモ路ワワルクワナイ」
モー　多さん　30
モ……モ　昨日モイクヮーニ今日モイクカラ「昨日モ行ッタシ今日モ行ッタ」，生レロモ死ノモアロワ「生レルノモ死ヌノモアル」，昨日モ一昨日モ来タラ「昨日モ一昨日モ来マシタ」　25
モァリヤド　若衆宿　32(モアリヤド)〈N〉
モァーリヤド　若衆宿　31
モウシイタス　カシ申シ　イタス「オ貸シ申シ　マス」，コノ本ヨチックリ借リ申シ　イタス「コノ御本ヲ一寸オ借リ申シ　マス」，私ガ話シ申シ　イタス「私ガオ話シ申シ　マス」　25
モウセル　人に物をやる　17(ひ)
モウニ　多き事　16
モエビ　モエビ　40〈M〉
モグルシ　味噌こし　19(ひ)
モシキ　薪　17(ひ)
モショ　薦　24〈O, M, K, N, S〉, 30
モズ(メ)　百舌[稀なり]　40〈N〉
モズキ　襁褓　31
モスクビ　薪，大なる薪　31〈O, M〉
モチ　藏の足にあるつばのようなもの　19(ひ，(藏のもち))
モチー　餅　31(モチ)
モチョツク　餅を搗く　24〈O, M, K, N S〉
モッキ　小兒のしめしのことなり　11(ひ，模着), 35[襁褓]〈S〉
モヅキ　襁褓　35〈K, N〉
モットモ　沢山な事　18
モトイェー　本家　31
モトウチ　本家　31
モノー　今日アタリコズトモヨクモノー，「今日アタリ来ナクテモイイモノ」，今日ワ山沢シャークロモノー小林ワアッテキンニャーダロー「今日ワ山沢サエクルモノヲ小林ワナゼ来ナイダロー」，マット早ククルトヨカロァーモノー「モット早ククレバヨカッタモノヲ」，ワラチツトモショクナツケモノー「私ワ少シモ知ラナイノダモノネ」　25
モノオキ　納屋　35〈O〉
モフニ　おゝく　17(ひ)
モミシキ　籾磨　32〈N〉
モモシキ　股引　31(モモシキ), 35〈O, K, S〉
モモマツ　女の八人め　12(百松)
モヤ　母家　31(モヤ)
モヨリ　快晴の事　16

モリ　森　31

モーリ　廻り　24〈M〉, 30〈M〉

モリキ　森，お宮の周りなどに限る，御くとも云ふ　31〔モリキ〕

モロコ　八丈ニテ漁ス頭　大ニシテ長三尺許口大ニシテ鋸歯アリ　5〔魚名〕, 6〔ひ〕

モロコシ　玉蜀黍　31〔ひ〕〈U〉

モロノーテ　共々　16〔モロノツテ〕〔共々にという事〕, 30

モロムキ　うらじろ正月の祝言葉　31

モンカ　綺麗ナモンカ「綺麗ナモノカ」，之ガスッパケモンカ「コレガスイモノカ」，之デヨケモンカ「之デイイモノカ」，ソグァンダーコトガアロモンカ「ソンナコトガアルモノカ」，マダマダ死スモンカ「マダマダ死スモノカ」，マンゴロクルモンカ「今頃来ルモノカ」　25

モンズウ　沢山なること　4〔沢山成事〕, 5, 6〔ひ〕

ヤ

ヤ　ヤ大変ダ　25

ヤ　反問ノ場合即チ「何デス」ノ意ニ使用ス　25, 44〔ひ〕〔聞く時〕

ヤー　反問ノ場合即チ「何デス」ノ意ニテ遠方ニアル時使用ス　25, 32〔應答(諸の場合), 呼掛〕〈N〉

ヤー　ヤーウレシー「ヤレ嬉シー」，ヤービックリシタ「オヤ驚イタ」　25

ヤー　洞穴　31〈S〉

ヤア　山にあなあるを云　11〔ひ，山穴〕

ヤア　きょかへすことばなり　11〔ひ，辞(ジスル)〕, 28〔やあ，や〕〔え？〕

ヤアタバ　藾草(あしたぐさ)　28

ヤァユフ　コヨイ　19〔やァゆふ〕

ヤアヨウ　夕方の事　16

ヤイ小　スマ　40〈M〉

ヤイユフ　こんやと云所に用ゆ　11〔ひ，夜以夕〕

ヤウジョー　ヤウジウヲの一種　40〈M〉

ヤウツリ　轉宅　31

ヤウラウチアレ　ですぎずに居ろと云ことなり　11〔ひ，容良在レ内〕

ヤカタ　納屋　31〔ヤカタ〕〔納屋，ほっ立ての肥料小屋など〕, 35〈K, S〉

ヤカタモチ　小屋　17〔ひ〕

ヤカン．薬罐　31〔ヤカン〕〈O, K〉，ヤカン〈M, N, U〉〔鉄瓶，土瓶なども総て含めて称す〕

ヤキ　釣竿　16, 30

ヤキー　夕方　30

ヤギ　釣竿　30〔ヤキ〕

ヤギダケ　釣竿　17〔ひ〕〔鰹魚ヲ釣ハねノ〕, 31〔ヤギダケ〕

ヤクナ　天名精　5

ヤクナミ　厄浪，主として夏の波　31

ヤクニンベァーシ　働き蟻　31

ヤクバン　たばこきりの台　19

ヤゴ　夫なき子持女の子をいふ　12〔屋子〕

ヤシ　鰐　31〈K, N〉, 40〔マイワシ，イワシの類〕〈O〉

ヤシイ　しわき事　18

ヤシノコ　鰐　31〈N〉

ヤシャゴ　玄孫　31

ヤショク　就寝前食事，常時はするものにあらず，又法事のとき招待されて行く時携へてゆく米をもいふ　31

(ヤショ⌒ケ)
ヤシロ　神社　31
ヤスビエーアセイ　夫，安兵衛と云ふ人を呼ぶ時　31
ヤスミヤッタカ　「オハヨー」寝ナサッタカノ意　25
ヤソ　いやだと云に用ゆ　切支丹に似たと云形容なり　11(ひ，耶蘇)
ヤタラ　たくさんと云事二人にあたへてもまだ有ると云氣味に用ゆ　11(ひ，遣足)
ヤツ　人を賤しる言葉なり　11(ひ，奴)
ヤツコ　子供，特に男子の称　31(ヤツコ(メ)),32(ヤ⌒ツコ)〈N〉
ヤッタ……ヤッテ　先達話シヤッタ品ワ探シヤッテモオヂャリンヂャランノーヂャ「先達ノオ話ノ品ハオ探シニナリマシテモ御座イマセンデシタデショー」25
ヤツタレ　沢山　6(ひ)
ヤッタン　沢山成事　4
ヤット　漸く　32(ヤ⌒ット)〈N〉
ヤットモ　沢山な事　18
ヤッパリ　やはり　32(ヤ⌒ッパリ)〈N〉
ヤーテ　イクラ人ガヨケゾーテヤーテ馬鹿ニショニモホドノアロモンダラ「イクラ人ガイイトイッタッテ馬鹿ニスルニモホドノアッタモノダ」(イイトイッタッテ，トイイッタッテ，トハ同様ノ語遣)、イクラヒマワアロゾーテヤーテソグゥーニャイクミャー「イクラヒマガアルトイッテモソーワイクマイ」25
ヤドカリ　ヤドカリ類総称　40
ヤトータブリ　夕立雨　32〈N〉
ヤドヤ　宿屋　31(ヤドヤ)
ヤドル　寝る事　12[寝ることをいふ]，16，17(ひ)[寝]
ヤネ　屋根　31〈M，K，N〉
ヤネブシン　屋根普請　31
ヤノー　おー氣味が悪いと云ふ場合　23
ヤハ　岩屋　4，5，18，37
ヤーハヤアツダニモ　ヤーハヤアツダニモシカタガニャー「イヤハヤドーモ仕方ガナイ」25
ヤヒヲヤク　灸をする　17(ひ)
ヤブ　籔　31
ヤブリメ　暴牛　31(ヤブリ⌒メ)〈M，S〉
ヤブローテ　山腹，村のある処を云ふ，村は山の中腹にあり　31〈S〉
ヤマ　畑　32〈N〉
ヤマウシ　野生牛(山地に放牧せしもの)　40〈全〉
ヤマカツテ　草ノ名　5
ヤマガモ　鴨類　40〈N〉
ヤマガラ　山雀　40(ヤマガラ(メ))〈O〉
ヤマギ　仕事着　31，32〈N〉，35〈O，K，N，S〉
ヤマクボナ　女郎蜘蛛　31
ヤマゴッコ　ハチジャウコッコ(鳥)　40〈N〉
ヤマシジューガラ　山雀　40〈N〉
ヤマシソ　草ノ名(山チシャトイウモノカ)　5(山シソ)〈M，N〉
ヤマシダタミ　蝸牛　31[かたつむり]，35，37〈O，S〉
ヤマジバン　仕事着　35〈K〉
ヤマシホ　汐の流れの一名　13
ヤマショ　山畑，時々物を作る畑　31(ヤマシ⌒ヨ)

ヤマスゲ　草ノ名　5
ヤマヌハコ　鶺鴒(草ノ名)　5
ヤマダシ　洪水　32[老]<N>
ヤマダマメ　そらまめ　31
ヤマチサ　草ノ名　5(山チサ)
ヤマテヨロヲチ　汐の流れの一名　13
ヤマドリ　ミゾゴキ　40<N>
ヤマネコ　山猫　40<全>
ヤマノテッペン　山頂　35<N, S>
ヤマノトンツペ　山頂　35<M>
ヤマハイ　大木アリ花ハ夏開実ハ秋ナル　5
ヤマハイノキ　夏日花ヲ開キ秋季実ヲ結ブ　往々大木アレ𪜈島民其用ヲ知ラズ　6(やまはいの木)
ヤマンバ　山の怪　31
ヤミ　病　31(ヤミ)
ヤミヤーヌブツタ　山へ登つた　24<O, K, N>, 27
ヤム「病気ニナル」　25(病ム)
ヤメーヌブッタ　山へ登った　24<M, S>
ヤメヤル　オ止ニナル　25
ヤメル　いたむ　17(ひ)
ヤモメ　寡婦　31
ヤーヤー　ヤーヤービックリシタ「オヤオヤ驚イタ」　25
ヤユフシマ　夕方　19(ひ)
ヤヨフシマ　夕暮　17(ひ)
ヤリケン　ヤリイカ　40<O, M, N, S>
ヤル　アニョ買イヤルカ「何ヲオ買イナサルノデスカ」, 今日ワドノキモノーキヤルカ「今日ワドノオメシヲオメシナサイマスカ」, ソグヮン幾枚モキヤルトアツケオヂャルノーヂャ「ソンナニ幾枚カオメシ遊バストオ暑ウ御座イマショー」　25
ヤレヤレ　ヤレヤレ残念ダノァー「ヤレヤレ残念ダ」　25
ヤロー　息子(多くジローメ, サボーメと云ふ)　31
ヤワ　洞穴　16, 30
ヤワヅニイリシ　クリガ未熟の麥にかかつた時, 多くは秕となるのでこのように云う, 弦をかけた矢の羽に似ているのでヤワツを訛つたのであろう　13
ヤン　わかりかねてききかへすに用ゆ　11(ひ, 止)
ヤンゴ　私生兒　6(ヤン子), 30(ヤン子)　31(ヤンゴ), 32(ヤン子), 35(ヤン子)　<O, M, K, S>, 37(ヤン子)
ヤンゴ　夫の名を顯しがたく生れたる子を云　父なしごと云也　11(ひ, 夜番子), 17[父なき子]
ヤンゴメ　私生兒　35, 37<M>
ヤンテ　病　13

ユ

ユアビ　湯浴　24<O, M, K, N, S>
ユイド　井戸, 湧水をも含む　31
ユウケ　夕食　19(ひ)
ユウゲ　ゆふめしの事なり　11(ひ夕飯)
ユウモノ　夕飯　18(夕物)
ユカン　湯灌　31
ユテ　湯手, 湯に入るときにのみに云ふ　31
ユド　井戸　24<O, M, K, N, S>, 30, 32<N>, 35<O, M, N, S>
ユナ　オソーユナ「ウソヲユーナ」　27

ユハイ　位牌　31〈O〉
ユヒヤー　位牌　24〈O, K, N〉
ユフケ　夕飯　17(ひ)
ユフケドキ　夕暮　17(ゆふけ時)
ユヘー　位牌　24〈M, S〉
ユマキ　女のゆもじの事なり　11(ひ(幽巻)), 16[女の二布の事], 31(ユマキ)[腰巻], 35[女褌]〈O, M, N, S〉
ユヤヌショ　菜園　31〈O, M〉
ユリ　地震　31(ユリ), 32〈N〉
ユーリェー　冥灵　31
ユリ　白百合　31
ユル　夜　24〈O, M, K, N, S〉, 30, 31
ユルオソクマデ　終夜, 夜遅くまで　31
ユルドノ　鼠　40〈M〉
ユルドリ　鼠(〈少〉老)　32〈N〉
ユルノシト　ねずみ　31(ユルノシト)〈N〉
ユワ　岩　24〈O, M, K, N, S〉
ユワイ　祝　24〈O, M, K, N, S〉
ユワシ　鰯　31〈O, M, U〉
ユヰド　莖莖, 花莖ならざるもの　31
ユンドー　印籠　31〈S〉
ユンドー　煙草入, 男子のもの　31〈O, M, N〉
ユンベ　ゆんべと云　11(夕部)

ヨ

ヨ　魚　16[魚類總名], 23, 30, 31
ヨ　雨ノ音ノ屋根ンシャー雨戸ンシャーニバラバラショニ雷ノゴロゴロ音マデマザッテホントーニオッカニャー「雨ノ音ノ屋根ヤ雨戸ニバラバラトスルノニ雷ノゴロゴロトイフ音マデマジッテマコトニモノスサマシイ」25
ヨ　コノ本ヨホシイ「コノ本ガホシイ」, 國旗ヨ門ニ立テテアロワ「國旗ヲ門ニタテテアル」, 新聞ヨヨッデアロワ「新聞ヲヨンデイマス」, 机ノウェニ本ヨオカラ「机ノ上ニ本ガオイテアル」, マニャ新聞ヨヨッデアロワ「今新聞ヲバ読ンデイマス」25
ヨ……シトァーモンダラ　ソノ時分ニャヨク会議ーテヨモノーシトァーモンダラ「ソノ頃ニハヨク会議トユーコトヲヤッタモノダ」25
ヨー　著ヨー「著ヨー」(意志)　25
ヨー　洞穴　31〈O, M〉
ヨー　呼掛　32〈N〉
ーヨ　ワレニャコッチノーヨタベ「私ニハコチラノヲバ下サイ」25
ヨァ　洞穴　32(ヨア)〈N〉
ヨァー　ヤート同様ノ意ニ使用ス　25
ヨァテシテアロワ　マニ(マン)起キーシヨァテシテアロワ「今起キカカッテイル」25
ヨァラカモノ　絹服　31
ヨイ　宵　31(ヨイ)〈O, K, N〉
ヨーイ　オモーワヨーイ「思イマスヨー」25
ヨウ　エ?　28(ヨウ!)
ヨウズ　片手桶(殊に船にて云)　31
ヨウチャガシ　午後三時頃　31〈M, K〉
ヨウナシ　いらざる事　16
ヨウナシコトナシ　取り用ゆるほどのことにもなきなり　13
ヨウラ　靜にと云事　16
ヨウラニヨウラニ　そろそろといふこと

6〈ひ〉, 9

ヨオビ　晝農を勵み夜よき帶をメる故なり，今は帶の通称に用ゆ　11〈ひ，夜帶〉

ヨカ　マニャ新聞ヨカヨッデアロワ「今新聞ヲバヨンデイマス」 25

ヨキ　斧 31

ヨギ　夜着 31〈ヨギ〉

ヨキリ　炭火 16[炭の火の事], 30, 31〈ヨキリ〉[岩火]〈O, M, K, S, U〉

ヨクバリ　吝嗇者 31

ヨーケ　夜食 31〈ヨーケ〉,32[夕飯]〈N〉, 44〈ひ〉[夕餉]

ヨケコ　美人 17〈ひ〉, [若き女], 31〈ヨケコ〉[美女], 32〈N〉

ヨケゾ　ものを辞退する言葉なり 11〈ひ，除外号〉

ヨケヘビラ　美服 17〈ひ〉

ヨケモヨリ　晴天 31〈ヨケモヨリ〉

ヨコ　垣 31

ヨコウ　メデマグロ 40

ヨコギリ　鋸 31

ヨコグモ　旗雲 31〈ヨコグモ〉

ヨコッペ　煉瓦 31〈ヨコッペ〉〈M, K〉

ヨゴドノ　鼠 30

ヨコナライ　東北風 31〈K〉

ヨコバラ　山腹 31〈S〉

ヨコブキ　眞東風 32〈N〉

ヨコブキナライ　東風 31〈N〉

ヨサ　手傳ひ人 18

ヨシイチャ　わるじゃれをのぞけといふ言葉なり 11〈ひ，餘强除〉

ヨシキリ　ヨシキリザメ 40〈全〉

ヨソース　勞働交換する 31

ヨソル　揺ル 24〈O, M, K, N, S〉

ヨーチイ　夜露 32〈N〉

ヨーチャガシ　午後三時頃間食 31〈ヨーチャガシ〉

ヨッケ　能きこと 4,5,6[善きこと], 37

ヨッダリ　涎 31

ヨッダリカケ　涎掛 31〈ヨッダリカケ〉

ヨツチイー　赤ひ事 16〈ヨツチイ引〉

ヨッバリ　尿 18, 32〈ヨッバリ〉〈N〉

ヨッパリ　尿 31

ヨッペ　昨夜 24[夕]〈O, M, K, N, S〉 31,[夜]〈N〉,[夕方]〈K, N〉, 32〈N〉, 37

ヨッペシマ　昨夜 31

ヨッペシャン　昨夜，昨日のヨッペとは云ふが昨日のエーヨーとは云はず 31

ヨドーシ　終夜，徹夜 31

ヨトギ　通夜 31〈ヨトギ〉

ヨナカ　夜中 31

ヨナギ　夕風 31〈ヨナギ〉

ヨーナギ　夕風 32〈N〉

ヨハケ　善キコト 20

ヨバリ　小便の事なり 11〈ひ，尿〉

ヨバワル　人をよぶ事なり 11〈ひ，敲レ呼〉

ヨヒ　帶の事 16

ヨビ　帶 31〈ヨビ〉

ヨフケ　宵 31〈ヨフケ〉

ヨフナシニヒトヲイロフ　用もないのに人をなぶる 17〈ひ〉

ヨマ　隙 16, 30

ヨミ　糸ハ筋ヲ數ヘ何十ヨミト云フ，一ヨミハ八尺ヅヽ，四十筋ナリ，又稱ニテモカク 6

ヨミヤレ　ココー読ミヤレ「ココヲオヨ

ミナサイ」 25
ヨメ ココーヨメ「ココヲオヨミ」,本ヨヨメ「本ヲヨメ」 25
ヨメゴドノ 鼠の事(正月祝ことば) 16
ヨメドノ 鼠 17(ひ), 31[ねずみ], 32〈N〉, 35(ヨメド(メ)), 37
ヨメドノ 主婦(老人にも用ふ) 17(ひ)[大家の女房], 31[妻妻]〈O, N, K〉
ヨメドリ 婚姻 31(ヨメドリ)
ヨメナ よめな 31〈O, M, K, S〉
ヨメナハギ よめな 32〈N〉
ヨメノシヨシ 嫁の印 28
ヨメノハギ よめな 31〈O, N, S, U〉
ヨメノハハ 螢袋 31(ヨメノハハ)
ヨメンナル 交合 31
ヨモギ よもぎ 31
ヨモギモチ 草餅 31(ヨモギモチ)
ヨモコドノ ねずみ 31〈N〉
ヨラム 撰む 24〈O, M, K, N, S〉
ヨリ ウレヨリコレガエー「アレヨリコノ方ガイイ」,三ツヨリニヤー「のみの意」 25
ヨリ……ホウ ウレヨリコノ方ガエー「アレヨリコノ方ガイイ」 25
ヨリイカ ひもじいか 19(ひ)
ヨリホカニヤ 私ノホシイモノハ絵ヨリ外ニヤニヤー,「私ノホシイモノハ絵本ヨリ外ニナイ」 25
ヨリメ 斜視 31(ヨリメ)
ヨリモ ソグヮンドァーコトショヨリモコグヮンショガ仕事ガダクダンノーヂャ「ソンナコトヲスルヨリモコーシタ方ガ仕事ガ業デショー」 25
ヨリヤ ウレヨリヤコレガエー「アレヨリコノ方ガイイ」 25
ヨリヤー 寄合 24〈O, M, K, N, S〉
ヨリヤーシゴト 寄合仕事 9〈O, M, K N, S〉
ヨリヤーシゴト 労働交換 31(ヨリヤーシゴト)
ヨリワ ウレヨリワコレガエー「アレヨリコノ方ガイイ」,ワレヨリワアナタガ年上デオヂャンノーヂャ「私ヨリカアナタノ方ガ年上デショー」 25
ヨリワ……ホウ ワレヨリワアナタノ方ガ年上デオヂャンノーヂャ「私ヨリカアナタノ方ガ年上デショー」 25
ヨルドリ 鼠 17(ひ)
ヨルノヒト 鼠 17(よるの人), 32(ヨ(ェ)ルノヒト)[(少)老]〈N〉, 47〈全〉
ヨレー 鍬 24〈O, M, K, N, S〉, 30
ヨロヒ 身をおほふものなり 11(鎧)
ヨロケ 用にたゝぬ事 16
ヨロゲ ベラ又はテンスダヒ類? 40〈O〉
ヨワ ソノ本ヨワドコデウッテアロ「ソノ本ワドコニウッテイル」,コノ本ヨワホシイノァー「コノ本ワホシイネ」
ヨワ 洞穴 31(jòa)〈K〉
ヨワイ 空腹の事なり 衰氣胃の腑に少き事を云 11(ひ, 弱胃(ヨワシイヤ))
ヨワクツテ 空腹 17(ひ)
ヨワクテ 空腹の事 16
ヨンバリ イハリの訛か 13

ラ

ラ 死ナラ「死ンダ」,買ワラ「買ッタ」

ヨカララ「善カッタ」,コノ本ラホシイ「コノ本ガホシイ」 25

ライキ 亂氣 13

ライゲツ 來月 31

ラコ(ママ) 三女 10

ララ 買ワララ「買ッタ」,昨日來タララ「昨日來タッケ」,ソグヮンダララ「ソーダッケ」,大変(ママ)オロシロカララ「大変オモシロカッタッケ」,死ナララ「死ンダ」,ホントーニウノ人モ來テアララノー「ソーソーアノ人モ來テ居タッケネー」,ホントーニソグヮンダララーノ「ソーソ,ソーダッケネ」ボーカララ「大キカッタ」 25

ララセノツキヒ いらいことの日かづといふ事なり 11(ひ, 斯世月日)

ラレル 飽キラレル「飽キラレル」,案ジラレル「案ジラレル」,射ラレル「射ラレル」,植エラレル「植エラレル」,起キラレル「起キラレル」,借リラレル「借リラレル」,感ジラレル「感ジラレル」,來ラレル「來ラレル」,損シラレル「損シラレル」,延ビラレル「延ビラレル」,封ジラレル「封ジラレル」,見ラレル「見ラレル」 25

ランプムシ ミドリカミキリの近似種? 40〈O〉

リ

リクレ 地震 31

リャ コリャエー「コレガイイ」 25

リャーテ 金ワイクラカカッテモヨカリャーテコグヮンドアーコトニツカッテヲオシケデャニャーカ「金ワイクラカカッテモイイニセヨコンナコトニツカッテワオシイデャナイカ」 25

リャーネン 來年 31〈N〉,32(リヤーネン)〈N〉

リロヲトコ 僧 5

ル

ル 読メル「読メル」 25

レ

レッシタ (過去) 25(列シタ)

レッシタラバ (假定) 25(列シタラバ)

レッシタロー (推量) 25(列シタロー)

レッソー (未來) 25(列ソー)

レル 居(ヲラ)レル「居(ヲラ)レル」,云ワレル「云ワレル」,介抱サレル「介抱サレル」,買ワレル「買ハレル」,着ラレル「着ラレル」,カナリ食ワレル「カナリ食ワレル」,爲(ヲ)レル「爲(ヲ)レル」,死ナレル「死ナレル」,評サレル「評サレル」,ブッチャラレル「捨テラレル」,列サレル「列サレル」 25

レンギネ 摺木 35〈N〉

ロ

ロ 雨ノ夜ショボショボフロワサメシケモノデオデャロワノー「雨ノ夜ショボショボフルノワサビシイモノデスネ」 25

ロー 覺ロー「覺ロー」(意志),起キロー「起キヨー」(意志),クロー「來ヨー(オ)來ヨー」(未來),廣カロー「廣カロー」(未來),雨ノショボショボフロー聞キナガラネロモ随分ヨケモノデオデャロワ「雨ノショボショボフルノヲ聞キナガラネルノモ随分イイモノ

デスヨ」，ブッチャロー「捨テヨー」(意志)，善カロー「善カロー」 25

ロウ　六男 10

ロエ　繭 30

ローガ　コレデヨカローガ「コレデヨカローガ」 25

ロクヤマチ　二十六夜 31(ロクヤマチ)

ロクラウ　六男 4, 5, 28

ロクロー　六男(老人に多い) 35〈M〉

ロクロウ　六男 16, 17, 20(六郎), 44(ひ)

ロクロウ　男の子の事をいふ，但し郎とはいはず坊といふ也 12(六郎)

ワ

ワ　上，上の方 31〈K〉

ワ　ソグァーニサミーコトワナッケガ「ソンナニサムイコトワアリマセン」，ソグァーニサミーコトワナッキャ「ソンナニ寒イコトワアリマセン」，コレワエー「コレガイイ」，此処ニ読賣新聞ワアロワ「此処ニ読賣新聞ガアル」，ワレニワソレータベ「私ニワソレヲ下サイ」 25

ワー　ワービックリシタ「オヤ驚イタ」 25

ワ　ワラーソレーワショクナケガ「私ワ夫ヲ存ジマセン」 25

ワイタカ　人の来りし時，同輩へ 4, 16 [来たかと云事]

ワウサマ　祖父 44

ワガ　自分 25

ワカイシュヤド　若衆宿 31(ワカイシュヤド)

ワガエノヒト　夫 32〈N〉

ワガズイ　弟を他人に対して云ことばなり 11(ひ，我随)

ワカゼ　南風 31〈M〉

ワガダンナ　息子，対称 31(ワガダンナ)

ワガヒメサマ　娘(古)，丁寧 31(ワガヒメサマ〈S〉)

ワカフク　北より西へ廻り，西へまわりきらぬ風 31

ワガヨメ　妻 31

ワカレ　分家 31

ワカレヂ　追分 31(ワカレヂ)〈O, K, N〉

ワカレド　追分 31〈O, N, S〉

ワギェーノシト　夫 31

ワキャーシ　青年 35〈K〉

ワキャシュ　青年 35〈O, N〉

ワキャーシュ　青年 31〈O, K, N〉, 32(ワキヤーシュ)〈N〉

ワキヤーシュイリ　若者人 32(ワキヤーシュイリ)〈N〉

ワクサ　腋臭 31(ワクサ)

ワケエーシュ　青年 35〈M〉

ワケーシ　青年 35〈O〉

ワケーシュ　青年 31〈M〉, 35〈S〉

ワコサマ　子供(ほめ言に) 15(我子さま)

ワシ(メ)　鷲 40〈全〉

ワセ　コケーワセ「ココエオ出デ」 16 [ござれと云事], 17(ひ) [来て(下)] 25

ワセイ　人の帰る時，同輩へ 4

ワゼタツ　きたかと云言葉なり平人に遣ふ 11(ひ，為レ走手)

ワセン　利倍すること 16

ワソドワカ　帰るか 27

ワタクシ　自分　25
ワタクシガハナシマウシイタス　私がお話し申します　27(私が話し申シイタス)
ワタクシモミヤーリータス　私も参ります　27(私もミヤーリータス)
ワテ　上　31〈N〉
ワテ　南風　31〈U〉
ワヤム　悩むが詞を云　11(ひ，感止)
ワラジ　草鞋　31(ワラジ)
ワラヒト　小兒の惣名なり　11(ひ，童人)
ワラビト　人の男子　4,6(ひ)[人ノ男兒ヲ呼ビテ]
ワリー　悪イ　25
ワリヤ　自分　25
ワレ　私　18,25[自分]
ワーワー　ソーワービックリシタ「オヤオヤ驚イタ」　25
ワン　椀　31

ヰ

ヰド　井戸　35〈K〉
ヰド　葭簀　6,19

ヱ

エーゾー　ベラの類　40
エーノオナゴ　妻　31
エーノヤツ　妻，自称　31
エヘシオヤ　名付け親(烏帽子親の訛か)　13
エラコシ　るちつと　17(ひ)
エラバシ　沢山　17(ひ)
エンハイ　かつを，もうあじ，さめなどいろいろの魚のかしら，はらわたをうしほにつけて貯置たるもの　8(ひ)
エンバイ　本朝のあんばいの事なり　11(ひ，塩梅)

ヲ

ヲー　買ヲー「買ヲー」意志，未来)　25
ヲウ　返事の「はい」(呼ベバあいト答フベキヲヲうトゑフ)　6(ひ)
ヲウクズ　七，八，九女　10
ヲウクズクズムシ　七，八，九女　10
ヲウヂドノ　祖父　44
ヲウノヒラ　魚名　5
ヲケ　桶　35〈O，S〉
ヲコル　さわぐ事　16
ヲシウバ　伯父伯母の事　16
ヲシヤッテ　人の来りし時，貴人へ　4
ヲシャレ　帰る時，貴人に　4
ヲジヤレ　お出でと云事　16
ヲショコ　小牛の事　16(ヲショ○コ)，17(ひ)[犢]
ヲシロイ　一名エウニシキ，草の名　5
ヲタキ　吐　17
ヲヂ　伯叔父　35〈O〉
ヲヂウバ　伯父，伯母(両者の区別なし)　6(ひ)
ヲツタラ　たまつている　17
ヲツビニタツテ　うつかりと立ている事　16
ヲテマ　家居の中に一坪或は二坪位の古間あり，臼を置く所なり　13
ヲトアネヘ　兄弟　19
ヲトフト　妹　17
ヲノコゴ　男の子　44
ヲバ　伯叔父　35〈O〉

ヲバフリ　鵜鳩　35, 37(O)
ヲハリ　車前草(草名)　5
ヲフ　ある　17(ひ)
ヲベンチヤ　心をつくす事　4, 5
ヲホチカチ　薑(すし)ナリ　5(ヲホチカ乳)
ヲミ　おまへと云りこと　9
ヲヤコ　親類　17(ひ)
ヲヤマ　大木ヲ不見，十一月白細花咲，正月赤実ヲムスフ，鳩人薪ニトルノミ　5
ヲリ　石垣　17(ひ)
ヲリハイ　草ノ名　5
ヲヲ　アイということ　9
ヲヲジ　祖父の事　16
ヲヲノウオ　しび(まぐろの大きなもの)に似ている　13(ヲヲノ魚)
ヲヲフク　福茶を祝ふ事(正月祝ことば)　16
ヲンナゴ　なんご，女　44
ヲンベチヤ　心をつくすこと　37

ン　アナタンサシアゲータソワ「アナタニサシアゲマス」　25
ンダカラ　今日ワ天氣ガワリーモンダカラ人出ガスケニヤー「今日ワ天氣ガワルイモノダカラ人出ガ少イ」　25
ンナカ　來ンナカ「來(コ)ナイ，來(キ)ナイ，來(コ)ン」　25
ンニヤ　買ワレンニヤ「買ワレナイ」25
ンニヤー　來(キ)ンニヤー「來(コ)ナイ，來(キ)ナイ來(コ)ン」，足リンニヤー「足リナイ，足ラナイ，足ラン，足リン」　25
ンマ　うま　31

その他

ー(長音)　遊ビーイク「遊ビニイク」，机ノウエーノセル「机ノ上ニノセル」，エー書ク「絵ヲ書ク」，家(エ)ーキャール「家ニカエル」，京都(テ)ーイク「京都エイク」，氷水ーホシーノー「氷水ガホシイナァ」，ヒガシームク「東ヘムク」，私ワ甘マケモノースキダラ「私ワ甘イモノガスキダ」　25
蚕屋　助蔵(ダイドコロ)　17
木疫　たばこ入　18
瘢積　親目不快な(？)るな形容詞　11

索　　引

専門用語のうち、重要と思われるもの、読者にとってやや目新しいと考えられるもの、およびここで新しく使用したものをあげて、諸君の便をはかった。

配列は五十音順。数字はページ数を示す。下線を施した数字は、そのページで定義ないないし詳細な説明がなされていることを示す。

ア

アクセントの型(＝型)　(178)
表わす(＝表現する)　(41), (42), (45), (51), (63), (65), (71), (83), (96), (100)

イ

言いきり　(207)
移住年数　(97)

エ

えせ共通語　(15), (42)
えせ標準語　(7)

オ

重み　(108), (112), (161)
音韻対応　(198)
音韻的事実　(22)
音韻的特徴　(181), (191), (192), (201)
音韻の特徴　(125), (199)
音韻の変化　(309)
音韻法則　(311), (312), (313)
音韻法則的事実　(22)
音声的変異　(32)

カ

カード(＝集計カード)　(39)
回帰しうる(régressive)　(194)
回収(率)　(27), (171)
外地人　(45), (48), (49), (51), (53), (65), (71), (84), (85), (87), (106), (170)
「改良」K-数値　(69), (70)
外来者　(4), (6), (19), (40), (44), (45), (48—71), (75—85), (114), (127), (128), (178—188)
型(アクセントの)　(177—179)
活用　(28), (29), (145), (201—210), (313—315)
——形　(201—209), (315)
——語　(29)
観察(する)　(4), (100), (144), (168), (206), (318)
——的方法　(29), (135), (177)

キ

基礎的な(basic)語い (174)
期待度数 (107)
記入方法 (219)
基本サンプル (24—26)
客観的(科学的)な言語的選い (17)
客観的(な)方法 (63), (173)
客観的分析 (126)
共通語 (2), (3), (4), (6), (15), (17), (19), (22), (29), (31—38), (40), (41), (42—44), (48—62), (68), (69), (75—82), (91), (92), (98—108), (113—115), (129—160), (172), (173), (184), (189), (194), (202), (203), (213—216), (309—317)
—— 音 (194)
共通語化 (36), (51), (71), (109), (114), (115), (174)
—— 函数 (109)
—— 現象 (113)
——の過程 (174)
——の支点 (174)
——の段階 (103)
共通語(の)形 (19), (22), (33), (35), (75), (144), (160), (161), (202)
共通語の語形 (129), (143), (145)
共通語(の)訳 (308—313)
共通文語 (218)
共通語を話す度合 (2), (3), (4), (10), (14), (19), (24), (31), (32), (35), (40), (41—46), (48—62), (63—75), (83), (84), (91—97), (98—113), (115), (118), (127), (128), (129), (164), (165), (167—174), (183), (188), (190)
曲用 (28), (170)
居住経歴 (6), (36), (41), (83), (85), (87), (88), (91), (101), (103), (105), (106), (173)

ク

クジビキ式に選ぶ (12)
グループ(=集團) (116), (159), (160), (162), (164), (170)

ケ

K-数値(cf. 共通語を話す度合) (42), (46), (49—55), (67—75), (82), (87—89), (92—97), (100—103), (123), (129), (165)
K-図表 (42), (46—48), (49), (51), (59), (71), (75), (87), (91)
経歴(=居住経歴) (38), (83—89), 97), (117)
検定 (39)
言語形成期 (16), (31), (33), (44), (48), (49), (83—89), (92), (103), (177), (180)
—— 居住者 (83—88), (112)
——後居住者 (83—88), (112)
—— 前後居住者 (83—87)
言語構造 (5), (99), (114), (117), (118), (172), (174)
言語構造的特徴(言語の構造的特徴) (4), (19), (40), (129), (164), (165)
言語社会 (116—118), (165-172), (211)
言語生活 (2), (84), (114)
言語調査(言語の調査) (14), (15), (168) (170)

言語的影響(言語の影響) (16), (31), (84)
言語的特徴 (170)
言語的比較 (116), (165)
言語ボス (174)

コ

構造(＝言語構造) (3)
交替(する) (187), (194—201)
行動記録 (10), (11)
項目(＝調査項目) (19), (29), (32), (35), (38—40), (42—44), (51), (52), (65), (91), (103), (169), (181)
呼應 (206)
コード(code) (30), (35—39)
——つけ(coding) (30), (35)
國語教育 (2), (12)
國語政策 (2)
語尾 (200), (211—217)
—— 変化 (28), (308)
戸別調査 (14), (28), (30), (139), (143), (169), (177)
戸別訪問 (4), (8), (10)
—— による調査 (5), (14), (135), (143), (168), (171)
communication (6), (15—17)
固有の言語(＝非共通語) (28), (29), (48), (173), (174), (202), (313)
コンテキスト (169), (170)

サ

作業記録 (10), (11)
サンプリング (12), (22), (26), (101), (167), (170), (171)
— 班 (171)
サンプル (4), (22—25), (33), (105), (106), (157—172)
——調査 (46), (101), (105)

シ

刺戟(しげき) (22), (29)
事項(＝調査事項) (4), (40), (41), (98)
実験的方法(質問的方法) (29), (135)
質問 (4), (172)
質問的方法(実験的方法) (29)
指標 (35), (41—45), (51), (54), (63), (65), (75), (91), (93), (113), (174)
島固有の言語(＝島固有語) (313), (316)
島固有語(＝島語, 島のことば, 島固有の言語) (317)
島のことば(＝非共通語, 島語, 島固有語, 島固有の言語) (15), (17), (29), (30), (37), (42), (43), (51—62), (117), (124)
社会環境 (4), (19), (40), (169), (173)
社会的調査 (1), (166)
集計カード (30—39), (172)
集團 (23), (40), (41—48), (49), (51—62), (63), (70—75), (87), (100—109) (114), (127)
集團化 (45)
主観的意識 (117), (124), (126), (164)
主観的(な)方法 (63), (65)
主観的判断 (99)
主観的(な)判定 (113), (174)
出発番号 (23)
純土地人 (49—51), (84), (128), (139), (181), (182)
準備調査 (6)
準備的調査 (5), (8), (28), (168—172)

消極的事実 (158)
消極的独立 (163)

ス

数量化 (63)
図表化 (46)
スペクトル図(表) (102—106), (108)

セ

生来居住者 (83—88), (92), (97), (104) (112)
積極的一致 (161)
積極的事実 (158)
積極的独立 (163)
接続する(ことば) (207—210)

ソ

層 (100), (170)
層化 (23)
層間分散 (109)
層内分散 (109)
相関 (59), (75), (91), (96), (183), (188)
—関係 (35), (71)
—係数 (67), (115)
—図表 (67), (87), (96)
—度 (185), (188), (190)
—表 (39)

タ

第1指標(=判定) (67), (75)
対照(する) (46), (59), (129—134), (176), (194—201), (202), (310), (315)
形 (192)
体系的事実 (157)
第2指標(=点数) (67), (75)
代表語 (207)
対立(する) (24), (135—163), (212)
単純な集計 (39)
単純に集計する (32)

チ

地点(=調査地点) (3), (166), (173)
抽出(する) (4), (23—26)
間隔 (26)
—技術 (171)
—理論 (23)
柱状図 (93)
調査技術 (115)
調査語 (32)
調査項目 (5), (28), (30—39), (42), (51—59), (65), (83), (103), (117), (124), (169—173), (187)
調査事項 (19), (27), (28), (99), (171)
調査(の)対象 (24—26), (63), (96)
調査地点 (3)

ツ

追加サンプル (25), (27), (171)
追跡 (14)

テ

点数(=非共通語の点数, 非共通語で反応した語の割合) (60), (64), (65—75), (87), (91—96), (99), (103), (106), (114), (115), (128), (184), (189), (190)
「点数」法 (75), (96)

ト

島外居住 (110)

—— 函数 (109)
—— 経過 (106), (107)
——年数 (90—97), (104), (106), (111) (115)
——の模様 (97)
東京語 (126), (196—200)
東京のことば (6)
統計解析 (115)
統計(的)分析 (23), (63)
島語(＝島のことば, 島固有の単語, 非共通語) (15), (17), (38), (42)
特徴的代表形 (33—35), (134), (172), (180)
土地人 (44—48), (49—62), (64—74), (76—82), (84—89), (91—96), (102—111), (114), (127), (171), (177—190)

ナ

内地人 (43—48), (49), (53), (65), (66) (71), (84—87), (106), (178)

ニ

日常会話語 (192)
日常の言語 (170)

ネ

年数(＝島外居住年数) (91), (97)

ハ

八丈島語(＝八丈島の言語) (202), (206) (218), (307), (317)
八丈島(の)語い(語彙) (218), (309), (319)
八丈島固有語(＝八丈島固有の言語) (309)
八丈島固有の言語 (3), (180), (202), (316)
八丈島固有の語い (312)
八丈島の言語(＝八丈島語) (4), (5), (166), (175), (201), (210), (219), (303—318), (319)
八丈島方言(＝八丈島固有語) (9), (22) (176), (177), (188), (218), (316), (318)
場面 (2), (19), (99), (113), (114), (173)
判定(する) (4), (19), (36—40), (41—48), (49—59), (67—75), (96), (97), (106—108), (115), (171), (183—190)
——の各級 (69)
——の変動 (63)
——法 (96)
反應(する) (4), (19), (32), (33), (35), (40), (41), (43), (58), (59), (63—75), (82), (83), (84), (99), (128), (174), (180—190)
——形 (19), (22)

ヒ

非共通語(＝島固有の言語, 島のことば, その他) (4), (15), (19), (29), (36—40), (41—48), (59), (63—75), (76—82), (87), (91—96), (114), (115), (128), (183—190)
——形 (19), (29), (30—35), (160), (161)
——の点数 (63), (65), (69—75), (87), (91—96), (103), (112—115), (128)
表記(する) (32), (195), (311), (312)
——(する)(＝表わす) (40), (41—48),

(51), (59), (63—71), (84), (87), (100—108), (172)
——方法 (41), (67), (75), (84), (102)
標準語 (2), (6), (7), (12), (15), (17), (42), (43), (51), (59), (98), (124—126), (165)
——教育 (12)
比例割当数 (25)

フ

複数語尾 (141)
部分集團 (100—109)
分解する (107)
分散(する) (69), (108)
分析方法 (41), (113)
文中での形 (203)
文法上の特徴 (135)
文法的語形 (194)
文法的事実 (201), (202)
文法体系 (313)
分類基準 (100), (101)
分類項目 (46)
分類標式 (35)
分類法 (107)

ヘ

変化 (29), (145), (311)

ホ

方言 (28), (29), (51), (116), (176), (316)
——化 (115)
——形 (169)
——研究 (4)
——研究家 (8)
——採集 (317)
——集 (315)
「——調査」 (10), (13), (27), (29), (38) (135), (144), (168—172), (182), (186), (211)
——の系統 (318)
母集團 (105), (106)
補正調査 (14)
本調査 (8), (15), (168)

マ

まじり (15), (36), (37), (59), (62)
mass media による接触 (6)

ム

無移住者 (97)

メ

面接(する) (10), (14), (99)
——調査 (14)
——者(interviwer) (174)

ユ

有意な差 (54)

ヨ

要因 (2), (3), (28), (31—40), (41), (48), (57), (62), (83—89), (96—107), (115), (167—174), (185—188)
——分析 (63), (65), (70), (71)

リ

流通性 (99)

ル

類似度 (164), (165), (166)

ワ

割当 (24—27), (171)
——の方法 (23)

昭和25年3月

国立国語研究所

東京都新宿区四谷雲上明治神宮外苑絵画館内
電話・赤坂(48)--0389, 2874

THE LINGUISTIC SURVEY AT THE ISLAND OF HATIZYÔ

CONTENTS

The Social Survey of the Language at the Island of Hatizyô

I. Purpose (We desired to know what are the cultural factors which determine the degree how far common language is spoken.)
II. Plan (We surveyed through interview the 216 testees sampled at random at the Island of Hatizyô)
III. Administration
IV. Results 1.—The Factors which Determine the Degree How Far People Speak in Common Language. (The factor of the utmost importance to determine the degree how far people speak in common language is the actual field in which they are compelled to speak it. In the analysis this was represented by the fact how many years they lived at other places than the Island of Hatizyô.
V. Results 2.—The Linguistic Differences of 5 villages at the Island of Hatizyô
VI. For Further Surveys

Appendix 1. Monographs on the Language and Culture of the Island of Hatizyô

I. On Some Phonological Phenomena of the Hatizyô Dialect
II. On Some Phonological Characteristics of the Language at the Islands Belonged to the Hatizyô
III. On Some Morphological Facts of the Hatizyô Dialect
IV. Materials on the Honorific Forms of the Hatizyô Dialect
V. "Itiwa Itigen" (the Literature on the Hatizyô Dialect in the Edo Era) and the Vocabulary of the Hatizyô Dialect
VI. The Culture and Literatures of the Hatizyô

Appendix 2. Materials

I. Statistical Materials
II. The Literatures on the Hatizyô
III. Vocabulary

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

1950